國學院大學学術情報リポジトリ

五井昌久の平和思想を支える理念：その形成と展開

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 尚文, Yoshida, Naofumi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002459

序章　問題の所在

1　研究目的と研究方法

本論文の目的は、白光真宏会[1]の教祖・五井昌久（1916-1980）が、みずからの宗教理念を打ち立てるにあたり、どのような存在から「影響」を受けたか、について分析をおこなうことにある。

本論文では、五井が受けた様々な「影響」のうち、とくに思想的影響を中心に分析する。とはいえ、親族や宗教教団（団体）の人たちと五井昌久との交流、五井が読んだ書籍からなど、「影響」をあたえた存在の対象範囲は広く、また「影響」をあたえた存在からのインパクトにおいても、おのおのごとに、強・弱があるわけである。

そこで、主な研究方法としては、五井昌久が出会った人物、とくに戦後に五井が入信した宗教教団（思想グループ）の中心人物の教説が記された書物（テキスト）と、五井の思想の比較分析をおこなう方法をとった。教団（グループ）および中心人物の具体名を挙げると、例えば、世界救世教[2]・岡田茂吉[3]、生長の家[4]・谷口雅春[5]、心霊科学研究会[6]あるいは日本心霊科学協会[7]・浅野和三郎[8]／脇長生[9]、千鳥会[10]・萩原真[11]／塩谷信男[12]、などがいる。

筆者は、彼ら教団（グループ）の中心人物の書籍・機関誌等での著述、教典のたぐい、講話テープ（あるいはCD）、映像資料（DVD）、教団（グループ）関係者からの聞き取り、を主な情報源とした。

そして、白光真宏会・五井昌久の思想（宗教理念）については、機関誌『白光』[13]創刊号（1955〈昭和 30〉年頃）から五井昌久没後 5 年程度（1985〈昭和 60〉年頃）までの記事、近年（2013〈平成 25〉年～ 2018〈平成 30〉年、ここ 5 年程度）の『白光』誌の記事、五井昌久の全著作、入手できる五井昌久の講話テープ（CD）のすべて・映像資料（ビデオ、DVD）、五井昌久の弟子にあたる人たちの記録（本や小冊子）、白光真宏会関係者（五井昌久と面識のある古くからの信奉者たち）からの聞き取り、などを参照した。

2　先行研究について

筆者の書いた学術論文をのぞいて、これまでに五井昌久あるいは白光真宏会を扱った主

な学術論文には、次のものが挙げられる。

・Kisara, Robert「新宗教の平和思想 - 一般信徒の意識と行動」（博士論文：東京大学）、1994 年

・熊田一雄「宗教心理複合運動における医療化の問題――白光真宏会の場合――」『愛知学院大学文学部紀要』第 29 号、愛知学院大学、1999 年

・熊田一雄「白光真宏会とジェンダー――規範からの自由について――」愛知学院大学人間文化研究所編『人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要』第 15 号、愛知学院大学、2000 年 9 月

・岡本圭史「出来事を生み出す教団機関誌：一九七〇年代の白光真宏会の事例から」日本宗教学会編『宗教研究』第 84 巻第 4 輯、日本宗教学会、2011 年 3 月

・岡本圭史「信仰を支えるもの：白光真宏会における信者達の実践と語り」日本宗教学会編『宗教研究』第 86 巻第 1 輯、日本宗教学会、2012 年 6 月

・Michael Pye, “National and International Identity in a Japanese Religion,” in Peter B. Clarke and Jeffrey Somers（eds.）, *Japanese New Religions in the West*, Folkestone, Kent: Japan Library, 1994

・Michael Pye, “Shinto, primal religion and international identity,” *Marburg Journal of Religion*, Volume 1, No. 1, April 1996

・Michael Pye, “Recent trends in the white light association(Byakkō Shinkōkai),”*Journal of the Irish Society for the Academic Study of Religion*, Volume 3, No. 1, 2016

個別に見ていくとき、邦文のなかでもっとも参照すべきは、キサラの論文だろう。キサラ［1994］は、いくつかの教団（日本山妙法寺・創価学会・立正佼成会・松緑神道大和山・修養団捧誠会・白光真宏会・真如苑）の平和思想と平和活動を考察する中で、それらのうちの一つの教団として白光真宏会を取り上げている。「第 8 章　白光真宏会：心霊世界と祈りによる平和運動」と題し、五井昌久と白光真宏会についての説明がある。しかし、その内容は、大半が五井昌久の自叙伝『天と地をつなぐ者』（改版増補本）(14) からの引用に依っている。五井の著書では上記書籍（『天と地をつなぐ者』）を除くと『霊性の開発』［1961］、『宗教と平和』［1968］、『人類の未来』［1974］がキサラの参考文献である。引用主体で、キサラの分析が少なく思われる。白光真宏会あるいは五井昌久について述べたキサラの論文・講演は、白光真宏会の平和思想や五井の半生を概観したけれども、五井と他の宗教教団との間の「影響関係」の分析に踏み込むにはいたらなかった。

熊田［1999］は、生長の家の教義の中の「心の法則論」[15] を五井が批判したことを評価する立場である。「現代宗教における医療化や「専門家の優越」批判の先駆けとしての側面がある」［熊田　1999：1 頁］という。谷口雅春の「心の法則論」は宗教家がやることではなく医学者のするべきことであり、「疑似精神医学」［熊田　1999：5 頁］の危険性を五井は指摘したとする。しかし、熊田自身の主張「精神医学の専門家が結果的に患者や信者に過剰な権力を行使する危険性がある」［熊田　1999：5 頁］のために五井の論が援用されているようにも見える。熊田［1999；2000］には、「ジェンダー論」が述べられ、当時高学歴で経済的に自立していた教祖夫人が教祖に影響力を与えたとする。たしかに、実際、五井の妻となった美登里 [16] の存在は五井にとって大切だったが、妻の美登里は教団の表に出ることはなく、「五井先生のやりたいように」と、生涯、内助の功に徹していた。だから、熊田の言うようなキャリアウーマン的側面からの「影響」に注目することには、筆者はあまり納得できない。熊田の場合、「手元に充分な資料がなく」［熊田　1999：4 頁］という中での推測があり、「リベラルな方向に〔五井昌久の〕考えを改めさせた可能性が高い」［熊田　1999：4 頁］との説は、的を得ていないだろう。熊田は、「経済力を獲得した女性が男性に働きかけて考えを改めさせた」［熊田　2000：8 頁］というが、筆者が機関誌『白光』を通覧する範囲で五井夫妻の実像に照らし合わせたなら、女性（美登里）の経済的自立を根拠に男性（五井昌久）の考えを改めさせた、とのジェンダー的な見方は、あやまりといえよう。

五井昌久が 55 歳、妻の美登里が 50 歳のとき、機関誌（白光誌）に五井が記した次の歌に、五井夫妻の関係性がうかがえるだろう。「細き眼のさらに細まり笑みこぼる歯ぬけの妻のお人好し顔」、「妻もはや五十路（いそじ）となりぬ開きこし道（みち）には立たず家守（やも）り楽しむ」［『白光』1971 年 12 月号、3 頁］。関係者の話（五井の側近）によれば、美登里は率直に自分の考えを述べたという。そして、五井昌久は、美登里の声を「世論」と受けとめていたようである。むろん、美登里は、（恋人時代から夫婦だった期間をふくめて、）五井昌久にとって最も近しい人のひとりだったから、五井の思想形成において彼女との会話が一定の「影響」をあたえていたことは、確かといえる。ただし、それは、熊田の言う「ジェンダー」のレベルとは異なる、と筆者はみている。

岡本［2011］は、教団の機関誌の重要性を指摘した。それには、筆者も同意する。ただし、岡本が閲覧した機関誌は 1970 年代の後期、1976（昭和 51）年から五井が没した 1980（昭和 55）年までである。この時期に「教祖による後継者の事実上の指名という過程も

進行していた」［岡本　2011：424 頁］と見ている。実際、のちに五井昌久の後継者となった西園寺昌美[17]が、当時、教団の中で重く位置づけられていたのは間違いない。しかし、さらに前の号の機関誌を閲覧するなら、五井の養女になったのが 1965（昭和 40）年であり、機関誌『白光』1966（昭和 41）年 2 月号には、特別インタビュー（22-26 頁）で「宇宙子波動生命物理学[18]〔「宇宙子科学」とも〕五井研究所々長　五井昌久先生」「同研究所主任研究員　尚昌美さん」と二人が取り上げられている。このように、昌美は、会の活動の重要な位置にもっと早い時期から立たされていたことが分かるのである。五井昌久が存命中に正式に後継者指名はしていないが、白光真宏会の活動の内実をみるとき、昌美は同会の上記「宇宙子科学」というプロジェクトの中心人物となっていた。昌美抜きでは実行できないプロジェクトとされていたので、事実上の後継者の内定は、岡本が指摘したよりももっと早かったと言うことができるだろう。

岡本［2012］では、五井逝去後、後継者となった昌美会長の時代における「新たな実践の提示や教えの更新」［岡本　2012：103 頁］をめぐる信者たちの反応について記述されている。1994（平成 6）年に「我即神也の印（いん）」、1996（平成 8）年に「人類即神也の印」が西園寺昌美によって新たに提唱された[19]。それ以外にも所作の異なる数種類の印が示され、時に困惑を示す信者がいるという。［岡本　2012］では、白光真宏会の集会での信者の声を通して、近年（2010 年前後）の会の活動と会員の様子を知ることができよう。

英文による白光真宏会にかんする主な論文では、［Pye, 1994（1986）; 1996; 2016］が挙げられる。パイ［1994〔初出は 1986〕］では、五井の提唱した「世界平和の祈り」が、彼の没後、世界各国の国名を挙げて祈るかたちの世界平和の祈りとして白光真宏会によって行われていることを紹介した。そして、同会が愛国的アイデンティティと同時に国際的アイデンティティをもって世界の平和を祈りつづけていることを、パイは肯定的に評価している。パイ［1996］でも（若干だが）、国際主義の時代にあって白光真宏会の関心事は、世界各国のための平和の祈りを通して平和をもとめることだ、と記している［パイ　1996：11 頁］。パイ［2016］では、五井昌久の後継者である西園寺昌美会長が提唱した「我即神也」「人類即神也」の文や「印」、マンダラといった同会の実践行について言及した。また、パイは記事の中で、近年における白光真宏会の動向として、2015（平成 27）年に発足した「富士宣言」などを紹介している。そして、結論的に、平和の観念をひろげている同会の活動に賛同しているのがうかがえる［パイ　2016：197 頁］。

他に、雑誌記事には、

・上之郷利昭「新興教団に参入した広告界のプリンスの活躍　五井昌久　瀬木庸介」『歴史読本』増刊、新人物往来社、1988 年 11 月 5 日

・黒羽文明「検証　異色集団を斬る③　宗教法人白光真宏会――祈りによる世界平和実現を希求する風変わりな教団」月刊『政界』政界出版社、1997 年 1 月

・田中健介「シリーズ「新宗教」の時代　〈第 14 回〉白光真宏会㊤」『週刊実話』日本ジャーナル出版、2005 年 4 月 21 日 a

・田中健介「シリーズ「新宗教」の時代　〈第 15 回〉白光真宏会㊥」『週刊実話』日本ジャーナル出版、2005 年 4 月 28 日 b

・田中健介「シリーズ「新宗教」の時代　〈第 16 回〉白光真宏会㊦」『週刊実話』日本ジャーナル出版、2005 年 5 月 5 日 c

などがある。

上記はジャーナリストによる署名記事である。上之郷［1988］は、第二代理事長・瀬木庸介 (20) を取り上げ、元広告マン・瀬木の才覚が教団の布教を進展させた、とする。広告マンの側面を強調した記事である。黒羽［1997］は、白光真宏会の活動（昌美会長以降）・教義・五井の半生など、概要をまとめたものである。田中［2005a,b,c］も、黒羽同様だが、五井の半生の中で出会った世界救世教・岡田、生長の家・谷口、千鳥会・萩原らとの交流について、自叙伝［五井　1955］をベースにまとめている。他、田中［2005a,b,c］では、白光真宏会の簡単な歴史、昌美・西園寺裕夫 (21) ・瀬木のプロフィール、分派団体などにつき、3 回にわたり連載した。

また、五井昌久および白光真宏会について言及した主な著書に、

・津城寛文『鎮魂行法論――近代神道世界の霊魂論と身体論』春秋社、1990 年

・沼田健哉『宗教と科学のネオパラダイム―新新宗教を中心として―』創元社、1995 年

がある。

上記の津城［1990］では、「大本系の鎮魂行法家」の一人として、五井昌久の名も挙げている。五井昌久について述べた節では、五井昌久の半生のダイジェストや白光真宏会の活動をわかりやすく紹介している。津城の場合は、五井の自伝本［五井　1955］を基礎情報としながら、さらに五井の講話・講演カセットテープや古い信者からの聞き取りなども資料にしており、前掲の他の論文群に比べて、情報・内容の信憑性が比較的高いと筆者にはおもわれる。しかしながら、五井昌久と関係のあった他教団の教祖からの思想的影響関

係について、詳しく考察されることはなかった。どちらかというと、五井の思想よりは五井の「行法〔白光真宏会では、「統一」という〕」に焦点をあて、その「統一」の内容を詳しく解説した。

また、沼田［1995］では、「白光真宏会の研究」と題した一つの章を設けて、同会を紹介している。内容は、五井の自伝［五井　1955］からの要約を中心に、五井昌久や西園寺昌美のこと、白光真宏会の主な活動を記している。そして、白光真宏会の「教義」や「統一」という行法について紹介した。また、五井の基本書『神と人間』［五井　1953］などをもとに、五井が説いている「守護神、守護霊」や柏手をつかった「お浄め」の説明を、沼田［1995］のなかで記した。その他、「宇宙子科学」という同会の活動に関する主な展開を記述している。そして、むすびの節で沼田は、白光真宏会においては組織の拘束がきわめて弱いとの特色や、昌美の宗教指導者としての資質に十分でないところがある、と述べている［沼田　1995：110 頁、参照］。ただし、学者である沼田が、宗教指導者の資質の上下を批評するのは行き過ぎ（不適当）と思えるし、「昌美は供丸姫〔大山 祇 命 神示教会（おおやまねずのみことしんじきょうかい）の女性指導者。ともまるひめ 1946-2002〕ほどのやさしさと包容力を有していず、五井のもっていたほどの庶民性も有していない。」［沼田　1995：110 頁］と言い切ってしまえるだろうか、と筆者には疑問である。

沼田［1995］は、基本書［五井　1953；五井　1955］にそった説明と「宇宙子科学」の活動などについて述べており、五井の弟子・村田正雄の資料のほかには、新しい情報が少なかった。とりわけ、沼田［1995］の文中に「世界救世教や生長の家の影響」［沼田　1995：109 頁］との文字はあるが、それが具体的にどのような影響であるかについては、まったく考察や分析が書かれていない。

以上のように、「五井昌久」「白光真宏会」に関する先行研究は少なく、数少ない論文等においても、総じて説明や分析が不足している。

先行研究では、同会機関誌の初期の号はまったく読まれていない。閲覧しても昭和 40 年代以降の機関誌に限られている［岡本］。五井の思想や生涯は、自叙伝［五井　1955］ほか、少数の書籍参照にとどまっている［キサラ］。全体に、少ない史料（資料）をもとに、憶測をまじえた考察が目立ち、正確性に欠けている［熊田、他］。

ゆえに、本論文では、最初期からの機関誌『白光』他、数多くの史料（資料）に基づい

て、より正確で厳密な記述を心がけたい。とくに、〝五井の思想形成に影響をあたえたもの〟に焦点をしぼり、これまでになかった影響関係についての分析を提示していく。そこに、本論文のオリジナリティ、意義、重要性を見いだすことができるとおもっている。

3　本論文の内容構成

では、本論文の構成について、前もって述べておこう。

まず、第 1 章は、白光真宏会の教祖である五井昌久の生涯と活動について、そのライフストーリーを時間順に、詳細にとりあげる。これまでの白光真宏会にかんする研究では、五井の半生を記した自叙伝［五井　1955］に情報が限られる傾向にあった。しかし、本章では、五井の弟子にあたる人たち[22]の著述（文章）や彼らからの聞き取りなどもふまえて、五井の出生から逝去にいたるまでの全生涯をカバーしている。五井の人間像もわかるよう、さまざまなエピソードもまじえた。

とくに、五井の人生のステージを、転機ごとに筆者が区切り、①「戦前期」（～ 1945〈昭和 20〉年頃）」、②「遍歴期」（1945〈昭和 20〉年頃～ 1949〈昭和 24〉年頃）、③「草創期」（1951〈昭和 26〉年頃～）、④「成立期」（1955〈昭和 30〉年頃～）、⑤「展開期」（1962〈昭和 37〉年頃～）、⑥「闘病期」（1973〈昭和 48〉年頃～ 1980〈昭和 55〉年）、として、五井昌久に関係する種々の出来事を記している。

第 2 章では、五井を教祖として設立した白光真宏会が、新宗教研究における「教団系統」の分類のなかで、どこに位置づけられているかをみる。そして、その「分類」〔＝「大本系」〕の教団群のなかでの思想的類似性、思想的影響関係を検討する。とくに、白光真宏会・五井昌久の宗教理念の形成に影響を与えたとみられる他の教団（グループ）を時間軸にそって個別にとりあげ、それらの中心的人物（教祖ら）の教えから、どのような影響関係があったか、考察したい。

また同章では、五井の宗教理念における一大特徴である「霊界」思想について、他教団（グループ、等）の教理との比較のなかで、それらからの影響関係を検討する。具体的には、「霊界」の構造論および「守護霊、守護神」についての教理を、他教団などと個別に比較し、考察する。ここでは、とくに、近代スピリチュアリズムという思想からの影響関係について論じたい。

第 3 章では、白光真宏会・五井昌久にとっての重要な教え＝「〔苦しみは、業の〕〝消えてゆく姿〟」という教理を、マックス・ウェーバーによる「苦難の神義論」の類型や五

井が関係した新宗教教団における苦難の解釈と比較し、考察する。比較思想によって、影響関係についても一部考慮したい。

第 4 章は、五井が生きた時代や「社会」が、彼の平和思想や平和運動において、どのような影響を与えたのか、あるいは影響はなかったのか、について検討する。とくに戦後、機関誌の創刊時（1955〈昭和 30〉年頃）から五井が亡くなる年あたり（1980〈昭和 55〉年）までの社会事象との関連を、機関誌『白光』に毎月掲載されていた五井の「法話」などをもとに、ていねいに分析したい。

第 5 章は、五井が推進した「祈りによる世界平和運動」において、五井がもっとも強調した「世界平和の祈り」をとなえること（の重要性）、と「世界平和」（という未来）が、教理上、どのような〝ロジック〟で架橋されているのかを分析する。本章では、近代スピリチュアリズムの理念〔＝波動説〕と、「大本（系）」で説かれる理念〔＝「移写」〕をもとに、それらの理念および思想から五井が受けた影響関係をふくめて論じる。

終章では、それまでの各章で論じた内容の要約をおこない、各章で何を明らかにしたかを述べる。そのうえで、最後に、本論文全体をとおしての結論を述べる。終章において、筆者が本論文を執筆したことで、これまでの研究にはなかった何を新たに明らかにできたのかを示したい。

註

（1）現在の白光真宏会の前身は、「五井先生讃仰会」。1951（昭和 26）年に「五井先生讃仰会」として結成され、1955（昭和 30）年に宗教法人化。1956（昭和 31）年に「宗教法人白光真宏会」と名称変更した。本部は千葉県市川市にあったが、1998（平成 10）年に静岡県富士宮市へ移った。同会関係者〔筆者が電子メールにて白光真宏会本部に照会、同会職員からの回答〕等によると、国内の会員数は、2 万人程度。海外の正確な会員数は不明。白光真宏会が推進してきた「祈りによる世界平和運動」の共鳴者を入れると、白光真宏会会員に限らないため、もっと人数は多くなるだろう。

〈白光真宏会の基本情報〉

【所在地】〒 418−0102　静岡県富士宮市人穴 812-1

【ホームページ】http://byakko.or.jp/（2018 年 9 月 8 日最終閲覧）

【創始者】五井昌久（1980 年死去）

【後継者】西園寺昌美（1980 年・第二代会長＝現）〔2018 年 5 月現在〕

【信者数】国内外に、数万人［筆者による関係者からの聞き取り］

［『白光』2018 年 9 月 10 日号、井上ほか編『新宗教教団・人物事典』、258-259 頁、等、参照］

(2) 世界救世教／世界救世教いづのめ教団は、昭和 10（1935）年、大日本観音会の名称で立教。昭和 11（1936）年、大日本健康協会。昭和 22（1947）年、宗教法人日本観音教団。昭和 23（1948）年、宗教法人日本五六七教会。昭和 25（1950）年、日本観音教団と日本五六七教会を発展的に解消して宗教法人世界救世教。昭和 32（1957）年、世界救世教。たびたび教団名称を変更。

〈世界救世教／世界救世教いづのめ教団の基本情報〉

【所在地】〒 413−8585　静岡県熱海市桃山町 26-1

【ホームページ】http://www.izunome.jp/（2018 年 9 月 8 日最終閲覧）

【創始者】岡田茂吉（1955 年死去）

【後継者】岡田よし（1955 年・二代教主～ 1962 年）、岡田斎（1962 年・三代教主～ 1992 年）、岡田陽一（1992 年・四代教主＝現）〔2018 年 5 月現在、岡田陽一が現教主〕

【信者数】609,722 人［文化庁編『宗教年鑑　平成 28 年版』、86-87 頁］

［井上ほか編『新宗教教団・人物事典』、157-159 頁、文化庁編『宗教年鑑　平成 28 年版』、等、参照］

(3) 岡田茂吉（1882-1955）は、世界救世教の教祖。東京・浅草生まれ。明治 30（1897）年、東京美術学校予備ノ課程に入学するも眼病におかされて退学。大正 9（1920）年、「大本」に入信。「大本」教典を読み、「心霊」研究に没頭する。昭和 6（1931）年、「霊界の夜昼転換」の啓示を受けたという。昭和 9（1934）年、「大本」を脱退［井上ほか編『新宗教教団・人物事典』、381-383 頁、参照］。「浄霊」という掌かざし、自然農法、芸術活動を推進した。

(4) 生長の家は、昭和 5（1930）年 3 月 1 日、立教。初代総裁時代は、「天皇信仰」のもと、紀元節復活運動や明治憲法復元運動などを展開、政治活動をおこなった。しかし、現在は政治活動を停止し、環境保全活動に力を入れている。生長の家では、立教から現在にいたるまで、「人類光明化運動」をおこなっているという。

〈生長の家の基本情報〉

【所在地】

総本山：〒 851-339　長崎県西海市西彼町喰場郷 1567

国際本部生長の家“森の中のオフィス”：〒 409-1501　山梨県北杜市大泉町西井出 8240 番地 2103

【ホームページ】http://www.jp.seicho-no-ie.org/（2018 年 9 月 8 日最終閲覧）

【創始者】谷口雅春（初代総裁～ 1985 年死去）

【後継者】谷口清超（せいちょう）（1985 年・二代総裁）、谷口雅宣（2009 年・三代総裁＝現）〔2018 年 5 月現在、谷口雅宣が現総裁〕

【信者数】496,121 人［文化庁編『宗教年鑑　平成 28 年版』、86-87 頁］、1,511,859 人（日本国内：521,100 人／日本以外：990,759 人）〔生長の家サイトに掲示されている平成 26 年（2014 年）12 月 31 日現在の数字〕［http://www.jp.seicho-no-ie.org/about/index.html　2018 年 9 月 8 日最終閲覧］

［井上ほか編『新宗教教団・人物事典』、152-154 頁、文化庁編『宗教年鑑　平成 28 年版』、等、参照］

(5) 谷口雅春（1893-1985）は、宗教法人生長の家の創始者（初代総裁）。兵庫県生まれ。早稲田大学英文科中退。元「大本」信者。「大本」を離れた後、浅野和三郎の心霊科学研究会を手伝った。バキュームオイル会社の翻訳係を経て、昭和 4（1929）年「今起（た）て」との声に執筆を開始。翌昭和 5（1930）年に『生長の家』誌を創刊した。『聖経　甘露の法雨』『生命の実相』などの刊行物を出している［井上ほか編『新宗教教団・人物事典』、494-496 頁、参照］。

(6) 心霊科学研究会は、1923（大正 12）年に浅野和三郎（1874-1937）によって発会した。同会の機関誌は『心霊研究』→『心霊界』→『心霊と人生』と名称を変遷。谷口雅春は浅野生存時、大正末から昭和初期にかけて上記誌上に幾度も寄稿。なお、浅野没後の後継団体に、1946（昭和 21）年設立の日本心霊科学協会と戦後 1949（昭和 24）年に再始動した心霊科学研究会がある。心霊科学研究会の機関誌・月刊『心霊と人生』は、現在は刊行されていない。

(7) 日本心霊科学協会は、昭和 21（1946）年 12 月に発足し、翌 22（1947）年 2 月に機関誌『心霊研究』を刊行。以後、毎月、現在〔2018 年 8 月現在〕まで同誌は発行され続けている。日本心霊科学協会設立の初期（たとえば、昭和 22〈1947〉年 8 月）には、「霊媒（萩原真や津田江山）」による「物理的心霊実験」が行われていた。なお、「物理的心霊現象」とは、「叩音」、「物品浮揚」、「物質化現象」、「直接談話」などを指すという［日本心霊科

学協会『創立五十周年記念特集』、8-22 頁、参照］。

（8）浅野和三郎（1874-1937）。茨城県生まれ。1899（明治 32）年、東京帝国大学英文学科卒。浅野は、海軍機関学校の英語教官、大本の幹部を経て、1923（大正 12）年に「心霊科学研究会」を発会（創設）。心霊科学研究会では、機関誌『心霊研究』（のちに機関誌の名を『心霊界』、『心霊と人生』と改称）を刊行した。

（9）脇長生（1890-1978）。兵庫県生まれ。本名：脇長男。浅野和三郎に師事し、心霊科学研究会にて「心霊研究」を深めたとされる。1937（昭和 12）年に浅野が逝去した後は、脇が心霊科学研究会の機関誌『心霊と人生』を編集した。戦後は、1946（昭和 21）年に日本心霊科学協会の理事となり、機関誌（『心霊研究』）の編集に携わった。1949（昭和 24）年、浅野正恭（まさやす）（1868-1954　浅野和三郎の兄。海軍軍人だった）とともに心霊科学研究会を再興し、休刊状態だった機関誌『心霊と人生』を復刊した。

（10）千鳥会は、心霊研究グループ有志（萩原真〈1910-1981〉や塩谷信男〈1902-2008〉たち）によって昭和 23（1948）年 6 月に結成された。そして、同 24（1949）年 8 月に千鳥会は宗教法人となった。同 27（1952）年 2 月、千鳥会から真の道と名称を変更した。

〈真の道（前身は千鳥会）の基本情報〉

【所在地】荒魂（あらたま）の宮（みや）／表宮（おもてみや）：〒 157-0063　東京都世田谷区粕谷 4-16-3

【ホームページ】http://www.makoto.or.jp/（2018 年 9 月 8 日最終閲覧）

【創始者】萩原真（初代教え主／道主～ 1981 年 11 月死去）

【後継者】萩原真明（しんめい）（1982 年 2 月・二代教え主＝現）〔2018 年 5 月現在、萩原真明が現教え主〕

【信者数】8,795 人［文化庁編『宗教年鑑　平成 28 年版』、86-87 頁］

［井上ほか編『新宗教教団・人物事典』、285-286 頁、文化庁編『宗教年鑑　平成 28 年版』、真の道出版部編『真を求めて　萩原真自伝』、巻末「略年譜」、等、参照］

（11）萩原真（1910-1981）は、宗教法人真の道の初代教え主。真の道の前身は、千鳥会。萩原の別名・義暢。戸籍どおりの名は「斎藤義暢（よしまさ）」であった。千葉県生まれ。岩倉鉄道学校卒業後、中国に渡り、昭和 4（1929）年帰国。翌 5（1930）年、「霊能」が出現したという。以後、数度大陸〔中国〕に行き、昭和 21（1946）年、日本に戻る（復員）。同 22（1947）年、東京で心霊研究グループに入り〔例えば、日本心霊科学協会にて〕、「霊能者〔「物理霊媒」〕」として「心霊実験」を重ねた。同 23（1948）年、医学博士・塩谷信男らと千鳥会を結成。自らを「霊媒」とし、「交霊会」を盛んに開催した［井上ほか編『新

宗教教団・人物事典』、546-547 頁、真の道出版部編『真を求めて　萩原真自伝』、116-117 頁・巻末「略年譜」、等、参照］。なお、萩原真は日本心霊科学協会の発起人の中に「萩原義暢」として名を連ねている［日本心霊科学協会『創立五十周年記念特集』、414 頁、参照］。

（12）塩谷信男（1902-2008）。山形県生まれ。東京大学医学部卒。医学博士。昭和 3（1928）年から同 5（1930）年まで、京城帝大医学部助教授。昭和 6（1931）年 5 月、東京・渋谷に内科医院を開設。昭和 61（1986）年 3 月、塩谷 84 歳の時、同医院を閉院。塩谷は医院を開業した昭和 6（1931）年から、手掌よりの「放射線」を研究し、治療に応用した、という。また、同 6（1931）年より、「霊魂及び霊界の研究」を行った。そして、昭和 22（1947）年から「物理心霊現象」の研究をはじめ、昭和 30（1955）年に同研究を終止した、という［塩谷『地球の破滅を救う』、奥付頁、参照］。塩谷の「掌による治療」について、彼の著書『宇宙無限力の活用』には、「……〔塩谷は、〕内科医院を開設した。表の看板に専門科名の表示に続けて、生命線研究所というエラそうな名を記入した。手掌（しゅしょう）から放射される力を生命線と名づけていたのである。西洋医学に基づく治療のほかに、この生命線を患者に、あるいは患部に当てる治療法を行っていた。」［塩谷『宇宙無限力の活用』、154 頁］とある。塩谷は、昭和 23（1948）年に萩原真とともに千鳥会を立ち上げる前から、「掌による治療」を行っていたことが分かる。塩谷が昭和 6（1931）年に医院を開業して数ヵ月後、熊本・長洲の松下松蔵（まつぞう）〔1873-1947。治病力の持ち主とされた。「祖神道（そしんどう）」の教祖〕を訪ねた折、松下が塩谷の右手を持ち上げて「アンタハンこの手にカミノケ〔「神の気」〕がついていなはるばな、この手当てると病気治るばな」［塩谷『宇宙無限力の活用』、156-157 頁］と言ったという。また、塩谷は、翌昭和 7（1932）年夏、松下から「ワシはなあ、病気治しばやめるけん。この力はみんなアンタにあげる。この力使ってアンタ病気治しやっておくんなはれ」と言われ病気治しの力をもらった、とのことである［塩谷『宇宙無限力の活用』、164 頁、参照］。のち、塩谷らは戦後の昭和 23（1948）年に千鳥会を結成すると、同会において「真手（まなて）」という「掌当て」が行われるようになった。千鳥会におけるこの「真手」の講習会で、塩谷は講師をつとめていた［『千鳥』1949 年 6 月号、表 2 頁、参照］。

（13）『白光』は、宗教法人白光真宏会の機関誌（月刊）。創刊号は、昭和 29（1954）年 10 月 15 日発行。創刊号は、がり版刷と思われ、文字は手書きである。内容は、詩・短歌・俳句・随想で、「文芸誌」の体裁だった。白光真宏会では、『白光』の昭和 30（1955）年 1 月

号が「実質上の創刊号」とも言う。それは、五井が昭和 30（1955）年 1 月号の巻頭言で、「白光もこれが三号目である。然し実質的には宗教的雑誌としての創巻（ママ）〔刊〕号でもある。」［『白光』1955 年 1 月号、1 頁］と書いているからである。そして、昭和 30（1955）年 1 月号から活版印刷となり、この号から五井の自叙伝の連載が始まった。『白光』誌の最初期の発行所は「白光会」と記されてある。以降、『白光』誌は、判型の変更はあったが現在〔2018〈平成 30〉年 9 月現在〕まで毎月継続して発行されている。

(14) 筆者は、本論文執筆において、五井昌久『天と地をつなぐ者』宗教法人五井先生讃仰会、1955 年（初版本、非売品）を主に参照した。現在、書店などで入手しやすいもの（『天と地をつなぐ者』）は、改版増補した本である。『天と地をつなぐ者』では、五井の出生から昭和 24（1949）年に「神我一体」という神秘体験を得るあたりまでが記述されている。五井の自叙伝『天と地をつなぐ者』の元は、昭和 30（1955）年の『白光』誌 1 月号から 6 回にわたって連載された五井の文章である。それが『天と地をつなぐ者』の名で書籍化された。

(15) 熊田は、生長の家の「心の法則論」を、「特定の病気の原因を特定の心ぐせに求めた」もので、例えば「痔で苦しむのはこの家に尻を落ち着けたくないから」というように「この病気は何の心の影として病気の原因が説明され、病気を治すためには心なおし（性格の改善）が要求される」［熊田　1999：4 頁］と説明した。

(16) 五井美登里（みどり）（1921-2011）［『神人』第 34 号、2006 年 6 月 1 日、32 頁、参照］。五井の妻。「広島の或るミッションスクールの英文科を出ていて」［五井『天と地をつなぐ者』、65 頁］とある。「広島原爆の中心地に住んでいた」［『白光』1979 年 10 月号、7 頁］という美登里は、戦後まもない頃（昭和 21 年頃）、「労働問題を研究している〔五井と〕同じ勤務先に数日違いで入社」［『白光』1979 年 10 月号、7 頁］した。同勤務先〔中央労働学園〕で、「其の時は〔美登里は〕渉外部の仕事をしていた。翻訳と通訳とが彼女〔美登里〕の仕事であった。」［五井『天と地をつなぐ者』、65 頁］という。ミッションスクールを卒業していたが「自分はクリスチャンではないと言っていた。」［五井『天と地をつなぐ者』、65-66 頁］とのことである。昭和 24（1949）年頃、フランス語を習っていた。また、同 24（1949）年頃は中央労働学園から東京・三の橋にある C 大学に転職していた［五井『天と地をつなぐ者』、125 頁・128 頁、参照］という。関係者の話によると、「〔時期は定かでないが〕英語の教師をしていた、フランス語も話せた」［関係者からの聞き取り］そうである。「高等学校に英語の教鞭を択って居られた」［五井『神と人間』、148 頁］と横関実〔白光真宏

会の初代理事長となった人〕は記している。五井昌久の側近・髙橋英雄（1932-）の個人誌には、「〔美登里は大学の英文科を〕卒業後、一時、旧女学校（広島女子商業〔学校〕）の英語の教師をつとめられたときいている。」［『神人』第 34 号、2006 年 6 月 1 日、6 頁］とある。美登里は、広島への原爆で多くの生徒をなくしたという。当時の広島女子商業学校は 8 月 6 日の原爆により校舎が壊滅、同学校校長以下、多くの職員・生徒が亡くなった［https://www.h-shoyo.ed.jp/overview/details.php#history　2019 年 7 月 14 日最終閲覧、等、参照］。のちに美登里は、「先生〔五井のこと〕のやりたいように」と、結婚しても五井を家庭に縛ることはしなかったという［高橋『師に倣う』、173 頁、参照］。また、近年、「90 歳代で亡くなった」［筆者の関係者への聞き取り］との話を聞いた。そして、『廣島女學院報』第 164 号、2011（平成 23）年 10 月 1 日発行、「召天」の人名一覧に「五井美登里（岡村）　専英 18）　（2010 年 9 月から 2011 年 8 月までに届出のあった方、敬称略）　慎んで哀悼の意を表します。」との記載が見られる。［http://www.hju.ac.jp/~gakuhou/164/PDF/no164-p10.pdf　2015 年 1 月 17 日最終閲覧、参照］。養女・昌美（同会の現会長）は『白光』誌上にて「母は平成二十三年四月三日、九十歳の天命を完うし」［『白光』2011 年 5 月号、31 頁］と記している。また、「贅沢（ぜいたく）や美食や華美（かび）を好まず　質実剛健（しつじつごうけん）　自然体の生き方をこよなく愛されました」「大の文学好き」「母は英語の先生をされておられたので　語学が堪能でいらしたから　特に英文学　仏文学を原語で読むのがお好きでありました」［『白光』2011 年 5 月号、32 頁］と回顧している。美登里の亡くなる数日前に昌美が会った時は元気で、2 時間ほど二人でゆっくり話をした。そして美登里はいつものように「五井先生は私のことを忘れてしまったのかしらね　早く迎えにきてくださいといつもお願いしていたのに」と茶目っ気たっぷりに語っていたそうである［『白光』2011 年 5 月号、33 頁、参照］。髙橋の近刊書（2016 年）によれば、「衣食住」については実に質素だった美登里は読書を好み、英米文学・日本文学（特に、万葉集、古今集、新古今集）が好きだったそうである。夫の五井昌久は、妻・美登里のことを、父母に次いで〝第二の恩人〟と語っていた［髙橋『五井せんせい』、65-67 頁、参照］。また、「五井先生はどんなお人？」という問（い）にたいして美登里は、「一、明るいこと　二、優しいこと　三、気さくであること　四、楽天家であること　五、お人好しであること　六、五井先生は書く天才　七、五井先生は話す天才」と端的に答えた［『五井先生研究』第 147 号、2015 年 10 月 1 日、7 頁、参照］。

（17）西園寺昌美（1941-）は、現在〔2018（平成 30）年 8 月現在〕、宗教法人白光真宏会第二

代会長、ワールド・ピース・プレヤー・ソサエティ（World Peace Prayer Society）代表でもある。〔なお、「ワールド・ピース・プレヤー・ソサエティ（World Peace Prayer Society）」は、2019（平成 31）年 1 月から「May Peace Prevail On Earth International」に団体名称を変更した。2019（令和 1）年 6 月現在、同団体代表は西園寺昌美、同団体理事長は昌美の夫である西園寺裕夫がつとめている［http://worldpeace-jp.org/about/　2019 年 6 月 9 日最終閲覧］〕。加えて、現在〔2019（令和 1）年 6 月現在〕、1999（平成 11）年に設立した公益財団法人五井平和財団・会長［https://byakko.or.jp/founder/masami/　2019 年 7 月 18 日最終閲覧］。彼女（昌美）は、琉球王朝の子孫（末裔）・尚誠の長女として生まれた。尚（しょう）家の「本家」ではなく「分家」だという。彼女には、兄と妹がいる。学習院女子中等科・高等科を経て学習院短大卒業。高校 1 年、15、16 歳の頃、五井昌久に出会った。白光真宏会の青年部に入り、リーフレット配りなどに励んだ。また、白光真宏会だけでなく、キリスト教の教会にも 3 年ばかり通っていた。高校 2 年の時、毎週日曜、プロテスタントの教会にでかけた。白光真宏会に通い始めたばかりの当時は、神さまは信じているけれども霊的な話に対しては五井の話でも彼女なりに反発を感じていた、という。20 歳になる前に、重い病気であまり食べられなくなり、目が見えない、耳が聞こえないというような状態におちいった時もあった。痩せ細って、体重が 30 キロ台まで減った。当時、彼女（のちの昌美）は発作がつづき、母親〔実母で五井の信奉者〕の看病に限界がきていた。実家ではこれ以上養生できないから、と五井が彼女を引きとった。五井は多忙の中、夜中の 2 時、3 時まで祈り、「お浄め」してくれたという。そして、周りの人たちの手あつい看病などもあって、その後、彼女の体の状態はよくなっていったようである。昭和 40（1965）年、五井昌久の養女となる（旧姓名：尚悦子）。ミシガン州立大学にて〔約 1 年間〕学んだ。昭和 49（1974）年 10 月、西園寺公望（1849-1940）の曾孫（そうそん）（ひまご）にあたる西園寺裕夫（1949?-）と結婚、3 人の子（長女・真妃、次女・里香、三女・由佳）をもうけた［西園寺『明日はもっと素晴しい』、8-10 頁・17-30 頁・43-45 頁・「奥付」頁、等、参照］。

（18）白光真宏会では「宇宙子科学」と略して言うことが多く、昭和 37（1962）年 6 月から始まった同会独自の「研究」。それは、例えば、「肉体の波動調節を科学的にやろう」というもので、「波動調節」によって肉体の病気が治る、（「波動調節〈波動調整〉」によって）「守護神」などの霊的存在を目に見える形に物質化する、といった目標が語られた。さらに、この「宇宙子科学」がすべて完成したら、地球世界の次元が変わって争いのな

い「地上天国」が実現する、という［『白光』1966 年 2 月号、22-26 頁、等、参照］。しかし、この「宇宙子科学」は、現在まで完成していない。

（19）印（いん）は、『月刊　世界平和の祈り』第 662 号（白光真宏会出版本部、2014 年 10 月 15 日）の説明によれば、「一人一人が人生を輝かしく創造し、同時に世界平和をもたらしてゆくため」［『月刊　世界平和の祈り』第 662 号、3 頁］の実践方法の一つ。「我即神也の印とは、自分を神にまで高め上げるための印」「人類即神也の印とは、人類に真理（我即神也）の目覚めを促すための印」［『月刊　世界平和の祈り』第 662 号、3 頁］との説明が付されている。

（20）瀬木庸介（1930-1999）は、宗教法人白光真宏会第二代理事長。瀬木が正しい表記。本名は博親。昭和 5（1930）年 5 月、東京生まれ。昭和 27（1952）年、成蹊大学政経学部卒業。その後、米国で広告事業を研究（ボストン大学、コロンビア大学経営大学院に留学）。昭和 41（1966）年、五井昌久に帰依。祖父の創業になる広告会社（博報堂）で 20 年間勤務。昭和 47（1972）年、博報堂社長（1966-1972）を退任。昭和 48（1973）年、白光真宏会の理事長に就任した。瀬木が同会会員として五井と接した期間は、14 年間あった。そのうち、帰依した年・昭和 41（1966）年から 7 年間は「一信徒」、そのあとの 7 年間は「弟子〔同会職員・理事長〕」として五井昌久に仕えた。瀬木の記憶にのこる五井の顔は、はじめの 7 年は「常に優しくにこやかな顔」であり、後の 7 年は「権威にあふれ、心の奥の奥まで見通すような厳しい顔」だったという。瀬木は、同会職員として勤務するようになった初日、五井に挨拶をすると、「今日からはもうお客じゃないからね」と五井から言われた。そのとき瀬木は、自分はもう客ではなく五井の弟子にしてもらったのだ、と覚悟したようである。また、瀬木は五井のことを「五井先生は慈愛の人でした。」とも記述している。晩年の瀬木は、亡くなる直前まで「五井平和財団」の設立に精魂を傾けた［瀬木『宇宙から届いたマニュアル』、「奥付」頁・239-243 頁、『白光』1973 年 3 月号、69 頁、瀬木『人が神に出会う時』、4 頁・97 頁、等、参照］。

（21）西園寺裕夫（1949?-）は、宗教法人白光真宏会の昌美会長の夫。前記の註（17）、参照。西園寺公望の曽孫。学習院大学経済学部卒業、ミシガン州立大学大学院修了（MBA：経営学修士）。現在〔2018（平成 30）年 8 月現在〕、公益財団法人五井平和財団理事長、ワールド・ピース・プレヤー・ソサエティ（WPPS）理事長〔同団体（WPPS）は名称変更し、2019（平成 31）年 1 月より「May Peace Prevail On Earth International」理事長〕。昌美との結婚までに、昭和 49（1974）年 4 月 27 日、結納の儀が行われ、翌 4 月 28 日、披露。

五井昌久の挨拶の中で、西園寺裕夫の略歴が紹介された。なお、結納の当時、西園寺裕夫は、日本精工株式会社に勤務していた［『白光』1974 年 6 月号、31 頁、等、参照］。

（22）五井の直弟子は他にも多数いるが、ここでは、高橋氏、伊藤氏、江見氏、清水氏、佐久間氏について記しておこう。他の直弟子の人たちも、本論文の中において、随時、紹介する。

・高橋英雄（1932-）。東京生まれ。1940（昭和 15）年 4 月に東京・深川から千葉・市川に引っ越した。高校生の時、肺結核発病。それが縁で五井昌久を師として帰依。1954（昭和 29）年『白光』誌創刊時からの編集長（初代編集長）。白光真宏会副理事長を務めた。白光真宏会は 1999（平成 11）年に退任［高橋『師に倣う』、カバー袖「著者略歴」、『五井先生研究』第 128 号、2014 年 4 月 1 日、22 頁、五井『想いが世界を創っている』、105 頁、参照］。五井の側近中の側近、といえる。高橋は、「私の信仰経歴のはじめは、キリスト教でした。」と記しており、短い期間ながらキリスト教会に通っていた［『五井先生研究』第 122 号、2013 年 10 月 1 日、7-8 頁、参照］。その後、生長の家に心が向かう。彼は、18 歳になりたての頃、肺結核とわかり、安静にして寝ている間に、父親の本棚にあった『生命の実相』を読んだ。この本が縁で生長の家信者だった横関実を知り、横関の導きで五井に出会うことになった。五井昌久と初めて会ったのは、千葉県・市川駅前通りの K さん宅で、1951（昭和 26）年 5 月頃のこと、という［高橋『五井先生を語る（一）』、21 頁・100 頁、『五井先生研究』第 151 号、2016 年 4 月 25 日、1 頁、参照］。父・蔵二（くらじ）、母・米（よね）〔「よね」と平仮名表記の場合もある〕［高橋『五井先生を語る（一）』、32 頁、『五井先生研究』第 128 号、2014 年 4 月 1 日、22 頁、参照］。高橋英雄も、白光真宏会の CWLP（「宇宙子科学」）シニアメンバーの一人（一員）［『五井先生研究』第 153 号、2016 年 6 月 25 日、28 頁、等、参照］。

・伊藤顯（1925-）。「宇宙子科学（＝白光真宏会での正式呼称は「宇宙子波動生命物理学」、CWLP）」シニアメンバー、白光真宏会元・理事、同会元・教育局長。会内では、伊藤顯長老とも呼称されている。伊藤は、白光真宏会入会前、戦前に、航空士官学校を卒業、終戦まで練習機に乗って訓練していた。彼は昭和 25（1950）年の秋、千葉県市川市で、五井昌久に初めて会った、という。現在〔2017（平成 29）年 8 月現在〕、千葉県市川市在住［『五井先生研究』第 165 号、2017 年 7 月 7 日、27 頁、『五井先生研究』第 166 号、2017 年 8 月 17 日、2-6 頁、参照］。

・江見淳（きよし）（?-2011）。白光真宏会の有力な会員の一人。高橋英雄個人誌の〈白光使徒列伝〉

等によると、次のような人である。江見は、東京外語大学〔東京外国語大学〕を卒業し、NECに勤務、英語が堪能だった。江見は、1960（昭和35）年3月、五井昌久に出会った。1962（昭和 37）年 6 月、白光真宏会で「宇宙子科学」研究が始められると彼もそのメンバーの一人となった。江見は、語学の才能を生かし、五井昌久の主著『神と人間』の英訳を完成させたという。NEC を定年退職した後は、ヨーロッパやアメリカ大陸にわたり、各国各地に同志をリードして、多くの「ピースポール〔「世界人類が平和でありますように」という平和のメッセージを記した柱。様々な言語で同メッセージが記されている。〕」を建立した。会社を定年退職後、「聖ヶ丘〔白光真宏会〕」に職員として奉職。また、日本全国の神社百社に〝印（いん）の奉納〔白光真宏会における信仰実践のひとつ〕〟を実行した。2011（平成23）年7月、倒れ、78歳で逝去。CWLP（「宇宙子科学」）シニアメンバー［『五井先生研究』第99号、2011年11月1日、19-22頁、『五井先生研究』第153号、2016年6月25日、27-28頁、参照］。

・清水勇（1932-2016）。東京生まれ。7 男 10 女の 1 人。都立工芸高校機械科を卒業後、東京大学理工学研究所応用力学部深津研究室等に勤務。勤務のかたわら通学していた中央大学法学部法律学科（夜間）卒業。司法試験の勉強をしている時に五井の教えに出会い、1964（昭和 39）年、白光真宏会に入会。のちに白光真宏会の職員となる。白光真宏会では、青年部長、総務部長、教宣部長（教育局次長）を歴任し、1997 年に同会を定年退職した。そして、2016 年 3 月 12 日、逝去。同会では、講師、導師、CWLP（「宇宙子科学」）メンバーとしても活躍したという［清水『ある日の五井先生』、201 頁・220 頁、『五井先生研究』第154号、2016年7月30日、18頁、『五井先生研究』第156号、2016年9月30日、31-32頁、参照］。

・佐久間筆八（?-2006）。岩手県出身。白光真宏会・長老、同会元理事、同会「宇宙子科学」シニアメンバー。「宇宙子科学」の初期メンバー。中央大学法学部卒業。学生時代、禅宗にふれ、坐禅にいそしんだ。戦後は、三浦関造（1883-1960）のヨガや、老子の教えなどにも関心をもち探究したという。昭和 29（1954）年に、五井の著した『神と人間』が縁で、新田道場（千葉県市川市）の五井昌久を訪ねた。以来、佐久間は、五井の熱心な信奉者となった。そして、定年退職後、白光真宏会に奉職。同会では、総務局長、理事を歴任した。昭和55（1980）年8月17日（日曜）の「統一会」では、同日に五井昌久が亡くなったことをふせて、佐久間が法話をおこなった。法話を依頼された佐久間は、何事もなかったように淡々と説法をしたという。平成18（2006）年2月26日夕方、満98

歳（数え年 100 歳）で、自宅にて眠るように静かに亡くなったそうである［『白光』2006 年 4 月号、38-40 頁（高橋英雄「清冽なる水の流れ―故・佐久間筆八翁を偲ぶ―」）、参照］。

第 1 章　白光真宏会の教祖・五井昌久の生涯と活動

まず、五井昌久の生涯につき、概要 (1) を見ていこう。五井の生涯を転換期で区切り、6 つの時期に区分した。

同教団の教祖の生涯については、彼の誕生から死去にいたるまでをまとめた書籍等は少ないものの、五井自らが書いた自叙伝のほか、五井の近しい弟子たちの手による「五井伝」等があるので、それらをもとに、五井の生涯をありようを、以下、記述する。

なお、編年体のかたちで、順次、彼の生涯におこった主な出来事をしめす。前半生は、主に自叙伝［五井　1955］をもとにし、別資料による情報は、適宜、その出典を記す。

1　五井昌久の生涯と活動

1-1　「一愛国青年」の時代

＝「戦前期」（～ 1945〈昭和 20〉年頃）

大正 5（1916）年 11 月 22 日 (2) 午後 5 時から 6 時の間に、東京・浅草で、9 人〔7 男 2 女。五井の兄弟のうち、1 人の兄は夭死。1 人の兄はのちの第二次世界大戦中、フィリピンで戦死。五井の弟・五郎もニューギニア方面で戦死［高橋『師に倣う』、167 頁、参照］〕きょうだいの四男として誕生〔育ったのは 6 男 2 女〕。両親は、父・五井満二郎〔越後長岡藩の武士の息子。生まれながらの病弱だったという〕、母・きく〔東京生まれの商人の娘。男勝りの豪気をもっていたという〕(3)［五井『天と地をつなぐ者』、1 頁］。「五井先生の生まれ育ったところは、東京の浅草で、片方が吉原土手、片方が今日ドヤ街がある山谷であった。」［高橋『五井先生の辞書』、53 頁、『白光』1977 年 7 月号、4 頁、参照］。五井は、下町の気さくさ、飾り気のなさ、貧しい中でも互いに助け合う温かい人の心と心の交流から、様々なものを学びとったそうである［高橋『五井先生の辞書』、53 頁、参照］。

家が貧しかったせいか、3 歳の頃から生活というものを考え、どういう生き方をするのが一番自分に適しているのか、などと考えていたという［五井『天と地をつなぐ者』（改版本）、12 頁］。

五井が子供の頃、母親は家で髪結いをやったり駄菓子屋をやったりしていた［五井『天と地をつなぐ者』、7 頁］。きくは「針仕事」もしていた［高橋『五井先生の辞書』、53 頁］。

五井は、「幼少から父ゆづりの病身」で、「果して成人する事が出来るか」と医師に首をひねられながら育って来た少年であった、という。五井自身、少年の頃から、自分は「大人になるかならぬうちに肺病か胃腸病になって死ぬに違いない」と自分の体に諦めを抱きはじめていた。

そして、彼の少年時代からの興味は、小説を読むことと、歌をうたうことで、学校でも作文と唱歌は得意な科目だったそうである［五井『天と地をつなぐ者』、2 頁］。

大正 12（1923）年 9 月 1 日、6 歳の時に関東大震災に遭う。一物も残さず焼け出され、着たっきりの姿で急造のバラックに住んでいた［五井『天と地をつなぐ者』、3 頁］。五井少年は大震災で焼け出されたために越後（新潟）から見舞に来た伯父（父親の姉の夫）に連れられて、この時、はじめて故郷入りした。新潟での小学校は、当時の学校名「上組第三小学校」というところで、そこに一年間通ったという［髙橋『五井せんせい』、37 頁］。その後、毎年のように夏休みには父親の故郷の越後に行き、自然に親しむ。お寺が好きで、「寶林山（ほうりんざん）　定正院（じょうしょういん）〔新潟県長岡市にある曹洞宗寺院〕［『白光』1967 年 6 月号、56 頁、等、参照］」という裏山の寺へ行っては、お経を聴いたり、木魚の音を快くきいたりしていた、という。後には、この寺の庭で 1 人で坐禅を組んでいたそうである。

五井は、少年の頃は、良寛〔1758-1831　江戸時代の曹洞宗僧侶、歌人、書家〕の柔和で円満な人格が好きで、良寛について書いた本をよく読んでいたという。そして、五井自身も良寛のような純真で把われ〔とらわれ〕のない人間になりたいと考えていたそうである(4)［『白光』1957 年 9 月号、2 頁、参照］。

さらに、五井は少年の頃から、ヴィクトル・ユゴー（1802-1885　フランス・ロマン主義の小説家）の小説を何度も読んだり、映画を観たりして、その度に心を洗い浄められていたものだ、と語っている。ここでいう小説とは、『レ・ミゼラブル』を指している［『白光』1958 年 3 月号、8-9 頁、参照］。

また、小学校の頃から俳句や短歌を詠み、作文や唱歌が得意だった。しかし、五井は「子供の時、実に字は下手だった」［高橋編著『続々如是我聞』、152 頁］と言っていたそうである(5)。そのため、作家か音楽家か、学校の教師になろうと思っていた、という。小学校の頃は、善き少年、立派な人間になる生き方の手本のような佐藤紅緑（こうろく）(6) の少年小説に魅せられ、その主人公のように勇気をもって社会戦線に飛び出し、苦学力行（りっこう）の士になるこ

とを決意した。

なお、五井は小学生から10代後半の頃を振り返り、「私は小学生の時には、俳句に親しみ、自分でも句作していたのですが、十七八歳〔17歳、18歳〕の時、芭蕉の句の深さにひどく打たれて、かえって句作する気が失せてしまい、その頃並行して詠んでいた短歌の道に重点をうつしてしまったのです。」[『白光』1972年3月号、4頁］と記している。

そして13歳の頃、高等小学校1年を終ると、東京・日本橋（室町）の小さな織物問屋（呉服店）・T商店（田島商店）の（住み込みの）少年店員になった。大いに働いて健康になり、勉学をつづけて立派な人間になろう、との決意があった。朝4時起き、日のあるうち荷車引き、夜は学校、読書などで、夜12時頃就寝というのが、だいたいの日課だった。13歳ぐらいから、ヨガ式呼吸法を加味したような静座法を就寝時にずっとつづけてやっていた。やがて、自転車で1人で商売に行けるようになると、自由に時間が使えるようになり、柔道の朝稽古などもできた。時間のやりくりがつくようになってからは、文学書、哲学書、聖書、仏典など、古本屋をあさって読んだ［五井『天と地をつなぐ者』（改版増補本）、13-18頁、髙橋『五井せんせい』、39頁・196頁・254頁、参照］。なお、「柔道は初段の腕前」［高橋『新・師に倣う』、150頁］とのことである。

幼少の頃から病弱だったが、16歳くらいから医者を捨て切った[(7)]。病身を脱却しようという心から、暑中休暇には越後（長岡）の山腹にある寺の堂で一日何時間か静座を組んだ［五井『天と地をつなぐ者』、11-12頁、髙橋『五井せんせい』、39頁、参照］。

呉服店では、丁稚奉公の後、手代となり、その後一人前として認められて、自分の店をもった［髙橋『五井先生を語る（二）』、1頁］。

18、19歳の頃、T商店（田島商店）を退めて、独立し（19歳で独立し［髙橋『五井せんせい』、196頁］）、主人兼小僧で「五井商店〔一軒の店をかまえたのではなく、自転車を使っての行商・外交を主にしての商売だったとのこと［高橋『新・師に倣う』、86頁、髙橋『五井せんせい』、196頁、参照］。五井商店では呉服を売り歩いたそうである［髙橋『五井せんせい』、254頁］〕」を開業した。この頃から正式に音楽（声楽）の勉強をはじめた。また、この頃から、歌人の仲間入りをし、詩人の人たちと交際がはじまり、小説を書こうとしたりしていた、という［五井『天と地をつなぐ者』（改版本）、18-19頁、参照］。五井は、意気には燃えていたが、老いた主人と語るうちに掛金はあきらめて請求もせず帰るなど、「商売人」にはなりきれなかったようである。その間に、五井は「今でいう通信教育の早稲田講義録（中学課程の勉強［高橋『五井先生の辞書』、84頁、参照］）を修了

している」［高橋『新・師に倣う』、87 頁］。田島商店の店員時代であろう、向学心にもえていた当時の五井は、早稲田の中学校課程の通信教育を受け、主人の目をぬすんでは勉強に励んだ。夜みなが寝静まってから、布団の中で懐中電灯を照らして勉強していたという［髙橋『五井せんせい』、39-40 頁、参照］。五井商店をたちあげたこの頃、誘われて、短歌会「ぬはり社〔菊池知勇（1889-1972）が主宰。短歌誌『ぬはり』を刊行した〕」に入会（入門）、本格的に短歌の勉強をしたようである。野榛（ぬはり）〔短歌結社〕には、1936（昭和 11）年 2 月、水上赤鳥〔(1895-?)〕の紹介で入社。五井は、菊池知勇に師事し、1948（昭和 23）年まで『ぬはり』誌同人として作歌に精励した。「ぬはり社」には当時、いろいろなクラブがあり、五井はそこで柔道も修行して、初段黒帯をとったという。

彼は独立後、「ぬはり社」に通い、音楽（とくに声楽）の勉強は専門学校で学んだ。五井の声は、テノールに近いハイ･バリトンだった［髙橋『五井せんせい』、40 頁・254 頁、五井『冬の海』、224-225 頁、髙橋『五井先生を語る（二）』、1-2 頁、参照］。

そして、10 歳代終わり頃から 20 歳代の初期に、五井は「霊媒」の女性に 2、3 人出会っていたが、「霊能」や「死後の霊魂」はあり得ないと決めてかかっていた［五井『天と地をつなぐ者』、15 頁、参照］。

ただし、20 歳がらみの坐禅観法は、彼の病弱を一変する大効果があった［五井『天と地をつなぐ者』、12 頁］。聖書、大蔵経、武者小路実篤、トルストイなどを読んで宗教的になり、五井が自分なりの宗教観 (8) を持ったのは、23、24 歳になってからという。しかしこの頃の宗教観も戦後にはすっかり変貌することになる［五井『天と地をつなぐ者』、12 頁］。後年の五井の「講演会法話」における武者小路実篤評によれば、「武者小路実篤氏の文学は、表現がとても幼稚なやうですが、内には素晴しい美があり、真があります。本当のものを得た人、生命を立派に生かす人、美しい人、愛のある人になりたい、と言ふ思想が底に流れてゐて、この人の人格があふれてゐます。」［『白光』1955 年 4 月号、27 頁］と述べている。また、同じ「講演会法話」で、五井は日本文学と比してトルストイを高く評価し、「文学にしても、残念ながら日本文学は、トルストイやドストエフスキーや、ユーゴーなどのやうな、高いひびきを感じさせるものがないのです。」［『白光』1955 年 4 月号、25 頁］などと話している。ここで五井の言う、高い〝ひびき〟とは、心霊的な意味合いでいう〝波動、波〟と同義である。それは、五井自身の感性から判断して、そう感じられた、という話である。

五井は、兵隊には全く適さない体格、病身とみられていたため、徴兵されることはなか

ったそうである［『白光』1978 年 10 月号、5 頁、参照］。

苦学で音楽の勉強 (9) を終えて、しばらくは後進の指導をしていたが、昭和 15（1940）年 9 月、三兄・利男の紹介で日立製作所の亀有工場に入社、労務課へ勤務［五井『天と地をつなぐ者』、5 頁・8 頁］。五井が日立製作所亀有工場の「厚生課」に勤務した、との記述もあり［『五井先生研究』第 167 号、2017 年 10 月 10 日、15 頁］。五井は、工場での文化活動を推進するうち、詩人、歌人たちとの交際を生じ、高村光太郎や竹内てるよ (10) 他に種々と教えを受けた［五井『天と地をつなぐ者』、9 頁］。また、終戦前のことであろう、時期は定かでないが、五井は「苞竹流（ほうちく）」という流儀の書を習っていたそうである［髙橋『五井せんせい』、218 頁］。

のちに五井の直弟子となる髙橋英雄の記述によれば、五井が日立製作所亀有工場に勤務した頃、懸賞論文、小説に入賞したこともあって、五井は書くことに自信を持ち、文学青年の仲間とともに、文章の勉強、詩の勉強にも励んだ、という［髙橋『五井先生を語る（二）』、2 頁］。

五井には編集経験があり、最初は日立製作所亀有工場で働いていたときに、いくらか編集にも関わったようである。昭和 15（1940）年 9 月入社から昭和 20（1945）年秋頃退社までの在社中、五井は、工場発行の新聞に短歌や詩を投稿した。そこで編集にも参加したらしい。そして、戦争末期、徴用で亀有工場に工員として入ってくる少年少女たちに、五井は情操教育が必要とおもって、文学や詩を教えたり、よい音楽をレコードで聴かせたり、合唱などを指導したりした。ある種の青年学校のようなものが亀有工場内で開かれていて、五井はその頃から「五井先生」といわれて少年少女たちから慕われていた［髙橋『五井先生を語る（二）』、70 頁］。

五井は、日立製作所亀有工場で、社内誌『日立かめあり』を編集（タブロイド判 4 頁）。その 4 頁中 1 頁を文芸欄に割いて、五井は文芸欄の短歌指導を担当し、工場内での文学運動を推進した［『五井先生研究』第 167 号、2017 年 10 月 10 日、15 頁］。

五井が日立製作所亀有工場で働いていた頃、詩の集まりやレコード鑑賞会などで、五井の当時住んでいたアパートに何回も行ったという五井より 7 歳年下の男性は、倉田百三の『赤い霊魂』を五井から借りて読んだ、という。つまり、当時五井の蔵書には倉田百三の本もあったことがわかる。そして、同男性への五井の手紙の文面には、戦前において「……戦争すること自体がよい事ではなく、その先にある真実の人類の平和が目的だからなのです。日本のこころはそうだと思います。だから私達は最後の目的〔「人類の平和」を指

すだろう〕に備えていたずらに踊らぬ人間にならなければいけないと思うのです。……善きが上にも善き人間である様に、いつの日も人類を思い、国家を思って生きてゆきましょう。……」と書かれている。この手紙の文を見ると、五井は、時局をうけいれながらも戦争の先の目的＝「人類の平和」と考えていた様子である。個人的には「善き人間」をめざし、「人類、国家」のために生きようとする態度がうかがえる。五井は戦前から「平和志向」や「世界人類」をかんがえる視点を、ある程度はもっていたことがわかる［髙橋『五井せんせい』、182-184 頁、参照］。

とはいえ、昭和 16（1941）年、25 歳頃の五井は、大東亜戦争を聖戦、神のみ戦と信じ切っていた。人一倍国を愛し信じ、日本人全体をいとおしく思っていた。従業員の士気を鼓舞する事に全力をあげていた。ひたすら国の勝ちを祈り、勝ちを信じていた［五井『天と地をつなぐ者』、10−11 頁］。日立製作所の（軍需）工場で厚生文化の仕事をしていた五井は行動的で、愛国的だった。五井は、戦争の罪悪や平和についての真の宗教精神はまだ芽生えていなかったといい、国家の方針に従って工場の生産性向上に努めていた［『白光』1964 年 4 月号、4-5 頁、参照］。

昭和 17（1942）年頃、五井は、仲村八鬼（なかむらやき）（1912-）主宰の詩誌『若い人』に参加し、「若い人」葛飾支社を設立し B5 判 60 頁前後の会報を発行したが、〔戦時の〕用紙不足のため第 5 号で休刊したそうである。詩人の高村光太郎（1883-1956）や竹内てるよ（1904-2001）、らとの面識を得たのはこの頃という。

昭和 18（1943）年 9 月、日立製作所亀有工場の社内に文芸雑誌発行の要望がおこり、五井は、文芸雑誌創刊のために奔走した。その結果、五井は発行許可をとりつけ、文芸誌『日立かめあり』が発行されたけれども、昭和 19（1944）年 4 月、第 3 号で休刊となった［『五井先生研究』第 167 号、2017 年 10 月 10 日、16 頁］。

終戦半年ぐらい前に、五井は腎臓をわずらう。日立製作所・工場の事務員〔この事務員は、のちに白光真宏会の会員（講師）になった［『白光』1980 年 4 月号、24 頁、等、参照］〕から岡田茂吉の『明日の医術』(11) を借りて読み、その事務員の母親から掌をつかったある療法〔「霊線療法」〕をやってもらった (12)。五井は、岡田茂吉の説く「病気と浄化」についての〝理論〟に共感する［五井『天と地をつなぐ者』、21-22 頁、参照］。

日立では、五井は労務で福祉の関係の仕事をしていた。また、茶や華、レコードコンサートやコーラスなどの部門があり、その係を五井が担当していた。日立時代の五井は、従業員の心を上向きにしようと、「胸を張って歩きましょう、空を向いて歩きましょう」と

いつもスピーカーから語っていた。クラッシックの美しい音楽を流し、心がきれいになるような指導をしていた。いっぽう、日立の上層部の人たちは軍歌を流してもらいたい、ということで意見の相違から衝突することもあったようである。情熱家だった五井は、工場長と自分の主義主張のために喧嘩したり、〔日立の中に〕「青年学校」というのがあって、その青年たちのためにとても一生懸命やっていた、という［『白光』1981 年 3 月号、41 頁］。ふだんは誠実、実直、優しく柔和な、おとなしい青年だったが、「正義感が強く烈しい性格」の一面もあった。工場の上司が不正なことをしているのがハッキリわかると、その人に会見を申入れ、ものすごい勢いで、その訂正を求めた。五井は「その時は、ふところに短刀をしのばせ、さし違えるぐらいの気持でいったものだよ」と述懐したそうである［高橋『新・師に倣う』、173-174 頁、参照］。

五井は講話などで、「私は少年から青年にかけて、短気で短気でしょうがなかった」と語った。そして、日立製作所亀有工場勤務時代、不正をした上司にたいして、五井は丁寧な言葉づかいだけれども声を大きくして迫り、その非を言い立てたという。五井青年は、自らの短気さを自覚し、「〔短気を〕直さなくちゃなぁ」と反省していたそうである。なお、この五井の短気も、その後、戦後に「宗教体験」をする頃には、満員電車の中で誰かに痛い足の個所を蹴とばされても、その瞬間〝有難うございます〟という言葉が出て来るほどに、その内面は変貌を遂げることになった［髙橋『五井先生を語る（二）』、85-87 頁、参照］。

昭和 20（1945）年 3 月 10 日、「東京大空襲（アメリカ軍による大量の焼夷弾（しょういだん）をもちいた東京への空襲）」で、東京は下町も山の手も炎上し、一面の焼け野原と化してしまったという。五井のいた下町も、この大規模爆撃で多数の死者、罹災者がでた。五井はこのとき、空からのはげしい爆撃を体験している。多くの市民が焼け死んだ。そして、さらに、同 20（1945）年 8 月 6 日広島に、8 月 9 日長崎に原子爆弾が投下され、日本は連合国に「無条件降伏〔同 20（1945）年 8 月 14 日、『ポツダム宣言』を受諾〕」した。同 20（1945）年 8 月 15 日、「終戦」［髙橋『神の満ちる星の話』、70 頁、等、参照］。

五井にとって祖国日本は絶対なる存在であり、天皇は現人（あらひと）神だった。昭和 20（1945）年 8 月 15 日、終戦の大詔は五井の心を慟哭させ、天皇放送を終わるなり、工場長と抱き合って哭きつづけた［五井『天と地をつなぐ者』、16-17 頁］。

◆「戦前期」の要点

五井は、幼少期から病弱で、苦学して音楽を学んだ。声楽を学んだことは、のちに「お浄め」を行う際、「気合いの一声」や「オーム」と発声するのに役立った、という［五井『天と地をつなぐ者』、113−114 頁、参照］。

彼は、10 代の頃より「静座法」を実践したり、仏典・聖書を読むなど、宗教的であった。また、詩や短歌などの文芸を好んだ。佐藤紅緑、竹内てるよ、高村光太郎ら文人からの「影響」もあった。五井は会の初期から、詩や短歌の形で「教え」を説いているからである。この時期、五井が、岡田茂吉の著書『明日の医術』を読んだことは、彼の思想形成を考察するうえで重要である。詳しくは後述するが、五井は、岡田の「浄化（作用）」という考え方の「影響」を受けた。この「戦前期」までの五井は、宗教的な傾向はあったものの、当時世間のどこにでもいたような「一愛国青年」であったとおもわれる。

1-2　新宗教団体への入信、「神我一体」へ
＝「遍歴期」（1945〈昭和 20〉年頃～ 1949〈昭和 24〉年頃）

敗戦後まもなく、日立の工場を辞職。戦後、日立製作所亀有工場の残務整理がついたあと、五井は過労から病に倒れたが、ほどなく（10 日ほどして）回復。回復はしたけれど、自分の日立製作所・工場での使命は終わった、と五井はおもって、同製作所を退社した［五井『天と地をつなぐ者』、23-24 頁、髙橋『神の満ちる星の話』、70 頁、参照］。敗戦後の残務整理の仕事のなかに、各地から工場に集っていた少年少女工たちを、それぞれの故郷に帰してやる仕事があった。五井も彼ら少年少女工の帰郷のための汽車の切符の手配に奔走し、五井は自分の希望で、日向（宮崎県）の子供達の帰郷に付き添うことにした。日向が〝天孫降臨の地〟と言われることや、宮崎県には武者小路実篤の「新しき村〔当時、宮崎県児湯郡木城村に在った生活共同体〕」があり、その武者小路の「新しき村」に五井が憧れていた、という理由から五井は「宮崎県組」の子供達の付き添いを望んだ。しかし、五井は病のため、宮崎県への同行を断念することになった。五井は、武者小路実篤の「理想主義」「人道主義〔人間愛を根本におき人類全体の福祉の実現を目ざす立場［『広辞苑』］〕」的なありかたに惹かれたのかもしれない。こうした五井の思想的志向から、のちに五井が提唱した「平和主義」の萌芽をみることもできよう［五井『天と地をつなぐ者』、20-23 頁、等、参照］。五井が日立製作所に勤務したのは、昭和 20（1945）年秋頃までであった［『五井先生研究』第 114 号、2013 年 2 月 1 日、6 頁、参照］。

それから後、五井は、岡田の弟子の治療所を訪れ、「霊線療法 (13) 」の講習を受けた。

同じ頃、彼（五井）は、ホルムス著谷口雅春訳の『百事如意』[14] という本を読み、深い感銘を受けたという。そして、五井は自らも、掌による「霊線療法」を行うようになった。当時の五井は、この掌による「病気治し」（「霊線療法」）で、かなりの治病効果をあげていた、と自叙伝の中で述べている。そして、戦後間もないその頃、五井は、谷口雅春の『生命の実相』全篇 20 巻を読んだ。この頃を機に、五井は、「霊界幽界」を研究するようになる［五井『天と地をつなぐ者』、25-30 頁、参照］。

昭和 21（1946）年、晩春のある日、五井は、岡田茂吉の弟子の Y 氏〔「山本先生」「山本さん」と呼ばれていた[15]〕とともに熱海の岡田を訪問する。五井が岡田と面接した感想については、「私の魂を把へる程の宗教的法悦はなかつた」が、「岡田氏と云ふ人は……その考へてゐる事柄は実に膨大な構想であり、世界的な大きな理想を確信をもつて、淡々と語つてゐる姿は私〔五井〕の心を非常にひきつけたのであつた。」と五井は自叙伝に記している［五井『天と地をつなぐ者』、32 頁、参照］。しかし、五井にとって岡田は一大企業家として見え、五井の求める本筋の救世主ではなかった。五井は岡田に面接して以来、岡田を聖者として崇める気が薄らいでいたため、「お光り（お守り）[16]」にたいする信仰もあやふやになり、〔「お光り」なしで〕五井自身の力でも病者（病気）を治せる、と考えるようになっていた［五井『天と地をつなぐ者』、33-34 頁、参照］。

同 21（1946）年夏、五井は葛飾の中川土手の辺りで「お前のいのちは神がもらった、覚悟はよいか」との「天声」をきき、五井は「はい」と心でこたえた。その「天声」をきく体験をした後、五井は、手をかざして〔掌による「霊線療法」で〕腹膜をわずらう青年を治癒した。この頃、五井は、月刊『生長の家』を購読し、「霊媒」をたずねたり、心霊問題を取り扱った図書を探し歩いたりしていた。

そして、ある日曜日、五井昌久は、兄弟（兄と弟）と赤坂の生長の家本部の講演会へ行き、谷口雅春の講話を聴いた。そこで説かれた「人間神の子、実相円満完全、人間の本来性には悪もなく悩みも病気もないのだ」という谷口の思想に五井は深く打たれたという［五井『天と地をつなぐ者』、41-42 頁、参照］。この日から生長の家の運動を始める。生長の家誌友に呼びかけ「葛飾信徒会」を結成、五井自身、副会長になる。五井は、岡田茂吉以来、偉いと噂の人物には面会に行っていた。

戦後まもないこの時期、五井昌久が 30 歳頃、葛飾区の中川土手辺りで「天声」をきいて、その後、五井は〝霊修行時代〟に入っていくが、彼は、ひたすら「神様、有難うございます」と想いつづける日々を送ったという。五井は、のちに〔昭和 24（1949）年頃〕

〝想念停止の修行〟というものを行う。そのとき彼は「想いを出してはいけない」とされたが、「神様、有難うございます」という想いは出してもよい、と〔「守護神」から〕許されたそうである［『五井先生研究』第 167 号、2017 年 10 月 10 日、17-18 頁、参照］。

同 21（1946）年 8 月のある日、五井は母・きくと話をし、職探しをすることになる。そして同年の翌 9 月、C〔中央〕労働学園に出版部員として就職（以降、約 2 年半近くその職場に勤務）［五井『天と地をつなぐ者』、30−60 頁、参照］。五井は、財団法人「中央労働学園」出版部に就職。のちに五井の妻となる岡村美登里は同学園の渉外部に入り、翻訳と通訳が彼女の仕事だった。美登里は大学の英文科を卒業後、中央労働学園に入る前は、一時期、旧女学校の英語の教師をしていたそうである［髙橋『五井せんせい』、56 頁、参照］。中央労働学園出版部に五井が勤務していたときは、東京・亀有駅から勤務先のある東京・浜松町駅まで電車で通っていた［『五井先生研究』第 129 号、2014 年 5 月 1 日、21 頁、参照］。

その頃の五井は、中央労働学園出版部で『中央労働時報』〔昭和 21〈1946〉年 9 月に創刊した月刊雑誌〕の編集に携わった、という［髙橋『五井先生を語る（二）』、71 頁］。

昭和 22（1947）年になり、そのうち五井は、生長の家地方講師を任ぜられる［五井『天と地をつなぐ者』、86 頁］。また、彼は、「心霊科学協会」〔日本心霊科学協会のことだろう〕の「物理現象実験会」に出席していた［五井『天と地をつなぐ者』、89 頁］。

昭和 23（1948）年頃、東京都江戸川区・小岩の生長の家の会合で、共産党の人たちとの討論会があり、五井も生長の家側の人として参加。その時、共産党の人たちから「神さまがあるなら見せてみろ」と言われたのに応えて、五井が〝座布団をくっつけたまま畳の上を跳び上がり、跳ねた〟とされる［『五井先生研究』第 160 号、2017 年 1 月 20 日、11 頁、参照］。

昭和 24（1949）年[17]、1 月半ばを過ぎた頃、五井は、〝神霊現象の会〟を行うという「千鳥会」のことを聞き、千鳥会の会員となる。五井は、〔前年の〕メーデー以来、人を救うために超人的力がほしい、と思い、祈っていた。そして、千鳥会では、「交霊会」が始まる前に「扶紀（フーチ）[18]〔五井『天と地をつなぐ者』では、初版本、改版本（116 頁）ともにフーチに左記の漢字をあてている。一般的には、「扶乱」と書かれる〕」をもらった。

なお、千鳥会の「交霊会」から帰宅したその夜、「神想観（しんそうかん）[19]」中、閉じた眼の前に「霊魂」が見えたり、合掌した手が大きく「霊動[20]」し出したという。そこで五井は、この「霊動」を利用して、「霊界」との交流してみようと思いたったそうである。この夜を

きっかけに、五井は苦しい「〔霊〕修行」の道に入ることとなった。その頃までに、五井は「心霊」に関する知識はかなりもっていたという。そうして、五井は、「霊動」を利用した〝個人的な交霊会〟をおこなうと共に、千鳥会の「交霊会」には何処へでも出かけていった［五井『天と地をつなぐ者』、88-97 頁、参照］。

そのうち、「自動書記 (21) 」「霊耳 (22) 」で、五井は、通常勤務が困難になる〔出版部の校正をやっていても、自然と手が動きだし、校正が出来なくなって来た、という〕。当時の彼は、「霊」側の言う通り行動していた。〔同 24（1949）年〕2 月の終わり頃、五井は、事務がとれなくなり学園〔中央労働学園出版部〕を退職、岡田の弟子〔Y 氏（山本氏）〕の家に住み込み、本格的に「霊能修行」の道専門に進むことを決意する。

またその頃、五井は、谷口雅春の自宅を訪れ、谷口と短時間面談した。谷口からは、生長の家の講師はつづけなさい、と言われる。五井は、岡田の弟子〔Y 氏（山本氏）〕の家に同居し掌かざし治療等を行っていたが、ある日、床の間に置かれてあった観音像〔五井は、この観音像を「〆夜明観音（よあけかんのん）」と呼んだ〕をもらい受けて、そのまま自宅〔五井昌久とその母親が同居していた家〕に帰った。以後、岡田の弟子〔Y 氏（山本氏）〕宅に戻ることはなかった［五井『天と地をつなぐ者』、88-115 頁、『五井先生研究』第 158 号、2016 年 12 月 8 日、15 頁、参照］。この頃は、東京・亀有〔東京都葛飾区〕の家（二階家〔二階屋（にかいや）〕）に母親といっしょに暮らしていた［『白光』1981 年 3 月号、40 頁、参照］。

同 24（1949）年 1 月 20 日付（消印）の五井が出した葉書には、五井がのちに強調した特徴的な教え＝〝消えてゆく姿の教え〟がすでに記されていたという。生長の家の信仰をもっていた人の手紙にたいする五井の返信葉書の文面には、「……如何なる状態が現はれ様とも、それはすべて前生の因縁が消え去ってゆく姿と拝んでゆくところに、真実の明るい生活が生みなされてくるのです。……」と書かれてあったそうである。この葉書は、受け取った人から直弟子の髙橋英雄に保管を託されたものである。そうすると、〝消えてゆく姿の教え〟の成立は意外に早く、この後の「悟り体験」を得る前にあったことになる［髙橋『五井せんせい』、176-178 頁、参照］。

同 24（1949）年 4 月〔あるいは 3 月頃か〕、五井は〔東京・亀有の〕自宅を根城に、「想念停止」の修行をはじめる。断食をする。断食中だった同 24（1949）年 6 月時には、「霊団」に肉体行動をすべてゆだねて 4 ヵ月余りが経っていた、という［五井『天と地をつなぐ者』、118-129 頁、参照］。

「神さま、神さまのみ心のままになさしめ給え」と〝神さま〟のなかにすべてを投げ出すことを、五井は「全託」といい、五井の行動の特徴といえる。同 24（1949）年に五井がおこなった〝霊修行〟においても、五井は「全託」を実行し、「〔〝霊修行〟当時、〕食べることも、神さまにまかせた」と五井は直弟子の髙橋英雄に語ったという。通常は、食べなければ死ぬことになるわけだが、「明日の米がなくてもそれでもよい、それで今日、明日死んでもよい」というように、五井は〝神さまにおまかせ〟したのだそうである。結果、五井は、死ななかった。のちに、五井は、「生きていけるよ。神さまがすべてやって下さるから」と、その〝全託〟という彼の信念について髙橋英雄らに話した［『五井先生研究』第 160 号、2017 年 1 月 20 日、6-9 頁、参照］。

なお、この「霊修行」中、五井は約 30 日間は水分を摂るだけで、あとは一切口にしなかった。そして病人を助けるため、あちこちに出かけていた。母・きく（菊）がやせていく息子に「一口でいいから食べておくれ」と懇願しても「修行中ですから食べません」と答えていたそうである。きくは、「お念仏」を申しつつ見守りつづけた、とのことである［髙橋『師に倣う』、168 頁、参照］。

このときの五井の〝断食〟について、五井の直弟子・髙橋英雄の個人誌によれば、「その時は御飯も食べない、水はとったようですが、断食状態が約三ヶ月ぐらいつづいたといいます。」［『五井先生研究』第 158 号、2016 年 12 月 8 日、15 頁］と記している。また、髙橋英雄個人誌の別の号では、髙橋は、五井の〝断食〟について、「約三ヶ月間、水だけは飲んだが、ほとんど食べず、……」と書いている［『五井先生研究』第 156 号、2016 年 9 月 30 日、3 頁、参照］。

後年、五井は「断食」のことについての取材に対して「その間どの位の期間だったか、いつ頃から始まっていつ頃終わったのか、月日のことはわかりません。まだ結婚しない前、家内〔当時恋人だった美登里〕からおまんじゅうを一つもらって食べたのがきっかけで、ふつうにもどったと記憶しています。」［髙橋編著『続々如是我聞』、186-187 頁］と語ったという。また後年、「霊修行」をしている会員がいるとの話を聞くと、「気狂いになるかも知れないのだ。捨身の覚悟がなければすることではない」［髙橋編著『続々如是我聞』、99 頁］と、そのような「修行」をおこなうことを戒めた。

昭和 24（1949）年 6 月（の終わり［髙橋『五井せんせい』、17 頁］）頃〔この頃と髙橋が五井から聞いたそうである［『神人』第 38 号、2006 年 10 月 1 日、2 頁、参照］〕、五井は「想念停止」の修行〔「此の期間約三ヶ月」［五井『神と人間』、77 頁］とある〕を終え

て後、「神我一体[23]」の体験を得たとされる。「神我一体」を体験した翌日の朝、五井は瞑想時に、釈尊とイエスキリストに出会った、という。「霊覚者[24]」となる。すべての修業〔修行〕の済んだ直後に、五井は自分の背後には誕生以前より自分を守護指導していた「守護霊、守護神」が厳然と控えていたことをはっきり識る。以後、表面は昔の五井昌久のような姿に戻る。それからは尋ねてくる人が多くなり、人事相談や治病に忙しくなる［五井『天と地をつなぐ者』、139-144 頁、参照］。この当時は、東京・金町の五井の家には、「現世利益」を受けたくて、近所の人たちが通って来ていた。そして五井の「お浄め」[25]を受けて帰っていった。そうした初期の「現世利益」や「当てもの」目当てで来ていた人たちは、五井の逝去頃にはいなくなっていった。後年は、著書を通して五井の教えとつながる人が多くなった、という。［『白光』1981 年 3 月号、44-45 頁］。のちに五井昌久を信奉（鑽仰（さんぎょう））する人たちで会がつくられ、自前の機関誌を発行するようになるまでは、五井昌久も一時、〝拝みやさん〟と見られていた時期があった［『五井先生研究』第 157 号、2016 年 10 月 30 日、8 頁、参照］。

同 24（1949）年 6 月の神秘体験ののちも、生長の家の講師として人生相談・個人相談で五井は忙しかった。当時のことを五井の弟子・髙橋英雄は個人誌のなかで、「……生活に困った人たちが、うわさをきいて、助けを求めて五井先生のお宅をたずねたり、東京の葛飾区、江戸川区、墨田区そして〔千葉県〕市川市、船橋市などの「生長の家」の人々が、当時、〔生長の家〕地方講師であった五井先生を招いて、個人指導をいただいたりした。」［『神人』第 38 号、2006 年 10 月 1 日、3 頁］と記している。

同 24（1949）年の秋、五井はまだ生長の家の講師をしていた。千葉県市川市の生長の家信徒達に請われて、この頃五井は市川を訪れたようである［五井『神と人間』、145 頁、参照］。この頃の五井は、生長の家の地方講師をしながら、「お浄め」もしていた、という［『白光』1981 年 3 月号、40 頁、参照］。髙橋英雄の個人誌には、「〔五井〕先生は云われれば、どこへでも気軽に出むかれたらしい。」［『神人』第 38 号、2006 年 10 月 1 日、5 頁］とある。

故・島田重光（しげみつ）（白光真宏会・元理事、同会シニアメンバー）の言葉として『五井先生研究（髙橋英雄個人誌）』に記されている記録によれば、昭和 24（1949）年頃、当時、千葉県市川市でも、五井が訪れてよく泊まることがあった家が、島田家と他に 3、4 軒あった。五井といろんな話がしたい、という千葉県市川市の人たちと、五井は、くだけた雰囲気で団らんの時間をすごしていたようである。島田重光は五井よりも 7 歳年下で、島田が初め

て出会った当時（島田重光、25 歳の時）の五井の風貌は、まだ髭がなく、まん円い眼鏡をかけていた。ふだんは、気さくで、優しく接してくれたという。

後述の別資料では、島田重光が五井の写真を撮ったのは昭和 25（1950）年頃となっているが、島田の記述によると、昭和 24（1949）年〔春頃［『白光』1967 年 2 月号、45 頁］。五井の自伝では「結婚後間もない頃」［五井『天と地をつなぐ者』、155 頁］とあり、写真を撮ったのは昭和 25（1950）年を示している〕に、島田の家の前で何気なく島田重光がうつした五井の写真が〝円光〟になった。そこで島田重光は「これは失敗した」と思って、その〝円光〟の写真を五井に見せたところ、五井は「素晴らしい、いい写真だよ」と島田に言ったそうである。これが、のちに「霊光写真」と呼ばれて、〝お守り〟として会員らに持たれるようになる［『五井先生研究』第 159 号、2016 年 12 月 20 日、10 頁、『五井先生研究』第 161 号、2017 年 3 月 3 日、10-13 頁、参照］。

前出の島田重光が五井と再び会ったのが、昭和 24（1949）年 10 月で、五井は「想念停止」の行をおえていた。島田の記述によると、この頃の五井は、相談に来た人が何を思っているのか、わかっていたという。病気のこと、仕事のこと、結婚のことなどの相談にたいし、五井はすぐに助言を与えていた。この頃は、そうした相談に回答を与えてもらうことが来訪の動機だった人がほとんどだった。

島田の場合、昭和 23（1948）年、昭和 24（1949）年頃は、五井と 1 対 1 や 2、3 人で話をしたりする機会があって、「統一」という祈りのやり方を指導してもらうこともあった。生長の家の信徒だった島田は、五井の「私の前に坐ってお祈りしなさい」との言葉にうながされて、生長の家の祈祷法である「神想観」を唱えて祈った。その時の五井は、島田の「神想観」について、「それでいいんだ」と言ったそうである。ただ、当時の島田には、その「統一」のどこが良かったのかがわからなかったそうで、のちに白光真宏会会員として「聖ヶ丘統一会」で「統一」をするようになってから、「統一」の意味（＝すべて〝消えてゆく姿〟と認識したり、祈り言を通して神さまにつながればいい、ということ）がよくわかるようになったという［『五井先生研究』第 160 号、2017 年 1 月 20 日、11-13 頁、参照］。

昭和 24（1949）年、昭和 25（1950）年頃か、島田重光の回想記録によれば、島田が 26 歳頃、当時五井は生長の家の講師だったが、あまり生長の家の会合に出ていなかったそうである。その頃の五井は、生長の家の教えに、多少、批判的なことを言っていた時代だった。五井は、生長の家の信徒を前に、生長の家の教えで間違っていると思う所を指摘して、

かなり激しい口調も使っていた。

島田はその頃、生長の家の市川青年会を運営していたが、五井の教えを受けて生長の家をやっていることで、〔ほかの信徒のなかで〕感情的に面白くない、という兆しがみえてきたので、島田は生長の家の市川青年会から手を引いたという。

当時の島田から見た五井のすがたは、体が小さくて、チョコチョコと歩きながら、まわりから批判をうけても言いわけをしない、超然、悠然としていて、それが頼もしい感じだった、と述べている［『五井先生研究』第 159 号、2016 年 12 月 20 日、10-13 頁、参照］。

昭和 25（1950）年頃のことか、当時青年だった市川宣隆 (26) は、五井から「家が近いから、一緒に帰ろう」と誘われ、「集会〔個人宅でおこなわれた集会〕」からの帰り道、「松雲閣（千葉県市川市）」に間借りしていた五井の住まいまで、小一時間、お伴したという。「集会」からの帰り、ある夜半の路上では、五井は片足を上げ、破れた自分の革靴から親指を出して市川に見せたりするような茶目っ気があった。当時の五井はお金がないままで済ましていたため、ボロボロの背広は、肘部にも膝部にも大きい継ぎを当て、Y シャツも継ぎだらけだった。しかし、前出の市川宣隆がいうには、それでも五井はまったく屈託がなく、いつも上機嫌で、大手（おおで）を振って堂々と歩いていたそうである［『五井先生研究』第 152 号、2016 年 5 月 25 日、24-25 頁、参照］。

同 25（1950）年 7 月、家人を説き伏せた恋人・（岡村）美登里が、身のまわり品だけを手にさげて五井のもとに嫁いで来る。そして二人は、結婚［五井『天と地をつなぐ者』、154 頁］。五井の妻となる岡村美登里が、千葉県市川市新田にあった「松雲閣〔当時、この松雲閣で、五井を信奉する人たちが集会をもっていた〕」にやって来て、結婚となる。同 25（1950）年 7 月、その頃、杉並に住んでいた美登里が松雲閣での集会に来て、そこで参集者たちに美登里のことが紹介された。美登里は、夜 11 時頃、会が終わるまで、しずかに座って五井の話をきいていたそうである。そして、その日の夜、都合よく、貸物件の 2 階を借りることが出来た。権利金や敷金は、美登里が払えるだけの金額を持っていたため、その日からの五井夫妻の住居が得られることとなった。この 2 階の貸し間のある住居は、真間（まま）小学校〔千葉県市川市にある小学校〕の東側にあり、五井夫妻はそこに 2 年近く住んで、そののち、「松雲閣」の新田道場の離れに引っ越したとのこと。なお、島田重光の記述によれば、五井昌久は、結婚する頃から髭（ひげ）をのばすようになったそうである［『五井先生研究』第 161 号、2017 年 3 月 3 日、13-14 頁、参照］。

同 25（1950）年 7 月、五井夫妻は千葉県市川市・須和田の貸間を住まいとする［清水

『ある日の五井先生』、168 頁、参照］。「その頃、五井先生は結婚され、市川眞間外と俗にいわれる地域（眞間川と眞間の丘との間）の貸家の二階に住んでいらっしゃいました〔二階を二部屋、間借りしていた〕。」［高橋『五井先生を語る（一）』、11 頁、髙橋『五井せんせい』、193 頁、『白光』1964 年 5 月号、4 頁、参照］とあり、そこで相談事を受けたり「お浄め」や「個人面接指導」をしていたそうである。

五井の側近・高橋英雄の回顧録によれば、「市川の川外といわれた桜土手の貸間に新居をかまえられた。五井先生 33 才、美登里奥様 29 才であった。」［『白光』1980 年 2 月号、27 頁］と記されている。

五井は結婚する前までに、生長の家を離れていた。その頃、今でいう「統一」の指導をしていた、という［『白光』1980 年 12 月号、32 頁］。

上記の貸間で、五井夫妻は 1 年ほど暮らしたそうで、その当時のことを前述の高橋英雄によると、「ここで約一年間、午前中は個人指導、午后は乞われるままに、東京やら市内やら地方やらにもお出かけになり、お浄めご相談をお受けになっておられた。」［『白光』1980 年 2 月号、27 頁］とのことである。

五井が結婚して間もない頃〔昭和 25（1950）年 7 月以降に〕、五井は島田家に寄って、その帰り際、その家の長男・島田重光が門の前で五井の写真を撮った。そこには〝円光〟のみが写っていたものがあった。五井を信奉する人たちは、これを「霊光写真」といい、焼き増ししたものを〝お守り札〟のように肌身につけたりするようになった［五井『天と地をつなぐ者』、155-156 頁、髙橋『神のみ実在する』、28-29 頁］。五井の直弟子・髙橋英雄によれば、この〝霊光写真〟について「これは素晴らしいもので、大事なものだ」と指摘してくれた人がいたという。その人は五井昌久の修行仲間だったそうで、写真館も経営していた。その人はのちに一派をたて、宗教法人をつくり、「信徒から守護神様と崇められた方」とのこと［髙橋『神のみ実在する』、30 頁］。〔筆者が髙橋英雄氏に書簡（2018 年 3 月消印）上で確認したところ、その人とは、千葉県野田市に本部を置く宗教法人霊波之光の創始者・波瀬善雄（はせよしお）〈1915-1984〉である、とのことだった。波瀬は、生計のため写真館を営んでいたし、〝御守護神様〟と呼ばれて、信仰されている〕。

五井と波瀬善雄との関係については、機関誌での高橋英雄による回顧録においても、「現在、N 市〔野田市〕で教祖になっている H 師〔波瀬善雄〕は五井先生とは修行仲間だそうで、その H 師〔波瀬善雄〕が〔島田重光が撮った「霊光写真」について〕〝これは素晴しい写真だ〟と折紙をつけたので、島田さん〔島田重光〕もネガを捨てなくてよかった、

と思ったそうな。」［『白光』1980 年 2 月号、26-27 頁］と記している。

同 25（1950）年 9 月頃、五井夫妻は新婚旅行をかねて静岡県へ行った。その頃の五井は「私を想いなさい、困った時は私の名前を呼びなさい」と指導していた、という［『白光』1981 年 7 月号、31-32 頁、参照］。同年の頃は「市川〔千葉県市川市〕にこういう素晴しいよく当る先生がおる」というロコミで五井の所に人がやって来ていた［『白光』1981 年 5 月号、41 頁、参照］。また、五井夫妻は結婚してから、どのくらいの期間そうしたのか不明だが、月に 1 回、当時、東京・亀有に五井の兄夫妻と一緒に住んでいた母・菊（きく）のところへ五井夫妻が千葉県市川市八幡（やわた）から訪問し、いつもなにがしかの金品〔お小遣い〕を置いていったのだそうである［髙橋『五井せんせい』、32 頁、髙橋『五井先生を語る（二）』、5 頁、参照］。

側近・髙橋英雄が五井から聞いた話として、昭和 25（1950）年ぐらいに、五井は当時の日立製作所の重役から、労働組合の大ストライキの収拾をはかるための指導をもとめられたことがあったという。そこに居た日立製作所の重役たちは、五井が以前に同製作所・亀有工場の社員だったことは誰も知らなかったそうである。そこで五井は、組合のストライキにたいする相談にのる前に、重役たちに次のように釘をさしたという。それは「日立はこれから将来にわたって、決して武器を作らない。平和産業に徹する」という〝約束〟で、それを経営者側に約束してもらったうえで相談にのり、解決策を授けたのだそうである〔実際、昭和 25（1950）年の大争議は収まり、組合側は「成果」の 1 つに、「……平和産業を守る決意を深めた」と記している。［『日本労働年鑑　第 24 集　1952 年版』、参照］〕。しかしながら、時を経て、現在の日立製作所は有力な軍需産業の企業に戻っている［髙橋『神の満ちる星の話』、152-154 頁、参照］。

◆「遍歴期」の要点

五井は、「宗教」への傾斜に拍車がかかる。岡田茂吉の弟子から「掌かざし療法」を学び、治病行為を行う。谷口雅春の本を読んで感銘し、生長の家の教えの普及に熱心に取り組んだ。より強い「神秘力」を求めて「千鳥会」に入会し、「交霊会」に盛んに出席した。

なお、五井は、戦後まもなくから、すでに日本心霊科学協会の「物理現象実験会」にも参加していた。彼の関心は、「心霊」探求の色が濃くなり、千鳥会の「交霊会」への参加を契機に「霊現象」が五井自身に発現した、とされる。数ヵ月の「霊修行」を経て、昭和 24（1949）年 6 月、五井は、「神我一体」という「覚り」〔「神秘体験」〕を得た、という。彼

自身の「霊体験」を通して、この時には、五井の「守護霊、守護神への感謝」という教えが出来上がっていた。昭和 24（1949）年の「覚り」以降、五井が次々と教団（団体）に入信（入会）するという「遍歴」は止まることになった。五井は、岡田の「浄霊」を一部継承しながらも五井独自のやり方で「お浄め」を行った。また、五井は、谷口の「神想観」を簡略化したような独自の他力的観法＝「統一」行を生み出し、彼の信奉者たちに指導しはじめた。この頃は、岡田につながる「病気治し」や萩原につながる「当てもの」、といった「神秘力」が前面にあり、それを目当てに近所の人たちが集まっていた時期である。

1-3　五井の信奉者たちが団体をつくる
＝「草創期」（1951〈昭和 26〉年頃～）

昭和 26（1951）年 5 月、五井はのちに自らの側近として最晩年まで仕えることになる髙橋英雄と千葉県市川駅近くのある家で初めて会う。髙橋はその後、機関誌『白光』の編集を任されることになる［髙橋『五井せんせい』、11 頁］。髙橋英雄が五井昌久に初めて出会ったのは、18 歳のときという。髙橋は白光真宏会退職後に発行している個人誌で、「私にとって、この人生の最大にして最高、そして最善の善因縁は十八才の時、五井先生にお目にかかれたということである。」［『五井先生研究』第 164 号、2017 年 6 月 10 日、24 頁］と記している。髙橋が五井と出会ったことは、その後の髙橋の人生を決定づけるものとなった。

髙橋英雄の回顧録によれば、「昭和 26 年 9 月、貸間から松雲閣、横関実さん（前〔初代〕理事長）のはなれに五井先生は移転なさった。」［『白光』1980 年 2 月号、27 頁］という。

同 26（1951）年 11 月 1 日、五井の信者たちの願いを承諾する形で、千葉県市川市に「五井先生讃仰会 (27) 」が発足した［五井『神と人間』、149 頁］。この会は「五井先生に救われた人々が寄り集まって、五井先生に経済的ご心配をおかけしなくてすむように、また助けを求めてくる人にも負担にならないように、という心で会員制度が発生したもの」［髙橋『五井先生の辞書』、57 頁］という。当時作られた「規約 (28) 」の中に、「一、本会会員は、特別にお浄めを受けたる場合、分に応じて会費を納むるものとす。」［髙橋『五井先生の辞書』、58 頁］の条文が見られ、いくらかの金銭を得る仕組みが会員有志らによって作られた。

髙橋英雄の回顧録によれば、「会費を払うようになったのは、〔昭和〕27 年 1 月からであった。」［『白光』1980 年 2 月号、27 頁］という。

五井夫妻は、昭和 28（1953）年の春頃の時点で、同会の理事・横関実[29]の家（松雲閣〔在所：市川真間〕［髙橋『五井せんせい』、179 頁］）に 1 年半近く同居していた（五井先生讃仰会が出来る少し前、昭和 26〈1951〉年秋に松雲閣への移転〔五井夫妻の引っ越し〕が定まった、という）［五井『神と人間』、149-150 頁］。この「松雲閣」が同会最初の本部道場「新田道場」（市川市新田 3 丁目）となる。本道場において、五井による「お浄め〔五井が柏手、等で浄める〕」と「個人相談」が昭和 43（1968）年 10 月まで行われた。同 43（1968）年 11 月からは、斉藤秀雄[30]・村田正雄[31]・横関実の 3 人が五井の名代として同道場での「お浄め」「個人相談」を担当した。同道場は、昭和 48（1973）年に本部が「聖ヶ丘道場」に移った〔本部の事務業務は昭和 47〈1972〉年 11 月から「聖ヶ丘」に移行している〕のを機に閉鎖された［清水『ある日の五井先生』、3 頁・31 頁・139 頁、参照］。なお、「かつて先生〔五井のこと〕は、一日に六、七百人の人々のお浄めとご相談に応じておられた。」［高橋『五井先生の辞書』、121 頁］とのことである。ただし、昭和 28（1953）年春頃は、「現在のところ毎日百人内外の人に会って、一々祈ったり指導して居られる」「事業には繁栄の方針を与え、家庭には光明生活、結婚には幸福の相手を各人に適業を、病める人には健康をという風に、転禍為福の例は枚挙に遑ない」［五井『神と人間』、151 頁・153 頁］と横関は記している。また同会について「五井先生讃仰会は、五井先生の御指導により、之等を解決し、病無く、なやみない、幸福一元の生活を、吾等日常生活に実現させる研究団体である。」［五井『神と人間』、158-159 頁］と横関は説明した。（この文言は、のちに同会が「宗教法人白光真宏会」と改称すると、「白光真宏会は**五井先生を中心として**祈りによる**世界平和の運動**を推進してゐる団体であり、個人的には、**五井先生の御指導**に依り、病なく、なやみない**幸福一元の生活**を、どなたの日常生活にも実現します様にと、熱望しつゝある愛行実行の研究団体であります」［『白光』1956 年 11 月号、表 3 頁、ゴシック箇所は原文通り］と機関誌にて使用されている。）

五井は結婚して家庭を持ってからも「相談に来た人がお礼にと感謝箱においていったお金を、困った人がくると、惜し気もなく持たせてやってしまった」［高橋『新・師に倣う』、88 頁］という。そうした事は、初期の「個人相談」においてはしばしばあったそうである［白光真宏会の古参の会員、関係者の話］。

のちに（「昭和 29 年 9 月以降」［『白光』1980 年 3 月号、36 頁］）、五井夫妻は「住居を市川市新田から、〔市川市〕八幡に移された」「先生も奥さまも、この家が大変気に入られた。土地は借地のままであるが、家を買い、きれいに磨き修理したら、見違えるような

家になった。」［高橋『五井先生の辞書』、16-17 頁］というように、以後、ここが五井夫妻の「自宅」となった［関係者（五井昌久研究会・T 氏）の話］。

昭和 27（1952）年か昭和 28（1953）年頃、五井は紅卍字会に関心を持った、という［五井『自分も光る　人類も光る』、6 頁、参照］。

昭和 28（1953）年 5 月、五井の最初の著作『神と人間』が五井先生讃仰会より発行される［五井『神と人間』、奥付頁］。同書は、昭和 27（1952）年の暮れから執筆、翌昭和 28（1953）年 1 月には脱稿していたといわれ、一気呵成に書き上げられたそうである［『五井先生研究』2015 年 2 月号、15 頁、参照］。本書『神と人間』の原稿が書き上げられたのは、同 28（1953）年の 1 月頃、とのこと［髙橋『五井せんせい』、177-178 頁］。この頃、新田道場では、一人一人呼ばれて、約 10 分間くらい、「個人指導」と「お浄め」が行われていた、という［『白光』1981 年 5 月号、43 頁］。五井は当時、一対一の対面指導に力を注いでいた。千葉の新田道場まで「お浄め」に来た人には、疑問があれば五井がその場で答え、遠方（地方）に住んでいて来られない人には手紙で指導することもあり、そうした場合には幹部の横関実が代筆で、まめに五井の答えを送っていたそうである。のちに、「お浄め」の場所が新田道場から聖ヶ丘道場の昱修庵に移ってからは、側近の髙橋英雄が五井の指導を代筆して会員に伝えていた［髙橋『五井せんせい』、179-180 頁］。

昭和 28（1953）年に五井の『神と人間』が出版されたことが縁で、安岡正篤（まさひろ）（1898-1983）の門下生が五井のもとに訪れた。これにより、その後、安岡と五井との間に自然と親交が生まれたという［『五井先生研究』第 140 号、2015 年 3 月 1 日、16 頁、参照］。

昭和 29（1954）年 1 月 2 日（1 月 3 日か［五井『想いが世界を創っている』、115 頁］）、五井の父・満二郎〔病弱だった五井の父親は 40 歳にして「隠居」していた。五井の父は、晩年、「〆夜明観音（よあけかんのん）」を熱心に拝んでいた、という〕が死去［髙橋『新・師に倣う』、85 頁、髙橋『五井先生の辞書』、53 頁・65 頁、参照］。五井昌久は、〝信者第一号〟は彼の父親だといい、息子の昌久が「この観音さま（〆夜明観音像）をよく拝んでおきなさい」と言ったら、彼の父は素直に一生懸命に、その観音像を拝んでいた、という。五井は、父親のことを「気の弱い人だった」とも講話の中で述べている［髙橋『五井せんせい』、41 頁、髙橋『五井先生を語る（二）』、7-8 頁、五井『想いが世界を創っている』、114 頁、参照］。

この年、昭和 29（1954）年、現在の「世界平和の祈り」の「原型」ともいえる言葉が五井によって語られ、信者である斉藤秀雄がこれを詩「我家の祈り[32]」とした。その

詩は、同年 10 月 15 日発行の『白光』創刊号に掲載された［『白光』1954 年 11 月号・創刊号、3 頁、『白光』1959 年 10 月号、18-19 頁］。なお、一般社団法人五井昌久研究会のサイトでは「（昭和 29 年）9 月 16 日　世界平和の祈り公表される。」［http://goisensei.com/study/index.shtml　2018 年 9 月 6 日最終閲覧］とあり、側近・高橋の記述では「世界平和の祈りが人々の前に、五井先生によって提唱されたのは昭和二十九年十一月、研究会での席でした。」［『五井先生研究』第 99 号、2011 年 11 月 1 日、4 頁］とある。前言は日にちがずれているものの、五井が「定型」の祈りの言葉として「公表」したのは、昭和 29（1954）年中であったようである。五井が「祈り」の言葉を発表したとき、その「祈り」が詩らしい言葉ではなくなぜこんな〝ふだんの言葉〟であるのかと疑問を口にした人がいた。彼（五井）はその問いにたいして、「……あたり前の言葉を使って、簡単で誰にもすぐ意味がわかる言葉、誰にでもすぐ唱えられる言葉で発表したところに、神さまのみ心があるんですよ」と答えたという［『五井先生研究』第 109 号、2012 年 9 月 1 日、16 頁、参照］。

五井の側近・髙橋英雄は、昭和 29（1954）年から『白光』誌の編集を担当するようになったため、五井昌久と話す機会にとてもめぐまれた。髙橋は当時を振り返って、「……新田道場に毎朝〔「五井先生」と〕ご一緒にゆくようになって、私がよくお聞きしたことはこうだった。」「壇上でのお説法ではなく、道場への往き帰（え）りのふだんの話である。」［『神人』第 38 号、2006 年 10 月 1 日、7 頁］などと述べている。五井と髙橋は、通勤の行き帰りのとき一対一で対話し、髙橋は五井のさまざまな話を聴くことが出来たのだった。

◆「草創期」の要点

五井が「教団」を興そうとしたわけではなかったが、信者たちが五井の経済生活のことも考えて「会」をつくった、という［白光真宏会関係者の話］。五井は、もはや、他教団の教祖らからの「影響関係」を離れて、「独立」した形となった。「個人指導」「お浄め」は五井独自のやり方だが、その背景には、大衆の日々の苦しい「現実」の問題に対処できなかった生長の家時代の五井の反省がある。昭和 24（1949）年当時、生長の家に「現実」を救う力がないと見たからこそ、五井は「神霊現象」を行うという「千鳥会」に入った。その後、五井を信奉する当時の人たちにたいしては、千鳥会時代から獲得していたという「霊能」「神秘力」を発揮して「個人相談」を行ったらしい。「お浄め」には、世界救世

教（岡田茂吉の弟子 Y 氏のところ）で習得した「浄霊」も一部使いながら、「（神の）光によるお浄め」を行っていたという。また、「守護霊さん、守護神さん、ありがとうございます」という「祈り」の言葉は、「心霊思想」の影響下にあって生まれたもの、といえる。世界救世教、生長の家、千鳥会／のちに真の道、等でも「守護霊、守護神」の用語は使われるが、そのルーツは当時の国内外の「心霊関係」書籍に依っている。五井も同様に、内外の「心霊関係」書籍の「影響」を受けている。

1-4　宗教法人化、機関誌発行

＝「成立期」（1955〈昭和 30〉年頃～）

昭和 30（1955）年 1 月、『白光』誌に前年 12 月 15 日付の公告「宗教法人五井先生讃仰会設立公告 (33) 」が掲載。そこに同会の「教義」が初めて記載された［『白光』1955 年 1 月号、26 頁］。同年 1 月に刊行の『白光』第 3 号は、「宗教誌としての創刊号」と位置づけられる［『白光』1955 年 1 月号、1 頁］。

同 30（1955）年、機関誌『白光』1 月号から、「天と地をつなぐ者」という題名のもと、6 回にわたり、五井の筆による自叙伝が連載された［高橋『神のみ実在する』、177 頁］。

同 30（1955）年 2 月 23 日、「五井先生讃仰会」が宗教法人として設立認可［清水『ある日の五井先生』、168 頁、参照］。「代表役員（理事長）横関実、責任役員（理事）五井美登里、金子美憙、坂井義秀 (34) 。」［『白光』1980 年 2 月号、27 頁］。また、前に記した「宗教法人五井先生讃仰会設立公告」の「附則」の欄にも、「代表役員　横関実、責任役員　金子美憙・坂井義秀・五井みどり」の名が確認出来る［『白光』1955 年 1 月号、28 頁、参照］。

同 30（1955）年 6 月、五井の自叙伝『天と地をつなぐ者』が宗教法人五井先生讃仰会（市川市新田町）から発行される［五井『天と地をつなぐ者』、奥付頁］。ちなみに、「初期には、全くといっていいほど会にはお金がなかったので、本を出すのでも容易ではなかった。」［高橋『新・師に倣う』、96 頁］そうである。

同 30（1955）年、機関誌『白光』7 月号から、五井による創作「阿難（あなん）」の連載が開始された［『五井先生研究』第 168 号、2017 年 11 月 11 日、6 頁］。

昭和 31（1956）年 5 月 22 日午後 7 時過ぎ、五井は、両肺の結核・腸結核・咽頭結核で明日をも知れぬ状態で寝ていた『白光』の編集者・高橋英雄を見舞う。「まず喉に手を当てて祈って下さった。それまでひどかった喉の痛みが、先生の手がそこから離れたとたん、

消えてしまっていた。」［高橋『五井先生の辞書』、31 頁］と高橋は述懐し、「命を救われた」という。高橋は同 31（1956）年夏（9 月の初め［高橋『五井先生を語る（一）』、25 頁］）には、2 キロほど離れた（歩いて 10 分ぐらいかかる［高橋『五井先生を語る（一）』、25 頁］）五井の家まで歩いて挨拶に行けるようになった。高橋の療養中、五井が『白光』誌の「後記（あとがき）」を高橋に代わって書いていた［高橋『五井先生の辞書』、32 頁、参照］。なお、「三つの結核が四年後、完治されたのである」と高橋は記している［『神人』第 38 号、2006 年 10 月 1 日、6 頁、参照］。

同 31（1956）年の上記の 5 月 22 日、高橋英雄は五井と初めて会ってから 6 年後〔高橋が 24 歳の時〕、病床にて五井昌久から「（高橋くん、）私にすべてをまかせなさい」と言われた。そして、その場で、高橋は五井に「いのちをお任せ出来た」という。五井に〝（いのちを）よろしくお願いします〟と心のなかで〝おまかせ〟したおかげで五井によって命を助けられた、と高橋は信じている。高橋は、五井の言葉にたいして、すぐに〝ハイまかせます〟と思った。三つの結核でのどをやられていて、声が出なかったから、声で答えるのではなく、こころでそう答えたそうである［『五井先生研究』第 161 号、2017 年 3 月 3 日、4-5 頁、『五井先生研究』第 164 号、2017 年 6 月 10 日、24 頁・28 頁、参照］。

五井は、会員たちに「私を呼びなさい」と言ったという。「苦しい時、辛い時、悩んでいる時、私を呼びなさい、私があなたの重荷を軽くしてあげる」と。そこで、会員たちは、五井が提唱する『世界平和の祈り』を唱えつつ、いっぽうで「五井先生！」と呼んでいた〔唱えていた〕［『五井先生研究』第 161 号、2017 年 3 月 3 日、4 頁、参照］。また、五井が会員に、いつそう言ったのかは不明だが、古くから五井と親しいある会員には、せっぱつまった時「五井先生」まで呼ばずとも「五……」だけでも助けにいってあげる、と五井昌久は言っていた［『五井先生研究』第 158 号、2016 年 12 月 8 日、26-27 頁］。

五井昌久の直門（じきもん）、直弟子である高橋英雄は、自らが発行する個人誌の中で以下のように記している。

> 五井先生ご自身が『私をよびなさい』とおっしゃっているのだから、遠慮なく呼ぶことです。
>
> 五井先生が助けて下さいます。五井先生が光の中に入る手助けをしてくれます。五井先生自身、光なのですが、その光の中に入る手助けを、五井先生がしてくれるのです。

［『五井先生研究』第 157 号、2016 年 10 月 30 日、6 頁］。

さらに、髙橋英雄は、くりかえして、次のような五井の同様の言葉を紹介し、五井昌久を信奉する人たちに〝称名（唱名）〟をすすめている。

> 五井先生も生存中「私をよびなさい。私ならよびやすいでしょ」と五井先生を呼ぶことを奨励されていた。五井先生みずからそうおっしゃったのであるから、私たち五井先生の光の流れの中に生きる者は、何があってもなくても、五井先生を呼ぶことである。何故なら〔五井昌久いわく〕「その方がトクだよ」ということであるからだ。
> ［『五井先生研究』第 155 号、2016 年 8 月 30 日、10 頁］。

これは、五井昌久を篤く信仰する人の言葉であり、「五井先生！」との唱名は、『世界平和の祈り』等と共に、いまも白光真宏会会員における一つの信仰のあり方として存在している。

そして、前出の髙橋英雄は、同 31（1956）年 6 月初めに、病床で「山鳩」という題の詩を書き、この髙橋の詩を読んだ五井は「友よ」の題で髙橋に向けて詩を書いた。その詩「友よ」の一部分を記すと、「……そして君は　私の中に神を見出し　すべてを私に捧げてくれた　私は君の魂を受けとめ　君を神の座に高め上げようと祈った　……友よ　病みながら生命（いのち）すこやけき友よ　……今病床から立ち上がるところなのだ」というもので、この五井の詩「友よ」は機関誌『白光』1956（昭和 31）年 7 月号に掲載された［『五井先生研究』第 161 号、2017 年 3 月 3 日、5-8 頁］。

同 31（1956）年 5 月 24 日、東京・神田の区民会館で五井の法話会が初めて開催。

また、同 31（1956）年 6 月 17 日、信徒活動として信徒の集りの「白光真行会」が結成された。［『白光』1981 年 6 月号、27 頁、等、参照］。髙橋英雄の回顧録によると「（会長）斎藤秀雄、（常任理事）佐久間筆八、伊藤顕、村田正雄、中川正二の四名。幹事六十名が選ばれた。この時、幹事心得が発表された。」［『白光』1980 年 2 月号、27 頁］とのこと。つまり、同 31（1956）年 6 月、五井は任命した幹事たちに、幹事の「心得」(35) を伝えたという［『白光』1978 年 12 月号、29-32 頁、参照］。この五井が書いた「心得」は、初めは「指導要項」と呼ばれ、「幹事心得」あるいは「講師心得」と呼ばれていたこともあった［瀬木『人が神に出会う時』、59-60 頁、参照］。

同 31（1956）年 6 月、五井は機関誌『白光』「巻頭言」で、〝〔他の〕星（の世界）と人間・「地球界」との関係〟や〝空飛ぶ円盤〟について、少しばかり記述している。その誌面において、人間は最初に〔他の〕星の世界から〔地球に〕天くだって来たという説を挙げ、それに五井自身も同意する、などとも彼は書いた［『白光』1956 年 6 月号、1 頁、『五井先生研究』第 85 号、2010 年 9 月 1 日、9-16 頁、参照］。

同 31（1956）年 10 月、宗教法人白光真宏会設立。〔代表役員の〕横関実が、宗教法人白光真宏会初代理事長をつとめることになった。

昭和 32（1957）年頃、五井は小学校（東京都杉並区・三谷（さんや）小学校）の校歌を作詞した［高橋『五井先生を語る（一）』、78-81 頁、参照］。同 32（1957）年 9 月 16 日［『五井先生研究』第 85 号、2010 年 9 月 1 日、17 頁］、五井の母・きくが死去。行年 75 歳。五井は、「この世で一番の恩人は母親である」と述べていたという［髙橋『五井せんせい』、43-44 頁］。五井の母・きくは、同 32（1957）年 9 月 16 日、夕食をとったあと、パタッと倒れ、そのまま亡くなったそうである［髙橋『五井先生を語る（二）』、21 頁］。五井昌久は自分の母親について、母親のほうは「強い人」「気のはっきりした人」「正しい人」「勇気のある人」などと講話の中で述べている［五井『想いが世界を創っている』、115-118 頁、参照］。

昭和 32（1957）年秋頃、それまでの原水爆実験など、大戦争に発展しかねない不穏な情勢のなか、白光真宏会で「世界平和の祈り」のパンフレットを発行、無料配布。あらゆる階層の人々に共に祈ってもらうために作成されたようである［『白光』1957 年 10 月号、「あとがき」の頁、表 3 頁、参照］。「世界平和の祈り」のパンフレットについては、機関誌上にて「無料配布パンフレット幾冊でもお分けします。」［『白光』1957 年 11 月号、35 頁］と記され、希望者は白光真宏会（千葉県市川市新田 3 丁目）に申し込むよう案内している。

同 32（1957）年 10 月 24 日、五井昌久は、植芝盛平[36]と東京・神田の講演会場（神田神保町区民会館［『五井先生研究』第 76 号、2009 年 12 月 1 日、5 頁］〔「神保町区民館」［五井『素直な心』、197 頁、参照］〕）で初めて会う。五井はそれ（初めての面会）以前から植芝に一度会いたい、と思っていたという。五井がそうおもったきっかけは、『小説新潮』（新潮社）の小説の中で植芝のことが書かれていて、これを読んで植芝に会いたい気持ちになったそうである。このときの植芝との面談のあと、五井は植芝のことを「神の化身」と言っている［五井『日本の心』、140-141 頁］。側近・高橋英雄の記述によれば、

「五井先生がご自分みずから『会いたい』と思われた人物は、あとにも先にも合気道開祖植芝盛平先生ただ一人である。」[『五井先生研究』2009 年 12 月号、1 頁］とのことである。この神田での面会のときには、植芝と五井は昼食をともにとりながら 2 時間ほど歓談。植芝も五井に「私〔植芝〕は先生〔五井のこと〕と会う日を待っていたのです」と語っていたという。以来、二人は肝胆(かんたん)相照らす仲となった［髙橋『五井せんせい』、83 頁］。のちに、植芝は「五井先生は世にもまれなる聖者です」と言って、五井を賛美したという［髙橋『五井せんせい』、92 頁、『五井先生研究』第 76 号、2009 年 12 月 1 日、1-16 頁、参照］。〔筆者が髙橋英雄氏に書簡（2018 年 3 月消印）にて確認したところ、植芝盛平は白光真宏会に「会費を払われたから形は入会」した、ということである〕。

側近・髙橋英雄の近著によれば、同 32（1957）年暮れ頃から、「宇宙人」との交流がはかられ、昭和 33（1958）年 1 月以来、10 名ぐらいのグループで週 1 回、〝暁の祈り〟という「宇宙人」との交流を主目的とする取り組みが行われるようになった。この〝暁の祈り〟は、五井の指導のもと、少数のメンバーが『世界平和の祈り』のなか、心の波長をととのえる「統一行」であった、ということである［髙橋『神のみ実在する』、236 頁、参照］。

昭和 33（1958）年 3 月、機関誌『白光』上に、「世界平和の祈り」の英訳文が初めて掲載された［『白光』1958 年 3 月号、32 頁］。

同 33（1958）年春、東京・飯田橋での五井の法話会に植芝盛平がおとずれる［『五井先生研究』第 76 号、2009 年 12 月 1 日、8 頁、参照］。

同 33（1958）年 6 月 2 日現在の「白光真宏会事務局機構及事務分担表」のなかに、「心霊研究部」が設置されている[37]。心霊研究部部長は、村田正雄、とある［『白光』1958 年 7 月号、42-44 頁、参照］。

同 33（1958）年 8 月、松雲閣で「統一会」が始まる。同所での「統一会」は昭和 36（1961）年まで行われた。また、同 33（1958）年、千葉県の市川・国府台地区にのちに「聖ヶ丘道場」が建つことになる土地を発見し、このとき、その地を「聖ヶ丘」と命名した。なお、「聖ヶ丘道場」の土地は、会員からの「奉謝金〔会員が五井に感謝して捧げたお金〕」を五井がプールしておいて購入した。五井は、「借金を絶対してはいけない」との母親〔五井の母・きく〕の「教え」を守り、会の運営においても「手持ち資金で出来る範囲内で」行った、という［高橋『五井先生の辞書』、128 頁、参照］。

昭和 34（1959）年、同 35（1960）年頃〔一般社団法人五井昌久研究会サイトでは昭和 32

〈1957〉年頃から以後継続的に配布したとある〕、「世界平和の祈りを祈りましょう、と日本人に訴える祈りのリーフレットが作製された。文章を書いて下さったのは五井先生。このリーフレットは私たちの手によって、日本全国に配られた。」[『五井先生研究』第 79 号、2010 年 3 月 1 日、20 頁］と五井の側近・高橋英雄は記している。

髙橋英雄の近刊によれば、五井提唱の『世界平和の祈り』を広く知らせるために、昭和 35（1960）年頃に、軽量・葉書大で 2 ページからなる、通称「祈りのリーフレット」が作られた。「日本人よ　今こそ起て」と題する五井による詩、趣旨を記した文、五井の提案する祈りの言葉＝『世界平和の祈り』が書かれたものである。「日本人よ　今こそ起て」という五井の詩の中には、「……／何者だ今頃になつて武器を持とうと言うのは／剣をもつて防ぎ得るのは一時のこと／永遠の平和は剣を持つ手に来ることはない／日本の天命は大和の精神（こころ）を海外に示すにあるのだ／日本は今こそ世界平和の祈りによつてのみ起ち得る／……」［五井『詩集　いのり』、56-57 頁］という言葉がみられる。この頃〔昭和 30 年代半ば頃〕の五井昌久は、日本の武備を否定する平和主義の態度を示していたといえよう。

このリーフレットは、白光真宏会の会員たちによって大量に配布された。駅前で、繁華街で、原水爆禁止の「平和会議」があるとその会場前で、また一軒一軒のポストに、と全国で配られた。「祈りのリーフレット」は、合計 2 千万部以上が日本じゅうに配られ、以降、「世界人類が平和でありますように」の言葉が世界各地に流布されていった、とされる［髙橋『神のみ実在する』、101-112 頁、参照］。

昭和 34（1959）年 10 月 12 日、心霊研究家・小田秀人が、五井昌久に会うため白光真宏会の本部道場（千葉県市川市）に訪ねてきたという。小田は植芝盛平らにすすめられたので会いたくなって来たとのことだった。小田は当時、紅卍字会の会員だった。話の流れで、五井も事務上の手続き〔紅卍字会への「入会」〕をして、紅卍字会から壇訓〔フーチによる「神示」〕をもらうことになった[38]。後日（同年 10 月 30 日）、小田たちが壇訓を持って白光真宏会の道場に来た。五井が紅卍字会からもらった名前は、「昱修」という字で、「宇宙神の光りを身に修めた者」という意味だそうである。その後も、壇訓をもらい、同年 11 月 26 日の壇訓では、世界紅卍字日本総院籌備副処長に呉清源〔1914-2014〕と五井昌久を任命する内容の「神示」がもたらされたという［『白光』1960 年 1 月号、18-20 頁、参照］。

昭和 35（1960）年頃、「五井先生を先頭として、紅卍字会〔現在（2018〈平成 30〉年 8 月現在）の日本紅卍字会は、道院の思想を反映させる種々の慈善活動を行っているようで

ある［日本紅卍字会東京総院サイト http://www.jprss.org/　2018 年 9 月 6 日最終閲覧、参照］〕の活動に参加した。」［『五井先生研究』2011 年 11 月号、16 頁］という。実際、同 35（1960）年 2 月 10 日、東洋大学講堂における五井の講話の中で、五井みずからを先頭にして今後、白光真宏会会員たちを紅卍字会に入会させたい、というような話をしている［五井『自分も光る　人類も光る』、27-41 頁、参照］。

同 35（1960）年 6 月頃から、白光真宏会でも、植芝盛平はじめ植芝吉祥丸（1921-1999）ほか高弟から、本格的に合気道の指導をしてもらうようになった［『白光』1960 年 8 月号、2-3 頁、参照］。

同 35（1960）年 11 月 12 日、市川新田にあった当時の本部道場に、スイス・ジュネーブ大学のジャン・エルベール教授〔1897-1980、邦訳書『神道―日本の源泉―』（神社本庁、1970 年）がある〕が、中央大学・中西旭教授〔1905-2005〕の案内で、五井を訪ねて来た。当時の神社本庁事務総長〔東京都江東区の富岡八幡宮第 18 代宮司・富岡盛彦（1892-1974）〕と中西教授のすすめで、エルベール教授と五井の対談がおこなわれた。エルベール教授の来日の目的は、「日本の生きた宗教、生きた信仰を研究するため」、「『古事記』の研究をするため」、とのことだったらしい。その目的に沿ってエルベール教授の質問、五井の応答がなされた。エルベール教授と五井との対話の中で、インドの聖者（ヨーガ行者）の名が出てくる。五井は、ある程度、ヨーガの聖者たちのことを知っていた。ヨーガを研究し実践指導した三浦関造（せきぞう）（1883-1960）〔三浦の刊行物からか。白光真宏会会員からの話を情報源としてか〕をとおして、五井は聖者たちの知識を得ていたようである［髙橋『神のみ実在する』、54-55 頁、髙橋『神の満ちる星の話』、30-39 頁、等、参照］。

同 35（1960）年 12 月 18 日午後、当時「統一指導」会場の一つだった東京割烹女学校において、大阪大学の北村助教授（音響学専門）が、五井昌久の柏手の音を測定した。実験の結果、「統一」中に打ち鳴らす五井の柏手の音の強さのレベルは、普通の人の柏手の音の強さに比べて、格段に（実験結果では 23 デシベル）強い、ということが判ったという。なお、翌昭和 36（1961）年 4 月 26 日午後 7 時半から 8 時、毎日放送のラジオ番組『音の科学』第 35 回「信仰の世界」で、北村氏は五井の柏手の音の強さが非常に強いことを語ったそうである［髙橋『神のみ実在する』、65-69 頁、参照］。

昭和 36（1961）年 1 月 19 日、五井が講話と統一実修をおこなう東京・飯田橋の講演会場に、ジュネーブ大・エルベール教授の夫人が日本大学の教授らとともに来て、参加。エルベール夫人は、五井の「法話」を聞き、「統一実修〔ある種の「瞑想」のようなもので、

五井の柏手が鳴るなか坐って瞑目し、心の中で「祈り」をとなえているのが基本〕」も体験した。そして会が終わった後、別室にて、五井は、エルベール夫人らと約 1 時間半にわたって会合をもった。「統一実修」で柏手を受けた感想などについて語り合ったようである。［髙橋『神のみ実在する』、56-58 頁、髙橋『神の満ちる星の話』、35 頁、等、参照］。

同 36（1961）年 7 月号の機関誌にて、『英文　世界平和の祈り』〔小冊子〕が出来た、と告知されている［『白光』1961 年 7 月号、23 頁、参照］。『英文世界平和の祈りのパンフレット』の英訳をおこなったのは、水上鉄次郎（みなかみてつじろう）〔英国の労働問題を研究、G.D.H.コール『労働組合入門〈上・下〉』（有斐閣、1958 年）を翻訳した〕［『白光』1961 年 7 月号、63 頁、参照］。翌月の機関誌には、「英訳　世界平和の祈り〈日本文附〉　お知りあいの方にさし上げてください。　〈無料配布〉送料　一冊　十円」［『白光』1961 年 8 月号、43 頁］とある。その判型は、「A6 本文 20 頁」［『白光』1961 年 10 月号、11 頁］であった。

白光真宏会では、同 36（1961）年頃にも、「世界平和を祈る会（住所：千葉県市川市新田）」の名で、世界平和の祈りのリーフレットを全国の各家庭のポストに配布する運動を展開している［『白光』1961 年 10 月号、51 頁、参照］。

同 36（1961）年 12 月の機関誌によれば、すでに「祈りのリーフレット」が各地において、家庭のポストや街頭で計 10 万枚配布された、という［『白光』1961 年 12 月号、表 3 頁、参照］。

◆「成立期」の要点

五井先生讃仰会が宗教法人化され、その後宗教法人白光真宏会と改称。宗教法人化にあたり、五井は「教義」を作成した。その「教義」の内容には、世界救世教の「浄化理論」や生長の家の「光明思想」、「心霊関係」の「守護霊」、千鳥会〔のちに、真の道と改称〕や生長の家の「祈り」よりも単純化した「世界平和の祈り」など、レベルは異なるがいくらかの「影響」をうかがうことが出来る。同会は、機関誌『白光』を発刊した。この機関誌に発表した記事をまとめて書籍化し普及活動を推進するやり方は、生長の家の書籍による普及活動を真似ている面がありそうである。五井の「統一」は、先述のように、谷口の「神想観」を簡略化したようなもので、より他力的なかたちである。いくらかは谷口の「影響」がうかがえる。

また、五井は、植芝盛平（元「大本」信者）と初めて会い、「神秘体験」を経験した者同士、互いに黙っていてもわかりあえた、という。五井は植芝を「神の化身」と呼んで、

尊敬の意を示した。

1-5　「宇宙子科学」はじまる
＝「展開期」（1962〈昭和 37〉年頃～）

昭和 37（1962）年 1 月の機関誌には、「祈りのリーフレット」配りを推進するためだろう、「下記〔世界平和を祈る会〕にお申込み下されば、何枚でもお送りします。送料当方負担」[『白光』1962 年 1 月号、18 頁］と書かれてある。同 37（1962）年 5 月 17 日、東京の銀座一帯〔銀座・築地・新橋方面〕に祈りのチラシ〔祈りのリーフレット〕が 20 万枚、上空〔ヘリコプター〕からまかれた［『白光』1962 年 6 月号、62-63 頁・表 3 頁、『白光』1962 年 7 月号、44 頁、参照］。同 37（1962）年 6 月 21 日にも、東京上空から祈りのリーフレット 56 万 7 千枚がまかれた［『白光』1962 年 8 月号、44-45 頁、参照］。

同 37（1962）年春〔2 月〕頃から、五井による「お浄め」の方法が、柏手を打つばかり〔柏手と印〕だったのに加えて、口笛〔口笛と声のひびき〕も鳴らすようになった。五井は、吐く息と吸う息の両方で口笛を鳴らしたという。当時、道場には、朝 9 時から午後 3 時過ぎまで、ひっきりなしに「お浄め」をもとめて人が来ていた。一日に 500 人から 600 人が来て、一日 6 時間以上、口笛をひっきりなしに吹いていたようである［髙橋『五井せんせい』、281 頁、参照］。白光誌の巻頭言で五井は、「今年〔1962（昭和 37）年〕も二月に入ってから、私の浄めの方法が大分変ってきて、今までは柏手と印によってなされていたものが、急に、口笛と声を主とした浄めになってきた。／……二月以来私の体を通して放射される光明波動が急速に増大してきて、個人指導時においての柏手の浄めは、その放射する光のひびきが強すぎて、相手のカルマが一度に浄め去られるので、そのショックを与えぬために、もっと光の波動を柔らげた、口笛と声のひびきによる浄めがなされるようになったのである。」[『白光』1962 年 7 月号、2 頁］と書いている。

10 分程度の「統一実修」では、柏手を打つ、口笛、印を組むなどして、最後に気合をかけてしめる、ということをしていた。五井の身長は、160 センチに届かず、小柄、細身で、掌（てのひら）は普通の人より小さかったという。しかし、彼の柏手は力強く、驚くほど音が大きかったそうである。髙橋英雄によると、〔のちに（昭和 43〈1968〉年に）〕笹川（ささかわ）良一〔1899-1995、（財）日本船舶振興会会長など〕も笹目秀和〔1902-1997、紅卍字会東京多摩道院の統掌（とうしょう）をしていたらしい〕の案内で白光真宏会の昱修庵（いくしゅうあん）に来たとき、五井の「お浄め」を受けて、五井の柏手の音のすごさに驚いていたとのことである。五井は、柏手を

連続して打ちつづけるため、冬でも汗をいっぱいかいて「お浄め」をしていたという［髙橋『神のみ実在する』、45-47 頁、参照］。

同 37（1962）年 3 月、五井が「救世主宣言」「五聖者合体宣言」をした、とされる［清水『ある日の五井先生』、95 頁、参照］。なお、五井によれば、〝五聖者〟とは、イエス・キリスト、金星の長老〔「宇宙（大）天使」と記されている場合もある〕、弥勒菩薩〔「弥勒如来」と記されている場合もある〕、釈迦牟尼仏、老子、をさすという。

五井の弟子の一人で、白光真宏会のリーダー的存在である伊藤顯は『五井先生研究（髙橋英雄個人誌）』誌上にて、同 37（1962）年 3 月 11 日、聖ヶ丘道場統一実修習（ママ）会で五井は会員たちを前に「我は世の光なり」と〝救世主宣言〟をした、と記している［『五井先生研究』第 167 号、2017 年 10 月 10 日、10 頁、参照］。また、別資料によると、五井は、同 37（1962）年（4 月）、聖ヶ丘道場統一会で、ただ一度だけ「我は大救世主なり」と宣言したことがあったとのことである。しかし、その「大救世主宣言」は、一度だけだった［『五井先生研究』2011 年 1 月号、15 頁、髙橋『五井先生を語る（二）』、38 頁、参照］。

同 37（1962）年、機関誌『白光』4 月号から、五井は「老子講義」の連載を開始した［『五井先生研究』第 168 号、2017 年 11 月 11 日、7 頁］。

そして、同 37（1962）年 6 月より「宇宙子科学〔正式には、宇宙子波動生命物理学、英語の略称で CWLP、といわれる〕」が始まる。この「宇宙子科学」が始まったのは、のちに五井の養女となる昌美〔本名：尚悦子〕の誕生日 6 月 1 日からである。当時、昌美〔尚悦子〕は五井による特別な「霊修行」を受けていた。そうしたなか、「宇宙天使からその叡智が昌美〔尚悦子〕に降ろされた」という［清水『ある日の五井先生』、34 頁、参照］。なお、「〝宇宙人〟との交流」は、上述のように、昭和 32（1957）年頃よりすでに進められ、昭和 33（1958）年には「聖ヶ丘」において 10 名ぐらいのグループで週 1 回「暁の祈り」が行われた。五井の指導のもと、「暁の祈り」は「〝宇宙人〟との交流」ということが主目的になって来た、とのことである。昭和 33（1958）年 6 月には、白光真宏会の使命として、「宇宙人と提携して……地球界を真実の地上天国にせしめるという、〔〝宇宙人〟との〕約束が出来ている」［五井『高級霊は上機嫌』、100 頁・127-128 頁］と五井は公表している［『五井先生研究』2010 年 9 月号、11-13 頁、参照］。この「宇宙子科学」という取り組みは、昌美〔尚悦子〕が土台となり、五井昌久の援護があって、昭和 37（1962）年 6 月に始められた、とされる〔現在も継続中で、2018 年 8 月現在、未だ完成されていない〕［髙橋『神のみ実在する』、240 頁、参照］。髙橋が記すところによれば、「五井先生

は〔「宇宙子科学」の〕お産婆さん役をし、〔尚悦子（昌美）を〕後見された。」［『五井先生研究』第 151 号、2016 年 4 月 25 日、7 頁］とのことである。

五井の側近・髙橋英雄の個人誌によると、昭和 37（1962）年から昭和 38（1963）年にかけて、尚悦子〔尚悦子は当時（もと）の姓名。のちに五井夫妻の養女となって五井昌美、西園寺裕夫と結婚して西園寺昌美、と呼称がかわる。〕の修行時代、彼女（尚悦子）は「衝撃波を受けたように突然倒れることがしばしばあった」という。ある時は、尚悦子が食事前に倒れたあと立ち上がって食事をとろうとしたが箸も持てなかった。それを見た五井昌久も箸をもたず食事をとらなかったそうである。五井は、「悦（えつ）ちゃんがこんなに苦しんでいるのに、ご飯なんか食べていられるか」と言った。五井の情にあつい側面をもの語るエピソードといえよう［『五井先生研究』第 153 号、2016 年 6 月 25 日、23 頁、参照］。

同 37（1962）年頃から五井の「（法）話」を欠かさず録音し保存出来るようになった。（録音状態が良好なテープは昭和 39（1964）年以降。それまでは家庭用のテープレコーダーとマイクロフォンを使っていた、という）［高橋『師に倣う』、107 頁、参照］。

昭和 38（1963）年、機関誌の中で、「祈りのポスター」の貼り付け活動を呼びかけている。五井の筆による「世界人類が平和でありますように」の文字が印刷された祈りのポスターは、小サイズ（左右 8.5 センチ・天地 40.5 センチ）は 10 枚 25 円、大サイズ（左右 15.5 センチ・天地 46.5 センチ）は 10 枚 50 円で頒布。金銭の余裕がない人は、無人スタンド式で、志を感謝箱に入れても入れなくてもいい、とのこと。祈りのリーフレット配布と同時併行して祈りのポスター貼り付け活動が実施された［『白光』1963 年 10 月号、22-23 頁、参照］。同 38（1963）年 12 月の機関誌で、祈りのリーフレットの英訳版が出来た、と告知している［『白光』1963 年 12 月号、67 頁、参照］。

昭和 39（1964）年 6 月には、機関誌上に、「世界平和の祈り」のドイツ語版（独訳文）が掲載された。加えて、（祈りの）リーフレットの独訳も出来た、と機関誌上で告知した［『白光』1964 年 6 月号、75 頁、参照］。

昭和 39（1964）年 5 月 8 日、五井昌久による初めての（第 1 回）講演会が目黒公会堂で催された［『五井先生研究』第 128 号、2014 年 4 月 1 日、8 頁、参照］。

昭和 39（1964）年 5 月 21 日、「地の塩の箱」運動を起こした江口榛一（しんいち）（1914-1979）が、白光真宏会を訪れ、五井と面談。そして、「地の塩の箱」と白光真宏会が協力して普及活動を行うことが決まった。その内容は、B5 判の新しいリーフレット（4 頁）を作り、そのうち 2 頁を「地の塩の箱」のすすめに、残り 2 頁を「世界平和の祈り」のすすめに使う、

ということ。このリーフレットは、当時すでに設置されていた 500 個近い「地の塩の箱」や白光真宏会が設置する箱に置かれる、ということになった。この箱は、全国の駅に設置することを目指した［『白光』1964 年 7 月号、41-45 頁、参照］。

同 39（1964）年 8 月、（千葉に）「聖ヶ丘大道場」（鉄骨造、330 畳敷）が完成する。同道場には「〔五井の筆による〕〈白光〉と書いた幅六尺、長さ九尺の軸」がかけられた［高橋編著『続々如是我聞』、149 頁、参照］。聖ヶ丘の新道場は、「質素で飾りも何もない、学校の体育館を思わせるような建物」［高橋『五井せんせい』、225 頁］だった。日曜日におこなわれた聖ヶ丘の「統一会」では、10 分から 20 分の「統一指導」で、五井は口笛を吹き、柏手を打っていた。このとき、法話（＝「聖ヶ丘講話」）もおこなわれた［高橋『五井せんせい』、281 頁、参照］。

白光真宏会サイトによれば、同 39（1964）年から、「平和ポスター（ピーススステッカー）の貼付活動が始まる」とある［http://byakko.or.jp/about/history/　2018 年 3 月 26 日最終閲覧、参照］。

同 39（1964）年 10 月、白光真宏会機関誌の裏表紙に、日本語で「心を一つに世界人類が平和でありますように」とあり、この一文の英語版・フランス語版・ドイツ語版・スペイン語版・ロシア語版が掲載された。ちなみに英語版は“LET US PRAY WITH UNITED HEARTS THAT PEACE PREVAIL THROUGHOUT THE WORLD”と記されている［『白光』1964 年 10 月号、表 4 頁、参照］。

同 39（1964）年 12 月、聖ヶ丘道場にて、五井は講話の中で、リーフレットやパンフレットや『白光』誌を配ったりして、祈りの運動をおしすすめていってほしい、と述べた［『白光』1965 年 2 月号、22 頁、参照］。

昭和 40（1965）年頃のこと、五井昌久は自宅から「（新田）道場」に歩いて向かう道すがら、突然、弟子の高橋に「……アメリカの北爆〔アメリカ軍による北ベトナムへの空爆〕をどう思うかね？」と質問。高橋が「わかりません」とだけ言ったところ、五井は「……そういうときには〝天意〟を問うのだよ。すると天意は、アメリカの北爆は真理にはずれている、というのだ」と語ったという［高橋『神の満ちる星の話』、143-144 頁、参照］。当時の五井は「戦い」を否定する考え方だったので当たり前の言葉のようだが、ここで五井が〝天意〟と述べたところに彼の思考の特徴がみられる。五井においては、一貫して、「天意〔＝神のみ心〕」から、その是非はどうであるか、が語られているようである。五井の「天意（「天の心」）」という思考が、彼の平和主義とつながっている、といえる。

昭和 40（1965）年頃には、「世界平和の祈り」を普及する目的で『白光新聞』（タブロイド判　4 頁　月刊　1 部 20 円〈送料 10 円〉1 ヵ年 240 円〈送料を含む〉）が発行されている［『白光』1965 年 4 月号、27 頁、参照］。なお、この月刊『白光新聞』紙はのちに月刊『世界平和の祈り』紙と名称を変え、平成 30（2018）年 7 月号（第 707 号）をもって休刊。

昭和 40（1965）年、昌美〔旧姓名：尚悦子〕、五井の養女となる。

同 40（1965）年 3 月 28 日午前 10 時から、千葉・聖ヶ丘道場で、「一般錬成会」に先立ち、五井昌久の指導による「講師錬成会」が行われた。参加人員は 60 名。「祈り」で始まり、続いて「五井昌久による法話」。「講師錬成会」では、参加した講師各人の「霊位」と「想いの座」、長所・欠点が五井から各人に教えられたそうである。いわば、五井による各講師への〝採点〟のようなものである。『霊性開発手帳』をもちいて、講師それぞれの「霊位」・「想いの座」が五井から示され、各人への具体的な指導の言葉を五井が記入した。そして、同 3 月 28 日午後 3 時過ぎに「講師錬成会」は、終了［『五井先生研究』第 168 号、2017 年 11 月 11 日、3-5 頁、参照］。

同 40（1965）年 4 月より五井の指導による「練成会〔錬成会〕」が始まった。

同 40（1965）年 5 月 23 日、文京公会堂〔実際は、杉並公会堂で開催か〕で五井の講演会「世界平和運動と日本の使命」［『白光』1965 年 5 月号、65 頁、参照］。同 40（1965）年 9 月、杉並公会堂にて五井の講演会「真の平和」が行われた。

同 40（1965）年 6 月頃までには、五井昌久は「世界平和を祈る会会長」を名のっていた［『五井先生研究』第 167 号、2017 年 10 月 10 日、21-22 頁］。

同 40（1965）年、これまで「宇宙科学」と名乗っていた白光真宏会の新しい活動の名称を、五井の指令によって、「宇宙子波動生命物理学」（略称：「宇宙波動学〈CWLP〉」）とよぶことになった［『白光』1965 年 5 月号、41 頁、参照］。

同 40（1965）年、白光誌上に、「心を一つに　世界人類が平和でありますように」という一文のエスペラント語訳が掲載。また、リーフレット〔祈りのリーフレット〕のエスペラント訳も出来ている、とのこと［『白光』1965 年 6 月号、55-56 頁、参照］。

同 40（1965）年、白光誌上で、祈りのリーフレットのフランス語訳が出来た、と告知［『白光』1965 年 7 月号、60 頁、参照］。

同 40（1965）年、白光真宏会の青年部のメンバーが、「世界人類が平和でありますように」と書かれたタスキをかけ、祈りのプラカードを掲げて街頭行進〔同会で「平和行進」

ともよばれる〕し、祈りのリーフレットを配布［『白光』1965 年 9 月号、34 頁、参照］。

同 40（1965）年 10 月 21 日、白光真宏会の聖ヶ丘道場（千葉県）で、東京大学助教授・笠原一男（1916-2006）と五井昌久が、約 1 時間半、対談。この対談は、フェイス誌 12 月号の特集として、フェイス社の主催でおこなわれた。対談の内容は、宗教の本質と使命、新しい宗教への期待、宗教と政治、五井昌久の教えについての質疑、などだったという［『白光』1965 年 12 月号、77 頁、参照］。

昭和 41（1966）年 1 月、文京公会堂にて五井の講演会「これからの日本、これからの世界」が開催。同 41（1966）年 5 月 26 日、東京杉並公会堂で五井の東京講演会「世界平和への唯一の道」を開催、五井が講演をおこなう前には、左卜全ら 3 名が会友として話をした［『白光』1966 年 5 月号、22 頁、『白光』1966 年 7 月号、14 頁、参照］。

同 41（1966）年 3 月、聖ヶ丘道場での統一実修会に、塩谷信男（医博）も参加していた。塩谷とは、五井が戦後の昭和 20 年代前半に千鳥会に入っていた時に面識があった。塩谷も世界平和を祈っている、と話したという。五井は、塩谷の話をうけて、塩谷のことを会員たちに紹介した。五井は、「塩谷先生は、私が若い頃霊修行をしていた時に大先輩として導いて下さった方なのです。真剣な素直なまともな方で、私も日頃から尊敬しております。立派な先輩がこうして〔聖ヶ丘道場に〕訪ねて下さり、共に一緒に並んで祈って下さるということは有難いと思って、私感激しております」と述べたそうである［『白光』1966 年 5 月号、42-43 頁、参照］。

同 41（1966）年 9 月 11 日に文京公会堂で、東京講演会「世界平和運動と宗教」を開催することを告知［『白光』1966 年 8 月号、72 頁、参照］。

同 41（1966）年、この頃の五井は、日々 400 ～ 500 人、白光真宏会の道場にやって来る人々に接していたという。会ができた当初からずっと五井は面接個人指導を行っており、肉体の苦しさはあったようである［『白光』1966 年 11 月号、2-3 頁、参照］。また、機関誌の別の号では、昭和 42（1967）年頃までは 1 日約 600 人、700 人の人々に面接して「お浄め」をしていた、とも語っている［『白光』1974 年 11 月号、7 頁、参照］。

同 41（1966）年 11 月 23 日、五井の誕生日にちなんで「50 歳祝賀祭」を実施。

同 41（1966）年 2 月頃から、今里広記（いまざとひろき）（1908-1985）・日本精工社長（当時）の肝煎りで、財界人たちが五井昌久を囲んで話をする会合＝「五井会（ごいかい）」が、東京において始まった。「五井会」には、大会社の責任者たちが定期的に集い、その会合はリラックスした雰囲気で 2 時間ほど五井との会話を楽しむ場となった。会合の最後には、必ず、五井の「お浄め

の祈り」があった。のちに白光真宏会の二代目理事長となった瀬木庸介〔1930-1999、元・博報堂社長〕も、「五井会」が縁となって五井昌久とのつながりが出来た。この「五井会」は、昭和 48（1973）年頃まで、つづいたという［髙橋『五井先生を語る（二）』、74-75 頁、参照］。

同 41（1966）年 12 月、雑誌『たま』（雑誌たま刊行会発行）新年号（12 月 25 日発売）に五井昌久の原稿「霊文明」が掲載される、と機関誌上にて告知［『白光』1967 年 1 月号、21 頁、参照］。

昭和 42（1967）年 1 月から 5 月にかけて、御茶ノ水ホ－ルを会場にして第 2 土曜日に五井による「個人指導」が行われる。

同 42（1967）年 3 月 26 日に文京公会堂で五井の東京講演会「平和をつくる原理」が開催されることを機関誌上で告知［『白光』1967 年 2 月号、63 頁、参照］。

同 42（1967）年、白光誌 4 月号より、誌面に広告を掲載するようになった。白光誌上には、「会員相互の利益にもなると同時に、白光誌発展の動力となる、白光誌広告募集にご協力下さい。」と記されている［『白光』1967 年 5 月号、63 頁、参照］。

同 42（1967）年 4 月 29 日（天皇誕生日）に、東京で、本部主催のはじめての街頭行進がおこなわれた。「平和の白ダスキ」をかけた人々など、総員 300 余名が〝祈りの行進〟。リーフレットを配ったり、「世界平和の歌」を歌ったり、全員で「世界平和の祈り」を唱和するなど、街頭普及活動を実施した［『白光』1967 年 6 月号、60-61 頁、参照］。

白光真宏会幹部だった伊藤顯によれば、同 42（1967）年 5 月に、京都の山崎プロダクションでビデオ『五井先生の横顔』を作成。同 42（1967）年 6 月にも、京都の山崎プロダクションでビデオ『聖地聖ヶ丘』が作成された。これらのビデオには、五井昌久の法話と「お浄め」の姿などが収録されている、という［『五井先生研究』第 168 号、2017 年 11 月 11 日、15 頁、参照］。

同 42（1967）年、白光真宏会内に「結婚相談所」を開設。写真と履歴書（身上書）が必要。委員たちが世話をし、五井が相性という点などから最も適した相手を選んでくれるのだという［『白光』1967 年 6 月号、78 頁・82 頁、参照］。

同 42（1967）年 6 月 11 日、聖ヶ丘道場にて、全国会員大会が開催された［『白光』1967 年 8 月号、2 頁、参照］。

同 42（1967）年 7 月 1 日より、四谷東貨健保会館を会場に、五井による「東京個人指導」が再開される［『白光』1967 年 7 月号、78 頁、参照］。

同 42（1967）年初夏頃から〔「昭和 41 年頃から」とも記されている［髙橋『五井せんせい』、240 頁］〕、五井の体に変調が現われ、それは「脱毛」からはじまり、脱毛症の広がりがおさまった頃、咳がひどくなりはじめたのだという［髙橋『五井せんせい』、281 頁］。五井の直弟子・髙橋英雄は、「……〔五井昌久の〕晩年の十二、三年間〔12 ～ 13 年間〕というものは、毎日毎日が人類の業をご自分の身に引き受けて〝消す〟という状態であった」といい、〝五井の病状は人類の業を引き受けているから〟〝神々との約束でそういう役目を自ら担った〟との理解を、信仰の観点から述べている［髙橋『五井せんせい』、239 頁、参照］。

同 42（1967）年 8 月 15 日、〝八・一五運動〟を実施すると告知。内容は、終戦記念日の 8 月 15 日正午、戦争放棄を宣言した時間を期し、全国民一斉に「世界人類が平和でありますように」と祈ろう、というもの。世界平和を祈る会の取り組みである。その他、各地区の実情に応じて、祈りの集会、祈りの行進などを行うという。本部からは、靖国神社に各人タスキをかけて集合し、社頭で「世界人類が平和でありますように」と祈る予定だと機関誌上に掲載されている［『白光』1967 年 8 月号、17 頁、参照］。

同 42（1967）年 9 月 10 日、白光真宏会の聖ヶ丘道場でバザーを開催、売上金の一部（10 万円）を新潟県下の水害地への見舞金に［『白光』1967 年 10 月号、70 頁、参照］。

同 42（1967）年 10 月 5 日、五井が公式に地方支部（静岡・伊東支部）へ出講。個人指導、お浄め、一葉平和観音の入魂お浄め式、記念植樹、そして五井の法話会が行われた。地元会員その他で、総勢 200 名をこえる集会になったという［『白光』1967 年 12 月号、71-72 頁、参照］。

昭和 43（1968）年 1 月、法然（1133-1212）・親鸞（1173-1263）、浄土門について五井が述べたことの集録『生きている念仏』（白光真宏会出版局）を刊行した。五井の側近・髙橋英雄によれば、「日本の宗教者の中で、五井先生が最も尊敬されている人は法然さんである。」と書いている。髙橋英雄は、五井が法然を尊敬した理由として、次の二つをあげている。一つは、「一般万人（一般大衆）」の衆生が救われるために、〝口称念仏〟という誰にでも出来る方法を開いたこと。二つめは、一生懸命勉強してきた仏教知識、名聞（みょうもん）も捨て、愚者のごとく念仏だけになったこと。これら二点は、五井の提唱した『世界平和の祈り』にも通ずる面があるだろう。五井も、一つめとして、誰でも唱えられる平易な「祈り（＝『世界平和の祈り』）」を提示し、二つめとして、この『世界平和の祈り』を称（とな）えること一すじの宗教活動を展開した。法然・親鸞ら浄土門の教えと五井昌久の教えとの類

似については、思想的関係性を考察するうえで、筆者は重要とかんがえている［『五井先生研究』第 154 号、2016 年 7 月 30 日、10-12 頁、参照］。

昭和 43（1968）年 2 月、「世界平和音頭」が出来上がった。なお、「世界平和音頭」は五井の作詞・古賀政男作曲・岩井半四郎（歌舞伎俳優）振り付け・都はるみの歌で、同 43（1968）年の 3 月にコロムビア・レコードより売り出された、という。同 43（1968）年 3 月末〔3 月 31 日〕には船橋ヘルスセンターで「世界平和音頭」の発表会が開催された［清水『ある日の五井先生』、46-48 頁、『白光』1968 年 5 月号、19 頁、参照］。同 43（1968）年 4 月 28 日に聖ヶ丘道場で行われた「全国〔会員〕大会」当日、「世界平和音頭」発表に五井も、ゆかたに赤い前かけ・ねじり鉢巻きをして子供たちと一緒に踊ると、会場はどっと沸いた［『白光』1968 年 6 月号、19 頁］そうである。

同 43（1968）年 3 月、「昱修庵（聖ヶ丘の大道場の隣の会長室の建物［清水『ある日の五井先生』、12 頁］」が完成しここでの五井の「（特別）個人指導」が始まる。昱修庵での五井による特別個人指導（じっくりと相談できる）は、毎週金曜〔同年 8 月より月曜日が増えると白光誌上で告知［『白光』1968 年 8 月号、61 頁、等、参照］〕、1 日最高 30 人と人数を制限して申し込みを受け付けると機関誌上で告知［『白光』1968 年 3 月号、59 頁、参照］。

同 43（1968）年 4 月 11 日に愛知県名古屋市で五井による個人指導が行われる、と機関誌上で告知。同 43（1968）年 4 月 28 日・29 日の 2 日間、全国会員大会が聖ヶ丘道場を中心に行われることになった、と機関誌上で告知［『白光』1968 年 4 月号、58 頁、参照］。

同 43（1968）年 4 月 10 日、五井らは伊勢大神宮（外宮、内宮）を参拝。翌 4 月 11 日には、熱田神宮を参拝、世界平和を祈念し、その後、熱田神宮境内の愛知県神社会館で個人指導、講話、お浄めをおこなった。愛知県神社会館には、300 名ほどの白光真宏会会員が参集していたという［『白光』1968 年 5 月号、58 頁、参照］。

同 43（1968）年、白光誌上で、ネパールの子供の BCG（予防）接種のため「古切手、送付」を呼びかけた。集められた古切手は、世界の切手市場に出品され、換金。そのお金で BCG を買い、アジアの子供たちを結核から守る、という。白光真宏会会員たちから集まった古切手は、日本キリスト教海外医療協力会に送られた［『白光』1968 年 5 月号、58 頁、参照］。

同 43（1968）年 5 月 29 日、東京・目白の和敬塾ホールにて、「青年の真実の生き方」の題で和敬塾の大学生約 500 名に五井が講演をした、という［『白光』1968 年 7 月号、61

頁、参照]。

同 43（1968）年 5 月末日、新日本宗教団体連合会（新宗連）の専務理事・大石秀典（しゅうてん）（1903-1996）と新宗教新聞編集長・清水雅人（1936-2018）が、白光真宏会聖ヶ丘道場に来て、五井と面接。そして、「新宗連」加盟の要請をした。この要請をうけて、五井は、「新宗連」に加盟することを表明したという[39]。当時の「新宗連」理事長は、立正佼成会会長・庭野日敬（1906-1999）だった［『白光』1968 年 7 月号、61 頁、参照］。

同 43（1968）年 6 月 12 日、五井は、先導の人たちとともに富士スバルラインで富士山 5 合目まで登り、道中、気合や柏手、いろいろな印でお浄めをしたそうである［『白光』1968 年 8 月号、61 頁、参照］。

同 43（1968）年 6 月 15 日、紅卍字会の笹目〔秀和〕らの案内で笹川良一（笹川は当時、日本紅卍字会の責任統掌に任命されていた）が昱修庵へ来て、五井としばらく雑談。笹川が「先生の口笛が素晴しい、と聞きましたので、是非聴かせて下さい」と言うので、五井は笹川に、口笛と柏手による「お浄め」をおこなった［髙橋『神のみ実在する』、69-70 頁、『白光』1968 年 8 月号、61 頁、参照］。

同 43（1968）年 6 月 20 日、五井昌久は娘の昌美を連れて、東京合気道道場（合気会本部道場）へ、その頃体調を崩していた植芝盛平を見舞いに行った。植芝は五井の見舞いを喜び、そんな体なのに合気の演武をしてくれた。いざ演武になると、植芝は若い人をコロコロころがし、バタバタと倒していたという［『白光』1968 年 8 月号、61 頁、『五井先生研究』第 76 号、2009 年 12 月 1 日、14-15 頁、参照］。

同 43（1968）年 6 月 23 日、東京・文京公会堂にて五井の東京講演会「わが人生―ひたすら人を愛し世界の平和を願って―」が開催、映画『天と地をつなぐ者』（山崎プロダクションの手によって映画化、同講演会で初上映［『白光』1968 年 6 月号、17 頁］）が発表された［『白光』1968 年 8 月号、20 頁、等、参照］。

同 43（1968）年、これまで普及用媒体として刊行されていた『白光新聞』の名を、同 43（1968）年 7 月号より『世界平和の祈り』に改題する、と告知。月刊紙『世界平和の祈り』の体裁は、週刊誌の大きさで 4 頁、定価 1 部 10 円の予定、とのこと［『白光』1968 年 7 月号、61 頁、参照］。

同 43（1968）年 8 月、米国のニューヨークに白光真宏会の支部が誕生した［『白光』1968 年 10 月号、61 頁、参照］。

同 43（1968）年秋〔10 月 1 日から〕、会の発祥時から使用していた「〔本部〕新田道場」

での「個人指導〔個人面接指導、お浄め〕」を終了。この五井による同道場での直接の「個人指導」では、朝 10 時から午後 3 時まで、（水曜日と「統一会」の日を除いた）毎日、延べ数百人という人たちの「お浄め」と「相談」に応じていた、という［清水『ある日の五井先生』、104 頁、参照］。五井の本部新田道場（千葉県市川市）での「個人指導」終了のかわりに、斎藤秀雄、村田正雄、横関実が個人指導・お浄めを担当［『白光』1968 年 11 月号、61 頁、参照］。

同 43（1968）年 10 月 3 日午後、京都商工会議所ホールにて五井の講演会が開催［『白光』1968 年 11 月号、2 頁、参照］。

同 43（1968）年 12 月、月刊『聖ヶ丘』創刊。この雑誌は、聖ヶ丘道場（千葉県市川市中国分）における五井の講話をもれなく知らせる月刊誌、とのこと［『白光』1968 年 12 月号、52 頁、参照］。

昭和 44（1969）年 6 月 25 日、五井昌久と昌美ら、明治神宮を参拝。五井は、甘露寺受長（かんろじおさなが）（1880-1977）宮司と歓談［『白光』1969 年 8 月号、巻頭口絵頁、参照］。

同 44（1969）年 4 月 7 日、ブラジル〔コンコルジア騎士会〕より「コメンダドール」の称号と勲章〔「世界平和のために努力し熱烈なる仕事を展開する人道的思想家」と、贈呈の言葉に記されている〕が五井に贈られた［『白光』1969 年 8 月号、3 頁、参照］。受章を記念して同 44（1969）年 6 月 29 日、東京・文京公会堂で五井の講演会が盛大に開催された、という［清水『ある日の五井先生』、43 頁、参照］。

同 44（1969）年 6 月 15 日、白光真宏会青年部メンバーを中心に、徒歩で東京から広島に向けて「平和大行進（「祈りによる世界平和運動大行進」）」出発。そして同 44（1969）年 8 月 6 日、「平和行進」メンバーが広島（広島平和公園〔広島平和記念公園〕）に到着、広島で「平和慰霊祭」に参加した［『五井先生研究』第 159 号、2016 年 12 月 20 日、30-31 頁、「祈りによる世界平和運動大行進」チラシ、等、参照］。

同 44（1969）年 10 月 12 日、東京・文京公会堂において、「祈りによる世界平和運動のつどい」（東京親和会主催）が開かれた。五井が作った詩の朗読、歌の合唱、世界平和を祈る会の活動状況の紹介、などののち、最後に五井が講演をして閉幕。この「つどい」終了後、有志 300 名あまりが、プラカードを掲げるなどして「平和行進」をおこなった［『白光』1969 年 12 月号、14 頁、参照］。

同 44（1969）年 10 月 26 日、「新宗連（新日本宗教団体連合会）〈理事長：庭野日敬〉」の評議員会が立正佼成会本部団参会館のホールで開かれた。白光真宏会からは五井の代理

として高橋英雄が出席。役員改選があり、五井昌久が「新宗連」理事に推挙され、出席者全員によって認められた、とのこと［『白光』1969 年 12 月号、70 頁、参照］。

同 44（1969）年 11 月 9 日には、白光真宏会「青年部総会」に五井が出席。約 80 名の青年が集まり、1 時間半にわたって、五井を囲んで和やかな会になった、という［『白光』1970 年 1 月号、67 頁、参照］。

同 44（1969）年末、「世界平和を祈る会」の呼称が「世界平和祈りの会」と改められた。「宗教法人　白光真宏会　―世界平和祈りの会―」と決定。「白光真宏会は世界平和の祈りをする会であるという説明として世界平和祈りの会をサブタイトルにした」という［『白光』1970 年 1 月号、67 頁、参照］。

五井は多忙の中、会員などからの手紙にたいして、みずから返事を書くことがあった。昭和 44（1969）年 12 月 24 日に五井が記した 20 歳代前半の青年（男性）への返信の手紙には、彼（青年）の鍼灸業という仕事を天命として『世界平和の祈り』のもと治療にあたって下さい、と青年を応援する言葉が五井の直筆で書かれている。五井昌久の側近・高橋英雄によれば、五井は、青年・少年・幼年といった若者には、特に気をつかって〔彼らを失望させないために〕手紙なり葉書なりで返事を書いたようである[40]［『五井先生研究』第 164 号、2017 年 6 月 10 日、31-32 頁・表 3 頁、参照］。

昭和 45（1970）年 1 月、戦後、千鳥会時代に五井と交流のあった医博・塩谷信男が、白光誌上に求人広告を出した。塩谷内科（東京都世田谷区）が治療助手（女性）を求める広告。仕事の内容は、「物理療法・祈りをこめて手を当てる治療・臨床材料の検査」とある。塩谷は、千鳥会時代から「（真心をもって）手をあてる療法〔真手〕」をおこなっていた。この頃も、塩谷は「掌療法」を通常の医療とあわせて行っていたようである。また、この頃、塩谷は白光誌を読んでいたとおもわれる［『白光』1970 年 1 月号、37 頁、参照］。

昭和 45（1970）年 3 月 25 日、新宿・朝日生命ホールにて「東京講演会」開催。その後、五井は、二宮、小田原、赤倉で静養する。同 45（1970）年頃の身体の状態について、次のように五井は述べている。「……ここのところ、普通の診断では喘息とでも名づけられる症状で、時折り側近の者たちに、強引に転地療養といって、諸所に旅をさせられている私なのだが、」「はた目には大変に苦し相にみえる喘息のような形」「はた目では見ていられぬような、苦しい症状を私に現わさせ、」と五井は機関誌の巻頭言で近況を記した。この症状についての五井の解釈は、「私の喘息状態は、病気というより、この地球世界の波動の浄化の一たんを受けての症状なので、」といい、むしろ、この機会に大自然に接する

ことができたことを「大神」に感謝している様子だった［『白光』1970 年 5 月号、2-3 頁、参照］。

同 45（1970）年 4 月 19 日から、娘（養女）の昌美と共に五井昌久は初渡米し、ロサンゼルス、ニューヨーク、ハノーバー、ハワイなどへ赴く［髙橋『神の満ちる星の話』、48 頁、参照］。同 45（1970）年 5 月 8 日、五井はアメリカから日本に帰国。

同 45（1970）年 5 月 5 日、社団法人日本紅卍字会の理事会が開かれ、五井が〔紅卍字会の〕理事に推薦され、承諾された。機関誌の「本部便り」欄には、そのお知らせとともに「今後、紅卍字会との関係は会〔白光真宏会〕全体として密接なるものとなるであろう。」と記されてある［『白光』1970 年 6 月号、71 頁、参照］。

同 45（1970）年 6 月 21 日、文京公会堂にて五井の東京講演会を行う［『白光』1970 年 7 月号、71 頁、参照］。

同 45（1970）年、世界連邦建設同盟（会長　湯川スミ〈1910-2006　湯川秀樹の妻〉）〔世界連邦建設同盟は 1948（昭和 23）年に結成。世界連邦建設同盟は、現在、世界連邦運動協会と改称し活動している〕に、白光真宏会が団体として加入することになった［『白光』1970 年 7 月号、71 頁、参照］。

さらに、同 45（1970）年 7 月 4 日から 7 月 24 日まで、五井は妻・美登里を伴って、海外〔アメリカ合衆国（ロスアンジェルス／ニューヨーク／ハノーバー）、イタリア（ローマ）、スイス（チューリッヒ／ジュネーブ）、フランス（パリ）、イギリス（ロンドン）〕へ行く。旅先では、座談会・講演会、集会、クェーカー教徒との交流なども行われたようである［『白光』1970 年 8 月号、65 頁、参照］。

同 45（1970）年 8 月 4 日・5 日、世界連邦宗教者平和促進会議〔「第 2 回世界連邦平和促進宗教者大会」〕が広島で開催され、斎藤秀雄が五井の代理で出席した［『白光』1970 年 10 月号、53 頁、等、参照］。

そして、五井は、同 45（1970）年 10 月 11 日に「京都講演会」、10 月 13 日に「名古屋講演会」を行った。名古屋講演会の後、五井は伊勢神宮へ行き参拝、さらに奈良の法隆寺を訪ねた［『白光』1970 年 12 月号、巻頭口絵頁、等、参照］。

同 45（1970）年 10 月 16 日から 10 月 21 日にかけて京都（京都市宝ヶ池の国際会議場）で開催された「世界宗教者平和会議〔WCRP のこと〕」に、五井も代表（の一人）として出席［『白光』1970 年 10 月号、71 頁、参照］。

同 45（1970）年 11 月 3 日、東京にて、「11・3　世界平和を祈る国民大行進デー」（主

催：祈りによる世界平和運動推進本部）を行う［『白光』1970 年 11 月号、70 頁、参照］。

同 45（1970）年 12 月 13 日、白光真宏会聖ヶ丘道場において、東パキスタンの洪水災害への義捐金募集がなされ、五井をふくむ会員たちの協力で合計 10 万円が集まった。この義捐金は、市川（千葉県市川市）の日赤支部に寄託された［『白光』1971 年 2 月号、71 頁、参照］。

昭和 46（1971）年 5 月 13 日、安岡正篤（1898-1983）が白光真宏会聖ヶ丘道場昱修庵（千葉県市川市）を訪問。安岡は 2 時間ほど、五井と語らうなどして過ごしたという［『白光』1971 年 7 月号、巻頭口絵頁、参照］。

五井が、昭和 46（1971）年 5 月 29 日・30 日に鶴見・総持寺で開かれる「第 3 回世界連邦平和促進宗教者大会」の顧問となった［『白光』1971 年 2 月号、71 頁、参照］。同 46（1971）年 5 月 29 日・30 日、白光真宏会からは「世界平和祈りの会」として、200 名余りの熱心な人たちが世界連邦平和促進宗教者大会（於・総持寺）に参加。同大会の分科会では、青年たちが「世界人類が平和でありますように」という祈りの言葉を合言葉とするよう強調したそうである［『白光』1971 年 7 月号、66 頁、参照］。

同 46（1971）年 7 月、白光誌の巻頭口絵に、白光真宏会の教義の文章にあたる「人間と真実の生き方（教義）」が、全文英訳（対訳）で掲載された。また、同誌（『白光』）の口絵には、「世界平和の祈り」の英訳文（新しいバージョン）が掲載されている[41]［『白光』1971 年 7 月号、巻頭口絵頁、参照］。

同 46（1971）年 7 月 1 日、五井らは、甘露寺受長宮司の招待で、明治神宮を参拝。その後、御苑の菖蒲を観賞、そして 1 時間ほど歓談［『白光』1971 年 8 月号、巻頭口絵頁・66 頁、参照］。

また、同 46（1971）年 7 月 27 日から 8 月 22 日にかけて、英語研修と集会開設のため、五井は、昌美らを同行しハワイへ赴く。機関誌上の告知によると、五井は、約 1 ヶ月間（7 月下旬から 8 月下旬にかけて）、英語研修および、他に集会を開くため、ハワイに滞在するという。英語研修は、「宇宙子科学」で英語が必要となったため、とのこと。五井のほか「宇宙子科学研究所」の主要メンバーが、「ホノルル・ビジネス・カレッヂ」の夏期英語講座に出席して、勉強するという［『白光』1971 年 7 月号、66 頁、参照］。

同 46（1971）年 9 月 24 日、「第 1 回聖ヶ丘みたままつり」が白光真宏会聖ヶ丘道場で執行された。当初の「みたままつり」は、亡くなった会員の慰霊とあわせて会員にまつわる先祖の供養も行うものだった、という。五井が、「みたましろ（故人の名〔俗名〕や先

祖代々の家の名〔○○家〕、「水子之霊」の生年月日などを記した用紙)」に柏手を打つなどして「お浄め」した。この頃には、五井は痰が出るなど、体調が万全でなかった様子が分かる。[清水『ある日の五井先生』、89-91 頁、『白光』1971 年 8 月号、66 頁、等、参照]。

同 46（1971）年 10 月 3 日、安岡正篤が、白光真宏会聖ヶ丘道場昱修庵に来訪、五井と長時間にわたり歓談した[『白光』1971 年 11 月号、74 頁、参照]。

同 46（1971）年 10 月 24 日、聖ヶ丘道場でバザーを開催。売上金は 100 万円を少しこえた。この売上金は、海外布教と社会福祉に使用するという[『白光』1971 年 12 月号、67 頁、参照]。

同 46（1971）年 11 月 21 日・22 日、聖ヶ丘道場で、第 1 回全国青年大会が開催。第 2 日（11 月 22 日）の親睦会のあとで、五井が出席し、法話・質疑応答があったという。集まった青年は、全国から総数 102 名におよんだそうである[『白光』1972 年 1 月号、63 頁、参照]。

同 46（1971）年 12 月、機関誌の巻頭口絵に日本語の世界平和の祈りの文とともに英訳の文が掲載。前の機関誌に掲載されていた英訳文とは違うバージョンに変更されている(42)[『白光』1971 年 12 月号、巻頭口絵頁、参照]。

昭和 47（1972）年 1 月、機関誌上に、ニューヨークの会員（江見氏）による五井の教えについての講演内容を、英文（1 頁）でレイナルツ氏（Hans Reinarts）が報告、掲載された。前年 46（1971）年 12 月の機関誌にも、江見氏の講演の英文（1 頁）レポート（報告者：Pamela Reinarts）が掲載されていた[『白光』1971 年 12 月号、80 頁、『白光』1972 年 1 月号、55 頁、参照]。

同 47（1972）年 5 月 3 日、熱田神宮文化殿講堂（愛知県名古屋市）において、五井の「名古屋講演会」が開催された。斎藤秀雄の話、五井昌美の話につづき、五井昌久が講話した。全国から会員が集い、定員 500 名を超え、超満員だったという[『白光』1972 年 6 月号、巻頭口絵頁・66 頁、参照]。

同 47（1972）年 5 月 4 日、五井昌久、五井昌美、斎藤秀雄、ほか多数の会員が、伊勢神宮（外宮、内宮）を参拝〔今回が五井の 3 回目の伊勢神宮参拝になるという〕した[『白光』1972 年 7 月号、30-32 頁、参照]。

同 47（1972）年 6 月 6 日から 6 月 11 日まで、世界連邦建設同盟主催の世界連邦現代名士書画展が日本橋三越別館ギャラリー〝アネックス〟で開催。五井昌久は、「上善若水」という軸と五井の詩の 2 点を出品した。斎藤秀雄講師も、観音様と般若心経〔の書画〕を

出品［『白光』1972 年 7 月号、65 頁、参照］。

同 47（1972）年 6 月 19 日、五井は、明治神宮・甘露寺宮司の招待で、明治神宮を正式参拝。そののち、御苑の見ごろの菖蒲を観賞［『白光』1972 年 8 月号、65 頁、参照］。そして同 47（1972）年 7 月 31 日に五井は、甘露寺宮司にむけて、「老翁の笑顔美し紫の菖蒲の前に肩ならべ佇つ」「案内の翁の心美しき明治神宮の花菖蒲園」［五井『夜半（よわ）の祈り』、207 頁］という短歌をつくった。五井と甘露寺氏が親しく交流していた様子をうかがうことができる。

同 47（1972）年 7 月 28 日、「富士大神業」が行われた。これは、昌美以下 42 名の「宇宙子科学（CWLP）」メンバー及び青年たちが富士山頂に登って「地球の業を浄める」というものだという。この「神業」に五井は全面的に支援した。メンバーらに柏手による「お浄め」を行い、登山中は山中湖畔のホテル（マウント富士ホテル〔ホテルマウント富士〕）の一室から望遠鏡で様子を見、無線機で連絡をとりながら「光を送り続けていた」とのことである［清水『ある日の五井先生』、66-68 頁、参照］。白光真宏会元理事で、「宇宙子科学」メンバーだった伊藤顯（1925-）によれば、同 47（1972）年 7 月 28 日、五井昌美を中心に同心 45 人が、「富士山頂の大神業（おおかみわざ）〔この大神業は、地球にまつわるすべての業（かるま）を浄める、とされる〕」を達成〔富士登山を成功した〕。同 47（1972）年 7 月 26 日から「宇宙子科学」の大絵図面を持って登りはじめ、同 47（1972）年 7 月 28 日に登頂、富士山の頂上で「祈り」を捧げた、という。なお、この富士登山には、当時、五井会の幹事だった博報堂社長・瀬木庸介〔瀬木はのちに博報堂をやめ、横関の次の白光真宏会理事長になる〕も一緒に登り、昌美の登頂をたすけた［『五井先生研究』第 168 号、2017 年 11 月 11 日、8-10 頁、『白光』1972 年 9 月号、7-11 頁・22-23 頁、参照］。

同 47（1972）年 8 月 1 日、「広島平和行進」。同日、広島市袋町見真講堂で山田広島市長の挨拶、五井のメッセージ（島田重光が代読）のあと、平和記念公園に向かって「世界人類が平和でありますように」と唱えながら行進した。白光真宏会の他県の会員たちも応援にかけつけた、とのことである［『白光』1972 年 9 月号、69 頁、参照］。

同 47（1972）年 8 月、ベルギー（ブリュッセル）で〔第 14 回〕世界連邦世界大会が開催、白光真宏会からは、斎藤秀雄を含む計 4 名の会員が参加、と白光誌上で告知［『白光』1972 年 7 月号、65 頁、参照］。

同 47（1972）年 8 月、五井は渡米しロサンゼルス、ニューヨーク、ハノーバー等に赴く。今回の渡米は、アメリカの東北部または西北部に「宇宙子科学」の拠点をつくるのが

目的という。そして、同 47（1972）年 9 月 1 日・2 日に米国ニューハンプシャー州ハノーバーに 2 番目の「宇宙子科学」の場がつくられた。このとき随行した昌美は、英語研修を兼ねて、一ヵ年の予定でアメリカに滞在する〔ミシガン州立大学で英語を勉強〕と、機関誌上で告知。五井は、同 47（1972）年 8 月 22 日夜、ロス着、9 月 12 日午後帰国、羽田着［『白光』1972 年 9 月号、69 頁、『白光』1972 年 10 月号、65 頁、『白光』1972 年 11 月号、巻頭口絵頁、参照］。

同 47（1972）年 9 月 23 日、増築なった聖ヶ丘道場で「聖ヶ丘みたままつり」がおこなわれ、五井がお浄め、統一、法話などをおこなった。この「みたままつり」に、全国各地から会員が約 3000 名参集したという［『白光』1972 年 9 月号、69 頁、『白光』1972 年 11 月号、口絵頁・42 頁、参照］。

同 47（1972）年 9 月に、「聖ヶ丘道場」の増築工事が完了し、同 47（1972）年 10 月 8 日に「聖ヶ丘道場増築落成記念統一会〔聖ヶ丘道場増築落成祝賀会〕」が行われた。また、同 47（1972）年 11 月 1 日から白光真宏会本部の事務業務が市川市新田の新田道場から市川市中国分の聖ヶ丘道場に移転した（なお、のち、「神示」により平成 10〈1998〉年、同会の本部は静岡県富士宮市の「富士聖地」に移転。翌平成 11〈1999〉年、聖ヶ丘道場は閉場）［『白光』1972 年 11 月号、68 頁、等、参照］。

同 47（1972）年 11 月 12 日、東京・日比谷公会堂にて五井の講演会「自分の幸せと世界の平和」開催。この講演のあと、五井の指導で全員が「世界平和の祈りによる統一」をおこなった。閉幕後、有志 1000 名余りが、パトカーと宣伝カーに先導されつつ、「平和行進」をした［『白光』1973 年 1 月号、巻頭口絵頁・53 頁、参照］。

昭和 47（1972）年 12 月、白光誌上に、英文小冊子を広告。「MASAHISA GOI, MAN and HIS KARMA〈人間とその業〉50 円／ JAPAN and the WORLD PEACE MOVEMENT〈日本と平和運動〉30 円／ THE PRAYER for WORLD PEACE　文庫判 10 円」と紹介されている［『白光』1972 年 12 月号、55 頁、参照］。

◆「展開期」の要点

昭和 37（1962）年 6 月から、「宇宙子科学」という白光真宏会の新しいプロジェクトがはじまった。その内容は、「宇宙天使」と交流する等とのことで、この新しい活動の中心的役割を昌美〔「宇宙子科学」開始時は、尚悦子〕は担った。昌美〔尚悦子〕はその「霊能」の素質を五井によって認められ、特別に「霊修行」を課された。そして、彼女〔尚悦

子〕は昭和 40（1965）年、五井夫妻の養女になった。昌美が養女になったことは、五井にも「影響」を与えた。「情」に厚い五井は、実娘のように昌美に愛情を注いでいる。アメリカを中心に英語圏へ五井が足を運んだのも、「宇宙子科学」を進めるうえで必要だったという理由とともに、「国際主義」的な志向をもつ昌美からの「影響」もあったとおもわれる。

さらに、「地球の業」の浄めるとして行われた「富士大神業〔富士登山〕」や「宇宙子科学」推進の要に昌美が据えられていた。昌美は五井が「宇宙子科学」を進めるために欠かせない存在であり、公私にわたり、五井昌久にいくらかの「影響」を与えていた、といえるだろう。

1-6　昱修庵に籠もる

＝「闘病期」（1973〈昭和 48〉年頃～ 1980〈昭和 55〉年）

昭和 48（1973）年 1 月 23 日、白光真宏会の理事会で、横関実の理事長辞任が受理され、かわって新理事長に瀬木庸介が推薦された。直ちに五井昌久の認可を得て、白光誌上で告示。横関は、理事（相談役）となり、髙橋英雄らが五井の指名によって新しく理事に選任された[43]［『白光』1973 年 3 月号、68 頁、参照］。

同 48（1973）年 1 月 25 日から、博報堂社長を辞任した瀬木が同会聖ヶ丘道場に勤務となる。瀬木は前年の「富士大神業」の直後に、五井から「職員にならないかい？」と声をかけられ、一度断ったものの思い直して後日「職員にして下さい」と五井にお願いした、といわれる［清水『ある日の五井先生』、63 頁・72 頁・104 頁・126 頁・139 頁、参照］。

同 48（1973）年 3 月 11 日、「新旧理事長送迎祝賀会」が本部聖ヶ丘道場で行われた。前理事長・横関実、新理事長・瀬木庸介の入場を全員拍手で迎えた。そして〔五井から、〕横関理事に表彰状、理事全員に任命書が手渡された。そのあと、五井の法話、統一指導、などがあったという［『白光』1973 年 4 月号、70 頁、参照］。

同 48（1973）年 3 月から、五井は昱修庵に籠もる（昱修庵 2 階に五井の部屋〔居間〕があった。部屋の暖炉の上には、五井が尊敬していた西郷隆盛[44]〔の肖像画〕と植芝盛平の写真が飾って〔かかげて〕あった、という［清水『ある日の五井先生』、127 頁、『白光』1975 年 4 月号、30 頁、参照］）。なお、五井は、西郷については、「『私』というものがない人」「天地に通じている素晴しい人物」［高橋編著『続・如是我聞』、50 頁］と評価している。五井自身も西郷のようであろうとした。西郷という存在からも、いくらか「影

響」を受けていたといえるだろう。

同 48（1973）年 3 月に昱修庵に籠もって以降、五井の「個人指導」は廃止となる。これには、「実際に肉体のほうが息が出来ない、という止むを得ない事情があって、はじめて個人指導をお止めになったというのが事実です。」［『五井先生研究』2010 年 8 月号、9 頁］との訳があった。「息が出来ない」というのは、咳や痰が激しく呼吸が困難になる時があったことを示しているのだろう。五井本人は「個人指導」をずっと自ら行うつもりだったが体がそれを許さなかった。

同 48（1973）年頃から、五井は、昼夜を問わず、咳と痰が激しくなり、眠れる時間が短くなっていく。こうした五井の病状は〝人類の業〟を浄めるため、そのような容赦ない症状のかたちをとって五井の肉体に現われている、と白光真宏会内では解釈された。五井が「肉体界」に居て五井の肉体を通して〝痛い、苦しい、つらい〟という体験をしないと「〔人類の〕業」は消えない、と五井は理解し、あえてそうした肉体的苦しみを彼が引き受けたのだという。次第に五井はやせ細っていき、晩年の 5 年間くらいは、〝ふとんから一歩も出られない〟というような状態だった［『五井先生研究』第 158 号、2016 年 12 月 8 日、17-18 頁、参照］。

関係者〔五井昌久研究会の人〕の話によると、晩年の五井は、咳や痰、全身の痛みなどで床についていることが多かった、という。

同 48（1973）年 4 月から、「光のプレゼント運動」、つまり白光誌贈呈運動がはじまった［『白光』1975 年 4 月号、64-65 頁、参照］。

同 48（1973）年 4 月 24 日、五井の娘・昌美がアメリカから日本に一時帰国。この日、羽田空港には、五井昌久をはじめ「宇宙子科学」のメンバー、会員等多数が迎えに出た［『白光』1973 年 6 月号、69 頁、参照］。

同 48（1973）年 6 月、機関誌に五井昌美の随想が掲載され、随想の文末に「（筆者は五井先生ご令嬢、本会副会長）」との附記がみられる。昌美は、この時、白光真宏会の副会長だった、ということであろう［『白光』1973 年 6 月号、26 頁、等、参照］。

同 48（1973）年 7 月、機関誌の裏表紙に、「世界平和の祈り」の英語版に加えて、中国語版、韓国語〔朝鮮語〕版が掲載された［『白光』1973 年 7 月号、表 4 頁、参照］。

同 48（1973）年 8 月 14 日から、第 15 回世界連邦世界大会（ベルギー）が開催。今回の大会では、五井の名代として斎藤秀雄が参加し、五井の〝祈りによる世界平和運動〟のメッセージを伝えた［『白光』1974 年 1 月号、28-32 頁、参照］。

同 48（1973）年 9 月 23 日（秋分の日）、聖ヶ丘道場で「（第 3 回）みたままつり」を執行。五井は、柏手と印で「みたま」の〝お浄め〟をおこなったという［『白光』1973 年 11 月号、巻頭口絵頁・2-3 頁、参照］。

同 48（1973）年 10 月 3 日、五井の娘・昌美がアメリカ留学（1 年間）から帰国。五井夫妻はじめ、会員多数が昌美を迎えた［『白光』1973 年 11 月号、67 頁、参照］。

体調がすぐれない日々だったが、五井は、同 48（1973）年 7 月、日比谷公会堂にて「新しい日本の心」と題して講演を行う。同 48（1973）年 11 月 12 日には、日比谷公会堂にて「自分の幸せと世界平和の祈り」と題して講演した。

同 48（1973）年 11 月 23 日、「五井先生お誕生祝賀会」が聖ヶ丘道場で行われた。五井による法話、統一のほか、白光真宏会の職員・会員による様々な催しに五井夫妻〔美登里夫人が会の催しに出席するのは五井の誕生祝賀会の時、1 年に 1 度であったという〕も拍手をおくっていたそうである［『白光』1974 年 1 月号、52-54 頁、参照］。

昭和 49（1974）年 1 月 3 日、五井昌久〔および、五井昌美はじめ「宇宙子科学」のメンバーたち〕は、伊勢神宮内宮を参拝。神宮参拝の目的は、「伊勢神宮にただよっている国民の業を打ち祓い、浄めるため」とのこと。五井の弟子・髙橋英雄がメモに記した内容によれば「国民の出す現世利益の願望がそのまま伊勢神宮に残って、業の黒雲となってただよっているので、そのままだと皇室・日本の未来にもよくない。だから、〔五井が〕「お浄め」に参った」ということだそうである［髙橋『五井せんせい』、250-251 頁、『白光』1974 年 2 月号、66 頁、参照］。

同 49（1974）年 3 月 21 日（春分の日）、白光真宏会・聖ヶ丘道場にて、「第 4 回みたままつり」が執り行われた。五井は、献花し、柏手と印による「お浄め」をした。そして、五井の法話、統一指導などがおこなわれた［『白光』1974 年 5 月号、23-24 頁、参照］。

同 49（1974）年 4 月、宗教界を中心に「日本（にほん）を守る会」が結成され[45]、五井はその「百人委員」になっている、と機関誌上に記されている［『白光』1974 年 8 月号、62 頁、参照］。

同 49（1974）年 4 月 27 日、本部聖ヶ丘道場にて、五井昌美と西園寺裕夫〔西園寺公望の曾孫。米国・ミシガン州立大学経営大学院を修了し、当時は日本精工株式会社に勤務していた〕の結納の儀が行われた。翌日の 4 月 28 日、聖ヶ丘統一会にて、五井から両人の婚約について話があった。「統一会」の場で、西園寺裕夫が紹介され、西園寺裕夫・五井昌美があいさつをした［『白光』1974 年 6 月号、30-31 頁、参照］。

同 49（1974）年 5 月、機関誌上に、「MAN and the TRUE WAY of HIS LIFE　¥50」「EVIL, GOOD and the COSMIC MIND　¥50」など英文小冊子の案内が掲載されている［『白光』1974 年 5 月号、31 頁、参照］。

同 49（1974）年 5 月 19 日、五井は、明治神宮会館にて「人類の未来」講演。これが五井による最後の「（東京）講演会」となった。講演会がおわったあと、午後 3 時半より、明治神宮表参道から渋谷（美竹（みたけ）公園）まで「平和行進〔世界平和の祈りを唱えながら行進〕」（約 40 分）をおこない、1000 人以上が参加したという［『白光』1974 年 7 月号、30-31 頁、等、参照］。

同 49（1974）年 7 月 8 日、「聖ヶ丘（聖ヶ丘道場の二階）」にて五井夫妻の銀婚式がごく内輪で行われた[46]［髙橋『五井せんせい』、246-248 頁、『白光』1974 年 9 月号、巻頭口絵頁、等、参照］。

同 49（1974）年 9 月 1 日に「東京新道場〔千代田区平河町〕開設祝賀統一会」を開催予定、と機関誌上にて告知。同 49（1974）年 9 月 1 日、五井を迎えて、新東京道場の開所式が行われた。開所式の日は、約 1000 名の会員が新東京道場に集い、開所を祝ったという［『白光』1974 年 9 月号、66 頁、『白光』1974 年 10 月号、64 頁、参照］。

同 49（1974）年 10 月、機関誌上で、これまで「世界平和祈りの会宗教法人白光真宏会」といっていたのを、「祈りによる世界平和運動宗教法人白光真宏会」と改めることになった、と告知。つまり、白光真宏会の説明呼称を改めたとのこと［『白光』1974 年 10 月号、64 頁、参照］。

同 49（1974）年 10 月 18 日午後、西園寺裕夫・昌美の結婚式が、ホテルオークラ（東京）の式場で挙行、午後 6 時より披露宴がおこなわれた。同 49（1974）年 10 月 19 日から 2 人はカナダへ新婚旅行、同年 10 月 31 日帰国。同 49（1974）年 11 月 4 日には、本部聖ヶ丘道場で西園寺裕夫・昌美両人の「結婚祝賀会」が催され、会員 2000 名が参集して祝ったという。「祝賀会」では、五井美登里からの言葉、五井昌久の法話と統一、ほかのプログラムで結婚が祝われた［『白光』1974 年 12 月号、36-37 頁、参照］。ちなみに、西園寺裕夫・昌美が結婚直後の頃、五井は「神様から命令があって、裕夫、昌美夫婦が日常生活を英語で会話することになった」と語った、という。［清水『ある日の五井先生』、96 頁、参照］。なお、西園寺夫妻には前述のように、ともに米国留学経験があった。

同 49（1974）年 11 月 23 日、「五井先生第 58 回お誕生祝賀会」が、本部聖ヶ丘道場でとり行われた。当日、来場者は正面玄関に構えたテント内の受付で、恒例の五井が〝お浄

め〟したキャラメルをもらった。この「祝賀会」には、2000 名余りの人々が聖ヶ丘道場に集ったという［『白光』1975 年 1 月号、66 頁、参照］。

昭和 50（1975）年 1 月、機関誌上にて瀬木白光真宏会理事長が「祈りのリーフレット〔往復葉書程度の二つ折れの印刷物。世界平和の祈りの言葉、五井の詩や文章などを記載。無料〕の配布活動を復活する」と告知した。まずは、日本全国津々浦々に配布するという。五井も、この配布運動の推進を願っていた(47)［『白光』1975 年 1 月号、34-35 頁、参照］。

昭和 50（1975）年 1 月 1 日、本部聖ヶ丘道場にて、元旦祝賀式が行われた。五井一家が登壇し、五井の法話と統一指導、西園寺昌美の法話などがあった［『白光』1975 年 2 月号、66 頁、参照］。

同 50（1975）年 3 月 21 日、聖ヶ丘道場で、第 5 回「みたままつり」を執行。全国各地から会員が参集。五井の法話、統一指導などがおこなわれた［『白光』1975 年 5 月号、24-25 頁、参照］。

同 50（1975）年、機関誌『白光』5 月号に、五井がつくった俳句をはじめて掲載。初めての句が「蟇（ガマ）」で、初めて作った 10 句を発表した［髙橋『五井せんせい』、256-257 頁、『白光』1975 年 5 月号、14-15 頁、参照］。昱修庵に籠もってから、五井はテレビで『十戒』、『聖衣』、『明治天皇と日露大戦争』といった映画なども見ていたようで、そうした作品の内容から五井の宗教的な好み、天皇への崇敬の念をうかがうことができるかもしれない［髙橋『五井せんせい』、258-259 頁、参照］。

同 50（1975）年 7 月の機関誌上でも、世界平和の祈りのリーフレットを各家庭のポストに配布する運動への協力を呼びかけている。前は、すべて無料でリーフレットを欲しいだけもらえたが、この頃はリーフレット自体は無料で送料は実費負担願う、というかたちに変わった［『白光』1975 年 7 月号、11 頁、参照］。

同 50（1975）年 7 月 20 日（第 3 日曜日）、新行事「結婚を祝う日」を執行。1 年に 1 回、同会の「維持会員」で最近結婚した人、または結婚予定のある人〔今回の申込資格は、結婚の前後 1 年間の人〕を対象に、五井が結婚のための「お浄め」をする。これは五井夫妻が 7 月に結婚したことにあやかる、として第二代理事長・瀬木庸介の発案による。当日は行事の最後に五井による縁結びの「お浄め」があった、という。以降、昭和 55（1980）年にかけて、毎年 7 月の第 3 日曜日の「聖ヶ丘統一会」に同行事が執り行われた［清水『ある日の五井先生』、108−111 頁、『白光』1975 年 5 月号、64 頁、参照］。

同 50（1975）年 8 月 6 日、五井昌久に初孫が出来、五井が「真妃（まき）〔西園寺夫妻の長女〕」

と命名［髙橋『五井せんせい』、263 頁、『白光』1975 年 10 月号、64 頁、参照］。

同 50（1975）年 9 月 28 日、五井を迎えて聖ヶ丘道場にて「文化部 10 周年記念祭」を催した。〔白光真宏会の〕文化部発足以来、合唱はじめ茶道、華道、書道など各班のリーダーたちの奉仕に感謝して、五井から「和」という色紙が 13 人に贈られた。「文化部 10 周年記念祭」当日は、独唱、合唱、ピアノ独奏、狂言、仕舞、民舞、詩吟などが披露されたという［『白光』1975 年 11 月号、68 頁、参照］。

同 50（1975）年 10 月 20 日すぎから、五井の胃の痛みが激しく、唸るほどだった。昼夜わかたぬ咳と痰の吐き出しに、腹の筋肉ばかりでなく体の様々な筋肉が痛んで、夜もよく眠れない日々が続いていた。もう烈な胃の痛みの上、吐き気が来て、黒いものを吐き出していた。ごはんも食べられないのに吐いていた、とのことである［髙橋『新・師に倣う』、65-66 頁、参照］。

同 50（1975）年 10 月第 1 週の「統一会」から、五井の体調悪化（はげしい咳）のため「法話」が出来なくなり、最後の「お浄め」だけをすることになった。それまでは、毎回の「統一会」で、五井は短いながらも「法話」をし、「統一指導」では柏手を打ち口笛を鳴らしていた［髙橋『五井せんせい』、251 頁］。

同 50（1975）年 11 月 23 日、五井の「誕生祭（「お誕生祝賀会」）」が開催されるが五井昌久自身は欠席。五井のメッセージを、彼の妻・美登里が代読した［髙橋『五井せんせい』、241 頁］。その五井のメッセージの中でも、「地球世界の業の波を、この身この心に受けて、昱修庵から一歩も出ず、瞬々刻々骨身を削って浄めつづけている」というように、五井みずからの〝役目〟として述べている［髙橋『五井せんせい』、261-262 頁］。「お誕生祝賀会」がはじまって以来、初めての五井昌久の欠席だった。五井の妻・美登里は挨拶で、「先生は本当に痛々しいほど窶れましたけれども、……」といい、しかし自分〔美登里〕を先に見送ってから死ぬと〔五井昌久に〕確約してもらった、だからまだまだ生きてくれる、というような話をして会員に感動を与えたという［『白光』1976 年 1 月号、21-25 頁、参照］。

関係者の話〔髙橋英雄氏の話〕によると、「同〔50（1975）〕年の後半から〔自力では、ほとんど〕起き上がれなくなった」という。そして、機関誌上、巻頭言のなかでも、五井はみずからの状態について、「現在のように、地球の業の浄化のために、昱修庵を一歩も出られず、祈りつづけていると、そうして歩いていた頃がなつかしい。」［『白光』1976 年 2 月号、2 頁］と記している。健康上の都合で、この頃の五井は自由に外を歩くことが出来

なくなっていたようである。

昭和 51（1976）年 1 月、白光誌の巻頭に掲載される「教義（人間と真実の生き方）」ならびに「世界平和の祈り」の対訳英文が変わった[48]［『白光』1976 年 1 月号、巻頭口絵頁、参照］。

同 51（1976）年 1 月の白光誌上で、白光真宏会・瀬木理事長が、〝世界平和祈願塔〟〝世界平和祈願碑〟〝世界平和祈願柱〟の建設、〝世界平和祈願ポスターとシール〟の貼附を、会の運動方針として提案した。前年、昭和 50（1975）年 10 月の白光誌に書かれた五井の巻頭言の言葉[49]を受けて、この普及活動が瀬木から提起されることになったようである［『白光』1976 年 1 月号、26-27 頁、参照］。白光真宏会サイトでも、同 51（1976）年から「世界平和祈願柱（ピースポール）の建立活動が始まる」とある［http://byakko.or.jp/about/history/　2018 年 6 月 21 日最終閲覧、参照］。

同 51（1976）年新春、五井は「元旦祝賀統一会〔元旦祝賀式〕」にあごひげをのばしたままで出席［『白光』1976 年 3 月号、巻頭口絵頁、参照］。元旦祝賀式は、本部聖ヶ丘道場で執り行われ、五井の法話と統一もおこなわれた。この日、本部道場は超満員で、五井の法話は京都道場に同時放送されたという［『白光』1976 年 2 月号、68 頁、参照］。

同 51（1976）年 2 月、白光誌の巻頭に掲載される「教義（人間と真実の生き方）」ならびに「世界平和の祈り」の対訳英文が、再度、変わった[50]［『白光』1976 年 2 月号、巻頭口絵頁、参照］。

同 51（1976）年 3 月、白光誌の巻頭言で五井昌久は、娘の昌美と冨士山とは縁深く、今後冨士の裾野を中心に新たな救済事業が繰りひろげられていく[51]、と記した［『白光』1976 年 3 月号、2-3 頁、参照］。

同 51（1976）年 3 月 20 日、聖ヶ丘道場において、「第 6 回聖ヶ丘みたままつり」を執り行った。五井は、「みたまのお浄め」、献花、（短い）法話、統一などをおこなったようである［『白光』1976 年 5 月号、23-32 頁・68 頁、参照］。

同 51（1976）年 4 月 3 日、五井は「動けない体」を無理して、西園寺夫妻、瀬木庸介理事長、髙橋英雄ら側近を連れて、中型バス（特別仕立てのバス）の乗り切りで伊勢神宮（内宮）へ詣った（御垣内（みかきうち）参拝〔正式・特別参拝〕した）とのこと。そして、祈り、「お浄め」をした［髙橋『五井せんせい』、239 頁・251 頁・253 頁・264 頁、『白光』1976 年 5 月号、2-3 頁、参照］。

五井昌久の弟子で幹部の一人・伊藤顯によれば、同 51（1976）年 2 月 11 日・3 月 21 日

・4 月 17 日、静岡県富士宮市〔現在の白光真宏会「富士聖地」がある場所〕にて、西園寺昌美と「宇宙子科学」シニア・メンバーにより、ピラミッドの建設作業が行われたという［『五井先生研究』第 168 号、2017 年 11 月 11 日、11 頁］。

同 51（1976）年 5 月、機関誌上に、五井の語録をまとめた高橋英雄編著『如是我聞』（1966 年発行）の英訳文（機関誌 1 頁分）が掲載された[52]［『白光』1976 年 5 月号、13 頁、参照］。

同 51（1976）年 6 月 12 日・13 日、「世界連邦宗教者東京大会（世界連邦日本宗教委員会大会）〔第 8 回世界連邦平和促進宗教者東京大会〕」が立正佼成会本部〔施設〕（東京・杉並区）にて開催。白光真宏会からは、佐久間筆八理事、中沢英雄青年部次長が出席。佐久間・中沢両氏は「〔世界連邦平和促進宗教者〕東京大会」の実行委員である、とのこと［『白光』1976 年 7 月号、66 頁、中央学術研究所編『宗教間の協調と葛藤』、815 頁、参照］。

同 51（1976）年 7 月 18 日、「結婚を祝う日」が聖ヶ丘道場において開かれた。五井夫妻が出席し、新婚の人たちは一組一組、五井昌久から祝福と「お浄め」を受けた。美登里夫人から記念品が代表者に手渡され、五井からは家庭調和の秘訣というような話があったそうである［『白光』1976 年 9 月号、64 頁、参照］。

同 51（1976）年 8 月、白光誌上で、白光真宏会伝道局普及部が「祈りのポスター貼付活動」をすすめた。世界平和を祈願する言葉〔「世界人類が平和でありますように」〕のこの祈りのポスターを、村にも、町にも、日本人の各家々に貼付するのが活動の目的。貼付活動は、白光真宏会会員でも会員外有志でも奉仕の意志があればだれでも参加できるという［『白光』1976 年 8 月号、54 頁、参照］。

同 51（1976）年 8 月 15 日（終戦記念日）に、東京と大阪で白光真宏会による「平和行進」がおこなわれた［『白光』1976 年 10 月号、55-56 頁、参照］。

同 51（1976）年 11 月のある日、五井昌久が昱修庵から妻・美登里にいつものように〔五井は、朝と晩、1 回ずつ、美登里に電話をかけていた〕電話をかけたとき、美登里は次のように五井昌久に話したそうである。「先生は還暦、私ももう五十五歳。ふりかえってみると、お互いに人々が幸せになることだけを祈りつづけて暮らしてきて、精神も肉体生活も、どうやら救われた形になってきた人も随分とありますわね。今日まででも、幾分世の中のために尽くしたことになるのでしょうね。／それもそうだけれど、それにもまして私が幸せだと思っていることは、人柄も、考えも、趣味も、私と通じ合うし、愛が深くてや

さしくて、素直で勇気のある人と一緒に暮らしていられることね、……」[『神人』第 34 号、2006 年 6 月 1 日、14 頁]。そう言って美登里は楽しそうに笑っていたという。五井夫妻が互いをたいせつにおもっている様子が伝わってくるだろう。

同 51（1976）年 11 月 23 日、聖ヶ丘道場にて、五井の「還暦祝賀統一会〔「五井先生御還暦祝賀統一会」〕」が行われ、五井夫妻らが出席。五井昌久が短い話をした後、妻の美登里が挨拶で夫との間のエピソードを話した。そして、五井は「統一指導」をおこなった[『白光』1977 年 1 月号、21-32 頁、参照]。

同 51（1976）年 11 月 3 日（文化の日）、東京・兵庫（神戸）・岡山で「平和行進」がおこなわれた[『白光』1977 年 1 月号、59-60 頁、参照]。

同 51（1976）年 12 月 17 日、五井昌久に 2 人目の孫〔西園寺夫妻の次女〕が誕生。五井が、「里香（りか）」と命名［髙橋『五井せんせい』、272 頁、『白光』1977 年 2 月号、66 頁、参照]。

昭和 52（1977）年 1 月、本部聖ヶ丘道場にて「元旦祝賀式」が執り行われた。五井は挨拶し、「お浄め」をした[『白光』1977 年 2 月号、66 頁、参照]。

同 52（1977）年 3 月 21 日（春分の日）、「第 7 回聖ヶ丘みたままつり」が執り行われた。「みたましろ」に五井が柏手をうって「お浄め」をした。五井昌久の話に代わって、娘の昌美が話をした[『白光』1977 年 5 月号、21-30 頁、参照]。

同 52（1977）年 4 月、機関誌上で、白光真宏会東京道場内伝道局「光のベルト日本縦断」実行委員会のよびかけによる祈りのポスター貼附運動が提起された。〝世界人類が平和でありますように〟という文字が書かれたポスター〔祈りのポスター〕を北海道・稚内から九州・鹿児島まで全国の主要都市に、日本列島を「光のベルト」が縦断するように貼附するのだという。この運動は、同 52（1977）年 4 月上旬から同年 11 月 23 日〔五井の誕生祝賀会〕までの期間、展開すると機関誌上で告知[『白光』1977 年 4 月号、55 頁、参照]。

同 52（1977）年 4 月 29 日は東京と神奈川（横浜）で、同年 5 月 5 日は大阪で、「平和行進」がおこなわれた[『白光』1977 年 6 月号、62 頁、参照]。

同 52（1977）年 5 月も 20 日過ぎ、五井は、伸ばしていたあごひげを、そり落とした[『白光』1977 年 7 月号、78 頁、参照]。

同 52（1977）年 7 月、五井昌久の還暦を祝って、詩集『純白』を発行。書店には流通しない本で、奉謝金 2000 円、本部道場、東京道場、京都道場で求めることができた[『白

光』1977 年 7 月号、66 頁、参照]。

同 52（1977）年 7 月 17 日、「結婚を祝う日」が開催され、五井は新婚の会員夫婦のために「魂結び」を行う。五井は、82 組のカップルにむけて「お浄め」をした［『白光』1977 年 9 月号、65 頁、参照］。

同 52（1977）年 7 月 29 日から同年 8 月 1 日にかけて、光のベルト日本縦断実行委員会は、白光真宏会の青年隊を沖縄県・那覇に派遣。彼らは全土にわたって活動し、ポスター〔祈りのポスター〕を 1500 枚余り貼り、平和行進、小講演会などを開いてきたという。こうして、「光のベルト（「祈りのポスター」）」が、日本の南は鹿児島県から沖縄県まで広がった［『白光』1977 年 9 月号、65 頁、参照］。

同 52（1977）年 9 月、白光誌上にて、〝世界人類が平和でありますように〟という英文ポスター〔“May Peace Prevail on Earth”の文字であろう〕が出来た、と告知。英語を母国語とする国はもちろん、日本国内でも外国人観光客の多い都市・個所に貼ることを白光誌上で、勧めている［『白光』1977 年 9 月号、65 頁、参照］。

同 52（1977）年 10 月、聖ヶ丘道場が窓口となって、「祈りのライト〔祈りの言葉が入った看板状で、ボックスの内側から光を照らすもののようである〕」（3 つのサイズ）の申込受付を、白光誌上で勧めている［『白光』1977 年 10 月号、64 頁、参照］。

同 52（1977）年 11 月 1 日現在で、約 10 万枚の「祈りのポスター」を北海道から沖縄まで全国津々浦々に貼付したという。この「光のベルト」活動は、次年度以降も白光真宏会の主要な活動の一つとして継続の予定と、機関誌上で告知。次年度以降、祈りのポスターは、新しいサイズ（大・中・小）をつくり、それには和文に加え英文入りのものもあるとのこと。また、熱意のあまり無断でポスターを貼ることのないよう、東京道場内「光のベルト」実行委員会からのお願いが機関誌に付された〔苦情がいくつか来たのが、お願いを付記した理由〕［『白光』1977 年 12 月号、54 頁、参照］。

同 52（1977）年 11 月 3 日（文化の日）、東京と名古屋で、白光真宏会の「平和行進」がおこなわれた［『白光』1978 年 1 月号、表 3 頁、参照］。

同 52（1977）年 11 月 23 日、聖ヶ丘道場にて「五井先生お誕生祝賀会」が開かれる。五井夫妻らが出席し、美登里夫人からの話があった。五井昌久は、笑顔で白光こども会の花束贈呈を受けて、すぐに美登里夫人にバトンタッチしたという。筆者が関係者（当時の白光真宏会会員）から聞いた話では、通常、大勢の会員の前で話をすることはなかった夫人が〔1 年に 1 度だけ〕五井昌久に代わって話をしたのは、五井の体調がすぐれず、長い

時間人前で話をするのが困難な状態にあったから、とのことである［『白光』1978 年 1 月号、20-22 頁・31-32 頁、等、参照］。

昭和 53（1978）年 1 月、聖ヶ丘道場にて「元旦祝賀式」があった。五井は、「お浄め」をおこなった［『白光』1978 年 2 月号、64 頁、参照］。

同 53（1978）年 1 月、機関誌上にて、五井昌久の墨蹟による色紙（精巧な複製、サイズは縦 32 センチ・横 40.5 センチ）が出来たと告知。色紙には「世界人類が平和でありますように」の文字が書かれてある。問い合わせ窓口には、聖ヶ丘道場・東京道場・京都道場、と白光誌上で案内されている［『白光』1978 年 1 月号、59 頁、参照］。

また、昭和 53（1978）年 1 月、機関誌上にて、白光真宏会（本部）の取り組みとして、「白光誌友の増大運動」の展開を改めて提案。白光誌の読者を増やしていくため、同誌を読んでくれそうな人の紹介を、同会から呼びかけた［『白光』1978 年 1 月号、65 頁、参照］。

同 53（1978）年 1 月 15 日、「聖ヶ丘発祥 20 周年記念祝賀統一会」が開かれた。聖ヶ丘発祥 20 周年祝賀の統一会が行われたこの日、「次は富士大道場の建設である」との宣言がなされた。白光真宏会・瀬木理事長によれば、五井はすでに数年も前から「次は富士山麓の道場だね、規模は 1 万人ですよ」と時折り、瀬木ら教団の幹部たちに語っていたという。同会の世界的活動にふさわしい場として、今後、富士大道場建設に向かって出発する旨を、瀬木は機関誌の中で述べた［『白光』1978 年 3 月号、33-37 頁、参照］。

同 53（1978）年 2 月、白光誌上で、白光真宏会の瀬木理事長は、昭和 53（1978）年から、祈りによる世界平和運動に賛同し参加する「協賛団体」づくりを、広く呼びかけていきたい、と述べた。五井のねがいである「祈りによる世界平和運動」の拡大をさらにおしすすめるために、瀬木は機関誌をとおして各種団体の協賛を呼びかけた［『白光』1978 年 2 月号、30-34 頁、参照］。

同 53（1978）年 3 月 19 日、聖ヶ丘道場にて「第 8 回聖ヶ丘みたままつり」が執り行われた。五井が登壇し、「みたまのお浄め」と「統一指導」をした。柏手、霊笛〔口笛〕のお浄め、そして来場者にむけて五井から短い言葉があった［『白光』1978 年 5 月号、33-36 頁、参照］。

同 53（1978）年 5 月、白光誌上にて、白光真宏会・瀬木理事長から富士道場建設のための募金事業について、告知された。富士山麓朝霧高原の道場用地に大道場などを建設するにあたり、白光真宏会の会員に 20 億円の募金をもとめた。募金の期間は、1978（昭和 53）年 6 月から 1983（昭和 58）年 5 月までの 5 年間。募金の方法は、一口 1000 円として（何

口でも)、毎月本部に積み立てるという。また、富士道場建設資金として、寄付金の申し込み（払い込み）についても、機関誌上で募った［『白光』1978 年 5 月号、37-40 頁、参照］。

同 53（1978）年 7 月 16 日、「結婚を祝う日」が〔聖ヶ丘道場にて〕執り行われた。72 組のカップルにむけて、五井は「お浄め」をおこなった［『白光』1978 年 9 月号、64 頁、参照］。

同 53（1978）年 8 月、白光誌上で、五井の主著『神と人間』の英訳本、*GOD AND MAN* を刊行した、と告知。英訳したのは高木俊介博士。この英訳本 *GOD AND MAN* には、高橋英雄編著『如是我聞』の内容や「因縁因果をこえる（『白光』1975 年 7 月号の法話）」の英訳も巻末に付されているという［『白光』1978 年 8 月号、64 頁、参照］。

同 53（1978）年 8 月 6 日、広島被爆の日、東京・京都・名古屋など全国各地で白光真宏会会員らによる「8・6 平和大行進」がおこなわれた。参加者は、「祈りのゼッケン」を着け、プラカードや万国旗などを手に〝世界人類が平和でありますように〟という祈りの言葉を繰り返し唱えつづけ行進したという。行進の道中、祈りのリーフレットや新聞〔月刊紙『世界平和の祈り』のことだろう〕、造花、風車を配る姿もあったそうである［『白光』1978 年 10 月号、55-56 頁、参照］。

同 53（1978）年 11 月 3 日（文化の日）、東京で「平和行進」（約 1 時間）をおこない、世界平和の祈りを宣布したという。全国各地でもパレード〔「平和行進」〕は行われたそうである［『白光』1978 年 12 月号、64 頁、参照］。同 53（1978）年 10 月 21 日には松本（長野県）で、同年 10 月 29 日には奈良で、同年 11 月 3 日には、東京のほかに、神戸・名古屋で、同年 11 月 5 日には横浜で「平和行進」が行われた［『白光』1979 年 1 月号、54-56 頁、参照］。

同 53（1978）年 11 月 23 日、聖ヶ丘道場にて、五井昌久 62 歳の「お誕生祝賀統一会」が行われた。五井夫妻らが出席し、美登里夫人からの話があった。〝お誕生の歌〟を参集者全員が歌う時、五井はにこやかに指揮していたという。五井は、「統一指導」をしたあと、本来なら一言、話をするところだが「……まだ咽喉が悪くてしゃべれないので、私〔五井昌久〕に代って奥方〔美登里〕にひとことしゃべって貰いましょう」［『白光』1979 年 1 月号、29 頁］と夫人に話をまかせた［『白光』1979 年 1 月号、29-32 頁、参照］。

昭和 54（1979）年 1 月 1 日、聖ヶ丘道場にて「元旦祝賀式」が行われ、五井はからは「お浄め」があった［『白光』1979 年 2 月号、64 頁、参照］。

同 54（1979）年 1 月、白光誌によれば、五井の主著『神と人間』英訳版に続いて、朝鮮語やフランス語などへ翻訳する動きが進んできているという［『白光』1979 年 1 月号、40 頁、参照］。

同 54（1979）年 1 月、季刊英文誌『HEYWA へいわ』（36 頁）がこの 1 月に刊行される予定と白光誌上にて告知［『白光』1979 年 2 月号、64 頁、参照］。そして同 54（1979）年 2 月に、英文雑誌『HEYWA へいわ』（季刊、B6 判・36 頁）第 1 号が発行された［『白光』1979 年 4 月号、39 頁、参照］。

同 54（1979）年 3 月 18 日、聖ヶ丘道場にて、「第 9 回聖ヶ丘みたままつり」が行われた。五井は、壇上にて「みたましろ」にたいして〝みたまのお浄め〟をしたという［『白光』1979 年 5 月号、25-31 頁、参照］。

同 54（1979）年の頃、作詞家・宮本旅人（たびと）（1907-1982）から、五井昌久に会いたい、との依頼があったが、五井の病状が重く、昱修庵の二階から一歩も外へ出られなかったため、五井と宮本との面談は、かなわなかった。宮本旅人と五井は、むかし、短歌仲間だったようである。宮本は、「ふるき友　五井兄へ」の題で詩を書き（昭和 54 年 4 月 27 日作）、五井の側近・髙橋英雄にその詩を届けた。宮本旅人のほうが年上だが、この詩のなかでは、宗教者としての五井昌久に敬意をあらわし、同時に〝歌の友〟としてのなつかしさ・親しさを記している［『五井先生研究』第 159 号、2016 年 12 月 20 日、23-25 頁、参照］。

同 54（1979）年 4 月 29 日（天皇誕生日）には東京で、同年 5 月 5 日には前橋（群馬県）で、同年 5 月 6 日には広島で、白光真宏会による「平和行進」がおこなわれた［『白光』1979 年 7 月号、58-59 頁、参照］。

同 54（1979）年 6 月、白光誌上で、英文季刊誌『HEYWA へいわ』1979 年夏号（B6 判・本文 40 頁）が発売中、と告知されている［『白光』1979 年 6 月号、31 頁、参照］。

同 54（1979）年 6 月、白光誌上で紹介する「普及用パンフレット」（白光真宏会出版局発行）[53] の種類が増えてきた［『白光』1979 年 6 月号、37 頁、参照］。

同 54（1979）年 7 月 1 日、西園寺夫妻は、北海道稚内市を訪れ、同市に〝世界人類が平和でありますように〟という「平和祈願柱」を寄付した［『白光』1979 年 9 月号、46-48 頁、参照］。

同 54（1979）年 7 月、五井は、「日本宗教代表者会議〔JCRR〕（議長：篠田康雄〈1908-1997　1979 年当時、神社本庁総長〉）」より、顧問に推挙されたという［『白光』1979 年 9 月号、64 頁、参照］。

同 54（1979）年 8 月 5 日、ロサンゼルスにて、全米で初の「平和行進」があった。「May Peace Prevail on Earth!」の声がロスのダウンタウン（リトル・トーキョー）にひびいたという。40 人ぐらいの人が集まり、中には、カラフルなハッピを着たり、自製のプラカードを作ってきていた人もいたそうである［『白光』1979 年 10 月号、59 頁、参照］。また、同 54（1979）年 8 月 5 日、東京・新宿、京都ほか全国各地で恒例の「平和行進」が行われたという［『白光』1979 年 10 月号、表 3 頁、『白光』1979 年 11 月号、58 頁、参照］。

同 54（1979）年 9 月 30 日、熊本市内を白光真宏会会員らが「平和行進」をした［『白光』1979 年 12 月号、表 3 頁、参照］。

同 54（1979）年 10 月、白光誌上にて、英文季刊誌『HEYWA へいわ』秋号（第 3 号）発売中、と告知。五井『神と人間』の一部分、合気道（植芝盛平）について五井が書いた文章や詩などの内容が英文で収録されているという［『白光』1979 年 10 月号、36 頁、参照］。

同 54（1979）年 10 月、白光誌上の「五井先生の普及用パンフレット」の中に、ドイツ語版パンフレットが加わった。パンフレットの題は、「Aufruf zum Gebet um dem〔den〕Weltfrieden」で、世界平和の祈りについて書かれた独文小冊子（50 円）である［『白光』1979 年 10 月号、39 頁、参照］。

同 54（1979）年 11 月 23 日、聖ヶ丘道場にて「五井先生 63 才御誕生祝賀会」が開かれ、五井夫妻らが出席。五井昌久に代わって美登里夫人からの話があった。また、五井昌久からは「統一指導」がおこなわれた［『白光』1980 年 1 月号、19-21 頁・26-28 頁、参照］。

同 54（1979）年 12 月、白光誌上にて、白光誌の表紙の絵をデザインした「白光絵ハガキ」を紹介した。五井の言葉が入った物と入らない物の 2 種類あり、白光誌の宣伝用に本絵ハガキの利用を勧めている［『白光』1979 年 12 月号、41 頁、参照］。

昭和 55（1980）年 1 月元旦、例年のように「元旦（祝賀）式」が聖ヶ丘道場で行われ、最後に五井が登壇、柏手を打って「お浄め」の後、閉会［髙橋『五井せんせい』、270 頁］。

同 55（1980）年 1 月、五井は機関誌に詩「富士山」を書き、富士山のことを〝世界平和を築きあげる中心の地〟と述べた[54]［『白光』1980 年 1 月号、12-13 頁、参照］。

同 55（1980）年 2 月 24 日、聖ヶ丘道場にて、「法人設立 25 周年記念祝賀会（宗教法人設立 25 周年祝賀統一会）」が行われた。発祥会員を代表して田沢ヨシ講師〔日立製作所に五井と同時期、勤務していた〕・市川宣隆講師が、五井との出会いや数十年前のエピソードなどを語った。五井も登壇し、「お浄め」をおこなった［『白光』1980 年 4 月号、34-35

頁、参照]。

同 55（1980）年 2 月 25 日、五井に 3 人目の孫〔西園寺夫妻の三女〕が誕生、五井が、「由佳（ゆか）」と命名した［髙橋『五井せんせい』、272 頁、『白光』1980 年 4 月号、64 頁、参照]。

同 55（1980）年 3 月 16 日、聖ヶ丘道場にて、「第 10 回聖ヶ丘みたままつり」が執り行われた。五井が登壇し、壇上の〝みたましろ〟の「お浄め」をした。五井の「ハイ、おめでとうございます」の言葉につづいて、五井による「統一指導」がおこなわれた[『白光』1980 年 5 月号、27-29 頁、参照]。

同 55（1980）年 4 月 1 日、富士朝霧高原の富士道場建設予定地で地鎮祭が執り行われ、〔富士〕道場の建築工事が始まった。その土地の四隅に「霊光写真」を埋設したという[『白光』1980 年 5 月号、表 3 頁、参照]。

同 55（1980）年 4 月、白光誌上で、白光真宏会青年部の雑誌『青空』（隔月刊・A5 判平均 56 頁）通巻 69 号の購読案内〔青年部員に限らず、だれでも購読できる、と一ヵ年分の定期購読を勧めている〕を掲載［『白光』1980 年 4 月号、52 頁、参照]。

同 55（1980）年 4 月 20 日（日曜日）、「聖ヶ丘統一会」での最後の「祈り」を、五井は自分ではやらず、代わりに養女の昌美にやらせた。そして「統一指導」も五井昌久に代わって昌美が執り行った。五井は、その様子を一部始終、昱修庵からモニターテレビで見て、「よくやった」と昌美を褒めていたという［髙橋『五井せんせい』、273 頁]。この日、4 月 20 日は、昌美の目から見て、いつもと比べると五井昌久の体調はそんなに悪い状態ではなかった。しかし五井は、「今日は私は〔「統一会」に〕出ないからね」「今日は自分でお浄めをなさい」と昌美に言い、この日 3 回目の「統一（「お浄め」）」を五井のテープ音源によるのではなく、初めて昌美がおこなった。これは、昌美が五井昌久の後継者として同会を受け継ぐことを、会員たちの心に刻みつけた事柄であったろう。その後、五井が亡くなるまでの「統一会」での「お浄め」は、五井昌久みずからがおこなう［西園寺『天命に生きる』、188-195 頁、参照]。

同 55（1980）年 4 月 29 日（天皇誕生日）、東京にて、白光真宏会の「平和行進」がおこなわれた。参加人数、約 500 名［『白光』1980 年 6 月号、64 頁・表 3 頁、参照]。

同 55（1980）年 5 月、白光誌上にて、五井の原稿（白光誌新年号に掲載されたもの）が、広告を出している雑誌『女性仏教』〔昭和 55 年〕3 月号に転載された、と告知［『白光』1980 年 5 月号、64 頁、参照]。

同 55（1980）年 5 月、白光誌上にて、五井の主著『神と人間』のドイツ語版（中沢英雄訳）が出来た、と告知。その内容は、『神と人間』に加えて、五井の著作『日本の心』（初版は 1973 年）から「宗教と合気道〔合気道・植芝盛平翁〕」、『人類の未来』（初版は 1974 年）から「宇宙人と地球人」、『宗教と平和』（初版は 1968 年）から「宗教と道徳」の独文が収録されているという［『白光』1980 年 5 月号、65 頁、参照］。

同 55（1980）年 5 月 11 日（母の日）、「白光合気道道場開き祝賀会」が開かれた。当日は、道主〔合気道二代目の継承者〕・植芝吉祥丸（1921-1999）らを迎え、演武などが行われた［『白光』1980 年 7 月号、34-38 頁、参照］。

同 55（1980）年 6 月の白光誌「巻頭言」によれば、五井は身体じゅう痛みつづけて階下にも降りていけない状況だったが、思い切って昱修庵の庭に出てみた、という。美しいつつじの紅、草木の緑などをみて、〔「神様」に〕感謝していたそうである［『白光』1980 年 6 月号、2-3 頁、参照］。

同 55（1980）年 6 月、白光誌によれば、これまでに数千万枚の「祈りのリーフレット」が日本国中に配布されたという［『白光』1980 年 6 月号、65 頁、参照］。

同 55（1980）年 6 月 29 日、和歌山市で、白光真宏会の「平和行進」がおこなわれた［『白光』1980 年 9 月号、表 3 頁、参照］。

同 55（1980）年 7 月、白光誌によれば、これまでに貼付された「平和ポスター」が約 47 万枚、建立された「平和祈願塔」が推定約 3 千本、とのこと［『白光』1980 年 7 月号、60 頁、参照］。

同 55（1980）年 7 月、『五井昌久全集』（全 13 巻）の第 1 巻「講演編」が発刊［奥付頁、参照］。同 55（1980）年 7 月 27 日、〔五井が〕「統一会」に出席［五井昌久研究会サイト http://goisensei.com/study/index.shtml　2018 年 9 月 16 日最終閲覧、参照］。

同 55（1980）年 8 月 3 日、雨天のなか、東京・新宿で、200 名以上の人々が参加して、白光真宏会の「平和行進」がおこなわれた［『白光』1980 年 9 月号、表 3 頁、参照］。

五井は、昱修庵に籠もってからも聖ヶ丘道場での「統一会」には出席し「法話」と「お浄め」を行った。「お話〔「法話」のこと〕が出来なくなってからも、やせ細ったお体を壇上に運ばせ、統一お浄めは欠かしませんでした。」［『五井先生研究』2010 年 8 月号、8 頁］という。月に 4 回行われた「聖ヶ丘統一会」の最後の「お浄め」には必ず登壇し、「お浄め」をした。「統一指導」も 4、5 分間、おこなったそうである［髙橋『五井せんせい』、240 頁、参照］。そして五井は、ひどい咳のため一日に連続して一時間も眠ることが出来なく

なっても、機関誌『白光』に掲載する毎月の法話・巻頭言・詩・短歌・俳句の原稿は締切り前にきちんと書き上げていた。自力でペンが持てないときは、口述筆記をさせた［髙橋『五井せんせい』、236 頁・240-241 頁］。

筆者が関係者〔髙橋英雄氏〕から聞いた話では、「昱修庵に籠もっていたが、〔夫人を気遣って〕奥さんに看病させなかった〔側近が世話をしていた。自宅は千葉県市川市八幡にあり、美登里夫人は自宅で暮らしていた［清水『ある日の五井先生』、209 頁、参照］〕。昌美先生も医者をすすめたが……〔医者にかかろうとしなかった〕」という。「食べる量は少しだったが、少しずつは食べた。普通の味噌汁とかの食事。点滴もしなかった。栄養剤も飲まない」とのこと。五井は自身のことを〝お床（とこ）の中の男（漢（おとこ））〟と言って周りの者を和やかにさせたそうである。また、ある時は、「今日は 1 時間眠れた」と言っていた。「亡くなる 2 週間前に、〔昌美はじめ家族らの懇願もあって〕会員のお医者さんにかかった。薬を飲んだが吐いた。水がたまっていた。体外に水を出す薬を飲んだが吐いた」と〔髙橋英雄氏は当時のことを思い出しながら〕筆者に語ってくれた。

同 55（1980）年 7 月頃、浮腫（むくみ）が深刻な感じだったため、医者に来てもらい、医者は点滴をすすめたが、五井はやんわりと拒否した。小児用の痰（たん）をとるような薬が出され、五井も何日間か忠実に服用した。が、同年 8 月 7 日、側近の髙橋英雄は五井の居室である昱修庵に呼び出され、「私はみんなの愛念、お医者さんの愛念によって、診察も受け、薬も飲んだけれど、私はもう薬は飲まない。お医者さんにもかからない」と言われたそうである。「今更、他に頼るなんて気持ちはひとつもない」、医師には感謝するけれども、「あとは神さまの力でいたしますからと伝えてね」と五井は髙橋英雄に言ったという。そのときの五井は、「救世（きゅうせい）の大光明！　光明遍照！　光明遍照！」と唱えたら、薬とともに胃の中に溜まっていたものが全部吐き出されて心気（心身）爽快になった、と髙橋に語っていた［髙橋『五井せんせい』、274-276 頁、参照］。

同 55（1980）年 8 月、白光誌上にて、「各国語〝世界人類が平和でありますように〟」が掲載。フランス語・ドイツ語・スペイン語・ポルトガル語・ロシヤ語・中国語の 6 ヵ国語による祈りの言葉が紹介されている［『白光』1980 年 8 月号、65 頁、参照］。

同 55（1980）年 8 月 10 日、五井は第二日曜日の「統一会」に登壇、柏手による「お浄め」を行った［髙橋『五井せんせい』、276 頁］。

同 55（1980）年 8 月 11 日あたり、五井昌久は、そのとき軽井沢にいた昌美に髙橋をとおして電話をかけさせ、髙橋が代読するかたちで「私は元気だ、みんなのおかげ、昌美に

も感謝」というようなメッセージを伝え、最後に五井が電話口に出て昌美に「お浄め」をした、という［髙橋『五井せんせい』、276-278 頁、参照］。

同 55（1980）年 8 月 16 日午前中から午後 5 時頃まで、髙橋英雄は昱修庵で、浮腫が出た五井の両足、背中をずっとさすったそうである［髙橋『五井せんせい』、278-279 頁］。同年 8 月 17 日、日曜日は「統一会」のある日だった。17 日早朝、昱修庵から髙橋に電話があった。五井の様子がおかしいというので髙橋が駆けつけると、五井は「大いびき」をかいて寝ており、それを見て、瞬間、髙橋は「ああ、もう駄目だ」と思ったという。医師に駆けつけてもらったが、手のほどこしようがなかった。同年 8 月 17 日午前 8 時 15 分、五井の心臓は止まった［髙橋『五井せんせい』、279-280 頁、参照］。

五井は昱修庵から一歩も出られなくなっても、朝と晩、妻の美登里に電話をかけることは欠かさなかった。逝去の前日 8 月 16 日の晩も美登里に電話をかけた。翌 17 日の朝も、「そろそろお電話の時間ですよ」と側近が言うと「ハイよ」と答えたそうである。しかし、電話をかけることなく急逝することとなった[髙橋『師に倣う』、79 頁、参照]。

同 55（1980）年 8 月 17 日午前 8 時 15 分、急性心不全のため満 63 歳 (55) で死去した［『朝日新聞』1980 年 8 月 19 日、9 頁］と五井昌久の死が報じられた。同日、五井は、遺言をのこすこともなく、サッと亡くなったという［髙橋『五井先生を語る（二)』、19 頁］。

五井昌久の没後、同 55（1980）年 8 月 27 日、白光真宏会「富士聖地」の開所式が行われた［『五井先生研究』第 168 号、2017 年 11 月 11 日、12-13 頁、五井昌久研究会サイト http://goisensei.com/study/index.shtml　2018 年 9 月 17 日最終閲覧、参照］。

同 55（1980）年 10 月、白光誌巻頭の口絵に、五井の遺影が掲載された。なお、この機関誌の 10 月号が「五井先生ご帰神追悼号」となった［『白光』1980 年 10 月号、巻頭口絵頁・表 1 頁、等、参照］。

◆「闘病期」の要点

晩年のこの時期は、病との闘いだった。五井の身体にあらわれる様々な苦痛は、「地球（世界人類）の業の浄化」と結びつけて考えられていた。ここに、岡田の「浄化の理論」「薬毒論」の「影響」がうかがえる、と筆者は見ている。

五井の晩年は昱修庵で床に伏している時間が長かった。同会では、五井の苦しみに意味づけがなされ、人類の業を五井が一身に受けて、いわば「身代わり」となって業を浄めている、といわれる。病床の五井の様子について、当時同会職員だった清水勇は『ある日の

五井先生』（2007 年）において次のように記している。

……昼夜を分かたず世界の業を一身に引き受けてお浄めなさっておられたのです。肉体的な現われとしては腹部の激痛でした。

先生は「包丁で腹を切り裂かれるような痛み」とおっしゃっておられました。また間断なく出る痰は時には気管を塞ぐことがありますが、その時は苦しみをじっと耐えて、霊的な呼吸をすると痰が切れるとのことでした。あえて医者が病名をつけるとしたら「気管支喘息（ぜんそく）」でしょうか。

したがって睡眠もまとめて一時間、二時間おとりになることはなく、五分刻み、十分刻みとおっしゃっておりました。まさに十字架上のイエス・キリストです。

「イエスは一昼夜だったけれど、わたしは十年間だよ」と。……

「夜通し痛み続け、明け方になってちょっと楽になる。その時みんなだったら、あー今日もこれから痛みが襲ってくるんだろうな、嫌だなあと思うだろうけれど、わたしは決してそうは思わないよ。昨日は昨日で終わった。今日こうして新しい一日を与えて下さった。わたしの身体を使って世界を浄めて下さる神様ありがとうございます。これがわたしの光明思想だよ」

というお言葉をお聞きしたことがありました。

［清水『ある日の五井先生』、122-124 頁］

当時の五井を知る関係者の話を聞いても、その苦しみの状況は凄絶で、そうした中にあっても冗談をとばす明るさは失われなかった、そうである。晩年、時期は定かでないが五井の体は痛々しいほど痩せて、「わたしもとうとう三十五キロになってしまったよ」［清水『ある日の五井先生』、135 頁］と清水に語ったという。

五井は晩年も機関誌『白光』の原稿をつくっていたが、死去〔同会では五井の死を「帰神」という〕が近い頃は、すでに机に向かって法話の原稿を書く体力がなく、「口述筆記〔五井が口述し、側近が代わりに筆記する〕」していた、といわれる［清水『ある日の五井先生』、135 頁・159 頁、参照］。

また五井は、「統一会」での「お浄め」を晩年も行っていた。当時の身体の厳しい状況を示す話が、次のように書かれている。

……先生のお体にとって特に厳しくなったのは昭和五十年頃からでした。

統一会の日、聖壇脇の控室で開会をお待ちになっている時に、お召しものを脱いで流れ出るあぶら汗を拭われ、両肩にタオルのパッドをお入れになり、会員に心配をかけぬよう、何事もなかったように姿勢を正してご登壇なさったことがありました。ご登壇もご自分の足で歩むことができず、御神輿（おみこし）のように椅子を二本のシャフトで保持し、男性職員のＩさんとＴさんがそれを前後で支えて聖壇までお運びしました。聖壇の所定の位置にお着きになると、シャフトは縮めるようにしてありました。その頃の私の役目は聖壇の幕の開（あ）け閉めの係でした。……

先生の統一ご指導によるお浄めが済むと統一会の終了です。私は大急ぎで幕の開閉ハンドルを回して幕を閉めます。会員さんから、「もう少しゆっくり幕を閉めて下さい。頭を上げたら、もう幕が閉まっていました」という意見があったそうですが、先生の肉体のお辛い状態をつぶさに拝見している立場からは、一刻も早く閉めて先生をお楽にして差し上げたいという気持ちでいっぱいだったのです。

［清水『ある日の五井先生』、192-194 頁］

このように自力で歩けないため、「神輿」をかつぐようにして運ばれ、居室のある昱修庵から聖ヶ丘道場の聖壇まで移動していた様子が分かる。統一会にやって来た会員らに、五井は、自身の体が弱っている姿をできるだけ見せないように振る舞っていたようである。

「一九五四年（昭和二十九年）より昭和五十五年まで、先生と毎日のようにお会いし、言葉を交わしてきた私」［高橋『新・師に倣う』、1-2 頁］という側近・高橋英雄は、苦しむ五井に「どうして先生がそうしなければいけないんですか」［高橋『新・師に倣う』、70 頁］と質問した。五井の答えは、

自分が望んだんだ。どうか私を世界人類の平和のため、日本の平和のため、人々のためにお使い下さい。自分の身にかえて……と大神さまにお願いしたんだよ。人類のカルマというものを自分の身にひきつけて、肉体を通して浄めよう、その肉体を通して浄める時に、……痛い、苦しい、というものを通さないと浄まらないんだ。だから私の場合は、胃が痛んだり、息がたえだえみたいな形を通して、私は世界人類の業を浄めているんだ。

［高橋『新・師に倣う』、70-71 頁］

とのことだったという。

側近・髙橋英雄によれば、五井は、〝望まれる宗教家像〟として、次のように語ったそうである。

「現在、本当の宗教家が必要です。神さまの業浄めの大掃除の手伝いをする宗教家がね。要するにおふり代えの出来る人たちです。」「……キリストみたいに身をもってやらないとネ。そういう宗教家がたくさん出てくることを望みます。われわれの役目は、まず業を浄めることです。人間の想いを浄めてからでなければ、何も出来ない」〔『五井先生研究』第 157 号、2016 年 10 月 30 日、9-10 頁〕

五井の考えだと、「大難」を自分の身にふり代えて浄め「小難」にする、〝業（想念）〟を自分の身に引きつけて浄めることで「大難」を「小難」にする、そうした〝働き〟を「おふり代え」といい、そうした〝役目（業を浄めること）〟を実行できる宗教家が多くなるのを望んでいたようである。

とくに、五井の思想的特徴として、人間の〔常日頃からの〝想い〟も含めて〕〝想念（想い）〟を浄めること（「想念の浄化」）を強調した。五井は、人間各人が「過去世（かこせ）」から今生（こんじょう）に引き継いできたとされる〝業想念（カルマ）〟を浄めるために最も有効な方法（手段）が、五井みずからが提唱した『世界平和の祈り』を唱えることであるとした。そして、彼は生涯にわたって、この「祈り」の普及につとめ、「講話」のたびに、〝業〟を浄めるとされる『世界平和の祈り』の重要性を繰り返し説いていた。

また、側近・髙橋英雄の個人誌〈あとがき〉によれば、「晩年の五井先生は健康第一とおっしゃり、私〔髙橋英雄〕が挨拶に伺うと、挨拶もそこそこにおっしゃるのは「体を大事にしなよ」というお言葉でした。」と、髙橋は五井から言われていたそうである。とくに晩年の五井は、床に伏していた昱修庵の二階の部屋から体調が悪いため外に出られなかった。それで髙橋は、五井をおもって〝〔師である五井も、自由に〕大地を自分の足でお歩きになりたかったのだろうな〟、と記している〔『五井先生研究』第 153 号、2016 年 6 月 25 日、32 頁、参照〕。

2　五井昌久の生涯と活動の概要（小括）

「戦前期」。五井昌久は、大正 5（1916）年 11 月 22 日、東京の下町に 9 人きょうだいの四男として生をうけた。彼は、病弱で貧しいなか、13 歳で働きに出る。文学や音楽が好きな少年だった。10 代の頃、田島商店の店員をしながら、通信教育で義務教育課程の勉強をし、いっぽうで坐禅（静坐）をしたりもしていた。

10 代の後半頃、彼は五井商店を開業し、歌人らとも交流。また、正式に声楽を学んだ。そして、20 代前半頃の五井は、聖書や仏典、武者小路実篤、トルストイなどの本を読んでいたという。

そして、23 歳のとき、兄の紹介で日立製作所の亀有工場に入社。五井は、工場では、文化活動を指導した。終戦半年くらい前に、工場の事務員から岡田茂吉の『明日の医術』を借りて読んだ。愛国心をもって、日立の軍需工場で働いたが、終戦ののち工場を辞めた。

「遍歴期」。戦後まもなく、五井は岡田茂吉の弟子から「霊線療法」などを学び、岡田の「浄化理論」に共鳴した。その後、生長の家・谷口雅春の本を読んで、その「光明思想」に感動。結果的に、世界救世教と生長の家の信者となった。五井は掌をもちいた「病気治し」に歩き、生長の家のほうでも葛飾信徒会副会長、地方講師として活躍した。

昭和 21（1946）年夏、五井は「天声」をきき、その時、「神さまに自らの命をささげた」という。その頃には、「心霊」に関心をもち、五井は日本心霊科学協会（心霊科学研究会）に入会して、スピリチュアリズムについて学んだ。

昭和 21（1946）年 9 月、労働問題をあつかう中央労働学園（出版部）に五井は就職した。ここでは、五井は編集の仕事をしていた。美登里とはこの職場で出会った。

そして昭和 24（1949）年に、「神霊現象」の実験会をしているという千鳥会に五井は入会。五井自身も同年から「霊修行」を始め、同 24（1949）年 6 月、五井は「神我一体」という覚りを得たとされる。翌 25（1950）年 7 月、五井昌久と美登里は結婚した。

「草創期」。生長の家信徒など、千葉県（市川）在住の人たちを中心に五井を信じ慕う人々によって、昭和 26（1951）年 11 月、「五井先生讃仰会」が結成される。そこでは、「個人指導〔相談ごとに五井がこたえる〕」や「お浄め」がおこなわれた。

「成立期」。五井先生讃仰会は宗教法人化し、「教義」が提示された。また、機関誌『白光』が創刊され、会員たちは毎月、五井の連載記事や「法話」を読むことが出来るようになった。

そして昭和 30 年代前半には、五井が提唱した「世界平和の祈り」をパンフレット（リーフレット）などで普及しはじめた。その普及の過程で、祈りの言葉（「世界平和の祈り」）

を英語など諸外国語に翻訳するようになった。

「展開期」。昭和 37（1962）年 6 月以降、白光真宏会の新しいプロジェクトとして「宇宙子科学」が本格的にはじまった。

翌 38（1963）年頃から、祈りの言葉を印刷した「祈りのポスター（ステッカー）」貼附活動や「祈りのリーフレット」配付活動が活発になる。

昭和 39（1964）年 8 月、千葉に「聖ヶ丘大道場」が完成。昭和 40（1965）年には、尚悦子を五井夫妻の養女にむかえた。これにより、尚悦子は、五井昌美となった。

昭和 41（1966）年 2 月頃から、財界人たちと五井とが語り合う「五井会」ができ、定期的に財界人との交流会がもたれるようになる。

また、昭和 43（1968）年頃より、伊勢神宮・熱田神宮・明治神宮などに五井たちが参拝する機会が多くなっていく。同 43（1968）年には、白光真宏会は「新宗連（新日本宗教団体連合会）」に加盟することを表明し、「祈りによる世界平和運動」を推進した。

昭和 44（1969）年 6 月、五井は、明治神宮の甘露寺宮司と歓談。

翌昭和 45（1970）年、五井は初渡米し、「祈りによる世界平和運動」を海外へ普及していく意識をたかめた。さらに、同 45（1970）年 10 月、五井は、京都で行われた「世界宗教者平和会議」に出席。同年、白光真宏会は、「世界連邦建設同盟」にも加入した。こうした宗教者たちによる平和会議に関わりをもちつつ、白光真宏会は「祈り」を主とした平和運動をおしすすめていく。

昭和 46（1971）年、五井は、安岡正篤と白光真宏会の昱修庵で長時間にわたって話をするなど、保守的な人たちとの関係がより親しくなっているようにみえる。昭和 47（1972）年の五井は、伊勢神宮・熱田神宮・明治神宮に参拝した。五井は、神社界との関係をたいせつにしつつ、いっぽうで国際的視野に立った「祈りによる世界平和運動」を拡げようとした。この頃以降、白光真宏会では、「世界平和の祈り」を唱えながら歩く「平和行進」をしばしば実施した。

「闘病期」。五井の体調がかなり悪くなり、昭和 48（1973）年 3 月から、昱修庵に居る時間が長くなっていく。会のほうは、新しい理事長（第二代理事長）に博報堂の社長を辞めた瀬木庸介を迎え、これにより広報・普及活動が強化した。

また、昭和 49（1974）年 1 月、五井は体調が悪いにもかかわらず伊勢神宮を参拝。同 49（1974）年 4 月には、五井は「日本を守る会」にかかわることになった。

晩年の五井は、昱修庵で「寝たきり」のような状態だったが、機関誌には毎月法話など

を執筆し、「祈りによる世界平和運動」推進のため、会員たちを鼓舞しつづけた。昭和 51（1976）年からは、「ピースポール（「世界平和祈願柱」）」の建立活動が各地にひろがった。そうした中、同 51（1976）年 4 月にも、五井は伊勢神宮に参拝した。

「闘病期」にあった五井だが、千葉の聖ヶ丘道場につづく大道場として「富士大道場（静岡）」建設をすでに計画していたという。そして昭和 50 年代は、「世界平和の祈り」による平和運動について記した外国語のパンフレットや、「世界平和の祈り」の言葉を記したポスター、リーフレット、ピースポールが国内外の広い範囲にひろがっていった。日本各地や米国でも「平和行進」がおこなわれるなど、「祈りによる世界平和運動」が会員たちによって盛り上がりみせるなか、五井昌久は昭和 55（1980）年 8 月 17 日、昱修庵にて亡くなった。享年 63。

以上が、五井昌久の生涯および活動の概要〔基本情報〕である。第 1 章の五井の生涯をみると、五井の理念（思想）形成を明らかにしていくうえで戦後まもなくの「(1-2) 遍歴期」をみることは欠かせない。そこで、第 2 章では、戦後まもなく、五井が、どういう教団（団体）あるいは人と接して、新しいものの見方・観念を獲得していったのかを見ていきたい。

註

(1) 本論文の末尾に付した資料、「五井昌久関連　略年表」(【表 1】)、参照。

(2) 生長の家総裁の谷口雅春も同じ 11 月 22 日生まれ。谷口と同月同日生まれであることについて、五井は自叙伝の中で「……生長の家では実際上次々と生じる悟道をはばむ障害、「過ぎたる饒舌」「いらざる多辯」への是正と共に、新しい宗教の在り方を拡める役目を、神から受け持たされる順序が生れて来てゐたのであらう。／同月同日の明け方氏〔谷口雅春〕が生れ、夕方私〔五井昌久〕が生れた、と云ふ定まりは、此の辺の真意を物語る神の秘め事ではなからうか。」［五井『天と地をつなぐ者』、45 頁］と述べている。五井は、谷口の教えを継いでそれを「修正」する、そのために（同月同日に）自身は谷口の後に生まれた、というような自負をもっていたのだろう。

(3) 昭和 23（1948）年頃、五井の母・きく〔［髙橋『五井せんせい』、32 頁］には「菊」とも記されている〕は、以下のように念仏している様子から、念仏信仰者だったことがわか

る。「就寝前には〔五井の〕母は仏壇にむかつて念仏を唱へ、私〔五井〕は黙つて瞑想するならはしになつてゐた。其の夜も私は瞑想に入り、母は仏壇に線香を焚いて念仏をはじめた」［五井『天と地をつなぐ者』、115 頁］。また、五井は「私も子供の頃から母親の念仏をきかされてきましたよ。……ナムアミダブツ、あなかしこ、あなかしこ、をききながら育てられたようなものです。」［高橋編著『続々如是我聞』、179 頁］と述懐している。蓮如（1415-1499）の『御文章（御文）』に「あなかしこ、あなかしこ」と出てくるので、五井の母親は浄土真宗の門徒だったと思われる。なお、高橋英雄の近刊書によれば、きくの家は、祖父の代に越中（今の富山県）から江戸に出て来て、米屋をやっていたという。浄土真宗の信仰篤く、五井の母・きくは毎晩、『正信偈』や『御文』を仏壇に向かってあげていたそうである。きくは、気丈な女性だった［高橋『五井せんせい』、33 頁、参照］。

(4) 五井は、機関誌『白光』の「巻頭言」で、「純真無礙」と題して、良寛について、次のように書いている。「……私〔五井〕は少年の昔は、良寛さんの人格が好きで、良寛さんのことを書いてある本を、あさり読みしては、こんな純真な、こんな柔和な、こんな円満な人格に自分もなりたいものだ、なんとかして良寛さんになりたい、良寛さんこそ自分の道を指し示す唯一無二の人である、と、自分の性情に照し合わせて、良寛さんを慕いつづけていたのであったが、いつしか種々な人の本を読み、種々な聖者賢者の影響を受け、良寛さんもその人々のうちの一人ということになってしまっていた。しかし良寛さんの行為から受けた影響は、今日になって、〔五井の〕日常生活のうちにその幾分かが自然に行為されているようである。」［『白光』1957 年 9 月号、2 頁］。このように、五井自身による文章の中で、良寛の〔純真無礙な、童心を損なわない〕行為から影響を受けたことをみとめている。

(5) 五井は、字が下手だった子供の頃のことを、機関誌上で、次のように述懐している。「小学校の頃、書き方で一度丙をもらって、親や兄弟から、さんざん叱られたり、辱められたりしたことがあって以来、奮起したという程大げさではないが、鵞堂流だの、西川流だのという、書道を何年となく習いつづけて、それでも生来の悪筆はなかなか直らず、習った程に上手にならぬまま、霊修業の道に入り、……」［『白光』1974 年 10 月号、2 頁］。このように五井は、小学生の頃から書道を習ったが、あまり上達しなかったという。それが、のちに宗教家になって、自由に把われない心で筆を走らせて書いていると、書家から褒められたりするようにもなったそうである［『白光』1974 年 10 月号、2-3 頁、等、

参照]。

(6) 佐藤紅緑（1874-1949)。青森県生まれ。昭和初期、「少年小説」で人気のあった作家。五井も紅緑の少年たちに理想を説く小説を読んで鼓舞された。『ああ玉杯に花うけて』(少年倶楽部文庫 2、講談社、1975 年〈初出は「少年倶楽部」1927 年 5 月号～ 1928 年 4 月号〉)、『少年連盟』(少年倶楽部文庫、講談社、1976 年〈初出は「少年倶楽部」1931 年 8 月号～ 1932 年 6 月号〉) など、多数の作品がある。

(7) 五井の自叙伝によれば、「この児が肺病にならなければ医学の不思議であるといふやうな囁きを交わしてゐた」[五井『天と地をつなぐ者』、2 頁] というように病弱で、「五井の金喰息子」[五井『天と地をつなぐ者』、11 頁] とも言われていた。しかし、五井は、坐禅を行い、宗教的呼吸法（ヨガのある呼吸法)〔腹式呼吸のようなものか〕が健康に役立ったという。彼は、医者への依頼心を捨て去り、病身を脱却するために坐禅観法を行った [五井『天と地をつなぐ者』、12 頁、参照]。

(8) この頃の五井の神観は、「……神と言ふ者は自然や人間を創造しただけで、創造された人間は自分自身の持つて生れた力を全部出し切つてゆくより仕方がなく、神が外から人間を助けて呉れると言ふやうなことは考へられなかつた。まして死後の霊魂の存在等は頭から考へてもみなかつた。」[五井『天と地をつなぐ者』、12 頁] というものだった。

(9) 五井は、音楽の学校では、声楽を学んだ [五井『天と地をつなぐ者』、6 頁、参照]。

(10) 高村光太郎（1883-1956）は、詩人・彫刻家で、彫刻家・光雲（1852-1934）の子 [『広辞苑』、参照]。竹内てるよ（1904-2001）は、詩人。竹内『海のオルゴール』はベストセラーになった [竹内『新装版　海のオルゴール』、奥付頁、参照]。また竹内は「霊能詩人」ともいわれ、竹内てるよの『因縁霊の不思議』には、五井が下記のように「推薦のことば」を書いている。「推薦のことば　五井昌久（白光真宏会会長）　竹内てるよさんは、かつて詩の先生として私〔五井〕の尊敬していた非常になつかしい人の一人なのです。誠実温厚な方で、これまでのおつきあいの中で嘘も偽りもありません。竹内さんの霊的な活動については、これまで良く知られていたにも関わらず、未だにまとめられた本というものがありませんでした。この方の言うことなら間違いのないことを私もよく知っております。この本は必ず皆さんの良い参考になることと信じています」[竹内『因縁霊の不思議』、カバー袖]。

(11) 五井『天と地をつなぐ者』[21 頁] には、「岡田茂吉氏の明日への医術と云ふやうな題名の著書」と記してあるが、その岡田茂吉の本の題名は『明日の醫術』が正しい。

（12）五井の側近・髙橋英雄によれば、

田沢ヨシ様〔当時の日立製作所・工場で働いていた事務員。旧姓が幸田［五井『天と地をつなぐ者』、21 頁］〕は Y 氏〔「山本さん」〕より〔、彼女の〕お母さんの幸田みさをさん〔幸田操さん［五井『天と地をつなぐ者』、21 頁］〕ともども、霊線療法を学んだと思います。……

［髙橋英雄氏からの返信書簡（2018〈平成 30〉年 8 月 16 日付）］

ということである。

（13）岡田茂吉の説によれば、人間の掌から「霊線」という「神からくる光」が出ているとし、その掌を当てる（かざす）ことで、病気が治るとされる［五井『天と地をつなぐ者』、22 頁、参照］。

（14）五井の自叙伝『天と地をつなぐ者』には、「ホルムスと云ふ英人の書いたものを谷口雅春と云ふ人が訳した百事如意と云ふ本」［五井『天と地をつなぐ者、27 頁］とあるが、『新百事如意』が正しいと思われる。『新百事如意』の冒頭で谷口雅春は、「私が偶然の機會に入手したフエンウイツク・ホームズと云う人の“Being and Becoming”と云ふ書であった」「本書は此の百事如意法の紹介である」「飜譯的紹介が中心になつてゐるが、日本的な表現に心を用ひ、……純粹に飜譯であると云ふ譯にも行かぬ」［谷口『新百事如意』、5-7 頁］と記している。谷口には『百事如意』という題名の本もあるが、五井の言うホルムスの翻訳本とは、『新百事如意』のことだろう。

（15）この「Y 氏」について、五井の側近・高橋英雄氏に筆者が書簡でたずねたところ、

「Y 氏」というのは私〔髙橋英雄〕も山本さんということはきいております。けれど名前までは知りません。……

［髙橋英雄氏からの返信書簡（2018〈平成 30〉年 8 月 16 日付）］

との返事を髙橋氏からもらった。

（16）自叙伝で五井は、「岡田氏門下ではすべて岡田先生筆の光明と云ふ文字をお守りのやうにして肌につけて歩いてゐた。其のお守りを通して神様のお光が病者を癒すのである、と思つてゐた。」［五井『天と地をつなぐ者』、33 頁］と記している。しかし、岡田との面接後、五井の「お守り（お光）」への信仰は弱まったようである。

（17）五井の自叙伝では、「昭和二十三年の年に入つてゆき、一月も半ばを過ぎた頃、私は幸田さん〔岡田茂吉の「霊線療法」を行っていた人〕から Y 氏〔山本さん。岡田茂吉の弟子〕のところで C 会〔千鳥会〕と云ふ神霊現象の会が行はれる事を聞き、その会員とな

つた。」［五井『天と地をつなぐ者』、88 頁］とある。この文だと昭和 23（1948）年 1 月に千鳥会の会員になったように見えるが、C 会（千鳥会）が組織され会報『千鳥』第 1 号を発刊したのは、昭和 23（1948）年の 6 月である［『千鳥』1949 年 6 月号、「編集後記」、参照］。よって、五井が千鳥会会員になったのは、「昭和 24（1949）年 1 月半ば過ぎの頃」が正しい、といえよう。

（18）五井の『天と地をつなぐ者』では、「扶糺（フーチ）〔扶乩〕」について「神霊から各自にふさはしい言葉を文字に書いて貰ふ」ことであるという。一本の竹の一端を「霊媒」が持ち、もう片方はフーチを受ける人が持つ。すると、ひとりでに竹が動き出し、竹の真ん中に垂直に結びつけてある筆によって、その下に置かれてある紙面に文字が書かれていく、という［五井『天と地をつなぐ者』、92 頁、参照］。なお、五井はフーチの表記を「扶糺」と自叙伝で記しているが、これは、一般に「扶乩」と書かれるもののことを指している。

（19）谷口雅春の『詳説　神想観』によれば、「神智をひらく方法として生長の家では坐禅的祈りの方式である神想観を行うのである」［谷口『詳説　神想観』、20 頁］とある。また、生長の家青年会ホームページ（http://seinenkai.jp.seicho-no-ie.org/　2014 年 10 月 26 日最終閲覧）の「神想観チャンネル」によれば、神想観とは「無限の力を持っている神の子の自分の姿を心に想い描く、生長の家独特の座禅的瞑想法のこと」との説明がある。

（20）『心霊研究辞典』によると、「文字通り「霊」と「動」を意味し、全身で震動を感じたり、あるいは体がピョンピョンと飛びだしたり、腰や膝を結わえて動かないようにしても、同様の動きをする現象のこと」［春川編『心霊研究辞典』、355 頁］と説明されている。なお、編者「春川栖仙」という名は、ペンネームである。春川は、医師で、日本スピリチュアリスト協会会長。現在〔2018 年 8 月現在〕、同協会の活動は休止中。

（21）前掲『心霊研究辞典』によると、「自己の意識によらないで作成される文章などの手書き、あるいはその現象をいう」［春川編『心霊研究辞典』、117 頁］と説明されている。

（22）「霊魂の声が人間の声そのまゝに聞える」［五井『天と地をつなぐ者』、100 頁］ことを「霊耳」と五井は述べている。前掲『心霊研究辞典』の「霊聴現象」の項を参照すると、「肉体の知覚器官によって聞き取ることのできない音声（遠隔地の人や死者の声など）を明瞭に聞き取る能力のこと」［春川編『心霊研究辞典』、355 頁］との説明がある。

（23）五井の自叙伝には、「天の私（真我）に地の私が合体して停つてゐる此の現実」「空間的に見れば天の本体に合体したのであり、直覚的にはうちなる神と合一したのである」［五井『天と地をつなぐ者』、138 頁］と、「神我一体」の神秘体験について述べている。

(24) 五井の自叙伝によると、〝霊覚者〟とは、すなわち「直覚的にすべてを識り得る者」［五井『天と地をつなぐ者』、140 頁］とのことである。いわゆる「さとり」を得た状態、といえるのであろう。

(25) 五井の「お浄め」（の様子）を説明する文として、以下のように記されている。

「五井先生が対座された人の前面に向かって柏手を打ったり、印（いん）を結ばれたり、次にうしろを向けさせて、背面から柏手を打ったり、印を結んだりして光を送る。対座する人の意識の世界に溜まった汚れや厄を、柏手を打って、印を結んでお祓いするのである。」［髙橋『五井せんせい』、210 頁］とのこと。「お浄め」の際は、柏手が打たれる。髙橋は個人誌のなかで、「五井先生の柏手は、五井先生が〔昭和 24（1949）年 6 月に〕神我一体になって、自然と始（ま）ったようだよ。」［『五井先生研究』第 148 号、2016 年 1 月 20 日、17 頁］と記している。

なお、昭和 25（1950）年頃か、もっとも初期の頃、五井がおこなっていた「お浄め」の様子について、五井の愛弟子・市川宣隆〔下記の註（26）、参照〕の「語り」（＝髙橋英雄個人誌『五井先生研究』に掲載）によると、次のような様子だったという。引用しよう。

> 「〔（五井昌久は、）〝お浄め〟を〕受ける人と対座なさり、両手・片手で組む様々な印（いん）——両掌を水平に擦り合わせる。手をかざす。かざして大きく・小さく振る。手や指を前後左右に震わせる。大小の柏手（かしわで）を打つ。指先を絡ませる等々、相手の波動に合わせて、変化自在に組まれていらした。また、澄んだお声で「オーム」「ウー」や、大きな「エーイ！」の気合いもあった。」
>
> ［『五井先生研究』第 152 号、2016 年 5 月 25 日、26 頁］。

こうした「お浄め」は、市川宣隆によれば、昭和 37（1962）年の〝五聖者合体〟の頃から、個人（1 人）にではなく 10 人ぐらいずつまとめて「お浄め」をするようになった。そして、「お浄め」のときの〝霊笛（れいてき）〔五井が吹く口笛のこと〕〟も、その頃から始まったという。「お浄め」のかたちは、子どもや大人、相手に応じて、自在だったとのことである［『五井先生研究』第 152 号、2016 年 5 月 25 日、26 頁、参照］。

(26) 市川宣隆（のぶたか）（1925-2017）。市川によれば、五井昌久と初めて会ったのは、昭和 23（1948）年の暮れ（12 月）、東京・葛飾区の K さん宅であったという。市川は、当時、東京・金町に住み、金町で毎週、五井の話を聞いていたそうである［『白光』1980 年 4 月号、30 頁、参照］。五井昌久の有力な弟子（愛弟子）の一人。2017 年 6 月 13 日に逝去［『五井先

生研究』第 166 号、2017 年 8 月 17 日、10-11 頁、参照］。「宇宙子科学（CWLP）」シニアメンバー。2017 年 6 月 13 日、老衰の為、92 歳で逝去［『五井先生研究』第 165 号、2017 年 7 月 7 日、8 頁］。2016 年に『五井先生研究』誌上で、「五井先生を語る」と題したインタビューに「語り手」として、答えている［『五井先生研究』第 158 号、2016 年 12 月 8 日、2-4 頁］。また、『五井先生研究』誌上のインタビューによると、市川は、若い頃、学徒出陣で戦争にも行った。戦後は（昭和 23〈1948〉年 12 月に五井と初めて会った時）、「教員」（小学校の教師）をしていた。1955（昭和 30）年、結婚。同 1955（昭和 30）年、市川宣隆は五井昌久から講師に任命され、先輩講師と 2 人で出講していた、という。その後、市川宣隆は 1962（昭和 37）年から、白光真宏会の「宇宙子科学」メンバーに。市川は、同会の「統一会」で祈っても祈っても何も感じないことから、1 度だけ五井昌久に相談に行った。そのとき市川が「もう、すること為すことダメで……僕はこれでいいんですか？　もし邪魔なら、宇宙子科学メンバーをクビにしてください」と言うと、五井は「それでいいんだ。悩まなくていい。何をやってもいい。そのままいなさい」とこたえ、五井はあとは何も言わなかったという。結局、そこで市川は、「〝葛藤を祈りで光に変えながら、あるがままにそこに存在すること〟が、私の役目なんだと思いました……」と思うにいたったのだそうである［『五井先生研究』第 151 号、2016 年 4 月 25 日、25-28 頁、『五井先生研究』第 152 号、2016 年 5 月 25 日、27 頁、『五井先生研究』第 153 号、2016 年 6 月 25 日、32 頁、『五井先生研究』第 155 号、2016 年 8 月 30 日、17 頁、『五井先生研究』第 157 号、2016 年 10 月 30 日、11-15 頁、参照］。

（27）五井先生讃仰会。同会設立の話は、昭和 26（1951）年 9 月頃から、五井を後援していた横関実〔のちに初代理事長となる〕を中心に持ち上がり、同 26（1951）年 11 月に発足した。この会においては、家族単位の「維持会員制度」を打ち立て、五井の側近・高橋英雄の記憶によれば会費は 1 ヵ月 200 円。会費を払うと「お浄め」は月何回も受けられる、家族は何人でもよい、という取り決めだったそうである［『五井先生研究』2015 年 3 月号、14-15 頁、参照］。2015 年 3 月現在、『白光』誌「白光真宏会入会案内」によれば、「維持会員」とは「満 16 才以上」で、「維持会費一人月額一口 2,000 円（何口何ヵ月分でも可）」［『白光』2015 年 4 月号、79 頁］と記されている。その後、2018 年 9 月現在、維持会費が増額し、「維持会費一人月額一口 3,000 円（何口何ヵ月分でも可）」［『白光』2018 年 9 月 10 日号、55 頁］となっている。なお、昭和 28（1953）年 5 月に五井の著書『神と人間』が出版されてのち、陽明学者・安岡正篤（1898-1983）と五井の間に親交が生ま

れた。会の設立当時、「五井先生讃仰会」は「讃仰」の文字を用い、会員は「さんこう」と言っていた。しかし、正しくは「鑽仰」と書いて「さんごう／さんぎょう」と読む、と安岡から親切な助言をもらった、という。そして、時期は不明だが安岡もまた道院・紅卍字会に入会し、「誠恪（せいかく）」という道名をもらったといわれる［『五井先生研究』2015 年 3 月号、16-17 頁、安岡講述・芳村編『安岡正篤』、113 頁、参照］。

(28)「規約」の一部が、『五井先生の辞書』［2004］において、次のように記載されている。「一、五井先生の神業を奉讃し、先生の徳を慕う人々を会員として本会を組織する。／一、本会会員は常に五井先生のご指導を受くることを得。／一、本会会員は、特別にお浄めを受けたる場合、分に応じて会費を納むるものとす。／一、本会運営上、幹事若干名を置く。／一、幹事は会員と先生との連絡を常にとるものとす。／一、幹事は会員の意を体し、時に応じ日と処とを定めて、五井先生に講話及びお浄めをお願いするものとす。……」［高橋『五井先生の辞書』、58 頁］。

(29) 横関実〔實の表記もあり〕。信州上田〔現在の長野県上田市〕生まれ。横関は高橋英雄より 40 歳も年上だったという。高橋は自らの発行する個人誌のなかで、「〔横関氏は、〕海千山千の世なれた人でした。人情の厚い人でした。世の中のことを何も知らない若い私〔高橋のこと〕を、何と（ママ）か〔かと〕カバーしたててくれました。」と記している［高橋『白光使徒列伝（一）』、2-3 頁、『五井先生研究』第 128 号、2014 年 4 月 1 日、24 頁、参照］。横関は、「五井先生讃仰会」の発起人で理事（長）だった。白光真宏会初代理事長。昭和 24（1949）年秋頃、横関は「その当時熱心な生長の家の信者であった」［五井『神と人間』、145 頁］。また当時「日蓮主義の祈祷」や「メシヤ教の前身である日本浄化療法」などでも研究して、病人を癒すことを覚えたりしていた、という［五井『神と人間』、145 頁、参照］。

(30) 斉藤秀雄（1904-1984）。東京生まれ。中央大学卒業。おでん屋の皿洗い、菓子屋の配達小僧を経て、商社、メーカー、数十社を創立［斎藤『霊験巡講記　改訂版』、奥付頁の「著者紹介」、参照］。白光真宏会元副理事長。同会「三長老」の 1 人といわれる。青年時代は共産党員だった。斉藤は、第二次世界大戦終戦時頃か、ソ連軍が大連市に進駐して来たとき、彼は日本人の組織を作り、その組織の代表の一人としてソ連軍と種々わたり合ったという。そして、引揚船で帰国。その時の斉藤は、全くの無一文だった。なお、斉藤は、1933（昭和 8）年～ 1947（昭和 22）年まで、大連に渡っていた。終戦後、大連から引き揚げてのちのあるとき、斉藤は日本心霊科学協会で「死後の世界」「霊魂」につい

て知識を得た。これによって、斉藤は、唯物論者から心霊主義者へとがらりと変わった。それから波瀾万丈の生活があり、1953（昭和 28）年、「霊光写真」が縁となって、斉藤は、五井昌久と出会った。斉藤が金融業に従事したときには、その事業が破綻、責任者は行方不明となったため、債権者たちの攻撃を斉藤が一手に引き受けざるを得なくなった。それで、斉藤は一家心中も考えるほど追い込まれたが、五井の「逃げるな！」という一喝によって踏みとどまり、危機を脱出できたそうである［『五井先生研究』第 159 号、2016 年 12 月 20 日、20 頁、髙橋『白光使徒列伝（一）』、31 頁、斎藤『光のドーナツ』、157-158 頁・「奥付／著者紹介」頁、五井『想いが世界を創っている』、24 頁、参照］。

（31）村田正雄（1906-1994）。滋賀県生まれ。（株）コロナ電機工業元社長。白光真宏会元副理事長［村田『空飛ぶ円盤と超科学』、奥付頁の「著者紹介」、参照］。当時の白光真宏会における「三長老」の 1 人といわれた。ちなみに、もう 1 人の「三長老」とは佐久間筆八（?-2006　元理事、元総務局長、シニアメンバー、平成 18〈2006〉年 2 月 26 日、数え百歳で逝去［『神人』第 31 号、2006 年 3 月 1 日、32 頁、等、参照］）。昭和 40 年代初めの頃の「三長老」は村田正雄、斉藤秀雄、そして坂井義秀だった。のちに坂井は「五井先生にも業がある。」と口にしてそれを撤回せず会を離れて行ったそうである［清水『ある日の五井先生』、28-31 頁、等、参照］。村田には、「霊界通信」や「宇宙人との交流」を書き綴ったという著書がある。白光真宏会に入信する前の村田は、「熱心な生長の家信者」［村田『心の旅路』、203 頁］だった。五井とは昭和 26（1951）年 5 月に〔当時同じく生長の家信者だった〕島田重光〔1924-2016　のちの「宇宙子科学」シニアメンバー〕を通して市川の地で初めて出会った［村田『心の旅路』、203 頁・244 頁・246 頁、髙橋『白光使徒列伝（三）』、3 頁、『五井先生研究』第 151 号、2016 年 4 月 25 日、21-22 頁、参照］。村田は、終戦間際、現地召集されて中国の大連から満州の奥へもっていかれた。そして終戦。命からがら戦線を離脱し、大連に戻ったが、中国人民による人民裁判で被告になり、織物工場を経営していたというだけで、死刑をいい渡された。工員であった中国の友人の必死の説得で死刑は免れたが、財産はいっさい没収され、やっと日本に帰国。帰国後、いろいろな職場を渡り歩き、関西から千葉県・市川に移転。市川で島田重光に出会い、島田の紹介で五井昌久と出会うことになった、という［『五井先生研究』第 159 号、2016 年 12 月 20 日、19-20 頁、参照］。

（32）斉藤の詩「我家の祈り」は次のとおりである。

我家の祈り

さいとうたかひろ

朝に夕に　家の掃除をするように

朝に夕に　自分の心の掃除をしよう

　悲哀のほこりの残らぬように

　妬みの砂も

　怒りの石も

　不安のちりも

　皆んなきれいに捨てましよう

そして素直な心になって

守護霊さんにお祈りしよう

　日本が平和でありますように

　世界が平和でありますように

　私たちに愛と真と勇気をお授け下さるように

自分を愛し　人を愛し

自分を許し　人を許し

　お互いにいたわり合い励ましあい

　愛と許しの楽しい世界をつくりましよう

楽しかった思い出も

苦しかった体験も

過去過去（ママ）はみんな消えたもの

　すぎ去った事のつまらぬ詮索はやめて

　私達はただ正直に与えられた今日の

　　仕事に励みましよう

そして明日の事や足りない智慧や力は

いつも私達をお守り下さる守護霊さんに

　　おまかせしましよう

　朝に夕に家の掃除をするように

　朝に夕に自分の心の掃除をしよう

［『白光』1954 年 11 月号・創刊号、3 頁］

以上が、『白光』誌の創刊号に掲載された斉藤の詩である。さいとうたかひろ（斉藤高広）

はのちに「斉藤秀雄」と改名する。この頃までに、のちに作成される五井の「教義」や「世界平和の祈り」の思想を部分的に見て取ることができる。

(33)「公告」は次のとおりである。

公　告

宗教法人五井先生讃仰会設立公告

この度左記別紙の通り宗教法人法による宗教法人五井先生讃仰会を設定することになりましたので同法第十二条第三項の規定によつて公告します。

昭和廿九年十二月十五日

設立者

千葉県市川市新田町三丁目百七十二番地

団体名　五井先生讃仰会

代表者　横関　実

信者その他の利害関係人各位

記

一、設立の要旨

一、教　　義

一、規則の案要旨

設立の趣意書

空即実相の悟導(ママ)〔悟道〕に達し、神我一体の霊覚を得られたる、五井昌久先生を教主と仰ぎ、先生の御指導により、なやみなき幸福一元の生活を諸人の日常生活に実現させたき熱望燃ゆる、吾等信者集まりこの目的達成のために五井先生讃仰会を組織発足してより茲に三年余日。縁にふれて来たるもの殆んど救はれ安心立命を得たるもの数知れず。偉大なる功績を挙げたりと言ひながら、五井先生の大悲願たる「天の理想を地の現実に。天国浄土をこの地上界に。完全平和、完全法悦世界を実現せしむる」には、漸くその片鱗を表せしのみにて、未だ途遠しの憾なきにあらず。今後の発展に俟つところ多く、吾等に課せられたる天命の重大性を知ると共に、時代の趨勢に鑑み、会を宗教法人組織にして基礎を確立し、漸増する信仰者に対応するの必要を痛感し茲に宗教法人五井先生讃仰会の設立を申請し、所期の目的完遂に邁進せんとするものであります。

教　　義

人間は本来、神の分霊であつて、業生ではなく常に守護霊、守護神によつて守られてゐるものである。此の世の中のすべての苦悩は、人間の過去から現在に至る誤てる想念が、其の運命と現はれて消えてゆく時に起る姿である。如何なる苦悩といへど現はれれば必ず消え去るものであるから、消え去るのであると云ふ強い信念と、今からよくなるのであると云ふ善念を起し、どんな困難の中にあつても愛と真と許しの言行をなしつづけてゆくと共に、守護霊、守護神への感謝の心を常に想ひつづけてゆけば、人間は真の救ひを体得出来るものである。と説く。

宗教法人五井先生讃仰会規則

第一章　総　則

第一条　この教会は宗教法人法による宗教法人であつて五井先生讃仰会という

第二条　この宗教法人（以下法人という）は事務所を千葉県市川市新田町三丁目百七十二番地におく

第三条　この法人は五井昌久先生を教主と仰ぎ犭夜〔けもの偏と夜を合成した文字〕明観音の教義を遵奉普及し儀式行事を行い信者を教化育成し以て人類の救済と福祉に貢献することを其目的とする

第四条　この法人は目的達成の為め随時講演会研究会を開催し又機関紙及び刊行書を発行し会員に頒布する

第五条　この法人の公告は機関紙白光に掲載し及び事務所の掲示板に四日間掲載して行うものとする

〔第二章　役　員　以降、省略〕

［『白光』1955 年 1 月号、26 頁］

(34) 坂井義秀。元・陸軍将校。戦時中は、関東軍の若手参謀だったという。それで戦後、シベリアに連れていかれ、きびしい収容所生活をおくるが希望を持ちつづけて、やっと帰国した。終戦後の混乱期に仕事をはじめて、それが縁になって五井昌久と出会った。白光真宏会における「〔初期の〕三長老」で、3 人のなかでは、斉藤秀雄や村田正雄よりも一足早く五井と出会ったそうである［『五井先生研究』第 159 号、2016 年 12 月 20 日、20 頁、参照］。

(35) 昭和 31（1956）年に五井が幹事に伝えた「心得」の全文は以下の通り。

心得

一、教義を行動として現わすよう務める事

一、教義を根本にして導く事

一、人の心を傷つけ、痛め、脅かすような行動をしない事

一、教えを無理強いしない事

一、他宗派の悪口を云わぬ事

一、医薬について、みだりに批判をせぬ事

［『白光』1978 年 12 月号、29 頁］

昭和 53（1978）年当時、白光真宏会〔第二代〕理事長の瀬木庸介は、自分も幹事の一人としてこの心得を座右の銘にしていると述べた。そして瀬木は、白光誌読者の会員たちにも日頃の活動の参考になるのではないか、との思いから白光誌に上記の心得を紹介したそうである。

（36）植芝盛平（1883-1969）。和歌山県生まれ。1920（大正 9）年「大本」に入信。合気道の創始者（1942〈昭和 17〉年に正式に「合気道」と名のる。1948〈昭和 23〉年、文部省より財団法人合気会として認可）［http://www.city.tanabe.lg.jp/sports/morihei_UESHIBA.html および http://www.aikikai.or.jp/aikido/about.htm　2014 年 12 月 10 日最終閲覧、参照］。五井が 1949（昭和 24）年に体験した「神我一体」と同様の「神秘体験」を植芝も 1925（大正 14）年の春頃体験した、という［五井『日本の心』、147-150 頁、参照］。五井は、植芝について「植芝先生は……神の人、神の化身で、武の神さまがそのまま現れているお人よ」と側近の髙橋英雄に語ったそうである［髙橋『五井せんせい』、80 頁］。五井と植芝は深く理解し合える存在として互いに尊敬の意を表していた。植芝は「私の真の姿を認めてくれたのは、五井先生と出口王仁三郎聖師（せいし）だけだ」と言って、五井を讃美した［高橋編著『続々如是我聞』、193 頁、参照］。五井は火野葦平（あしへい）（1907-1960）の小説〔「王者の座」〕に植芝のこと〔小説中は菅沼良平の名で登場〕が書かれてあるのを読んで「会いたい」と思い、『合気道』［1957］も読んだそうである［『五井先生研究』2009 年 12 月号、3-4 頁、参照］。この出会いは、五井の「神我一体」体験後だが、五井の「信仰」を裏付け、強化するような「影響」があったと考えられるだろう。

（37）白光誌に掲載された「白光真宏会事務局機構及事務分担表」の「心霊研究部」の分担内容は、次の通り。すなわち、「心霊研究部　一、統一会の指導及び実績の記録　二、日本及び諸外国の個人並びに団体の心霊研究に関する調査研究　三、宇宙人、空飛ぶ円盤に関する調査研究　四、一般信徒の祈りのグループの指導」［『白光』1958 年 7 月号、42 頁］と記されてある。心霊研究部部長の村田正雄は、のちに、「心霊、霊界通信」や「宇宙人、

空飛ぶ円盤」といった内容の本を刊行する。書名を挙げると、『霊界にいった子供たち』『私の霊界通信』『空飛ぶ円盤と超科学』など。この頃（昭和 30 年代前半）の機関誌における五井の発言をみると、白光真宏会では、五井をはじめ幹部（村田正雄、斎藤秀雄など）は心霊研究〔彼らは「心霊科学」と称していた〕を重視し、この分野の研究が進展することを期待していたのがわかる。

(38)「紅卍字会」と五井（白光真宏会）との交流について、五井の側近・髙橋英雄氏に書簡で筆者が質問したところ、以下のような返信〔平成 30（2018）年 7 月 15 日消印〕をもらった。

「紅卍字会とは〔五井〕先生亡くなるまで笹目秀和〔(1902-1997)〕さんを通して関係を持っておられました。昌美先生の代になりいつの間にか〔紅卍字会との交流は〕消えました。」

［髙橋英雄氏からの「返信書簡」(2018 年 7 月 15 日消印)］

五井昌久が逝去した昭和 55（1980）年 8 月までは、五井（白光真宏会）と「紅卍字会」との間において交流は続いていたそうである。

(39) 白光真宏会は「新宗連」に昭和 43（1968）年に加入し、いつまで加入していたかを筆者が側近・髙橋英雄氏に書簡でたずねたところ、以下のような返信をもらった。

「新宗連に〔白光真宏会が〕いつまで入っていたのかわかりません。昭和 45 年〔五井が〕WCRP に出席され、つぶさに〔「世界宗教者平和会議」の〕実態をごらんになって失望されたようです。宇宙子科学の方も多忙になって来ましたので徐々に関係がうすくなり、あとは佐久間筆八長老が細そぼそながら関係を保っておられましたが、いつの間にか縁が切れました。」

［髙橋英雄氏からの「返信書簡」(2018 年 7 月 15 日消印)］

このように、「新宗連」との関係も、五井の存命期には細々ながら保っていたが、いつの間にか縁が切れたそうである。また、WCRP や世界連邦運動なども同様に、五井逝去後は足が遠くなり、「祈りによる世界平和運動を主に、白光真宏会はわが道をゆくというようになったと思います。」［髙橋英雄氏からの「返信書簡」(2018 年 7 月 15 日消印)］との髙橋氏からの返事であった。

(40)「凡夫易行実践五ヶ条」……ある日、〔会員から〕五井昌久宛に手紙で質問が来た。「凡夫易行実践五ヶ条を教えてください」という質問だった。この質問にたいして、五井は次のように五ヶ条をあげたという。

「一、肉体の人間では何事もなし得ないのだと、徹底的に知ること。／二、なんて自分はだめなんだろう、と思ったら、すぐそれは過去世の因縁の消えてゆく姿と思い、世界平和の祈りをすること。／三、たゆみなく常に祈ること。／四、何事も自分がやるのではなく、神さまがやって下さるのだ、と思うこと。／五、朝起きたら祈り、夜ねる前、少し時間をかけて祈ること。そうすると自然と腹下丹田〔臍下丹田（せいかたんでん）〕に息がおさまる。」

これら五ヶ条の内容は、五井昌久がくりかえし会員らに講話などで説いていた基本的な教えである。五井の教えの要所を、箇条書きで整理した一例といえる［『五井先生研究』第 158 号、2016 年 12 月 8 日、12-13 頁、参照］。

（41）白光誌に掲載される世界平和の祈りの英訳バージョンは、これまでにも幾つか異なる訳文が掲載されてきた。1971（昭和 46）年 7 月に掲載された英文は、以下の通り。

Prayer for World Peace

May Peace be for all mankind

And in our native land!

So that this mission may be realized

We Pray Thee, Almighty God.

［『白光』1971 年 7 月号、巻頭口絵頁］

（42）白光誌に掲載された世界平和の祈りの英訳の文が、1971（昭和 46）年 12 月号では、以下のように掲載されている。

Prayer for World Peace

May Peace prevail on earth!

May Peace be in homes and country!

May our missions be accomplished!

We thank thee, Almighty God,

Through our Guardian Angels

And our Guardian Spirits!

［『白光』1971 年 12 月号、巻頭口絵頁］

（43）告示によると、白光真宏会の理事は計 10 名で、名は下記の通り。「五井美登里／瀬木庸介（新理事長）／横関実（相談役）／村田正雄（副理事長）／斎藤秀雄（副理事長）／金子美憙／栗原安吉／佐久間筆八／竹内真一／高橋英雄」が理事［『白光』1973 年 3 月号、68

頁、参照]。

(44) 西郷隆盛（1827-1877)は、幕末・維新期の政治家。薩摩（現在の鹿児島県）藩士。最期は西南戦争（1877 年 2 月挙兵）に敗れて同年 9 月城山に自刃［『広辞苑』、参照]。五井に「影響」を与えた偉人に数え得る人物が西郷である。『日本の心』［1993］で五井は「大の西郷好き」［五井『日本の心』、8 頁］といい、西郷を評して「謙虚で思いやり深く」「無欲」「豪胆で」「縁が深い人には、自己の立場が悪くなることなどおかまいなしに優しくしてやれる裸の心をもっていた」「常に誠心誠意、天を敬い人を愛し、正しきことには身命を投げ打って立ち向かう、誠実真行の人」［五井『日本の心』、42 頁］と述べている。ここで挙げた西郷の人間性は、そのまま五井がそうあろうと実践した姿でもある。五井を知る古くからの会員たちは五井の人間性に上記のようなものを認めている［高橋編著『如是我聞』、高橋『師に倣う』、参照]。

(45)「日本を守る会」について、その基本運動方針が、白光誌「本部便り」の欄に、以下のとおり記載されている。

「日本を守る基本運動方針

一、わが国の伝統的精神に則り愛国心を高揚し倫理国家の大成を期する

一、正しい民主々義を守り明るい福祉社会を建設する

一、偏向教育を排しひろく教育の正常化を推進する

一、言論報道の公正を求め唯物思想や独裁的改革主義を排除する

一、国際協調の中にあらゆる世界平和の道を求め祖国日本を守りぬく」

［『白光』1974 年 8 月号、62 頁］

(46) 五井は詩「銀婚式」の中で、妻・美登里のことを次のように書いている。

「……〔美登里は〕何一つ文句も要求も出さず／ただただ優しく内を守りつづけて／二十五年の歳月を経てきたこの妻の目立たぬ存在が／娘〔昌美〕を育て会〔白光真宏会〕をここまで育ててきた大きな力になっていたことを／わたしの神様〔「守護神」のことか〕はにこにこしながら改〔ま〕ったようにいわれるのであった」

［『白光』1974 年 9 月号、巻頭口絵頁・14-15 頁］

妻の美登里は、もっぱら家をまもり、陰ながら五井らの祈りの運動をささえていた。彼女は英語力があったので、『白光』の編集部から頼まれれば、エルベール博士の本に書かれた五井にかんする文章の和訳なども協力していた。

(47) この「祈りのリーフレット」配布運動は、これまでにも行われてきた。それを、ふたた

び、大々的な会の活動として推進しようというもの。瀬木は、配布の目的について次のように記している。

「……／祈り心でこのリーフレットを配る行為、まく行為そのものがこの目的であります。／そしてリーフレットを配布することによって、本会の会員が増加するとか、ご本の販売部数が伸びるとかいう結果は何一つ期待せずに、結果はすべて神さまにおまかせする、という考え方にたっております。」

［『白光』1975 年 1 月号、34-35 頁］

瀬木は、〝祈り心〟でこのリーフレットを配ることをすすめ、会員増加や本の販売増加を期待しないで結果は〝神さままかせ〟であると述べた。また、瀬木は、五井の次のような言葉を受けて、本運動の推進にかかったという。

「先日も五井先生がおっしゃいました。／世界平和の祈りを真正面にかざして、／この祈りさえ祈っていれば、世界も、国家も、個人個人も必ず同時に救われるのだ、／そう神さまがおっしゃっておられるのだから間違いない、／というふうに、みんなにズバリとすすめてゆきましょう、と。」

［『白光』1975 年 1 月号、35 頁］

上記の五井の言葉に後押しされ、ふたたび、世界平和の祈りを勧める白光真宏会の全国的活動（祈りのリーフレットの配布運動）が展開されていった。

(48) ちなみに、白光誌上に掲載された「世界平和の祈り」の英訳文は、以下のように変わっている。

PRAYER FOR WOR〔L〕D PEACE

May peace prevail on earth

May peace be in our home and nation

May our divine mission be fulfilled

Our Guardian Spirits, Divine Lords, and Master Goi:

We are very thankful for your love and guidance

［『白光』1976 年 1 月号、巻頭口絵頁］

「人間と真実の生き方（教義）」の対訳英文は全文掲載しないが、タイトルは「MAN'S REALITY AND THE WAY OF SALVATION: Summary of the teaching of Master Goi」［『白光』1976 年 1 月号、巻頭口絵頁］と変わっている。なお、この月の英訳文は、在米の高木俊介博士の英訳にブラッドショウ神学博士、その他の米人がチェック修正したもので、

当時、オクラホマ州タルサ支部ではこの英文をもとにして祈り、唱えていたという［『白光』1976 年 3 月号、68-69 頁、参照］。

（49）瀬木が「世界平和祈願塔建設」を白光誌上で提案するなかで、引用している五井の文章は以下の通りである。

「……国家と民間と協力して、各家毎に、世界平和を祈願する言葉を印刷したものを貼附して、日本人のどんな家でも、世界平和を祈っている、ということを自然と外国に知ってもらうと共に、外国にある、政府機関や商社や、各日本人家庭でも、同じような印刷物を貼附してもらう。またそれと同時に、国家の行事や各会社の行事のはじまりには、必ず世界平和祈願の言葉を唱えるようにする、ということを実行すれば、世界中が、日本人の本心が、世界の平和を願い、平安を願うことを中心にしている、ということを知るようになると思うのである。」

［『白光』1975 年 10 月号、3 頁］

五井の世界平和祈願の言葉とは、「世界人類が平和でありますように　May　Peace　Prevail on　Earth」である。その後、この言葉を印刷した角柱やステッカー（シール）、プレートなどが、国内・海外で多く見られるようになっていった。

（50）白光誌上に掲載された「世界平和の祈り」の英訳文は、あらためて以下のように変更されている。

PRAYER FOR THE PEACE OF THE WORLD

May Peace〔peace〕 prevail on earth!

May peace be in our homes and countries!

May our missions be accomplished!

We thank thee, Guardian Deities and Guardian Spirits.

［『白光』1976 年 2 月号、巻頭口絵頁］

「人間と真実の生き方（教義）」の対訳英文は全文掲載しないが、タイトルは「HOW MAN SHOULD REVEAL HIS INNER SELF: Summary of the teaching of Master Goi」［『白光』1976 年 2 月号、巻頭口絵頁］と、あらためて変更された。なお、この月の英訳文は、白光真宏会の江見淳講師が在米中、レイナルツ夫妻と共訳したものだという。五井は数種の英訳文について、「神さまがやらせていることなのだから、どれか一つ取り上げ、よいというのでなく、どれでもいいんだよ」と言ったそうで、その五井の言葉にそって、異なる英訳を機関誌に掲載した、ということである［『白光』1976 年 3 月号、68-69 頁、参照］。

(51) 五井は、娘の昌美と冨士山との縁、今後の展開について、白光誌にて以下のように記していた。

「冨士山ほど、日本人の多くの人に、敬愛されている山はない。私も冨士山を敬愛する一人である。というより、神霊的縁(えにし)が非常に深い山なのである。娘の昌美にとっても同じなのである。／……／……これは冨士山の神々と、昌美との間に深い縁(えにし)があるからなのである。／……／そして今日(こんにち)、昔買ってあった三万坪の土地に、神命(しんめい)によるピラミット〔ピラミッド〕を作って、冨士の裾野における大神業(おおかみわざ)の第一歩を踏みだしたのである。／冨士山の神々と私たちとの協力、そして、宇宙天使群の叡智による科学的指導による、地球人類救済の大神業が、冨士の裾野を中心に繰りひろげられてゆくのである。」

〔『白光』1976 年 3 月号、2-3 頁〕

のちに（1998〈平成 10〉年に)、白光真宏会の本部が聖ヶ丘道場（千葉県）から富士聖地（静岡県）へ移るが、上記のような〝冨士（山）との縁〟〝冨士（山）での大神業〟という「見通し」があって、本部の移転があったことがうかがえる。

(52) 高橋英雄編著『如是我聞』に掲載されていた文を、高木俊介博士が英訳した。タイトルは、「Excerpt from “Occasional Words of the Master” by H. Takahashi」〔『白光』1976 年 5 月号、13 頁〕とある。五井が時折、側近の高橋英雄に語った心に響く言葉の数々の中から抜粋し英訳したものである。

(53)「普及用パンフレット〔日本語版・英語版〕」として、以下の小冊子を紹介している。小冊子のタイトル（1 部あたりの金額）を列記すると次のとおり。

「世界平和の祈り　50 円／人間と真実の生き方　50 円／般若心経の新しい解釈　50 円／世界平和の祈りの運動精神　50 円／青年の真実の生き方　50 円／世界情勢と日本の立場　50 円／日本と世界平和運動　20 円／統一について　10 円／世界平和の柱　10 円／書かずにはいられないこと　10 円／人間性と平和論　10 円／日本よ、日本人よ起て　10 円／正しい認識を養おう　10 円／宗教界への提言　10 円／ The Prayer for Peace of the World　50 円／ Man and his Karma　50 円／ Man and the True Way of his Life　50 円／ Japan and World Peace Movement　50 円」

〔『白光』1979 年 6 月号、37 頁〕

(54) 五井は、詩「富士山」の中で、次のように述べている。以下、一部分を引用する。

「世界の平和を築きあげる中心の地として／今私たちはこの裾野に拠点をつくりつ

ゝある／……／富士山　神富士（かむふじ）／富士山こそ世界平和の中心のひゞきを／ひゞきわたらせている霊山」

［『白光』1980 年 1 月号、13 頁］

この当時、〔これまでの千葉の聖ヶ丘道場に加えるかたちで、〕新たな聖地として富士山の裾野に 1 万人が集えるほどの大道場を建設しようとしていた。そのため、「富士道場建設募金事業」を行っており、5 年で 20 億円の募金が目標だった［『白光』1980 年 1 月号、66 頁、等、参照］。

（55）五井は、かねてから「85 歳まで生きる」と語っていたという。五井の没後まもなく、1980（昭和 55）年 9 月 1 日の「聖ヶ丘統一会」で、娘の西園寺昌美は次のように述べた。

「日頃、〔五井〕先生は八十五才まで生きていらっしゃると、ご自分でハッキリおっしゃっておられました。」

［『白光』1980 年 10 月号、14 頁］

昌美は、そう語りつつも、すでにここ 5 年間の五井の苦しみは「筆や言葉では言い尽せぬほどの苦しみ」［『白光』1980 年 10 月号、15 頁］だったと言い、よくここまで（この世に）命をとどめておいてくれた、と五井に感謝した。

第 2 章　五井の思想形成にみられる他教団・個人等からの影響

1　はじめに

本章の目的は、白光真宏会の教祖・五井昌久（1916-1980）の思想形成において、他教団の教祖らから受けた「影響」を明らかにすることにある。

その前に、まず、宗教法人白光真宏会が、数多く存在する日本の新宗教教団のなかで、どういう「系統」の教団として位置づけられているかを見ておきたい。

先行研究 (1) において同教団は「大本 (2) 系」「生長の家分派」に位置付けられている。これは、その通りであり、筆者もとくに異論はない。

①『近代民衆宗教史の研究』［村上　1972：巻末頁］の「近代民衆宗教系統図」は、いわゆる「大本教（現・大本）」から、いくつもの新宗教教団が派生していることを示している。白光真宏会は、同図に記されていないが、この「大本系」の流れに属することは確かである。なぜなら、五井はこの系統の教団（世界救世教、生長の家等）の信者として活

動していたからである。②『新宗教研究調査ハンドブック』［井上ほか　1981：202 頁］の「〈図－ 2〉大本系」によれば、白光真宏会は「生長の家から分派した教団」と位置付けられ、③『新宗教教団・人物事典』［井上ほか編　1996：ｘｘｘ頁］の「大本系教団系統図」でも同様である。

3 つの図から、「白光真宏会は大本を源として派生した教団群の一つであり、特に生長の家から分派して出来た教団」といえる。

なお、五井自身が自らの教団をどのように位置付けていたかについて、弟子による著作『ある日の五井先生』では、以下のような記述がある。当時、白光真宏会青年部長だった清水勇の問いに五井が答えた内容だという。

> あるとき五井先生にそのことをお訊ねしたら、「うちは大本教の流れだよ。大本教は文字とおり宗教の『おおもと』なんだよ。教祖が出口王仁三郎 (3) で、まさに『宗教の出口』だね。出口から谷口（雅春、生長の家）が出て、谷口の脇から岡田（茂吉、世界救世教）が出たんだよ。つまり出口から谷口が出て、谷口から五井が出たというわけだね」
>
> ［清水『ある日の五井先生』、21-22 頁］

この記述の通りならば、五井自身が「白光真宏会は、大本教の流れであり、谷口（生長の家）から派生した」という理解だったことになる。

本章では、思想研究の観点から、生長の家の分派である同会が、他教団からどのような思想的影響を受けたかについて明らかにしていきたい。なぜなら、その前半生において五井は複数の教団（団体）の信者（会員）となって活動し、それらの教団から「影響」を受けたと考えられるからである。

そこで、まず五井の思想の概略、特徴を説明しておきたい。後述するが、五井の思想は、1 頁におさまるほどの短い文章からなる「教義（現在〈2015 年現在〉、「人間と真実の生き方」と題され、機関誌の巻頭〔のちに機関誌『白光』誌面のリニューアルにともない、「人間と真実の生き方」の文が冊子の中ほどに配置されるようになった〈2018 年 8 月現在〉〕に掲出されている。)」に、そのエッセンスがすべて込められている、といえる。

五井による解説をまとめた小冊子『人間と真実の生き方』（白光真宏会出版本部、2008 年〈5 版〉〈初版は 1998 年〉）を参照すると、要点は次のとおりである。

人間は本来「神の分霊であり、神の子である」が、この世界の業想念の波が烈しいために、その影響を受けて悪行為をしてしまうことになっている。しかし、人間には各人に「守護霊」および「守護神」がついており、守ってくれている、という。五井は、「(想念)波動」の重要さを強調し、各人がより微妙な「霊波動」「光明波動」となることを目指す。人間は「守護霊、守護神」に常に守られていることを感謝しなければならない。人生において不幸や苦悩に見舞われることがあるが、それは過去世から現在に至るまでの業想念(誤てる想念)が「消えてゆく姿」である。現われれば必ず消えるものだから、不幸災難の中にあっても、それは「消えていく姿」として、「世界平和の祈り」を日常生活の中で続けてゆくことを推奨している。「世界平和の祈り」には絶大な力がある、とされる。想いにおいて、「自分を赦し、人を赦し」「責め裁かない」で、徹頭徹尾「世界平和の祈り」を行じることで、自他を浄め、自分を救い人類に平和世界を導き出すことになる、という。

こうした五井の思想の特徴をふまえた上で、次節より、他の「大本系」教団(教祖ら)からの思想的影響を検討していく。

2　他教団(団体)の教祖らからの思想的影響

五井の思想形成に関わる「影響」のすべてを解明するのは難しいが、五井自身の記述等から断片的に知ることは出来る。以下、五井の著作『天と地をつなぐ者』(1955 年)[(4)]を中心に、その他さまざまな資料も参照しながら、五井の思想形成に与えた他教団・人物等からの思想的影響について見ていきたい。時間軸にそって、順次みていくことにしよう。

「戦前期」

まず、戦前における五井の「神観」「霊界」についての考えかたは次のようなものだったという。

五井の自叙伝『天と地をつなぐ者』によれば、五井は 1940 年 9 月に日立製作所亀有工場に入社し［五井『天と地をつなぐ者』、5 頁、参照］、彼は当時の神観について次のように述べている。

> 日立に入った頃の私の神観は、神と言う者は自然や人間を創造しただけで、……神が外から人間を助けて呉れると言うようなことは考えられなかった。まして死後の霊魂の存在等は頭から考えてもみなかった。従って神を想う場合は、……外から救

って貰おうとも、貰えるとも思わなかった。

［五井『天と地をつなぐ者』、12 頁］

このように、五井の 23、24 歳当時は、創造の「神」を認めつつも、自力が基本であり、「神」が他力的に助けてくれたり、死後に「霊魂」が存在するといったことは念頭になかった。また、日立の社員時代、第二次世界大戦中の頃の五井の考え方は、その述懐によると次のようなものだった。

十代の終り頃から二十代の初期に、私は霊媒の女性に二三(ママ)人〔二、三人〕出会っていたが、霊能とか、死後の霊魂の存在なぞは、まるで問題にせず、……私の心が絶対者としての神のみを形なき存在として信じ、形なき生物などあるわけがないと堅く思いこんでいたのである。……死後の個性の存続と言う風に結びつけて考える事は出来なかった。死が終結であればこそ、日常悔いのない善い生き方をしなければならぬのだ。……

［五井『天と地をつなぐ者』、15 頁］

戦前の五井は、無形の絶対者としての神を信じる気持ちはあったが、「死後の霊魂」や「死後の個性の存続」については考えの外であったようである。こうした考えが、戦後、いくつかの教団を経ていった結果、明確に「霊界」思想を打ち出すようになっていく。

そして、終戦の直前から戦後まもなくにかけて、五井が最初に出合ったのが世界救世教の教えであった。

「遍歴期」

2-1　世界救世教・岡田茂吉からの「影響」

◆「霊界」思想 (5)

「霊界」思想の影響に関しては、筆者が論点を 2 つ設定した。1 つめは「論点①：「霊界」の構造およびその性質についての言説」、2 つめは「論点②：〝守護霊〟および〝守護神〟についての言説」である。

まずは、五井が最初に入信した世界救世教の教祖・岡田茂吉（1882-1955）の著作における「霊界」思想からみていこう。

はじめに、「論点①」について、『明日の医術』（1943 年、全三篇）の第三篇によれば、岡田は、死後、大多数はまず「八衢」へ向かい、「霊界」の構成は「天国・八衢（やちまた）・地獄」各 3 段ずつ（合わせて 9 段）に分けられるという［岡田『明日の医術』第三篇、99-100 頁、参照］。そして、天国には「第一天国、第二天国、第三天国」がありそれぞれの天国に異なる主宰神がいる、また神界と仏界に分けられ仏界より神界のほうが一段上位である、と述べた［岡田『明日の医術』第三篇、103-105 頁、参照］。なお、岡田の「霊界」区分法および各界の呼称、神界と仏界との区別などは、五井の言説には見られないものである。

岡田は、さらに詳細に、「霊界」の階層が合計 180 段〔181 段とも [6] 〕と具体的な数を示し、それを「霊層界（れいそうかい）」と名付けた。そして「天国」には、〝病貧争〟の対語である〝健富和〟が流通しているという［岡田『明日の医術』第三篇、210-215 頁、参照］。

「霊界」の性質については、前掲『明日の医術』・『天国の礎　宗教下』（1996 年、初版初刷は 1993 年）によると、「霊界」とは意志想念の世界であり、意志〔想うこと〕によって望む所に移動できると岡田は述べ、さらに「霊」は伸縮自在、想念通りの面貌になる、といった特徴をあげている［岡田『明日の医術』第三篇、95-97 頁、世界救世教教典編纂委員会編『天国の礎　宗教下』、269 頁、参照］。

次に、「論点②」にかんして、岡田は、「本守護神、正守護神、副守護神」といい、「本守護神」とは神から受命された「霊魂」、「正守護神」は祖先の「霊」で人間を常に守護しているもの、「副守護神」は「動物霊」が憑依したもの、と説明した。さらに、「本守護神」は絶対善性・良心であり、「副守護神」は絶対悪・邪念であると述べた［岡田『明日の医術』第三篇、159-162 頁、参照］。

五井は終戦後まもなくの頃から岡田の弟子のところへ通い、前記『明日の医術』以外の岡田の著作も読んだが、岡田の「霊界の話」には共鳴しなかったようである。岡田の弟子（Y 氏）から 200 頁くらいの「霊」にかんする本を渡されて読んだ五井の感想は、

> ……何か低俗な創作を読んだ後のように、後めたいような、くすぐったいような、何んともまともでない非芸術的な気持がして、……
>
> ［五井『天と地をつなぐ者』、26 頁］

というものだった。岡田の「霊界」思想は、五井の「霊界」思想の形成にはさほど大きな影響を与え得なかったといえるだろう。

◆「浄化作用」

次に岡田の「浄化作用」説をみてみる。

五井が岡田の思想に触れたのは、「終戦半年位前に腎臓を病(ママ)つた」［五井『天と地をつなぐ者』、21 頁］ときである。「工場の勤労課に仂いてゐた幸田さんと云ふ事務員の女性から、今の世界救世(メシヤ)教、其の頃、日本浄化療法 (7) と云ってゐた岡田茂吉氏の明日への医術 (8) と云ふやうな題名の著書を借りて」［五井『天と地をつなぐ者』、21 頁］読んだことによる。岡田の「理論」について五井は、以下のように説明する。

> 岡田茂吉氏の理論は、人間の病気はすべて毒素排泄作用によつて起るのである、と云ふ。毒素の中には先天的、即ち先祖からの罪穢れ、過去世の業の現はれ、と薬毒によるものとがあつて、その毒素が熱によつて溶融されてゆく姿が病気である。其の溶融させる熱は、人間自体のもつてゐる自然療能的治癒力がなすので、熱を発して体が苦しんだとしても、それは毒素の浄化であつてけつして悪い状態ではない、人間の体が浄まつてゆく作用である。それをわざわざ薬を用ひて、自然療能的熱を抑へ、毒素を再び固めてしまひ、更に薬のもつ毒素を加へてしまふ。だから、薬の種類が増すごとに、益々人間の体に毒素がふえ、病気が浄化しにくくなり、種々の重病が起つてくる。すべて自然に逆ふからいけないので、自然にさからはず自然療能にまかせておく方がよい、と云ひ、人間の掌からは霊線と云つて神からくる光が出てゐるのだから、その掌を人間の浄化の中心である腎臓を主にして、それぞれの個所に当てゝやれば、浄化を速進(ママ)させ、病気が速かに痛み尠く全治する、と云ふのであつた。
>
> ［五井『天と地をつなぐ者』、21-22 頁］

とある。五井は「私は其の理論にすつかり共感した」［五井『天と地をつなぐ者』、22 頁］と述べている。続けて「私の病弱を克服してきた過去の体験が、医者と薬を捨て、自己の治癒力にゆだねきつた事にあつたからである」［五井『天と地をつなぐ者』、22 頁］と、五井がそれまでに体験的に自覚していた「思想」を、岡田の「理論」が強化したといえる。

岡田の「理論」のうち、五井がまず取り入れたのが「霊線療法」だった。「私は幸田さんに伴はれて、Y 氏〔「山本先生」〕と云ふ第一級に位する弟子の治療所を訪づれた」［五井『天と地をつなぐ者』、25 頁］。五井自身、「明日への医術の中に書いてある事、掌から

霊線と呼ばれる強い光が放射されその力が人間に作用すると云ふ事はあり得るに違ひないと一度でうなづける」［五井『天と地をつなぐ者』、26 頁］と述べ、「その日以来、時折り Y 氏〔「山本先生」〕を尋ねて、岡田氏の思想や生き方を聴いたり、霊線療法の講習を受けたりした」［五井『天と地をつなぐ者』、27 頁］と記している。

五井は、習った「霊線療法」で病気治しを行った。「私は Y 氏〔「山本先生」〕から受けた霊線療法を、幸田さんの家で実施してゐた」［五井『天と地をつなぐ者』、27 頁］。「私は幸田さんの家を根拠にして、次々と病気治しに歩いてゐた。病人に掌をかざして、震動させたり、指圧のやうに指で押したりしてゐるうち、かなりの治病効果があつた」［五井『天と地をつなぐ者』、28 頁］という。このように、病気を治す方法として、この手かざし「療法」を学び、病気治しに用いたことは、岡田からの「影響」の一つに挙げられる。

岡田からの思想的影響の中で重要なものに「浄化作用」という考え方がある。

五井は、前掲引用のように、「〔病気で〕熱を発して体が苦しんだとしても、それは毒素の浄化であつてけつして悪い状態ではない、人間の体が浄まつてゆく作用である。」［五井『天と地をつなぐ者』、22 頁］と、岡田の「理論」を説明している。この「理論」に五井はまったく同意している。実際、敗戦直後の頃、「四十度近い高熱が幾日もつゞき、息づかひが烈しく、頭の天つぺんから足の先きまで痛まぬところはないと云ふ状態」［五井『天と地をつなぐ者』、23 頁］になったが、「自分自身の生命力で癒される事を確信してゐた」［五井『天と地をつなぐ者』、23 頁］という。そして、結果的に「十日程して病気は全快した。」［五井『天と地をつなぐ者』、24 頁］といった経験をしており、五井の以降の人生においても、岡田の「浄化作用」の「理論」は五井に「影響」していたと筆者は見ている。

前掲の引用中、「毒素」の中の「過去世の業の現はれ」［五井『天と地をつなぐ者』、22 頁］の部分は、五井の「教義」における「消えてゆく姿」の教えと相通じるものがある。五井は、病気も含めて現在の苦しみは「過去世からの誤った業想念」が今現われているのであり、例えば病気として「現われれば〔過去世からの誤った「業想念」はその分〕消える」、と説いている。つまり、病気（発熱）などを経て〈現われて〉、「浄化」された〈消えてゆく〉、という考え方である。この五井の「教え」は、岡田の「理論」に通じるもので、岡田の「影響」をうかがうことが出来る。

前掲の引用中、「毒素」には「先祖からの罪穢れ」［五井『天と地をつなぐ者』、22 頁］がある、との岡田の「理論」を五井が述べている。ここでの「（先祖からの）罪穢れ」は

「（先祖からの）業（ごう）」と理解することが出来るだろう。これに関して、五井は養女・西園寺昌美〔五井の没後、昌美は白光真宏会第二代会長となった〕の主著『明日はもっと素晴しい』の「序文」において、「昌美は琉球王朝の末孫の為か、琉球関係の業の渦を一身に背負うようなことになりまして、十代後半から体が硬直してしまい、しゃべることも身動きもできなくなってしまうような病気が時折り起り、医師も手のつけようのない状態になってしまいました。」［西園寺『明日はもっと素晴しい』、1 頁］と述べている。

「先祖からの罪穢れ（業）」という「毒素」を昌美が身に受けて、重病の状態になっていた、というのである。五井は昌美を千葉県市川市の本部道場にあずかって看護したわけだが、これについては「地球援助の神々や昌美の守護神方が、昌美を地球救済の大きな力にしようと思われて、琉球の業の浄めと同時に、守護の神霊や宇宙天使との交流を完全なものにしようとなさって、私にあずけられた」［西園寺『明日はもっと素晴しい』、1-2 頁］と解釈している。つまり、昌美には「先祖（琉球）の業の浄め」という役目もあって重い病気を患うことになった、という。こうした説明は、先に引用した岡田の「理論」に挙げられてある通りで、「先祖からの罪穢れ」という「毒素」が病気として現われた、ということである。岡田の「理論」と考え方を同じくしており、岡田の「理論」から「影響」を受けている可能性がある。

また、前掲引用の「毒素」の中には「薬毒によるもの」［五井『天と地をつなぐ者』、22 頁］がある、と五井は「岡田の理論」につき説明している。岡田の「理論」として、薬の弊害に関し「わざわざ薬を用ひて、自然療能的熱を抑へ、毒素を再び固めてしまひ、更に薬のもつ毒素を加へてしまふ。だから、薬の種類が増すごとに、益々人間の体に毒素がふえ、病気が浄化しにくくなり、種々の重病が起つてくる。」［五井『天と地をつなぐ者』、22 頁］と述べている。

前述のように敗戦直後、高熱が幾日もつづいた時も、五井は「医者にかからないので病名は判らない」［五井『天と地をつなぐ者』、23 頁］けれども、「医者を呼ばうとするのを、私は切れぎれのけわしい言葉でさえぎつた。」［五井『天と地をつなぐ者』、23 頁］という。五井は「私の病弱を克服してきた過去の体験が、医者と薬を捨て、自然治癒力にゆだねきつた事にあつたから」［『天と地をつなぐ者』、22 頁］と、同「理論」に共感した理由を記している。岡田の「理論」を読む前から、五井自身の体験として、医者や薬に頼らない、という考え方があったが、岡田の『明日の醫術』によって、より「確信」を得たのであろう。岡田の「薬毒が病気の原因であつて、熱は其の薬毒を溶解させる為に起る、と云ふ理

論」［五井『天と地をつなぐ者』、22 頁］を、「その断乎とした書きぶりが心地良かつた。」［五井『天と地をつなぐ者』、22 頁］といい、五井は岡田に「非常な興味を感じた。」［五井『天と地をつなぐ者』、22 頁］そうである。

本論文第 1 章の五井の「闘病期」において記したように、関係者〔側近・髙橋英雄ら〕から聞いた話では、実際、後半生において、五井は医者にかかろうとはせず、薬もほとんど服用しなかったという。最晩年に家族の懇願により、会員の医師が処方した薬を口にしたが嘔吐し、自らの意思では服薬しなかったそうである。五井の場合、自分の身に現われる病患の現象を、「浄化作用」と理解していた。

五井は自身が病に苦しむことを通して「地球（人類）の業」を浄めている、という考え方があったからこそ、薬を用いて「毒素〔業〕」を固めてしまうようなことをしようとしなかったのだろう。五井は、戦後まもなく葛飾の中川土手で自分の命を神に捧げる覚悟を「天声」に向かって表明しており［五井『天と地をつなぐ者』、36 頁、参照］、命を失っても「人類の業の浄め」を遂行することを考えたと思われる。ゆえに、自身の病苦は「浄化作用」の促進であるから、「浄化」をさまたげる「薬」を受け入れるわけにはいかなかったのであろう。晩年、症状が重くなる中にあって頑なに「薬」を拒みつづける五井の姿は、岡田の「薬毒」という「理論」の影響を感じさせるものである。

◆「天声」をきく

五井は、昭和 21（1946）年夏、中川土手で「天声」をきいた、という。これが、五井の宗教家人生における大きな転換期となった。なお、五井の自叙伝『天と地をつなぐ者』（初版本）では、以下のように彼は記している。この時〔転換期〕とは、岡田と面接した後のことであり、岡田式の掌療法による「病気治し」のため病人の家〔千葉寄りの S という農家〕に向かう道中でのことであった。

> 私〔五井〕は……「神様、どうぞ私のいのちを神様のおしごとにおつかひ下さい」と、いつもの祈りを強くくりかへしながら歩いた。そのまま向岸へ渡る船着場まで来て〔中川の〕土手を下り様とした瞬間、「お前のいのちは神が貰った、覚悟はよいか」と電撃のやうな声がひびき渡つた。その声は頭の中での声でも、心の中の声でもなく、全く天からきた、意味をもつたひびき、即ち天声であつたのだ。……私はそのひびきに一瞬の間隙もなく「はい」と心で応へた。

此の時を境に私のすべては神のものとなり、個人の五井昌久、個我の五井昌久は消滅し去つたのである。……

「私のいのちはもうすでに天のものになつてしまつたのだ、この私の肉体は天地を貫いて此処にゐるのだ」私の心は澄み徹つてゐて、天声に対する何の疑ひも起こさなかつた。

［五井『天と地をつなぐ者』、36-37 頁］

五井は、昭和 21（1946）年夏、中川土手で上記のような「天声」をきき、この時を境に自分の命を神に捧げることになったという。

彼は信奉者たちへの講話において、たびたび、「天声」をきいて神にみずからの命を捧げた、と述べた。そして、五井の実生活において、彼自身の生死には執着しない様子であった。例えば、五井の病症が重くなっていた時も、「非暴力」を語る時も、彼個人は〝神様まかせ〟の姿勢をつらぬき、彼個人の肉体の死は恐れていなかったようである。

上記の「天声」の例の場合、どこかの教団・教祖の影響とは言えず、ある種の「神秘体験」が、その後の五井の生き方に決定的な影響力を与えることになったと言える。

そして、この頃（昭和 21 年夏頃）までには、五井は、岡田茂吉や谷口雅春の本を読み、以下のように、〝霊魂存続論者〟に変わっていたという。

私は此の二人〔岡田茂吉と谷口雅春〕の実証によつてと云つても書物の上の事なのにころりと霊魂存続論者に一変してゐた。……私は其の頃〔岡田や谷口の本を読んだ頃のこと。昭和 20 年～昭和 21 年春にかけて〕を機として霊界幽界の研究と、人間の真（ママ）〔直〕毘（神）(9) を求める必死永生の第一歩を進めたのである。

［五井『天と地をつなぐ者』（初版本）、30 頁］

このように、この後、五井当人も、「霊界」思想の研究を本格化させていった。

2-2　生長の家・谷口雅春からの「影響」

◆「霊界」思想

さて、こんどは、生長の家・谷口雅春の思想（著作）において、前述の 2 つの論点、「論点①：「霊界」の構造およびその性質についての言説」ならびに「論点②：〝守護霊〟お

よび〝守護神〟についての言説」を、谷口がどのように述べているのか見ていこう。

五井は、戦後まもなく、世界救世教と併行して生長の家に入信した。五井が熱心に信奉した生長の家・谷口の「霊界」思想は以下のとおりである。

まず「論点①」については、谷口著『霊供養入門』（1983 年）に、その考えが記されている。これは谷口晩年の見解というよりは、谷口が大正末期から昭和の初期にかけて浅野和三郎とともにスピリチュアリズムの研究にかかわっていた経緯を考慮するなら、当初から浅野が唱えたようなスピリチュアリズムや霊智学（あるいは神智学）の思想を共有していたといえる。谷口は「本体、霊体、幽体、エーテル体、肉体」の 5 つの体があるといい、五井が述べた 4 媒体に「エーテル体」を加えている。その「振動数」の差異で各々の体を分けている［谷口『霊供養入門』、256-259 頁、参照］。

さらに、谷口の『人生を支配する先祖供養』（1974 年）では、谷口は、「幽界、霊界」に言及し、それらの界の上位に「実相」の世界がある、と説いている。谷口の場合、洋書をふくむ「色々の霊界通信」「心霊学」を根拠として発言している［谷口編著『人生を支配する先祖供養』、141-142 頁、参照］。

つづいて「論点②」にかんして、谷口は、地上の肉体人間の一生涯を護る存在は祖先の霊魂で、「正守護神」と呼んでいる。また、仕事により協働するために来るのが「副守護神（副守護霊）」だといっている［谷口『霊供養入門』、263-264 頁、参照］。しかし、谷口の場合は、五井の説明とは異なり、「守護神」も「守護霊」も同列に述べてよい、と言っている［谷口『人生を支配する先祖供養』、148 頁、参照］。

なお、五井は、谷口の『生命の實相』全巻熟読を通して、欧米の近代スピリチュアリズムについて確かに学んでいた。この欧米の近代スピリチュアリズムは、前述の岡田も熱心に学んでいたように、近代から現代にかけて日本でも流行した思想である。そのため、岡田、谷口からの「影響」とも言えるが、むしろ、その時代の精神指導者が注目してとり入れた〝流行思想〟であったと言えよう。ゆえに、教団・教祖個人からの思想的影響だけで説明しきれない側面があることも、ここでは付記しておきたい。

◆「光明思想」

次に、本項では、五井が生長の家・谷口雅春から学んだ「光明思想」の「影響」について見ていきたい。

五井は、戦後まもなく、世界救世教の岡田の弟子（Y 氏）から「霊線療法」の講習を受

けていたのと同じ頃、「音楽家の友人 M 君の家で、ふと眼について借りて来た、ホルムスと云ふ英人の書いたものを谷口雅春と云ふ人が訳した百事如意と云ふ本 (10) を読んだ。この本は非常に私の興味をひいて、一気に読んでしまひ、何か眼の前が一度に開けたやうな深い感銘を受けた」「百事如意を読み終ると、此の人の書いた別の本を読んでみたい、としきりに思つた」［五井『天と地をつなぐ者』、27 頁］と述べている。この本は、「三界唯心」を説くもので、谷口の教えが生まれる出発点となった本の一つである。谷口は「『三界唯心』であるが故に、此の世界は何事も思ふまゝに成就することを知り、人生に處して百事如意の方法を獲得したのである。本書は此の百事如意法の紹介である。」［谷口『新百事如意』、5 頁］といい、生長の家の基本的な教えの一つ「唯心所現」に結びついた。

そして、「私は治療をつゞけながら、色々の宗教書や哲学書を読みあさりしてゐた。その中に A と云ふ友人から借りた谷口雅春氏の生命の実相があつた。全篇二十巻をまたたくまに読み終つて、私の知らない別世界が如実に存在してゐる事、私たちの肉体は人間の一つの現はれでしかない事を、はつきり認識したのであつた」［五井『天と地をつなぐ者』、29 頁］と述懐している。

敗戦から間もなかった当時、五井は、岡田や谷口を「二人の超人」［五井『天と地をつなぐ者』、30 頁］と思い、その二人が「共に霊界の存在を書き、魂の個性的存続を実証しようとしてゐる」「私は此の二人の実証によつてと云つても書物の上の事なのにころりと霊魂存続論者に一変してゐた」［五井『天と地をつなぐ者』、30 頁］と前でも述べたように、書物からとはいえ、五井は自身の考えが変わったことを認めている。

五井は、生長の家本部で谷口の講話を聞き、「谷口雅春先生の講話の内容の素晴しさと、その話術の巧みさが、私の魂をしつかりと把へていつた」［五井『天と地をつなぐ者』、41 頁］、「此の日は感涙のうちに、最後の神想観と云ふ祈りの行事を終つて帰宅した」［五井『天と地をつなぐ者』、43 頁］という。谷口の教えに心酔し、生長の家の活動に熱心となった。「近辺の誌友に呼び掛けて支部結成に奔走し、葛飾信徒会をつくり、先輩を会長にして、私は副会長になり、生長の家光明思想普及に一身を捧げつくさうと、熱烈な意気で同志獲得に乗り出してゐた。谷口雅春の草履取りにならう、と言ふのが其の時の気持であった」［五井『天と地をつなぐ者』、44 頁］というほどである。

谷口の書物を読んで、「生命の実相の根 (ママ) 柢〔根底〕を流れてゐる、人間神の子、実相円満完全、人間の本来性には悪もなく悩みも病苦もないのだ、と喝破してゐるその思想に深く打たれ」［五井『天と地をつなぐ者』、42 頁］て、「信徒会」の副会長になり、「生長

の家講師〔地方講師〕」にまでなった。つまり、そうした普及活動に五井が熱心になったのは、谷口の（光明）思想の「影響」を受けてのことである。

2-3　日本心霊科学協会／心霊科学研究会（浅野和三郎・脇長生）からの「影響」

◆「霊界」思想

以下、日本心霊科学協会・心霊科学研究会との接点ならびに、これらの団体の創設者にあたる浅野和三郎の著作から五井が受けた思想的影響についてみていきたい。

前述の 2 つの論点、「論点①：「霊界」の構造およびその性質についての言説」ならびに「論点②：〝守護霊〟および〝守護神〟についての言説」を、浅野和三郎とその門人（弟子）にあたる脇長生（1890-1978）がどのように述べているか、みていこう。

五井は、戦後まもなく、生長の家と同時に日本心霊科学協会の「会〔〝物理霊媒〟による「物理現象実験会」〕」にも参加していた。

そこで、まずは、浅野和三郎の思想を受け継いだ脇長生と五井との接点について、明らかにしておきたい。

戦後すぐに日本心霊科学協会そして心霊科学研究会で機関誌〔『心霊研究』誌・『心霊と人生』誌〕の編集をしていた脇長生は、後年、みずからが指導する心霊科学研究会の会員たちに向かって講話テープ(11)の中で、次のように述べている。

> ……千葉県あたりの、どっか〔市川市〕にある新興宗教〔白光真宏会〕をよく言う。なんか、五とか、六とか言う、数字が出ておる〔五井のこと〕。あの教祖〔五井昌久〕は、うち〔心霊科学研究会〕の会員であったんだから。私〔脇長生〕にどれくらい質問したか。ありゃあ〔五井は〕、要するに、大本教の事に興味を持ちつつ、とうとう、「生長の家」にも入った。だから、うち〔心霊科学研究会〕の本で、随分、心霊科学的な知識は持ってる。……
>
> ［脇長生の講話テープ、1975 年 11 月 30 日（日曜日）］

この発言から、五井が脇と接触し色々な質問をしていたということ、心霊科学研究会刊行の本を五井が読んでいたことがわかる。

また、1972 年以降の脇長生の講話テープでも、五井について次のように述べていた。

死んだら……死んだ時の心持ちから段々、段々、向上して幽界から霊界、霊界から神界に行くんだから、これを考えてほしい。……何か千葉県にあれ何か、五み〔五井〕かなあ、何か、五か六か知らないが、そういう数字がついてる方がある。あしこ〔白光真宏会〕では、やっぱり霊界通信、霊界通信って言ってる。……で、いい事を言ってると思って調べてみたら、我々〔心霊科学研究会〕が霊界通信だと言って翻訳したり、言ったりしてるものをうまーく抜き書きしてるんです。そんな事ばっかりやってるですよ。……

［脇長生の講話テープ、1972 年以降（の日曜日）］

さらに、脇は、同様の主旨のことを、1974（昭和 49）年の講話のなかでも、以下のように述べた。

……新興宗教の教義の中には、神霊主義的なものが随分出てる。谷口さんのところ〔谷口雅春が創始した生長の家のこと〕なんか、大いに出てる。天行居〔神道天行居（しんどうてんこうきょ）のことを言っているのだろう〕でも出てる。

何か、谷口さんところの出店〔生長の家の分派と言いたいのだろう〕みたいなの〔白光真宏会のこと〕が、千葉〔千葉県市川市〕にある。なんとかって名前。これ〔白光真宏会のこと〕なんかは、まったく、浅野先生〔浅野和三郎〕の本の敷き写しをやってるようなことをどんどん書いてる。よく、〔脇の講話を聴きに来た人が〕ここへ来て、〔五井と浅野の述べることが〕よく似てますねえっていう。

ところが、向こう〔白光真宏会〕のほうが盛んであると考えてる人は、あれ〔白光真宏会〕のほうが主でしょうとか、あれ〔白光真宏会〕のほうが正しいんでしょうなんて、こんな馬鹿なことを言ってる人がある。あんた、あれ、みんなねえ、うちの雑誌〔機関誌『心霊と人生』、機関誌『心霊研究』〕なり、うちのねえ、書物〔心霊科学研究会が刊行した書籍〕から、ひき写しやったりねえ、黙ってねえ、盗用してることをあんた知らないんだろう。

結局、みーんな、浅野先生〔浅野和三郎〕の書物を台本にして、自分の都合のいいところの心霊学を述べ、台本にした。その上から、ある意味において宗教になりそうなものを宗教にし、かつ、その宗教の教義にしてるわけです。だから、よく似てますよ。

［脇長生の講話テープ、1974 年 6 月 2 日（日曜日）］

このように、脇の言い分では、五井の言っていることは心霊科学研究会で言っていることの抜き書き（ひき写し、敷き写し）だと批判的に語っている。脇の晩年の講話テープを聴くと、脇はおおむね他の新宗教教団に批判的だった。浅野和三郎を師とあおぐ脇にとっては、浅野の書いた本の内容が新宗教教団の教えの中で用いられていることに我慢がならなかったのだろう。

さて、では、実際に、浅野と五井の互いの言説は〝抜き書き〟と述べるほど全く同じなのか、これから順次みていきたい。

五井の自叙伝によると、彼は「心霊科学協会〔日本心霊科学協会〕」が開催する「物理現象実験会〔物理現象をおこすとされる「霊媒」による実験会〕」に出席していたという［五井『天と地をつなぐ者』、89 頁、参照］。そして五井が日本心霊科学協会の「会」に出席していたわけなので、日本心霊科学協会の機関誌『心霊研究』に目を通すことがあったのではないか、と筆者にはおもわれる。

日本心霊科学協会では、1947（昭和 22）年 2 月より機関誌『心霊研究』を刊行し、編集を担当していたのが脇長生だった [(12)] 。

それでは、前述の「霊界」思想についての 2 つの論点を、日本心霊科学協会・心霊科学研究会（浅野、脇）において、見ていきたい。

脇は、「論点①」にかんして、英国のスピリチュアリスト、アーサー・フィンドレイ（1883-1964）の言説を参照し、「霊界」は振動の世界であり、「霊界」の環境は善と悪の心次第で定まる、といった説明を記している［『心霊研究』1947 年 2 月号、12 頁、参照］。また、脇は 1967（昭和 42）年 2 月、新宿駅ビルで「質疑応答の会」を催しており、その時の記録が『心霊と人生』誌の付録小冊子（1967 年 10 月刊）となった。そこでは、私たちは「地上界」「幽界」「霊界」「神界」と順に向上していくいっぽうで、これら各界は同時存在的にあるのだと述べた［脇・解説『（小冊子）霊魂の働きの正しい解明』、38 頁・75 頁、参照］。

次に「論点②」にかんして脇は、「守護霊」とはその人の祖先霊の一人であり、「支配霊」とは「守護霊」の統制下、特殊の任務を担当して「守護霊」を助ける存在であると述べている［『心霊研究』1947 年 3 月号、4 頁、参照］。ただし、脇は『正しい健康・平和・繁栄への道』（1998 年、初版は 1970 年）にて、「守護霊」にたいする人間の態度として他

力的な気持をもつのは間違いであり、「守護霊」頼みでなく、まず自力で努力すべきと説いた［脇・口述『正しい健康・平和・繁栄への道』、193 頁、脇・解説『（小冊子）霊魂の働きの正しい解明』、90 頁、参照］。

加えて、ここで、日本のスピリチュアリズム（「神霊主義」）の〝生みの親〟といえる浅野和三郎の考え方を見ておきたい。脇は、浅野のスピリチュアリズムの後継者であることを自任していたので、浅野の本の内容と同様に語ることが多かった。脇が依拠した浅野の『神霊主義』（1934 年）[13] を見ると、論点①「霊界の構造と性質」、論点②「守護霊、守護神思想」全般にわたり、おおよそ五井の「霊界」思想に近い内容をすでに述べていた。

すなわち、浅野は、人間を「肉体、幽体、霊体、本体」の 4 つの機関に分け、これら 4 つの体は浸透的に互いに重なりあっている、とした。また、「界」を分類して、「物質界、幽界、霊界、神界」（「四大界」）と記している［浅野『神霊主義』、9-10 頁・15 頁、参照］。

さらに、浅野は同『神霊主義』において、「近代心霊研究の結果から帰納し得べき条項」（197 頁）として、15 の項目を書きつらねた。挙げられた項目のうち、五井の「霊界」思想との関連から、いくつかの項を抜粋して掲示すると次のとおりである。

（四）各自の個性は死後に存続する

……心霊学徒の主張する霊魂不滅は肉体放棄後に於てその人の個性が幽体、霊体等を機関として他界に存続することを指すのである。……

［浅野『神霊主義』、166-167 頁］

（六）死後の世界は内面の差別界である

……死後の世界が本質的に階段を為して居り、決して無差別平等の世界でない事、又それが内面の世界であって、従って距離や方角で測定はできない事、同時に又それが厳然たる実在の世界であって、従って過去現在の区別に捕えられない事である。……

［浅野『神霊主義』、170 頁］

（七）各自の背後には守護霊がある

……ここでその定義を下して置くことにする。私のいわゆる守護霊というのは先天的にその人の守護に任ずる所の他界の居住者のことである。……兎に角私の実験した限りに於て、各人の背後には必らずその人に固有の守護霊がないのはない。……次ぎに

いわゆる司〔支〕配霊というのは守護霊の統制の下に或る特殊の任務を分担するところの補助霊と思えばよい。欧米の心霊家達は普通之をコントロール又はガイドなどと呼んでいる。きわめて稀には、この司〔支〕配霊のない人もあるらしいが、しかし大部分の人々には先づ一人や三人の司〔支〕配霊のないのはないらしい。……

［浅野『神霊主義』、171-172 頁］

（八）守護霊と本人とは不離の関係を有つ

……／私の調査の結果からいえば、各自の守護霊は通例二三百年前に帰幽した人の霊魂が最も多い。……若しそれ肉体の親と魂の親〔「守護霊」〕との関係に至りては、……大体広い意味に於ての血族関係を有っているものと考えてよいらしい。

［浅野『神霊主義』、173 頁・177 頁］

上記引用を要約すると、浅野は、欧米の「心霊研究」の内容をふまえたうえで、次のことを述べた。つまり、肉体死後の霊魂は個性を存続し、死後の世界は死者の内面に応じた階層構造である。また、人間には先天的に「守護霊」という他界の居住者が背後に必ずついている。さらに、守護霊の統制下に「補助霊（支配霊）」もいる。そして、「守護霊」とは、過去に亡くなった人の「霊」であり、守護されている人間とは血族関係を有しているらしい、というわけである。

『神霊主義』に書かれた上述の浅野の言説は、五井のそれと同様であった。

五井は、浅野が著した書籍『神霊主義』の内容をみずからの教えの中にかなり取り込んでおり、浅野の主唱した「スピリチュアリズム（「神霊主義」）」の影響を強く受けた、といえる。

なお、本項において、五井と脇とが接触した新たな事実をもとに、五井が浅野の「スピリチュアリズム」からの影響を強く受けたと指摘したことは、これまでの五井昌久の思想研究を筆者が補強するものである。

2-4　千鳥会（萩原真・塩谷信男ら）からの「影響」

◆「霊界」思想

そうして、浅野が起こした心霊科学研究会の教説を学んだ五井は、1948（昭和 23）年あるいは 1949（昭和 24）年に、「神霊現象の会」が行われるという発足したばかりの千鳥

会に入会した［五井『天と地をつなぐ者』、88-89 頁、参照］。千鳥会の発足（結成）月日には諸説あるが 1948（昭和 23）年ということは確かである(14)。日本心霊科学協会と千鳥会は、同じ「霊媒〔萩原真（1910-1981）〕」をもちいた「実験」をしていたことから、同様の会と受け止める人たちがいたようである(15)。しかし、五井は千鳥会をとおして、日本心霊科学協会では得られなかったものを手に入れたいと考えていた。五井の自叙伝によれば、

> ……心霊科学協会の物理現象実験会に出席していて……それだけの実験では何度見ても、霊界幽界があり、あの世で人間は生きつづける、と云う認識を得るだけで、神の実体にふれる事は出来ない。もっと高度な神霊の出現するところを識りたい、と思っていた。
>
> ［五井『天と地をつなぐ者』、89 頁］

と述懐し、五井がその後、千鳥会入会にいたる動機をかいま見ることができる。

ここで、五井の千鳥会入会の動機に関連し、なぜ彼はもっと高度な神霊にふれたいと考えたのか等、当時の五井のおもいについて自叙伝を参考にして、次にまとめておこう。

その頃の五井は、日本心霊科学協会に入会後も引き続き、生長の家地方講師として活動していた。しかし、当時の五井は生長の家では「予言能力、予知能力」といった神秘力が無いと感じていたという。五井は、生長の家信徒の相談にたいする指導において言葉で長々と説教するものの信徒は満足し得ないために、どこかの行者や霊媒のところへ相談に行くようなことがあったと述べている。彼は、生長の家理論だけの指導に行き詰まり、具体的相談に対処できない辛さ、切なさを感じていたがゆえに、人を救うための超人的な力がほしい、と願った。その点、千鳥会は「交霊会」において「神霊」との交流をおこなう会とされていたから、千鳥会入会をとおして五井はどこからか自分にプラスする力が得られることを期待していたわけである［五井『天と地をつなぐ者』、89-91 頁、参照］。

一般に、萩原霊媒を用いた場合をのぞいて、日本心霊科学協会の「実験会」において出てくる「霊魂」は、「人霊」が主であった。それにたいし、千鳥会の「交霊会」では大峰（おおみね）仙人という「神霊」とされる存在がたびたび登場し、また同会は「神界」を中心におく活動といわれていた。だから、まさに五井の「神の実体」や「もっと高度な神霊」にふれたいという思いに合致していたのである［五井『天と地をつなぐ者』、93 頁、等、参照］。

さて、「霊界」思想にかんして、前述の 2 つの論点、「論点①：「霊界」の構造およびその性質についての言説」ならびに「論点②：〝守護霊〟および〝守護神〟についての言説」を、千鳥会ではどのように述べているか、みていこう。

五井が、戦後まもなく、世界救世教・生長の家・日本心霊科学協会などに続いてかかわり、入会することになった千鳥会は、「霊媒」萩原真と医師・塩谷信男（1902-2008）によって発足した団体である。千鳥会の会報[16]では、主に塩谷が教理面の解説を行っていた[17]。

まず、千鳥会では「論点①」にかんして、塩谷が、「霊界」には多くの階層があって、悟りの程度によって住む世界が異なる、地獄に堕ちた霊でもいつかは向上して地獄を脱することが出来る、と述べている［『千鳥』1949 年 6 月号、3 頁、参照］。そして塩谷は、「現界、霊界、神界」という階層のこと、「絶対神」への帰一を目標とすることを記した［『千鳥』1949 年 12 月号、2-3 頁、参照］。

また、萩原真の子で二代教え主（ぬし）・萩原真明（しんめい）は、『天命が見える』（1994 年）の中で、人間は肉体、幽体、霊体などが重なってできている、死後は修行を経て幽界から霊界へと向上していく、と述べている［萩原『天命が見える』、28-30 頁、参照］。そして、萩原真明監修の『梶さんの霊界通信』（1996 年）には、「梶神霊[18]」からの通信として、初期の「交霊会」（1948・1949 年）における語録が収録されている。同書『梶さんの霊界通信』によれば、上の階の「霊界」ではコミュニケーションが想念の伝達によって行われる、神界に近づいた遠い先祖は次第に個性を失う、などと述べている［萩原監修『梶さんの霊界通信』、210-212 頁、参照］。上の説明は、「交霊会」における「梶神霊」の言葉とのことだが、この時期、五井は千鳥会の「交霊会」に行っていた可能性が高く[19]、こうした言葉を聞く機会があったかもしれない。

次の「論点②」は千鳥会で強調され、塩谷は、どんな人にも必ず「守り主（ぬし）」（守護霊）・「守り神（がみ）」（守護神）がついて守っている、「守り主」を助ける「み魂杖（たまづえ）」（副守護霊）も何人か居る、という［『千鳥』1949 年 6 月号、4-5 頁、参照］。また、塩谷は、「守り主」の上には「守り神」も居る、「守り主」は「守り神」の命によってその「み魂末（たますえ）〔人間〕」に天命を授けている、人間が天職〔天命〕を遂行するためには「守り神・守り主・自分」の三者が一体となって働かねばならない、と述べた［『千鳥』1949 年 9 月号、1 頁・3 頁・5-6 頁、参照］。なお、千鳥会〔のちに真の道と改称〕では、「守り主」は「守護霊」、「守り神」は「守護神」、「み魂杖」は「副守護霊」の別名が当てられる。塩谷は、人間＝「み魂末」の天命・天職遂行のために、「自分、守り主、守り神」が一体となって働くことを

強調した。

このような千鳥会の「守り主、守り神」の考えは、五井の「守護霊、守護神」をセットでとらえる〔組み合わせて一揃いとする〕考え方と近い。つまり、白光真宏会・五井の「守護霊、守護神」によるまもりの体制という考え方については、五井が関係した教団の中では千鳥会からの思想的影響が濃いといえるだろう。

◆「フーチ」

ここでは、五井が当時の千鳥会において貰った「フーチ」からの影響を述べたい。

五井の前半生を記した自叙伝『天と地をつなぐ者』では、千鳥会について五井は次のように記述している。

> 私〔五井のこと〕は幸田さん〔当時は「メシヤ教」の信者だった〕から Y 氏〔岡田茂吉の弟子の一人、「山本先生」とよばれていたという〕のところで C 会〔千鳥会〕と云ふ神霊現象の会が行はれる事を聞き、その会〔千鳥会〕の会員となつた。C 会〔千鳥会〕は、心霊科学協会〔日本心霊科学協会〕から分れた会で、H〔萩原真〕霊媒と S〔塩谷信男〕博士を中心に発足したばかりの会であつた。
> ［五井『天と地をつなぐ者』、88-89 頁］

そして、五井は日本心霊科学協会に続いて、千鳥会の会員となった。「もつと高度な神霊の出現するところを識りたい、と思つてゐた」［五井『天と地をつなぐ者』、89 頁］と彼は千鳥会入会の動機を述べている。

生長の家の信者でありつつ、現実の具体的問題を打開する「超人的力」［五井『天と地をつなぐ者』、90 頁］を欲していた五井であり、生長の家の教えに「他の何処からか、それにプラスする力を得たい、と切望する気持になつてゐた」［五井『天と地をつなぐ者』、91 頁］のである。

当時の千鳥会は、「会員の中には生長の家関係の人たちが、かなり顔をみせてゐた。」［五井『天と地をつなぐ者』、91 頁］というように、「生長の家関係」の人たちをも引きつけていた。五井も含めてこうした人たちは、「物理霊媒実験会」といった「心霊（神霊）現象」に関心をもっていたようである。なお、戦前のことだが谷口雅春の主著『生命の實相』によれば、谷口は、生長の家を立ち上げた後も「ところで生長の家出版部でも昭和八年二

月二十八日、この物理的心霊現象の霊媒〔亀井三郎[20]〕について招霊実験を行なったのであります。」［谷口『生命の實相　頭注版　第 10 巻』、122 頁］とあるように「心霊」に関心を持ち続けていた。つまり、当時、世界救世教、生長の家、日本心霊科学協会、千鳥会、そして白光真宏会（五井先生讃仰会）などの教団（団体）においては、それぞれが「心霊」への関心をもっていたわけである。

五井が具体的に千鳥会から得たものは、「フーチ〔五井は〝扶糺〟と表記。扶乩（ふけい）のこと。〕」だった。千鳥会の「交霊会」では「交霊会の始まる前に、扶糺（フーチ）〔表記は、引用書の原文ママ〕を受ける人々の申込みがあり、申込順から定められた人員だけが、扶糺（フーチ）〔表記は、引用書の原文ママ〕を受ける事になつた」［五井『天と地をつなぐ者』、92 頁］とある。ちなみに、1949（昭和 24）年頃の千鳥会の会誌には、「一、扶乩　当日御希望ノ方ニ扶乩ヲ行ヒマス。約十名内外ノ予定デス。」［『千鳥』1949 年 6 月号、表 2 頁］とある。そして五井もフーチを受け、五井の貰ったフーチには、

百知不及一真実行（百知は一真実行に及ばず〔「百知は及ばず、一真実行」とも〕）
誠実真行勝万理識（誠実真行万理を識る〔「万理の識」「万の理識」とも〕に勝る）
［五井『天と地をつなぐ者』、92 頁］

と書かれてあった、という。五井は、「この言葉は私にとつて非常に有益なものであつた事を今にしてはつきり思ふのである」［五井『天と地をつなぐ者』、92 頁］と述懐している。千鳥会でもらったフーチは、五井にとって「非常に有益なもの」として「影響」を与えた。

2-5　その他、心霊研究グループからの「影響」

岡田、谷口、萩原ら、「大本系」の流れにあった教祖は「心霊」の知識の吸収につとめていた。同様に「大本系」に位置付けられる五井も、国内外の心霊思想に関心を示し、学んでいた。戦後まもない頃、尊敬する岡田や谷口が、「魂」や「霊界」について著述していた「影響」を受け、「私は其の頃を機として霊界幽界の研究と、人間の真毘（ママ）（神）〔＝直霊〕を求める必死永生の第一歩を進めた」［五井『天と地をつなぐ者』、30 頁］と述べている。そうして五井は、「色々な霊媒を尋ねて、霊魂の存在を確めたり、心霊問題を取扱つた図書を探し歩いたりして」［五井『天と地をつなぐ者』、40 頁］いたのである。

さらに、「私は以前から、心霊科学協会〔正しくは「日本心霊科学協会」であろう〕の物理現象実験会に参加してゐて、メガホンが飛んだり、机が動き出したり、時折り霊魂の声を聞かされたりしてゐた」［五井『天と地をつなぐ者』、89 頁］、「私は其の頃〔1949〈昭和 24〉年 1 月頃〕迄に種々の行者や霊媒にも会ひ、様々な霊現象を見たり、生長の家の本や、外国の翻訳本によつて、心霊に関する智識はかなりもつてゐるつもりでいた」［五井『天と地をつなぐ者』、94-95 頁］、と記されるとおりである。

これらの記述を見れば、心霊思想の「影響」のもとにあったことは確かといえる。

五井の側近の一人だった清水勇の著書〔回顧録〕をみると、財団法人日本心霊科学協会の粕川章子 (21) や、心霊研究団体「菊花会」の小田秀人 (22) とも交流があった、という。五井と小田との交流について、清水は『ある日の五井先生』に、次のように記している。

> 五井先生からお呼びがかかって昱修庵のお部屋に伺ったのは、たしか一九七六年（昭和五十一年）の春先の頃でした。先生が白い角封筒をお示しになって、「ここへ行ってきなさい」とおっしゃいました。封筒の中を確認したところ一通の案内状が入っており、それは心霊研究会である菊花会の総会が深川の富岡八幡宮で開かれるという内容でした。
>
> 菊花会は小田秀人氏が主宰している日本で有数の心霊研究会で、五井先生がその会員になっておられたのです。先生は角封筒とは別に二つの祝儀袋もお出しになって私に託されました。一つは会費でしたが、もう一つはお祝い金でした。……／
>
> ……、まさか五井先生が菊花会の会員で心霊研究の応援をなさっていらっしゃり、私が先生のご指示で交霊会に出席したとは、村田長老〔村田正雄。当時の白光真宏会の〝三長老〟の一人。村田も「霊界通信」の本を刊行した〕には知る由もなかったのでしょう。
>
> 心霊研究を通して宗教的世界維新運動に生涯をかけておられる真摯で誠実な小田秀人氏に、五井先生は惜しみない声援を送っておられたのです。昭和五十五年八月、五井先生がご帰神になられた時の葬儀に、弔問者の一人として小田秀人氏の姿をお見かけいたしました。
>
> ［清水『ある日の五井先生』、112-115 頁］

入会の正確な時期は不明だが、上記のように、戦後、五井は菊花会の会員となり、菊花会

および小田の「心霊研究」に物心両面の支援を行っていたようである。

また、日本心霊科学協会の役員だった粕川章子は、戦後、五井が提唱した「世界平和の祈り」の英訳を最初に行った[23]、という［五井が粕川と交流を有していたという情報は、五井の側近・髙橋から書簡をとおして筆者が教えてもらったことに拠る］。心霊研究グループおよびそれらにつながる人脈を通して、五井の終生に至るまで、心霊思想（スピリチュアリズム）の「影響」が及んでいた、といえる。

◆白光真宏会・五井昌久の「霊界」思想

本論文の第 1 章に記したように、五井の生涯の「遍歴期」の最後に、五井は千鳥会に入り、〝〔五井の〕自己流「霊修行」〟を経て、昭和 24（1949）年 6 月、〝神我一体〟という「覚り」のようなある種の神秘体験を得たとされている。

そうした戦後の数年にわたる宗教遍歴の果てに出来上がった五井の「霊界」思想の特徴には、以下のような内容があった。

白光真宏会・五井の「霊界」思想にかんして、前述の 2 つの論点、「論点①：「霊界」の構造およびその性質についての言説」ならびに「論点②：〝守護霊〟および〝守護神〟についての言説」を、みていこう。

以下、「霊界」思想にかんする 2 つの論点につき、五井の言説を確認しておく。

はじめの「論点①」にかんして、五井が最初に刊行した書籍『神と人間』（1953 年）[24]において、五井は、「霊界・幽界・肉体界」といった世界観や、「波動」によって出来た「霊体・幽体・肉体」という体に言及し、肉体の「波動」がもっとも粗い等と述べている［五井『神と人間』、13-14 頁、参照］。

そして、『宗教問答』（1978 年、初版は 1959 年）で五井は、死後、その人の習慣性となっている〝想い〔想念〕〟にしたがって「幽界、霊界、神界」といった世界で生活する、同種類の〝想念〟の人が集まる、と「死後の生活」について語った［五井『宗教問答』、45-46 頁、参照］。

さらに、前出『宗教問答』の続編である『続宗教問答』（1997 年、初版は 1970 年）において五井は、「幽界」下部は「肉体界」と同じような〝想念の世界〟であり、例えば怒るとたちまち火炎が立ち昇るように、いわば、「想念」によって世界がつくられ、「想念」がそのまま形と現れる、と述べた［五井『続宗教問答』、179 頁、参照］。

また、同会の初期にあたる 1954（昭和 29）年から 1958（昭和 33）年にかけての五井の

講話を収めた『五井昌久講話集』シリーズ[25]の第 2 巻『素直な心』で五井は、人間とはあたかも重ね着しているように「肉体・幽体・霊体・本体」が重なり合った状態であり、それ（人間）は「肉体界・幽界・霊界・神界」のいずれの世界にも存在し得るのだという［五井『素直な心』、43-44 頁、参照］。

そして、前掲『続宗教問答』では、「死後、個性が存続するかどうか」について、五井は、人間の個性は死後も失われることはない、という［五井『続宗教問答』、177-178 頁、参照］。死んでのち、長期の年月を経ても各人〔の霊魂〕の個性は消滅しない、というのが五井の主張である。

次の「論点②」にかんして五井は、「守護霊、守護神」の存在をセットで強調する。五井自身が提唱し、広く唱えることをすすめた『世界平和の祈り』[26]に「守護霊、守護神」の文言が記されていることからもその位置付けの重さがうかがえよう。

五井の主著『神と人間』において、「守護霊、守護神」の存在について彼は言及した。通常、五井は「守護霊」と言うが、本書『神と人間』では詳細に「正・副守護霊」の役割について説明している。『神と人間』の中で、「正守護霊」は一人の人間に専属で主運を指導し、「副守護霊」はおおむね仕事について指導する、と「正・副守護霊」の分担領域を五井は記した。そして、彼は、これら「守護霊」の上にあって力を添えている存在が「守護神」である、とした［五井『神と人間』、21 頁、参照］。

さらに、『五井昌久全集 1　講演編』（1980 年）の中に収録された 1970（昭和 45）年 10 月 14 日の講演で五井は、「正守護霊」（1 人）は運命を司り、「副守護霊」（最低 2 人）は職業・天分・生きる方法を教えてくれる、「守護神」は「神界」に属し「守護霊」は「霊界」に属す、と述べている［五井『五井昌久全集 1　講演編』、324 頁、参照］。

また、前出『五井昌久講話集』シリーズの第 3 巻『光明の生活者』において、五井は、「守護霊」とは祖先であり〝魂の親〟、その上にいる「守護神」は〝魂の親の親〟、と語った［五井『光明の生活者』、110-111 頁、参照］。五井は 1949（昭和 24）年 6 月、〝神我一体〟を経験して覚者となった、とされ、信奉者たちにたいし、自身の体験として「守護霊、守護神」の存在を語っている。前掲『素直な心』に収録されている、1957（昭和 32）年 8 月 11 日の講話で五井は、自分たちの宗教〔白光真宏会のこと〕を「守護神宗教」と言った。五井は、「守護神」によって救われる、「守護神、守護霊、分霊〔人間〕」が〝三位一体〟となって「地上天国」を創るのだ、と説いた［五井『素直な心』、82-83 頁・89 頁、参照］。

さて、繰り返しになるが、ここまで見てきた五井の「霊界」思想の小括をしておく。

五井は、論点①「霊界の構造と性質」において、「神界、霊界、幽界、肉体界」の 4 つの界と「本体、霊体、幽体、肉体」の 4 つの媒体について述べ、それぞれが対応関係にあるものである、とした。五井のいう「直霊」は「本体」と通ずるものであり、人間＝〝神の子〔「神性」を宿す存在〕〟と五井が説くゆえんである。また、4 媒体をたとえて、もっとも中心に「本体」、順次「霊体」、「幽体」、「肉体」という上着をつけている状態であり、死とはもっとも外の〝波動〟の粗い「肉体」を脱ぎすてることだと五井は説明した。そして、死後の世界は「想念の世界」と述べ、〝想念〟の善し悪しが死後に住む世界の環境を分けるという。さらに五井は、死後も媒体は個性を失うことはない、4 つの媒体・4 つの界は重なり合って存在している、と説いた。

五井は、論点②「守護霊、守護神思想」において、〝霊位〟が「霊界」に位置する「守護霊」、「神界」に位置する「守護神」について述べた。「正守護霊」は一体で祖先の悟った霊であり主運を指導、「副守護霊」は数体で仕事関係の指導をしていると五井はいう。子孫である「肉体人間」一人のために「守護霊」がつき、その上位の「守護神」も一緒になって、〝愛念〟をもって常時見守っている、と五井は説いた。

◆五井の「霊界」思想と他教団の「霊界」思想との比較

なお、ここで、前述の他教団（団体）の「霊界」思想の論点①②を、五井のそれと比較し、その異同をまとめると以下のようにいえよう。

世界救世教・岡田のいう「霊界」構造は、「天国・八衢・地獄」に大別され、合計 180 段（181 段）の階層、という。「神界」を「仏界」の上に位置付け、神道の神を天国の主宰神にすえるなど、五井の「霊界」構造論にはないものである。また、岡田の「正守護神」が五井のいう「守護霊」に近いだろうが、岡田の「副守護神」は後天的に憑依した「動物霊」＝絶対悪の存在というから、五井の「副守護霊」とは性質が異なる。

次に、生長の家・谷口のいう「霊界」構造は「幽界、霊界」といい、「実相」の世界も説く。谷口は自著において近代スピリチュアリズムの思想を紹介的に説明し、基本的にその思想を受け容れているが、「実相」世界など、自らの用語で語り直している。「守護霊、守護神」思想については、谷口の「正守護神」が五井の「正守護霊」、谷口の「副守護神」が五井の「副守護霊」に近い面がある。

日本心霊科学協会／心霊科学研究会・脇長生の語るところによれば、五井は同会刊行の

本を〝抜き書き〟している、とのことだった。同会のいう「霊界」構造では、「神界、霊界、幽界」といい、五井も同様である。また、「守護霊、守護神」思想にかんして、脇は「守護霊、支配霊」と記し、これらは五井の「守護霊、副守護霊」に相当する。いっぽう脇は「守護霊」に他力的な気持ちをもつのは間違いと述べたが、五井は「守護霊」を他力的に捉えた。

千鳥会における「霊界」構造の説明は、塩谷信男が日本心霊科学協会の会員となっていたことから推察できるように、「神界、霊界、幽界」という浅野の説をほぼ継承していた。ただし、同会の「神示」にもとづき、「神界」など上級の界に行くほどに個性が薄くなってくると説いた。「守護霊、守護神」思想については、千鳥会の「守り主、守り神」が五井の「守護霊、守護神」に該当する。千鳥会では、人間が「天命」を果たしていくために「守り主と守り神と自分」とが一体となる必要を説く。これは、五井の「祈り」の言葉と通ずるようにみえる。

あらためて、これまで比較してきた各団体の「霊界」思想について、その比較の結果を約すと、次のとおりである。

論点①の「霊界構造と性質」については、「霊界」の呼称に若干違いがみられた教団（世界救世教、生長の家）はあったが、どの団体においても「霊界」が非常に多くの層に分かれ、亡くなった人間の「霊魂」はその心境の高下により「界」の所属が決まる、「霊界」は〝想念〟の世界である、との言説を有していた。これは五井の思想と共通する。

また論点②の「守護霊、守護神思想」については、呼称は若干違うけれども（例：世界救世教・生長の家の「正守護神」）、その働きの内実から判断すると、どの団体にあっても五井の言う「正守護霊」に相当する存在を説いていた。なお、「守護霊」とその上に位置づけられる「守護神」が一体となって人間を守護するとの教説は、本章で検討した団体の中では千鳥会と白光真宏会にのみに見られるものである。これは、五井が千鳥会から「守護霊、守護神」体制という「霊界」思想の影響を受けたことを示しているだろう。

各団体いずれもスピリチュアリズムの思想をベースにしているため、共通の「心霊」知識が随所に語られている。ただし、「心霊」知識の枠をこえた概念として、「守護霊」の上の存在・「守護神」を、千鳥会と白光真宏会の五井は語った。この点は、思想において、千鳥会と白光真宏会がスピリチュアリズムから一歩踏み出したところといえよう。

つまり、「霊界」思想の影響関係において、五井は大半の「心霊知識」は日本心霊科学協会あるいは心霊科学研究会の浅野和三郎が整理した「スピリチュアリズム(「神霊主義」)」

に依拠したが、「守護霊・守護神」思想は千鳥会からの影響がうかがえる。そして、これらの教団（団体）遍歴のすえに、「守護霊」に加えて、愛念や情愛をもって人間をまもるという「守護神」の存在を五井は強調することになった。すなわち、五井は、他の教団ではそれまで言われなかった新たな「守護神」像を、彼の解釈を加えて、信奉者たちの前に提示したというわけである。

◆ 五井の「霊界」思想形成についてのまとめ

以下、まとめと筆者の考察を記す。

五井の「霊界」構造と「守護霊、守護神」思想を見る時、世界救世教・岡田からの影響はほとんど見られなかった。

生長の家・谷口の場合、浅野同様、近代スピリチュアリズムにかんする書籍の翻訳を行い、浅野が発刊した心霊雑誌『心霊界』（1924〈大正 13〉年創刊）を編集・寄稿するなどしていたので、「心霊」関係の知識が豊富にあった[27]。浅野の説もふまえながら、自らの言葉で「霊界」思想を語り、谷口は、「霊界」構造にかんしては浅野に近い多重構造の説明をしている。しかし、究極を「実相」世界と表現したり、「四魂（荒魂、和魂、幸魂、奇魂）」と関連づけて説いたりした。浅野も「四魂」と各界の対応説を述べているが、五井はそうした説を取り込もうとはしなかった。谷口の書籍は海外の「心霊」情報を知るうえで参考になっただろうが、五井の「霊界」思想を決定づけるまでには至らなかったと筆者はみている。それは、生長の家に満足しきれず生長の家地方講師でありながら千鳥会の「神霊現象実験会」に通っていたことからもうかがえる。五井は自叙伝において「生長の家では、予言能力、予知能力が無い。……人を救う為に超人的力が欲しい」［五井『天と地をつなぐ者』、89-90 頁］と述べており、当時は体験的に「神霊」のリアリティを感得したいと望んでいたようである。また、谷口は「守護神、守護霊」を同列に説いたのに対し、五井は上下に両者を分けた。

日本心霊科学協会、心霊科学研究会のうち、特に浅野の著作に書かれた言説は、五井の「霊界」思想において、知識面で幹となっている。五井の論点は、浅野の本（『神霊主義』）の中でおおよそ言いつくされていた。つまり、「浅野の視点からまとめられたスピリチュアリズムの本」の内容（知識）を、五井はみずからの「霊界」思想に「心霊知識」としてとり入れた、といえるだろう。ただし、浅野や脇の心霊科学研究会においても「守護霊」の説明はあるが、五井の言う「守護神」は語っていない。ゆえに、五井の言説が浅野本の

〝抜き書き〟のみとは言えない。ちなみに、のちに千鳥会をたちあげる萩原真は、1947（昭和 22）年頃、「霊媒」として日本心霊科学協会でたびたび「物理的心霊現象実験」を行い、そこで脇は「審神者（さにわ）」の役をつとめていた。立会者の数は数十名の小規模なものである[28]。五井と脇が出会った時期は不明だが、この頃、同協会の「実験」に出席していた五井が、その場で脇や萩原と面識を得たことは考えられよう。

千鳥会の「霊界」構造論は、「心霊科学」的であり、五井と似た考え方である。しかし「死後個性」のありようについては見解の違いがあった。「守護霊、守護神」思想にかんして、千鳥会は「守り主、守り神」の重要性を強調する。内容は「守護霊、守護神」と同様であり、「守り主、守り神」は一緒になって人間をまもっている、という。この考え方は、五井の「守護霊、守護神」体制のまもり、と軌を一にする。

千鳥会入会ののち、それまで五井のなかになかった「守護神」というピースが彼の〝体験〟を経て、五井独得のリアリティをもった存在となっていく。彼の「霊界」思想の形成にとって重要な点なので、その「守護霊、守護神」思想の形成過程、同思想完成・成立への道筋につき、以下、もうすこし掘り下げて言及しておく。

◆「守護霊、守護神」思想完成への道筋

五井の自叙伝によれば、彼の〝「守護神」体験〟は、千鳥会入会を契機に生起することとなった。五井は千鳥会の「交霊会」に参加した折、萩原霊媒を介して「大峰神霊」らの言葉に接している。同「交霊会」から帰宅後、五井はみずから霊的交流を試み、「霊魂」の声が聞こえたり、「自動書記〔〝霊〟の作用により文字等を書くこと、とされる〕」したりするようになったという。その後の千鳥会の「交霊会」で五井は大峰仙人から「自動書記を大いにやれ」と薦められている。そして、五井は霊的現象で事務がとれなくなったため勤めていた中央労働学園を退職、1949（昭和 24）年春頃には「霊能的な予知力、予言力が出て来ていた」と五井は自らの状況を述べた。その後数ヵ月の〝霊修行〟を経て、「神我一体」という神秘体験を得た、とされる［五井『天と地をつなぐ者』、88-103 頁・109-117 頁・130-140 頁、等、参照］。

五井はそのときの〝体験〟について、自叙伝において次のように語っている。

> 私が現在迄様々な宗教を通って来て、最後に守護神の指導による霊的直接体験の後、……これは私の背後に誕生以前より、私を守護し指導していた守護神、守護霊が厳

然として控えていた事を、すべての修業の済んだ直後に、はっきり識ったからである。……『神は愛である』と云う神は法則の神ではなく、守護神としての神である。宇宙に満ち充ちている生命と云う神ではなく、人間と等しき愛念をもつ神である。……肉親的愛情の所有者である神が必要なのである。

私はこうした神を、守護神として改めて民衆に発表した。そしてその下に真実肉親として系図を見れば判る様な祖先を守護霊としてはっきり認識させる様に教えている。今迄何んとなく漠然としていた守護神、守護霊を、各自が、自分のものとして温い思いでつかみ得るように示したのである。

［五井『天と地をつなぐ者』、142-148 頁］

1949（昭和 24）年 6 月、上述のような〝体験〟を得て、「守護霊、守護神」が五井にとってリアルなものとなった。特に、「守護神」について、〝大生命〟や〝法則〟といった漠たる存在ではない、と五井が述べた点に重要性がある[29]。五井は「守護神」のなかに慈愛・愛念をみとめ、「守護神」とは遠い存在でなく身近にあって人間の苦悩に手をさしのべ救済してくれる存在である、とした。引用文における五井の主張の背景には、前述の数ヵ月におよぶ〝霊修行〟の過程で五井が身近に「守護神」からの内なる「声」を自覚していたことが大きい。祖先の悟った霊・「守護霊」は、他教団でも説かれていたけれども、肉親的愛情をもつ「神」が各人に「守護神」の名でついて常時はたらいてくれている、と述べた点に五井の「守護霊、守護神」思想の新しさがある。「守護神」を抽象的でない、困った時にすがり、助けを求めてつかんでよい「愛の神」と位置付けたところが、五井の「霊界」思想において重要なポイントといえるだろう。五井は、「守護霊、守護神」は愛をもって常に人間をまもってくれていると語り、だからこそ「守護霊、守護神」への感謝の言葉を「祈り」のなかで唱えよ、と繰り返し強調しているわけである。こうした道筋、経緯を経て、五井の「守護霊、守護神」思想は完成した。

3　おわりに

五井は、これまで論述してきたように複数の教団・宗教家たちから思想的影響を受けた。

例えば、最初に出合った世界救世教・岡田茂吉からは「浄化作用」の教え（思想）を、生長の家・谷口雅春からは「光明思想」を、日本心霊科学協会／心霊科学研究会・浅野和三郎／脇長生からは「神霊主義（「スピリチュアリズム」）」を、千鳥会・萩原真／塩谷信

男らからは「人間、守り主、守り神」を一体とみる考え方を、五井はとりいれた。五井は、前述の教団（団体）・人物等から思想的影響を受け、彼らから〝選択的に〟学び、五井の「教義（教理、思想）」の中にとりいれていった。

五井の「教義」には、次の言葉、「神の分霊」「守護霊、守護神」「消えてゆく姿」などの言葉がみられ、そこには遍歴した教団（団体）・人物等から影響がうかがえた[30]。

五井は、「戦前期」には「霊界、霊魂」を信じていなかったが、「遍歴期」に世界救世教・岡田や生長の家・谷口の書籍を通して、「霊界や霊魂」を信じる立場、「霊魂存続論者」へと変わった。

世界救世教の「掌療法〔「浄霊」〕」を学修し「病気治し」に歩いていた昭和 21（1946）年夏、「天声」をきくという神秘体験を境に、五井は〝「神」に（自分の）命を捧げる〟生き方を固く決意した。

「遍歴期」において五井は、世界救世教・岡田茂吉や生長の家・谷口雅春にも面接した。しかし、その時、彼らを人格的に尊敬することは出来なかったようである。彼らの説く教えや実践は納得したが、岡田および谷口の宗教家としての人格面においては、当時の五井には腑に落ちないところがあった。

そして、すでに大本をはじめ、世界救世教、生長の家などにもあった〝浄化（作用）〟〝祓い浄め〟の考え方を、五井は新しく「消えてゆく姿」という言葉で表した。五井は、「〔苦難とは、〕（過去世からの悪）業が、〔現在に〕現われて、消えてゆく姿」と説いた。この「消えてゆく姿」という思想（理念）を、五井は彼独自のものと言っているが、似た内容の言説は、遍歴した教団でも述べられていた。

つまり、苦しみを通して「業」が消える、という五井の「消えてゆく姿」の教理は、世界救世教、生長の家、近代スピリチュアリズム、諸教団の影響を受けながら、白光真宏会の特徴的な教えとして五井が整理したもの、と言える。

特に、生長の家・谷口は、〝光一元〟の「光明思想」を説く一方で、苦難の原因を「精神分析」的に苦難にある人の心の問題に帰する説き方もしていた。そのため、谷口の場合、その「教え」の一貫性において矛盾があった。それを五井は、「苦難の原因は、現在の心に問題があるのではなく、過去世からの業想念（カルマ）によるもので、いま苦しみが現われて苦しむことでその業想念は消え、これから善くなってゆくのだ」とポジティブ（肯定的な）面のみにとらえなおした。このように、従来からあった「教え」を五井が整理したことで、彼の「消えてゆく姿」という教理は、新しく独自性を帯びたもの（白光真宏会独自の考え）

になったともいえよう。

そして、五井の自叙伝等によれば、昭和 24（1949）年 6 月、自己流の「霊修行」を経て〝神我一体〟という神秘体験を得たという。この時、五井の「遍歴期」に終止符が打たれ、一人の宗教家として「誕生」したわけである。

なお、本章のむすびに、そうした他教団等の影響下に形成された五井の「祈り」についても述べておきたい。筆者は、五井の思想的実践的中心は『世界平和の祈り』にあるとおもっている。

五井が遍歴した世界救世教、生長の家、千鳥会（真の道）などの他にも、多くの宗教教団には「祈り」が多数存在する。しかし、五井は複雑・難解であることを避け、「祈り」を単純化し、「祈り」を一つとした。この「祈り」の大衆化の方向性は、生長の家・谷口らの「祈り」の煩瑣なところを解消した。「単純化傾向」［津城『鎮魂行法論』、85 頁］へ向かったのは、反面教師的に谷口らの「影響」があってのこととともいえるだろう。

「教義」の中に書かれてあるが、五井はこの「祈り（「世界平和の祈り」）」の言葉（となえ言葉）を通して、個人の幸福と人類の平和が同時に成就する、という。ちなみに、『〔縮刷版〕新宗教事典　本文篇』の「となえ言葉」の項 (31) を参照すると、新宗教教団ごとに様々な「となえ言葉」のあることが分かる。そして五井の「世界平和の祈り」は、「頻繁に繰り返しとなえられる言葉」［井上ほか編『【縮刷版】新宗教事典　本文篇』、361 頁］に該当するが、新宗教における日蓮宗の系統に属する教団の「南無妙法蓮華経」のほか、「南無阿弥陀仏」といった「となえ言葉」と一線を画する面をもっている。

それは、五井が提唱した「世界平和の祈り」は、TPO を問わないことに加えて、信仰の所属や信仰の有無も問わない〔信仰しない人、唯物論者もこの「となえ言葉（「祈り」の言葉）」をとなえられると五井はいう〕、としたところである。つまり、五井は、この「となえ言葉」を想う（となえる）ことで、誰でも個人の平安および人類の平和に貢献できると説いた。

五井は「心霊主義（神霊主義、スピリチュアリズム）」の考え方同様に、〝想念波動〟というものを重視した。そして〝想念〔想い〕〟において「世界人類」の平和を願う、五井提唱の「世界平和の祈り」を通して、世界平和を実現できる、とした。この「祈りによる世界平和運動」は、五井の思想（教え）ならびに実践の中心と言うことが出来、新宗教史上において他教団と分けるユニークな点である。

また、先行研究において、新宗教教団の教祖・五井昌久をメインにした思想研究は本格

的には行われてこなかったため、本章でそれを細かく論じた意義は大きいだろう。

なお、本章の各所で「影響」と括弧付きで表記したのは、数値で正確に定量化して表すことが難しいものだからである。しかしながら、五井が戦後、遍歴した教団（教祖）の諸文献から関連箇所を指摘することをとおして、おおかたの人が五井が受けた「思想的影響」として納得し得る論証を行えたと筆者はおもっている。

とりわけ意義深いのは、五井の思想形成にあたり、特に世界救世教の「浄化作用」という考え方の「影響」が鮮明に見えてきたことである。五井自身は独創的な教えとして「消えてゆく姿」というものを説いた。しかし、前述のようにこの考え方と似た教えは他の教祖（谷口、岡田）によっても説かれている。違いは、五井のほうが自らの「教義」の柱として「消えてゆく姿の教え」を前面に押し出し強調した、ということだろう。世界救世教では、「浄化作用」がはっきりと説かれ、同様の教えは世界救世教から分派した教団群にも少なからず見られることだろう。

本章で筆者は、白光真宏会が、世界救世教、生長の家、日本心霊科学協会／心霊科学研究会、千鳥会、等から思想的影響を受けたことを指摘した。戦後まもなく、世界救世教の信者として「手かざし」を行っていた五井のことを、「世界救世教に近い人物」と見る心霊研究グループ関係者〔日本スピリチュアリスト協会の人〕もいる。筆者も同感で、分派の概念とは別に、白光真宏会（五井）との思想的実践的類似性の観点から、白光真宏会（五井）と〝影響関係〟の強い教団系統として、先行研究で位置づけられてきた「大本系」に加えて、「世界救世教系」にも目を配るべきとおもう。

ちなみに、白光真宏会の草創期の会員のなかには、生長の家の信徒のほか世界救世教の信者、日本心霊科学協会会員だった人も含まれていた。戦前、日立製作所の工場に五井が勤務していた時に『明日の醫術』を五井に渡した女性は、世界救世教の信者であったが、のちに白光真宏会の講師となった。

また、五井に対する思想的影響を考えるとき、幼少時より様々な「影響」が存在し、そのレベル（度合いの高低）も強弱もまちまちである。本章で論じた他教団以外にも、歴史上の偉人、種々の聖典[32]、親族等、広くとれば数え切れないであろう。

しかし本章では、敗戦からの数年間、特に五井が「宗教遍歴」した時に受けた「他教団（教祖ら）からの思想的影響」に焦点を絞った。この時期に五井が接した世界救世教（岡田）、生長の家（谷口）、千鳥会（萩原、塩谷）、心霊運動（スピリチュアリズム）が、のちの白光真宏会（五井）の思想形成において「影響」を与えた、と考えたからである。そ

して、それらからの「影響」は本章を通して、ある程度明らかに出来た。

また、五井の「霊界」思想の形成にかんして論じた本章には、以下のような意義を述べることが出来よう。

その第一の意義は、五井の「霊界」思想の形成において、複数の影響因子が考えられる中、テキストの比較検討をとおして、最も強い影響があったものを浅野和三郎の著作と言明したことにある。特に、脇長生の講話テープでの話を重要な証言とし、五井と浅野をつなぐ関係性の〝線〟が明確になった。

第二の意義は、五井の説く「守護霊、守護神」体制において、特に〝「守護神」＝愛念をもった存在〟との五井独得のアイディアを本章によって浮きぼりにしたことが挙げられよう。すなわち、五井の「霊界」思想において「守護神」の考え方に注目し、千鳥会との関係、五井自身が〝霊修行〟を経てつかんだという独自の「守護霊、守護神」観の形成過程を明らかにしたことは意義あることといえよう。

さて、本章の最後に、五井をはじめ、教祖の思想形成の背景について考えてみたい。

まず、新宗教教団の教祖がすべて「天啓」によって全く新しい独自の教えを生み出しているわけではない、ということである。教団および教祖がその独自性・独創性を主張したとしても、教祖が「教義」を打ち立てるには、それに先立つ思想からの「影響」が存在する。これは、どの教団においても言えることではなかろうか。五井の場合もそうであった。

教団の系統から見るならば、白光真宏会は「大本系」であり、「大本」の延長線上に位置する。このことは、逆に言えば、例えば、白光真宏会から源の「大本」教団に向かって遡っていくところに、「思想的影響因子（〝大本 DNA〟あるいは〝世界救世教 DNA〟のようなもの)」が存在する可能性を示唆している。

そこで今後は、五井が遍歴・所属した教団（団体）や出会った人物（教祖ら）に限らず、広く他の「大本系（あるいは世界救世教系)」教団との思想比較の中で、共通する「思想的因子」を見出していくつもりである。そして、「大本系（あるいは世界救世教系)」の他教団における、どういう思想が白光真宏会・五井の思想につながりをもつのか（もたないのか)、さらに解明したい。本研究を進めていくことで、新宗教教団における「大本系（あるいは世界救世教系)」の思想的特徴を具体的に指摘出来るようになるだろう。

註

(1) 五井あるいは白光真宏会にかんする先行研究（学術論文、等）については、本論文の序章を参照されたい。「教団系統」の位置付けに関しては、次の 3 つの先行研究（書籍）に記された「系統図」を参照した。①村上重良『近代民衆宗教史の研究』法蔵館、1972 年（第 2 版第 2 刷）（第 2 版第 1 刷は 1963 年）、②井上順孝・孝本貢・塩谷政憲・島薗進・対馬路人・西山茂・吉原和男・渡辺雅子共著『新宗教研究調査ハンドブック』雄山閣出版、1981 年、③井上順孝・孝本貢・対馬路人・中牧弘允・西山茂編『新宗教教団・人物事典』弘文堂、1996 年。

(2) 宗教法人大本には二人の教祖がおり、出口なお（1836-1918）を「開祖」、出口王仁三郎（1871-1948）を「聖師」と呼ぶ。1892（明治 25）年のなおの「神がかり」を大本の歴史の始まりとする。同教団の信者あるいは同教団に関係のあった人物によって、多くの新宗教教団〔たとえば、「大本系」の新宗教教団群〕が生まれていった。

(3) 出口王仁三郎（1871-1948）。京都府（現在の亀岡市）生まれ。もとの姓名は上田喜三郎。明治 36（1903）年、上田姓から出口王仁三郎とあらためた。王仁三郎は、「大本」を大教団へと発展させ、「霊界体験」を口述して教典『霊界物語』をまとめ上げた［井上ほか編『新宗教教団・人物事典』504-505 頁、参照］。

(4) 五井昌久『天と地をつなぐ者』宗教法人五井先生讃仰会、1955 年（初版本）（非売品）。五井の前半生が記された彼の自叙伝である。なお、後年に刊行された『天と地をつなぐ者』は、改版増補されたものである。そのため、改版（増補）本は、筆者が主に引用した初版本とは頁数が異なる〔改版（増補）本における該当ページは、初版本よりも後ろにずれている〕ので注意されたい。

(5)「霊界」思想に関連する主な先行研究を、若干だが挙げておこう。まず、様々な新宗教教団の「霊界」思想にかんして概括的に論じているのは、『新宗教事典』における〈対馬路人「世界観と救済観」〉の項だろう。他の論文・研究ノートでは、出口王仁三郎の『霊界物語』の著述内容を詳細に分析した窪田［2015］があるが、大本から派生した教団群までは言及していない。日本を含むスピリチュアリズムの歴史を概観した渡辺［2007］は、同思想のキーマンである浅野和三郎（1874-1937）、脇長生（1890-1978）の経歴等に若干触れている。津城［2007］は西洋の近代スピリチュアリズムにおける「死後存続説」を論じた。田中［1965］には、「幽界」と「顕界」との関係性（「幽界と顕界とは重なり合っている」「両界は重なり合っているが厚さが無いから同じ所で重なり合っている」等）や神道家・本田親徳（ほんだちかあつ）（1822-1889）が説いた 181 階級の「神界」説など、日本のスピリチ

ュアリズムに通ずる思想が紹介されている。菅野［2011］は、平田篤胤（1776-1843）の著『霊能真柱（たまのみはしら）』における「幽冥論」として、死後霊魂は「顕国」と同国土にある「幽冥」へおもむき、墓上にとどまって子孫を見守る、との世界観について述べ、「神道」におけるある立場の霊魂観をしめした。

上に述べた参照文献を列記すると、次のとおりである。

対馬路人「世界観と救済観」（井上順孝ほか編『新宗教事典』弘文堂、1990 年）、窪田高明「『霊界物語』における台湾」（『神田外語大学日本研究所紀要』第 7 号、2015 年 6 月）、渡部俊彦「心霊研究とスピリチュアリズムの発展史概観」（『Journal of International Society of Life Information Science』第 25 巻 1 号、2007 年 3 月）、津城寛文「マイヤーズ問題 ——近代スピリチュアリズムと心霊研究の間で」（『駒澤大学佛教学部論集』第 38 号、2007 年 10 月）、田中初夫「顕界と幽界——神道に於ける神の分類とその世界」（『東京家政学院大学紀要』第 5 号、1965 年）、菅野倫太郎「『霊能真柱』の世界観と宗教的安心」（『皇学館論叢』第 261 号、2011 年 8 月）。

(6) 世界救世教本部編『教修要綱』（1952 年）には、「……更に最奥（さいおう）天国の一段が加わり合計百八十一の段階の層になっています故、……」［世界救世教本部編『教修要綱』、48 頁］とある。

(7) 1943（昭和 18）年、「日本浄化療法」設立［世界救世教教学部編『世界救世教』熱海商事、1973 年、227 頁］。

(8) 正しい題は『明日（みょうにち）の醫術』。岡田茂吉『明日の醫術』（第一編・第二編・第三編）志保澤武、1943 年（非売品）、参照。

(9)「真毘」は、初版本における誤植である。直霊、直毘のこと。五井は法話（テープ）において、「なおひ、なおび」「ちょくれい」などと言っている。五井は、「直霊」という語を用いて「神（〝実相〟、神性、本心）」と結びつけて説明している。なお、改版本では、「直毘（なおび）」［五井『天と地をつなぐ者』（改版本）、47 頁］と訂正されている。

(10) 谷口の訳書とは、原著 *Being and Becoming* を翻訳的に紹介した『新百事如意』のことであろう。谷口雅春『新百事如意』光明思想普及會、1940 年（普及廉價版再發行）（初版は 1938 年）、5-9 頁、参照。

(11) 心霊科学研究会の浅野和三郎や脇長生の著作から学ぶ勉強会が東京都内において行われており、筆者も何度か参加した。本資料（テープ起こし）は同勉強会にて龍稚会（みづちかい）の代表・中野雅博（1951-）氏より提供してもらった。脇の講話の音声を筆者も聞いて確認した。

なお、かつて心霊科学研究会で学んでいた中野雅博氏や伊藤直廣（1947-）氏からの情報をとおして、脇の講話日を特定できた。講話日について、中野雅博氏によれば、「私〔中野氏のこと〕が、なぜ、〔脇の講話日を〕1975 年 11 月 30 日と特定したかといいますと、最初の司会の挨拶のところで、司会の人が『最後の例会を開きたいと思います。……明日は、はや 12 月でございます。』と述べていたから。そこで、〔脇の晩年にあたる時期の〕2、3 年間の暦を調べて、11 月 30 日が日曜日〔脇が講話する例会は、日曜日に開催されていた〕なのは、1975 年しかなかったので。」とのことであった。

ちなみに、このテープ起こしには、

「（司会者　挨拶）　最後の例会を開きたいと思います。今日は、ストの関係か、だいぶ少ないようでございますが。明日は、はや 12 月でございます。師走でございまして、この間、先生〔脇長生のこと〕を囲みまして、向こうの大広間で新年会を開きましたが、もはや 1 年でございます。」

［脇長生の講話テープ］

とある。

実際、脇長生の晩年にあたる 1970（昭和 45）年から逝去した 1978（昭和 53）年までの 11 月 30 日の曜日を筆者も調べたところ、中野雅博氏がいうように 1975（昭和 50）年 11 月 30 日のみが日曜日となっていた。

（12）日本心霊科学協会「本会役員」をみると、常任理事に脇長男〔脇長生と同一人物〕の名が確認出来る。戦後（第二次世界大戦終戦後）に刊行された日本心霊科学協会の機関誌『心霊研究』第 1 号の編集（長）は、脇長男となっている。そして、同『心霊研究』誌第 1 号の表 4 頁には、「心霊科学研究会出版書籍目録」として浅野の著訳書、『神霊主義』『死後の世界』『心霊学より日本神道を観る』などが広告的に紹介されている［『心霊研究』1947 年 2 月号、表 3 頁・表 4 頁、参照］。

（13）浅野和三郎『神霊主義――事実と理論』嵩山房、1934 年。脇長生は、『神霊主義』の改題版『心霊研究とその帰趨』（心霊科学研究会、1950 年）を読むことを心霊科学研究会の会員らに薦めたという［心霊科学研究会で脇長生から教えを受けた人たちからの筆者による聞き取り］。

（14）千鳥会は 1948（昭和 23）年 7 月 4 日に結成し、翌 1949（昭和 24）年 8 月に宗教法人となったという［『千鳥』1949 年 12 月号、2 頁、参照］。なお、千鳥会の結成時期は、萩原真の記述では「一九四八年節分」［『真報』第 37 号、1960 年 2 月 1 日、1 頁、参照］とある。

また、萩原真の自伝本に付された「略年譜」には、「一九四八年六月に結成」［真の道出版部編『真を求めて　萩原真自伝』、巻末「略年譜」、参照］と記されている。

（15）日本心霊科学協会と千鳥会は相互に情報を共有・提供し合っていた時期があり、『心霊研究』誌（日本心霊科学協会発行）に萩原真編『霊界物語』の広告と共に千鳥会の紹介も行っている［『心霊研究』1949 年 2 月号、表 3 頁、参照］。

（16）千鳥会の会報『千鳥』は、1948（昭和 23）年 6 月に第 1 号を刊行した［『千鳥』第 1 号、1 頁、参照］。

（17）千鳥会の会報で教理面の執筆を担った塩谷は、千鳥会を結成する前から日本心霊科学協会とも関係をもっていた。『心霊研究』誌によれば、1948（昭和 23）年 2 月頃、塩谷は日本心霊科学協会の「普通賛助会員」になった［『心霊研究』1948 年 2 月号、16 頁・表 4 頁、参照］。

（18）「梶（かじ）神霊」とは、萩原真の親友で、梶光之のこと。1934（昭和 9）年、梶は旧満州で他界したが、2 年後の 1936（昭和 11）年から萩原真のもとに「霊界」から通信してきたという。千鳥会（真の道）によれば、梶は〔「霊界」で〕修行を積み、「神格」を得たとされている［萩原監修『梶さんの霊界通信』、44-45 頁、参照］。

（19）五井は自叙伝の中で、「…… C 会〔千鳥会〕の交霊会には何処へでも出掛けていった。」［五井『天と地をつなぐ者』、97 頁］と記している。千鳥会主催の「交霊会（萩原霊媒）」は、1948（昭和 23）年 4 月には行われていた［『千鳥』1948 年 6 月号、2 頁、参照］。

（20）亀井三郎〔この姓名は、仮名〕。「物理霊媒者」。浅野和三郎（1874-1937）と 1929（昭和 4）年に接触した際、当時 27 歳ぐらいだった亀井は浅野にいくつかの「心霊現象」を披露した、という［春川編『心霊研究辞典』、60-61 頁、参照］。小田秀人（1896-1989）によれば、1930（昭和 5）年 11 月 3 日、亀井が小田に話を持ちかける形で一緒に「菊花会（きっかかい）」を組織することになった、という［小田『四次元の不思議』、63 頁、参照］。

（21）粕川章子（1887-1969）は、1946（昭和 21）年 12 月 1 日から、粕川が逝去した 1969（昭和 44）年 4 月 12 日まで、日本心霊科学協会の理事であった［日本心霊科学協会『創立五十周年記念特集』、415 頁、参照］。海外の「心霊」関係書の翻訳、等を手がけた。ワアド『幽界行脚』（浅野和三郎・粕川章子訳、嵩山房、1931 年）や粕川章子『大霊媒ホーム』（日本心霊科学協会出版部、1957 年）などがある。関係者〔高橋英雄氏〕によると、日本心霊科学協会の粕川と五井との交流は、粕川が亡くなる 1969（昭和 44）年まで続いたそうである。

(22) 小田秀人（1896-1989）。広島県生まれ。旧制第一高等学校から京都帝大卒。のち東京帝大に入り同大学院卒業、とある。大学在学中から「心霊研究」に取り組む。東大大学院では、姉崎正治（1873-1949）、宇野円空（1885-1949）の指導を受けていた、という［小田『四次元の不思議』、80 頁・奥付頁、参照］。また、小田は、詩人としても『先づ生きん』［1919］、『本能の声』［1928］などを出版している。そして、小田は、「心霊」研究の目的で、1930、1931（昭和 5、6）年に「菊花会」を創立し、機関誌『心霊知識』を発行した。その後、1967（昭和 42）年に単独で「菊花会」を再興し、機関誌『いのち』を発行した［小田『四次元の不思議』、「はしがき」の頁、参照］。なお、小田のこうした「心霊」関係の活動にあたって、「経済的には大本の二代〔三代が正しい〕教主補出口日出麿（ひでまる）氏〔1897-1991、三代教主・直日（なおひ）の婿〕が適時ピンチを救ってくれた。」［小田『四次元の不思議』、64 頁］と小田は述べている。また、五井も、小田にたいして、いくらかの「支援」をしたことがあったそうである。

(23) 五井の側近・髙橋英雄によれば〔髙橋英雄氏からの書簡で筆者が教えてもらった情報〕、機関誌『白光』1958 年 3 月号誌上に、粕川章子の英訳による（May peace prevail on earth! で始まる）「世界平和の祈り（Our Prayer）」〔最初につくられた英訳版『世界平和の祈り』〕が掲載された［『白光』1958 年 3 月号、32 頁、参照］。

粕川が作ったという「世界平和の祈り」の英訳文は、以下のとおり。

Our Prayer

May peace prevail on earth!

May peace 〔be が欠落〕 in Japan!

May our missions be accomplished!

We thank thee ;

Our Guardian Spirits and

Our Guardian Angels!

［『白光』1958 年 3 月号、32 頁］

1958（昭和 33）年 4 月、白光誌 4 月号でも「世界平和の祈り」の英訳をカコミで掲載。この号で脱字が訂正された。同 1958（昭和 33）年の白光誌 6 月号にもカコミで、「世界平和の祈り」の英訳“OUR PRAYER”が掲載されている［『白光』1958 年 6 月号、11 頁、参照］。

(24) 五井昌久『神と人間――安心立命への道しるべ』五井先生讃仰会、1953 年。（初版本）（非

売品)。本論文では、五井昌久の主著『神と人間』からの引用頁は、初版本をもとに示した。後年刊行され入手しやすいものに改版本およびそ改版文庫本がある。しかし、それらは、初版本とは該当ページが異なる（ずれる）ので注意されたい。

(25)『五井昌久講話集』は全 5 巻刊行されているが、本章では、以下の 3 つの巻を参照した。五井昌久『生命光り輝け　五井昌久講話集 1』白光真宏会出版局、1992 年（9 版）（初版は 1980 年)。五井昌久『素直な心　五井昌久講話集 2』白光真宏会出版局、1984 年（5 版）（初版は 1980 年)。五井昌久『光明の生活者　五井昌久講話集 3』白光真宏会出版局、1985 年（3 版）（初版は 1981 年)。

(26)『白光』の創刊前、1954（昭和 29）年頃に、五井は、ある程度定型化された「祈り言葉」を会員に提示している。翌 1955（昭和 30）年中に祈りの形が定まっており、1956（昭和 31）年には定着、1957（昭和 32）年 2 月の号では巻頭で「教義」と並べて、「世界平和の祈り」を注釈付きで掲載している。現在〔2018 年 6 月現在〕の「祈り」すなわち『世界平和の祈り』の文言は次の通り。「世界人類が平和でありますように／日本が平和でありますように／私達(わたくしたち)の天命(てんめい)が完(まっと)うされますように／守護霊様(しゅごれいさま)ありがとうございます／守護神様(しゅごじんさま)ありがとうございます」[『白光』2018 年 6 月 10 日号、38 頁]。

(27)大正末から昭和初期、谷口雅春は、浅野和三郎が創刊した『心霊と人生』誌（心霊科学研究会発行）にも寄稿していた。谷口の寄稿については、『心霊と人生』誌のバックナンバーを筆者が閲覧し、確認した。例えば、昭和 3（1928）年には、谷口は、「セオソフヰーの靈學」の題で記事を連載していた［『心霊と人生』1928 年 10 月号、1928 年 11 月号、参照］。

(28)機関誌『心霊研究』1947 年 2 月号～ 1949 年 1 月号を閲覧、参照。なお、日本心霊科学協会の『心霊研究』誌への脇長生の寄稿は、1949 年 1 月号で終わっている。脇は、その後、考え方の違いを理由に日本心霊科学協会と行動を別にした。

(29) 対馬路人・西山茂・島薗進・白水寛子「新宗教における生命主義的救済観」(『思想』第 665 号、1979 年 11 月）によれば、生長の家など 11 教団を研究した結果、新宗教の教えの中核には根源的生命という概念があるという。しかし、これ〔根源的生命〕は茫漠とした概念であり、五井の言うような人間的情愛の要素は強調されていない。

(30) 白光真宏会の「教義」の形成過程を見ると、同会〔当初は、「五井先生讃仰会」の名称で活動〕が宗教法人化した 1955（昭和 30）年までに、五井の「教え」はおおむね固まっていた。機関誌『白光』の創刊〔機関誌『白光』創刊号は、1954（昭和 29）年 10 月 15

日に刊行〕後、早々に「祈り」と「教義」が誌上に掲載され、小さな変化はあるが、大々的な変更はない。また、現在〔2018 年 7 月現在〕の「教義〔白光真宏会の現在の機関誌には、「人間と真実の生き方」という題で「教義」が掲載されている〕」を記すと以下の通りである。

人間と真実の生き方

人間は本来、神の分霊であって、業生ではなく、つねに守護霊、守護神によって守られているものである。

この世のなかのすべての苦悩は、人間の過去世から現在にいたる誤てる想念が、その運命と現われて消えてゆく時に起る姿である。

いかなる苦悩といえど現われれば必ず消えるものであるから、消え去るのであるという強い信念と、今からよくなるのであるという善念を起し、どんな困難のなかにあっても、自分を赦し人を赦し、自分を愛し人を愛す、愛と真と赦しの言行をなしつづけてゆくとともに、守護霊、守護神への感謝の心をつねに想い、世界平和の祈りを祈りつづけてゆけば、個人も人類も真の救いを体得出来るものである。

〔『白光』2018 年 7 月 10 日号、83 頁〕

「教義」が初めて公に記されたのは、1954（昭和 29）年 12 月 15 日付の「宗教法人五井先生讃仰会設立公告」においてであり、この「教義」は最初期の『白光』誌上に掲載された。以下、「公告」中の「教義」の箇所を記す。

教　　義

人間は本来、神の分霊であつて、業生ではなく常に守護霊、守護神によつて守られてゐるものである。此の世の中のすべての苦悩は、人間の過去から現在に至る誤てる想念が、其の運命と現はれて消えてゆく時に起る姿である。如何なる苦悩といへど現はれれば必ず消え去るものであるから、消え去るのであると云ふ強い信念と、今からよくなるのであると云ふ善念を起し、どんな困難の中にあつても愛と真と許しの言行をなしつづけてゆくと共に、守護霊、守護神への感謝の心を常に想ひつづけてゆけば、人間は真の救ひを体得出来るものである。(ママ) と説く。

〔『白光』1955 年 1 月号、26 頁〕

「五井先生讃仰会」を宗教法人として設立するにあたり、申請のため横関実が五井に「教義」の執筆を依頼したところ、その場で短時間（20 分ほど）で書き上げたものである、という〔清水『ある日の五井先生』、215 頁、参照〕。すでにこの時点までに五井の中で「教

義」はほぼ出来上がっていたといえよう。つまり、これまで述べてきたように、五井の教え（教理）は、戦後まもなくの「遍歴期」から教団設立までの間、様々な教団（団体）・人物と接する中で形成されてきた、といえる。

なお、五井の作成した白光真宏会の「教義」にみられる他教団からの「影響」は、以下のように指摘することが出来よう。

白光真宏会の「教義」の中には以下の用語（観念、文言）がみられ、そこには、他教団等からの思想的影響がうかがえる。例えば、筆者は、「教義」の中の 5 つの文言を挙げ、それらの観念にみられる他教団等からの思想的影響を次のように指摘した。

①「神の分霊」

五井は、生長の家について「人間神の子、実相円満完全、人間の本来性には悪もなく悩みも病苦もないのだ、と喝破してゐるその思想に深く打たれた」［五井『天と地をつなぐ者』、42 頁］と述べ、「教義」の中で人間が「神」と同質の「神の分霊（神の子）」と言っている。

真の道〔千鳥会は後年、真の道と名称を変更した〕でも、『導きの栞』において「私たちは神の子であり、神から生命を授けられた人間は、神の本質に通ずるものをみな持っている神聖な存在」［中川『（小冊子）導きの栞　No. 3　真の道の祈り』、2 頁］と、生長の家同様のことを言っている。

また、「大本」でも 1893（明治 26）年の「お筆先」（『大本神諭』）で「もとは神の直系（じきじき）の分霊（わけみたま）がさずけてあるぞよ。」［『大本神諭』第一集、16 頁］とある。

世界救世教も『天国の礎』で、「人は神の子であり、神の宮であるといわれるが、既説（きせつ）のごとくそれは神から受命（じゅめい）されたすなわち神の分霊（ぶんれい）を有しているからで、」［世界救世教編『天国の礎』、70 頁］と述べている。

つまり、前述「大本系」（「神道系」）教団において、「神の分霊」の教えは共通認識であることが分かる。どの教団からの「影響」というよりは、共有する考え方、といえよう。

②「守護霊、守護神」

「大本」では、「守護霊」と言わず「守護神」と言うが、「守護霊」の観念にかんしては既述したとおり、世界救世教、生長の家、日本心霊科学協会・心霊科学研究会、千鳥会〔のちの真の道〕等においても、同じような考えがある。つまり、地上の人間は、そうした存在に四六時中守られている、とされる。前述の教団がおおむね受け入れていた

内外の「心霊運動（スピリチュアリズム）」の「影響」を五井も同じく受けていた。しかし、五井の場合、「守護霊」思想にかんしてとりわけ強い影響を受けたのは心霊科学研究会・浅野和三郎の「神霊主義（スピリチュアリズム）」からであった。

③「苦悩は現われて消えてゆく姿」

五井は、自身の「光明思想」として、この教えを打ち出した。「悪と現はれ、不幸と現はれてきた環境はすべて過去世の誤つた想念（おもひ）や行ひが今現はれて消えてゆく姿なので、何も恐るる事はない。消えれば必ず、それだけ魂が浄まつて、運命が開いてくる」［五井『天と地をつなぐ者』、149 頁］という。

生長の家の谷口が説いた「精神分析」［谷口編著『精神分析の話』、参照］は、現在の悪や不幸の「原因」は現在生きる人の心の誤りにある（「三界唯心所現」）、とした。この教えによって、不幸な状態にある信徒は自らの心（あるいは、他の信徒の心）を責める傾向が見られたようである。これを解決する考え方として、「消えてゆく姿」という教えを前面に打ち出したのだった。五井は、現在の人間のせいではなく、（人間の「霊魂」が永遠で、生まれ変わることを前提にして）その人の「過去世」の想念や行いに誤りがあって、それが「業」として現在現われている、とした。そして、不幸であっても、いったん不幸として現われることで「過去世の悪業」が消えてゆく、「（悪）業」が消えればそれだけ魂が浄まり運命が開いてゆく、と未来を「光明」方向にとらえるよう導いた。生長の家に出合った初期の頃は、谷口に心酔し「三界唯心所現」の教えを谷口の本に書いてあるとおり受け取っていた。しかし、のちに、この教え〔教え方〕のマイナス面〔弱点〕に気づくことになった。問題は、ポジティブな心や言葉によってそうした世界を現わすというほうではなく、「不幸な現われ〈果〉」をもたらした原因を「心の誤り」に求めたことにあった。それが、谷口の「精神分析」であり、五井はこれを批判した。そして、「人間神の子」（実相論）と「心の影」（現象論）の二つの教えから生まれる葛藤を克服しようとした。結果的に、五井は「実相論」一本でいくことを選択し、それが五井の「消えてゆく姿」という教えだった。彼はこの教えを「教義」の主要部として打ち出している。

ただし、そうした五井の主張のいっぽうで、この「消えてゆく姿」という考え方が五井の独創だったかというと、全くそうとは言えない。例えば、谷口は『聖経　四部経（しぶきょう）』中、「聖経　続々甘露の法雨」で、

「肉体に激変起るとも恐るること勿れ。高く建ちたる建物の壊（くだ）くるときには轟然

たる響を発せん。その轟然たる響にも似たる病変は高く建ちたる汝の過去の迷いの消ゆる響なり。迷いの建物低ければ激動少し。迷いの建物高ければ激動多し。されど此らの病変を恐るること勿れ。壊くるものは汝自身に非ずして「迷い」なり。」

［谷口『聖経　四部経』、91-92 頁］

と記してある。

前の引用文の「建物」「迷い」を「業」と置き換えると、肉体の病変（病気）は業が「壊ける（消えてゆく）」姿、と読むことが出来る。この場合、「過去の迷い」の「過去」を「過去世」の意味で言っているかどうかは分からないが、「迷い（業）」の消えてゆく姿、と解釈することは可能だろう。

谷口雅春著『大和（だいわ）の国　日本』に掲載されている「終戦後の神示（1945 年 11 月 27 日未明神示）」にも、

「これから八十禍津日神、大禍津日神など色々の禍が出て來るが、それは、日本が『穢き』心になつてゐたときの汚れが落ちる働きであるから憂ふることはない。この禊祓によつて日本國の業が消え、眞に淨まつた日本國になるのである。」

［谷口『大和の国　日本』、16 頁］

とある。禍（まが）〔禍〕が出ることによって（国の）業が消え、浄まる、というのは五井の「消えてゆく姿」の教えと似ている。

ちなみに、五井は、

「其の頃〔1946（昭和 21）年 9 月頃〕の私は、生長の家の真理の言葉、生命の実相に書かれてある様々な説明を隈なくと云ふ程覚えてゐた。」

［五井『天と地をつなぐ者』、58 頁］

という。戦後まもなくから熱心な生長の家信奉者でのちに生長の家地方講師になった五井であるから、生長の家の経典である『聖経』〔「続々甘露の法雨」は 1943〈昭和 18〉年 11 月発表［生長の家本部編『生長の家五十年史』、「年表」の頁（768 頁）、参照］〕や前述の「終戦後の神示」の内容を知っていた可能性は高い。つまり、「消えてゆく姿」という五井の「教理（教義）」においても、いくらか生長の家・谷口の「影響」が考えられる。

岡田からの「影響」は、より明確といえる。前述のように、「毒素の中には先天的、即ち先祖からの罪穢れ、過去世の業の現はれ、と薬毒によるものとがあつて、」「熱を発して体が苦しんだとしても、それは毒素の浄化であつてけつして悪い状態ではない、人間の体が浄まつてゆく作用である。」［五井『天と地をつなぐ者』、22 頁］と、五井は岡田の

「〔「浄化作用」についての〕理論」を説明する。そして、「私は其の理論にすつかり共感した」［五井『天と地をつなぐ者』、22 頁］と述べている。筆者が注目するのは、「毒素」の中に「過去世の業の現はれ」が挙げられ、それが現われて（肉体が）苦しむことがあっても、それは毒素が「浄化」されているのであって、それで「浄まってゆく」という部分である。これは、まさに五井の「教義」の「消えてゆく姿」とほとんど同じ道理である。ここでは、「病気」について述べられているが、「過去世の業の浄化」というのは、岡田の「理論」からいくらか「影響」をうけていると見ても無理はないであろう。

④「信念、善念」

「〔苦悩は〕消え去るのであるという強い信念」と「今からよくなるのであるという善念」を起すよう、五井は「教義」の中で説いている。「光明思想」の点で、生長の家の教えの「影響」が見られる。

例えば、谷口は前掲『聖経　四部経』「聖経　天使の言葉」で「信念を変うればまたその相（すがた）も変化せん」［谷口「聖経　天使の言葉」『聖経　四部経』、29 頁］、「汝ら常に『健（けん）』を念じて『病（やまい）』を念ずること勿（なか）れ。」［谷口「聖経　天使の言葉」『聖経　四部経』、34 頁］と記してある。また、『聖光録（せいこうろく）』に収録の「『生長の家』信徒行持要目（ぎょうじようもく）」にも、「五、常に人と事と物との光明面を見て暗黒面を見るべからず。」［生長の家本部編『聖光録』、103 頁］とある。

つまり、五井の明るいポジティブな見方・考え方には、生長の家で説かれるこれらの「光明思想」が継承されているといえるのである。

⑤「自分を赦し人を赦し、自分を愛し人を愛す」、「愛と真と赦しの言行」

五井は生長の家の信徒時代を振り返り、「自己に相対する人間の心の間違ひを、精神分析的心の法則論で、しきりに責め立ててゐる」［五井『天と地をつなぐ者』、76 頁］、「人間の弱点に切り込む責め道具、心の法則と云ふ精神分析を教へ込む生長の家思想」［五井『天と地をつなぐ者』、77 頁］、「赦しの心、愛の心に非常な雲がかかつてしまふ。」［五井『天と地をつなぐ者』、78 頁］と述べている。いっぽうで、五井自身の教えは「現在の人間の中に一点の悪をも認めぬ愛と赦しの教なのである。」［五井『天と地をつなぐ者』、79 頁］という。

また、五井は自著『失望のない人生』において、

「人間は、善人であればあるほど、自分の誤ちを責め裁きやすい。……そこで私は、私の教義の中に、自分を赦しという一行を加えたのである。」

［五井『失望のない人生』、123 頁］

と記している。

白光真宏会の初期、1957（昭和 32）年、「教義」に、「自分を赦し人を赦し、自分を愛し人を愛す、」［『白光』1957 年 2 月号、表 2 頁］の文言が挿入された。これは、「心の法則論（精神分析）」を用いて自分や他人を責め裁きがちだったという生長の家の教えを五井が振り返っての反省（教訓）とも受け取れる。五井は、谷口の説いた「精神分析」の教えを見つめなおすことによって、「自分を責めず他人も責めない、自分も他人も赦し愛する」というみずからの「教義」にたどりついた、といえる。

そして、千鳥会で五井がもらったフーチのとおり、五井は、恩師・谷口雅春にみられるような豊富な知識（百知、万理識）よりも、「愛と真と赦しの言行」（一真実行、誠実真行）を重んじた。豊かな知識も大事だが、知識として語られた言葉が実際の自身の行動〔愛・真・赦し〕に結びついていること、日々の生活において言行〔＝愛・真・赦し〕を一致させること、を五井は白光真宏会の会員たちに指導していた。こうした五井の信仰者としてのあり方も、他教団（千鳥会、生長の家等）からの「影響」の一つに数えられよう。

ただし、上記において、やや〝谷口雅春批判〟めいた言葉が綴られているが、同会側近（髙橋英雄）らの話から綜合するならば、次のようにいえるだろう。五井は立教にいたるまでに、生長の家の教えの修正すべき点を見出し、ときには信徒たちを前に、「生長の家の教え」批判を口にしたが、五井自身はみずからの死去にいたるまでまで谷口雅春を敬う気持ちを持っていた。五井は生長の家・谷口雅春を批判もしたが、谷口雅春が説いた〝光一元、神一元〟といった「光明思想」を五井は選び取り、白光真宏会の思想的核心として、確かに受け継いだ。つまり、五井昌久にとって生長の家の谷口雅春は、教理の重要な部分を教示してもらった、たいせつな「恩師」でもあったわけである。

(31) 石井研士「となえ言葉」、井上順孝・孝本貢・対馬路人・中牧弘允・西山茂編『〔縮刷版〕新宗教事典　本文篇』弘文堂、1994 年、361-363 頁、参照。

(32) 五井が受けたであろう聖典からの「影響」のひとつとして、「新約聖書」からの影響について、ふれておきたい。五井は、自叙伝の中で、次のように述べている。

「医者を捨て切ったのは十六才位からで、……次第に年と共に宗教的な坐禅に変ってゆき、いつか空無というようなものを目指していたのである。その間聖書を読み、大蔵経の拾い読みなぞをしていた。私は最初の頃、武者小路氏の著書に私淑し、ト

ルストイに憧れ、そして宗教的になっていった。私が私なりの宗教観を持ったのは二十三、四才になってからで、その頃の宗教観も戦後にはすっかり変貌してしまったのである。」

［五井『天と地をつなぐ者』、11-12 頁］

つまり、五井が 16 才から 23、4 才までの間に、聖書（大蔵経）を読んでいた。この間において、武者小路実篤の著書に私淑、トルストイに憧れた、という。1932（昭和 7）年〈＝五井 16 才〉から 1939（昭和 14）年〈＝五井 23 才〉にかけての「戦前期」に、彼は上記の著書を読んだ。武者小路実篤とトルストイの著書について、自叙伝『天と地をつなぐ者』には具体的な書名は記されていない。しかしながら、聖書や仏典、トルストイらの平和主義の考えが、戦前においては五井の中でいったん沈潜し、戦後さまざまな宗教団体を経ることで、彼ら（イエス、仏陀、トルストイら）の思想的「影響力」が〝祈りによる世界平和運動〟のかたちで表面化するにいたった、と考えることも可能だろう。

なお、上記引用で、戦後に五井の宗教観が変貌した、と言うのは、五井が戦後（昭和 20 年代前半）に「スピリチュアリズム（神霊主義）」などに出合って、「想念波動」の重要性、「霊魂」の存在、「守護霊・守護神」のまもり、等について確信するようになったことを指している。

さらに、五井昌久の著作『聖書講義』における五井の話から見えてくるものについて、以下に記しておきたい。

五井は、全三巻の『聖書講義』（1969 年～ 1972 年）を刊行し、第一巻で、新約聖書の「山上の垂訓」に多くの頁（102-191 頁）をさいている。「汝の敵を愛せよ」の項をみると、五井は次のように解説している。彼は、聖書の「マタイ伝」文語訳から、

「……悪しき者に抵抗（てむか）ふな。人もし汝の右の頬〔ルビ：ほほ〕をうたば、左をも向けよ。なんぢを訟（うつた）へて下着〔下衣（したぎ）〕を取らんとする者には、上衣〔ルビ：うはぎ〕をも取らせよ。……汝らの仇〔ルビ：あた〕を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。（同〔マタイ伝第五章〕三八～四八）」

［五井『聖書講義（第一巻）』、129 頁］

を引用した（上記は「マタイ伝」5:39-40, 5:44）。これについて、五井は、

「この教を読むたびに、真理を行ずることのむずかしさが心に沁みて思われます。どんなにむずかしくとも、行いにくくとも、これは真理（キリスト）の言葉であり、神のみ心であることは、私の経験からしても確かです。」

［五井『聖書講義（第一巻)』、130 頁］、

「……できてもできなくても、聖書の言葉通りにしてゆかなくてはならないのです。」

［五井『聖書講義（第一巻)』、133 頁］

と述べている。要するに、聖書の文字通りの、「絶対的な非暴力」が五井自身の態度であったといえる。青年期から読んでいた聖書の言葉が、五井個人にみられる「絶対平和主義」的な態度とつながっている。

五井のみずからの命を惜しまない態度は、戦後まもなく〝天声〟を聴いて「神さまに命を差し出した」と再三、五井本人が語っていることから明らかである。五井のそうした絶対平和主義の態度は、いくらかは聖書からの「影響」もかんがえられよう。しかし、他方、その聖書の言葉は、五井の（平和主義の）信念を〝補強〟するために、五井によって〔後付けで〕選択的に採用されたものだった、と見ることもできるだろう。

また五井は、

「……世界人類が平和でありますように、という祈りを根本にした、世界平和の祈りの中に、すべての想念を投げ入れてしまいなさい、というのです。そういたしますと、……敵をも愛せる、敵を認めない心境になってくるのです、と説いているのであります。」

［五井『聖書講義（第一巻)』、134 頁］

といい、五井の提唱した『世界平和の祈り』〔『世界平和の祈り』とは以下のような言葉。「世界人類が平和でありますように／日本が平和でありますように／私たちの天命が完(まつと)うされますように／神様（守護霊守護神）ありがとうございます」［五井『聖書講義（第一巻)』、5 頁］〕をとなえることをとおして、相手を「敵」としない（みない）心となり、戦いや争いがおこらなくなるのだ、と説いた。

さらに、五井は同書〔『聖書講義』〕で「主の祈り」をとりあげ、次の引用を掲出した。

「この故に汝らはか〔斯〕く祈れ。「天にいます我らの父よ、願はくば〔は〕御名(みな)の崇(あが)められんこと〔事〕を。御国(みくに)の来たらん〔来らん〕ことを。御意(みこころ)の天のごとく（、）地にも行なはれんこと〔行はれん事〕を。我らの日用(にちよう)の糧(かて)を今日もあたへ給へ。我らに負債(おいめ)〔ルビ：おひめ〕ある者を我らの免(ゆる)したる如く、我らの負債(おいめ)〔ルビ：おひめ〕をも免(ゆる)し給へ。我らを嘗試(こころみ)に遇(あわ)せ〔遇はせ〕ず、悪より救ひ出〔ルビ：いだ〕し給へ（。）」汝ら〔汝等〕もし人の過失(あやまち)を免(ゆる)さば、〔汝らの〕天の父も汝らを免(ゆる)し給はん。もし人を免(ゆる)さずば、汝らの父も汝らの過失(あやまち)を免(ゆる)し給はじ。（マタイ伝第六章九

〜一五)」

［五井『聖書講義（第一巻)』、150-151 頁］

この引用に続けて五井は、

「私も若い頃毎日この祈りをつづけたものでした。実に素晴らしいひびきをもった祈り言(ごと)です。」

［五井『聖書講義（第一巻)』、151 頁］

と述懐している。五井自身、若い頃毎日この「主の祈り」をつづけた、と述べている部分が、キリスト教の新訳聖書からの「影響」を考察するうえで重要だろう。そして彼は、

「私が常に説いております〝世界人類が平和でありますように〟の一行は、この主の祈りを、もっとも今日的にわかりやすく、老人にも幼児にも唱えられるように説いたものです。

この主の祈りは、前半は、ひたすら、神のみ心そのものである、大調和世界がこの世に顕現されるように、という祈りです。これは今日的に要約すれば、世界人類が平和でありますように、であり、日本（祖国）が平和でありますように、ということになるのです。

「我らの日用の糧(かて)を今日もあたへ給へ」という所は平和の祈りの〝私達の天命を完(まつと)うさせ給え〟の中に含まれてしまいます。」

［五井『聖書講義（第一巻)』、153-154 頁］、

「主の祈りの現代版が世界平和の祈りであって、本質的に少しも変るところはないのです。」

［五井『聖書講義（第一巻)』、159 頁］

と述べた。本書『聖書講義』では、聖書の言葉を五井流に解釈していくわけだが、彼は聖書の「主の祈り」がもつ本質（エッセンス）が『世界平和の祈り』の中に継承されている、と主張している。たとえば、神の御心は〝（世界人類が）平和であれ〟であるから、それが地にも行われるように〝世界人類が平和でありますように〟と唱えるのだ、と五井はたびたび説いていた。五井が若い頃からくり返し読み、祈ったという「主の祈り」の主意が五井の『世界平和の祈り』に反映されている、ということをもって、キリスト教の新訳聖書からの「影響」を部分的にみることも可能だろう。

（なお、新共同訳聖書をみると「主の祈り」は、マタイによる福音書 6:9-13, ルカによる福音書 11:2-4、「山上の説教」は、マタイによる福音書 5-7 章、ルカによる福音書 6 章、

にある。）

第 3 章　五井昌久の教理にみる「影響関係」＝①〝消えてゆく姿〟という教え
――五井昌久による「苦難の解釈（「神義論」）」をめぐって

1　はじめに

白光真宏会の五井昌久（1916-1980）は、人間が生きていく上で出くわす「苦しみ」をどう解決しようとしたのか。筆者は、この問題をマックス・ウェーバー（1864-1920）の「苦難の神義論」に当てはめて考えられるのではないか、との着想から本章を執筆した。

本章では、また、白光真宏会・五井昌久および彼が戦後の「遍歴期」に入信した教団・教祖（世界救世教・岡田茂吉〈1882-1955〉、生長の家・谷口雅春〈1893-1985〉）の苦難のとらえ方（解釈）を比較し、検討することをおこなった。

そもそも、「災害などの苦悩が、なぜ善人の上にもふりかかってくるのか」という問いは、「神義論」としてこれまでにも多くの議論がなされてきた。たとえば旧約聖書の『ヨブ記』では正しい者に苦難がふりかかる様を示し「神のなされること〔計画、意図〕を人間が理解するのは困難」ということである。義人ヨブは〝苦難をあたえた神〟に絶対的な信仰をしめした。試みにあわされた理由はわからないままである。神が創造されたのであるから最善の世界であるはずだ、と神を弁護する立場からライプニッツ（1646-1716）は「弁神論」を説いた。また、宗教社会学からマックス・ウェーバーは苦難の意味を三類型の神義論で説明している。

いっぽう、日本の新宗教教団においても、信者にたいして当面の苦難を理解するための「神義論」なる教説が存在する。教団ごとに説明は異なるが、本章では、主に白光真宏会教祖・五井昌久が示した苦難の解釈に焦点を当てたい。同時に、五井が自らの教団をおこす前に入信していた世界救世教・岡田茂吉や生長の家・谷口雅春の教えも参照しながら論じていく。

そして、五井の「神義論」なるものが、ウェーバーの類型論の中のどれかに当てはまるのか、について考察を行う。

宗教教団が発信する様々な「災因論」のなかで、五井のそれは、苦難を肯定的にとらえ、自責の呪縛から解放する発想がある。苦難の肯定的解釈によって、宗教教団の教導のあり

方におけるバリエーションをしめしたといえよう。本章は、宗教教団の教導のあり方の研究という、より大きな課題へとつながるものである。

白光真宏会に関する先行研究は少なく、同会（五井昌久）の思想においてその苦難の解釈を掘り下げた研究はこれまでになかった[(1)]。本論考は、白光真宏会という一教団の思想分析にとどまらず、「神道系」の大本系教団群（あるいは世界救世教系教団群）に拡散している思想や近代スピリチュアリズムと接合した宗教思想をみることにもつながっている。

なお、神義論関連の先行研究で、本章執筆に際して筆者が参照した主な論文等は、一括して註に掲げた[(2)]。

2　マックス・ウェーバーの「神義論」による苦難の解釈

マックス・ウェーバーが、もっとも合理的で首尾一貫しているとみなした「苦難の神義論」に、つぎの三類型がある。

2-1　「二元論」（例：ゾロアスター教）

ウェーバーによれば二元論とは、「光、真理、純粋、善意という力と、闇、虚偽、不純、邪悪という力の、永遠の昔からそして永遠にわたって存続する並存と対立という考え」である。「神々と悪魔の対立という考え」であり、「全能の唯一神という観念を放棄して、逆に神に対抗する力の存在という限界をもうけた」とする［ヴェーバー『宗教社会学論選』（大塚・生松訳）、161-162 頁］。

つまり、善・悪の並存状態を容認し、苦難は悪魔からによるもの、という。ここにおいて、善なる神は全知とはいえず、慈悲は放棄されている。

2-2　「予定説（預定の信仰）」（例：キリスト教プロテスタント）

また、予定説は、「神の決断は人間の尺度では測ることができない」という教説。苦難は、「宿命」のごとく、あらかじめそのような者になるように定まっている、とする。人間側としては受けいれるのみであって、「人間の理解力で現世の意味を捉えうるとするような考えは放棄すべきだ」と示したものである［ヴェーバー『宗教社会学論選』（大塚・生松訳）、162 頁］。

苦難は神からもたらされたものだが、人間がその理由を問うことを受けつけない。

2-3　「業（輪廻）の教説」（例：ヒンドゥー教、等）

そして 3 つめが「善行と悪行とが多少とも名誉あるいは不名誉な再生の仕方によって応報されるという業の教説」である。「道徳的関係を有するありとあらゆる行為は不可避的に行為者の運命へ影響をおよぼし、したがってかかる影響は一つとして消滅することがないという思想」という。「病気や虚弱や貧乏など、……人生の全運命は人間みずからの所業」とされる。「前世の功罪が現世の運命を決定し、現世の功罪が来世の地上生活における運命を決定する」「ただ自己の行為によってのみその運命を決定する」というのが業の教説だった［ヴェーバー『ヒンドゥー教と仏教』（古在訳）、168-169 頁］。

つまり、現世の苦難は、前世における悪業（罪）によるもので、悪因悪果、因果応報であると説明している。

3　新宗教教団における「苦難」の解釈

3-1　白光真宏会・五井昌久の解釈

五井は、みずから作成した「教義」(3) において、苦悩を以下のように解釈し、説明した。

> この世のなかのすべての苦悩は、人間の過去世から現在にいたる誤てる想念が、その運命と現われて消えてゆく時に起る姿である。
>
> 　いかなる苦悩といえど現われれば必ず消えるものであるから、消え去るのであるという強い信念と、今からよくなるのであるという善念を起し、……
>
> ［『白光』2016 年 9 月号、巻頭頁］

この世でうける苦難（苦悩）の理由について、それは過去世からの悪業が原因となっている、と述べている。「誤てる想念」は、思いと同時に業 (4) をあらわしている。

この教義に関して、五井が講話で語った内容をいくつか挙げてみよう。

> ……輪廻する業はそのまま現わせしめて消すことです。業は現われれば必ず消えるのです。〝出て来た業は消えてゆく、これで業が消えて浄まったのだ〟と思って、……
>
> ［五井『生命光り輝け』、12 頁］

と、前掲「教義」のように、前世からの業が〔今生において〕運命として現れて〝消えてゆく姿〟であるといっている。

病気になるのも、災害の現われるのも、これで業が消えてゆく、消えてゆくのだ、これだけ自分が浄まったのだ、浄まるために業が出てくるのだ、どんな苦しみも、どんなつらさも、すべて消えてゆくのだ、と思って、……
［五井『生命光り輝け』、17 頁］

病気、不幸、すべて悪い事態が起っても、すべてはよいほうに進んでいるのだ、と絶対に想えるようにならなければなりません。
［五井『生命光り輝け』、22 頁］

上記のように五井は、苦難の例として「病気、災害、不幸、悪い事態」を挙げている。そうしたことを経験することで業〔過去世からの悪業〕が消え、自分〔の「霊魂」〕は浄まっている、これからよい方向に行くのだ、と現在の悪い事態（苦難）をポジティブ〔前向き〕にとらえ直すのが五井の考え方の特徴である。

……痛いのは痛いのであり、悪いものは悪いのですよ。それはそのままでいいのであって、そのまま受けて、それがどこから出たものか想い起し、即ちこれで過去の業が消えたのだ、もう再びこの業はつくるまい、と堅く思いこむのです。
［五井『生命光り輝け』、32 頁］

過去世の過去世から続いてきた誤った悪い想いがあります。罪業もあるでしょう。それらが積み重なって現われてくる現在、……現実に次々と悪いことが出てくるのです。
［五井『生命光り輝け』、33 頁］

……今現われている病気も不幸も、今できたのではなく、昔あった間違った想いが、今消えてゆく姿として現われたのです。
［五井『生命光り輝け』、37 頁］

……病気が出た、しめたこれで業が消えた。不幸が来た、よしこれで業が消えて浄まるのだ、有り難い、と思える勇気が必要ですね。

［五井『生命光り輝け』、46 頁］

以上は、いずれも同様のことを言っており、痛いこと〔病気〕、悪いできごと〔不幸〕が起きてきたルーツを辿るならば、それは過去世からの悪業に起因するという。現在に悪いできごとのかたちで現われたということは、過去の〝借金〟である業が消えた、〝借金〟返済できる「好機」とさえとらえている。

そして、さまざまにふりかかる不幸は「運命」なのか、もしそれが「運命」だとしたら、その「運命」は変えられるのか、との信者の問いにたいして、五井は、次のように答えた。

運命は変へられます。変ります。……不幸の中にあっても、此の不幸は、今迄の間違った想念行為が消え去ってゆく為のものであって、これからは善くなるのだ、と想ひつづけるのです。そしてその想ひと共に、守護の神霊への感謝をつづけるのです。さうすれば、必ず運命は善い方向に変ってゆきます。

［『白光』1956 年 10 月号、16-17 頁］

上のように、五井はみずからが作成した「教義」に書かれている内容〔「今からよくなるのであるという善念を起し、」「守護霊、守護神への感謝の心をつねに想い、」〕の実践をとおして、「運命」は変えられる、と説いた。

また、苦難は神や天による罰であるのかいった問いには、次のように述べている。

……新興宗教の中には罰をあてると嚇すものがありますが、そんな神さまはないのです。罰など無論ありませんよ。人を救って幸福にしてやろう、という愛である神がどうして罰をあてますか。

［五井『生命光り輝け』、49 頁］

人間に不幸が来るのは、決して神がさせてゐるのではなく、人間の業（カルマ）が、人類の誤まった想念行為の集積が、崩れ去ってゆく時に起る姿なのであります。

［『白光』1956 年 7 月号、25 頁］

このように、五井は、〝神は愛なる存在〟であるから、天罰や神罰などはない、という。不幸（苦難）は神や天による罰なのではなく、不幸（苦難）とは人間の業が崩れ去ってゆく〔消えてゆく〕時の姿だ、と述べた。つまりは、苦難の解釈における神罰を否定した。

また、戦争（や天災地変）による苦難については、

第二次大戦は両方の業のぶつかり合いでしたので、神さまは日本にたまった業を浄めるに丁度よい時機と思われて、神風を吹かせず、敗戦ということで日本を浄められたのです。

［五井『生命光り輝け』、64 頁］

といい、講演会でも五井は次のように述べている。

日本は明治の戦争で勝って相当人も殺しているし､おごりたかぶったこともあります。そうしたものがすっかり返って来て、昭和になって敗北を喫したわけです。大きな国の業を払ったけれど小さい業は残っています。

［五井『五井昌久全集 1　講演編』、149 頁］

そして、白光真宏会の初期、機関誌『白光』のなかでも五井は、以下のように語っている。

戦争も天災地変も、すべて悪と現はれる姿は業想念の消えてゆく姿なのです。

［『白光』1956 年 7 月号、26 頁］

上の引用のように、五井は、個人単位と同様、国家単位の業の浄化があるとし、第二次世界大戦敗戦の苦しみは、日本の業を浄化する意味あいがあった、とした。

また、個人における苦難解釈の別パターンとして、次のような考え方も示している。

どんな災難や病気や碍りがこようと、自分の魂を守護霊さんが強くしようと訓練されているのだ、と思い定めることです。そのように思えれば、どんな苦しみも、災難も

碍りも、すべて自分を強くする修行になり、結局自分は強くなるわけです。
［五井『生命光り輝け』、78 頁］

……どんな苦しみが出て来ても、……苦しみが終われば、魂は素晴しく飛躍するわけです。
［五井『生命光り輝け　五井昌久講話集 1』、139 頁］

つまり、苦難は自分の魂を強化、訓練するための修行ととらえるわけである。苦しみを経ることをとおして魂が向上する、と五井はいう。そこには、〔苦難による〕魂の鍛錬〔トレーニング〕の意と同時に、苦しみが業を浄める〔業を消す〕から、そのぶん魂を飛躍〔進歩向上〕させるという意もふくまれる。五井は苦しみにあるとき、祈ること[5]をすすめている。なお、「苦しみが終われば」とは、極端な場合は肉体の死を意味し、苦難を理解するうえで、五井は「霊界」の観念をとりこんで説明することもある。

人が貧乏や病気など、いわゆる不幸で苦しんでいるのは、……本当はかわいそうではないのです。……人間がこの世に生まれて来たのは、過去世からの悪業（間違った想いと行い）を消しながら、……もし子供が病気などになっても、〝あゝこれで悪いものが出て、浄まってよくなるのだ〟と思って、……そうした祈りをつづけていて、たとえ死んだとしても、……霊界の高い位置をしめることが出来るのです。
［五井『生命光り輝け』、88-89 頁］

最後の一文の「たとえ死んだとしても」という言葉が示すように、五井の場合、現世における死を人間の終わりと考えないため、死後の世界では苦難から解放され、業が浄まったぶん「霊界」の高い位置〔より幸福感に満ちた世界〕に〝移行〟[6]できる、とする。
五井（白光真宏会）の教えでは、

……過去世から今生にかけての想いの結果でなるのです。今、悪いことが現われていても、あなたの心に悪が存在していても、それはあなたの悪ではなくて、過去世の悪が消えてゆく姿として現われてくる。
［五井『生命光り輝け』、153 頁］

といい、「今の自分の心などが悪いから」というふうに〝現在〟に苦難の原因を帰す、いわゆる「心直し」をつよく求めるわけではない。そうではなく、「〝過去世〟が悪かったから」と、今の苦悩の原因を前世に転嫁する。この思考法には、現世を苦悩のなかに生きる人が今の自分を責めないように、という教義的配慮がみられる(7)。

そして、五井は講演会において、

> この世に、金持の家に生まれて来た人もあります。貧乏で生まれて来た人もあります。……どうしてそういうように不公平に生まれてくるのかというと、過去世の因縁によるからです。過去世にやってまた(ママ)〔きた〕想念行為が今、自分に還ってくるからです。……もし今生で貧乏であるとしたら、それは過去世において……福をまいてなかったからです。この世で富んでいたら、それは前世において非常に福をまいたからです。……これは法則ですから絶対に逃げられるわけはないのです。
>
> ［五井『五井昌久全集 1　講演編』、148 頁］

と語り、現在の苦難だけでなく、現在の幸福の理由は「因果の法則」によるもので、絶対なのだと言っている。善因善果、悪因悪果なのであり、過去世・現世をまたいで成就すると述べている。誰も逃げられない「法則」だから、前世で積んだ業〔善業又は悪業〕は、次の世において幸福の享受又は受難のかたちで〝精算〟される、との考えである。

五井の法話(8)では、現在の苦難の原因を「過去世の業」と指摘することが多い。その業について、「教義」から正確に言うと次のような説明となる。白光真宏会会員の問いと五井の答えからなる「宗教問答」で彼は、

> 病気になったり不幸になったりするのは、確かに魂の因縁や、想念行為の誤りが表面に現われてきたことに違いありませんが、……この想念行為というのは、今生だけのものではなく、過去世プラス今生の想念行為というわけですからお間違えないように願います。
>
> ［五井『宗教問答』、229-230 頁］

と説明した。前掲の「教義」で「人間の過去世から現在にいたる誤てる想念が、」とある

ように、苦難の原因は「過去世の業プラス今生の業〔想念行為〕」ということになる。しかし、対機説法だからだろう、TPO に応じて五井の言い方が微妙に変化する。そして、五井が、苦難の原因としての業について信者（会員）に言うときは、おもに「過去世でおかした悪業」をさして語る場合が一般的といえる。

また、身体・精神の障がいをもって生まれてきた人について、五井は次のように答えている。

> ……二種類あるのです。一種類は、前生において、……他の人々の肉体や精神を痛め傷つけつづけてきた人々。そしてもう一種類は、……いわゆる菩薩行のためであります。……〔両親や周囲の人々も含めて〕苦しみ悩むということは、過去世の業因縁を自然と消滅させてゆくことになるのです。
>
> ［五井『続宗教問答』、206-207 頁］

ひとつは、これまでの説明にあった前生〔前世〕での悪業が報いとしてかえってくるかたちで今生は障がい者となり、今生の苦難をとおして業を消しているというタイプ。そのほかに、〝菩薩行〟として、自己の浄化だけでなく肉親や周囲の関係者たちの業（因縁）を消滅させてゆくために障がいをもって生まれてくるタイプがあるという。五井によれば、苦しみ悩むことは過去世の業を消す意味がある。ゆえに、周りの人たちが障がい者を育てていくなかで経験する苦悩をとおして、業の浄化される機会を与えてもらっている、と解釈している。障がいをもつ当人だけでなく、周りの人の業を消す〝手伝い〟をしているから菩薩行というわけである。

五井の苦難の解釈においては、常に前向きにとらえ直すところに、その特徴がみいだせるだろう。

3-2　世界救世教・岡田茂吉の解釈

五井が敗戦前後から接触した世界救世教・教祖の書籍のうち、最初に読んで五井が感銘を受けたという『明日（みょうにち）の醫術』から、岡田が苦難をどう解釈、理解したかを見ていきたい。

岡田は、『明日の醫術』において、主に病気を例に、そこで伴う苦痛は「浄化作用」である、とする。例えば、かぜひきにおいて発熱、鼻汁、喀痰等が起こるのは、全身の各所

に溜結する毒素が「浄化作用」によって排除される姿だ、と述べる[9]。

……自然浄化作用が行はれる場合或程度の苦痛が伴ふので、その苦痛を稱して、〝病氣〟と名付けられたのである。

［岡田『明日の醫術　第一篇』、81 頁］

岡田は、こうした病気のような苦痛（苦難）が起こる理由（原因）は、「毒素」にあるとした。とくに「薬毒（やくどく）」という薬剤投与（服薬、注射）による「毒素」にたいし、岡田は本書（『明日の醫術』）の中で厳しく批判している[10]。世界救世教・岡田は、掌を用いた施術を「醫術」と言い、腎臓を重視した「掌療法」を行った［岡田『明日の醫術　第一篇』、178 頁、参照］。

また、大きな戦争や災害に関して、その理由を病気の「浄化作用」と同様の解釈によって、次のように岡田は述べている。

……病氣も天文現象も淨化作用であるといつたが戰爭なるものも、勿論淨化作用である。……その内面的に堆積せる罪穢が極度に達したからである。……斯様な大戰爭が起つたといふ事は起るべき理由があつて起つたのである。……理由とは何ぞや一言にしていへば、世界的大淨化作用である。泰西〔西洋〕文化が今日の如く發達したといふその内面には、何世紀もの罪穢が堆積し、それが極度に達したからである。

［岡田『明日の醫術　第三篇』、51 頁］

国単位で過去からたまった罪穢〔業〕が因となって今、（大）戦争という結果を生んだと岡田は言う。そして、彼〔岡田〕は、その悲惨な戦争という苦悩〔苦難〕そのものが「浄化作用」である、というのである。

さらに岡田は、「浄化作用」を補足説明して、

故に淨化作用とは不正・不合理によつて堆積せる汚穢が排泄されて、清く正しい本然の姿に還ることである。

［岡田『明日の醫術　第三篇』、53 頁］

と述べた。上記の岡田の「浄化作用」説は、五井の説いた〝過去世からの誤てる想念（悪業）が表に苦難のかたちと現われて消えてゆく、苦難として現われたぶんだけ浄まる〟とする考え方と変わらない。

また、岡田の説として、苦難の原因に「靈體の曇」がある、という言い方をすることがある。例えば、次のように岡田は述べている。

> ……〔靈體に〕曇の多い程、淨化作用が發生し易いから大病に罹り易いのであり、又災害を受け易いのである。例へていへば交通事故の如きは霊衣[11]の薄い人ほど災害を蒙り、厚い人は難を免れるのである。
> ［岡田『明日の醫術　第三篇』、69 頁］

「霊体の曇」は、岡田が提唱した「浄霊」という手をかざす儀礼によって浄まるという。岡田は、「霊体の曇」が大病や災害などの苦難を受け易くする、と述べた。しかし、同時に「浄霊」という救済方法を示し、「霊衣」についても善徳を積むことでそれを厚くすることが出来る、とした［岡田『明日の醫術　第三篇』、69-70 頁、参照］。

ここで岡田は、病気とは「霊体の曇」により起こるとするが、そのもとを辿ると、悪業（悪想念、悪行為）が積もったことによる、という。岡田は、次のように説明する。

> ……人は惡を想ひ、悪の行爲を重ぬるに從つて、それだけ靈體に曇が增量し、漸次その濃度を增すのである。然るに、右の濃度が或程度に達すると、自然的解消作用が起るのである。……右の淨化作用の多くは病氣となつて現われるものであるが、時としては、其他の形となつて現はれる事もある。……長年積み累ねた罪穢であるから神佛と雖も否正しい神佛であればある程公正であるから、輕苦では濟まされないのである。
> ［岡田『明日の醫術　第三篇』、7-12 頁］

このように、岡田が病気の理由としてあげる「霊体の曇」も、もとはと言えば、五井と同様、悪い想いと行いの蓄積による悪業が原因となっていることが分かる。そして、岡田は、悪想念・悪行為による罪穢が（過去世からも含む）長期にわたるものとするならば、「浄化作用」として人間が受ける苦難の程度も軽くない、と言うのである。

岡田は、病気が「浄化作用」であるように、風雨等〔自然現象による被害〕も一種の「浄

化作用」とみて、次のように説明した。

……大自然は、天地間凡ゆる物に、淨化作用なるものを行ふのである。此事は、大祓の祝詞中にある如く、祓戸四柱の神の擔任せられ給ふ處であつて[12]、例へていへば、地上に汚穢が溜れば風に吹き拂ひ、雨水によつて洗ひ淨め、天日によつて乾燥させるのである。……一軒の家に於ても、塵埃が溜ればそれを拂ひ掃き水で洗ひ拭き清めるので、それ等の事は人間に於ての病氣、卽ち淨化作用と同様である。

［岡田『明日の醫術　第二篇』、11-12 頁］

上記の文において岡田は、人間の体内に固まった「毒素」を溶解し排出する〔「掃除」する〕病気の「浄化作用」同様、地上に溜まった汚穢を風雨、天日によって〝浄める〟、というのである。自然災害も「浄化作用」のはたらきととらえている[13]。

さらに、例えば、いい人なのに不幸な境遇の人がある。これにたいして岡田は「前世の罪穢」を理由として、次のようにといた。

……再生しても〔生まれ変わり、転生しても〕前世に於ける罪穢が未だ殘存してゐる爲、その淨化作用としての苦惱を受けなければならないのである……

［岡田『明日の醫術　第三篇』、91 頁］

現世でうける苦難（苦悩）の「原因」として、五井同様、岡田も、前世の罪穢（悪業）をあげ、現世での苦しみとは罪穢をきよめる「浄化作用」であるという[14]。

また、岡田は、前述と同じことを別の言い方で、現世で苦悩を経験する理由として、次のごとく「再生が速すぎた」といっている。

……靈界に長く居れば居る程淨化され、靈體は淨まるのである。淨まつた靈體ほど再生して幸福者となるのである。……早く再生する場合は、汚濁が殘存してゐるから、再生の後現世に於て淨化作用が行はれなければならないからである。……現世の淨化作用とは、病氣、貧乏、災ひ等の痛苦であるから不幸な運命を辿るといふ譯である。……決して幸不幸は偶然ではなく、必然である事を知らなければならない。

［岡田『明日の醫術　第三篇』、92-93 頁］

岡田は、「幸不幸は、必然」と因果応報の理を説いている。ただし、それは、「前世（過去世）→霊界→現世」をとおした因果応報説であることに留意したい。

3-3　生長の家・谷口雅春の解釈

五井は、第二次世界大戦敗戦直後の頃から、前述の世界救世教にくわえて、生長の家に入信した。谷口雅春の主著『生命の實相』全巻を読み、熱心に生長の家信徒獲得のための普及活動を行った。生長の家の『生命の實相』にみられる「苦難の解釈」にもふれておこう[15]。

寺田論文でも一部引用された箇所に、

> ……過去世において悪業を作った人間の霊魂が苦行によって罪の消滅をはかるために、ことさら不治的悪疾を肉体にあらわしている場合も多いのであります。
>
> ［谷口『生命の實相　頭注版　第 1 巻』、34 頁］

とある。谷口も、病気は過去世の悪業が原因で、病で苦しむことをとおして罪〔悪業〕の消滅をはかっているという。

また、苦難は神罰なのかという問題には、次のような谷口の記述がある。

> ……病気になるとかいうのはわれわれを反省せしめるために神が与えた神罰であるかと言いますと、……心の法則で、そうなるのであって、神が人間を罰するのではないのであります。
>
> ［谷口『類纂・生命の實相　人類無罪宣言』（楠本編）、27 頁］

谷口は「神罰は無い」と言い、病気は神罰によるのではなく、「心の法則」で病気になった、と述べた。その「心の法則」を、谷口は、次のように解説する。

> ……われわれの心の罪の意識が、罪の恐怖が、「三界は唯心の所現」の理により、相形に現われて、あるいは肉体の病気ともなり、あるいは不幸の境遇ともなり、あるいは災難ともなるというふうに現われてくると申します。……三界唯心所現の理を知れ

ば……病気または不幸を観て、どういう心の間違いからこの病気不幸が起こったかを知ることができるのであります。

［谷口『類纂・生命の實相　人類無罪宣言』（楠本編）、32 頁］

上のように、生長の家・谷口雅春は「三界は唯心の所現」の理といい、心の間違いが病気などのかたちに現れてくる、という。つまり、病気などの苦難は、自分の心の間違いによってもたらされたとする。心の間違いを直せば〔「心直し」をすれば〕病気などはよくなるという「理、法則」説でもある。

また、いっぽうで、五井の教説と似たものとして、以下のような谷口による説明もある。

……この悪いのは誰が悪いのであるかというと、自分が悪いのではない。過去の業がもどけている〔解けている〕にすぎないのであります。言いかえると、業がもどけて業が滅しつつあるのであります。……腹が立ったりいろいろの悪い念を起こしても、「自分が悪い」とは思わないで、「これで業が滅しニセ物の自分が滅して本当の自分――円満完全な神の子たる自己の真性が顕現しつつある。……」と観じて業の力がもどけて自壊するのにまかすのであります。

［谷口『類纂・生命の實相　人類無罪宣言』（楠本編）、57 頁］

このように谷口は、例えば、悪い感情が起こってくるのは、過去の業が時計のゼンマイがゆるんでいくように解けているからで、業が消えつつあるのだという。だから、悪いものが出てきたら、これで業が消えて〝円満完全な神の子〟である真性が現れるのだから、業が〝自壊（じかい）〟するのにまかせればいい、とした。

ほかに、谷口による苦難の説明として、祖先の霊の障りが原因となって子孫に病気がおこるといった例が示され、谷口は次のように解説した。

……祖先の霊魂の念波は、現実世界にいる子孫の運命に影響を及ぼすということであります。……祖先または自分に関心ある縁者の霊魂の好まないところを子孫が行なえば、祖先または縁者の霊魂の反対観念を受けて、その人の運命が妨げられます。

［谷口『生命の實相　頭注版　第 4 巻』、50 頁］

谷口の説く教理によると、このように、「祖先霊」などの影響によって、子孫が苦しみをうける場合もあるという。

以上、五井、岡田、谷口の苦難の解釈（「神義論」）をみてきたが、異同をみると五井の「〝消えてゆく姿〟の教え」とほぼ同様の思想を岡田・谷口もともに有していたことがわかる。岡田の「霊体の曇」、谷口の「心の法則論」「祖先霊の影響」など、若干の違いがあるようにみえるものの、それらの思想も五井が否定するものではなく、苦難の説明における力点の優先順位の違いにすぎない。

こうした共通する考え方は、神道系である大本系教団の少なからぬ領域で広がり、近代スピリチュアリズム思想との混交を加えた、〝〔近現代という〕時代を反映した文化〟とも位置づけられよう。なお、大本系教団群からさらに派生・展開していった世界救世教系教団群の中においても同様の教理（「浄化作用」）が多く説かれているとおもわれる[16]。つまり、〝苦しみを通して罪業〔「罪穢」〕が消えていく〟というような考え方は、少なくない日本〔神道系〕の新宗教教団〔「大本系」「世界救世教系」など〕にみられる思想（文化）といえそうなのである。

4　ウェーバーの類型論と五井の「神義論」

前節までに、五井のほか岡田・谷口の「神義論」をみてきた。本章の題にあげた五井の「神義論〔苦難の解釈〕」を、ウェーバーの神義論類型の中で検討してみよう。

4-1　「二元論」の検討

まず五井には「二元論」のように善神と悪神に分け、悪神によって現在の苦難を解釈するということはない。現実世界に善も悪もあらわれてみえることはみとめつつ、実相は善のみの光一元の世界[17]、ととらえている。後の「業の教説」の検討の項でも述べるが、悪とあらわれているすがたは「業の消えてゆく姿」とみる。善なる神はあっても、悪なる神はない、との考えである。神は善で愛にみちた存在であることを前提としている。それゆえ、親である愛なる神が、「神の子」「神の分霊」である人間を悪いようにはしない、とされる。よって、五井の「神義論」においてウェーバーの「二元論」はあてはまらない。

4-2　「予定説」の検討

ウェーバーの類型におけるこの説は、人間にふりかかってくる苦難、災難は、すべて神

の決定にしたがって起こっているもので、苦難も予定どおりなのだ、とする。五井のいう究極の神〔（大）宇宙神〕は、すべての根源であり全知全能である。さらに、前項でふれたように神は善なる愛なる存在とみている。だから、神は人間が不幸になることをのぞんではいない、とする。神は人間に、幸せであれ、平和であれ、とおもっているのであって不幸や戦争の〝予定〟はたてていない、といった考え方が五井の基本的立場であろう。前述の五井昌久の「苦難の解釈」の項でしめしたように、五井は、「運命」は一部、変えられると語っている。五井の「教え」によれば、運命の 8 割は決まっているけれども、あとの 2 割は変えられる、とたびたび説いている。

ただ、神の考え（決定）を人間が容易に理解することはできない、というのは五井もみとめるところだろう。なぜなら、究極の神は人間からあまりに遠く、人間の認識で身近につかむことができないからである。だから、五井ははるかかなたでつかみえない「宇宙神」よりは、もっとも身近な、各人の祖先の悟った霊とされる「守護霊」や愛念をもって見守ってくれているとされる「守護神」をつかんで瞬瞬刻々、祈りにすごすことをすすめた。

神の決定をふつうの人間が理解することは不可能、としたウェーバーの説は、五井の考えと合致するといえる。しかし、深遠なる神の考えは理解できないとしても、神は人間を悪いようにはしない、という五井の信念からいって、苦難の〝予定〟は否定するであろう。

なお、ウェーバーのこの類型（予定説）においては、神の決定は人間の力によって変更できるものではない、ただうけいれるしかないのだ、とした。五井は、その説には中間的で、「運命」という観点から、ある程度は決まっていて変えられない部分がある[18]とするいっぽうで、人間の想いや行い〔具体的には「祈り」の実践[19]などをさす〕によって変更できる部分もある、と説いた。

これには、五井らが説いた「写し世」の観念とも関係している。「写し世〔「移写」〕」の観念とは、「霊界」で出来上がっている〝予定〟が「現界」に写って現実化する、という思想をさす。五井もこの「写し世〔「移写」〕」説をとっており、「現界」の人間が五井の提唱する「世界平和の祈り」〔や五井の書いた「教義」の実践、守護霊・守護神への感謝など〕を徹底して行じるならば「霊界〔「幽界」〕」で出来上がっている〝〔破滅的な〕予定〟は変えられる、修正可能という。たとえば、「写し世〔「移写」〕」という教理の話において、「幽界」では戦争がすでに起こっておりその戦争が「現界」にいずれ起きる〔写ってくる〕予定になっているとしても、それ〔戦争〕を起きないようにできる、と五井は説いている［五井『五井昌久全集 1　講演編』、345-346 頁、参照］。

4-3　「業の教説」の検討

これまでの引用例、記述から明らかなように、五井の説ともっとも近いのは「業（輪廻）の教説」である。このインドの業の教説では、現世の苦難は、前世での罪悪に帰責される、といわれる[20]。たとえば、ヒンドゥー教徒は前提としてサンサーラ（輪廻）の信仰をもち、これ（輪廻）につながるカルマン（業）の教説を否定しないという［ヴェーバー『ヒンドゥー教と仏教』（古在訳）、167 頁、参照］。

つまり、彼らヒンドゥー教徒たちは、現在、低いカーストに生まれ苦難をしいられているのは、前世において善行よりも悪行が多かったからである、前世の自分が悪かったから現世でこの低いカーストに輪廻することになった、前世での罪悪による因果応報なのだ、と解釈するというわけである。

ウェーバーは業の教説にたいして、「病気や虚弱や貧乏など、要するに人生においておそれられた一切のものは……ここにおいて、人生の全運命は人間みずからの所業であるという見解へたかめられた」［ヴェーバー『ヒンドゥー教と仏教』（古在訳）、169 頁］と述べている。その教説では、輪廻思想とセットになっており、前世の所業・功罪が現世の運命を、現世の所業・功罪が来世の運命を決めると考えられた。そこには、インドのカースト秩序が念頭にあり、〔現世で〕尊貴な地位の者は来世でもよいカーストに生まれたいとかんがえて喜捨などの善行をおこなうわけである。いっぽう、低いカーストの者は今の境遇を前世の贖罪ととらえ、来世において上のカーストに再生することをねがって現在のヒンドゥー世界において「模範的」に生きようとする。かれらの関心は、むしろ来世のほうへ向けられている。だから、下級カーストの者も改革をのぞまず、現カーストの義務を忠実におこなった。ウェーバーが、「……自己のカースト義務をおこたることは、かならず現世あるいは来世における損失をまねく」［ヴェーバー『ヒンドゥー教と仏教』（古在訳）、171 頁］とのヒンドゥー教的な職業道徳、職業義務観念を指摘するとおりである［ヴェーバー『ヒンドゥー教と仏教』（古在訳）、169-172 頁、参照］。

現在の苦難を解釈するとき、前世・過去世の悪業が要因とみる考え方において、ウェーバーの業の教説と五井の教説は、同主旨といえる。しかし、異なる点はある。

ヒンドゥー教のカースト制に生きる人たちは、不遇を前世の業だからと受容するが、「業のゆくえ」は考えない。現カースト世界のなかで「模範的」に生き善行をなすまでである。五井は、前世の業が現世にまわってきて、それが今の苦難であるととらえるものの、今の

苦しみをとおして過去（世）の業が消えてゆく、と説いている。苦悩をポジティブにとらえ、現在の苦難をやりすごすことで、悪業が消え、みずからの魂が浄まってゆく、とする。そして魂が浄化されれば、死後および来世において、よりよい環境が期待できるという。

こうした考え方を五井は「消えてゆく姿の教え」といい、消えてゆくものとは「業」をさす。

ウェーバーの「業の教説」では、カースト制をもとに「神義論」が語られ、「死後の世界（「霊界」など）」を説明するものではない。例に挙げられる苦難の種類[21]も少ないだろう。五井らにおいては、病気、貧乏、戦争、事故、飢饉、風害、水害、火災など、苦悩を伴うあらゆる不幸な出来事は「苦難」である。しかし、それらの不幸に際して、苦難の教義的意味づけを理解できなければ、残酷と受けとらざるを得ないだろう。だが、五井らは苦難の解釈にあたって、〝有効性をもちうる観念〟を用意した。それが、「死後の世界（「霊界」）」にかんする詳細な説明である。通常、どのようなかたちであれ、人が亡くなることは「不幸」であり、関係者たちにとって「苦難」となる。けれども、死を人間の終わりとしない世界観を提示し、関係者がその世界観をうけいれたとするならば、そこに、ある〝救い〟がうまれうるわけである。「前世」から「現世」へ、「現世」から「来世」へ、と輪廻する世界観はインドの教説と同じくするが、各世のあいだに「霊界」がおかれてあることを見落としてはならないだろう。

このように、五井の教えは、ウェーバーの「業の教説」の類型にあてはめることができる部分があると同時に、業の存在を「消えてゆく姿」という言い方で積極的な意味に転換したところは、ウェーバーと異なる点である。また、亡くなっていく人だけでなく遺族にとっても〝救い〟になるかもしれない「霊界思想」を用意したことは、五井らが、苦難の神義論における「業の教説」のバリエーションを提示した、ともいえるだろう。

5　おわりに

以上、みてきたように、苦難の意味を神に問いかけるとき神の代弁者の立場からその「理由らしきもの」が語られてきた。「弁神論」では、全知全能で善なる神を弁護するような〝回答〟として、われわれ人間には知り得ない神の思慮があるのだ、とされた。

苦難の意味にたいする答えは、それぞれの教団ごとに用意されており、それは日本の新宗教教団においても同じである。つまり、「なぜ自分がこのような苦難にあわなければならないのか」への答えを、教団の教義の中に備えているということである。

本章では、白光真宏会・世界救世教・生長の家の教理から、苦難の解釈にあたる考え方を抽出し[22]、「神義論」として論じた。そして、論の中心に据えたのは、白光真宏会教祖・五井昌久の考え方（〝消えてゆく姿〟という教理）である。

五井の「神義論」においては、「すべての苦悩は、人間の過去世から現在にいたる誤てる想念が、その運命と現われて消えてゆく時に起る姿である。」［「人間と真実の生き方」『白光』2016 年 9 月号、巻頭頁］という。つまり、基本的には「過去世」の〔悪〕業が因となり、現在の苦難にあっているが、その苦難をとおして業が消えてゆく、との考え方である。そして、苦難の種類は、病気・貧乏などの個人的なものから戦争・天災などの国家的なものまで幅広い。そうした受難を指して、五井は〝〔業が〕消えてゆく姿〟という言い方をした。

苦難の解釈における同様の言説は、五井が信仰において影響をうけた世界救世教の岡田や生長の家の谷口らの著作にも見られた。岡田は、それを〝浄化作用〟といい、谷口は〝〔業の〕自壊〟といった。五井の「消えてゆく姿」という教説は、岡田や谷口の説と主旨においては変わらないものがある。ある程度、先行教団に所属するなかで意識するしないにかかわらず、教理上の影響を受けたとみるのが自然だろう。しかし、苦難の解釈において五井は「消えてゆく姿」の教えで大半を説明したのにたいし、岡田は「霊の曇」説、谷口も「先祖霊などの障り」説を併用した。一般に、教祖にあっては、対機説法をもって信者に苦難の理由を明かし、救済法を提示せねばならない。その説明法が、五井はシンプルだったのにたいし、岡田や谷口は五井よりも多くのパターンを用いたといえよう。他の直接的な救済法にもかんたんにふれると、五井は「お浄め」、岡田は「浄霊」、谷口は「聖経読誦」が挙げられる[23]。

さて、ウェーバーの提示した苦難の「神義論」のうち、五井の苦難の解釈すなわち「神義論」はどこに当てはまるだろうか。もっとも近い類型は「業の教説」である。過去の生でおかした罪〔業〕が現世での苦難に帰結しているというウェーバーの説明と五井の理解は同様である。ただし、ウェーバーにおいてはインドのカースト制のもとで生きる人たちを念頭においており、五井の「応報」のとらえ方とはやや異なる。ヒンドゥー教徒は、苦難を前世の応報として受け容れ、次の輪廻でよりよいカーストに生まれることを期待して善行に励むという。五井も、苦難を過去世からの業に起因するものというが、その苦難をとおして業が浄められていると、苦難を肯定的に説いている。また、彼は、様々な苦難を挙げ、死という苦難さえ肯定的にとらえることがあった。五井のそのようなとらえ方の背

景として、彼は、詳細で前向きな「霊界思想」[24] を有していた、という点が指摘できる。そこは、五井とウェーバーとの違いである。

ウェーバーの提示した「二元論」には、五井の考え方はあてはならない。なぜなら、五井にとって神とは善であり愛である、とするからである。悪の神をみとめないのは、生長の家・谷口と同様であり、五井は、生長の家から「光明思想」をうけついでいる。

「予定説」は、一部あてはまるが、ウェーバーの類型と同じではない。五井は現在の境遇をふくむ「運命」に関して、ある程度は決まっているけれども、人間側によって変更が可能とする。五井においては、すべて〔神の計画の〕〝予定通り〟とはいわず、地上の人間の『世界平和の祈り』によって未来を明るいものに変えられる、とした。

以上のように、ウェーバーの「神義論」類型においては、「業の教説」が五井の考えに近いが、差異もある。「二元論」は該当せず、「予定説」も部分的該当にとどまった。

そして、「大本系」の両教団（世界救世教、生長の家）の教説には、五井の「神義論」に近い説明が見られた。戦後まもなく、五井が、一時的であれ所属した世界救世教や生長の家の説（教理）にいくらか依拠していると思われる面を確認できた。これらの教団は神道系新宗教であるからか、「祝詞」にある〝枉事罪穢〟を払い清めるという観念と〝苦難としての祓い〔浄化作用など〕〟が一部結びついているようにもみえる。業については、インドでいう行為よりも神道的な穢れの観念に近い捉え方をしている面がある。個や全体にふりかかる災いに対しその罪を浄化する意味で祓いが行われる神道的観念、あるいは「穢れと祓い」という神道的論理がいくらか関係しているのかもしれない［山本『穢と大祓』（1993 年、初版初刷は 1992 年）、参照］。また、インド的な「因果応報」説や近代スピリチュアリズムの「〔原因・結果における〕自己責任の法則」もとりこまれており、ウェーバーの三類型におさまりきらない複雑な「神義論」を有している。

最後に、現時点の中間的な結論を述べるならば、五井の「神義論」には、〝大本系〟の世界救世教や生長の家の教え、ならびに近代スピリチュアリズム（「霊界思想」など）の考え方が浸透しているようである。

これまで白光真宏会・五井昌久の思想について、詳細な比較分析が行われてこなかったという点で、五井の「神義論」について考察した意義は十分にあるだろう。

五井は、苦難にたいして、その苦しみは〝〔過去世からの因縁・業が〕消えてゆく姿〟とシンプルに解釈、説明することで、それまで因縁にとらわれていた人たちに〝観の転換〔視点を前向き（肯定的）に転じさせる〕〟をもたらし、解放するという「教導論」[25]

を提示した。これは、〝教団の教導のあり方の研究〟という、より大きな研究課題につながるものであり、そこにも本章の意義が見出せるだろう。

註

(1) 白光真宏会に関する主な先行研究（諸文献）については、本論文の序章を参照されたい。なお、それらの先行研究では、五井の生涯（主に前半生について）の概略、白光真宏会の活動の概要、五井が指導した「統一」という行法、白光真宏会の平和思想と平和活動の概略、白光真宏会会長・西園寺昌美の指導もとでの新たな実践行とその実践行にたいする信者の語り、生長の家の「心の法則論」への言及、などが論じられてきた。しかし、苦難の解釈について、五井および五井に関係する教祖たちの思想を比較しながら論じられることはなかった。そこで、本章では苦難の解釈に焦点を絞って、五井昌久が関係を有した教祖たちやマックス・ウェーバーの論との丹念な比較をおこない、五井らの「神義論」の特徴を明らかにした。

(2) 筆者が本章を執筆するにあたり、「神義論」について書かれた下記の論文を参照した。藤原聖子「大震災は〈神義論〉を引き起こしたか」（国際宗教研究所編『現代宗教』秋山書店、2012 年）、49-67 頁。本多峰子「他者のための贖い――苦難の意味の積極的解釈にむかうヨブ記　19 章 23-29 節の一試論」（二松学舎大学国際政経学会編『国際政経』第 14 号、2008 年）、51-58 頁。伊豆藏好美「ライプニッツ的オプティミズムの現代的可能性について」（『奈良教育大学紀要』第 62 巻第 1 号、2013 年）、89-96 頁。荒川敏彦「マックス・ヴェーバーにおける理解社会学と神義論問題―先行研究とその批判―」（『千葉商大紀要』第 50 巻第 2 号、2013 年）、39-54 頁。武井順介「新宗教における「病」の意味―世界救世教を事例として―」（『立正大学文学部論叢』第 134 号、2012 年）、19-36 頁。寺田喜朗「新宗教における幸福感とその追求法―生命主義的救済観と教導システム―」（『宗教研究』第 88 巻第 2 輯、2014 年）、131-158 頁、ほか。

(3) 五井の作成した「教義」は現在、「人間と真実の生き方」というタイトルを付して、白光真宏会の機関誌『白光』に毎月掲げられている。

(4)「教義」〔＝「人間と真実の生き方」〕の中に出てくる「誤てる想念」という言葉には、〔過去世から現在までの、誤った、神のみこころから離れた〕「おもい・ことば・おこない」の意を含み、それらを五井は（白光真宏会では）「業（ごう）」といっている。

(5) 五井は、個人の小さな願いを祈るよりも〝大乗的に〟祈ることを重視する。「世界、日本の平和」を祈ることが大切というのである［五井『生命光り輝け』、137-138 頁、参照］。

(6) 白光真宏会では、亡くなることを〝移行〟といい、「肉体界」から広義の「霊界」へ旅立つことをいう。ある界から別の界へ「移る」ことであり、死を悲しみのみとはみず、むしろ「霊界」のほうを本来いたところとみる。そのため、白光真宏会の信者は死を「霊界〔神界とも〕」に帰還するよろこびとして語ることがある［白光編集部編『輝ける死 安らかな瞬間』、参照］。なお、生長の家でも、〝移行〟という語が用いられる［谷口『人生を支配する先祖供養』、13-14 頁、参照］。

(7) 五井の作成した「教義」の後半に、「自分を赦し人を赦し、自分を愛し人を愛す、」［『白光』2016 年 9 月号、巻頭頁］の文言がある。前掲の「自分を赦し……」の部分は、白光真宏会の初期〔1957（昭和 32）年 2 月〕に追加された。その背景には、白光真宏会の初期の会員たちのなかに、必要以上に自分を責めてしまう姿がみられたことがあった。それゆえに、五井は、自分を赦すこと、自分を愛すことを「教義」の文言に加えたわけである。また、「教義」の文言の追加について、若干、付記しておきたい。それは、昭和 34（1959）年 5 月、機関誌の「教義」の文言に二点、追加・変更があったことである。ひとつは、「守護霊、守護神への感謝の心を常に想い」のあとに「世界平和の祈りを祈り」の文言が追加され、「守護霊、守護神への感謝の心を常に想い世界平和の祈りを祈りつづけてゆけば、」となったこと。もうひとつは、「人間は真の救いを」が「個人も人類も真の救いを」と変更されたことである［『白光』1959 年 5 月号、表 2 頁、参照］。同会では、「教義」にあらためてこうした文言を書き込むことで、「世界平和の祈り」が重要であること、そしてこの「祈り」が「個人も人類も」救うものであることを明確にしたと思われる。ちなみに、現在〔2018 年 8 月現在〕の機関誌では、「守護霊、守護神への感謝の心をつねに想い、世界平和の祈りを祈りつづけてゆけば、個人も人類も真の救いを体得出来るものである。」と表記されている［『白光』2018 年 8 月 10 日号、43 頁、参照］。

(8) 五井の法話は、カセットテープや CD として、白光真宏会で頒布されている。いまでも、テープ『五井先生ご法話シリーズ（全 45 巻）』、テープ『五井先生講演会集（全 19 巻）』、テープ『五井先生聖ヶ丘講話（全 13 巻）』、CD『五井昌久講話集（第 1 集～第 6 集）』ほか、多数の法話・講話をきくことが出来る［『白光』2018 年 9 月 10 日号、60-61 頁、参照］。

(9) 岡田茂吉『明日の醫術　第一篇』志保澤武、1943 年（初版は 1942 年）、81 頁以降（「病氣の眞因」の項）、参照。

(10) 岡田茂吉は、本書（『明日の醫術』）執筆当時は、医薬批判を徹底していたが、のちに時代の流れ（世論）に順応するためか、まったく医薬を否定するような論調は控えられていった。例をあげると、『地上天国』第 2 号、1949（昭和 24）年 3 月 1 日の文章「信徒諸氏に告ぐ」で、以下の注意事項が掲げられた。

「本教徒の中に、浄霊の場合医師にかかること、薬を服むこと、注射をすること等について否定するごとき言葉ありやにて、……決して医療に反対するごとき事なきよう注意されたしとの大先生の思し召しを、ここにお伝えする次第である。」

［世界救世教いづのめ教団編『天国の礎　浄霊下』所収、137 頁］

(11) 岡田茂吉の説明によれば、「靈衣」とは「一種の光波を保有してゐる……靈體の外殻に放射してゐる白色の一種の光線」とのこと［岡田『明日の醫術　第三篇』、64 頁、参照］。

(12) 岡田は「浄化」の働きをいう際、人体における〝腎臓〟と相応する存在として〝祓戸の四柱の神〟について言及した。岡田の説明では、前記の神は「天地間の汚濁を清める神」という［岡田『明日の醫術　第三篇』、75 頁、参照］。なお、世界救世教の『天津祝詞』の中にも「祓戸大神等諸々の枉事罪穢を祓ひ給へ浄め賜へと……」のことばが見られる。これは神道の『身滌大祓』にもあることばである。

(13) 同様の考え方は、大本の教えにおける「四大主義」の〝清潔主義〟の項で語られている［大本教学研鑽所編『大本のおしえ』、165-171 頁、参照］。

(14) 岡田茂吉も、人間の「再生〔輪廻、生まれ変わり〕」を前提として語っている。

(15) 前掲の寺田論文（2014 年）では、生長の家の「災因論」についても引用が示されている。そこでは、「縦」の問題として、病気の原因が本人あるいは先祖の因縁、過去世の悪業によるものもあるとする。病気などによって苦しむことで、罪の消滅をはかり、過去世の罪の浄まるのを喜んでいるという［寺田「新宗教における幸福感とその追求法」、144 頁、参照］。

(16) 例えば、「世界救世教系教団」［井上ほか編『新宗教事典』、86 頁］に位置づけられている神慈秀明会も、「……一切の苦しみは浄化作用である。」［神慈秀明会教学室編集室編集『聖教書』、361 頁］と、世界救世教・岡田茂吉の「浄化作用」説をとっている。

また、同じく「世界救世教系教団」［井上ほか編『新宗教事典』、86 頁］の崇教真光でも、岡田光玉（こうたま）（1901-1974）は「人生には悩み、苦痛がある。しかし、その悩み、苦痛があるから先祖からの罪穢が消えるわけです。……その痛み、苦しみのたびに一つ一つの罪穢が消えていくという問題です。／……どこまでも悩み、苦しみ、痛みというものが

出なければ罪穢は消えないということです。……」［岡田光玉述、崇教真光編集『寸教』、358-359 頁］と述べた。

さらに、「世界救世教系教団」［井上ほか編『新宗教事典』、86 頁］の一つである世界真光文明教団〔1963（昭和 38）年、宗教法人世界真光文明教団設立。初代教え主は、岡田光玉（岡田良一）〕でも、同様の教えを説いている。世界真光文明教団三代教え主・関口勝利（1939-）の著書によると、「いっさいの苦しみ悩みは、霊細胞の曇りの解消作業である。」［関口『手かざしのすすめ』、70 頁］といい、世界真光文明教団の関口勝利も病気・災害・戦争などを罪穢の「清浄化（クリーニング）」ととらえている［関口『手かざしのすすめ』、66 頁・70 頁、等、参照］。

（17）五井は、生長の家初代総裁・谷口雅春の「光明思想」の影響を受けている。五井も「光一元、善一元、実相完全円満」という思想を根底とし、谷口同様、〝実相〟〔「本当にある世界」〕においては「悪なし、闇なし、病なし」との考えを共有している。この考えは、生長の家の経典に流れる思想でもあり、その経文中には、「人間は光の子にして常に光の中にあれば暗きを知らず」「神は……かぎりなき善、……善のみ唯一の力、善のみ唯一の生命、善のみ唯一の實在、されば善ならざる力は決して在ることなし」［谷口『甘露の法雨』、参照］、といった文言が見られる。

（18）五井は、「今生の運命はほとんど 80 %が過去世の業因縁によって現われてくる……」［五井『宗教問答』、231 頁］と述べている。つまり、五井の教説によれば、運命は 8 割ほどは過去世からの業因縁で決まっているが、その他の要素で変更の余地はあるとした。

（19）五井の提唱した祈りは『世界平和の祈り』といい、文言は次のとおり。「世界人類が平和でありますように／日本が平和でありますように／私達の天命が完うされますように／守護霊様ありがとうございます／守護神様ありがとうございます」［『白光』2016 年 9 月号、表 2 頁］。五井は、この「世界平和の祈り」を祈りつづけることで、個人も人類も（真の）救いを体得できるという［「人間と真実の生き方」『白光』2018 年 9 月 10 日号、37 頁、参照］。つまり、彼は、「祈り」の実践等をとおして、運命を転換し〔〝予定〟をかえて〕救いにあずかることができるとした。

（20）横田理博は、ウェーバーの「神義論」を詳細に分析し、「合理的」な三類型について、

「カルヴィニズムの二重予定説（すべては神の決定に従っており、人間はその決定を理解することも変更することもできないという説）、インドの業の教説（現世での苦難は前世での罪悪に帰責される）、ゾロアスター教に代表される善悪二元論（善神

とは別に存在する悪神に苦難は帰責される）の三つ」

［横田『ウェーバーの倫理思想』、179 頁］

と簡潔に説明した。

（21）M・ヴェーバー『ヒンドゥー教と仏教　宗教社会学論集Ⅱ』（古在由重訳）では、「病気や虚弱や貧乏など」（169 頁）という記述が見られる。

（22）本章では、現在〔現時点、2018 年 8 月現在〕の教団の解釈ではなく、教祖の考え方にしぼり、各教祖の主張が記された著述から「神義論」に該当する箇所を筆者が引用した。

（23）「お浄め」は、五井が柏手をうち口笛〔白光真宏会のなかでは「霊笛（れいてき）」ともいわれる〕をならし、業を浄めるとされた。生長の家と世界救世教の「救済法」に関しては、前掲寺田論文（寺田「新宗教における幸福感とその追求法」）、144-145 頁、参照。

（24）五井は死後の世界観において、大きく「神界」「霊界」「幽界」を示し、苦しみをへて業が浄まった霊魂は上位の世界にいくという。そして霊魂が浄まっているぶん、次の輪廻ではよりよい環境への再生が期待される。

（25）前掲寺田論文（寺田「新宗教における幸福感とその追求法」、2014 年）で、西山茂が提示した「教導システム」という概念と同じ意味で用いている。「教導システム」における信念体系の側面で、新たに白光真宏会の事例を追加したものである。

第 4 章　「社会事象（社会状況、社会の出来事）」による影響
――五井の平和運動に影響を与えたもの

1　はじめに

第 1 章の「五井の生涯」で記したように、五井は、終戦までは人並みに平和をねがう心はあったとはいえ、戦時中は愛国精神を発揮し、日立製作所の工場で日本の勝利を信じて勤労に励んでいた。

ところが、戦後、五井が宗教活動をおこなう頃には、「平和思想」を説くようになっていた。五井が戦後、平和運動を推進していった背景として、〝社会状況との関係〟を見ておくことは不可欠だろう。

そこで、まず、五井昌久の生涯（1916-1980）の時間のなかで、とくに戦後の「社会」において、およそどのような出来事があったのかにつき、以下、「戦後の社会　簡易年表」

を掲げておく［成田『近現代日本史と歴史学』、243 頁、等、参照］。なお、WCRP（世界宗教者平和会議）関係や宗平連（日本宗教者平和協議会）などによる事柄を含めた、もうすこし詳しい「平和運動関連　年表」（【表 2】）は、本論文の末尾に資料として付した。

それでは、順次、戦後の社会情勢と五井らの平和運動との関係について、考察していきたい。

「戦後の社会　簡易年表」

1945（昭和 20）年 3 月　東京大空襲

1945（昭和 20）年 8 月　広島・長崎に原子爆弾

1945（昭和 20）年 9 月　降伏文書調印

1946（昭和 21）年 1 月　天皇人間宣言

1946（昭和 21）年 5 月　極東国際軍事裁判（東京裁判）開廷（～ 1948〈昭和 23〉年 11 月）

1946（昭和 21）年 11 月　日本国憲法公布（1947〈昭和 22〉年 5 月　施行）

1950（昭和 25）年 6 月　朝鮮戦争勃発（～ 1953〈昭和 28〉年 7 月　停戦協定）

1950（昭和 25）年 8 月　警察予備隊設置

1951（昭和 26）年 9 月　サンフランシスコ平和条約・日米安全保障条約調印（1952〈昭和 27〉年 4 月　発効）

1954（昭和 29）年 3 月　ビキニ水爆で第五福竜丸被災

1954（昭和 29）年 7 月　防衛庁・自衛隊発足

1954（昭和 29）年 8 月　原水爆禁止署名全国協議会結成

1954（昭和 29）年頃～　日本でも、アダムスキーらの「空飛ぶ円盤」にかんする書籍が刊行されはじめる

1955（昭和 30）年 8 月　第 1 回原水爆禁止世界大会

1956（昭和 31）年 10 月　日ソ共同宣言

1956（昭和 31）年 12 月　日本、国際連合に加盟

1957（昭和 32）年　国連安全保障理事会非常任理事国当選

1959（昭和 34）年 4 月　皇太子結婚

1959（昭和 34）年　キューバ革命

1959（昭和 34）年 4 月　安保改定阻止運動始まる

1960（昭和 35）年 5 月　新安保条約強行採決（6 月自然承認）、日米新安全保障条約調印

1960（昭和 35）年　安保闘争激化

1961（昭和 36）年　ベルリンの壁

1962（昭和 37）年　中印国境紛争、キューバ危機

1963（昭和 38）年　部分的核実験停止条約に調印

1964（昭和 39）年 10 月　東京オリンピック開催

1965（昭和 40）年　ベトナム戦争激化、米軍、北爆開始

1965（昭和 40）年 4 月　ベトナムに平和を！　市民文化団体連合（ベ平連）、初のデモ行進

1965（昭和 40）年 6 月　家長三郎による第一次教科書裁判

1965（昭和 40）年 6 月　日韓基本条約調印

1966（昭和 41）年 10 月　総評 54 単産〔単産とは、単一産業別組合のこと〕、ヴェトナム反戦統一スト

1967（昭和 42）年 8 月　公害基本法公布

1968（昭和 43）年 4 月　小笠原返還協定（6 月　小笠原諸島返還実現）

1968（昭和 43）年　GNP、資本主義国第 2 位に

1968（昭和 43）～ 1969 年（昭和 44）年　全国で大学紛争激化

1969（昭和 44）年 1 月　東大安田講堂封鎖解除

1969（昭和 44）年　中ソ国境紛争

1970（昭和 45）年 2 月　核拡散防止条約調印

1970（昭和 45）年 6 月　（日米）安保条約、自動延長

1971（昭和 46）年 6 月　沖縄返還協定調印（1972〈昭和 47〉年 5 月　沖縄返還実現）

1972（昭和 47）年 2 月　浅間山荘事件

1972（昭和 47）年 9 月　日中共同声明により、日中国交回復

1973（昭和 48）年　ベトナム和平。第 4 次中東戦争

1974（昭和 49）年 4 月　日本を守る会、結成

1974（昭和 49）年 5 月　インド、核実験

1975（昭和 50）年 8 月　日本赤軍メンバーがマレーシアでテロ事件

1976（昭和 51）年　ベトナム社会主義共和国成立（南北統一）

1978（昭和 53）年　イラン革命開始

1978（昭和 53）年　日中平和友好条約調印

1979（昭和 54）年　米中国交正常化

1979（昭和 54）年 12 月　ソ連軍、アフガニスタン侵攻

1982（昭和 57）年 5 月　核兵器廃絶と軍縮をすすめる「82 年平和のための東京行動」。わが国原水爆禁止運動史上最大の参加者を結集。「東京アピール」を採択

1985（昭和 60）年　ソ連のゴルバチョフ書記長、改革開始

1985（昭和 60）年　中曽根首相、靖国神社参拝

1986（昭和 61）年／ 1987（昭和 62）年　バブル景気始まる（～ 1991〈平成 3〉年）

1988（昭和 63）年　ソ連、市場経済導入

1989（平成元）年 6 月　中国、天安門事件

1989（平成元）年 11 月　ベルリンの壁崩壊。冷戦終結

1990（平成 2）年　ドイツ統一。韓国、ソ連と国交樹立

1991（平成 3）年 1 月　湾岸戦争

1991（平成 3）年 12 月　ソ連解体

1993（平成 5）年　ヨーロッパ連合（EU）成立

［成田『近現代日本史と歴史学』、243 頁、鳥海ほか『現代の日本史　改訂版』、188-191 頁、藤村『世界現代史 1　日本現代史』の年表、28-36 頁、等、参照］

上の年表のように、1945（昭和 20）年の日本敗戦後も、1950（昭和 25）年、朝鮮戦争勃発、1960（昭和 35）年、安保闘争激化、1962（昭和 37）年、中印国境紛争、キューバ危機、1965（昭和 40）年、ベトナム戦争激化、米軍、北爆開始、1969（昭和 44）年、中ソ国境紛争、など紛争・闘争が絶えない社会情勢があった。五井昌久が死去した年（1980〈昭和 55〉年）は、まだ冷戦が終結していなかった。

なお、五井昌久が戦後にはじめた平和運動や平和についての考えが記された資料に、1955（昭和 30）年 1 月から宗教誌として本格的に毎月刊行されるようになった機関誌『白光』がある。この『白光』誌の創刊号（1954〈昭和 29〉年 10 月発行〔最初の号は、文芸誌の趣の雑誌だった〕）から五井が死去する年（1980〈昭和 55〉年）あたりまでを通覧し、次節では、社会情勢などが五井の平和運動にどのような影響を与えた可能性があるか、検討していきたい。

2　五井昌久の「平和運動」

――当時の時代、社会情勢から受けた「影響」の検討

2-1　昭和 20・30 年代（1945/1955-1964）の五井の発言

まず、筆者が最初に述べておきたいのは、1955（昭和 30）年頃には、すでに五井は「世界平和の祈り」と同趣旨の祈りを会員に提示していた、ということである。

その祈りの内容は、弟子の斎藤秀雄〔筆名：さいとうたかひろ（本名：斉藤高広）〕が、1954（昭和 29）年 10 月 15 日発行の創刊号に詩の形で掲載している。すこし長いので、ここでは割愛するが、

> ……／守護霊さんにお祈りしよう／日本が平和でありますように／世界が平和でありますように／……
>
> 〔『白光』1954 年 11 月（創刊）号、3 頁〕

という文言が斎藤の詩のなかに含まれている。

五井は、創刊後まもない機関誌『白光』（1955〈昭和 30〉年 3 月号）掲載の「講演会法話」において、次のように述べている。それは、米ソが競い合うようにして原爆・水爆をつくっている世界情勢にあって、

> 私たちは、あくまで宗教的な生き方を主にしてゆきたい、と思ふのです。行動として、かうした問題にタッチ出来るのは選挙によることだけで、他に具体的な行動は出来ません。……それはどうするかと言ふと、……それらの神霊に日本の平和、世界人類の平和を全託してしまふのです。
>
> 　常に守護霊さん、守護神さん、と祈るやうな気持で、どうぞ日本が平和であります様に、世界人類が平和であります様に、とひたむきに祈るのです。……
>
> 〔『白光』1955 年 3 月号、20 頁〕

と述べている。つまり、五井は、会を設立した初期から一貫して、具体的な〝行動〔デモやストなど〕〟による平和運動よりは、「世界平和の祈り」を主にした〔「想念」による〕平和運動を押し通していくスタイルだった。

また、共産主義の勢力が及んでいた当時（昭和 30 年頃）、五井は共産主義では平和にならない理由を宗教者の立場から以下のように語っている。

> 共産主義者達の叫び、唱へる平和は自分達の主義、主張に賛成する人にだけのものであって、資本家はいらない、あんな奴等はやっつけろ、と彼等に反対する者は殺してしまへと言ふのです。相手をやっつける平和、人を殺し、人を倒す平和は本当の平和ではないのです。……
> ［『白光』1955 年 3 月号、21 頁］

上記引用文のように、五井は、相手が資本家であれ、誰であれ、あらゆる人に敵対する「想い」をもたないことが平和への道だと主張した。だから、「平和運動」と称する行動であっても、闘争的な姿勢の左翼的な平和運動とは一線を画していた。つまり、共産主義者（社会主義者）の平和運動とは立場を異にしていたといえる。

五井が、会の活動の初期から「世界平和の祈り」一本で、平和運動を推進しようとしていたことが、以下の文章からもわかるだろう。

> 一人一人が世界の平和、人類の平和、日本の平和を思はねばどうにかならないのです。どうにかするにはこの祈りより他にないのです。必ず日本、人類、世界の平和に役立つもので、大平和を実現させるのにはこの大悲願より他にありません。
> ［『白光』1955 年 3 月号、21 頁］

と、このように五井は、「世界人類」「日本」の平和のために、多くの人がこの「祈り」をすることをすすめた。

五井は、前掲の「簡易年表」で原水爆禁止運動がおこなわれていた頃、そうした「行動」で平和をもとめることには賛同していなかった。五井は、機関誌に掲載された法話のなかで次のように述べた。

> 原爆はいかぬ、水爆を禁止せよ、と今さかんに叫ばれてゐます。……禁止の約束などは表面上一寸安心させるだけで、破らうと思へばいつでも破れます。……原水爆の禁止運動も真の世界平和に役立つと云ふ事にはなりません。……

私は一体どんな風に考へてゐるかと云ひますと、あく迄純粋的に宗教面から考へてゐます。つまり私の持論の人類の業生である肉体人間の因縁的想念をひと先づ相手にせず、肉体人間の本心（直霊）並びに守護霊、守護神のみを相手として世界平和、人類平和、日本の平和を祈りつづける事を主願〔眼〕目にしてゐるのです。

［『白光』1955 年 8 月号、25-26 頁］

このように、五井は、世界平和にいたる方法論として、原水爆禁止運動という「行動」によるのではなく、宗教上の内面的実践（＝「祈り」）のほうを重視していた。彼は、現象（現実の事柄）を注視するよりは、祈りをとおして「神、守護霊、守護神」といった内的世界へ入る方向で平和を実現しようとしたといえる。

さらに、同日の法話で、五井は、以下のように、より明確にみずからの立場を語った。

現在は種々な思想宣伝が行はれてゐます。〔一般の人は、〕右の話をきけばそれもさうだと思はれ、左の話をきけば、それも肯ける、と云ふ事が多いのです。……ですから、うかうかと人の話にのって、署名運動に加〔わ〕ったり、デモ行進に加〔わ〕ったりする事は極力さ（ママ）せて〔さけて〕、ひたすら心の世界の真理活動に専念する事を私は皆さんにお勧めしたいのです。／……

肉体的行動にうつした活躍は、派手でもあり、如何にも働いてゐると云ふ自己満足を得るのですが、私は、さうした肉体的行動、活躍は、自己の職分を通してやればよいと思ってゐます。自己の職場に真剣に打ち込んでゐる事は、天命を完うしてゐる姿であって、浮ついた社会運動や、愛国運動、真理（神）を識らない思想活動より数等勝った行動であるのです。／……

自分の心が乱れてゐては、社会の為も、国家の為も、人類の為もありません。乱れた心をもった人の活動は、どうしても片寄った極端な行動になり易く、却って社会を乱し、国を乱す事になってくるのです。

世界の平和を欲するならば、まづ己れの心を平和にしなければなりません。／……世界人類の平和の祈念を致しませう。

［『白光』1955 年 8 月号、28-29 頁］

ここで五井は、〔原水爆反対の〕「署名運動」や「デモ行進」といった行動的な平和活動

に否定的見方を示した。五井の立場は、一貫して、心の中の「祈り」による平和運動を推奨するものだった。五井が会員たちに願ったのは、右派・左派のどちらの活動でもなく、まずは目前の自分の職分を果たすことであり、〔左派の〕社会運動や〔右派の〕愛国運動、〔神をみとめない〕共産主義思想による活動の価値を低く見た。

そして、なによりも、平和運動の根幹は〝まず自分の心を平和にすること〟との原則を一貫して述べているのが、五井の平和思想の特徴といえる。

このあたりの五井の発言からは、時代、社会の思潮に流されることのない五井の一貫した姿をかいまみることができよう。

また、1956（昭和 31）年当時は、前掲「簡易年表」にあったように、米ソが対立し、原水爆の製造に拍車を加えていた時代だった。そうした状況を反映して、雑誌メディアも地球壊滅の危機をあおっていたという。五井は、『白光』誌上の「7 月法話」で次のように記している。

> 五月の週刊東京と云ふ週間〔刊〕雑誌に〝あなたの生命はあと十年〟と云ふ大見出しで、原水爆の被害によって、地球は十年後には、壊滅し去ってしまふであろう。と云ふ、或る易者と、霊能者の予言を発表して居りました。……
>
> 実際、米英ソの原水爆実験競争を見せつけられてゐると、どこの国の人たちでも、一応原水爆ノイローゼにならざるを得ないと思はれます。／……／
>
> ところが、私の説いてゐる人類救済の方法は、実に簡単にして、効果的な方法なのであります。あまりに易しくて、簡単な方法なので、そんな事で効果があるものか、と思はれる人は、他にどの様な素晴しい方法があるのか、私に聞かせて頂きたいのであります。
>
> 誰れにでも出来る人類救済法、自己救済法は一体どのやうな方法なのでありませう。
>
> それはたゆまざる〝祈り〟なのであります。世界平和の祈りなのであります。
>
> 〔『白光』1956 年 7 月号、20-23 頁〕

五井は、原水爆による人類壊滅の危機を救う方法は、「世界平和の祈り」をとなえることだと述べた。上の引用の言葉を読むと、五井の手前味噌にもきこえるが、そこには、この「祈り」にかける五井の自信さえ、うかがえよう。「簡単、効果的、易しい、誰にでも出来る」と言い、これらのワードが他の平和運動の実践行と差別化した、五井の「祈り」の

〝売り〟だったと筆者には思われる。

当時は、東西両陣営のなかに原水爆が多数存在し、一触即発の社会情勢であったから、五井自身も、その状況を受けて危機感をもっていた。五井は、その時代の状況認識を次のように語っている。

> ……神（大生命）のみ名に於いて、はじめて、人類の大調和、人類の統一が出来るのです。現今の世界は、現今の人間は、これを忘却して、業想念、妄念で人類世界を統一しようとしてゐるのです。それではどうしても、武力によるか、謀略によるかするより他はありません。それが末法と云はれる現在の世界の姿なのであります。／……／私が、何事をも超えて、祈りを強調してゐるのは、人類の犠牲を、世界の惨事を、より尠く済ませたいからなのです。
>
> 真の祈り〔＝五井の提唱している「世界平和の祈り」〕なくしては、此の人類はかつてない惨事を味あはされるのは明〔ら〕かなのです。
>
> 〔『白光』1956 年 7 月号、24-25 頁〕

上の五井の言葉からは、国際情勢・世情の急迫感が伝わってくる。武力や謀略によって世界をまとめるのでなく、「祈り」を基調として世界がまとまっていく方向〔世界が平和となること〕を、五井は〝急務〟として願っていたといえる。戦争が起こりそうな緊迫した社会情勢にあったからこそ、五井は、「世界平和の祈り」の必要性をたびたび強調することになった、ともいえよう。

当時の国際情勢を背景に、大戦争勃発への危機感が、五井の「法話」において次のように語られている。

> エジプトに対して英仏、ハンガリーに対してソ連と云ふ様に、三大国と称される国々が、小国に武力侵攻して、中近東〔、〕東欧を舞台に、第三次大戦が起りかねまじき危機に、今の世界は置かれてゐます。／……第三次大戦が起っては大変だ、とは何処の国の人々でもが、さう思ってゐるに違ひありません。それなのに、世界の動きは、兎〔と〕もすれば戦争の方に戦争の方にと、世界を運んでゆき相〔そう〕にしてゐます。／……現在の世界の大国は、米ソを二大国とし、英仏、中国と云ふ事になりませう。これらは、すべて、武力をもって、自国の権益を拡張し、或いは守り終はさうと

してゐる〔守りとおそうとしている？〕のでありまして、そのいづれ〔いずれ〕もが、軍事力が頼みなのであります。

〔『白光』1957 年 1 月号、4-5 頁〕

このように、当時は、「第三次世界大戦」も起こり得ると、大戦勃発のリアリティがあったようである。そして、米ソ英仏中という大国が、武力・軍事力をふるっていると五井はいう。

こうした緊張状況にたいする五井の捉え方は、独特で、以下のように述べる。

私たちの様に、霊的な躰をもってゐる人たちには、人間の想念の波、人類の業（カルマ）の波動が、絶え間なく感受されるのですが、現在の人類世界の業（カルマ）の波は、朝鮮動乱〔朝鮮戦争（1950〈昭和 25〉年に始まり、1953〈昭和 28〉年に休戦）をさす〕の頃の危機の時よりも、より一層烈しいものなのです。

〔『白光』1957 年 1 月号、5 頁〕

といい、五井は、「想念の波」「波動」というものを〝物差し〟にして判断していることがわかる。これは、一般には通用しない基準であるが、彼の宗教者としての物差しには、常にそうした「想念波動」が出てくるのが特徴である。

五井は、世俗からの視点ではない、神への信仰による平和運動をめざしていたことが、次の文章をみるとわかるだろう。

……さうした業（カルマ）の波は、今や表面に浮かび出てきて地球界最後の大戦争か、はたまた大天変地異を生み出さうとしてゐるのであります。／……そして少数の人々が、ソ連に組みしなければ駄目だ、否、米国に組みしなければ不可〔いけ〕ない、いやいや中立でなければならない、と云ふ様な論や、実際運動をしてゐるのであります。／……〔私（五井）は、〕一度、さうした立場のすべてを捨て切らなければ、日本を救ひ、人類を救ふ事は出来ないと思ってゐるのであります。／……あちらが善くて、こちらが悪い。こちらが善くて、あちらが悪いと云ふやうな、相対的な観方（みかた）、対立した観方や、力も何も持たない中立的立場等と云ふものは、あくまで神から観た観方ではなく、業想念から発した観方である、と思ふからです。

私は、すべての想念行為や、自らの立場を一度神の世界に返上して、改めて動き出さなければ、どの様な平和運動も、愛国運動も、成功することは出来ないと思ってゐるのです。……

私の提唱してゐる世界平和運動は、肉体の人間がするのではないのです。……〔肉体の人間でなくて誰がやるのか、という〕其の質問に対して、〔五井が〕はっきり答へるのです。それは、神々がするのである、と云ふ答なのであります。

［『白光』1957 年 1 月号、6-7 頁］

ソ連側、米国側、中立、といった立場からの運動では、成功しないと五井は言い、神信仰に根拠にした運動が必要と五井は主張した。〝神まかせ〟ともいえるが、五井の平和運動はみずからが提唱した「世界平和の祈り」に働くとされる「神々の力」にゆだねている。

五井は、政治的にどうこうしようという次元で話をしているのではなく、神信仰の次元から「祈り」をすすめ、その「祈り」が世界を平和にする、と本気で信じている。それが、以下の引用文からも読みとれるだろう。

……再軍備論が生れ、軍備反対が唱へられたりしてゐるのですが、私〔五井〕は、再軍備も反軍備も、親米も、親ソも、中立もそんな事は一切問題にしてゐないのです。／……／私たちは今、此の現象界の二大国〔米ソ〕や他国に依存する想ひをやめて、只ひたすら、只一念、神に対して、世界平和の祈りをするより他に、日本を救ひ、世界を救ふ方法が無いのだ、と云ふ事を知らねばなりません。業生の二大国〔米ソ〕の上に神の力を置くのです。神を頭に頂くのです。

［『白光』1957 年 1 月号、8-9 頁］

前掲の「簡易年表」では、1954（昭和 29）年 7 月に自衛隊が発足、1956（昭和 31）年 10 月に日ソ共同宣言、などの出来事があった政治状況だったが、五井が政治活動に〔直接〕コミットすることはこの当時も、これ以降も、彼の人生の大半においてなかったようである。五井は、あくまで宗教家として、宗教の土俵で、神を頂点に各人が「祈り」を実践するようにと説いている。それが、白光真宏会・五井昌久の一貫した「平和運動」であった。

そのように五井は、直接的な政治活動は行わなかったが、機関誌上〔「法話」として掲載された文章〕で、世界の政治状況や国際問題について、持論は執筆している。以下の引

用文でも、冷戦下におけるソ連の暴虐を批判し、共産主義について、次のように記した。

近頃の世界の話題の中で、ソ連のハンガリアに於て行った暴虐行為〔ハンガリー動乱（1956〈昭和 31〉年、ソ連軍がハンガリーで衝突し、ハンガリー市民にも多数の死者が出た)〕程、世界人の心に、嫌悪の想ひを抱かせた事はなかったでせう。／……／共産主義が何故いけないのか、それは前にも申して居りますように、現在では、その最高指揮をソ連より受けてゐるからであり、ソ連を中心にした世界統一運動であるからです。／……／日本の共産主義や社会主義の人々は、……いわゆる善い人が多い様なのです。然し私はその人たちが、どの様に善良な人たちであっても、根本の思想、根本の生き方に誤りがある様では、到底その人たちの運動に賛意を表するわけにはゆかぬと思ひます。

［『白光』1957 年 4 月号、4-7 頁］

五井は戦後（昭和 20 年代前半）に務めた中央労働学園で、労働組合に関係した仕事（労働問題を扱う編集業務）を行っていたものの、当時は「光明思想〔例えば、〝敵無し〟といった完全円満の側面のみをみる考え方〕」を奉ずる生長の家の信徒だったからであろう、労働争議などは五井の意に染まないことであった［五井『天と地をつなぐもの』、69-73 頁、等、参照］。だから、五井は、昭和 20 年代前半の頃にはすでに共産主義や社会主義に賛同しない考えをもっていたといえる。

そして、五井は、なぜそうした左翼運動などが誤っているかについて、その理由を次のように述べた。

……自分たちの反対側の階級や、国や民族に対して、敵視する感情があっては、決して、その運動は正しいものではない、真理に沿ったものではない、その国、その民族を平和に為し得るものでなく、人類の幸福を創りあげる運動ではない、と云ふ事であります。……／私がソ連の行為が不可〔いけ〕ないと云ふのは、常に自国家の為に、他国家、他民族を傷つけ痛めつづけてゐるからです。そして、その同調者である共産主義者を批判するのは、同民族、同国家内に自ら敵をつくって、闘争を繰り返へしてゐるからであります。……／これは同時に、右翼と称される愛国者にも云へる言葉なのです。右翼と称される愛国者も、自己に反する団体を敵視し、憎悪の眼をもって、

隙あらば実力行為に出かねないのであります。

古代の聖者たちの云ふ、「汝の敵を愛せよ」とか、「剣に剣をもってしてはいけない」「恨みには恨みをもってしてはいけない」とか云ふ言葉は真理の言葉であって、お互ひの間に敵対行為がある以上は、その民族、その国家は真の幸福、真の平和には到底成り得ないし、従って、真の平和人類世界の出来る筈がないのです。

［『白光』1957 年 4 月号、7-9 頁］

ここで五井は、相手を〝敵〟とみること、敵視感情をもつことが誤りであり、そうした想いがあるうちは平和は成らない、という。その五井の理念は、左翼（共産主義者）・右翼（愛国主義者）ともに適用するものだといっている。五井個人の立場には、イエスの言葉にあるような〝平和主義〟によって平和が成るとの信念がうかがえよう。

1958（昭和 33）年当時の世界情勢は、各国が軍備の増強をおこなっており、そうした時世にたいして、五井は次のように語っている。

地球人類は、自分たちの誤った思想想念によって、ここまで追いつめられながらも、未だに兵器の力による平和を考えているのですから、習慣的業想念的思想は、執拗であり恐るべきであると思います。……

そこで、考えをもう一歩進めますと、現在の世界の指導者たちに一任していたのでは、平和世界など、いつになっても出来ようもありませんし、各国々民の不安焦燥は、日毎月毎に烈しくなるばかりだと思います。……

私共は、自分たちの日常生活の安定や精神生活の安定を、自分の選んだ道によって得なければならぬと同時に、国家社会及び、人類世界全体の平和への方向をも、自分たちでつくりあげてゆかねばならぬのです。……

私は再びここで云いたいのです。私共は世界人類の運命も個々人の運命も、現在の世界の指導者に任かせて〔任せて〕置くわけにゆかぬと云う事をです。私たちは今日こそ、真実の宗教精神、宗教信仰によってのみ、世界平和を達成し得る道が展〔開〕け得るのだ、と云う事を、高々と絶叫したいのです。

［『白光』1958 年 3 月号、5-6 頁］

つまり、この当時の五井は、〝兵器の力による平和〟を否定し、世界の（政治）指導者た

ちに「平和への道」は任せられない、自分たちで平和への方向をつくってゆかねばならない、という考えだった。結論的にいえば、混迷する政治のプロセスで平和を得る道ではなく、宗教信仰〔「神」への信仰〕とくに五井の提唱する「世界平和の祈り」の唱和によって世界平和をつくろう、との呼びかけを五井が行っているわけである。

また、他の団体などが行っている平和運動について、五井は評価していなかった。以下のように、白光真宏会の幹事総会での法話で、五井は自分たちの運動だけが力を持つと主張していた。

> 世界人類の平和運動を行っている団体は、随分あります。しかし中心が確立していて、そのやり方がはっきりしているのは、この私達の祈りの会よりありません。／……／日本は原水爆の禁止を提唱して来ました。ソ連は実験を止めました。けれど米国や英国はやりました。米国は黙ってかくれて実験してしまった。こういうことをする時が一番戦争の危機があるのです。……
>
> 世界平和のためにみな手をつなぎましょう、署名して下さい、署名しただけで世界が平和になりますか。甚だ甘い考えです。／……／原水爆禁止運動も駄目、あらゆる平和運動もだめ。どんな手段方法も平和を築くものとはならないのです。
>
> 真に平和を地上にもたらすものは、ただ一つ、世界平和の祈りよりないのです。……力とは武器ではありません。私達は軍備とか武器とかを一切問題にしないのです。この世の力でどうやっても平和は築けません。力とは神の力です。
>
> それには、武器をすて裸になった空っぽの心構えで、世界平和の祈りをすることです。……／何も原水爆やミサイルがなくとも、神の力の防衛があればよい。それが世界平和の祈りなのです。そしてその援助をしてくれるのが宇宙人なのです。援助してくれる者がなければ出来ないことなのです。
>
> ［『白光』1958 年 7 月号、39-41 頁］

五井は、「世界平和の祈り」をとおして〝神の力の防衛〟が得られると信じていた。そして、この頃から次第に、「宇宙人」との提携というような五井の持論が展開されるようになっていった。

米ソ冷戦下にあって、五井は本部道場（市川市新田）での信者に向けた話（1958〈昭和 33〉年、12 月 22 日）のなかで、「祈り」「統一」という行について、以下のような五井の基本

的見解を述べている。

……／一人が浄まってゆけば、それが世界平和に直接役立つのです。この世界は波ですから伝わってゆくのです。やはり自分がまず磨かれなければ、世界平和に役立つことは出来ませんね、この統一会の目的はそれなのです。／……言葉だけで戦争反対や、平和を唱えてもそれは何にもなりません。……まず平和な心、澄み清まった心になることです。……

［『白光』1959 年 2 月号、37-38 頁］

白光真宏会の「統一」行においては、瞑目し、〝如来印〟という印をむすび、心のなかで「世界平和の祈り」をたんたんと唱えつづけるわけであるが、その目的はまず個人（自分）の心を浄めることにある、という。五井は、一人の心〔の〝波、波動〟――同会では心の状態の善し・悪しを〝波、波動〟の精・粗の違いであるというように、対比して説明をおこなう〕が浄まれば、そのぶん世界平和に役立つとし、「平和行動」に出かけて平和を叫ぶのではなく、「世界平和の祈り」をとおして個々人の心の平和をつくりだすことから始めようとしている。この五井の考え方は、終生、一貫していたといえよう。

白光真宏会が SF 的とみられるのは、五井が「宇宙人」との交流などを法話のなかで説くようになったことが、その理由だろう。1959（昭和 34）年頃、世間に流通していた出版物の中には、そうした話題〔「宇宙人」〕をとりあげたものがあった。それは以下の文章からもわかる。実際、1954（昭和 29）年頃から日本においても、アダムスキー〔George Adamski　1891-1965〕らの「空飛ぶ円盤」にかんする書籍が刊行されはじめている［国立国会図書館サーチ　https://iss.ndl.go.jp/　2019 年 6 月 8 日最終閲覧、参照］。

そして、五井は、世界平和には「宇宙人」の力が必要、との主張をしている。

近頃は宇宙人に関する著書や談話が、そこここで出版され、話されるようになりましたが、一体宇宙人という者が実際存在するのかどうなのか、存在したとしたらどのような形で存在しているのか、ということが非常に問題になってまいります。／……

私はどちらの部類であるかと申しますと今更申し上げるまでもなく、宇宙人の存在を確信し、確言している者であります。／……

この肯定論者の中の大きな二つの分れは、唯物論的に、心霊や心の動きの重要性を

問題にせずに、宇宙船を只単なる秀〔優〕れた科学力によって生れた物的存在と見、宇宙人をこの地球人と等しい範疇の肉的（物的）存在者として見ている人々と、心霊的な面から宇宙船や宇宙人を考察しようとしている人々とであります。

私は勿論宗教者であり、心（神）霊主義者でもありますから、後者の立場に立っております。……

ところが今日のように宇宙人との交流をつづけておりますと、肉体人間と神霊と宇宙人とこの三者の協力がなければ、この地球人類が絶対に救われないということが判ってきたのであります。

［『白光』1959 年 4 月号、4-7 頁］

五井は、その当時、世間で「宇宙人」が話題になっていたからという理由だけで「宇宙人」をもちだすようになったわけではない。だが、たしかに上記引用の記述にみられるように、五井は 1959（昭和 34）年頃までにはすでに、「宇宙人」にかんする情報を書籍などから得ていたようである。だから、昭和 20 年代末から昭和 30 年代前半に刊行された「宇宙人」についての書籍などから、五井がその関連の知識を加えていっていたことは想像できる。

しかし、いっぽうで、前にも記したように、彼は、戦後まもない頃（昭和 20 年代前半）から「心霊」に関心をもち、こうした話題〔他の惑星との交流などの説〕についても、すでに学んでいた。上の引用文で、五井はみずからを「心（神）霊主義者」であると明言したように、浅野和三郎らの「神霊主義（スピリチュアリズム）」を基本的立場にしているといえる。その立場から、「神霊」や「宇宙人」とは、〝波長〔波、ひびき、律動、波動、などと、五井は「波長」という語（ことば）を、同じ意味でしばしば言いかえて用いる。五井のいう「波長」とは、「心の（内的な／精神の）状態」をあらわす信仰上の用語である〕〟が微妙〔精密〕な存在である、と五井はみている。

そして、この頃からだんだん表だって、世界平和のため「宇宙人」も協力してくれている、と語るようになった。五井は、「宇宙人」のことを言い始めた理由について、

……宇宙人の方から私たちに縁を結んでこられ、種々と交流しはじめたのであります。／……私たちの世界平和の祈りの光りの波が、宇宙人のもっている心の波と全く等しい律動（ひびき）であったから、自ずと一つに結ばれたのであります。

［『白光』1959 年 4 月号、5 頁］

と述べている。つまり、五井は、自分たちの「世界平和の祈り」と「宇宙人」の〝波、律動〟は、互いに高尚な〝波、律動〟同士だったから、互いに「波長」が合うようになった、と言っているのだろう。

これまでの世界平和に至るための五井の教説においては、守護の「神霊〔守護神、守護霊〕」を主に語っていたが、それらに「宇宙人」の協力というものが加えられたのは、一つの節目だった。

また、前掲の「簡易年表」のなかに、1959（昭和 34）年 4 月　安保改定阻止運動始まる、とある。こうした社会の動きにたいして、五井は次のように述べた。

> 日本の国内全般を見渡しましても、そうした不調和、不完全な事実が沢山あります。日米安保条約改正の問題に致しましても、安保条約自体が、すでに、よいのか悪いのかさえ、一般の人には見当がつきません。日米安保条約といえば、何処かに敵を認めての対策であり、その相手の心を刺激することは間違いありません。しかし、日本が米国に助けて貰わないで、ソ連や中共から侵略されないという保証もありません。
> 〔『白光』1959 年 9 月号、7 頁〕

ここでも五井は、従来通りの主張をする。つまり、日米安保条約も、敵（国）を想定したものなので、そうした「敵」を認める考え方には同意しない。五井は、〝想い〟において、敵を認めない、というスタンスを示している。しかし、彼は、現状分析として、米国の安全保障がなければ日本が侵略されるリスクはあるだろう、という。それでも、国民が世界平和のためにできることは、個々人の〝想い〟のコントロール、「世界平和の祈り」を行じることである、と五井は主張する。

白光真宏会は、この頃（昭和 30 年代）から「祈り」の普及を行っていくわけだが、以下の「日本よ今こそ起て」と題する五井の詩は、同会の普及用リーフレットに掲載された。その言葉は「祈りによる世界平和運動」の趣旨をしめしたものといえるだろう。

> 日本よ　今こそ起たねばならぬ／今日起たねばいつ起つ時があるのか／日本よ　今こそ起たねばならぬ／だが日本は剣を持って起つのではない／九千万の心を一つに／平和の祈りをもって起つのだ／日本は核爆弾の洗礼を受けた唯一の国／真実平和を絶叫

できる唯一の国だ／何者だ今頃になって武器を持とうと言うのは／剣をもって防ぎ得るのは一時のこと／永遠の平和は剣を持つ手に来ることはない／日本の天命は大和の精神（こころ）を海外に示すにあるのだ／日本は今こそ世界平和の祈りによってのみ起ち得る／世界平和の祈りは／大救世主の光り輝く言葉だ／救世の大光明は日本国の平和の祈りに結ばれて／地球の隅々にまでその光明を顯現するのだ／サラリーマンの家庭から／農家の主婦の心から／機械に踊る職場から／世界平和の祈りは光りとなって／世界中にひろがってゆくのだ

［『白光』1960 年 1 月号、12-13 頁］

文字通り、武器によらず「世界平和の祈り」によって平和をつくる、と五井は宣言している。彼のなかでは、日本から世界へと、この「祈り」の光がひろがっていくイメージを描いていることがわかる。

そして、安保条約改定か否かといった問題については、五井は関わろうとせず、次のように言う。

……〔安保条約が〕改定されようと、改定されまいと……ですから私のように、真実の世界平和、つまり霊魂の救われと、肉体人間としての平和生活とを共に成しとげるための運動に全霊をあげているものは、そうした表面上の問題が右しても左しても、どちらをもプラスとは考えていないのです。それはどちらにしても業想念の消えてゆく姿としての問題だからです。

［『白光』1960 年 1 月号、22-23 頁］

五井の言う世界平和とは、「内なる平和（霊魂の救われ）」と「外なる平和（肉体人間としての平和生活）」の両方を成就すること、ともいえよう。安保条約改定のことなど政治的なりゆきは〝表面上の問題〟であり、どちらになっても五井の教義・「業の消えてゆく姿」とみている。

それより、いっそ、五井は自分の提唱した「世界平和の祈り」に、唯物論者さえ取り込もうとしている姿勢が次の言葉から知られるのである。

私の提唱しているのは、

世界人類が平和でありますように／日本が平和でありますように／私たちの天命が完うされますように／守護霊さん／守護神さん／ありがとうございます

という祈り言でありますが、守護霊、守護神の存在を信ぜぬ方や、唯物論の人は、守護霊、守護神への感謝の言葉を入れなくとも、最初の三行の言葉だけでもよいでしょう。

最初の三行だけなら、唯物論の人であっても常に心で想っていることなのですから、なんの抵抗も感じないことと思います。

［『白光』1960 年 1 月号、24-25 頁］

と、このように、五井は「世界平和の祈り」の言葉を、かなり柔軟にとらえる姿勢も示した。本来は「守護霊、守護神」の箇所を重視するが、あらゆる人にこの「祈り」を実践してもらうため、次善の策も用意したわけである。国民の思想動向をふまえつつ、誰もが行える平和運動とするのが五井の目的であったようである。

また、安保改定がらみの（会員からの）質問にたいし、五井は生長の家の主張を例に挙げて、批判の言葉を次のように述べた。

人間神の子完全円満と説き、敵を認めるから、そこに敵が現われる、だから敵を認めてはいけない、という大調和光明思想を説いている生長の家が、その同じペンで、韓国が日本に暴挙をするのは、日本に武力が無いからだから軍備を充実させなければいけない、といったり、この世は力と力なのだから、ソ連中共に対抗できる武力を米国と組んでつくらねばならぬ、というように、完全に敵を認めた対抗策を大々的に論じているのです。

［『白光』1960 年 7 月号、5 頁］

上の五井の言葉は、生長の家の初代総裁・谷口雅春に向けられたものである。五井は、生長の家の地方講師をしていた経緯から、生長の家の教えをかなり多く受け継いでいる。しかし、とりわけて、谷口の政治に関する考え方には、その矛盾を五井は指摘した。

五井は、「敵を認めない」との教えを谷口に貫いてほしかったのだろうが、実際には谷口はソ連中共などを敵視し、日本の軍備増強を主張した。そうした谷口の姿勢・論調を、当時の五井は受け入れられなかった。

谷口が、安保改定促進を主張したことは、敵対する相手を認めていることだ、と五井は言う。その後も、政治の動きと連動して、谷口と五井の見解は隔たりをみせる。生長の家の分派である白光真宏会であるが、両教団は、政治に関してはまったく別の論調となっていた。五井は、上記の論をふまえて、以下のように語った。

……ですから私は、まず想念の世界から、すべての敵を無くし、すべての悪を無くし、すべての不幸を無くしてしまおうと思っているのです。……私は、消えてゆく姿という真理の言葉を、すべてに応用しはじめたのです。……神力を信ぜず、いまだに武力に頼ろうとしている宗教者が存在することは、実に嘆かわしいと思うのです。

〔『白光』1960 年 7 月号、6 頁・11 頁〕

五井の場合、現実の世界に向かって行動をするよりは、すべて〝想念〟の世界から解決をはかろうという考え方で徹底した。目の前に現われる、あらゆる不都合な現象は、（これから業が）〝消えてゆく姿〟なのである、とみるわけである。そして、五井提唱の「世界平和の祈り」をする。五井は、現実の兵器の力に頼るのでなく、ひたすら「神の力」に頼る（「全託」する）という立場であった。

五井は、白光真宏会の教えの元にある生長の家の教えを、批判的に「改訂」することで、自分たちの教団の教えの独自性を主張したともいえる。以下は、五井が、生長の家の教えの批判をしている文章である。

一冊の本の中で、上の段には消えてゆく姿を説き、下の段には、眼が悪いのは、鼻が悪いのは、痔の悪いのは、何んの心の現われである、という把われを植えつける精神分析を教えている宗教〔五井は生長の家をさしている〕とは全くその範疇を異にするのであります。

教は分裂してはいけないのです。あくまで神ひとすじに、いかなる想念行為もすべて神のみ心の中から、改めて出直す日常生活でなければ、真の宗教生活とはいえないのです。

自分を赦し、人を赦し、自分を愛し、人を愛し、の教は、すべて消えてゆく姿と世界平和の祈りがあって、はじめて成り立つのであります。……

〔『白光』1960 年 8 月号、11 頁〕

端的に、生長の家の教えは分裂してしまっている、と五井は述べた。その生長の家にたいし、白光真宏会の教えのほうでは「神ひとすじ、神一元」という生長の家が本来主張してきた一側面のみを採用し、それを押し通していく、と五井は言っている。つまり、五井は、当時の生長の家の「精神分析」という教えは採らない、との宣言である。前掲引用の「自分を赦し、人を赦し、自分を愛し、人を愛し」の言葉は白光真宏会の「教義」に記され、五井は、生長の家の「精神分析」の教えをもちいて自分や人を責めることのないよう、白光真宏会会員に指導していた。

五井の平和論は、徹底していて、武器を持たなくても平和を乱すことがあることを、次のように述べている。

> たとえ武器を持たなくとも、相手をやっつけてやりたい想い、相手を自分たちの下に組み敷きたい想いは、スポーツの世界をのぞいては、全部平和を乱す想念行為であることは考えるまでもないことである。
>
> 社会主義者や組合運動をやっている人々には、こうした当り前なことがわからなくて、武器を持つ者たちだけが平和を乱すものだと思っているらしい。私たちから見れば、共に世界平和を乱す業想念であることに変りはない。
>
> 真実に冷戦を止め、大戦を防ぐには、まずみずからが、自己の心に平和を築きあげなければならない。……
>
> ［『白光』1961 年 2 月号、3 頁］

社会主義者、組合系の人たちの平和運動もあり、そこでは武器を持つことに反対との声が上がる。しかし、そうしたデモなどで運動している人たちの心には敵対や闘争の〝想い〟が出ていることがあり、そうした心持であるならば、たとえ武器をもたずに「平和」を叫んでもマイナスである、とさえ五井は言っている。

要は、五井は、各人の〝想い〟のあり方が大事であるとし、まずは各人が自らの心を平和にすることをもとめた。そして、自らの心を平和にする手段が、五井の提唱した「世界平和の祈り」であるという。

いわば、平和な〝想い〟で平和運動をしよう、ということだろう。

先にも、「世界平和の祈り」の言葉の柔軟性にふれたが、五井は「法話」のなかで、方

便であろうが、「祈り」について次のような説き方をしている。

……〝世界人類が平和でありますように〟という時には、自分の平和もそこに入っているわけです。だから世界人類が平和でありますように、だけでよいのだけれども、それじゃね小さい方の自分が気が済まない。世界人類のことばかり、家のことも願わなければつまらない、と思う心があるから、そこで〝日本が平和でありますように、私共の天命が完うされますように〟と私はくっつけている。それで守護霊さん守護神さん有難うございますって、それじゃなんか物足りない、南無妙法蓮華経をつけた方がよい、それじゃつけなさい。南無阿弥陀仏をつけてもよい、ナムカラタンノトラヤーヤ〔一燈園でとなえている『大悲円満無礙神咒（又千手陀羅尼）』の冒頭が「なむからたんの。とらやや。……」[『一燈園日日行持集』]。白光誌で西田天香の逸話をとりあげていることから、ここでは一燈園の「唱え言葉」をさしているのかもしれない〕でも、なんでもつけなさいというの。

世界平和の祈りをしたら、あとなんでもつけたらいい、……なんでも好きにつけたらいい。実際は同じことだから。

[『白光』1961 年 4 月号、22 頁]

上記引用文で筆者が注目したのは、極端な場合、〝世界人類が平和でありますように〟の一行だけでもいい、と五井が語っている箇所である。これは、現在〔2018 年 8 月現在〕の白光真宏会関連の活動（WPPS: World Peace Prayer Society）に活かされている。

五井は、「世界平和の祈り」の定型を示し、それを基本としながらも、唱える人の信仰に応じて祈りの言葉を加えてもいい、という。結局、五井は、できるだけ多くの人を、この「祈りによる世界平和運動」に巻き込みたかったから、上記のような方便も用意して説いたのであろう。

なお、白光真宏会では、すでに「世界平和の祈り」の英訳版を作成し、機関誌『白光』の表 2 頁（オモテ表紙の内側）や表 3 頁（ウラ表紙の内側）などに掲載していた。それが、1961（昭和 36 年）頃から、「世界平和の祈り」について五井が説明した一文（短い文章）を英訳して、広く世界の人々に読んでもらおう、ということになった。それを、五井は以下のように書いている。

……今度、英訳して、広く世界の人々に読んで貰おうと思って書いた、世界平和の祈りについての一文を乗(ママ)〔載〕せて置きます。

［『白光』1961 年 5 月号、9 頁］

世界平和の祈り

〈広く世界の人々に読んでもらおうと今度英訳された日本語原文〉

……／地球は今では全く狭くなって、米ソ、西欧諸国の政治政策はすぐさまアジア、アフリカ諸国にその影響を及ぼし、アジア、アフリカ諸国の出来事は、直ちに西欧や米ソに反響を与えます。

今日の個人の生活は、それがどうしても個人だけに止まっていることができず、国家や人類の動向に必然的に影響されてゆくのです。／……

世界人類が平和であること、それは取りもなおさず、個人個人が平和な環境におられることであり、個人個人が平和な環境に生活できることは、世界人類の平和が成り立っているからであるということになります。

ところが現在は全くこの反対で、真実の平和は個人の心にも、世界人類の中にもまだ生れでてはいないのです。……／……今日の世界は、もはや、少数の人々の動きではどうにもならぬ時代となってきているので、どうしても、多くの大衆の力が必要になってくるのです。大衆の力を総動員できる、容易なる世界平和実現の道がどうしてもなければならないのです。……〔この後、文中に、白光真宏会の「教義」の文章と、五井が提唱する「世界平和の祈り」の言葉が挿入されている〕

個人の生活が平和になると共に、人類世界の平和達成に大きな役割を果す、世界平和の祈りこそ、現在世界中において最も必要な善事であろうと思います。

［『白光』1961 年 5 月号、10-13 頁］

上記の文章は、五井が「国際化」を強く意識した重要な転機と筆者には思われる。国際化の時代にあって、白光真宏会の「世界平和の祈り」も日本人だけでなく、世界じゅうで唱えられるようにしよう、という五井の意思の表れである。

国際情勢が危機感を増すなか、少数の力（「祈り」）ではどうにもならない、世界中の多くの力（「祈り」）が世界平和のためには必要となっている、と述べた。そして、その祈りとは、五井が提唱する「世界平和の祈り」であると、この五井の文章（英訳文）をと

おして、海外に向けても呼びかけたわけである。

また、世界情勢の影響は、五井が毎月書く機関誌の文章にもあらわれてくる。以下にその言葉を引用したい。

> この白光誌は、全面的に内容が法話調のものなので、せめて巻頭言だけでも、柔〔ら〕かい雑文調で書きつづけたいと思っていたが、近頃は、世界情勢が窮極にきてしまったようだし、それに加えて水害や地震などで、時折り驚かされるので、どうも呑気に雑文を書いている気がしなくなってしまった。
>
> そのように幽界の雲ゆきは、実に妖しい様相を呈しているのである。戦争も天変地異も、すべて人類の想念の波動によってもたらされるもので、人類の業想念を別にしては戦争も天変地異も起り得ないのである。／……個人も国家も、自己や自国の発している想念の浄化を先ず第一にして事を処さなければならないのである。それでなければ、如何なる平和策も平和運動も世界平和のための効(ママ)〔功〕を奏し得ない。
>
> ［『白光』1961 年 10 月号、2-3 頁］

このように、世界情勢の緊迫などの影響を受けて、五井の書く文章もそうした事態に自分たち（白光真宏会の会員）はどう対処するかといった法話調になっていた。ここでも、従来からの五井の主張を繰り返して、各々が発する〝想念波動〟を「世界平和の祈り」によって浄めなければ、世界平和は成らない、と述べている。

東西両陣営がせめぎ合い、右派・左派のイデオロギーが叫ばれていた当時、五井の考えは、次のとおりだった。

> あらゆる主義主張も一切ひっくるめた、大らかなる平和運動こそ、日本が国を挙げて行うべき唯一の道なのであります。／……
>
> 日本の平和運動は、先ず、あらゆる主義主張を含めた、世界平和の祈り的運動になってゆかねばならないのです。
>
> 自分たちが真実に平和の心になっていて、それで滅亡するなら、それは人間としては神のみ心のままを素直に行じ、人事をつくしたのですから、いうところはありません。いくら自己防衛をしてみてあがいたところで、かえって平和を乱すだけで、何等のプラスにもなりません。……

世界が平和になるためには、先ず自分の心を平和にしなければなりません。……

［『白光』1961 年 10 月号、10-11 頁］

白光真宏会・五井のねがう「日本の平和運動」とは、あらゆる主義主張の人が実践できる「世界平和の祈りによる平和運動」ということである。どのような主義主張の人でも、平和をのぞんでいるはず、という五井の前提のもと〔実際、すべての人がそうであるとはいえないだろうが〕、誰もが唱えられる「世界平和の祈り」をとおして、まずは各個人の「心の平和」をつくることを彼は目指した。

そして、それを実践して平和が成らず、死んでしまうのなら仕方ない、といった諦観さえ五井には見られる。五井が、「想念」に注視し、上のように超然と言い放つことができた背景には、死後の世界の存在（スピリチュアリズム）への確信があったからといえよう。

また、当時、どんどん進歩する「情報化」によって、世界が身近に感じられるようになってきたということが、五井（白光真宏会）に「世界平和の祈り」を海外にも広めようとさせた一因だったのかもしれない。五井は、以下のように言う。

……世界平和を想う時にはインドだろうが、イギリスであろうが、アメリカであろうが、日本であろうが、みんな一つの想いになれるなれるわけです。みんなの心が一つの目的に向ってゆく、そういうものでないと、あらゆる民衆、人類が救われる道が出て来ないのです。

南無阿弥陀仏でもアーメンでも出て来ない。やっぱり世界人類が平和でありますように、というような道を開かなければならない。それを法然親鸞の系統のやり方を利用して、そのままあとを受けついで、しかも世界平和の祈りというように、大きく世界中にひろげたわけなのです。／……／……今ならばラジオやテレビではすぐアメリカのことがわかってくるし、ボタン一つでミサイルは地球のどこへでも飛ぶ。世界というのがうんと短縮されて、昔の日本よりも江戸よりも小さくなっている感じなのですね。だから今こそ世界が一つになる絶好のチャンスなのです。

［『白光』1961 年 10 月号、19-20 頁］

以上のように、五井は、日本にいながら世界の情報がすぐにわかるような時代になってきたからこそ、誰もが唱えられる「世界平和の祈り」によって、世界平和という目的のもと、

世界各国の人々が結束することを目指したのだろう。

そして、各所でさまざまな団体が平和運動をおこなっていたその頃の様子をふまえて、五井は次のように、みずからの見解を述べている。

> 平和運動というと、衆を集めて会を開き、討論をし、決議案を出して、声明したり、反対賛成の抗議をしたり、あるいはデモをしたりすることのように考えられがちですが、本当の平和運動というのは、業想念を消し去る運動が一番で、業想念の波つまり神様のみ心に反する、愛と真というものに反する想いが一杯この世の中にはある。争いの想い、憎しみの想いという不調和な想いが一杯ある。そういう想いがあるうちは、どんな決議を出してもだめなんですね。／……
>
> 現在〔白光真宏会による〕世界平和を祈る会の第一段階としては、自分の業想念も周囲の業想念も、世界人類の業想念も全部含めて、業の世界を浄めてしまおうという運動なのですよ。
>
> それにはどうしたらよいか。只抗議をしたってだめだし、鉢巻をして坐りこんでもだめでしょ。只プラカードをもって歩いたってだめです。ただ祈ることより他にないです。／……
>
> 他の平和運動のように、声明を出し反対だ、デモだとやったって、そういうものは、業消滅という根本的働きに、なんの力にもなりはしない、と私は思うんですよね。
>
> 私たちの運動というものは、原水協〔原水爆禁止日本協議会〕やその他の平和団体のやり方とは全然違う。祈りが根本というより、祈りがすべてですよ。祈りからすべてが発生するという、そういう運動なのです。
>
> 〔『白光』1961 年 12 月号、18-20 頁〕

白光真宏会の平和運動とは、「業想念〔不調和な想い〕」の〝波〟を、「世界平和の祈り」によって浄める運動である、と五井はいう。実際にデモなどをして行動する平和運動もあるが、五井の基準では、その平和運動にかかわる人たちの「想い」の〝波〟が浄らかであるか〔調和しているか〕どうかを見ていたようである。

他の平和運動から影響を受けて白光真宏会・五井の運動のやり方が変わるということはなく、同会は上記のような団体とは別の路線で、唯心的な独自の平和運動の道をあゆんでいた、ともいえよう。

五井のこうした唯心（唯神）的な態度は、いつ頃からそうであったのかをふりかえると、戦後の昭和 20 年代前半頃には、そうだったようである［五井　1955］。以下の五井の話からも、そうした態度がうかがえよう。

……私〔五井〕は唯物論者の中央労働学園、つまり労働問題を取扱った所にいました〔中央労働学園に勤務していた〕。それで私〔五井〕は〔生長の家の熱心な信徒だったので〕朝から晩まで神様のことばかり〔職場の人にも〕説いていた。そうすると全然みな相手にしない。

労働組合の会などがあるんですね。私も出ている。すると一人が〝ストライキをやろう！〟というのです。方々に共産党がいるんですから片方で〝賛成！〟又片方〝賛成！〟とみんなでもって賛成する。その気に呑まれて誰れも声が出ないのですよ。私は神様一点ばりでしょ。闘争など絶対にいけないと思っていますから、どんな争議もいけないと思っていますから、〝反対！〟と私一人でやる（笑）そうするとこっちの共産党の人達が〝神様ひっこめ！〟（笑）なんていうんですよ。……

［『白光』1962 年 2 月号、17 頁］

五井は、戦後まもなくから、生長の家、日本心霊科学協会、などに入っていたこともあり、中央労働学園で働いていた昭和 20 年代前半頃には、ひたすら神様に祈り、争いの想いをもたないよう努めていたようである。

また、戦後のまもない時期に、唯物的職場環境で働いたことは、五井のその後の宗教者（宗教家）人生にとって、有益だったとも、以下で語っている。

私は昔、中央労働委員会というのがありますが、そこにいたことがあったのです。ですから労働問題については、私は割合くわしいのです。神様のやることというのは面白いですね。神様事をやるからには、はじめっから宗教家になり、坊さんや神主さんになってすればいいようなものだけれども、それでは世間がわからない。反対側のことがまるっきりわからないわけです。ところが神様がわざわざ労働組合の闘争の真只中、共産党や社会党の渦の真只中に放りこんで、いわゆる左翼というのはいかなることをやって、どういう戦術があり、どういう心持でいるのか、というものをハッキリ見せられ、労使の対立の様相をまざまざと体で見、感じて来たわけです。／……現

実的にハッキリ目でみて、ああこれではいけないなあ、とつきつめて突きつめて、最後まで突きつめて考えて、この相対の世界ではだめなんだ、ということが私は身にしみてわかっているのです。……

人間というものはいろいろ経験しておくといいですよ。実に役に立ちます。……

〔『白光』1962 年 6 月号、14-15 頁〕

五井は、労働組合の運動などについて想像で語ったわけではなく、実際の職場において左翼の人たちの心持や、労使の対立の様相を体感していた。そのうえで、五井は考えに考えたすえ、相対の世界〔個人が敵対の想念をもっている状況〕ではだめだ、と気づいた。これは、彼の社会経験をとおして得られた考え方である。つまり、「相手を敵視するなかでは、平和は実現できない」という五井の観念は、「社会」からの影響を受けて強化されたもの、と見てよいだろう。

1962（昭和 37）年頃は、米ソ間の緊張関係がつづくなか、白光真宏会のなかでも「宇宙子科学〔「宇宙人（宇宙天使）との交流」を含む〕」のプロジェクトが動きだし、五井の「祈り」を普及する活動が大きく広がってきていた。五井は、「世界平和の祈り」の普及について、以下のように語っている。

……大体、白光真宏会とか何んとか会とか会なんていうのを私は問題にしていない。只会を維持してゆく会員の人がいて、維持してればそれでいいと思っている。只世界平和の祈りがうんと広まるように、みんながどこにいても、インドのすみでもアメリカのすみでも、世界平和の祈りをしているという風にもっていこうと思ってます。ちっぽけな形の世界の上の会なんて問題にしていない。そのつもりで皆さん祈りのリーフレットを配って下さい。構わず配って下さればいいんだ。世界平和の祈りをして下さればいいんだ。

私の本意というのは、繰り返しますが、みんな世界中が世界平和の祈りをしてくれればいい、ということだけなのです。……

〔『白光』1962 年 9 月号、37 頁〕

五井は、祈りのリーフレットを受け取って読んだ人が、白光真宏会の会員にならなくてもいいから、世界中で「世界平和の祈り」をとなえるようになることを第一に願っていたよ

うである。彼は、ゆくゆくは、世界のいたる所でこの「祈り」がとなえられることを描いており、これはまさに「世界平和の祈り」を国際化してゆく考えを示しているといえよう。

当時は、米ソにおいて宇宙開発競争がおこなわれており、メディアをとおして、世界・地球・宇宙というものが、より身近に感じられるようになってきていた。そうした時代環境にあってか、五井の視野も世界へ、宇宙へと向かっていた。そして、五井の「祈りによる平和運動」も、以下の文から、海外を射程にしていたことがうかがえる。

……〔唱える祈りについて、〕そのグループにしかわからぬ唱え方は一宗一派です。

世界人類が平和でありますように、という祈りは誰れがわからないでしょうか。誰れにでもわかる。世界中がわかるでしょ。言葉だってわけがない。英語に変えればいい、スペイン語に変えればいい。ドイツ語、フランス語……に飜訳すればいい。それだけの話でしょ。〝世界人類が平和でありますように〟だけでいいのだから、あとの〝私共の天命が完うされますように〟というのは、どんな言葉で云ったっていいですよ。自分が幸せになりますように、と思ったっていいし、その国の人々の気持に一番あてはまる言葉を使えばいいのだから。要するに想いが〝世界人類が平和でありますように〟という祈り言に乗りさえすればいいのです。そしてお経の代りにして唱えるわけです。これは一宗一派ではない。……

〝世界人類が平和でありますように〟という世界平和の祈りにすべての宗教の宗祖が結集したわけです。この世界平和の祈りに、すべての宗教が集まるようになっている。各宗教、各国が全部世界平和の祈りをやらなければならなくなりますよ。絶対になる。……そうしない限りは、この地球は滅びてしまうのです。だからみんなが平和の祈りをしなければならないのは、最も自然なのです。

［『白光』1962 年 10 月号、19-20 頁・22 頁］

五井は、〝世界人類が平和でありますように〟の言葉を各国語に翻訳して広めよう、と言っている。他のフレーズもあるが、それらは臨機応変にして、最初の 1 フレーズが世界各国・各宗教でとなえられるようになることを目指した。国際的な、宗派の垣根を超えた「祈り」による平和運動を遂行しようという五井の意気込みが伝わってくる。

この頃、白光真宏会本部のなかでは、「宇宙（子）科学」という研究プロジェクトが活発に動いていた関係から、五井や同会幹部も、理系の学問について学ぶようになったよう

である。それを、五井は、次のように述べている。

私は元来、音楽や文学畑の勉強をしていたので、数学や化学の学問は、いたって苦手としていた。ところが、宇宙科学の研究がはじまってきて、今では、数学や化学の勉強が絶対に必要になってきた。／……

そう肚がきまると、いつの間にか苦手という気持がすっかり消えて、数式も化学法式〔化学式、化学公式か〕も吸いこまれるように、頭に入ってくる。そして今では数学や化学の勉強が楽しくて仕方がないくらいになってきた。……苦手を克服するには、その事柄が、自分にとって絶対に必要な事柄であることを認識することである。絶対に必要だという認識が起ってきたとき、はじめて苦手は消滅するのである。

［『白光』1963 年 11 月号、2-3 頁］

白光真宏会が「宇宙（子）科学」という新しい宗教活動を展開していくうえで、必要性が生じたために、五井らは、（地球）科学にかかわる学問を、にわかに学ぶことになった。

五井は、唯物的な人たちにも、「神」の存在を知らせたいとおもっていた。そのためには、以下の文のように、科学の道が必要と考えたようである。

神の存在を宗教的な説明で、唯物的な人に肯定させることはでき難いのですから、ひとまず、宗教的な神という概念をひっこめて、唯物的な人が肯定し易い科学の道において、神の存在を認めさせることが、唯物論者に神の存在を肯定させる唯一の方法だと思うのです。

［『白光』1964 年 1 月号、10 頁］

そして、白光真宏会が、唯物的な人に「神」の存在を肯定させる方法として取り組んだのが、「宇宙（子）科学」というものだった。

また、前掲の「簡易年表」に 1964（昭和 39）年 10 月　東京オリンピック開催、とあるように、この東京オリンピックを機会として、白光真宏会でも「世界平和の祈り」の各国語版がつくられるようになる。五井は、（聖ヶ丘）講話の中で、次のように呼びかけた。

ああこんなにも日本人は世界平和を願っている。無理もない。水爆や原爆の難にあ

っている国だから無理もない。日本が願うのは本当だと誰れでも思いますよ。その運動が一番だと思います。

なんの運動、どんな思想運動よりも、国中どこへ行っても、世界人類が平和でありますように、という旗印がかかっていてごらんなさいよ。オリンピックで日本に来た人たちが、東京駅でも「世界人類が平和でありますように」上野駅へ行っても「世界人類が平和でありますように」どこの駅でも「世界人類が平和でありますように」という祈り言が英語で、ドイツ語で、フランス語で、イタリー語で、世界民族のあらゆる言葉で歓迎の旗印としてかかげられてごらんなさい。来た人たちが、日本はこんなにも平和を願っているのかな、と思いますよ。

その運動をやりましょう！

日本中にまず、世界平和の祈りの旗印をかかげちゃうんです。隣近所、みんなそうしましょう。

そういう為には、やっぱり自分の心も少しは平和にしておかなきゃね。だから自分の心を平和にすると同時に、世界平和を念願しましょう。そういう運動が私の運動です。

［『白光』1964 年 7 月号、21 頁］

このように、1964（昭和 39）年 10 月の東京オリンピックを前に、同年 5 月 14 日の講話で五井は、一つの運動方針を示した。それは、「世界人類が平和でありますように」という祈りの言葉を日本の各所に、あらゆる言語で掲示しようとする運動である。

オリンピック（東京開催）という社会の出来事が、こうした五井の発案に「影響」を与えたとみることもできよう。そして五井は、「平和の祭典」としてのオリンピックを平和運動にうまく活用した、ともいえるだろう。

この講話を掲載した機関誌には、さっそく 17 カ国（日本を除く）の言語 (1) による「世界人類が平和でありますように！」の訳文（原語とカタカナ併記）が集録されている［『白光』1964 年 7 月号、77 頁、参照］。

東京オリンピック開催の機、五井の講話を受けてだろう、白光真宏会の一会員（宇佐美氏）が「祈りによる世界平和運動」趣意書 (2) を作成した。そして、その趣意書を事務局長・斎藤秀雄を通じて五井に提出したという。五井は賛同し、事務局長の支持を得て、その署名活動が展開されることになった、との記事が掲載された［『白光』1964 年 9 月号、

32-35 頁、参照]。

そして、1964（昭和 39）年、機関誌『白光』10 月号の裏表紙に、「心を一つに　世界人類が平和でありますように」の一文とともに、この文の対訳が英語・ドイツ語・フランス語・スペイン語・ロシヤ〔ロシア〕語で掲示された［『白光』1964 年 10 月号、表 4 頁、参照］。こうした「世界平和の祈り」の言葉の外国語化への動きを五井は次のように述べている。

> ……近頃では各国語の祈り〔「世界平和の祈り」〕の言葉ができているのでいつの間にか諸外国にも広まってゆきつつある。
>
> ［『白光』1964 年 10 月号、2 頁］

そう喜びを表しつつ、「世界平和の祈り」は元来どこの国の人でも祈れるものだから、と世界中に「祈り」が広がることに、五井は自信と期待を述べていた［『白光』1964 年 10 月号、2-3 頁、参照］。

五井はひたすら「祈り」の普及活動に専心するが、その背景には、終戦にいたる過程で日本に原爆が投下されたこと、そして多くの犠牲者を出したという事実があったのであろう。彼の戦争体験は、武器（武力）の使用を否定する態度につながっていただろう。五井は、次のように語っている。

> 今日まで核爆弾の悲惨な洗礼を受けたのは日本が唯一の国です。何故日本だけが唯一の原爆洗礼国となったのか。それはいうまでもなく、日本の天命を日本人にはっきり示すが為の神のみ心でなくてなんでありましょう。
>
> こんな悲惨なこんな悪魔的な武器を、絶対に人類に使わせてはいけない、という神の慈愛のみ心を、いやという程、日本人の心に沁みこませる為であったのです。日本こそ日本人こそ、真に完全平和を望み、世界平和の為に、如何なる武力の威嚇も、武力の誘惑にも把われず、真っしぐらに、天命の道を突き進んでゆかねば、日本も世界も滅亡の淵に追いやられてしまうのであります。
>
> ［『白光』1964 年 12 月号、7 頁］

この時、五井は、武力によらない世界平和の道をリードできるのは日本だけだ、と述べた。

ここで五井の言う日本の天命とは、日本が世界平和樹立の指導国・大調和達成の中心国になることを意味している［『白光』1964 年 12 月号、7 頁、参照］。

◆五井の見解の要点（昭和 20・30 年代）

五井は、原水爆反対の署名運動やデモなどの平和運動にたいしては、次のようにかんがえた。つまり、そうした運動に参加する人たちの「想い（想念波動）」に〝敵対的〟なものや〝闘争的〟なものがあり、それでは、平和にならないと述べた。まず、平和運動をする人、個人個人の心が、平和な（平安、安らぎのある）状態でなければならない、とした。

また、国際化、情報化社会の進展に応じて、五井はみずから提唱した「世界平和の祈り」を世界じゅうに広げようとかんがえ、実行に移しはじめた。五井の「祈り」や教説の外国語への翻訳事業の開始は、彼のそうした国際化・情報化社会への応答と見ることができよう。特に、昭和 39（1964）年の東京オリンピックを機に、その〝平和の祭典〟を迎えるにあたって、五井は、東京にやって来る外国人たちに「世界平和の祈り」を主要な外国語で掲示して「祈り」の言葉を知らせよう、と白光真宏会の会員たちに呼びかけた。

時代的・社会的に、その発達段階が、ちょうど五井らが「祈り」を外国人に向けて普及させるのに都合のよい状況だった、ということはいえるだろう。

2-2　昭和 40 年代（1965-1974）の五井の発言

アメリカ、ソ連、中国ら軍事大国が互いに一歩も譲らないという国際情勢のなか、五井は次のように言う。

> ……それなら一体、誰れが仲に立って口をきいたらいいか。日本のような国が一番いいわけです。
>
> 原爆の被害を受けている。水爆の災害も蒙っている。核爆弾の恐ろしさを一番先きに知り、一番深く知っている日本が仲立ちして、大調和と世界平和という大信念に基〔づ〕いて、アメリカさんこれは譲らなければいけませんよ、ソ連さんはこれ、中共さんはこれ、というように一歩一歩少しずつ譲らせるようなことの音頭をとるのが一番いいのです。日本より他にない。
>
> だけども、日本の今迄の政治家は力がなかった。或いは今までは時期ではなかったのかもしれない。そこで政治家だけに頼らないで、国民運動として、日本の国民はみ

んな戦争なんか一つもしたくない、軍備をしたくないんだ、世界が平和になることだけを願っているんだ、という想いを世界中に知らせなければいけません。

［『白光』1965 年 2 月号、20 頁］

世界平和のために、日本は大国の間にはいって調整するのが理想としながらも、これまでの日本の政治家にはその力がなかった、と五井はいう。そこで、そうした状況をふまえて、政治家だけに頼らない国民運動として、五井はみずからの提唱する「祈りによる世界平和運動」に人々を結集させようとしたわけである。

本章の冒頭に掲げた「簡易年表」に、「1965（昭和 40）年　ベトナム戦争激化、米軍、北爆開始、1965（昭和 40）年 4 月　ベトナムに平和を！　市民文化団体連合（ベ平連）、初のデモ行進」とあるように、この頃の国際情勢を五井は以下のように記した。

南ベトナムを間にはさんで、米国対北ベトナム、中共、ソ連等の対立、中共の核実験による西欧側の衝撃などによって、日本の運命も生易（なまやさ）しい生き方では、安心してはいられぬ情勢になっています。

［『白光』1965 年 4 月号、7 頁］

そうしたなか、五井は以前に所属していた教団の教祖（谷口雅春）の発言にたいして、明らかに反発し、以下のような批判を述べている。

或る光明思想家〔谷口雅春のこと〕は、……雨が降ったら傘をさす、と同じように、敵が襲ってくるような事態になった今日、日本が丸腰では侵略されてしまう。早速憲法を改正して軍備を持つべきだ、と強く主張しているのであります。……／この光明思想家は、遂いに祈りの本質を忘れてしまったのです。大調和なる神のみ心、完全円満なる神のみ心が信じられなくなってしまったのです。右の頬を打たれたら、左の頬をも打たせよ、とイエスはいいました。それはなかなかむずかしいことです。しかし、宗教の道を行く者は、そうなるべく心がけなければなりません。

［『白光』1965 年 4 月号、10-11 頁］

上記のように、かつては同じ信仰の道（「光明思想」）を歩んでいた二人が、この当時の

社会情勢の認識と対応をめぐって全く異なる見解をとるようになっていた。当時の五井は、谷口の相手国を「敵」とみて軍備増強をさけぶ態度とは逆に、軍備は不要、「祈り」に徹するという平和主義の態度を示した。

五井は、よく国際情勢を話題に「講話」をおこない、みずからの見解は述べていた。しかし、いっぽうで、五井自身は自分は宗教家との自覚から、政治運動（活動）に関与する発言は避けていたようにみえる。彼は、聖ヶ丘での講話で下記のようにも語っている。

> 現象に現われている、変化している姿を見るとどっちが良くてどっちが悪いのかわからないのですよ。そこで私共はどういう考え方をしたらいいかというと、そういう枝葉の動きはわからない。だから「私共はそういうことはわからないから、世界人類が平和であることを念願することしかありません。それより私共は方法を知らないんですよ」といって世界平和の祈りを宣布すればいいのです。
>
> ［『白光』1965 年 4 月号、18 頁］

つまり、白光真宏会では世界の平和を願っているから、政治がどうあろうと、自分たちは「世界平和の祈り」を広めるのだ、という。そして、南ベトナムと北ベトナムの戦争をみれば、自然と「世界人類が平和でありますように……」と祈らずにはいられなくなるものである、というように五井は述べた［『白光』1965 年 4 月号、20 頁、参照］。

また、五井は、木村毅『ドゥホボール教徒の話』（講談社、1965 年）から引きながら、「殺すなかれ」について、「法話」の中で言及した。そして、米国政府や中国政府を意識しつつ、

> 人を殺すことが、どうして正義に通じることでしょう。〔ベトナムなどを〕爆撃したり、人を騙（だま）したり、自国の都合のよいことのみに人を動かそうとすることが、果して平和をこの世にもたらすもののやることでしょうか。
>
> ［『白光』1965 年 7 月号、10 頁］

と五井は述べた。モーゼの十戒に「殺すなかれ」とあるから、人を殺すための軍事教練を受けるわけにいかないと兵役を拒否したドゥホボールの人たちの信仰態度に、五井は心を打たれたようである。とはいえ、こうした徹底した非暴力の態度をとることは容易ではな

いので、五井は、ドゥホボールの人たちと同様の行為を一般の人々にすすめてはいない[『白光』1965 年 7 月号、6-11 頁、参照]。

しかし、当時の五井当人の信念としては、軍備に賛成せず、非暴力の立場であり、彼は次のように述べている。

> ……あらゆる武器を捨てる、という思いきった行動に出でない限り、この世の争いはつきないし、やがては地球世界の滅亡をまねいてしまいます。……それができるのは、平和憲法を現在もっている、日本をおいて他にはありません。日本こそ世界の中に向って声高々と、地球世界の人類よ、すべての武器を捨てて話し合おう、と叫び得る唯一の国なのです。……
>
> そう〔軍備増強〕しなければ日本が滅びるというのなら、この日本という国が地球上に必要でないということなので、霊界で存続すればよいことなのです。しかし、……世界平和を旗印にして、殺す勿れを実行してゆこうとする国が滅びるわけのあろう筈がありません。
>
> [『白光』1965 年 7 月号、11 頁]

以上のように、当時の五井は、武器の放棄を提案している。そして、軍備をしないために滅ぼされても、肉体消滅後に存在すると五井が信じる「霊界」に行って存続すればいい、との彼の世界観をしめした。

また当時、五井はベトナム戦争の状況を念頭に、以下のように語っている。

> 米国と全面協力をしてゆこうという一グループの人々は、米国の北ベトナムの爆撃をも是認しているのですし、憲法改正して、軍隊をはっきり認めることにも賛同しているわけなのですが、果して、神のみ心に照し合わせて、こうした行為が是認し得る行為でありましょうか。……／……共産主義に味方するわけではないけれど、必然的に米国のやり方に反対することになってしまうので、……
>
> [『白光』1965 年 8 月号、9 頁]

その当時、日本において、いくつもの意見が出ているなかで、米国のベトナム北爆などは多くの人を殺傷し、土地を痛め、戦争の恐怖を世界中にまき散らすことになるから、と五

井は米国の戦闘行為に反対の考えを示唆した［『白光』1965 年 8 月号、10 頁、参照］。そして、その戦争〔ベトナム戦争〕は「神のみ心でない」との信念が五井にはあった。

五井は、世界のいたる所で戦争が起こっている状況のなかで、自分たち（白光真宏会）のあり方を、信仰の立場から次のように明言した。

> ……すべては、世界平和の祈り心に託して、私共は生きてゆくより他に方法がないのです。……
>
> 私はそこで、私共は何等政治的な働きかけはしない。祈り一念の集〔ま〕りである、というのであります。……祈りとは消極的な退歩的なものではありません。〔祈りとは、〕肉体智慧をはるかに超えた大智慧大能力を私共にそそぎこんでくる、高次元の世界と波長を合わせる、唯一無二の方法なのであります。
>
> ［『白光』1965 年 8 月号、12-13 頁］

上のように、自分たちの団体（白光真宏会）では、「政治的働きかけはしない」、世界平和の祈りに専念する、との意思を五井は表明した。上記の五井の言葉は、当時、政治的働きかけを行っていた生長の家などの他の宗教教団と一線を画する、白光真宏会の独自路線を示すものといえよう。

五井は、日本国憲法の第 9 条をめぐっても、暗に生長の家・谷口雅春の主張を批判した。当時の谷口の言動を受けて、五井は以下のように発言していた。

> ……太平洋戦争が日本に最悪の事態をもたらしたと同時に、日本をして真の世界平和創設の中心国としての立場を与えて下さったようなものです。そういう意味で、日本〔国〕憲法の第九条（戦争放棄、軍備撤廃）は神の降し給〔わ〕った大切な箇条だと思います。
>
> 今日になって、今こそ一番この第九条が大事なのに、これを改定しようなどという論がしきりに出ているのは、神の大愛のみ心を知らぬ大愚者です。しかもこの改定論者の中には、この憲法が発布された時には、これこそ神の降し給〔わ〕った平和憲法である、と今私が言っているそのままの言葉で、その機関誌にも特筆大書していた宗教者もいて、現在では掌をかえすように、憲法改定論者になっており、米国の北ベトナム爆撃さえも、大いに肯定しているのであります。こういう人が、光明思想家でし

かも多くの信者を持っている、影響力の強い立場にいるのでありますから、世の中は大変なものです。

［『白光』1965 年 9 月号、8-9 頁］

この時の五井は、日本国憲法の第 9 条を「神の降し給〔わ〕った大切な箇条」とこの条文の内容に賛同している。戦後まもなくから昭和 20 年代半ばころまで生長の家の信徒だった五井は、同教団初代総裁・谷口雅春の変節に憤りをもって批判した。谷口と五井は、互いに宗教者（宗教家）として、同様に「光明思想」を説く立場にあった。だからこそ、とくに師であった谷口雅春が〝武器をもって相手を叩く〟という行為を肯定したことに、五井は納得がいかなかったのだろう。

また、宗教が理想論を語り、五井の「祈り」の活動にしても社会から実証性を問われていた時代でもあった。たとえば、「祈りで平和になるのか？」というものである。こうした世間からの声に明らかな答えをしめすためには、五井たちの活動がどうしても「科学」である必要があったのだろう。五井は、白光真宏会で始めた「宇宙子波動科学」について、次のように説明している。

……宇宙子波動科学は、あくまで純然たる科学でありまして、直観によってなされるのではなく、今日までの科学の道と同様な方法で研究を進めてゆくのであります。／……／どうせ宗教家のはじめたものだから、神がかった変てこな、言葉だけのものだろうぐらいに思われる人たちも随分あると思うのですが、そう思っている人たちが〔将来的に、「宇宙子波動科学」の〕研究成果を見たら、眼を円くして、暫らくは言葉もでないということになるでありましょう。

［『白光』1965 年 12 月号、4-5 頁］

五井は、自分たちの「宇宙子波動科学」なるものが、世間からどんなふうに思われているかを、よくわかっていた。そうした世間の人たちの見方をくつがえすつもりで、とくに優秀な会員を集めて、五井らはこの「科学」に熱心に取り組んだ。しかしながら、現在〔2018 年 7 月現在〕まで、この「科学」は完成していない。

この頃の機関誌（『白光』）には、毎月のように米・ソ・中国ほかの国際情勢について、五井自身の考えを記している。戦争が身近に日本のほうまで迫ってきている、との実感が

あったのだろう。五井は、以下のように、述べる。

近頃の白光誌には、只単なる個人の救われの道や、慰めの言葉だけが書けなくなっている現在の私のペン先なので、どうしても米国の在り方や中共やソ連や世界の動きなどに、つい文章が走っていってしまいます。

私に頼ってこられる人々にとっては、世界の動きなどはひとまず置いて、現在の自分の病気とか貧乏とか不幸災難を遁がれ出る道を教えて貰いたいのであり、私もその人たちの気持を充分に判っていながら、……

〔『白光』1966 年 2 月号、4 頁〕

こうして、白光真宏会内で行われる五井の個人指導などでは、上記のような会員各人の悩みに答えつつも、機関誌に掲載する法話となると、世界平和における日本の天命とか、「祈りによる世界平和運動」推進の重要性などといった話に展開しがちだった。この月の機関誌でも、世界情勢を受けて、次のように述べている。

日本の天命は右よりでも左よりでもないのであります。中庸というのが日本の生きてゆく道でありまして、……／……人が殺し合うことは、しかも国の名において殺人行為を許すことは、あの太平洋戦争だけで沢山です。／……

世界人類が平和でありますように、という祈り言葉に先ず日本人の心を結集させ、それを世界中に拡大してゆこうというのが、私共の世界平和の祈りの在り方なのです。

〔『白光』1966 年 2 月号、9-10 頁〕

日本は、中庸の道、調和すなわち世界平和を樹立する道を進むべきで、殺し合いの戦争はもう沢山だ、と五井はいう。そして五井は、みずからが提唱した世界平和の祈りを、まずは日本に広め、さらに世界中に広めていきたいと今後のビジョンを語った。

そして、世界の平和を実現するために五井は、以下のように会員たちによる「祈り」等の普及活動をすすめた。

そうしたこと〔天変地変や大戦争〕がなくて、世界が大調和するために、神々が結集し、世界平和の祈りとなって現われているのです。だから、皆さんが世界平和の祈

りをし、これを宣布することは、滅びるか滅びないかという危機にある人類を救うわけです。それが皆さんのリーフレット配りでもあり、白光誌や白光新聞の配布でもあるし、いろいろな運動となってくるわけです。皆さんの運動がなければ人類は亡びます。それにカバーして宇宙子波動生命物理学が出来てゆきますから、二本立てでいくわけです。ですから皆さんの祈りによる世界平和運動がとても大事なのだということになるのです。

［『白光』1966 年 5 月号、22 頁］

五井は、人類存亡の危機を救うために、祈りのリーフレットなどの普及媒体を広めるとともに、白光真宏会独自の「宇宙子波動生命物理学」という研究をすすめる、と述べた。このようにして、次第に、「祈りによる世界平和運動」に五井は拍車を加えていった。

また、五井は、アメリカが北ベトナムを爆撃している現状についての考えを、1966（昭和 41）年 5 月 26 日の東京講演会で次のように語っている。

私もジッとそれ〔アメリカ軍の北ベトナム爆撃のこと〕を考えました。何遍も考えて神意に伺ってみますと、私の中にその答えが出てくる、その答えは「いかなる場合があっても人を殺(あや)めていいことはない」「どんな理屈がつこうとも爆撃していいことはない」とハッキリと神様の中から出てくるのです。

［『白光』1966 年 7 月号、21 頁］

ベトナム戦争にたいして、五井は上記のように〝神意〟に問うた答えとして、誤りだと述べた。どんな場合でも殺人はいけない、というのが五井の立場である。

五井は、機関誌（『白光』）の下記の法話にあるように、各人が世界の情勢から危機を感じとって、祈りの活動に入っていくよう促している。

……北ベトナム爆撃の問題だけでもそうであり、南ベトナムの内乱状態でもそうでありますが、何か安心していられない危機感というものがあるのです。

そういう感じをごまかさず、しっかりと感じとって、その後の発展と、自己の生活とに結びつけて考えてみることが必要なのです。そういう世界情勢が、自己と無縁のものでないことがはっきり判ってくるのです。／……／……世界が原水爆戦争になれ

ば、これはもう地球壊滅までゆくよりどうにも仕方がありません。／そういう時代が現代なのです。……一般大衆の個人個人が、自己の出来る範囲で、世界情勢を自分達の真実の幸せの方向に向けてゆく運動をしなければならぬというのです。／……それにはどうしても世界を戦争状態から解放しなければなりません。……それができるのです。……／一つの習慣をつけて、その習慣が実行されてゆくことによって、日本が先ず守られ、次第に世界にその影響を及ぼしてゆくのです。世界平和の祈りがそれなのです。

［『白光』1966 年 8 月号、10-11 頁］

戦争の危機をのがれる方法として、五井は、自らの提唱した「世界平和の祈り」を実践することを一貫してすすめている。

さらに、当時の世論の一部に安保条約破棄の声が出ていることにたいして、五井は、以下のように語った。

……日米安保条約の問題にしても、簡単に安保条約破棄という方向に動くことも、現在の日米のすべての関係においてでき得ることでもありません。……

そういう風に政府のやり方を責める前に、国民の多数が、真実に世界の平和を欲（っ）し、戦争状態になることを極度に拒否しているのであることを、身をもって国内にも国外にも示すことが大事なのであります。

この運動〔平和運動〕は、相手をやっつけてしまうのだ、という気持や、政府をつぶしてしまうのだというような、主義の色のついたものではいけません。純粋な無色の平和運動でなければなりません。世界平和の祈りの運動はそういう無色透明な素直な平和運動なのです。業生の因縁因果の波の世界で、神の光明波動を何気なくひろげてゆく運動なのであります。／……

私たちは神のみ心一筋に生きるものでありまして、米国色も中共色もソ連色もあっていいものではありません。純粋に神のみ心を帯した日本本来の和の精神に徹した、日本の天命完うの働きをしつづけなければいけません。

［『白光』1966 年 9 月号、10-11 頁］

「祈りによる世界平和運動」は、反米や反共などといった〝主義〟の色のつかない、「無

色」の平和運動だ、と五井はいう。五井たちの運動とは、神への信仰にもとづいて、祈りによって世界各国の調和をめざしている運動だといえるだろう。

前の段でもふれたが、昭和 40 年代には、すでに世界の情勢をつぶさに考えられる時代になっていた。それゆえに、五井たちの平和運動が可能になったということが、昭和 41（1966）年 9 月 11 日の五井の講演会でも次のように語られている。

> ……ところが現代では世界を考えなければ一つの国のことを考えられない。日本がたつためにはアメリカと貿易しなければならないし、中共と貿易しなければならない。そのように一つの国がたつためには、必ず外国のことを思わなければならない。外国を思えば必ず世界に拡がるわけです。一つの国がたつことは世界と共通な運命になっているわけです。そういう時代になって始めて〔初めて〕世界平和の祈りがハッキリ生まれてくるんですね。
>
> ［『白光』1966 年 11 月号、55 頁］

鎖国の時代であれば、こうした世界に向けた運動はできないわけだが、世界各国と密接につながる時代（現代）になったことで、世界中に視野が広がり、五井の「祈りによる世界平和運動」も実行できるようになった、といえよう。終戦後ほどなく、朝鮮戦争（1950〈昭和 25〉年～）が勃発し、他の国々でも次々と起こる紛争の事態を五井はメディアをとおして知ることができたために、ちょうどその時代に合わせた「平和の祈り」を生みだすことにつなげられた、と見ることもできるかもしれない。

五井の平和思想への影響を考えるうえで、五井自身の戦争体験、戦後の「平和憲法」の制定も、いくらか関係がありそうである。五井は、法話で次のように述べている。

> 日本は幸（さいわい）に、幸（さいわい）というより、天命成就の為に神がなさしめ給うたと考えられる敗戦に伴う平和憲法の樹立。この平和憲法が定まりまして、日本は本格的に聖徳太子の大和の精神中心に活動し得る立場に、はっきり立たされたのであります。
>
> それもあいまいな敗戦ではなく、世界を一挙に滅亡に導き得る、原爆によって、完全なる敗戦を味〔わ〕ったのです。戦うことの愚かさを心の底から噛みしめたのは、被爆地に当った広島長崎の人々だけではありますまい。
>
> 原爆を再び何処の国にも落させまい。この想いは、多かれ少かれ、日本人の誰れも

の心に沁みこんでいるのであります。

［『白光』1966 年 12 月号、8 頁］

敗戦後に制定された「平和憲法」（日本国憲法第 9 条）には、戦争放棄、戦力不保持、交戦権否認の内容が記され、当時の五井の主張はこれと軌を一にする。五井は、「平和憲法」を根拠として、徹底した平和国としての日本の立場を内外に宣布すべき、と語っている[(3)]［『白光』1966 年 12 月号、9 頁、参照］。

また、上記の引用文で、被爆、敗戦をとおして、五井自身も戦争の愚かさを痛感したことがうかがえる。このように、日本の被爆体験、敗戦、「平和憲法」制定、という一連の出来事が、五井の平和思想（平和主義）を生みだすベースにあったと見ることはできよう。

五井は、「現代」という時代、（国際化）社会に合った祈りが必要だと考えていた。彼は、「世界平和の祈り」の意図について、以下のように述べていた。

……ですからどうしても、現代は現代の言葉をもって、日本は日本の言葉をもって現代にピッタリした新しいやり方が生まれなければならない。それが消えてゆく姿で世界平和の祈り、となって生まれたわけです。／そのやり方はほとんど浄土門と同じことです。ですけれど世界人類が平和でありますように、というやり方は南無阿弥陀仏よりも現代の人に意味がすっかりわかります。……消えてゆく姿で南無阿弥陀仏でいいのだけれど、現代の日本人ばかりでなく、世界中の人々が理解できてそして行なえるのは「世界人類が平和でありますように」よりありませんでしょう。これは英語に直したって、フランス語に飜訳したって、ロシヤ語、中国語、スペイン語、その他どこの国の言葉に直しても「世界人類が平和でありますように」と唱えることが出来ます。

［『白光』1967 年 2 月号、20 頁］

五井は、現代人の誰が読んでもその意味がすっかりわかる祈りの言葉として、「世界人類が平和でありますように」の一文を掲げた。さらに、白光真宏会では、国際化社会となっている「現代」に、他国の言語に翻訳してもすっかりわかる祈りの言葉として、上記の一文を海外へも普及していった。

当時の世界情勢が危機的であるとの強い自覚があったから、五井は祈りのリーフレット

などの普及活動を推進していた。五井は、その普及活動について以下のように語った。

私達はうまずたゆまず、日々世界平和の祈りのリーフレットやパンフレットを無料でまきつづけております。今日までに何千万枚配布したか判りません。私共の人類愛の想いが、そうせずにはいられないのです。そして感謝の投書や、激励や同感のハガキがきたりしますと、みんなは活気づいて更にリーフレットまきに走り廻るのです。
［『白光』1967 年 7 月号、12 頁］

白光真宏会では、「世界平和の祈り」を一人でも多くの人に伝えて、実際に祈ってもらうことをめざした。そのリーフレットを受け取り、読んだ人は信者にならなくてもよいから、共に祈ってほしい、との考えがあった。祈りのリーフレットを配布したい人は、世界平和を祈る会（千葉県市川市新田）に申し込めば、何部でも無料で希望する宛先に送ってもらえた［『白光』1967 年 7 月号、12 頁、等、参照］。

ベトナムでは相変わらず南北ベトナムにおいて爆撃が続き、日本はアメリカの機嫌を損なわないように政治を行わざるを得ない形になっている、と五井はいう［『白光』1967 年 12 月号、23 頁、参照］。そうした状況のなか、白光真宏会会員がなすべきことについて、聖ヶ丘講話で、五井は次のように語った。

そこでよくよくふりかえってみますと、日本は調和してはいません。右だ左だ、なんだかんだ、と四分五裂して騒いでいるわけです。だからせめて我々だけでも、一人一人が集って本当に調和の姿を現わしてゆく必要があるわけです。そこに生まれたのが世界平和の祈りなのです。／……／……だから一人でも多く平和の祈りをする人が増えれば、それだけ日本はよくなるし、世界の戦争は防げるし世界の天変地変は防げるわけなのです。
［『白光』1967 年 12 月号、23-25 頁］

五井は、まずは自分たち白光真宏会の会員から、世界平和の祈りによって、調和の姿を現わしていこう、と呼びかけた。会員各人の心の調和から始めて、つぎに日本人全部の心の調和、最終的に世界の人々の心の調和へと進めていこうという五井の狙いであろう［『白光』1967 年 12 月号、24 頁、等、参照］。五井には、みずからの提唱した「世界平和の祈

り」を実践する人が増えるほど、世界は平和になっていく、との信念があった。

本論文の第 1 章、「五井昌久の生涯と活動」のところで記してあるように、五井は、1968（昭和 43）年 5 月末に「新宗連」からの要請をうけて、「新宗連」への加盟を表明した。また、世界平和に向けて、他にも、世界連邦運動について、機関誌で以下のように若干ふれるようになっていた。

> そこで人はいろいろ考えて、世界連邦を作ろう、世界を一つの国にすれば戦争がなくなるだろうと、働きはじめている。いい考えですが、なかなか簡単にいかない。個人の業、国家民族の業というのがある以上、世界連邦にして一つに手をつなごうというわけにいかない。
>
> ［『白光』1968 年 8 月号、32 頁］

上記のように、五井は、世界連邦という考えはいい、と賛意をしめしながらも、実際にそれを実現するには困難がある、と述べている。そこで、五井の場合は、全世界が一つにつながる方法として、どんな国の人、どんな宗教の人も、「世界人類が平和でありますように」という五井が提唱する祈りの言葉を唱えることをすすめた［『白光』1968 年 8 月号、32 頁、参照］。

五井は、現代という時代にふさわしい宗教のかたちは「綜合宗教」だと考えていた。その「綜合宗教」というものについて、五井は次のように述べている。

> ところが、現代になってまいりまして、各国に新しい宗教がたくさん現われてまいりまして、日本では、神道、仏教、キリスト教等々と心（神）霊主義をミックスして一つに現わしてゆく、という宗教が現われてまいりました。それまでの日本の宗教は、神道系統、仏教系統、キリスト教系統、それに儒（じゅ）教といった系列で、それぞれに宗派を立てておりましたが、各宗をミックスした宗教となりますと、各宗教の特長を生かして、一般人にもインテリ層にもわかりやすく、入りやすいという広い範囲の信者をいれ得るものになってきました。出口王仁三郎を主とした大本教がそういう宗教でありました。／……ちょっと異なりますが、同じような意図で中国には道院紅卍字会というものが生れ、大本教と手を組んで世の中の立て直しを計っていたのでありました。確に、仏教だキリスト教だ神道だと分れて、神のみ心を分断していたのでは、どうし

ても、宗教界が相対的になるのは必定です。現代に当然綜合的宗教が生れなければならなくなっていたのです。／……その点で綜合的宗教が生れ出たことは特筆すべきことなのであります。

［『白光』1968 年 10 月号、10 頁］

現代に受け入れられる綜合的宗教とは、神道・仏教・キリスト教・心（神）霊主義などを盛り込んだ宗教だと、五井は言っている。その綜合的宗教の代表が出口王仁三郎らが率いた大本教であった、と述べた。大本（教）からは、のちに多くの教団が派生したが、それらの教団にも上記の特長がみられ、五井の白光真宏会もそうした教団といえる。その事実について、五井自身も以下のように自覚していた。

現代における宗教は、学問知識のない人にでも知識階級の人にでも同時にわかる教〔え〕でなければならぬと思うのです。南無阿弥陀仏に抵抗を感じる人でも、世界人類が平和でありますように、の祈り言になら抵抗を感じません。私の宗教は、神道も仏教もキリスト教もすべてを包含した綜合宗教です。そして、個人と人類が同時に救われる道というところに特長があります。

［『白光』1968 年 10 月号、14 頁］

現代の信仰者の誰もが賛同できる「綜合宗教」として、五井は白光真宏会を位置づけた。とくに、「世界平和の祈り」の言葉は、現代人の誰もがとなえられ、となえる個人も人類も同時に救われるのだ、とその普遍性に五井は自信をもっていたようである。

また、五井は、1968（昭和 43）年 5 月、東京の大学生たちを前におこなった講話の中で、五井自身の戦争体験を語りながら、平和の大切さを次のように語った。

……戦争中のことを皆さんは知らないだろうけれど、学生はみんな動員され、工場へ行き、軍隊へとられた。私〔五井〕はその時日立の工場で厚生、音楽の仕事をしていた。私は本来は音楽家なのです。学生が徴募されてくる。勉強など少しもできない。みなさんは幸せです。なんの心配もない。空襲の心配もない。兵隊にとられる心配もない。……／戦争があっては困ります。あるいは戦争がなくても、軍隊へもっていかれたら自由が縛られ、今日のような楽な生活はとてもできないでしょう。……／……

あなた方が安穏に学問をしていられることは本当に有難い、幸せなこと。笑いごとではありません。

〔『白光』1968 年 12 月号、17-18 頁〕

五井は、敗戦前、日立製作所亀有工場（軍需工場）で働いていた時、たくさんの少年少女工が懸命に現場で働く姿を見、工場が東京なので何度も空襲を経験した。第二次世界大戦末期の当時は、いつ爆弾が当たって死ぬかもしれず、この昭和 43（1968）年頃のように学問のできる環境ではなかった。それに、五井は東京・下町の子だくさんの家に育ち、兄や弟（五郎）を戦争で亡くし〔兄と弟は、外国の土地で亡くなった〕、五井が 13 歳のとき学校をやめ丁稚奉公に出て苦学した、という背景もあった。だから、戦争の悲惨さ、平和の有り難さを五井は身にしみて感じていて、それで上記のような発言となったわけである。

昭和 43（1968）年の当時は、学生運動が盛んで、学生の暴力行動が社会に報道されていた。そうした実態をふまえて、五井は大学生を前に次のようにも語っている。

……全学連〔全日本学生自治会総連合〕のように何かといえばデモで角材をふりまわすのがいいのか、……／それをアメリカでもフランスでも日本でも、全学連のように暴力をふるう。警官も学生も同じ人間です。同じ人間同じ民族がなぐりあってなんになる。そういうことで平和になりっこない。

〔『白光』1968 年 12 月号、19 頁〕

このように、五井は、学生運動にかぎらず、すべての闘争・暴力に反対し、暴力を手段にして平和はならない、という。暴力は、その行為以前に想い（の〝波〟）が汚れているから、そうした「想念波動」では不調和をうむだけ、平和にはマイナスとなる、との五井の宗教的信念がそこにはあった。そして、五井は、「世界人類が平和でありますように、日本が平和でありますように」という祈りの言葉を学生にすすめた〔『白光』1968 年 12 月号、19 頁、等、参照〕。

この頃には、前に五井が対談したジャン・エルベール博士の著書の英語版 *SHINTO: The Fountainhead of Japan* 〔フランス語版から英語版が作られ、英語版（1967 年発行）にはエルベール博士が五井から聞き取った話も掲載されている〕の外国人読者から白光真宏会に問い合わせがあったり、在日米軍の神父〔従軍神父。その人はフランシスコ会のレンク神

父〔『白光』1969 年 2 月号、48 頁、参照〕が毎月 1 回白光真宏会にお浄めに来たり、国際的団体から勲章授章〔コメンダドール授章〕の知らせを受けるなどしていた。外国人にも五井の「祈り」の運動が理解されてきていたことから、五井はさらに海外へ教えを普及する考えを、五井の誕生記念祝賀大会での講演で以下のように述べている。

> ……それで私はこれから日本だけではなくて、外国へもどんどん普及しようと思っている。やがてはアメリカにもヨーロッパにも行かなければならないでしょう。行かなきゃならないんではなくて、向こうからきっときて下さいというにきまっているんです。そうなったら私もゆくつもりでおります。
>
> 〔『白光』1969 年 1 月号、20 頁〕

白光真宏会の「祈り」の活動を海外にも広めていく意思が五井によって語られた。

また、五井は当時の日本人一般の心情をがんがみて、以下のように述べている。

> ……自分たちの心の中に常に不平不満や争いの想いを持ち、国のことより先ず自分のことだけを考え、自分の生活を護ることに汲々としていて、国の運命のことなど、めったに考えない。……／私〔五井〕が常に考え、実行していることは、先ず自己の心の中から、戦争になる原因の争いの想いを無くすこと、すべてのものごとに対する不平不満を無くすことです。……常に心の中を世界人類の完全平和達成の想いで一杯にしておくことが必要なのです。……それを最も強く高めあげたのが世界人類が平和でありますようにからはじまる、世界平和の祈りなのであります。
>
> 〔『白光』1969 年 6 月号、16 頁〕

上のように、従来からの一貫した五井の自説が語られている。つまり、各人の心の「想い」を一番の問題とし、争い・不平不満の想いをなくすこと、まず各人が自己の心の中を平和にすることを求めた。そして、そうした想いになるための方法が、世界平和の祈りをとなえることだと五井は言う。

当時の日本政府首脳部へ向けても、五井は自分の考えを次のように述べた。

> 現在の国際情勢では、どちらを向いても危険性のないことはありません。どちらを

向いても危険性はあるのです。……／……／平和憲法を変えぬなら変えぬように、日本は平和憲法を持つ唯一の国であることを、何事にかけても表面に出して、米国とでもソ連とでも中共とでも話合って、その点にかけては一歩も退かぬ、という気位を持たねば、後の交渉全部がなめられてしまうことになります。また平和憲法に変える個所があるなら、その変える個所をはっきり国民に明示して、国民の与(ママ)論〔世論〕に問うてみたらいかがなのです。／……／……保守党の評判が極端に悪くなって、国民が左翼化してゆくことが、日本にとっても世界にとっても、一番の悲劇であるのです。……／国民だとて馬鹿ではないのですから、どちらを取るかという瀬戸際になれば、保守派の政策を取る人が多いと思います。……

〔『白光』1969 年 6 月号、17-18 頁〕

上記の言葉は、当時の日本政府首脳つまり保守派（自民党議員）に向けて語っている言葉である。この頃には、政治家や財界人、文化人などと五井が面談することは増えていた。そして当時は、ソ連など共産諸国の脅威が高まり、左翼の運動がはげしくなっていた時期だった。

五井は平和憲法を重視していたから、日本国政府首脳には、平和憲法を表面に出して東西の大国とも交渉してほしいと考えていたのだろう。そして、当時の時局を五井は考えて、日本が共産主義化する事態よりも、それまでの保守派政権のほうに期待をかけていたようである。

ところで、五井はしばしば、会員にむけて「神への全託」を説く。〝全託〟という教えは、彼の教理において要となっているが、その教えの元となった戦時中の体験について、五井は以下のように語っている。

……私〔五井〕なども若い頃、なんとかして、人類のために役立ちたいと思っていました。そして戦争中ですが、軍需工場〔日立製作所亀有工場〕に入った。そして、工場防衛の事実上の指導者になって、敵機が来ても、三万の工場員全部を防空壕に入るよう命令して、最後に工場長と自己〔五井〕の身の安全を計るようにしていました。全員の無事を計らなければ、自己の安全は計れない。そういう立場に立たされて、はじめて、自己の生命を捨て切ることを自(おの)ずと体得した。この体験は後の宗教の霊的修業に、随分助けになりました。自己の生命を先ず捨て切る。こういうことが、人間に

勇気を湧き立たせる、第一の要義ではないかと、私〔五井〕は自分の体験で悟ったのです。これは、後に神の声を聞くようになり、「私の生命を神様におかえしします から、どうぞ私の生命を人類のためにお使い下さい」と祈りつづけ、「汝の生命は貰った、覚悟はよいか」と神の声を聞いた時、即座に、「どうぞお使い下さい」と答えられたのも、その頃の体験の賜（たまもの）だったと思います。

〔『白光』1970 年 3 月号、9 頁〕

戦時中、工場の従業員たちの命をまもるために、五井は自己の生命を先ず捨て切った。そういう行動（や気持ち）が人間に勇気を沸き立たせる、と五井は自身の体験から悟ったという。戦後、五井が宗教の道に入るときにも、彼は神に自分の生命を捧げ、ゆだねることにした。自分の生命を神に捧げるとは、〝全託〟と同義である。このように、戦時中の「自己の生命を捨て切る」体験があったから、のちに宗教者（宗教家）として〝全託〔生命を含め、すべてを神にゆだねること〕〟という教えを説くことにつながったともいえるだろう。

昭和 45（1970）年 4 月から五井は、娘の昌美とともにアメリカに赴く。ここでは、英語習得の問題や今後の海外普及への意識が高まったようである。当時の五井は、喘息のような状態で、かなり体調が悪かったが、機関誌に「五井先生アメリカだより」として、以下のような文章〔米国ハノーバーで書いたもの〕を寄せている。

宇宙子科学の進展のためには、どうしてもマスターしなければならぬ英語を修得するための昌美にとっては本命の地〔ハノーバー〕に来たわけである。／……／毎日少しずつの来客に面会しているのだが、何しろ英語でのやりとりなので、高木さんが私の代りに大雄弁をふるってくれて大助かり、みんな私の考えに共鳴してくれて、少しずつでも祈りによる平和運動を米国にひろげてゆきたいといっていた。……／……中でもサンガー氏という英国人は、……私の老子〔の話〕に深い興味を寄せ、高木さんに手伝って、老子講義〔五井昌久『老子講義』白光真宏会出版本部、1963 年〕の英訳をしていてくれるのだが、この人と話していると日本人のものの考え方、言葉の使い方と欧米人の考え方、話し方のいちじるしい違いが発見出来て、今後、私たちが世界的立場で働くための、大きな参考になった。

〔『白光』1970 年 6 月号、25 頁〕

上記の文から、五井は〔初めて〕アメリカに行って実際に欧米人らと語り合うなかで、白光真宏会が研究している「宇宙子科学」や「祈りによる世界平和運動」をさらに進めるためには、英語を身につけることが大事と考えていたことがわかる。

そして、「今後、私たちが世界的立場で働くため」との五井の言葉にも、彼が白光真宏会の平和運動を国際化していくビジョンを持っていたことがうかがえよう。

1970（昭和 45）年 4 月にアメリカを旅してみて、五井は次のような見通しを語った。

> アメリカでも世界平和の祈りを祈るようにして来ましたが、やがてアメリカでも世界平和の祈りがさかんになってくる。日本にもさかんになってくる。ほうぼうでさかんになってくるでしょう。……その中心はやっぱり日本だということを、私はアメリカへ行ってきて本当に感じました。
>
> ［『白光』1970 年 7 月号、31 頁］

「祈り」の運動は世界にひろがる、と五井はかんがえ、その活動の中心的役割は日本が担うのだ、と五井は述べている。この「中心は日本に」という五井の言葉の背景には、アメリカは多国籍、多様な人たちが一緒に住んでおり、一つにまとめる難しさがある反面、日本は経済的にも学力や精神的にも比較的めぐまれた状態で安定している、との感覚を五井がもっていたことがあった、といえる［『白光』1970 年 7 月号、22-31 頁、参照］。

また、武力をもってにらみをきかせている国家（アメリカ、ソ連、中共など）とは異なる日本の立場として、戦後の「平和憲法」の趣旨でいくことを、五井は説いた。彼は、以下のように述べている。

> ですからあくまで日本はこの平和憲法の意にそった生き方をしなければならぬので、いちいち他国の顔色をみては、平和憲法を各国並みの憲法に改めようなどという気持を起こさぬことが大事なのです。日本はあく迄軍国主義には反対なのだ、平和憲法を護りぬくのだ、という根本精神を堅持して、各国にもその真意を了解させる運動をつづけることが必要なのです。
>
> ［『白光』1970 年 8 月号、13 頁］

五井は、「平和憲法」に修正を加えたいという世論もあるのを承知のうえで、この「平和憲法」を護りぬくという根本精神を堅持すべき、との意見をもっていた。

この頃には、白光真宏会は、諸宗教による平和会議にも参加するようになり、1970（昭和 45）年 10 月の世界宗教者平和会議（於：京都）に五井は出席した。この会議の事務当局の要望により提出した原稿から、五井の提言がわかる。以下に、一部引用する。

> ……まず、神仏のみ心の愛であることを信ずる宗教者の方々から実行してゆくことをお願いしたいのであります。まず世界の宗教者の、世界平和達成の第一段階の目標として「世界人類が平和でありますように」「May Peace prevail on earth」という誰にでも納得できる素朴な言葉を定め、この言葉を、宗教者全員の祈り言として、実践していったらどうかと思うのです。／……／この祈り言を、各宗派の祈り言や唱え言は勿論そのままでよいのですから、その根本として、素朴な心に立ちかえって、心を揃えてやってゆく時、枝葉での考えの相違は種々ありましょうが、世界平和を祈るというところにおいては、全員一致するわけで、この祈り言の中で、お互いの心が溶け合い、大光明波動となって、各界をリードしてゆくことになります。／……どうぞ、このたびの世界宗教者平和会議を意義あらしめるために、この世界平和の祈りを、取り上げて下さい。全員の目標を一つにするために是非是非お願い致します。
> ［『白光』1970 年 11 月号、7 頁］

以上のように世界の宗教指導者へアピールし、宗派の違いこえて、一緒に世界平和の祈りをやろう、と五井は呼びかけた。この五井のアピールに対する、当時の宗教界（同会議に出席していた宗教指導者たち）の反応は、あまり肯定的ではなかったらしい［筆者による関係者への聞き取り］。

上記の世界宗教者平和会議（於：京都）に出席して、五井が感じたことを、機関誌の巻頭言で五井は次のように記している。

> ……先日の宗教者世界平和会議〔第 1 回世界宗教者平和会議（WCRP Ⅰ）〕の人々ではないが、宗教者そのものが、この重大なる祈り心というものをわかっていないのである。実に困ったものである。／宗教者が、社会や国家の圧迫された民衆を救うというのも、勿論結構なことだが、……現象的経済問題はその場、その場の一時的現象に

しか過ぎない。……／……そこで、世界平和の合言葉として「世界人類が平和でありますように」という、祈り言葉に、世界平和を願う、すべての人々の想いを結集させ、世界平和ということを、日本から外国にむけて働きかけるようにしてゆきたいと思うのである。／……／……宗教者が、世界平和運動の中心に起たねばならぬのであって、経済問題のことは、その道の人々に任せて置いたほうがよいのである。

［『白光』1970 年 12 月号、2-3 頁］

五井は世界宗教者平和会議に参加し、開発をテーマにした研究部会に参加したが、そこでの議論が主に発展途上国への経済援助の問題のみに終始していたことに納得できなかったようである［『白光』1970 年 12 月号、巻頭口絵頁、参照］。開発問題をかんがえる部会であるから、そうした議論になりがちだろうと筆者は思うが、五井は、そうした経済援助の事柄は、その問題を専門に取り組んでいる人たち〔政府、経済界、NGO、NPO などの人たち、だろう〕に任せればいいという。

「低開発国援助の決議す宗教者会議さながら世界経済会議のごと」

「宗教者とては奇怪なり祈りなき発言つづく世界平和会議」

［『白光』1970 年 12 月号、14 頁］

上の五井の歌に詠まれるように、むしろ、宗教者は世界平和を祈ることのほうに力を注ぐべき、と五井は考えた。そして、「世界人類が平和でありますように」という祈りの言葉を、日本で世界で唱えられるようになることを五井は願っていたわけである。五井は、この「会議」に参加して、宗教界には祈りが足りない、と実感したのだろう。

また、当時の戦争にたいする各国の態度について、五井は次のように述べた。

現代の世界中の最大の関心事は、世界を平和にするということでありますし、戦争をするのでさえも、平和のための戦争である、というのであります。平和のための戦争ということは、過去の歴史の繰り返（え）しにすぎませんので、過去の歴史になかった、完全平和を達成するためには、如何なることにおいても戦争はしない、という、世界各国の心構えが必要なのです。けれどもなかなかどうして、自国の平和のための戦争という考〔え〕を各国が捨てようとはしていないのです。

［『白光』1971 年 2 月号、11-12 頁］

五井の理想は、いかなることにおいても戦争はしない、という心構えを各国がもつようになることだった。しかし、現実には、「平和のための戦争」との口実で歴史上、そうした戦争が繰り返されてきている、という。そして、「自国の平和のための戦争」は現在もおこなわれつづけているのが現状である。

戦争は誰も望まず、平和を誰もが望む。そして、1971（昭和 46）年当時も、米ソ冷戦下、宗教家によっても政治論、平和論が語られていた。前にも生長の家・谷口雅春の論にふれたが、あらためて社会を反映した谷口雅春初代総裁の持論とそれに対する五井の見解を見ておこう。五井は、以下のように言う。

……私の主張する平和論は、そうした左にも右にも片寄らぬ、純然たる平和精神で、日本を守り、人類に平和を築きあげようというので、非常に地味に見えながら、実は神のみ心をそのまま世にこの世に現わすための、一大平和運動なのである。

宗教者のうちにも武器をもって共産圏を叩け、と主張している人もある。日本は自由主義陣営であり、共産圏は敵なのである、とこの人ははっきり割りきっている。

日本が共産主義国に侵されたら大変だ、という気持は私にもよくわかるが、だからといって、神の大愛を信ずる宗教者が、軍事力で世界に対そうということが不思議である。……／……真実にこの世界に平和を欲するならば、徹頭徹尾平和精神でゆくべきであり、日本にどうしても軍隊が必要であると思うなら、自分の子供や孫や親族の者を自衛隊に入れたり、防衛大学に入れて率先して範を示さなければいけない。自分たちは常に安全圏にいて、他人の子供たちを軍隊に送りこむ奨励をしていて、てんとして、恥じないような人ではとても本物とはいえない。／……そこで私は徹底した平和論のほうに自分の進む道をおいている。〔五井は〕世界平和達成のためにすでに神に生命を捧げている身である。といっても、もうすでに出来上がっている、自衛隊に文句をつける気など毛頭ないし、そうなったのも自然の成り行きとみている。……ただ偽善的な卑怯（きょう）な生き方をすることだけは止めないと、その人の後生が苦しいものなってしまう。

［『白光』1971 年 3 月号、22-23 頁］

上記引用では、具体名が伏せられているが、五井のそれまでに繰り返し語られた講話内容から「宗教者のうちの、この人」とは、生長の家の谷口雅春を指しているといえる。五井は、谷口が共産圏を適視し日本の軍備増強をもって共産圏に対抗することを叫んでいる、と理解していた。当時の五井としては、軍事評論家などが軍備増強などを言うのはわかるが、平和をめざす宗教家が軍備云々を言うのはおかしい、との考えがあったのだろう。口でそのように言うのならば、行動で例えば親族を国防のために働かせるなどせよ、と五井は辛辣に語っている。五井はすでに出来てしまった自衛隊の存在自体は否定していない。災害救助などで自衛隊は役に立ってくれている、と五井は自衛隊を評価していた。ただし、五井が元所属していた生長の家の総裁・谷口については、その博識などを尊敬しつつも、言行が一致していないとして、上記引用では〝偽善〟〝卑怯〟という強い言葉を記している。

話が前後するが、白光真宏会の「宇宙子科学」というプロジェクトが昭和 37（1962）年頃から本格化したが、この研究の中心には五井と娘の昌美がおり、本活動を推進するには英語力が必要だったそうである。機関誌で五井は、次のように語っている。

> 私の娘〔昌美〕が宇宙子科学の勉強に、どうしても英語の力がかなりついていないと駄目なので、或る英語学校の寮に入って勉強することになったのですが、……
> 〔『白光』1971 年 5 月号、4 頁〕

当時の白光真宏会の活動と連動して、同会幹部〔とくに「宇宙子科学」メンバー〕における英語学習の意識が高まっていた様子である。

1971（昭和 46）年 5 月に、「第 3 回世界連邦平和促進宗教者大会」が曹洞宗大本山・總持寺（神奈川県横浜市鶴見区）で開催され、五井や白光真宏会の会員たちも大勢参加した。しかし、参加した五井たちの感想は、以下のように、あまり彼らの期待したものとはならなかったという。

> 先日、世界連邦の宗教者会議〔第 3 回世界連邦平和促進宗教者大会〕が、鶴見の総持寺でありましたので、私も代表者の一人としてまいりました。代表者間の会議においても、大会においても、宗教の本質である、神仏との接解(ママ)〔接触か〕は少しもなく、ただ単なる肉体人間の立場で、観念論的な希望を述べ合う会になってしまいました。

こういう会でも、世界を平和にしよう、という意識の人たちが一堂に集ったことは、それだけでも大きな意義はあるでしょうが、恐らくしゃべっている人たちも、聞いている人たちも、これではどうにもならないなあ、と心の隅では思っていたことでしょう。私の会〔白光真宏会〕からも平和を熱望する三百人あまり〔200 名あまり〕の人々が参集しましたが、常に私たちの、具体的な祈りを行じている人々ですから、どうにもつまらなくて、もの足りなくて、体のやり場に困却していたようでした。

主催者の人にこんなことをいっては甚だ申し訳ないのだけれど、もっと具体的な生きいきとした、人々の心が真の平和運動に向って熱気が溢（ふ）れてくるような、そんな方向に持ってゆかないと、折角お金をつかって集っても、あまり効果が望めないことになってしまいます。

〔『白光』1971 年 7 月号、12 頁〕

要するに、前年、1970（昭和 45）年に参加した世界宗教者平和会議と同様に、会議で宗教者たちの中から、宗教者が真剣に祈ることや祈りの重要性など、祈りについての話が出なかったことに五井たちはがっかりした、ということである〔『白光』1971 年 7 月号、12-13 頁、参照〕。

そして、別の法話でも、宗教者にとっての祈りの大切さを、「宗教者会議」に出席した経験をふまえて、五井は次のように語った。

今日まで、宗教者は祈りつづけていたけれど、世界はよくならなかった、だから実際行動による世界平和運動より仕方がない、という宗教者もあり、神だの、祈りだのといってたって世界はよくなりっこない、といっている宗教者もあります。しかし、宗教者は誰がなんといおうと、祈りを根底にして行動することがその天命なのですから、その線を崩すことはできません。……／……祈り心というものは、常に継続して持ちつづけていることが必要なのです。或る一定時だけ祈って、後（あと）は祈り心のない唯物論的な生き方をしていて、祈りの効果云々（うんぬん）といったとて、その人は真実の祈りを実行していないのですから、祈りを云々する資格はないのです。／……／こうした祈りによる世界平和運動を基盤にして、各種の運動や行動を起こせばよいので、祈りのない運動では、すぐに対立抗争の渦の中に溺れてしまうのです。

〔『白光』1971 年 12 月号、10 頁・12 頁〕

五井は、宗教者は祈りを基盤しなくてはならないし、一定時だけ（平和などを）祈って、あとは祈りから離れた（唯物的）生活ではいけない、と述べた。彼の提唱する祈りによる世界平和運動では、できるだけ頻繁に世界の平和を祈る。そうした祈りがベースにあった上で、さまざまな実際行動による世界平和運動をすればいい、と五井は主張した。神も祈りもない平和運動ならば、社会主義（共産主義）系の人たちによる平和運動と同じであり、デモなどで参加者たちは対立抗争、闘争の想いとなってしまうだろう、と五井はいう。彼は一貫して、平和運動において、対立や闘争の想いを出すことを戒めていた。

五井の祈りについての態度は、首尾一貫しており、例えば、会員に向けて、五井は以下のように述べている。

> 「平和の祈りなんかして救われるか、平和になるか」といわれたって「そう思うのはあなたの勝手でしょう。私たちは平和になると思って、一生懸命平和の祈り〔「世界平和の祈り」〕をやっています。何もしないより一生県(ママ)〔懸〕命平和を祈り、人類の幸福を祈っているほうがいいじゃないですか。そこで私たちはやっているのです。大勢やっていますよ」とニコニコしていれば、向うはなんだか気持が悪いような、なんだか偉いのかな、と思う。／人の言葉で動かされないようにしなさい。平和の祈り〔「世界平和の祈り」〕が絶対に世界を平和にするんです。平和の祈り以外に世界を平和にするものはありませんよ。
>
> 〔『白光』1971 年 12 月号、20 頁〕

以上のように、五井は、「世界平和の祈り」を唱えることが世界平和につながる、と強い確信を持っていたことが分かる。

宗教者たちによる「平和会議」に参加して、五井が感じたことについて、前述の内容といくらか重なるが、あらためて記しておこう。五井の考えを、以下の聖ヶ丘講話から見てみたい。

> この世の改革にしても、今は宗教家が全部じゃないけども、この世の具体的な方法を講じ、具体的に働かなければいけないっていうんで、いろんな会議を開き、私も〔宗教者の会議に〕出ましたけれども、あんまり具体的な方法、具体的な方法と、この世

の業の波に把われてしまうと唯物論になってしまい、神も仏もなく祈りもなくなっちゃって、行動々々っていうふうに移ってゆく。それでは駄目なんですね。それでは絶対、神の国が現われない。

〔『白光』1972 年 4 月号、18-19 頁〕

五井は、宗教者の平和会議において、具体的な〔経済援助、貧困救済の〕方法や行動のみを話しても「神の国〔世界平和〕」を現わすことは出来ないという。宗教者は、「神・仏・祈り」を根底にして、そこから議論しなければ、世界平和は成らないと信じていた。五井の場合は、その主張が簡単で、「祈り〔「世界人類が平和でありますように」という合言葉〕」によって世界の宗教者が一つになることを願い、これまでにすでに、そのように宗教界にも提言していた。

また、昭和 40 年代半ば頃から、五井昌久は娘・昌美らとともにアメリカなど海外に出かけ、白光真宏会の祈りや教えを外国人に説くようになっていた。その経験から、五井たちの「世界平和の祈り」が海外に普及することに自信を得ていたようである。五井は、日本の白光真宏会会員たちに次のように述べている。

……一人でも多く平和の祈り〔「世界平和の祈り」〕をする人を全世界に拡めようじゃありませんか。／今アメリカにも平和の祈りを祈る人が多勢〔大勢〕できています。ベトナムにもだんだんできるかも知れない。今はまだ少ないけど、今に各国にいっぱいできるようになる。そのさきがけとして、日本中が世界平和の祈り〔でいっぱい〕になるように、どうぞ皆さんお願いいたします。

〔『白光』1973 年 1 月号、18 頁〕

これは東京講演会での五井の話であり、講演のなかで彼がベトナム戦争に言及している関係で、上記の引用文にもベトナムの国名が出てきているとおもわれる。

五井の体調が悪くなっている時期であるが、五井らが海外に出かけるなどして、世界各国に「世界平和の祈り」をする人を増やしていく見通しでいたことがわかる。

当時、世界ではアラブ・イスラエルの間の戦争〔第 4 次中東戦争（1973〈昭和 48〉年 10 月)〕など数々の危機がある中、世界の平和を祈るという行いについて、五井は次のように述べた。

世界平和の祈りなら、どこの宗教団体でも祈っているとおっしゃる方もありますが、よくよくきいて下さい。その方々はいったいどういう気持で世界平和の祈りをしていらっしゃるのでしょう。いつ、どういう祈り方で、世界の平和を祈っていらっしゃるのでしょう。勿論どんな方法でも、祈らぬより祈ったほうがよろしいにきまっております。／……私たちの世界平和の祈りは、朝に夕に、昨日も今日も、歩いていても睡っていても、いついかなる時でも「世界人類が平和でありますように」と何事にも先きがけて祈りつづけている、世界平和の祈りなのです。／……／私たちの祈りは、世界平和の祈り一本です。すべての願望は、この世界平和の祈りの中にあります。

［『白光』1973 年 12 月号、9 頁・11 頁］

上のように、五井は自分たちの「祈り」は、（〝神のみ心〟である世界平和を）四六時中どこでも日々「世界人類が平和でありますように」と祈りつづけている、という。個人、国家、人類がつながっているのだから、個人の平和だけを祈っていてはいけないと五井は考えていた。この「世界平和の祈り」で押していくのが五井の一貫した方法だった［『白光』1973 年 12 月号、11-12 頁、参照］。

そして 1974（昭和 49）年 5 月には、インドで核実験が行われた。この事態をうけて、五井は以下のように述べている。

……先日の核爆発の実験は、〔インド政府は〕核の平和利用のためといっておりますが、平和利用のためなら、実験してみる必要はないのであります。／インドが核をもったということは、日本の右傾の人々にとっては、日本も持たねば、というそういう気持を強めてゆく、ということになりかねないのであります。／日本は絶対に核兵器をもってはなりません。お金だけ使って、これはなんにもならぬ、マイナスの面だけ出てくることだからです。核をもつからには、地球滅亡覚悟で、持たねばならぬのですから、そんなことなら、そんなものを持たずに、それで滅びるなら、それも運命だと割りきって、すっぱり武力と縁をきったほうがよいのです。

［『白光』1974 年 7 月号、9 頁］

核兵器は言うまでもなく、日本政府は、武力と縁をきるべき、というのがこの頃までの五

井の一貫した考えだった。そのため、核兵器をもたないために日本が滅びるなら、それも「運命」とおもえばいい、と五井は割り切っていた。この発言の背景には、前にも述べたが、肉体が死んでも後の世界（「霊界」）が存在し「霊」として生き続ける、との五井の信念があった。

◆五井の見解の要点（昭和 40 年代）

米国軍によるベトナム北爆がつづくなか、そうした武力行使（「北爆」）は、〝神意〟に反する、と五井はかんがえた。そして、この頃までの五井は、表立ったところでは、武力や「軍備」を否定する立場をしめしていた。

白光真宏会は、「新宗連」に加盟し、五井は「世界宗教者平和会議（於・京都）」や世界連邦運動関係の会議にも参加した。しかし、そこで議論されていた内容が、世界の貧困国救済のための経済援助などが主だったといい、真正面から「祈り」についての議論がなされなかったことに五井は失望したという。こうした世界の宗教者たちの会議への出席を機に、よりいっそう「（世界平和の）祈り」を主とした自分たち（白光真宏会会員を中心とする人たち）の運動の推進が必要、と五井は考えたようである。

冷戦下、戦争・紛争・核実験など世界情勢は緊張がつづき、いつ大国同士による大戦争が起こってもおかしくないとの危機感が五井にはあった。そうした中、五井は初めてアメリカなどに行き、海外に滞在する体験を得た。そこで、今後とくに英語（学習）の必要を感じたという。それで、実際、五井自身や彼の側近、娘（昌美）らは、英語を学んだ。そして、娘・昌美の米国語学留学など、白光真宏会の主要メンバーが外国に出かける機会も増えていった。

こうした動きの理由として、一つには「宇宙子科学」という白光真宏会の独特なプロジェクトの遂行のために英語が必要、とされていたことがある。「宇宙子科学」の研究を進めるためには、英語の習得が欠かせないとの認識が五井たちにはあった。

また、世界平和のためには、五井提唱の「世界平和の祈り」を世界じゅうに広める必要がある、との彼の考えから、白光真宏会会員たちの手によって「祈りのリーフレット」（日本語版、外国語版）などが国内外で大量に配布される運動へと展開していった［本論文の第 1 章、等、参照］。

2-3　昭和 50 年代（1975-1980）の五井の発言

昭和 50 年代の五井は、病状が重いため昱修庵の一室にこもっていた。五井は自分の体の不調の理由について、〝人類の業〟を身に引き受けて浄めているから、と述べた。彼は、戦争や天変地変が起こるのを大難から小難に変えていく、そうしたことを自身の役目とおもっていたようである。そうした五井の考え方は、以下の文章からも見てとれるだろう。

> ……私の場合はお役目ですから、たくさん来るわけです。それをズーッと〔30 歳ぐらいから〕やってきて、もう大分なれましたよ。痰にも、息苦しさにもなれたし、頭痛にもなれたし、眠れないのにもなれたし、いろんな痛みがいろいろ変化してくるけれど、ああこの痛むことによって人類がそれだけ浄まっているんだ。私が痛むことによって、未然に災害が防げるならこんないいことはない、と喜んでいます。
> 〔『白光』1975 年 2 月号、22 頁〕

五井は、自分がイエス・キリストのような大犠牲者に選ばれている、とかんがえていたようである。地球の〝業想念〟をみずからの体を通して浄めて、各地での戦争・災害を小さくしていると、五井は白光真宏会の会員たちに語っていた〔『白光』1975 年 2 月号、22 頁、参照〕。

祈りによって平和を、という考えは、五井が戦後まもなく宗教家として立った頃から在ったようである。五井は、次のように言う。

> 日本を救うものは、主義運動ではなくて、平和の心そのものなのである。平和をつくる根本は、神のみ心にあるのだから、私は祈りによる平和運動をこの三十年来実践し続けているのである。
> 〔『白光』1975 年 6 月号、6 頁〕

五井は、講話などで、〝神のみ心〟という言葉をしばしば用い、それは「神」が（世界人類に）平和であれ、と願っていること、世界（人類）が〝調和〟した状態にあること、を意味する。そうした〝神のみ心〟である平和状態をつくりだすためには、各人が平和をねがうこと、そしてまず、各人が平和の心となること、との主張を五井は戦後まもなくからずっと続けてきたという。

つまり、移り変わる社会情勢のなかにあっても、基本的に五井のこの主張は同じで、一

貫していたといえる。

五井は自分たちの平和運動の特徴を、次のように述べた。

> いろいろな団体が平和運動をやっています。われわれには再軍備賛成もなければ、反対もない。そうした現象界の三次元のものは関係ないのです。それは政治家さんたちにお任せして、われわれに必要なことは何かというと、神さまのみ心をこの世に現わすことだけなのです。神さまのみ心に自分たちがなる。といって、ふつうではなかなかなれないから「神さま有難うございます、神さま有難うございます、世界人類が平和でありますように」という神さまのみ心のひびきに、祈り心を通してこちらが波長を合わせてゆく。それで平和な心になってゆく。そういう平和運動です。／……／われわれの運動は心の運動です。
>
> ［『白光』1975 年 6 月号、18-19 頁］

前にも述べたが、白光真宏会の基本姿勢は政治運動には関わらない、ということである。ただし、当時の五井個人の見解としては、「今、軍備しようなんていっているのは、頭が狂っているとより考えられません。自然に出来た自衛隊はいいでしょう。業の流れで出来てしまったものを、つぶせなどとはいわないのです。」［『白光』1975 年 6 月号、24 頁］と言っている。この頃までの五井は、「軍備」に反対、という見解だった。

要するに、五井たち（白光真宏会）の運動は、祈りによる世界平和運動であって、世界平和の祈りを通して個人と人類の平和をめざす〝心の運動〟だ、と五井はいう。

1975（昭和 50）年当時、日本赤軍のメンバーが外国でテロ事件を起こすなどしていた。そうした情勢をみて、五井は次のように考え、ある提案をした。

> マレーシアのクアラルンプールにおける、赤軍派〔日本赤軍メンバー〕の米〔米国とスウェーデン〕大使館占拠事件〔クアラルンプール事件〕は、世界中に、日本人への不信感をまき散らすことになってしまった。何回かの赤軍派のこうした行動は、世界における日本人の信用を、かなり下落させてしまっているのである。／……／そこで、こうしたことを逆に考えて、日本の世界に対する態度が、世界中から好感をもって迎えられるようなことを、次々としていったら、赤軍派のまき散らした日本人不信感を打ち消してしまう、大きな日本人信頼感が打ちたてられてゆくのではなかろうか。

［『白光』1975 年 10 月号、2 頁］

上記のように五井は考え、貧しい国や被災国への金品の援助、科学技術の指導もいいだろうが、五井は特に、日本人は世界の平和を考えているということを世界中に宣布しよう、と提案したわけである［『白光』1975 年 10 月号、3 頁、参照］。それが、第 1 章にも記した、世界平和の祈りの言葉を国内・海外のいたるところに掲示しようというプランだった。第 1 章の註〔註（49)〕に引用した文と重複するが、今後の白光真宏会の活動展開をみるうえで重要な五井の発言なので、以下に再度、掲示しておこう。

……国家と民間と協力して、各家毎に、世界平和を祈願する言葉を印刷したものを貼附して、日本人のどんな家でも、世界平和を祈っている、ということを自然と外国に知ってもらうと共に、外国にある、政府機関や商社や、各日本人家庭でも、同じような印刷物を貼附してもらう。またそれと同時に、国家の行事や各会社の行事のはじまりには、必ず世界平和祈願の言葉を唱えるようにする、ということを実行すれば、世界中が、日本人の本心が、世界の平和を願い、平安を願うことを中心にしている、ということを知るようになると思うのである。

［『白光』1975 年 10 月号、3 頁］

こうして、日本人は世界の平和を常にねがっている信頼できる国民なのだ、と宣布する白光真宏会の普及活動が、今後さらに推進されていくことになる。そのかたちとしては、「世界人類が平和でありますように　May Peace Prevail on Earth」と印刷された「ピースポール（世界平和祈願柱)」や「ピース・ステッカー」などで、現在も広く知られているであろう。急速に展開したその普及活動の元が、上記の五井の発言にあった。

五井は、〝世界人類が平和でありますように〟という祈りの言葉は、誰でも、どこの教団（団体）の人でも自分たち（それぞれの教団、団体など）の祈りに加えることが出来るものだ、と述べた。白光真宏会専属の祈りではないので、誰でも、どこの団体がやろうと結構なのだから、と言い、世界平和の祈りをすすめている［『白光』1976 年 2 月号、4-5 頁、参照］。

そして、不調和な社会を調和した社会としていくため、（白光真宏会では）政治活動をしないかわりに、祈りの言葉〔「世界平和の祈り」〕を書いたビラなどを広めていこう、

と彼は提言した。それを五井は、次のように言っている。

そのために、みなさん〔白光真宏会の会員たち〕は世界平和の祈りのビラをあちこちに貼って歩くことも必要だと思います。配って歩くことも必要だと思います。これは大変大きな力になると思うのです。これがわれわれ政治などにたずさわらない者の出来る世界平和の運動の一つです。

静かに家庭生活をそのままにしながら、しかも知らないうちに世界平和のために働いているのが〝世界人類が平和でありますように〟という祈りであり、祈り言葉を書いたビラを貼り、本を配り、新聞を配る、その事がそのまま大きな世界平和運動になっているのです。

〔『白光』1976 年 2 月号、6 頁〕

平和からほど遠い世界情勢、社会状況のつづく中、白光真宏会では、世界平和に貢献する運動として、〝世界人類が平和でありますように〟という祈りの言葉を広めることとなった。

そして、社会運動において、右派左派がともに大声で叫んでいる様子をとらえて、五井はそうではない自分たちの運動の特徴について、次のように述べている。

……声高々と、愛国を叫び、革新を叫んでいることよりも、こういう〔思いやりという〕愛の心のひびき〔「波動、波」とも〕が多くなってゆく方が、社会や国家や人類のためになるのかもしれません。／私共は、あえて高々と叫び続けようとは思いません。地道に穏やかに、神と一体になる世界平和の祈りを祈りつづけ、賛同する同志を一人でも多く増してゆきたいと思っているのです。その運動の中には、相手をやっつけようとか、人の団体の切りくずしをしようとかいう争いの想いは少しもありません。

〔『白光』1976 年 8 月号、3 頁〕

くりかえしになるが、愛国・保守〔右派〕か革新〔左派〕か、そのどちらであっても、五井にとって〔相手に向かって〕大声で叫ぶような運動は、争いなど粗雑な「波動」となることを意味する。そうではなく、五井がすすめるやりかたは、心穏やかに世界平和の祈りをとなえつづけることである。〝調和〟を重んじて、だれにも、どの団体にも、争いの想

いをいだかない、そうした平和運動を五井はめざしていたといえよう。

ただし、この頃（1976〈昭和 51〉年 11 月頃）、機関誌（『白光』）における五井の発言のなかに、これまでもっぱら否定していた「兵力」を若干容認する言葉も見られた。当時の日本は、アメリカの助力を得て資本主義側の国として経済的恩恵を受け、戦前にはなかった自由な発言ができ、国民の中から「愛国心」がうすれていた時代だった。そこで五井は、次のように述べた。

> ……日本はご存知のように原爆被害の唯一の国で、その悲惨な状況をまざまざとみせつけられた国です。ですから、当然世界に先がけて原爆反対の運動を強力に押し進め、それにともなう戦争反対の運動を展開してゆく立場に立っているのは勿論当然のことです。……／ただここでむずかしいことは、平和利用に使っている核の力〔原子力（発電）のことか〕をも恐れて、その反対を唱えたり、戦争反対、平和一本で日本は進まなければならないのだからといって、真実自分達の心の中に闘争心や、恐怖心がなくなってもいないのに、周囲がすべて武力で固めている国々に囲まれながら、一切の兵力はいらないのだ、と叫んでいたりするのは、間違っているのです。／……そういう平和の祈りのできる人達ばかりなら、全く一切の武力を持たなくとも、自分たちも国家も傷つくことはないのでありますが、残念ながら、まだ今日の人間の行き方では、とてもそういう理想の形は現われてはまいりません。／そこで、アメリカとの安保条約も必要になり、自衛隊のように、最少限度の守りの兵力も必要になってくるのです。この世のことは、ただ理想主義だけではやってゆけないので、理想と現実とを巧みにまぜ合せて、生きてゆかねばならないのです。
>
> 〔『白光』1976 年 11 月号、10-11 頁〕

上記引用の前半は、日本共産党をはじめとする革新側の主張を指しているのであろう。五井の考えも、原爆反対・戦争反対・平和一本なのだが、闘争・憤懣・恐怖などの「想い」があっては平和にならない、と言う点は革新側と異なる。しかし、五井はこれまで、武力を否定する言説がほとんどであったから、ここで一部「兵力」を容認する発言をしていることは注目できよう。五井の提唱した「世界平和の祈り」を唱える人ばかりになれば、「武力」は無用という。そうなっていない現実をふまえ、安保条約によるアメリカの防衛力、自衛隊という最小限の「兵力」も必要になってくると五井は述べた。そして、この世のこ

とは、「理想と現実とを巧みにまぜ合せて」といい、従来の「武力、兵力」絶対反対の一本やりではない言い方も出てきた。また、上記引用文をみると、1976（昭和 51）年 11 月当時の五井の見解には、「核の平和利用〔原子力発電などのことか〕」を容認する意味合いがうかがえるだろう。

五井の側近・髙橋英雄も、個人誌の中で、

> 五井先生はご自分のことを「私は理想主義者であると同時に、現実主義者です」とおっしゃったのを、何回も聴いています。
>
> 〔『五井先生研究』第 127 号、2014 年 3 月 1 日、29 頁〕

と記している。こうした五井の言葉のように、彼は「理想主義者の態度」と「現実主義者の態度」とを使い分けながら説いていたことがわかる。

さらに、上に述べた「軍備」や安保条約について、五井はあらためて機関誌で、以下のように説明している。

> ……日本の国内では目下、軍備はいらないという組と、軍備をしっかり持たなければいけないという人たちとがありますが、どちらが一体よいのか、これも亦むずかしい問題です。／理想論としては、軍備など当然もたないほうがよいので、現在の自衛隊でさえいらないということになるのですが、現在の日本の置かれた立場からして、もう自衛隊を廃止することはおろか、まともの軍備をしなければならぬようなところにきているのです。……／私は、祈りによる世界平和運動をやり続けておりまして、まず日本が憲法そのままに武力を排除し、やがて世界中の軍備を撤廃させなければならぬと思っているのですが、今日のように、まだ世界平和の祈りに徹している人達の少ない日本が、私の理想通り武力なしで、日本の国策を遂行してゆくことは、とても危険でできないことです。……ですから、一歩退いて最少の軍備ともいうべき現在の自衛隊を承認し、一日も早く自衛隊も安保条約もいらない、平和の祈り〔「世界平和の祈り」〕一念の、日本に仕上げてゆきたいと思っているのです。／そういうことで、私たちは日本を自由主義国でおきたいため、どうしても社会、共産主義の政治体制を善としないのであります。そういう意味で、自衛隊の存在も必要悪といえるのかもしれないのです。

［『白光』1977 年 1 月号、9-11 頁］

五井の理想は、軍備のない平和な状態だが、当時の日本が置かれていた社会状況では最少の「軍備」としての自衛隊をみとめるという。しかし、ゆくゆくは世界平和の祈りを広めて、「軍備」も安保条約も必要ない日本にしたい、と述べた。その頃の共産圏では粛正がおこなわれることがあり、五井の考えとしては日本の自由を守ろうとしている自由主義陣営の政治家たちに協力していく必要を感じていたようである［『白光』1977 年 1 月号、11 頁、参照］。

この頃の五井には、これまで主張してきた平和主義の理想と現実〔当時の世界情勢〕との間で、その考え方に「揺れ」あるいは「譲歩、後退」がみられる。

さらに五井のそうした考え方の変化とかかわる社会背景として、井上［井上「〈解説〉社会の変容と宗教」、井上編『社会の変容と宗教の諸相』、303-338 頁、参照］が、1970 年代半ば～ 1980 年代にかけて「精神世界とナショナリズムへの傾斜」「「揺り戻し」現象」があった、と指摘する見方も考えられよう (4) 。

たしかに、前掲〈解説〉で井上の指摘した 1970 年代半ば、つまり 1975（昭和 50）年には「ナショナリズムへの傾斜」といえる社会の動きがあった。たとえば、「天皇陛下即位 50 年」を記念して、前年（1974〈昭和 49〉年）に結成された「日本を守る会」によって「昭和五十年を祝う国民の集い」（祝賀行事）が挙行されることになった、という。こうした記述からも、当時の社会にあった〝愛国的空気〟の一端がうかがえる［日本を守る会編『昭和史の天皇・日本』、205-206 頁・1-3 頁、参照］。五井が、当時の時代における「ナショナリズムへの傾斜」や〝愛国的空気〟の影響下にあって、現実的「軍備」を考える方向に揺れたいう見方もできるだろう。

また、1977（昭和 52）年 8 月 7 日、「日・ASEAN〔Association of South-East Asian Nations：東南アジア諸国連合〕首脳会議（於・クアラルンプール）」が開かれ、同 8 月「福田ドクトリン」が当時の福田赳夫首相（1905-1995）からフィリピン（マニラ）で表明された。日本の東南アジアに対する 3 つの外交原則をしめしたものである。

1. 〔日本は〕軍事大国にならず東南アジアひいては世界の平和と繁栄に貢献
2. 〔ASEAN 各国との〕心と心の触れあう信頼関係の構築
3. 〔日本は〕ASEAN の連帯と強靭性強化のための努力に協力し、インドシナ諸国と

の相互理解の醸成をはかり東南アジア全域の平和と繁栄に寄与

［日本アセアンセンター https://aseanpedia.asean.or.jp/chronicle/　ASEAN 関連 https://www.asean.or.jp/ja/wp-content/uploads/sites/2/2017/12/1_50-Years-of-ASEAN_ASEANMap20171205.pdf#search=%27asean+1977%27　両サイトとも 2018 年 6 月 23 日最終閲覧］

こうした国際情勢をうけて、五井は機関誌に「立秋〔1977（昭和 52）年の立秋は 8 月 8 日〕や　アセアン重し　日本に」［『白光』1977 年 9 月号、13 頁］という俳句を記した。そして、日本は、アセアンや世界各国にたいして軍事面でなく平和面で貢献することをアピールしていこうと、次月の機関誌において五井は以下のように述べている。

……世界平和の祈りはどうしても世界中に拡がってゆかねばならないので、そういう努力を私共がしなければならないのです。インドやアセアン諸国は、日本の本心を窺（うかが）いながらも、日本の力を頼りにしています。昔のように日本が武力を持ちはしないかと恐れながら、日本の力を借りたいと思っているのです。／そこで日本はあくまで平和一筋の国であることを、それらの国々に徹底して知らせなければ駄目なのです。日本はもうどんなことがあっても武力をもって起つことはない、世界平和をつくりあげることに専念している国である、ということを、政府にばかりまかせておかないで、私共民間人が手をつなぎ協力して、世界中に知らせてゆくことにするのです。

［『白光』1977 年 10 月号、7 頁］

日本は平和主義の国であり、戦前のように武力をもって他国に侵攻することはない、平和一筋の国であることを自分たち民間人によって世界中に知らしていこうと五井は言う。そのために、自分たち（おもに白光真宏会会員たち）がなすべき行動について、五井は次のように述べた。

日本が平和に徹した国であることを、世界中に認識させることは、日本の天命達成のために大事なことでありまして、そのために、世界平和の祈りの宣布が必要なのです。私共はアメリカをはじめ、世界中に祈りのポスターやリーフレットを配って、日本の心を知らせているのであります。多くの日本人がこの真意を知って、積極的に祈りに

よる世界平和運動をやって下さったら、日本の心が世界中に知れ渡る期間が、早まると思います。そういう日本の平和の心が判ると、アジア諸国が安心して日本に協力し、世界平和運動を自信をもってはじめると思います。そういう先がけに、日本を一日も早くさせたいものであります。

［『白光』1977 年 10 月号、8 頁］

五井は、世界中に「祈りのポスター」や「祈りのリーフレット」などを配布し、世界平和の祈りを広く知らせようとした。彼は、それによって、日本が平和に徹した国であることを世界各国に知ってもらおうとねがったわけである。

当時、各種平和団体や国連などにおいて、原水爆実験停止、核兵器縮小を迫っても、大国は相変わらず核実験をし、核兵器増大競争をしていた［『白光』1978 年 9 月号、5 頁、参照］。そうした、平和運動家たちの声が届かない実状のなか、五井はもはや「神」にたよるほかない、と、以下のように述べていた。

……もうここまできますと、肉体人間同志だけの平和運動ではどうにもならぬ、という時代にはっきりなってきているということが誰にでも考えられるのであります。宗教信仰家のすべてが、幼児が母を慕うような気持で、「神様地球人類を救って下さい」という叫びをあげるのです。もう神様以外に地球人類を救って下さる方はいないのだ、自分たち肉体人間だけの力ではどうにもならないのだ、ということを心の底から想うようにするのです。／……／そこで世界中の個人が一つに結ばれるのは、地球世界の平和ということなので、その願いを先ず一つの言葉にして、神仏否定論者はまあ別として、少しでも神様の存在を信ずる人たちは、その言葉を祈り言（ごと）にまで高めあげて、神様に一心こめて願うように訴えてみることにするのです。それを簡単に言いますと、「世界人類が平和でありますように」という言葉になり、神様ありがとうございます、という神への感謝の言葉にもなってくるのであります。

［『白光』1978 年 9 月号、7 頁・9 頁］

五井は、唯物論者も含めて、世界平和の祈りの運動に巻き込もうとしていた。しかし、ここでは、少しでも信仰を持つ人たちは、一つの祈りの言葉「世界人類が平和でありますように、……神様ありがとうございます」にまとまろう、と五井はよびかけた。

彼の「祈りによる世界平和運動」では、もともと「神〔守護霊、守護神、など〕」への信仰・感謝を説いてきたので、五井自身の態度にはなんらの変更はない。ただ、さまざまな平和運動の成果があまり出ていない状況をみて、〝神〟にたのむ、「祈り」の在り方を五井は提案したのだろう。

当時の世論において、〔日本の〕政界・財界のなかにも軍事力をもって日本を守ろうとする人は随分あったという。また、アメリカなどは日本の軍備を強化して守らせようという意向だと五井はみていた［『白光』1979 年 2 月号、12-13 頁、参照］。そうした時代の趨勢のなか、五井は自分たちの平和運動の立場を次のよう整理して明確に語った。

> われわれの平和運動はどういうことを考えているかというと、左翼でもなければ、右翼でもありません。大調和主義です。自衛隊の廃止とか、軍備増強とかいわない。今のあり方は、政府なら政府にまかせておいて、政治にまかせておいて、われわれは、政治とは無関係に、時の流れとは全然関係なく（軍備をすること、裸になることなど）全然別個な次元において、別個な立場において、日本人はすべて平和を欲しているんだ、という熱烈な気持を一つにまとめていって、だんだん、だんだん熱烈な気持の人を増やしていこうという運動なのです。
>
> ［『白光』1979 年 2 月号、14 頁］

このように、五井は政治の次元から離れて、宗教の次元から、日本人は平和を欲している国民であることを「世界平和の祈り」を通して世界中に広めようとした。

ただし、前述のように、現実的には、日米安保の関係性のなかで、世界に「調和」をもたらすべく運動（祈りによる世界平和運動）を五井は進めた。当時の五井の心境が、彼のつくった次の歌にも表れているだろう。

> 「米国の武力日本の和に融けて地球の調和保たむとする」
>
> 「米国としかと手を組み日本の大和の心生かさむぞ今」
>
> ［『白光』1979 年 6 月号、13 頁］

また、当時の時代的状況をみて、「世論」をつくることによって国内外に影響をおよぼすことが出来ると五井は考えていたようである。五井は、以下のように言う。

しかし今日は、世界中の世論を動かせば、世界の運命を動かすことのできる時代ですから、やはり自分たちの力で、世界の世論を動かしてゆく方向に働きかけてゆくことが必要です。その一つが神との一体化の働きによる世界平和の祈りなのであります。
［『白光』1979 年 10 月号、9 頁］

白光真宏会の活動としては、具体的には、〝世界人類が平和でありますように〟という祈りの言葉を書いたポスター・祈願塔・祈願柱・シール・ステッカー・看板などを世界のいたる所に掲示（貼付）あるいは建設することが挙げられよう。「私たちは世界の平和をのぞんでいるのだ」というおもいを「祈り」の言葉の掲示を通して世論としていく、そういう方向に歩むことを五井たち（白光真宏会の会員たち）はその後も示していった。

また、五井は、機関誌のなかで世界情勢について執筆している理由を次のように述べた。

……近頃のように、世界情勢が、常に大きな戦争の危機に臨んでいるような時機なので、世界情勢は誰かさんに任かせておいて、私たちは只消えてゆく姿で世界平和の祈りの説法に明けくれ、行動に終始していればよいのだ、だけでは皆さんの心が強い信念で生きてゆけないような気がして、私もやはり世界情勢をなるべくくわしく皆さんに知らせて、その上で私どもの生き方がどうあるべきかと説いた方がよい、と思い、時折り世界情勢を書いているわけです。
［『白光』1980 年 6 月号、4 頁］

五井のこれまでの説法においては、その結論はほぼ同様に、政治は政治家にまかせて自分たち民間の信仰者は「消えてゆく姿で世界平和の祈り」という教えの実践に専念しよう、と述べていた。ただし、上の引用文によれば、「世界情勢は誰かさんに任かせておいて、」というだけでなく、白光真宏会会員たちの心が強い信念で生きていけるように、との考えから世界情勢を知らせながら説いているのだと五井は言う。

また、日本は世界の平和の中心として立っていくべき、との考えが五井にはあり、「世界平和の祈り」を世界に普及することを以下のように繰り返し説いた。

世界人類が平和でありますように／この一語の祈りこそ、地球世界を真実に平和に

導き出す、光明燦然たる言葉なのです。米ソが何んといおうと、小国が何を叫ぼうと、日本はひたむきに、世界平和の祈りを唱えつづけながら、これを世界の中央に押し出してゆくのです。

［『白光』1980 年 6 月号、10 頁］

五井は、「世界平和の祈り」を世界の中央へ押し出すこと、そして世界じゅうで唱えられるようにしていくことをねがい、一貫して説きつづけた。

すでに、五井の「軍備（武装）」にたいする考えに若干の変化がみられたことについては指摘したが、あらためて五井の以下の詩「早く世界平和の祈りを国中のものに」（一部分、引用）から、彼の自説をみておこう。

世界唯一の平和憲法は／確かに天與のものであり日本の象徴だが／国家の安全を守ってはいけないなどとはどこにも書かれてはいない／世界平和の祈りで／国中が一つの心になってしまえば／武装も軍備もいらないが／祈りも調和理論もない政党〔ここでは社会党をさしている〕の／非武装論など侵略するには最も好都合／……／世界平和の祈りが国中のものになって／どんな侵略の波も入りこむ隙のないような／そんな日本になるまでは／日本も米国に同調して武装をしておく必要があるのだろう／……

［『白光』1980 年 7 月号、12-13 頁］

要するに、五井の考えは、当時の社会党の「非武装中立、日米安保反対も自衛隊の存在もみてみぬふり」［『白光』1980 年 7 月号、12 頁、参照］という態度とは異なる、ということである。五井と社会党の間の最も大きな違いとは、五井たち（白光真宏会の人たち）には「祈り」があり「祈りによる調和」という〝理論〟があるのに対し、社会党にはそれがない、ということになろう。

みずから提唱した「世界平和の祈り」が日本・世界に広まれば、武装（軍備）は要らなくなるが、まだ日本にも十分に「祈り」が浸透していない現状では、日米安保も自衛隊（武装しておくこと）も国家の安全を守るために必要なのであろう、と五井は述べている。

このような五井自身の考えはあるけれども、白光真宏会の会員たちには、五井は別の言い方をしている。つまり、日米安保や自衛隊の容認というようなことは言わなくていい、という。「敵が攻めてきたら？」「軍備は要るのでは？」と問いつめられたら、次のよう

に答えなさい、と五井は白光真宏会会員にたいして言っている。

『そういうことは自分にはよくわからない、私のところは只世界平和を祈っているだけでございます。その他のことはどっちがいいか私どもにはわかりません。私どもがわかることは、みんな人間というものは神さまのみ心においては兄弟姉妹であって、みんな手を取り合わなければいけない、仲良くしなければいけない、ということだけわかっています。だから私どもはその線だけを一生懸命守って、世界人類が平和でありますように、みんなが幸せでありますように、私どもの天命が完うされますように、と祈りつづけ、神さまに感謝しながら生きているのでございますよ』／こういう返辞を皆さまがすればいいわけなのです。

［『白光』1980 年 7 月号、19 頁］

上のように、会員たちには、国防問題をめぐってさまざまな意見が出ている中、神ならぬ身でどっちがいいか知る由(よし)もないもないのだから、わからないのにわかった顔をしないでいい。ひたすら世界平和の祈りをする以外に、私たちは生きる道を知らない、と言えばいい、と五井は語った［『白光』1980 年 7 月号、19 頁、参照］。上記の答えかたは、国防問題をめぐって白光真宏会会員がだれかから問われた際の対処（対応）法を、五井が教示したものである。おそらく、当時において、そのような問いが白光真宏会（会員）に投げかけられていたのだろう。

五井は、機関誌で国際情勢についての自分個人の見解を記したが、「それはそれ」ということなのであろう。白光真宏会の会員たちの実際の現場においては、上記のような対応をすすめ、①「五井自身の場合」と②「一般会員の場合」で、話の〝使い分け〟を行っていた。

その理由として、白光真宏会会員たちには何事も（実践の難しいことはなおさら）「無理をさせない」という考えが五井にあったことが指摘できる。つまり、五井自身は、困難な事も実行するけれども、会員たちにはもっぱら無理のない〝易行〟の道を歩ませようとしていた、といえる。これに関連して、五井は、次のように述べた。

私の教えは決して無理をしてはいけないというんです。無理をすれば必ず反動がある、無理せず世界平和の祈りを根本にして、人のために尽す。どんなに世界情勢が変

ろうと、左派が出ようと右派が出ようと、そんなことは関係なく、われわれは世界平和の祈りの道をまっしぐらに、ひたすら進むだけです。

［『白光』1980 年 7 月号、21 頁］

白光真宏会では、会員はどこに居ても、けっして無理をしないで、ただ世界平和の祈り、ひとすじに行じていくということである。

この頃の五井は、世界情勢をみて、国内では大平総理〔大平正芳（1910-1980、6 月 12 日死去)〕の死去後の選挙で保守側（自民党）が勝ったことに安堵し、米国の武力による日本の擁護に恩義をかんじている、という発言をしている。〔昭和 55（1980）年 6 月 22 日の衆参同日選挙で〕衆参共に革新側（野党）の票が伸びなかったことは、日本にとってはプラスだった、という。五井には、〔日本が〕ソ連のような共産主義になることなく、これまでのように米国と協力関係を保ち自由主義社会でありつづけることをのぞむ、というスタンスがみえる［『白光』1980 年 8 月号、4-10 頁、等、参照］。

そして、「軍備」についても、五井は、教団〔白光真宏会〕設立の当初には言わなかった、やや踏み込んだ、以下のような発言をしている。

私たちは、米国は勿論、ソ連に対しても、敵視する眼をもってはいませんけれど、私たちの世界平和の祈りに応(こた)えて、神々の力が、大国の武力や、天変地変を超える力を出して頂くまでは、普通の常識的な在り方として、我が身や我が国の守りの為に智慧をしぼる必要があるのでして、軍備をも加えた対外政策に真剣な力を尽してゆくべきなのです。

［『白光』1980 年 8 月号、10 頁］

五井の基本姿勢として、世界平和の祈りをとなえつづける、ということは全く変わらないが、現実的に自衛隊のことや一般国民の命を守るための「軍備」にも目を向けないといけない、と語るようになった。五井の場合、自分（彼個人）の生命を守ることとは別に、一般の国民の命は守られなければならない、と考えた。そのために、自衛隊に代表されるような最小限の「軍備」について言及しはじめていた。つまり、①「五井本人のこと」と②「国民一般のこと」、この 2 つを、五井は別に論じており、五井の言説にみられる〝使い分け〟の例として筆者はみている。もっと具体的に言うと、仮に目の前で戦闘が起こった

として、五井自身は「祈り」の中で死んだとしても構わないという。だが、他の人たち（一般国民）の命は守られるように、という〝使い分け〟の考え方が、彼には見られるのである。

◆五井の見解の要点（昭和 50 年代）

相変わらずの冷戦下にあって、五井の主張（見解）に若干変化が出てくる。日本は、米国との同盟関係のおかげで、自由主義の国として、共産主義国では得られない「自由」を手にしていた。

五井は、これまでも政治運動には関わらないと言い、この当時もやはり政治運動はおこなっていない。しかし、彼個人の世界情勢にたいする見解としては、日米安保および自衛隊をみとめる、最小限の「兵力」は必要、との見方を語るようになった。

自衛隊については、当時のような形に自衛隊が出来てしまったものは〝天意〟でもあろうから仕方ない、というように語っていたものの、昭和 50 年代になってからは明確に最小限の「軍備」としての自衛隊をみとめる、と述べた。

1979（昭和 54）年 12 月当時、ソ連のアフガニスタン侵攻〔ソ連軍がアフガニスタンに軍事介入した〕があり、大国ソ連が小国を攻撃するあり様を五井はみていた。そして、機関誌の「法話」のなかで、日本国民の命を守るための最小限の「軍備」として自衛隊を位置づけた。かつては、「軍備」「武装」「武器」「武力」といった言葉を一切否定していた五井であっただけに、機関誌『白光』誌上における昭和 50 年代頃の晩年の彼の発言は、社会党が言う〝非武装〟とは一線を画すものとなった。

ただし、これは五井昌久という宗教家一個人の考えであり、五井のその発言によって白光真宏会会員の行動が変化するものではなかった。五井は、白光真宏会会員にたいし、「〔白光真宏会の信者としては〕政治問題はよくわからない」「自分たち〔白光真宏会会員〕は世界平和の祈りをするだけ」というスタンスでやればよい、と語った。五井が、「ただひたすら、世界平和の祈りをとなえつづけよう」といい、白光真宏会会員たちはそれをつらぬいていた。その白光真宏会会員たちの信仰実践面〔「祈り」をおこなうこと〕においては、ぶれはなかった。

また、1975（昭和 50）年 8 月、日本赤軍のメンバーがマレーシアでテロ事件を起こし、海外の国々において日本のイメージが悪くなってきていた。その後、五井の「法話」での言葉を受けて、瀬木白光真宏会理事長の旗振りのもと、昭和 51（1976）年頃から、〝世

界人類が平和でありますように　May Peace Prevail on Earth〟を合言葉とする「祈りのリーフレット」配布・「祈りのポスター」貼付・「平和祈願柱〔「ピースポール」とも〕」建立などの活動が促された［本論文の第 1 章、等、参照］。

つまり、こうした祈りの言葉の普及を通して、〝日本（人）は世界平和を心からねがっている国（民）なのだ〟、と海外の国々にもアピールする運動が展開されたのだった。

3　おわりに

戦後、昭和 20・30 年代から原水爆禁止の運動が盛んになるなか、そうした社会運動においては、「平和」を叫びながら、核保有国や原水爆実験を行う国々に対して闘争の〝想い〟を発している、と五井はいう。「平和運動」をしている人たちの心が、そのような不調和な〝想い〟である限り、世界が平和になることはない、と彼は述べた。五井は、まず各人の心を平和（平安）にすることが大事だとし、そのために、五井みずからの提唱した「世界平和の祈り」をとなえることを勧めた。

そして、右派（保守）・左派（革新）両側から「平和運動」がみられるが、白光真宏会は、右派でも左派でもない、政治運動には関与しない、との立場であることを表明した。つまり、白光真宏会では、宗教者の立場から、ただひたすら〝世界人類が平和でありますように〟で始まる「世界平和の祈り」を念ずるのみであるという。

安保条約改定が争点となったときには、生長の家・谷口雅春が改定に賛成し日本の軍備増強を主張していることに五井は反論した。白光真宏会・五井は、政治運動に関与しないが、世界情勢については機関誌のなかでしばしば彼の持論を述べていた。その当時の五井は、まったくの「平和主義」であり、〔他人を殺傷する〕武器を持つことや軍備増強などに真っ向から反対の意をあらわしていた。

五井たち（白光真宏会）の平和運動は、「世界平和の祈り」一筋であることが特徴といえる。そこで、昭和 39（1964）年 10 月の東京オリンピックを機に、来日の外国人に「世界平和の祈り」を知ってもらおうと、〝世界人類が平和でありますように〟という祈りの言葉を、英語（“May Peace Prevail on Earth!”）をはじめとして主要な外国語に翻訳・掲示する運動を実施した。

昭和 40 年代には、ベトナムにおいて米軍の北爆〔1965（昭和 40）年 2 月以降〕が始まり、これに対して五井は「米軍の北爆は〝神意〟に反している」と述べた。五井の戦争反対の姿勢は一貫している。当時の五井は、日本国憲法第 9 条の平和主義の精神に沿った考

えを述べていた。そのため、生長の家の谷口雅春総裁が〝憲法を改正して軍備を持ち、その武力でもって相手を叩く〟と主張したことに対して、師（谷口雅春）の考えの矛盾を説いた。

まず、谷口のそのような発言は軍事評論家などからなら理解できるが、宗教家で「敵は無い、光一元」との〝光明思想〟を説いている谷口師が敵をたたくと発言するのは理解できない、と五井は嫌悪感をあらわにした。

そして昭和 45（1970）年 5 月に、五井は初めて海外（米国）に行き、英語を学ぶことが必要と感じる機会となった。これは、たんに英語を勉強したほうがいい、という話ではなく、当時白光真宏会で進めていた「宇宙子科学」という独特の研究プロジェクトにとって、英語力（そして数学・化学など理系の学力）が不可欠となったからだそうである。

そして五井自身、短期間ながら海外に滞在した経験をとおして、〝世界的立場にたって働くこと〟を意識し、世界じゅうに「世界平和の祈り」を広めなければならないとかんがえたのだろう。白光真宏会では、「世界平和の祈り」や五井の法話が英訳されていく流れが出来ていった。そして、五井や白光真宏会の主要メンバー（幹部）、五井の娘・昌美が、「宇宙子科学」の進展および英語習得のため米国に行くことが増えていった。

また、白光真宏会は、昭和 43（1968）年、「新宗連（新日本宗教団体連合会）」に加盟し、昭和 45（1970）年には「（第 1 回）世界宗教者平和会議（於・京都）」に、五井が出席した。他にも、白光真宏会は「世界連邦平和促進宗教者大会」に参加していた。

以上のような世界の宗教者が集う「平和会議」において、特に京都での「世界宗教者平和会議」では、おもいのほか、五井は失望したという。その理由は、「平和会議」の五井が出席した部会では、貧困に苦しむ国々への経済援助のような話が主な議論となり、五井が共に一つになって実践したいとおもっていた「祈り」についてはほとんど議論出来なかったからである。こうした「平和会議」での経験から、他の宗教者（宗教家）たちはともあれ、五井は自分たち〔白光真宏会の理念に賛同する人たち〕だけでも「世界平和の祈り」を実践し、そして順次、世界各国にこの「祈り」を広めていこう、との考えになったようにみえる。

昭和 50（1975）年 8 月に日本赤軍メンバーがマレーシアでテロ事件を起こした際、五井は機関誌上の法話において、日本や日本人が世界から悪いイメージで見られてしまわないよう、世界に向けて平和のメッセージを日本から発信しようと呼びかけた。その五井の言葉が教団（白光真宏会）を動かし、〝世界人類が平和でありますように　May　Peace

Prevail on Earth〟と記した標識〔「祈りのポスター」「ピース・ステッカー」「世界平和祈願柱（ピース・ポール）」など〕を国内外に掲示・貼付あるいは建立する活発な取り組みにつながっていった。この取り組みには、「日本（人）は世界の平和をねがっている国（民）なのだ」と世界の人々に知ってもらおう、というねらいがあった。

五井の「祈りによる世界平和運動」は、ひたすらこの「祈り」をとなえることを通して世界平和の実現を目指すものであり、その〝祈り一念〟の態度は一貫し、五井の生涯にわたって何ら変わることはなかった。

しかし、晩年、例えば昭和 54（1979）年 12 月、ソ連のアフガニスタン侵攻が起こる頃には、機関誌上の五井の法話をみると、前のような「絶対平和主義」的な論調は後退している。「世界平和の祈り」を軸とした「平和主義」ではあるが、国や国民の命を守るための「武力、武装、兵力」も必要、との言葉を五井は述べた。

理想として「世界平和の祈り」が世界じゅうで唱えられるようになれば武装は不要になるが、現実に「世界平和の祈り」がまだ十分に広まっていなかった当時の状態では、日米安保のもと守りのための最小限の「軍備」（自衛隊の力など）が必要である、と五井自身の考えをしめした。

ここで筆者が指摘しておきたいのは、五井の場合、①「自分（五井）自身のこと」と②「他の国民一般のこと」を分けて考えていた、ということである。

例えば、「非暴力、絶対平和主義」の姿勢というものがあるが、これは①の五井自身においては適用できよう。しかし、②の国民一般は無論、白光真宏会会員にはそれ〔「絶対平和主義」の姿勢〕を（無理に）求めてはいない。

また、別の例として、「苦難の解釈」においても、①の五井は自分個人の業は無いが、「人類の業」を浄めるために病患のような症状をその肉体にあらわしている、とした。いっぽう②の他の一般の人々（白光真宏会の会員を含む）は、個人の業を消すために苦難（貧・病・争など）をその身に現わしている、との解釈を五井は示した。

以上のように、五井の教説には①と②において、〝使い分け／ダブルスタンダード（double standard　二重基準）〟がある。

だから、五井が世界情勢をみて、「日米安保や自衛隊の必要性、国民の命を守るための武装」について述べたことが、そのまま白光真宏会会員の行動を規定するものとはなっていない。むしろ、白光真宏会会員には、「政治のことはわからないから関わらない、ただ自分たちは祈るだけだ」という態度をとおすよう五井はもとめている。こうしたところも、

五井の〝使い分け／ダブルスタンダード〟といえよう。

ただし、世界情勢についての五井の〝私見〟と仮に控えめにとらえたとしても、晩年の彼の「軍備」にたいする上記のような考え方の変化は、軽く受け流すべきではないだろう。

五井の「軍備」にたいする考え方の変化にかんして、筆者の見立てを以下に述べておきたい。

第 1 章にあるように、昭和 44（1969）年 6 月、五井昌久らは、明治神宮を参拝し、五井は、甘露寺宮司（1880-1977）と歓談した。同 47（1972）年 6 月にも、五井は、明治神宮・甘露寺宮司の招待で、明治神宮を正式参拝し、御苑の菖蒲を観賞した。のちに、甘露寺宮司から明治神宮の菖蒲を分けてもらい、五井の居室のある昱修庵の庭にその菖蒲は植えられたという。そして、五井は床に伏すことが多かった時期だが、同 49（1974）年 4 月、「日本（にほん）を守る会」結成にあたって、五井はその「百人委員」になっている、とされた。この「日本を守る会」は、のちに〔1981（昭和 56）年結成の「日本（にほん）を守る国民会議」と相提携しつつ、1997（平成 9）年に〕「日本（にっぽん）会議」へと改組〔「発展解消」〕されていく。日本を守る会の発足当時の代表委員 (5) には、五井と交流のあった安岡正篤（1898-1983）や明治神宮神職の名が見られる［成澤宗男ほか『「開戦前夜」のファシズムに抗して』、88-91 頁、参照］。また、同 54（1979）年 7 月、五井は、「日本宗教代表者会議〔JCRR〕（議長：篠田康雄〔1908-1997　1979 年当時、神社本庁総長〕）」より、顧問に推挙されたという。

晩年の五井は体調がきわめて悪く、ほとんど居室の外に出られない状態だったが、以上のように、五井は明治神宮をはじめ神社界の人たちとの交流を大切にしていた。

その頃の五井は、外の会合に出られる状況ではなかったが、これまでの「宗教者会議」などにおいて伝統宗教や保守的な人たちとも交流をもってきた。そうした経緯のなか、五井においても、当時の日本の安全保障など喫緊の社会状況への具体的対応がせまられていたのだろう。五井の思想、信念としては、政治問題に関わらず「祈り」一念であることを一貫して説いたが、抽象的な理念の世界をはなれた現実世界において、それだけでは済まない問題が横たわっていた。それは、例えば、当時のソ連の脅威であり、米軍駐留の問題、自衛隊の存在、などであり、そうした国際情勢や国防について五井もなんらかの見解をしめし立場を表明しなければならなかった、といえる。

五井は、白光真宏会設立当初から「武力」を否定しつづけてきた。しかし、昭和 50 年代の晩年、五井は、ソ連・米国・中国など大国の動向のなかで、周りから〝きれいごと〟とされる抽象論から具体論へ、踏み込んだ意見を述べることになった。そこで、五井の発

言に〝ぶれ〟が出てきた。この〝ぶれ〟とは、それまで五井が主張してきた「あらゆる武力を否定」との立場から、「(国民の）命を守るための武力は容認」との立場に変わったことをさす。

このように五井の見解が変化した背景には、以下の理由が考えられる。

まず、冷戦下の世界情勢において、当時の日本にとって、たしかにソ連の存在が脅威になっていたという現実がある。

しかし、他にも、この頃の五井の論調が変わった背景として、神社関係者や保守的な人たちとの交流も多分に影響があったと筆者にはおもわれる。

もともと五井は、伊勢神宮、明治神宮、熱田神宮、等を参拝するなど神社を崇敬し、明治天皇や昭和天皇を尊敬していたものの、「軍備」には反対だった。しかし、当時の国際情勢は緊迫し、五井の提唱する「世界平和の祈り」が十分に浸透していない状況においては、「兵力」をまったく持たずに日本（国民の命）を守れない、と五井は判断したのであろう。五井の態度（「ダブルスタンダード（二重基準)」）における、当時の世界情勢にたいする彼の「現実的」(あるいは「常識的」）側面、とみることができよう。

こうした考え方を強める背景の一部には、これまで繰り返し述べてきたように、おそらく、明治神宮など神社界の人たちや安岡正篤など保守的な人たちとの交流が、五井に影響を与えていたと考えられる。「神州〔日本〕を断じて護り抜くという不退転の決意」「敬神尊皇愛国の精神」［甘露寺「序」、明治神宮・明治神宮崇敬会編『明治の精神』、1-2 頁］というような考えは、明治神宮宮司だった甘露寺だけでなく、神社界の他の人たちも同様であろうし、五井昌久もまったく共感していたとおもわれる。そして、保守的な人の例である安岡は、従来〔戦後の昭和 30（1955）年ころ〕から、武備について、他国を侵略する用意ではなくて防衛の手段である、と述べている［安岡『日本の運命』、95 頁、参照］。

つまり、こうした有力神社関係者や保守的な人たちとのつきあい・交流のなかで、晩年の五井は、日本の守りに徹した「軍備」についてなど、現実的な対応も考えるようになったのではないか、と筆者は推測している。

註

(1)「世界を結ぶ平和の祈り」との表題。日本を除く 17 の言語（国名）とは、「英語、フランス語、ドイツ語、ロシヤ語、イタリヤ語、中国、朝鮮語、タイ、インドネシア、インド、

アラビヤ語、トルコ、ルーマニヤ、オランダ語、ブルガリア、フィンランド、スペイン語」〔掲載された表記のママ〕[『白光』1964 年 7 月号、77 頁］である。翌月の機関誌上には、17 の言語に加えて、「世界人類が平和でありますように」の訳文として、さらに 4 ヵ国語（「スェーデン語、デンマーク語、チェコスロヴァキア語、ギリシヤ語」〔掲載されている表記のママ〕）が掲載された［『白光』1964 年 8 月号、76-77 頁、参照］。白光誌 1964 年 9 月号に、さらに 1 ヵ国語（ポルトガル語）が追加で掲載され、日本語を入れて計 23 ヵ国語の「祈り」の言葉が一覧となっている［『白光』1964 年 9 月号、76-77 頁、参照］。

(2) 以下、白光誌で紹介された、〔宇佐美氏の作成による〕「祈りによる世界平和運動」趣意書の後半部分を引用して記しておく。

「祈りによる世界平和運動」趣意書

……／われわれは、日本建国の大理想たる、大和の精神、四海同胞の理念に基づき、／〝地球は一つなり〟／〝世界は一家なり〟／のスローガンの下に、大愛の神のみ心を心として、愛と至誠をもって、「世界平和の祈り」を広く世界に普及する、義務と責任を痛感するものである。／天なる哉！　命なる哉！／幸いにも今秋を期して、世紀の祭典といわれる、オリンピック大会が東京で開かれることになった。／まさに、千載一遇の好機といわねばならぬ。／われらは、この天恵の機会を捉え、東京を指して集いくる各国の人々を、／〝世界人類が平和でありますように〟／という、愛と真の「祈り言」をもって「歓迎のことば」として迎え、この祈りを国境を越え、人種を越えて、全人類の合言葉として実践されんことを提唱するものである。／よって本運動は、オリンピック東京大会を迎うるに当り、この趣旨の下に、世界平和の祈りの普及を目的として、実践運動を展開せんとするものである。

運動要領

一、「世界人類が平和でありますように」この合言葉を全世界の人々に普及するためポスター貼布〔貼付〕、リーフレット配布、その他有効適切なる運動を展開する。

二、黙祷をささげる際には、この合言葉を心にとなえることを提唱する。

祈りによる世界平和運動　実行委員会／実行委員長　宇佐美　真／委員　伊藤　顕／甲斐　通右／川合幸之助／熊沢　照元／栗原　安吉／斉藤　秀雄／高橋　英雄／堀田　広三／増田　亘／山崎　茂／（五十音順）

祈りによる世界平和運動に賛同します。／　　署名　　〃

［『白光』1964 年 9 月号、34-35 頁］

このように、会員・宇佐美は、核戦争の危機などの情勢のなか、東京オリンピックを機に「世界人類が平和でありますように」という祈りの言葉を東京に来るあらゆる国の人たちに普及しよう、と署名を呼びかける文をつくった。この頃は、「世界平和の祈り」を海外の人たちに知らせようとする動きが白光真宏会内で活発になってきていた。

(3)「……／まして、敗戦という、しかも原爆の世界唯一の被爆国として、平和憲法を生みなした日本であるのに、何故、徹底した平和国としての日本の立場を、内外に宣布出来ないのでしょう。／平和国として徹底したなら、すべてをその方針にもとづいて行ってゆくべきなのに、他国の心をうかがっては、日本の行き方を定めてゆく、というような弱い心で、どうして世界平和の中心国となり得るでしょう。」［『白光』1966 年 12 月号、9 頁］と、「平和国」として徹底しない日本政府の態度を五井は批判した。

(4) 井上順孝「〈解説〉社会の変容と宗教――どこに軋みを感じたのか？」、井上順孝編『リーディングス　戦後日本の思想水脈　6　社会の変容と宗教の諸相』岩波書店、2016 年、303-338 頁、参照。この書で指摘された「ナショナリズムへの傾斜」、「揺り戻し」という現象であるが、筆者にはもう少し前の「明治維新 100 年＝ 1968（昭和 43）年」頃にもうかがえるようにおもえる［明治神宮崇敬会編『明治の精神』、1-4 頁、6-7 頁、207-208 頁、等、参照］。

(5) 成澤宗男「日本会議のルーツと国家神道」（2015 年）によれば、「日本を守る会」発足時の代表委員は以下のとおり〔肩書きは当時のもの〕だという。

「朝比奈宗源（臨済宗円覚寺派管長）／小倉霊現（おぐられいげん）（念法真教〔念法眞教〕教壇（ママ）〔教団〕燈主〔開祖〕／篠田康雄（神社本庁総長）／関口トミノ（仏所護念会教団会長〔佛所護念会教団二代会長〕）／谷口雅春（生長の家総裁）／塙瑞比古（はなわみずひこ）（笠間稲荷神社宮司）／安岡正篤（全国師友協会会長〔設立者〕）／岩本勝俊（曹洞宗管長）／金子日威（日蓮宗管長）／清水谷恭順（浅草寺貫首）／伊藤（ママ）巽〔伊達巽〕（明治神宮宮司）／蓮沼門三（はすぬまもんぞう）（修養団主幹〔創立者〕）／広池〔廣池〕千太郎（モラロジー研究所所長）／山岡荘八（作家）」

［成澤宗男ほか『開戦前夜」のファシズムに抗して』、89-90 頁］

第 5 章　五井昌久の教理にみる「影響関係」＝②「世界平和の祈り」の〝ロジック〟
――五井昌久の平和運動を支える理念の分析

1　はじめに

平和運動というと、「戦争反対」をアピールする行進、「原水爆禁止」大会や各種「平和会議」の開催、反核デモ、非戦の主張、「平和」をもとめる署名活動など、アクティブなものが目につく。いっぽう、祈りは一見アクティブではない。

祈りは諸宗教に見られるものであるが、本節では日本の新宗教教団、特に白光真宏会[(1)]教祖・五井昌久（1916-1980）が提唱した「世界平和の祈り」[(2)]に焦点を当てる。なぜなら、その祈りは、五井の思想および実践の根幹であり、世界の諸宗教の平和運動の中にあっても、独特な位置を占めると考えるからである。どこが独特な点なのか、次節より順次、五井の「祈り」の背景思想を提示し明らかにしていきたい。

あらかじめ要点をしめすならば、五井の「祈り」は、一定の時間や場所において行う「平和デモ」などのような〝限定的な、外的な実践行〟というよりは〝無限定な、内的な実践行〟である、と言える。時間や場所や人を問わず、「いつでも・どこでも・だれでも、世界平和の想い一つで行える平和運動」という点は、他の教団に見られない白光真宏会（五井）の独自性といえよう。

もっと明確に言うと、これまで白光真宏会が推進してきた「祈りによる世界平和運動」は、「祈り」をおこなう人が同会の信奉者〔会員〕であるか、そうでないかを問わない。一教団〔白光真宏会〕のみに限定されるものではなく、この「祈りによる世界平和運動」の趣旨に賛同する人はだれでも参加〔実践〕できるとしたのが、その特徴である[(3)]。

そして、「なぜ、〝祈ること〟が〝平和運動〟とつながるのか」という、「祈り」と「平和運動」をつなぐ架橋の「思想」について、本章をとおして解明しようとおもう。

なお、筆者は本章を執筆するにあたり、平和運動や祈りに関連する先行研究の一部として、藤井・森［1971］、古我［1992］、木村［2008］、大谷［2012］、棚次［2012］、永岡［2013］、四戸［2015］、等の論文・記事を閲覧した[(4)]。

しかしながら、前掲の先行研究では、五井昌久の『世界平和の祈り』による平和運動の背景にある他教団の思想との関係性は論述されてこなかった。そこで本章で筆者は、五井の「祈り」と「平和運動（世界平和）」の架橋において、他教団・団体（心霊研究グループや大本）の思想が影響していることを考察していく。そして、他教団・団体の思想との関係性を明らかにすることで、白光真宏会・五井の「祈りによる世界平和運動」の〝ロジック（教理）〟やその特徴を浮き彫りにしたいと考えている。

それでは、以下の次節からさっそく、五井の「祈りによる世界平和運動」の思想（考え方）に流入しているであろう個別の思想を文献より示し、その関係性を論じていこう。

はじめに、五井と近代スピリチュアリズム思想との関係をみておく。

2　五井の「祈り」とスピリチュアリズム思想との〝関係〟

戦後から数年の間に五井は、自叙伝『天と地をつなぐ者』（1955 年、初版本）の中で、

> 私は其の頃迄に種々の行者や霊媒に会ひ、様々な霊現象を見たり、生長の家の本や、外国の翻訳本によつて、心霊に関する智識はかなりもつてゐるつもりでゐた……
> ［五井『天と地をつなぐ者』、94-95 頁］

と記しているように、内外のスピリチュアリズム思想から一定量の知識を得ていた。それゆえ、五井は「心霊知識」にもとづく用語を自らの教えの中で、しばしば使っている。その例が、「神界」「霊界」「幽界」「肉体界」という世界観を表す言葉である。これらの 4 つの「界」については、五井の主著『神と人間』において、五井みずから図を描いて説明している［五井『神と人間』、16 頁、参照］。

また、前の章でもすこしふれたが、「心霊」に関する多くの翻訳本を手がけた浅野和三郎（1874-1937）は、自著『神靈主義』（1934 年）のなかで、4 つの「界」について次のように記していた。

> 四大界―人間の自我表現の機關が四大別されるやうに、人間の置かるゝ環境も矢張り之を四大別し得るやうである。
> 卽ち（一）物質界、（二）幽界、（三）靈界、（四）神界である。
> ［淺野『神靈主義』、15 頁］

このように、五井と浅野は、同様の語を用いて 4 つの「界」に言及した。浅野の示す「物質界」と五井の「肉体界」は同じ意味である。浅野は、西洋の心霊研究の成果をふまえて「動かすべからざる結論」「私の述る所は例によりて各種各様の靈的調査の綜合であつて、私一個の私見ではない」［淺野『神靈主義』、15 頁］として、前出の「四大界」を記している。

なお、上記引用文中、「人間の自我表現の機關が四大別」とあるのは、浅野いわく「肉體」「幽體」「靈體」「本體」に大別し得る、ということである［浅野『神靈主義』、9 頁、参照］。これらは前述した浅野の「物質界」「幽界」「靈界」「神界」の「界」と対応する。そして五井も同じく、「肉体」「幽体」「霊体」「本体〔本心、実相、直霊とも〕」［五井『神と人間』、16 頁、等、参照］と言い、同様に各界との対応を説いている。

さて、ここで、近代スピリチュアリズムでいう「波動（バイブレーション）」説について述べたい。五井は「波動〔五井は、波動を言い換えて波長、波、振動、ひびき、等とも言う〕」という言葉をしばしば用いるが、先行して浅野もこれに言及していた。これまで述べた 4 つの「界」や 4 つの「體（媒體）」とともに、「バイブレーション」につき、浅野は次のように記した。

> 小宇宙である人間と、これをとり捲く大宇宙とが、かく同一組織でゞきてる（ママ）〔ゞきてゐる〕以上若しわれわれが適當なる方法を講じさへすれば、相互の間にそれぞれ交通感應も出來るといふもので、精神統一の狙ひ所も畢竟その點に存するのである。卽ち人間が慾望に司配さるゝ塲合は、その肉體を以て物質界に通じ、感情に司配される（ママ）〔さるゝ〕塲合は、その幽體を以て幽界に通じ、理性に司配される（ママ）〔さるゝ〕塲合は、その靈體を以て靈界に通じ、叡智に司配される（ママ）〔さるゝ〕塲合はその本體を以て神界に通ずるので、丁度無線電信電話の塲合と同じく、大體バイブレエションの原理に基くものであらうと信ぜられる。
>
> ［浅野『神靈主義』、32 頁］

ここで浅野は、「バイブレエション」の質（内容）について述べた。つまり、上記の『神靈主義』において浅野は、人間の内面の質を「慾望」（＝物質界）→「感情」（＝幽界）→「理性」（＝靈界）→「叡智」（＝神界）という順に段階的に説明し、後者ほど質的に高度な〔高い〕世界に通ずる、としている。それは、「想念」のバイブレーションの差異が、通じる世界を分ける、ということを意味する。そして浅野は、『神靈主義』のなかで西洋の「心霊」関連書 (5) を引き合いに出し、「思念」に波があり振動を有するとの説に、まったく同意していた［浅野『神靈主義』、32-33 頁、参照］。

また浅野は、英国のアーサー・フィンドレー（1883-1964）の原著 *The Unfolding Universe* を抄訳し、その訳書『新時代と新信仰』（2014 年再刊、初版 1937 年）の中で、次のよう

にフィンドレーの文を翻訳・紹介している。

……『靈（スピリツト)』『靈界（スピリツト　ワアルド)』等の言葉は、何やらこれ等のものに手を觸れ難き實體的、抽象的の感じを與へ勝ちだが、實はわれわれ人間、又われわれ人間の住む世界が實體的であると同様、これ等のものは皆實體的なのである。相違するのはたゞ波動（ヴアイブレイシヨン）の數のみである。

［フインドレー『新時代と新信仰』（淺野譯)、14 頁］

上のように、近代スピリチュアリズムについて著述をのこしたフィンドレーの「波動／振動（バイブレーション)」説を、浅野も採っていた。浅野らスピリチュアリスト（神霊〈心霊〉主義者）たちは、物理学等近代科学の知見を援用するような形で「霊界（幽界)」との交通可能性を主張した。

また、前出のフィンドレーは、

……死後の人間は、物質的振動を感識し得なくなり、物質界に亜ぐ幽界の振動のみを感識することになる。幽界の次にも、又その次にも別個の振動區域があり、一界又一界と順次に新經驗を積み、……

［フインドレー『新時代と新信仰』（淺野譯)、174 頁］

と書いたが、浅野もフィンドレーと見解を同じくしていた。

そして、もういっぽうの五井は、「(想念）波動」に関して、『(小冊子）世界平和の祈りの運動精神』（2005 年）の中で次のように記している。

想念波動の伝わりということは、音波や電波や光波によってテレビやラジオやテレフォンで、お互いの声を聞き、他国の人の姿をみることができるという科学の原理と同じなのです。……

その波動は、争いに充ちたものもあり、妬みに充ちたものもあり、病苦、貧苦に充ちたものもあり、恨みや怒りに充ちたものもあります。またそうした暗い汚れた想念波動でない、明るい愛に充ちた光明そのものの波動もあるのであります。

［五井『(小冊子）世界平和の祈りの運動精神』、6 頁］

浅野が無線電信電話を例にしたのと同様、五井もテレビやラジオやテレフォンを例に「波動」の伝わりを説明している。また、浅野が「波動」の質を、慾望→感情→理性→叡智へと段階的に述べたのと同じように、五井も妬み・病苦・貧苦・恨み・怒りといった暗い汚れた想念波動→明るい愛に充ちた光明そのものの波動へ、と「波動」の段階について述べている。

そして五井は、「想念波動」の重大性を強調し、結論的に、

> 想念波動を浄化しきらない限り、世界は絶対に平和になることはない、ということです。そして、世界が平和にならない以上は、個人の平安はあり得ないということです。……そして、この想念波動が、愛や善意の光明波動であれば、地球人の多くの人々は、その光明波動によって、知らぬ間に浄められているわけなのです。……
> 戦争が嫌な人は、先ず自己の想念を、平和な調和したものにしておくことを心がけなければいけません。
> ［五井『（小冊子）世界平和の祈りの運動精神』、10-13 頁］

と述べた。つまり、五井によれば、それは個人個人の「想念波動」を愛・善意・平和・調和といった「光明波動〔明るいポジティブな想い〕」に切り替えていくことであり、そのための方法が『世界平和の祈り』をとなえることだという。そして、白光真宏会・五井の教理の上では、この「祈り」を通して高い「波動」の「界（神界）」とつながり、そこから〔地球の〕「想念波動」を浄化して世界に平和をもたらす、とされる。

以上のように、浅野らが主張したスピリチュアリズム思想と五井の思想には相通ずる面が確認出来るのである。

3　五井の「祈り」と「大本系」のある思想との〝関係〟

すでに前の章でも述べたが、白光真宏会は、先行研究において「大本系教団系統図」の中に位置付けられており［井上ほか編『新宗教事典』、75 頁、井上ほか編『新宗教教団・人物事典』、（巻頭）ｘｘｘ頁、参照］、その〝源〟である大本をはじめ、他の同系教団と思想において共通する面を有している。

そこで本節において筆者が注目したのは、「大本系」の新宗教教団のなかにみられる「移

写(しゃ)」という考え方（思想）である。大本では、「現界は、霊界の移写」と言う。

大本の教祖[6]の一人、出口王仁三郎（1871-1948）の著作『霊の礎』（1997 年）には、以下のように記されている。

> しかしながら現実界も精霊界も、外面より見ればほとんど相似しているものである。なン(ママ)となれば、現実界の一切は精霊界の移写なるをもってである。
>
> ［出口『霊の礎』、21 頁、出口『霊界物語　第 17 巻』（愛善世界社）、291 頁］

引用中の「現実界」とは現界と同義である。「精霊界」は、別名「中界」あるいは「天の八衢」あるいは「六道の辻」などと王仁三郎は述べ、これらは同じところ〔「あの世」の階層〕を指しているという［出口『霊の礎』、1 頁、参照］。王仁三郎は、「精霊界」は、いわゆる天国と地獄の中間に位置するとし、「人の死後ただちに到るべき境域にしていわゆる中有である。」［出口『霊の礎』、2 頁］と説明した。

そして、「現界」は「霊界」（「精霊界」）の「移写〔コピー（copy）の意〕」である、というのである。「現実界」と「精霊界」が「ほとんど相似している」とするところは、大本系「霊界」思想の特徴であろう。

出口王仁三郎『霊の礎』には、

> 高天原の天界には、地上の世界と同様に住所や家屋があって、天人が生活していることは、地上の生活における人間の生活と相似ているのである。……地の世界の人間は、霊界の事物にもまた自然界同様であるということを会得することができぬからである。……地上の現界を霊界の移写だということを自覚せないから、……
>
> ［出口『霊の礎』、65-66 頁］

とある。王仁三郎は、「地上の現界は霊界の移写だ」とする思想を語った。これは、大本の〝霊主体従〟という考え方と密接に関係し、順次その意味合いを論じたい。

〝霊主体従〟につき、出口王仁三郎『霊の礎』には、以下のような記述が見られる。

> ……すなわち霊主体従の法則によって活動するから、人をして人たらしむる所以である。……人の肉体は、人間の家または容器といっても可いものである。人の肉体にし

て、すなわち精霊の活動機関にして、自己の本体たる精霊が有するところの諸々の想念と、諸多の情動に相応じて、……

［出口『霊の礎』、80-81 頁］

ここにおいて、王仁三郎は、人を「霊」と「肉」とに分けて見、「霊」の方に重きをおく考え方が述べられている。大本・王仁三郎の価値観では、より大事なのは「霊」のほうであり、人の肉体は「(精) 霊の活動機関」「容器」にすぎない、とする。このようにして、王仁三郎は、「自己の本体」である「(精) 霊が主」であり「肉体は従」、「霊主体従（の法則)」という思想を述べた。

これは、「霊界」が主であり、「現界〔別の呼称として、肉体界、自然界、形体界ともいわれる〕」は従、と位置付ける考えと連動している、といえる。

以上のことを、王仁三郎はあらためて『霊の礎』(出口王仁三郎『霊界物語　第 21 巻（如意宝珠、申の巻)』) で次のように述べた。

霊界は想念の世界であって、無限に広大なる精霊世界である。現実世界はすべて神霊世界の移写であり、また縮図である。霊界の真象をうつしたのが、現界、すなわち自然界である。ゆえに現界を称してウツシ世というのである。

たとえば一万三千尺の大富士山をわずか二寸四方くらいの写真にうつしたようなもので、その写真がいわゆる現界すなわちウツシ世である。……すべて現実界の事物は、いずれも神霊界の移写であるからである。……すべて神霊は情動想念の世界なるがゆえに……すべて世界は霊界が主で現界すなわち形体界が従である。いっさい万事が霊主体従的に組織されてある……

［出口『霊の礎』、112-114 頁、出口『霊界物語　第 21 巻』(愛善世界社)、3-4 頁］

王仁三郎のもちいた言葉に若干の言い換えはあるが、主意は同じである。「現実世界は神霊世界の移写であり、縮図である」との言葉は、「現界は霊界の移写」と同義である。つまり、「霊主体従」のルールにそって、「霊」の世界が元あるいはまず先に在って（＝霊主)、「体」の世界は元の「霊」の世界のかたちに従って写ったもの（＝体従)、と理解できよう。

ここでもう一つ注目したいのは、「霊界は想念の世界」とあるように、「想念」を主と

する見方である。これについては、白光真宏会の五井も同様であり、詳しくは後述する。なお、前に引用した『霊の礎』の文は、王仁三郎の『霊界物語』(7) から抜粋されたものである。

他にも、例えば『霊界物語』(愛善世界社版) (8)から「移写」「霊主体従」の記述をさらに抽出するならば、

> 松岡神使は男子(をのこ)に一礼し、
> 神使『此此は名に負ふ、高天原(たかあまはら)の移写と聞こえたる高熊山の岩窟にて候(さふらふ)、……汝は此処(ここ)に現世(うつしよ)の粗(あら)き衣(きぬ)を脱ぎ、……』
> と云ふかと見れば、……
> ［出口『霊界物語　第 19 巻』(愛善世界社)、15 頁］

> ……故に人は神の子、神の宮といふのである。地上は凡て天国の移写であるから、……
> ［出口『霊界物語　第 19 巻』(愛善世界社)、296 頁、出口『霊の礎』、33-34 頁］

> この物語は、現、幽、神、三界を一貫し、過去と現在 未来を透徹したるが故に、……須(すべか)らく現実界を従とし、神霊界を主として御熟読あらば、幾分か其真相を摑む事が出来るであらうと思ひます。……
> ［出口『霊界物語　第 21 巻』(愛善世界社)、4 頁］

> 此聖言(せいげん)は、愛と信との全く滅亡したる有様を、お示しになつたのでせう。今日の現界は、自然界の太陽や月は天空に輝き渡つて居りますが、太陽に比すべき愛と、月に比すべき信と星に比すべき善と真(しん)との知識を亡ぼして居ますから、天国の移写たる現実界も今日の如く乱れ果てたのです。……
> ［出口『霊界物語　第 47 巻』(愛善世界社)、198 頁］

などの箇所が挙げられよう。このように、『霊界物語』では霊を主とし、体を従とする世界観が大本の王仁三郎によって繰り返し述べられ、彼は「霊なる世界」の有りようが「肉体の住むこの世界」に写し出されるというのである。

ちなみに、第二次世界大戦の敗戦前後から五井が思想的影響を受けた「大本系」の教団・世界救世教でも、同様の〝霊主体従〟の考え方が見られる。例えば、『天国の礎　宗教下』（1996 年）において、

> そうして一切は霊が主で、体が従であるのが万有の法則である以上、現界に発生するすべては最初霊界に発生し、それが現界に移写するのである。
> ［世界救世教教典編纂委員会編『天国の礎　宗教下』、385 頁］

> ……一切は霊界で先に起こるというのは真実である。つまり霊主体従の法則によって、霊界の方が一足先に浄められそれが現界へ移写されるのである。
> ［世界救世教教典編纂委員会編『天国の礎　宗教下』、388 頁］

と世界救世教の岡田茂吉（1882-1955）は、大本の出口王仁三郎と同様の教えを述べている。なぜ、岡田が王仁三郎と同様の教えを述べているのか。その理由は、岡田茂吉がみずからの教団を立ち上げる前、大本の熱心な信徒であったために、教祖・王仁三郎の説いた〝霊主体従〟思想を岡田が受容していたから、といえよう。

また、大本の三代教主補・出口日出麿（ひでまる）（1897-1991）の『信仰叢話』（1978 年増補改訂版、初版は 1935 年）によると、

> この現界は俗に現世（うつしよ）と申しまして、霊界が映るところであります。眼には見えない世界を投影している。……
> 現世（うつしよ）というのは霊界を映しているものであり、……悪いほうが映ると悪いほうにゆき、いい霊界がうつれば良いほうへ良いほうへと持ってゆかれるものである。
> ［出口『信仰叢話』、120-121 頁］

といった説明がなされてある。

出口王仁三郎・岡田茂吉・出口日出麿が述べた上記のような思想は、同じく〝大本系教団群〟の 1 つである白光真宏会の五井昌久にも受け継がれている。五井の主著『神と人間』で彼は、以下のように記している。

人間は靈が主であり、肉體が從である、と言ふ思ひに入つた人、これは同じ階段〔天國への階段〕を二歩三歩昇った人々である。
［五井『神と人間』、5 頁］

形あるもの、それは形なきものの影である。
［五井『神と人間』、9 頁］

守護靈は靈界、幽界、肉體界と三界を通して働ける者なので、幽界に於て、出來つゝある運命、或はすでに出來あがつて、時間の經過につれて自然に肉體界（現界）の運命として現はれやうとする惡想念の結果（因果）を、あらゆる手段をもつて、其の人間の運命として現はれぬやうに修正してゆく。
［五井『神と人間』、43 頁］

……この現界を、現世（うつしよ）、と言ふのは寫世（うつしよ）、靈界から寫し出されてゐる、と言ふ意味の言葉であるのだ。
［五井『神と人間』、97-98 頁］

このように、白光真宏会の五井もその教理において、〝靈主體從〟という考え方、「霊」なる世界が「現界」に時間を経て現れてくるという思想を説いている。つまり、教団・大本、等で言われるように、白光真宏会の五井も「現界は靈界の移写」との思想を述べたということである。

ここにおいて、前項で言及した「波動」という概念が関係してくる。近代スピリチュアリズムの思想においては、「波動」の数（精妙さ）に応じて「神界」「霊界」「幽界」「現界」が出来ている、ということであった。「現界」の「波動」が最も粗く、次の順で粗いのが「幽界」とされる。そして、五井は、1972（昭和 47）年 5 月 3 日、名古屋での講演で、次のように述べた。

……地球のどこどこに地震が起り、陥没するとか、そういう予言ばかりですね。そういう状態が幽界にはできているんです。幽界に出来ていることはやがて肉体界に現われるわけですよ。現われてからじゃおそい。予言が実現しないうちに、それを修正し

なければいけない。

われわれが世界人類が平和でありますように、と祈っていると、幽界の地震だ津波だ、戦争だというのを、光で掃除して地球界に現われないようにするんです。現われないよう幽界を掃除しちゃおうと、私は毎日毎日汗だくで掃除している……。

［五井『五井昌久全集 1　講演編』、345-346 頁］

つまり、五井の考え方は、「世界人類が平和でありますように……」ととなえる『世界平和の祈り』の「光の波動」で「幽界」の汚れた「波動」を浄めて、「幽界」から「現界（肉体界）」に写ってくる不幸を防ごう、というものであった。

上の五井の考え方においては、近代スピリチュアリズムにおける「波動」の概念と、大本の「移写」の思想が組み合わされている。特に「波動」に関して、五井が提唱する『世界平和の祈り』を用いることで、その「祈り」の調和の「波動」によって「幽界（霊界）」および地上（地球）を浄化し平和をもたらす、とする点は独特といえるだろう。

五井は、「波動」やみずからが提唱した「祈り」について、1969（昭和 44）年 10 月 12 日、東京での講演で、端的に以下のように言っている。

私はよく波動の世界という言葉を使います。想いというのは波動です。この物質も波動です。その波動が汚れている。争いに満ちていることによって、地球界にそれが現われてくるわけです。だから汚れに満ちている、争いに満ちているその〔想いの〕波動を変えればいいわけです。波動を変える、それが世界平和の祈りなんです。

［五井『五井昌久全集 1　講演編』、261 頁］

結局、彼は、結論として、「幽界（あるいは幽体）」と「現界（あるいは肉体）」の汚れた「波動」を浄める方法は『世界平和の祈り』をとなえることだ、というのである。

4　種々の平和運動における白光真宏会の「祈りによる世界平和運動」の位置

平和を希求することは、大多数の宗教教団も賛成するところであろう。そして、それぞれの教団において平和運動が行われている。

新宗教教団の平和運動に着目すると、「軍縮、核廃絶を目指す国際的運動の高まりと深く連動して」［井上「その他の社会活動　概説」、井上ほか編『〔縮刷版〕新宗教事典　本

文篇』、583 頁］、平和運動にかかわる新宗教教団が出てきた、といい、井上・梅津は創価学会・白光真宏会・立正佼成会の 3 教団を例に挙げている。1976（昭和 51）年当時の創価学会は「反戦・反核」を掲げて戦争の悲惨さを訴える展示を行っていた［井上・梅津「平和運動」、井上ほか編『〔縮刷版〕新宗教事典　本文篇』、583-584 頁、参照］。同書（『〔縮刷版〕新宗教事典　本文篇』）で、白光真宏会については、「祈りによる世界平和達成運動」、「世界人類が平和でありますように」と書かれた標識の貼付やピースポール [9] の建立、「平和行進」などが紹介されている。また、同書（『〔縮刷版〕新宗教事典　本文篇』）発刊当時の立正佼成会は社会活動の中で平和運動に最も力を入れていたとされ、その平和運動は①宗教協力運動、②政治浄化運動、③核兵器廃絶・軍縮活動の 3 つを軸としていたという［井上・梅津「平和運動」、井上ほか編『〔縮刷版〕新宗教事典　本文篇』、584 頁、参照］。

他に、先行研究に挙げたロバート・キサラの論文・講演では、日本山妙法寺・創価学会・立正佼成会・松緑神道大和山・修養団捧誠会・白光真宏会、6 教団の平和思想に言及し、デモやストライキといった積極的行動を伴うものや、世界の要人による対話、宗教間対話などが「平和運動」の事例として挙げられている［キサラ、講演「国民的使命としての世界平和建設」、23 頁、参照］。

筆者が資料等から確認する各教団のこれまでの主な「平和運動」は、以下の通りである。

日本山妙法寺の山主・藤井日達（1885-1985）は、ガンジーの非暴力の思想を受け継いで、核廃絶、反核平和を求めてうちわ太鼓を鳴らし「南無妙法蓮華経」と唱えて行進した [10]。日本山妙法寺・藤井の説教からは、「絶対平和主義」の姿勢がうかがえる［藤井『天鼓要文集』、334-335 頁、参照］。

修養団捧誠会では、1952（昭和 27）年より現在も毎日正午、本部ほか神前において「平和のいのり」を行っている、という [11]。また同会では、「悠久世界平和建設運動」を推進し、1959 年（昭和 34）から国内・海外に「神石・和石〔〝平和一神〟〝世界平和〟等の文字を刻んだ石碑〕」を建立する活動をおこなっている［http://www.hoseikai.or.jp/movement/ 2018 年 8 月 7 日最終閲覧、参照］。

創価学会は、『2013 年活動報告』によると、青年部や婦人部が活発であり、「広島・長崎・沖縄の三県平和サミット」の開催や「平和意識調査」の実施、平和を考える各種展示会・講演会・フォーラムなどを開催 [12]。『新宗教事典』によれば、戸田城聖第二代会長が 1957（昭和 32）年に「原水爆禁止宣言」を行い、以後、反戦運動の一環として「反戦出

版」、また国内外の各地で「反戦あるいは反核展」を行ってきたという［井上・梅津「平和運動」、井上ほか編『新宗教事典』、583-584 頁、参照］。創価学会公式サイトにも、「核廃絶」「環境」「人権」などをテーマに、創価学会が取り組んできた平和運動が紹介されている(13)。

立正佼成会は、1970（昭和 45）年の「世界宗教者平和会議（WCRP）」開催に中心的役割を果たし、その後も宗教間の対話・協力に力を入れている。WCRP の開催のほか、「一食（いちじき）を捧げる運動〔1 回の食事を抜いた代金を献金し、その布施（財施）は困難な状況にある人々のために役立てられるという。基本的に、立正佼成会全会員共通実践日は、毎月 1 日・15 日［http://www.ichijiki.org/about/outline/　2018 年 8 月 7 日最終閲覧、参照］〕」、「アフリカへ毛布をおくる運動」、核兵器廃絶軍縮署名運動など多彩な活動を行ってきた［井上ほか編『新宗教教団・人物事典』、313-315 頁、等、参照］。ほかに、「アジア宗教者平和会議（ACRP）」の設立、「国際自由宗教連盟（IARF）」への参加など、宗教者の積極的な交流を進めている(14)。なお、同会の会員が朝夕に読誦する『経典』には、最後の「回向」の末尾に「總じては、一切衆生佛性開顯・世界平和達成等の御守護を賜りまするよう、偏に願い上げ奉る。」の文言が見られる(15)。また、立正佼成会において近年より始めた取り組みとおもわれるが、たとえば「一食を捧げる運動」の実践日などに、「祈りのことば」(16)を唱和しているようである［http://www.ichijiki.org/about/outline/　2018 年 8 月 10 日最終閲覧、参照］。ちなみに、立正佼成会の「第 49 回　青年の日」（2018 年 5 月 20 日）でもこの「祈りの言葉」が掲げられていた［http://www.kosei-kai.or.jp/youthday/　2018 年 8 月 10 日最終閲覧、参照］。

大本は、「宗際活動」として、戦後の「世界の諸宗教との交流」において日本では先駆的な役割を果たしたという。この大本・人類愛善会は、戦後より「世界連邦運動」を推進し、2002（平成 14）年に「第 2 回世界宗教者の祈りとフォーラム」を開催した(17)。ちなみに、1950（昭和 25）年には、大本の聖地（梅松苑（ばいしょうえん））の在る綾部市が日本全国で初めて「世界連邦都市宣言」をし、1952（昭和 27）年には、同じく大本の聖地（天恩郷（てんおんきょう））の在る亀岡市も「世界連邦都市宣言」をした［http://oomoto.or.jp/wp/heiwa/　2018 年 8 月 7 日最終閲覧、参照］。

三五教は、『新宗教事典』によれば、三五教では世界諸宗教との提携という神示が当初よりあったため、1950（昭和 25）年、バハイ教〔19 世紀半ば、現在のイランでバハオラ（＝ミルザ・ホセイン・アリ〈1817-1892〉）によって創始された宗教。「世界平和の達成」

もバハイの教えの一つである〕と提携した、という。そして、1954（昭和 29）年から、三五教の主催による世界宗教会議がたびたび開催された［井上ほか編『新宗教事典』、679 頁、https://www.bahaijp.org/　2018 年 4 月 19 日最終閲覧、参照］。

なお、現在〔2018 年 4 月現在〕の三五教では、信徒有志たちが、愛国的立場から全国各地の神社で国家安泰の祈りを捧げている。例えば、日本の対馬や佐渡島など各地で「国家安泰祈願祭」を執り行っているようである［https://www.ananaikyo.jp/kokkaantai　2018 年 4 月 19 日最終閲覧、参照］。

ただし、三五教を母体として 1961（昭和 36）年に設立された「オイスカ・インターナショナル（The Organization for Industrial, Spiritual and Cultural Advancement-International）」という国際 NGO があり、このオイスカ・インターナショナルの理念は、1969（昭和 44）年に「公益財団法人オイスカ」へと引き継がれている。「オイスカ」は、主にアジア・太平洋地域で農村開発や環境保全活動を展開しているという。

このように、三五教と関係のある組織・オイスカが、人材育成や環境保全などをとおして、貧困地域の生活向上ならびに「国際平和」に具体的な貢献をしている、と見ることもできる［http://www.oisca.org/about/　2018 年 8 月 7 日最終閲覧、参照］。

松緑神道大和山では、1994（平成 6）年に完成した「神集閣」が世界平和祈願のシンボルとして位置付けられている、という。また、「一食を捧げ　一欲を節する運動〔略称「平和一食運動」〕」や「古切手による平和の手紙運動」なども行われてきた［井上ほか編『新宗教教団・人物事典』、109-110 頁、等、参照］。毎月 18 日を「世界平和祈願日」とし前述の通り朝の一食を捧げ、コーヒー・酒などの一欲を節し、それによって出来た金銭を平和のために用いるという活動や、平和のための「チャリティーバザー」、街頭募金なども行っている[18]。松緑神道大和山の平和運動は、具体的な実践活動を重視している点が特徴といえる。

霊波之光では、現在〔2018 年 8 月現在〕、正午 12 時に「世界平和の結合の祈り」[19]をおこなっているという［http://www.rhk.or.jp/public.html　2018 年 8 月 10 日最終閲覧、参照］。

白光真宏会は、本章で主として述べている『世界平和の祈り』を唱えることのほか、「印」や「マンダラ」という方法も実践し、2005（平成 17）年からは、宗教・宗派を超えて共に世界の平和を祈るイベント「SOPP（世界平和交響曲）」を開催している[20]。また、白光真宏会は、昭和 40 年代に「新宗連（新日本宗教団体連合会）」や「世界連邦建設同盟」

に加盟・加入し、「世界宗教者平和会議（WCRP Ⅰ　於・京都）」はじめ、「世界連邦平和促進宗教者大会」などに参加してきた[21]。

ここで例に挙げた教団はごく一部であり、様々な教団においてそれぞれの平和運動が行われている[22]。

本節の最後に、種々の平和運動における白光真宏会（五井）の「祈り」の活動〔「祈りによる世界平和運動」〕を、ひとまず位置付けておきたい。

まず、白光真宏会では「平和行進」といった活動もあったものの、五井の「祈り」による平和運動は、本質的には「静」的かつ「内」的である。具体的な社会活動も若干おこなったが、抽象度の高い実践（「祈り」）が主だった。

白光真宏会の五井当人は、日本山妙法寺・藤井日達ら同様「非暴力」の考えをもっていたが、その「非暴力」は白光真宏会会員の統一行動としてそれが定められていたわけではなく、会員個々に自由度があった。

そして、五井は、いわゆる「デモ」には賛同しなかった。なぜなら、彼はその「デモ」において闘争の〝波動〔想い〕〟が起こることを懸念したからである。白光真宏会では、特に心のありようを注視（重視）し、各個人の内面の平安からはじめることを主張した。

また、近年の白光真宏会の活動をみると、「SOPP（Symphony of Peace Prayers）」という名で世界の諸宗教のリーダーを集めて「祈り」によるイベントをおこなっている。ただ、そうした活動も、規模的には、創価学会や立正佼成会といった大教団には及ばない。

しかし、白光真宏会が、他教団と〝差別化できる点〟を筆者が挙げるとするならば、それは、五井が提唱し推進した「『世界平和の祈り』による平和運動」であろう。そう言い得る理由を以下にしめしていく。

あたり前だが、平和を祈る言葉は各教団により様々である。ところが、そこには、「祈り」の数（種類）が多かったり、「祈り」の文言が難しかったり、「祈り」が長く覚えられない、といった問題が見られる場合がある。

いっぽう、五井が提唱した『世界平和の祈り』は数行のみ〔基本は、5 行〕で、数も 1 つ（1 種類）、言葉も平易なので楽に暗誦出来てしまう、という利点がある。唱題「南無妙法蓮華経」や念仏「南無阿弥陀仏」と同様、五井の「祈り言葉」も頻繁に唱えられている。そこで、他教団の「祈り」と分ける基準として「5W1(2)H」で見てみると、違いがより分かりやすくなるだろう[23]。

例えば、五井の「祈り」の場合、「いつ（When）」→いつでも、「どこで（Where）」→

どこでも、「だれが（Who）」→私が、だれでもが、（人類）みんなが[24]、「なにを（What）」→『世界平和の祈り』を、「なぜ（Why）」→ 世界平和（という目的）のために、「どのように（How）」→ ひたすら、たんたんと、息張らずに、「どのくらい（How　many）」→ できるだけ多く（何回でも）となえること、といえるのである。

このあり方は、「日にちや時間を決めて（修養団捧誠会、立正佼成会、霊波之光、等）」とか、「息張って（日本山妙法寺）」というスタイルではない。白光真宏会の「祈り」の実践（平和運動）は、時や場所を限定せず、目的である「世界人類の平和」のみに集中・特化したものである。ひまさえあれば、いつでも・どこでも、信仰の所属を問わずだれでもが、公（私）の平和のねがって絶えず「世界平和の祈り」の言葉を心の中あるいは声に出して響かせている、というのが特徴である。絶えず祈る内容は、個人の「助けたまえ」という願いよりも公の「世界平和」のほうに重点を置く。

以上から、新宗教教団の「平和運動」における白光真宏会（五井）の「『世界平和の祈り』による世界平和達成運動」は独特なものと位置付けられる。「世界平和」という目的のために白光真宏会（五井）が説いたシンプルな実践〔五井昌久の場合、「世界平和の祈り」のみ〕をみるとき、他の新宗教教団にはほとんど見られない平和実現への方法論を有していると言えよう。

5　おわりに

本章のむすびに、ここまで論じてきたことをまとめたい。先行研究を見たとき、五井が提唱した「祈りによる世界平和運動」を、その背景思想まで掘り下げて考察するような論文は存在しなかった。

そこで、筆者は、五井の『世界平和の祈り』から「世界平和」へ、と結ぶロジックが、①心霊思想（近代スピリチュアリズムの思想）、②教団・大本などにみられる「移写」の思想の 2 点との関連を探ることで見出せるのではないかと見立てて論証を試みたわけである。

これまでに述べてきた通り、五井の「祈りによる世界平和運動」の背景思想に、①②の思想が見られることが分かった。五井は、自身の提唱した『世界平和の祈り』をとなえることが世界平和に到る最善の方法であると主張し続けた。そして、筆者は本章において、なぜ一見「行動」を伴わない観念的な「祈り」の唱和が、どのようなロジックで世界平和に結びつくのかについて、五井の思想をよみ解くかたちで、彼のロジックを明らかにした。

つまり、五井は、白光真宏会を起こす前に浅野和三郎らが紹介した近代スピリチュアリズム思想を熱心に学んでおり、そうした経緯があって、近代スピリチュアリズムで語られる「想い」の「波動（バイブレーション）」を重要視したのだった。「スピリチュアリズム」や五井の思想において、現界（肉体界）に生きる人間個々の「波動」は、「幽界・霊界・神界」にも感応し相通じるものであるとされた。そこで、五井は、地上に生きる人間一人一人の「（想いの）波動」を、より高い世界に通じるとされる精妙な「光明波動」へ転じることを目指した。五井昌久の主張では、各人の想いの「波動」を「光明波動」へと転ずる方法とは『世界平和の祈り』をとなえること、ということであった。

また、いくつかの「大本系」教団において見られる「現界は霊界の移写である」との思想を、五井も同じく有していた。五井の「移写」にかんする思想を教理的に述べると、次のようになる。それは、(1)「霊界（幽界）」とは「想いの波動」の世界である、(2)「肉体界」に近い「霊」の世界（＝「幽界」）の「想念波動」が汚れている、(3) そして、その汚れて不穏な「幽界」の世界が「肉体界（現界）」に写ってくる、というものである。五井によれば、彼が「現世」を「写し世」と述べたように、まずは写ってくる元の世界＝「霊界（幽界）」を浄めなければならず、その「浄め（想念浄化）」の方法が、『世界平和の祈り』をとなえることだとした。五井の場合、この「移写」の考え方にもとづいて、「幽界」から「肉体界」へ汚れた世界・状況〔戦争・不幸などを指す〕が現われてくる前に、『世界平和の祈り』の「光明波動」によって汚れた「幽界」を浄めてしまおう、と説いた。

なお、こうした「移写」の考え方は、さかのぼると、大本の出口王仁三郎が唱えていたため、本章で挙げた岡田茂吉のほかに、大本の元信徒でのちに新宗教教団ひかり教会をおこした岡本天明（1897-1963）も「……霊の山川がマコトぞ、地上はそのマコトの写しであり、……」［岡本『ひふみ新世紀』、99 頁］、「物質界は霊界の移写」［岡本『ひふみ神示』、743 頁］と述べている。先行研究［対馬・津城「大本の影響」、井上ほか編『新宗教事典』、74-80 頁、とくに 75 頁、参照］において「大本系の新宗教教団」に位置付けられている生長の家・谷口雅春（1893-1985）、神道天行居・友清歓真（1888-1952）、三五教・中野與之助（1887-1974）も同様の考えである[25]。

また、各教団を〝実践行〟からみてみると、白光真宏会（・五井）は、『世界平和の祈り』の実践による「霊界」から「現実界」への働きかけを説いた。他方、世界救世教（・岡田）には「浄霊〔手かざし〕[26]」、生長の家（・谷口）には「聖経読誦や神想観〔生長の家独得の座禅的瞑想法〕[27]、各種祈り」等の実践行がある。ここで挙げた、世界

救世教や生長の家の実践行は、〔「病気なおし」、「霊」の障りをとりのぞくこと、など〕主に個人的〔私的〕なことに重点が置かれているのが特徴だろう。

なお、現実世界（「現界」）にたいして「霊的世界」からの働きかけがあるとの考えは、世界救世教・岡田も生長の家・谷口も白光真宏会・五井も同様にみとめている。

また、他の実践行として、世界救世教・岡田なら「祝詞」をあげること、生長の家・谷口なら〝よきコトバ〟のみを発すること、なども挙げられよう。それらの実践行も、たとえば「言霊、波動」という観点からとらえるならば、五井のいう「霊界」から「現実界」への働きかけに類するといえるかもしれない。このように、世界救世教の岡田茂吉や生長の家の谷口雅春からも似たような考えを見出せなくはないが、岡田や谷口の実践行は TPO（時・場所・場合）に制限があり、実践行における重点の置きどころも五井とは異なっている。

つまり、五井が重点を置いた実践行とは、『世界平和の祈り』を〝絶えず〟祈ることであり、『世界平和の祈り』のみ〔1 種類の行〕をひたすらおこなうことであった。岡田は「浄霊」、谷口は「聖経読誦、神想観」に重きが置かれ、岡田・谷口ともに〝個の利益〔病気が治る、等〕〟のほうに力点がありそうである。ここで挙げた岡田と谷口の実践は、「世界平和」を第一の（主たる）目的としたものではなかろう。しかし、五井は、どちらかといえば、個（私）のことよりも公のこと（世界平和）のほうに視点を置いて、TPO かまわず『世界平和の祈り』を絶えず祈ろうという。そして、五井は、教理上の結論（帰結）として、この『世界平和の祈り』の実践行のみで世界平和（個の平安と世界の平和、個人と人類の救い）が実現できるとした。

他の新宗教教団〔とくに大本から派生した教団群〕において、何らかの「霊的」な実践によって「霊界」から「現実界」に働きかけるという考えは、〔「世界平和」へと連結・直結させるもの（実践）がどれだけあるのか今のところ不明だが〕各教団の教義に当たることをとおして、ほかにも見出せる可能性はある。しかし、本章で他教団の「移写」にかかわる〔霊的〕実践をすべて比較・検討するには情報が十全でないため、その解明は今後の課題としたい。

あらためて、まとめに戻ろう。

五井は、とりわけ重視する「想念波動」というものをトータルで〝良い状態〟にもっていくのが「祈り」であるとしたため、いつでも・どこでも・誰でもが、常にこの『世界平和の祈り』の中にあることを勧めた。つまり、重ねていうと、新宗教教団の平和運動にお

いて、五井の「祈りによる世界平和運動」は、個の（自利的な）願いよりは公の（利他的な）世界平和に重点を置き、信仰の所属をこえて誰でもが『世界平和の祈り』をとなえるならばこの平和運動に参加できる、という独特なものである。この白光真宏会・五井の推進した「祈りによる世界平和運動」には、「想い（想念波動）」の光明化によって「霊界・幽界・現界（肉体界）」をまとめて平和にしよう、という考え方がある。こうした五井の主張は、新宗教教団の中でも独特と位置付けられるだろう。

五井の存命時〔～ 1980（昭和 55）年〕に特に推進された「祈りによる世界平和運動」は、他教団のように平和をもとめて具体的な各種催しに取り組むというよりは、いつでも・どこでも・誰でもが参加できる内的な実践行〔世界平和を目的とする『世界平和の祈り』を、ひたすら、となえること〕に特化したものだった。五井は、短文で平易な「祈り」の言葉の提唱を通して、信仰を異にする世界各国の幅広い層の人が「祈りによる世界平和運動」を実践できるようにと意図したのだろう。

以上、本章では、五井の「祈りによる世界平和運動」を支える背景思想について、主に、近代スピリチュアリズム思想の「波動」説、及び大本（系教団）の「移写」の思想から考察した。日本の新宗教研究において、そうした独自性のある平和運動をおこなう新宗教教団・白光真宏会の思想を分析したことは意義のあることだろう。

註

(1) 白光真宏会の基本情報は、本論文の序章を参照されたい。会員数：数万人［会員数は、西園寺昌美『クリエイティング・ザ・フューチャー――未来創造』白光真宏会出版本部、2015 年、44 頁、参照］。会員ではないけれども、同会の祈りの趣旨に賛同し実践している人の数について白光真宏会に E メールで問い合わせたところ「人数は把握できておりません。」との本部スタッフからの回答（2016 年 11 月 3 日受信）であった。人数把握はできていないが、賛同者・実践者共に、国内外を問わず多数いるとのことである。なお、2016 年 5 月に行われた同会行事「SOPP: Symphony of Peace Prayers　世界平和交響曲　～宗教・宗派を超えて、共に世界の平和を祈る～」の開催報告によれば、

「世界中で 100 ヵ国、600 地域以上で同時開催」

と記されている［http://byakko.or.jp/event/sopp/archives/archivessopp2016/ 2016 年 11 月 16 日最終閲覧、参照］。これは、世界同時配信のインターネット中継で同イベントにつながっ

た国・地域の数であり、各地域に大規模な集会が行えるような拠点が存在するわけではない。

そして、「SOPP　2018」では、「世界 28 ヵ国、68 ヵ所以上で、多くの人々が世界の平和を祈り、SOPP にちなんだ集いを開催しました。」[『白光』2018 年 7 月 10 日号、66 頁] と記されている。白光誌（2018 年 7 月 10 日号）に掲載されている、その集いの写真をみると、人数は多くないが、海外各国へも、この「祈り」の運動が広がっている様子がわかる [『白光』2018 年 7 月 10 日号、66-77 頁、参照]。

(2) 五井昌久が提唱した『世界平和の祈り』の文言は、以下の通り。〔　〕内は筆者による補足。「世界人類が平和でありますように／日本〔祖国名〕が平和でありますように／私達の天命が完うされますように／守護霊様ありがとうございます／守護神様ありがとうございます〔最後の 2 行は信仰の所属に配慮して「神様ありがとうございます」などでもいいとも五井は説いた〕」[『白光』2018 年 9 月 10 号、36 頁、等、参照]。

「祈り言葉」の形成過程を、機関誌『白光』から確認すると、『世界平和の祈り』の文言は、会設立の初期〔昭和 29（1954）年頃〕から、現在のものと同じ趣旨のものが出来上がっていた。若干の文字の揺れはあるものの大きな変更は見られず、1956（昭和 31）年には定着し、『白光』誌の翌 1957（昭和 32）年 2 月号では巻頭で「教義」と並べて、『世界平和の祈り』を注釈付きで掲載している。このあたりで、もう現在〔2018 年 9 月現在〕の「完成形」に近い。以後、この定型の祈りの文言は、こんにちにいたるまで、ずっと用いられている。

(3) 本章の注記の中で、五井昌久の「祈りによる世界平和運動」の思想的特徴を、以下に若干、記しておきたい。五井昌久による平和運動は、五井提唱の「世界平和の祈り」をとなえることをとおして推進されるもの、といわれる。五井が、「祈り」を通してめざすのは、まずは「個人（各人）の心の平和」の実現である。その次に「国家（共同体）」、そして「世界全体」へと平和を拡げていこうという。その際、五井が提唱した「世界平和の祈り」をとなえることが重要だと五井は主張した。五井が「祈り」と言う場合、たんに祈ると心がおだやかになる、という意味あいだけではなかった。そこには、浅野和三郎から発し、五井も受容した日本スピリチュアリズムの思想がある。端的にいえば、近代スピリチュアリズムでいう「バイブレーション（波動）」というものを、五井は重視していた。

白光真宏会の教理によれば、五井が提唱した「世界平和の祈り」とは、〝「神界」と

の約束事〟であって、この祈りをすると「自分が救われるとともに、世界人類の光明化、大調和に絶大なる力を発揮する」[『白光』2018 年 9 月 10 日号、36 頁］とされる。五井は、ことさら「想い、想念」の「波動（波、ひびき）」を重視し、想いの「波動」が個人からはじまって「世界人類」すべてにおいて〝調和〟に向かうことを「（世界）平和」とむすびつけた。五井の「祈りによる世界平和運動」は、平和な「波動」をめざすものであるから、目の前の相手を〝敵〟とみとめて対立すること〔＝争いの「波動」を発すること〕を避けた。そして、白光真宏会では、政治的に右派・左派、そのどちらにも身をおかない、という。さらに、同会では、人々の主義主張（信仰、思想、イデオロギーなど）が異なっていてもかまわず、「世界平和の祈り」は誰でも行うことが出来るものだと説いた。五井は、何よりもこの「世界平和の祈り」によってもたらされるという調和の「（想念）波動」が、世界の「波動」を浄め世界平和にみちびくとの信念をもっていたようである。

繰り返すが、五井の「祈りによる世界平和運動」において重要なのは、まず個人〔自分〕の〝波動（想い）〟をコントロールすること〔調和させること〕とされ、五井が提唱した「世界平和の祈り」をくりかえし〔心のなかで〕想い、となえることをとおして、世界が平和になると述べた。五井の教理では、五井昌久と「神界」との〝約束事〟とされる「世界平和の祈り」をとなえることによって、各人の〝波動（想い）〟を「神界」と通ずるような〝調和の波動〟へと変えていけるのだと主張した。

そして、五井昌久自身の平和運動における姿勢としては、晩年期を除いて、武力を持たないこと・非暴力を説き、「絶対平和論（主義）」の立場をとっていた。そして、基本的に、「正義のための戦い」というような「正戦論」もみとめなかった。

しかし、前述（第 4 章）の「社会事象〔世界情勢〕による影響」において、五井の晩年の発言を引いて筆者が指摘したように、その「絶対平和主義」は五井個人に適用されるものであって、一般には最小限の「軍備」を容認した。つまり、彼の「平和主義」の論調が、晩年、変化をみせたわけである。

なお、五井昌久自身は「絶対平和主義」の立場を示しており、武器を持たずに「祈りによる世界平和運動」をしていて殺されるならそれでもよい、とさえ語った。

とはいえ、「（非暴力）絶対平和主義」の実行はとても難しく、五井は白光真宏会会員にそうした行動を強要しなかった。そのため、白光真宏会会員でも、五井昌久同様に「絶対平和主義」を実践する人は少ないことだろう。そこで五井が白光真宏会会員にもとめ

たのは、「絶対平和主義」ではなく、「主義」などかんがえず、ただひたすら「世界平和の祈り」を祈ること、祈り一念の態度のみだったといえる。

さらに、五井が「非暴力の態度をつらぬくことで、場合によってはそれによって死ぬことがあっても覚悟ができている」というようなことを言う背景には、これまでに述べた近代スピリチュアリズムによる「霊界」思想への強い確信があったから、といえよう。もっと言うと、武力をこうむって自分の肉体が死んでも、「霊」としての自己は肉体を脱して「霊的世界〔幽界、霊界、神界をさす〕」で永遠に死ぬことはない〔永遠不滅である〕、といった五井の近代スピリチュアリズムへの信仰〔五井本人は「霊界」を確信している〕があったからである。前述のように、五井昌久は、近代スピリチュアリズムの影響を受け、その思想をおおむね受容していた。

また、五井の平和運動の考え方の特徴として、〝日本から発信する平和運動〟といった視点があった。ある意味、「日本中心的・愛国的」側面があったと見ることもできよう。しかしながら、白光真宏会では愛国的な面を有しながら世界じゅうに平和（の「波動」）を広げるといった国際的な視点も同時に持っており、そうした平和運動のあり方は興味深い点である。五井は、日本を平和運動の発信地（中心点）と考え、世界の平和＝「大調和」の中心的役割を日本が「世界平和の祈り」をとおして果たすべきだ、と主張していた。

そして五井の「祈りによる世界平和運動」の利点は、彼が提唱した「世界平和の祈り」を口（言葉）で唱えなくても、祈りの言葉を心に〝想う〟だけでもいいということにもある。そうであるならば、どこでも・誰にでも実践可能な「平和運動」といえる。五井の「祈りによる世界平和運動」は、誰にでも参加できる平和運動であり、祈りの言葉が短くとなえやすいため、信者・非信者を問わず、多くの人を巻き込む力（素地）を備えていたといえるかもしれない。実際、これまでに、白光真宏会の信者になっていない人たちをも巻き込み、〝世界の平和を第一に考える人〟をつくりだしてきた事実は、平和運動における白光真宏会の十分な功績と言ってよいだろう。

(4) 筆者が参照した先行研究の一部とは、下記の論文等である。藤井日達・森龍吉「非暴力の祈りと実践の八十七年――独自の平和運動に一生を捧げる老師の精神史」（『中央公論』第 86 巻第 10 号、1971 年 7 月）、古我きぬ「神の支配による平和」（『世紀』第 508 号、1992 年 9 月）、木村晶子「アシジの聖フランシスコの「平和の祈り」の由来」（『人間生活学研究』第 15 号、2008 年 3 月）、大谷栄一「1950 年代の京都における宗教者平和運動の展開」

（『社会学部論集』第 54 号、2012 年 3 月）、棚次正和「祈りと平和 Prayer and Peace」（『Studia humana et naturalia』第 46 号、2012 年 12 月）、永岡崇「宗教文化は誰のものか :『大本七十年史』編纂事業をめぐって」（『日本研究』第 47 号、2013 年 3 月）、四戸潤弥「イスラームと祈り」（『礼拝と音楽』第 166 号、2015 年）、等。

(5) 浅野は「（参考書）」として、「Researches in the Phenomena of Spiritualism. By Sir. Wm. Crookes.」［淺野『神霊主義』、33-34 頁］と、英国の物理学者で「心霊研究」を行ったウィリアム・クルックス卿（1832-1919）による本を紹介している。

(6) 大本では、出口なお（1837-1918）を「開祖」、出口王仁三郎を「聖師」と呼び、二大教祖として仰いでいる。

(7) 『霊界物語』は、大本の「二大教典」の一つで、全 81 巻（83 冊）からなる。王仁三郎が高熊山での修行時に「神界」の様子などを見てきて口述・筆録したもの、とされる。「二大教典」のもう一つは、『大本神諭』〔たとえば、『おほもとしんゆ』（天声社版、全 7 巻）、大本祭教院編集・大本教典刊行会発行の『大本神諭』（全 5 集）など〕である。

(8) 出口王仁三郎の『霊界物語』には、天声社版や八幡書店版など、幾つもの版があるが、本章では出口王仁三郎著（霊界物語編纂委員会編）『霊界物語』（第 1-72 巻）、愛善世界社、1992-2010 年の版を参照した。

(9) 「ピースポール」は「世界平和祈願柱」とも言われ、白光真宏会サイトによれば、1976（昭和 51）年から建立活動が始まった、とされる［http://byakko.or.jp/about/history/ 2018 年 9 月 10 日最終閲覧、参照］。「世界人類が平和でありますように」の標語が、日本語や世界各国の言語で記されている。「ピースポール」の形状は、角柱のかたちが一般的である。

(10) 井上ほか編『新宗教教団・人物事典』、561 頁、及び、吉田行典「特集　弟子が語る〈昭和の名僧〉名言集　藤井日達師」『大法輪』2013 年 10 月号、大法輪閣、2013 年 10 月 1 日、112-114 頁、等、参照。

(11) 井上ほか編『新宗教教団・人物事典』、103-104 頁、及び、修養団捧誠会公式サイト http://www.hoseikai.or.jp/　2016 年 10 月 3 日最終閲覧、参照。

(12) 『2013 年活動報告』創価学会広報室、2014 年 2 月 1 日、28-41 頁、参照。

(13) 創価学会公式サイト http://www.sokanet.jp/hbk/index.html　2016 年 10 月 3 日最終閲覧、参照。

(14) 立正佼成会公式サイト http://www.kosei-kai.or.jp/030katsudo/0302/　2016 年 10 月 3 日最終閲覧、参照。

(15)『経典』立正佼成会、1994 年 1 月（改訂版初刷）（初版は 1938 年 4 月）、参照。

（16）立正佼成会の「一食を捧げる運動」において、次の「祈りのことば」を唱和し、黙とうを捧げているという。

「（祈りのことば）／世界が平和になりますように／人のことを思いやる人がふえますように／まず私からやさしくなります　（黙とう）」

［http://www.ichijiki.org/about/outline/　2018 年 8 月 10 日最終閲覧］

(17)大本公式サイト http://www.oomoto.or.jp/japanese/katsudo/peace.html　2016 年 10 月 3 日最終閲覧、参照。また、「第 2 回世界宗教者の祈りとフォーラム」については、http://www.oomoto.or.jp/forum/japane/kovrilo.html　2018 年 9 月 10 日最終閲覧、参照。

(18)松緑神道大和山公式サイト http://www.yamatoyama.jp/sekaiheiwa.html　2018 年 8 月 10 日最終閲覧、参照。

（19）この霊波之光の祈りの実践がいつ始まったのか、筆者には定かにできない。しかし、現在〔2018 年 8 月現在〕、霊波之光では、世界平和実現のために、正午 12 時にはどこにいても「結合の祈り」〔＝「御守護神様、二代様、我等人類救済の道へあゆませ給え」と唱えること〕を捧げる（祈る）という［http://www.rhk.or.jp/faq.html　2018 年 8 月 10 日最終閲覧、参照］。

(20)井上ほか編『新宗教教団・人物事典』、258-259 頁、及び、白光真宏会公式サイト http://byakko.or.jp/about/history/　2016 年 10 月 3 日最終閲覧、等、参照。

（21）本論文の第 1 章に記したように、白光誌によれば、昭和 43（1968）年、白光真宏会は、「新宗連（新日本宗教団体連合会）」に加盟することを表明した。そして同 44（1969）年、五井は「新宗連」の理事に承認されたという。同 45（1970）年には、白光真宏会は、「世界連邦建設同盟〔現在（2018 年 6 月現在）は、世界連邦運動協会と改称〕」に団体として加入した。

同 45（1970）年 10 月、京都で開催された「世界宗教者平和会議〔WCRP Ⅰ〕」に五井も出席した。

また、同 49（1974）年 4 月、五井は、宗教界を中心に結成された「日本を守る会」の「百人委員」になっている、とされる。

そして同 54（1979）年 7 月、五井は、「日本宗教代表者会議〔JCRR〕（議長：篠田康雄〈当時、神社本庁総長〉）」より、顧問に推挙されたそうである［以上、本論文の第 1 章、参照］。

(22) 他の宗派や信仰をもたない人たちにおいても平和運動が展開されているのと同様に、それぞれの日本の新宗教教団においても、「平和」への関心を掲げ、関連する活動を行っている。簡単に新宗教教団の教団名のみ挙げても、「大本系」では大本（・人類愛善会）、松緑神道大和山、白光真宏会、など。単独で広く平和運動を行っている教団に創価学会があり、「新宗連（公益財団法人新日本宗教団体連合会）」加盟教団［「新宗連」サイト http://www.shinshuren.or.jp/orglist.php　2018 年 5 月 16 日最終閲覧、参照］や WCRP（世界宗教者平和会議）日本委員会に役員を出している教団［「WCRP 日本委員会」サイト http://saas01.netcommons.net/wcrp/htdocs/about/?action=common_download_main&upload_id=2193　2018 年 5 月 16 日最終閲覧］は、平和運動への意識が比較的高いといえよう。その代表格が立正佼成会であり、修養団捧誠会、円応教、解脱会、善隣教、パーフェクトリバティー教団、妙智會教団、霊波之光（教会）なども平和活動をしている。また、教派神道を除く WCRP 関連の新宗教教団に、前掲の教団の他では、一燈園、真生会（しんせいかい）、中山身語正宗（なかやましんごしょうしゅう）などが挙げられる。その他にも、「絶対平和主義」の姿勢で活動している日本山妙法寺、エホバの証人、セブンスデー・アドベンチスト教会なども注目できるだろう。

(23) 棚次正和『祈りの人間学――いきいきと生きる』（世界思想社、2009 年）の「第 5 章　祈りの実践」において、「いつ祈るか、どこで祈るか、何を祈るか、いかに祈るか、誰に（何に）祈るか、誰が祈るか、なぜ祈るか」と棚次が分類しているのを、筆者が参考にした。

(24) 「誰が祈るか」に筆者が注目するのは、白光真宏会の「祈り」を考察するうえで大事だからである。例えば、第 1 章で若干ふれたが、五井昌久の〝修行仲間〟だったという波瀬善雄を教祖とする霊波之光でも、世界平和をねがって（正午 12 時に）「結合の祈り〔＝「御守護神様、二代様、我等人類救済の道へあゆませ給え」と唱える〕」などを実践している。しかし、その「祈り」をおこなう人は、霊波之光の信者に限られているであろう。なぜなら、霊波之光の教えのうえでは、入信して「大宇宙神（大神様）、御守護神様〔教祖のこと〕、二代様〔現教主・波瀬敬詞のこと〕」につながっている者だけが〝霊波〟を受けられる、とされるからである。まったく霊波之光の信仰の外にいる者が、その「祈り」の実践者となることは想定されていないとおもわれる。

いっぽう、白光真宏会の「世界平和の祈り」は、白光真宏会の信仰の外にいる、世間一般の人だれでもが、この「祈り」に参加することをすすめている。白光真宏会では、教祖との信仰のつながりがなくても、誰でもが「世界平和の祈り」の言葉をとなえることのほうに重きを置いている。それが、霊波之光と異なる白光真宏会の「祈り」の特徴

といえよう。ここで霊波之光の教団名を出したのは、平和をねがって信仰者による「祈り」の実践をおこなっている一例としてたまたま挙げたものである。むろん、信仰を前提とした「祈り」によって不可思議な力に浴することが出来る、とする宗教教団の教えは他にも見られることだろう［http://www.rhk.or.jp/divineconnect.html　2018 年 5 月 21 日最終閲覧、等、参照］。

(25) 生長の家・谷口雅春は「現象界の出来事は、〝霊の世界〟で先に作られたものの投影」というような説明をしている［谷口『奇蹟を生ずる実相哲学〈生長の家入門講義　上〉』、138 頁、参照］。同じく「大本系教団」の教祖である、神道天行居・友清歓真も「神界を写したのが此の人間界」［友清『しきしま霊界訪問記』、48 頁］という。そして、同じく「大本系教団」の教祖である三五教・中野與之助にあっても、「霊界のことは現界に移写するもの」［中野『霊観した幽界』、65 頁］と述べている。

(26) 世界救世教いづのめ教団公式サイトによれば、「浄霊」とは、手のひらをかざすことで神の光を注いで相手の魂を浄めることをいう。「浄霊」は、病気などの苦しみから解放し、運命を変える〔向上させる〕方法とされる［http://www.izunome.jp/action/johrei/　2016 年 11 月 16 日最終閲覧、参照］。

(27) 生長の家公式サイトによれば、聖経読誦とは、創始者・谷口雅春があらわした聖経『甘露の法雨』や聖経『天使の言葉』などの生長の家の経文を読むこと。神想観とは、瞑目合掌し、神の無限の智慧・愛・生命・供給・悦び・調和が自分のうちに流れ入るさまをじっと心の目で見る行、とされる［http://www.jp.seicho-no-ie.org/faq/10/1002.html　2016 年 11 月 16 日最終閲覧、参照］。

終章　要約と結論

本論文をとじるにあたり、これまでの章で述べてきたことの要約（要点）および明らかにしたことを記し、最後に本論文の結論を述べることにしよう。

1　各章の要約（明らかになったこと）

▼序章

まず、序章で前置きしたように、本論文の目的は、五井昌久という宗教家の平和思想が

どのような影響関係のもと形成され展開されてきたかを明らかにすることにあった。

その〝影響関係を明らかにする〟という問題を解明するため、筆者は、五井が戦後入信（加入）した教団・団体の思想を個別にあたり、それらからの思想的影響を分析した。調査対象とした主な教団・団体は、世界救世教・生長の家・日本心霊科学協会（心霊科学研究会）・千鳥会である。他にも、大本をはじめ大本系教団群など、複数の新宗教教団の教え・実践を参照した。

これまでに白光真宏会や五井昌久にかんする学術研究は少なく、同教団・教祖の思想に真正面から取り組み掘り下げられてはこなかったため、本論文では多くの新しい発見を提示出来たとおもう。

過去の白光誌を中心に、関連する文献（関係者からの聞き取り等を含む）を資料として、丹念に読みこみ（聞きこみ）、分析した成果が本論文である。

以下、本論文の各章において何が新たに明らかとなったのか、各章の要点とともに記述する。

▼第 1 章

まず、第 1 章では、「白光真宏会の教祖・五井昌久の生涯とその活動」を時間軸にそって、五井のライフストーリーや白光真宏会の平和運動の流れがわかるよう、できるだけ詳しく記した。五井の誕生から立教にいたる頃までの半生については、五井昌久『天と地をつなぐもの』（1955 年刊）という彼の自叙伝にある程度書かれている。しかし、白光真宏会立教後から五井の逝去までの後半生については、まとまった形の本として近年まで公刊されてこなかった。それが、〝五井昌久生誕 100 周年〔2016〈平成 28〉年に白光真宏会で五井昌久生誕百年の記念行事がおこなわれた〕〟を機に、五井の側近・髙橋英雄が著者となり五井にかんするエピソードや教えなどをまとめた複数の書籍〔『五井せんせい』(2016 年 10 月刊)、『神のみ実在する』(2017 年 3 月刊)、『神の満ちる星の話』(2017 年 9 月刊)〕が白光真宏会（出版本部）から刊行された。これらの書籍は、髙橋が発行している個人誌に書かれた内容などを編集し、まとめたものである。以上の本のほか、五井の直弟子たちが書いた本など、できる限り多くの資料をもとに、第 1 章の五井の生涯と活動の実際を明らかにした。

なお、わかりやすくするため、筆者のほうで、「戦前期」、「遍歴期」、「草創期」、「成立期」、「展開期」、「闘病期」のように区分した。

この章のボリュームは多いが、その大きな理由は、五井と白光真宏会の情報をぶ厚くす

ることで、のちの研究者の参考になると考えたからである。実際、この章で記した情報は、五井や白光真宏会に関連する研究をする人にとって、基礎情報として参照出来、役立つことだろう。

第 1 章には、五井の生涯において、彼が、いつ、誰と出会って、どういう活動を展開したか、など、これまで関係者以外ほとんど知られていなかった情報を盛り込んでいる。本論文執筆現在〔2018 年現在〕、五井と近しく接した関係者は、日を追って亡くなっていっている。そのため、ちょうど、いまが存命の五井の直弟子〔みな高齢の人たち〕から直接話を聞ける最後の機会だった。そして、そうした人たちの協力があって、彼らの貴重な話を本論文第 1 章にも収録することが出来たのである。

▼第 2 章

第 2 章では、白光真宏会の〝教団系統〟を確認した。先行研究（井上ほか編『新宗教事典』、75 頁、等）で白光真宏会が「大本系」に位置づけられていたように、五井自身も白光真宏会は「大本」から分派していった教団の一つ、と理解していたようである。

第二次世界大戦後、それら「大本系」の諸教団（団体）に、五井は入信（入会）した。彼が入った教団・団体名を挙げると、世界救世教・生長の家・千鳥会・日本心霊科学協会などである。そして、のちに発足した白光真宏会で説いた五井の教えには、上記の教団・団体等からの思想的影響があったことを、筆者は第 2 章で指摘した。

他教団等からの思想的影響にかんして、個別に、要点を述べると次のとおりである。

世界救世教（岡田茂吉）から五井は、「浄化作用」という教えを摂取した。五井は、岡田茂吉がいう〝病気は、「毒素」の排泄作用によって起こる〟との説に共感する。五井は、世界救世教では人間の身体に病気があらわれる原因を、3 つの「毒素」（①先祖からの罪穢れ、②過去世の業の現われ、③薬毒によるもの）から述べているといい、この説を五井は取り込んで、彼の「消えてゆく姿」という教えへと展開していった。

つまり、五井も同様に、人間の身体に現われている病気の症状とは「浄化作用」であり、罪穢れや過去世からの業が〝消えてゆく姿〟である、と説いた。これは、世界救世教（岡田茂吉）から五井が受けた思想的影響といえる。

生長の家（谷口雅春）からは、谷口の著書『生命の實相』（全 20 冊）通読などを通して、人間の死後も「霊魂」が個性をもって存続すること、「人間は神の子、完全円満、光一元」という〝光明思想〟を五井は学んだ。生長の家の信徒時代の五井は、谷口に心酔し、「葛飾信徒会」をつくったり、生長の家地方講師となって谷口の教えを、ほうぼうに宣伝して

回った。そのようにして、五井は、谷口の教説の一部（特に〝光明思想〔人間は神の子・完全円満と、善い面のみを見ていこうとする考え方〕〟）をみずからの「教え」の中にとり込んでいった。すなわち、五井は生長の家（谷口雅春）の思想的影響を受けた、ということである。

千鳥会（萩原真）では、五井は千鳥会会員となり、みずから申し込んで「フーチ（扶乩）」をもらった。そこで「神霊」から示されたというのが、次の言葉である。

「百知不及一真実行　誠実真行勝万理識」

［五井『天と地をつなぐ者』、92 頁］

第 1 章で記したように、五井は貧しかったこともあり、高等小学校 1 年を終わって学校をやめ、働きはじめたわけだが、勉強熱心で知識欲は旺盛だった。働きながら通信教育で中学課程を学びおえたという。彼は、文学書や宗教書など多くの本を読んでいたため、生長の家・谷口雅春の知的な文章もよく解することが出来た。そして、生長の家の熱心な信徒時代は、博識の谷口を尊敬していたようである。しかし、生長の家から少し心がはなれはじめた千鳥会会員時代、上記の「フーチ」を得て、たくさんの知識があるより、誠実な行いが出来るほうが重要だ、と五井は覚った。

この千鳥会でもらった「フーチ」の言葉は、五井が白光真宏会会員たちに講話をした際、幾度も例に挙げられ、誠実な行いのほうに重きを置くという彼の宗教家としての態度に結びついている。つまり、千鳥会の「フーチ」の言葉は、五井にたいして「影響」を与えたといえるわけである。なお、五井はのちに〔白光真宏会立教のあと〕、紅卍字会からも「フーチ（扶乩）」によって言葉をもらうことになった。五井は、その「フーチ」の言葉を全く信じていた様子であった。

五井が接点をもった心霊研究グループには、日本心霊科学協会、心霊科学研究会、菊花会などがある。彼は、上記のいずれの団体にも加入し、会員となっていた。戦後まもなく〔昭和 20 年代前半〕からこれらの団体で行われた「物理霊媒〔「霊媒」・萩原真、他〕」による「心霊実験会」に、五井は積極的に参加した。五井の機関誌上の「法話」をすべて筆者が通覧したところ、白光真宏会が設立された後も、彼らのいう「心霊科学」「心霊研究」に五井は関心を持ち続けていたのがわかる。

日本心霊科学協会・役員であり翻訳者でもあった粕川章子と五井との交友から、「世界

平和の祈り」の英訳版が出来た。同じく日本心霊科学協会・役員および心霊科学研究会・主幹だった脇長生や菊花会・小田秀人などからも、「心霊」にかんする知識を得ていた。五井は、戦後まもなくから「心霊」にかんする本を東京の古本屋で見つけては読んでいた。以上から、五井は、心霊研究グループからも「心霊知識」および「体験」〔「心霊実験」への参加〕面で、影響を受けていたといえる。

白光真宏会の教義面への影響をみたとき、「大本系」の中では、先行研究ですでに言われてきた生長の家に加えて、世界救世教の影響が濃いということが新たに分かった。五井の「お浄め」という「霊的」実践は、世界救世教の「浄霊」に通ずるものである。また、五井の「消えてゆく姿」の教えと岡田の言う「浄化作用」とは、意味合いにおいて同様といえるだろう。このように、影響関係の強弱において、世界救世教の影響が強い、ということは、これまでに指摘されてこなかった発見であり、明らかになったことである。

なお、第 2 章では、五井の「霊界」思想が形成されるにあたって、他教団・団体等から受けた「影響」について詳細に論じた。筆者は、白光真宏会・五井および他教団・教祖らの「霊界」にかんする言説、特に「①「霊界」の構造と性質　②「守護霊、守護神」思想」について比較し、分析をおこなった。

そして、世界救世教・生長の家・日本心霊科学協会（心霊科学研究会）・千鳥会の「霊界」思想と、白光真宏会（五井）の「霊界」思想とを比較したところ、五井の「霊界」思想は日本心霊科学協会（心霊科学研究会）のそれと最も近いことがわかった。

五井は、戦後、日本心霊科学協会（心霊科学研究会）の会員となっており、この団体の創設者・浅野和三郎の本『神霊主義』から、多くの心霊知識をとり入れていることが明らかになった。①「霊界」の構造と性質についての説明、②「守護霊」の説明も、ともに浅野の説に沿って、五井は語っていた。

しかし、五井が強調した「守護霊と守護神」という〝二段構えの両者がセットになったまもりの体制〟については、日本心霊科学協会（心霊科学研究会）の説にはなく、千鳥会のほうで述べられていた考え方だった。千鳥会では「守り神」「守り主」と言い、それらは五井の「守護神、守護霊」に相当する。

五井は、戦前には「霊魂や霊界は無い」とかんがえていたが、戦後、上記教団への入信（入会）・信仰体験を経て、「神霊主義（スピリチュアリズム）」を受容した。さらに彼は、特に〝救済の神〟を意味する「守護神」とは〝愛念をもって人間をまもってくれている手近な存在〟だ、と独得の主張を展開した。この五井の「守護神」説については、千鳥会入

会以降、彼が自己流の〝霊修行〟を完遂したときに得られたものとされ、五井にとってはリアルな〝覚り〟のようなものだったらしい［五井『天と地をつなぐ者』、参照］。

▼第 3 章

第 3 章は、白光真宏会・五井の苦難の解釈を、マックス・ウェーバーの「三類型」や他の新宗教教団の苦難の解釈と比較し、考察した。

五井の苦難の解釈〔〝消えてゆく姿〟の教え〕は、マックス・ウェーバーの三類型の中で、どれかというならば、「業の教説」が近かった。業の教説とは、前世〔過去世〕の悪業・罪悪が原因となって、現世において〔低いカーストに生まれるなど〕結果として苦難を受けている、とする解釈である。しかし、新宗教教団の苦難の解釈はもっと多様であり、ウェーバーの類型に当てはめてかんがえるには無理があった。

この第 3 章でも、白光真宏会（五井）の苦難の解釈と主に比較したのは、世界救世教（岡田）と生長の家（谷口）のそれであり、若干、大本（王仁三郎）の教えにも触れた。

五井の苦難（苦しみ、不幸、災難、等）の解釈の仕方は、次のようなものである。つまり、現在「苦しみ（苦難）」があるとしたら、それは過去世から現在〔「現世」の現在〕に至るまでの間につくった悪業〔五井は「業想念（カルマ）」とも言う〕によるものであり、現在ただ今こうして苦しむことによって「（悪）業」は浄化されるのだ、と五井は説いた。上の五井の説明の前半は、因果応報（悪因悪果）のインド的な業の教説に近いが、後半は異なっている。インドの業の教説であれば、来世のために善行を積むことが勧められようが、五井はそれよりは、現在苦しむことそれ自体をもって悪業が消えている（悪業が浄まっている）、と述べた。こうした考え方を、五井は〝消えてゆく姿〟の教え、と人々に説いた。

五井のこの〝消えてゆく姿〟の教えは、筆者のみたところ、世界救世教（岡田）や生長の家（谷口）などの教説から影響をうけている、といえる。

世界救世教・岡田茂吉の言う「浄化作用」では、病患にかぎらず自然災害や戦争なども含めて、そこでの苦しみを通して、人間の体や国（土）が浄められる（罪穢〔業〕が浄化される）、と説いた。この岡田の説と同趣旨の内容を、五井は〝消えてゆく姿〟の教えのなかで語った。

また、生長の家・谷口雅春も、心の中に悪い想いが出てきたり、身に不幸・苦しみが出てきたとしても、それは過去の業が〝自壊〟しているすがた、業が滅しているすがたである、とも説いた。ここで谷口が述べた内容は、五井の〝消えてゆく姿〟の教えと相通ずる

ものである。

さらに、大本のおしえの中にも、世界救世教の岡田が述べたのと同じように、自然災害などの「苦難」は、国（土）を祓い浄めている（浄化している）ことでもある、と説かれていた。

以上のように、五井の教説の柱である〝消えてゆく姿〟の教えにも、世界救世教・岡田や生長の家・谷口らの思想的影響がうかがえた。

しかし、五井は、彼らの説を継承しながらも、五井独自の〝視点〟を提示している。それは、谷口の「精神分析」説を否定して、むしろそこで五井の「消えてゆく姿」説を前面に押し出したことにみられる。

もう少しわかりやすく述べよう。つまり、谷口は上記のような「業の自壊」説を説きつつ、いっぽうで、信徒間の心の指導の場に「その人が病気や不幸になるのは、その人の心のあり方に問題があるから」といった〝病因論・災因論〟を導入していた。この谷口の指導法が、上の「精神分析」説というものである。五井は、この「精神分析」説をおこなうと、信徒同士が、病気や不幸の原因をつくっているとされる自分や相手の心を責め、そこに心がとらわれてしまう、という問題を自覚した。そこで、五井は、「病気も不幸も、あらゆる苦難は、〝〔過去世からの（悪）業が〕たった今、現われて消えてゆく姿〟なのだ、苦難が現われ苦しんだ分だけ自分は今、浄まっているのだ」と白光真宏会会員たちに指導した。すなわち、五井は、互いの心の問題を指摘する生長の家のやり方に代えて、「すべての不幸・苦難は、過去世の業の〝消えてゆく姿〟、業が消えた分、これからは善くなる」と、現状を肯定的にとらえるようにした。自他の心を責めない、苦難な状況をもポジティブにとらえる、苦難の現状を捉まない、という〝観の転換〔肯定的な方向に視点を転ずること〕〟を五井は徹底した。この姿勢〔「光明思想」といわれる〕は、谷口が先に語っていたことだったが、五井は谷口よりもひたすら単純に、〝消えてゆく姿〟の教えという言葉をもちいて重点的に、これを生涯にわたって繰り返し語った。そこが、五井の独自性の部分といってもよかろう。五井は、谷口の教えを白光真宏会会員たちの誰もが使いやすいように説き直した〔〝カスタマイズ〟した〕わけである。

五井の〝消えてゆく姿〟の教えにみられるような、苦難を通して〔過去からの〕業が浄化される（祓い浄められる）、という思考方法は、今後個別に調べていけば、神道系新宗教・大本はじめ他の大本系教団群［井上ほか編『新宗教事典』、75 頁（「系統図」）］や「浄化作用」を説く他の世界救世教系教団群［井上ほか編『新宗教事典』、86 頁（「系統図」）］

など、近現代の神道系新宗教教団のなかに多く見いだすことが出来るかもしれない。

▼第 4 章

第 4 章では、国際情勢など「社会」の動きが、五井の平和運動に何らかの影響を与えたかどうかにつき、五井の機関誌での「法話」を一通りみながら考察した。

五井は、昭和 20 年代後半には白光真宏会の根幹である「世界平和の祈り」を形成していた。そして昭和 30 年以降、定型化し、以後ずっと唱えつづけられている「祈り」の文言の冒頭は「世界人類が平和でありますように」である。

五井の平和運動とは、「祈りによる世界平和運動」であるため、終始一貫、この「世界平和の祈り」を通して、世界平和の実現を目指した。

そうした一貫した方針は維持しつづけたが、時局によって、五井の発言や白光真宏会の活動展開が動くことがあった。「社会」の情勢からの五井（白光真宏会）への影響にかんして、具体的な例を以下に挙げよう。

昭和 20・30 年代においては、特に、昭和 39（1964）年 10 月の「東京オリンピック」があった。五井は、このイベントで海外から日本に外国人が来ることを機に、〝世界人類が平和でありますように〟という「祈り」の文言を各国語に訳して、掲げることにした。五井が「法話」の中でこの掲示プランを提案したことで、白光真宏会会員たちは一丸となってこの活動をおこなった。東京はじめ様々な所で、各国語による「祈り」の文言が、この時期に掲げられた。

昭和 40 年代においては、昭和 40（1965）年 2 月以降、米軍によるベトナム北爆がはじまり、五井は米軍がおこなうベトナム戦争での〝殺人〟を批判した。そして、北爆という米国の行為は〝神意〟に反する、と語った。

五井は機関誌上で、日本国憲法第 9 条の平和主義に沿った態度をしめしていた。昭和 43（1968）年 5 月末には、「新宗連（新日本宗教団体連合会）」への加盟を白光真宏会は表明した。また、白光真宏会は、世界連邦運動にもかかわっていった。

昭和 45（1970）年 10 月、京都で開催された第 1 回「世界宗教者平和会議」に五井も出席したが、このときの会議の内容が彼には納得できないものだったようである。五井は、〝世界人類が平和でありますように　May Peace Prevail on Earth〟を世界の宗教者共通の祈りの言葉として加えることを提案したが、「平和会議」において重く受け取られることはなかったという。世界の宗教者たちの議論の内容が、貧しい国への経済援助を主としていたことなどから、この「平和会議」後の五井は、それまでにも増して「祈り」の重要性

を語るようになった。唯物論者が言うのではなく、ほかならぬ宗教者の口から、〝祈ってどうなる、〔世界平和のために〕もっと具体的な方策を〟というような声が聞かれたことに、五井はがっかりしたというわけである。この後も、五井の「祈り」一念の平和活動は展開されていくが、上記の「平和会議」での経験が、彼の「祈りによる世界平和運動」推進を〝強化〟する方向に作用した、と言うことは出来るだろう。

昭和 45（1970）年 4 月に初めて五井は海外へ出た。娘の昌美とともにアメリカへ行き、英語習得の必要性、世界を舞台に「世界平和の祈り」を広めること、を心にきざんだようである。これ以降、五井や娘・昌美そして白光真宏会幹部は、「宇宙子科学」という同会独自の研究プロジェクト推進と布教のため、海外（主に欧米）に出かけることが増えていく。そして、英訳版の媒体（リーフレットなど）の普及に力を入れていった。

昭和 50 年代は、五井の闘病期において、もっとも重い症状（咳、痰、全身の痛みなど）をしめしていた。そうした中、昭和 50（1975）年 8 月にマレーシアで日本赤軍メンバーによるテロ事件が起きた。このニュースを見た五井は、機関誌上の「法話」において、日本（人）のイメージが悪くなっているけれども、日本（人）は世界の平和を強く願っているというメッセージを内外で発信していこう、というような提案をした。そうして、〝世界人類が平和でありますように　May Peace Prevail on Earth〟の標識（ポスターやステッカーなど）を日本全国（海外）のいたるところに掲示（貼付）する活動が、白光真宏会会員たちの手によって展開されていった。

特筆すべきこととして、五井は昭和 50 年代の晩年期、「軍備」にかんする論調を変化させた。それまで基本的には「軍備」「武力」を否定していた五井だったが、彼は、国（国民）を守る最小限の力として自衛隊を位置づけ、「兵力」を容認する発言を機関誌上で述べた。五井は、理想主義だけでなく、日米安保条約のもと、自衛隊という「武装」も必要との見解をしめした。こうした発言は、当時の国際情勢に応えた五井個人のものとはいえ、これまでの彼の絶対平和主義的な主張からは後退した、といえよう。

ただし、五井の話には、すでに筆者が指摘したように「ダブル・スタンダード（二重基準）」がみられるため、上記の発言の場合も①「五井本人の場合」と②「（白光真宏会会員を含む）他の人の場合」とを分けてとらえたほうがよいだろう。五井は確かに、①として「軍備」も必要と述べたが、②としては「政治問題はよくわからないのだから、そうしたことは考えないで、ただ世界平和の祈りをすればいい」というように述べている。

なお、昭和 50 年代、五井の論調が保守派（自民党寄り）の日米同盟重視、国（民）を

守る最小限の「自衛隊（「武装」）」容認の立場に至った背景には、五井と神社界（明治神宮や神社本庁などの人たち）との親密な交流があったからであろうと筆者は推測している。

▼第 5 章

第 5 章では、第一に、五井の提唱した「世界平和の祈り」をとなえることが、どのような〝ロジック〟を通して「世界平和」という実態につながると五井は説いたか、について明らかにした。また、第二に、五井の「祈りによる世界平和運動」を他教団の平和運動といくつか比較し、五井の平和運動の特徴を分析した。

まず第一の〝ロジック〟にかんしては、2 つの点を筆者が指摘した。

1 つめに、近代スピリチュアリズムの思想における「波動（バイブレーション）」説がある。近代スピリチュアリズム（「神霊主義」）では、人間の発する「想い（想念）」は、その中身（質）によって、さまざまな世界に通ずるという。浅野和三郎や五井らの思想的立場である「神霊主義」では、想念の〝波動（バイブレーション）〟の精粗によって、「物質界（肉体界）／幽界／霊界／神界」など、通ずる世界が異なる、とされる。なお、人間の発する「想い」が上等（高尚）であれば〝波動〟は細かく「神界」や「霊界」といった高い世界に通じ、「想い」が下等であれば〝波動〟は粗く「幽界」など低い世界に通ずるのだという。

そして、五井の提唱する「世界平和の祈り」をとなえると、「想い」の〝波動〟を細かくし、高い世界（「神界」）に通ずるのだと五井は説いた。彼は、だれであれ、その「世界平和の祈り」をとなえるとき、そこに生ずるとされる〝光明波動〟をとおして、「肉体界」や「幽界」の汚れた〝波動〟を浄化するのだ、と述べた。

前述の〝ロジック〟の 2 つめに、大本はじめ大本系教団にみられる「移写」説がある。

大本の出口王仁三郎は、「現界は霊界の移写」と述べ、他の大本系教団の教祖も同様に「移写（うつし世）」について語っていた。同様の「移写」説に言及した「大本系」の教祖には、世界救世教・岡田茂吉、生長の家・谷口雅春、神道天行居・友清歓真、三五教・中野與之助、ひかり教会・岡本天明らがおり、白光真宏会の五井昌久もその一人である。

「移写」とは、「霊界」の様子が「現界（肉体界、物質界）」に〔時間を経ていずれ〕移って（写って）来る、との思想である。

そこで五井は、①「波動」説と②「移写」説を組み合わせて説いた。つまり、彼は、戦争や災害の様子がすでに出来ているとされる汚れた「幽界」を「世界平和の祈り」による〝光明波動〟で浄化することで、そうした戦争・災害の状態が写ってくるのを防ごうとし

た。そうした五井の〝ロジック〟をとおして、「世界平和の祈り」による世界平和の実現を目指したわけである。

そして第二に、五井の「祈りによる世界平和運動」を他教団の平和運動と比較して、その特徴および位置をある程度明らかにした。

五井（白光真宏会）による「祈りによる世界平和運動」は、〝祈りによる〟というその名の通り、内的・精神的・神霊（心霊）主義的な運動であり、他の平和運動にみられる具体的行動（デモ、署名運動、募金活動など）はどちらかというと控えぎみである。ただし、五井の生存時において白光真宏会も、平和運動の一環として募金（献金）活動や「平和行進」を過去には行ってきた。

しかし、五井は調和した「想念波動」〔平和な想いであること〕を重視し、平和運動のプロセスにおける闘争の「想念波動」を否定した。つまり、五井（白光真宏会）は、相手（国家〔自国日本も、他の国も〕や人〔どこの国の人であっても〕）を〝敵〟と見ない、という「平和主義」の立場であった。五井のこうした相手を〝敵〟と見ない態度の背景には、生長の家から継承・受容した「光明思想〔人間は、本来すべて神の子、完全円満、というふうに性善説的に見る思考。「ポジティブ・シンキング」〕」があった。五井は、どのような相手を前にしても、〔(業が)〝消えてゆく姿〟ととらえ、〕「世界平和の祈り」でもってひたすら応ずる、という平和運動を推進した。

白光真宏会の「祈りによる平和運動」は、政治運動に関わらない方針をもち、順序的にまず「個人の心の平和」、そして「社会の平和」、その次に「世界（人類）の平和」をつくっていこうとしている。五井の考えは、順々に、「平和」の及ぶ範囲を広げていく、というものだった。その「平和」拡大の際、世界平和の発信地（中心地）は、日本だと五井は述べた。神道系新宗教の大本に見られるように、五井（白光真宏会）の（平和）思想にも、「日本中心主義」の考え方を垣間見ることが出来る。

また、五井の「世界平和の祈り」による平和運動には、以下のユニークさがある。つまり、「世界平和の祈り」のうち〝世界人類が平和でありますように〟の冒頭 1 行のみをとれば、唯物論の人でも他のどのような信仰をもつ人でも唱えることが可能、という点である。そこで、白光真宏会は、この一文を、世界の各国語に訳して掲示し、唱えるという実践をおこなっている。この実践は、五井の生存時から始まり、現在〔2018 年 7 月現在〕にいたるまで、その趣旨が継承されてきている[(1)]。

五井の「世界平和の祈り」による平和運動の一大特徴は、平易で短い一つの祈りの言葉

を、いつでも・どこでも、頻繁に唱えることにある。決まった祈りの言葉を頻繁に唱える、という五井のアイディアは、日本の浄土宗・浄土真宗の念仏に倣っている面があるかもしれない。

しかし、他の新宗教教団や伝統宗教教団も含めて、それらの「祈り」と異なる点に、次のことが挙げられよう。それは、①〝〔「祈り」を行う〕時間・場所を定めず、絶えず祈ること〟と②〝「祈り」の目的が「世界平和」のみと明らかであること〟である。

以上の①と②の条件を共に（同時に）満たしているのは、筆者の知る限りにおいて、白光真宏会の「世界平和の祈り」だけとおもわれる。これが、白光真宏会の平和運動（「祈り」）のユニークさである。

また、白光真宏会の「世界平和の祈りによる世界平和運動」は、〝想念波動〟を重視する「神霊（心霊）主義」的・唯心（神）的なものであり、近代スピリチュアリズムを受容した他の（神道系の）大本系教団群・世界救世教系教団群・心霊研究グループ群の枠内に位置づけられるだろう。しかし、それらの多くの教団群の中で、白光真宏会がどこに位置するかを定めるのは、各教団・団体（グループ）の教理を精査した上のことであり、その位置のさらなる解明は今後の課題としたい。

2　結論

本論文の結論を最後に述べる。

筆者は、本論文の最初に、論文の目的として、五井昌久がその宗教理念を打ち立てるにあたり、どこからどのような「影響」を受けたかを分析する、とした。

主に、〝インプット〟のほうに着目し、五井に流れ込んだ他教団・団体の思想を指摘した。五井の教えのなかには、戦後、彼が入信（入会）した世界救世教・生長の家・日本心霊科学協会（心霊科学研究会）・千鳥会などの思想が部分的に取り込まれている。

これまでの先行研究で、白光真宏会が生長の家の分派として、生長の家から大きな影響を受けたことは指摘されていたが、その具体的な内容や他の教団（団体）からの影響はほとんど考察されてこなかった。本論文では、これを明らかにした。

白光真宏会の五井昌久は、生長の家の「光明思想」を継承し、同時に生長の家・谷口雅春の「精神分析」の教えは捨てた。五井は、谷口の広範な教えから取捨選択をし、「光明思想」ひとつを選び、「精神分析」の教えについては解釈し直して〝消えてゆく姿〟と説いた。

また、世界救世教（岡田茂吉）からは「浄化作用」の教えを取り入れた。五井は、今の苦難・不幸は〝（過去世から現在までの「業想念（カルマ）」が）現われて、消えてゆく姿〟と語った。そして、五井は、世界救世教系でおこなわれる「手かざし」（浄霊）も使いつつ、独自に「柏手・口笛・言霊〔気合いの一声〕」による「お浄め」を実践した。

つまり、白光真宏会の五井昌久は生長の家に加えて、教え・実践両面において世界救世教の影響を強く受けていることを、筆者は本論文で新たに指摘したわけである。

さらに、日本心霊科学協会・心霊科学研究会においては、この会の幹部と五井との交流〔戦後のこと〕を明らかにした。日本心霊科学協会・理事でもあった粕川章子に、五井は、みずからの提唱した「世界平和の祈り」の英訳を依頼し、英訳文を作ってもらった。

日本心霊科学協会・理事そして心霊科学研究会・『心霊と人生』誌主幹となった脇長生とも、五井は接点を有していた。五井は脇たちの心霊科学研究会に顔を出し、浅野和三郎の主唱した「神霊主義（スピリチュアリズム）」を学んでいたという事実が新たにわかった。そして五井が、浅野の「神霊主義（スピリチュアリズム）」から、用語を含めて「心霊」にかんする知識を摂取していた、と筆者は指摘した。

五井は、戦後、心霊研究グループ・菊花会に入会し小田秀人と交流をたもち、白光真宏会設立後は紅卍字会にも入会し交流を深めた。

千鳥会では、「霊媒」・萩原真をとおして「フーチ」をもらい、その言葉〔真の行いを重んずる、との意〕を大事にした。千鳥会の教えからは、「守り神、守り主」という考え方を結果的に取り入れた。白光真宏会（五井）は、それらを「守護神、守護霊」といい、両存在によって人間各人はまもられている、という。とくに、「守護神」が身近な存在であり、愛念をもって控えているとして、「守護神、守護霊への感謝」を強く主張した。

なお、白光真宏会の五井昌久が説く〝消えてゆく姿〟の教えの内容は、世界救世教・岡田茂吉、生長の家・谷口雅春、大本・出口王仁三郎にも、その教説の一部にみられるものである。しかし、五井は、彼らと比べると、教えを単純化し、〝消えてゆく姿〟の教えを集中的に説いた点がその特徴といえよう。この〝消えてゆく姿〟の教え、あるいは「浄化作用」の考え方は、近・現代の神道系新宗教教団、とくに大本にはじまる「大本系教団群」・世界救世教にはじまる「世界救世教系教団群」の教えの中に見られる可能性が高かろう。

また、五井の平和思想における「社会」からの影響としては、以下のことが指摘出来る。まず、白光真宏会では、昭和 39（1964）年 10 月の東京オリンピックを機に、外国人に「世界平和の祈り」の広める動きが強まった。〝世界人類が平和でありますように〟という祈

りの言葉を幾つかの外国語に訳して、ポスター・看板などを東京を中心に全国各地で掲示した。

そして、昭和 45（1970）年 4 月、五井は初めて海外（米国）へ出かけた。のちにも彼は欧米を旅し、世界を舞台に五井みずからが行き来して「世界平和の祈り」を広めていくビジョンを描いた。そして、そのビジョンを、五井は白光真宏会会員たちに語った。こうして、のちに、ますます白光真宏会の海外普及（布教）活動が進行していく。

また、五井は、昭和 45（1970）年 10 月、京都で開催された第 1 回「世界宗教者平和会議」に出席以降、より「祈り」の重要性を強調し、「祈りによる世界平和運動」を展開するようになった。その理由は、そうした世界の宗教者たちによる平和会議において、「祈り」が重くあつかわれていなかったことを五井が実感したからだった。

昭和 50（1975）年 8 月、マレーシアで日本赤軍メンバーによるテロ事件が起きたあと、白光真宏会では、「日本（人）は、世界平和をねがっている」とのメッセージを外国人にも伝えようと、〝世界人類が平和でありますように　May Peace Prevail on Earth〟の文言を内外の地に掲示する運動を展開した。

なお、五井の「平和主義」にかんする白光誌上での論調が、彼の晩年に変化する。

昭和 49（1974）年 4 月、「日本を守る会」発足に五井も関わりをもったようであり、同 54（1979）年 7 月には、「日本宗教代表者会議〔JCRR〕（議長：篠田康雄〈当時、神社本庁総長〉）」より、五井は顧問に推挙されたそうである。

当時の五井昌久は、重い病症をあらわして床に伏すことが多く、ほとんど外出は出来なかった。しかし、五井は、明治神宮（熱田神宮・伊勢神宮・富岡八幡宮）などとの関係を大切にしていたため、神社界の人たちを主要メンバーにかかえる上記組織の人たちからの影響もあったのかもしれない。

五井の論調は、それまで「武力反対」を徹底して説いていたが、晩年の昭和 50 年代は「日米安保条約および自衛隊は必要」、つまり国を守る・国民の命を守る最小限の自衛隊（「兵力」「武装」〔守りのみ、他国は攻めない〕）は要る、と述べた。五井自身、たんなる理想だけでなく現実的に日本の保守政権（自由主義）を維持するために、むずかしい問題だが、そうした考え〔「兵力」「武装」〕を組み合わせていかなくてはならない、というように語っている。米・ソ、東・西の陣営が冷戦で緊張状態にあった中で、こうした五井の自説が語られた。

ただし、五井の教説には、「ダブル・スタンダード（二重基準）」がみられる。上の例

だと、①「五井個人の場合」＝〔日本も「兵力」は必要と述べつつ、彼個人のみの態度としては〕非暴力、絶対平和主義、②「国民一般の場合（白光真宏会会員を含む)」＝命を守るための防衛も必要、政治問題に関与せずひたすら「世界平和の祈り」に徹する、という立場といえる。そして彼は、あらゆる人に「世界平和の祈り」を勧めた。

五井の「ダブル・スタンダード（二重基準)」には他に、以下の例が挙げられる。

例えば、〝消えてゆく姿〟の教えにおいても、①「五井個人の場合」＝五井自身の業想念（カルマ）を消すためではなく〔五井個人の業想念は無いという〕、人類の業想念を消すために病症を五井の全身に現わしている、②「国民一般の場合（白光真宏会会員を含む)」＝苦難（病気・不幸など）を通して、個人の〔「過去世」から現在までの〕業想念が、現われては消えていっている、と五井は述べた。

他にも、薬の服用にかんしては、①「五井個人の場合」＝〔病症を自身の体に現わしても、それは〕人類の業想念の〝浄化〟のためととらえて、医者に一切かからず薬も服用せず、自然療能力〔および「神様」の力〕によって対応する、②「国民一般の場合（白光真宏会会員を含む)」＝体調が悪く不安であれば、医者にかかったり薬を処方してもらって服用したらいい、と語った。五井は、①「五井個人の場合」と②「国民一般の場合（白光真宏会会員を含む)」では、それぞれ〝役目〟が異なるからといい、どちらかというと、〝難行〟は五井個人のものとして、〝易行〟は他の国民一般のものとした。「世界平和の祈り」を唱えることに代表されるように、②の「国民一般の場合（白光真宏会会員を含む)」には、他力的に誰でも容易におこなえることを勧めていた。

そうした五井の態度の〝使い分け「ダブル・スタンダード（二重基準)」〟は、筆者が機関誌（『白光』）の中の五井の「法話」を通覧するなかで浮かび上がってきたことだった。ガンジーやイエスのようなストイックかつ非暴力・絶対平和主義の態度を、五井自身は〝真理〟と理解し、そうあるのは正しいとしながらも、実際にそうできる人はほとんどいないとかんがえ、白光真宏会会員たちにガンジーやイエスの態度をもとめはしなかった。むしろ、「世界平和の祈り」のみ、という易しい他力の行を五井は勧めた。

また、本論文では、五井の「祈りによる世界平和運動」において、a.「世界平和の祈り」を唱えることが、b. 世界平和につながる、という a. b. を架橋する教理を示した。それを筆者は、近代スピリチュアリズムの「波動説」と大本系にみられる「移写説」で説明した。

そして、五井の「祈りによる世界平和運動」の思想的特徴を明示し、他の平和運動と異なる点を筆者は指摘した。五井のその運動は、唯物論者でも何らかの信仰をすでに有する

人でも、「世界人類が平和でありますように」の一文を生活に加えることでおこなえる平和運動である。この世界平和の祈り（「祈りによる世界平和運動」）は、「いつでも・どこでも・だれでも〔病床に伏している人であっても〕」おこなえよう。つまり、時間・場所を定めず誰もがおこなえ、その復唱する祈りの言葉の目的が〝世界平和のみ〟という点をもあわせてみると、この「祈り」（「祈りによる世界平和運動」）はユニーク（独得）なもの（平和運動）と筆者は見ている。

白光真宏会の五井昌久は、「祈りによる世界平和運動」を〝一宗派のものではない・信仰の有無をこえて誰もがおこなえるもの〟としたため、白光真宏会会員ではない人も巻き込んでいった。そして、同会・五井昌久の方針として、〔「平和運動」においても〕〝無理強いしない〟と白光真宏会会員たちに言っていたので、他教団のように折伏したり現世利益をうたうなどして新入会員を増やす活動は抑えられた。さらに、五井は、「祈りによる世界平和運動」においては、白光真宏会に入らなくてもいい〔白光真宏会の会員にならなくてもいい〕とも言っていた。つまり、彼の提唱した「世界平和の祈り」をおこなう人を増やすことが「祈りによる世界平和運動」の主眼であったため、この運動が広がり浸透したほどには、白光真宏会の会員数自体は伸びなかった、といえよう。

ところで、上記のように白光真宏会（五井ら）のおこなう「世界平和の祈り」および「祈りによる世界平和運動」はユニークではあるが、他の様々な新宗教教団がおこなう「祈り」や「平和運動」の実践のなかにおいて、どこに位置づけられるかは、いまのところ定かには出来ない。しかし、今後の課題として、将来的にはその位置づけを試みたいと思う。

五井が生前、全身全霊をささげて推進した「祈りによる世界平和運動」の趣旨は、五井が亡くなったのちも白光真宏会・二代会長〔西園寺昌美〕や同会幹部および現会員たちに引き継がれている。その平和運動の思想的・実践的中心といえる「世界平和の祈り」は、ひきつづき現在〔2018 年 7 月現在〕の宗教法人白光真宏会において、SOPP（Symphony of Peace Prayers 世界平和交響曲）などの行事で唱えられている。平成 25（2013）年 2 月には、国連総会議場で開催された「United for a Culture of Peace Through Interfaith Harmony（国連総会議長らが主催のセレモニー）」の中で、SOPP が行なわれたという［白光真宏会サイト http://byakko.or.jp/founder/masami/ 2018 年 7 月 13 日最終閲覧、等、参照］。このように、現在〔2018 年 7 月現在〕、五井らがはじめた白光真宏会の「祈りによる世界平和運動」の活動が国際機関においても認められてきている。

そして特に、五井の世界平和の祈りの普及活動に力を注いでいるのは、昭和 63（1988）

年に米国ニューヨーク州に設立された非営利法人ワールド・ピース・プレヤー・ソサエティ（WPPS: World Peace Prayer Society）である。WPPS では、〝世界人類が平和でありますように May Peace Prevail on Earth〟を世界各国の言葉で広める活動をおこなっている。なお、WPPS 日本オフィスは、平成 11（1999）年、五井平和財団〔平成 22（2010）年に公益財団法人五井平和財団となった〕内に開設された。

こうして、五井昌久がはじめた「世界人類が平和でありますように」という祈りの言葉を各国語で世界じゅうに広める活動は、次世代に継承する組織（WPPS）が整えられたことで〔WPPS は、国連広報局の提携 NGO となっている〕、今後海外においてさらに普及していくのかもしれない［五井平和財団サイト https://www.goipeace.or.jp/about/　2018 年 7 月 13 日最終閲覧、等、参照］。

註

（1）現在〔2018 年 7 月現在〕、白光真宏会では、「SOPP：Symphony of Peace Prayers　～世界平和交響曲～」という世界諸宗の宗教者たちによる「祈り」のイベントをおこなっている。「SOPP」（世界平和交響曲――宗教・宗派を超えて、共に世界の平和を祈る）が始まったのは 2005 年（第 1 回）からで 2018 年（第 14 回）まで、毎年開催されている。とくに、2013 年 2 月 14 日には、アメリカ・ニューヨークの国際連合本部総会議場で SOPP が行われた。2018 年 5 月の SOPP でも、白光真宏会会長・西園寺昌美は、「全員での祈り」として、「世界人類が平和でありますように／メイ・ピース・プリヴェイル・オン・アース／世界人類が平和でありますように／メイ・ピース・プリヴェイル・オン・アース／世界人類が平和でありますように／メイ・ピース・プリヴェイル・オン・アース／世界人類が平和でありますように」［『白光』2018 年 7 月 10 日号、31 頁］と唱和した。

さらに、2018 年の SOPP の際には、「世界各国語による世界各国の平和の祈り（Prayers for Peace in Each Country）」があり、世界 193 の国とその他のすべての地域への平和の祈りが実行されたという。現在〔2018 年 7 月現在〕は、「世界各国の平和の祈り」が〝シンプル化〟してきているようである。なお、2018 年の SOPP の参加者は、いずれかの国を代表して国旗カードを掲げて、各国の言語で「平和」を意味する言葉を高らかに唱和したそうである［『白光』2018 年 7 月 10 日号、38 頁、http://byakko.or.jp/about/history/　2018 年 7 月 10 日最終閲覧、等、参照］。

おそらく、以前の「世界各国の平和の祈り」では、〝世界人類が平和でありますように　〇〇国〔国名〕が平和でありますように　……〟の文言を各国語ですべてとなえると長時間を要するから、簡略したバージョンでイベント（行事）を進行しているのだろう。

ちなみに、古い版だが、1993 年 6 月版の冊子『世界各国の平和の祈り』の冒頭頁とオーストラリアの頁および末尾頁をみると、

「世界人類が平和でありますように／……／ 8. オーストラリア／Australia（オーストレイリア）／私はオーストラリアの人々の代わりに、／オーストラリアの人々の幸せを祈ります。／オーストラリアが平和でありますように／オーストラリアの天命が完うされますように／……／ 187.　私はその他のすべての地域の人々の代わりに／その他のすべての地域の人々の幸せを祈ります。／その他のすべての地域が平和でありますように。／その他のすべての地域の天命が完うされますように。／守護霊様、守護神様、／五井先生ありがとうございます。」

［冊子『世界各国の平和の祈り』（1993 年 6 月版）］

と書かれている。同様に、1993 年 6 月版の冊子『世界各国語による世界各国の平和の祈り　*PRAYER FOR THE PEACE OF EACH COUNTRY IN EACH NATIONAL LANGUAGE*』の冒頭頁とオーストラリアの頁および末尾頁をみると、

「世界人類が平和でありますように／ May（メイ） peace（ピース） prevail（プリベイル） on（オン） earth（アース）.／……／ 8. Australia ／オーストラリア／メイ　ピース　プリベイル　オン　アース／ May peace prevail on earth.／メイ　ピース　ビー　イン　オーストレイリア／ May peace be in Australia. ／……／ 187. All the other regions of the world ／その他のすべての地域／メイ　ピース　プリベイル　オン　アース／ May peace prevail on earth.／メイ　ピース　ビー　イン　オール　ジ　アザー　リージョンズ　オブ　ザ　ワールド／ May peace be in all-the-other-regions of the world.／守護霊様、守護神様、／五井先生ありがとうございます。／ウイ　サンク　ズィー　ゴイ　センセイ／ We thank thee, Goi-sensei, ／ガーディアン　ディーイティズ　アンド　ガーディアン　スピリッツ／ Guardian Deities and Guardian Spirits.」

［冊子『世界各国語による世界各国の平和の祈り　*PRAYER FOR THE PEACE OF EACH COUNTRY IN EACH NATIONAL LANGUAGE*』（1993 年 6 月版）］

とある。

なお、現在〔2018 年 7 月現在〕は、『世界各国語による世界各国の平和の祈り　Prayer for the Peace of Each Country in Each National Language』（2015 年 6 月版）が使用されている。同様に、2015 年 6 月版の冊子『世界各国語による世界各国の平和の祈り』のオーストラリアの頁および末尾頁をみると、

「9. オーストラリア／メイ　ピース　ビー　イン　オーストレイリア／ May peace be in Australia.」「オーストレイリア／ Australia ／ピース／ Peace ／……／ 194. その他のすべての地域／メイ　ピース　ビー　イン　オール　ジ　アザー　リージョンズ　オブ　ザ　ワールド／ May peace be in all the other regions of the world.」「オール　ジ　アザー　リージョンズ　オブ　ザ　ワールド／ All the other regions of the world ／ピース／ Peace」

［冊子 pdf『世界各国語による世界各国の平和の祈り』（2015 年 6 月版）、http://byakko.or.jp/method/each_country/　2018 年 7 月 11 日最終閲覧、参照］

と記されている。

つまり、白光真宏会では、「世界人類が平和でありますように／〇〇国が平和でありますように」という言葉をそれぞれの国の言語で祈っているそうである。また、①国名と②「平和」を意味する言葉を、その国の言語〔カタカナで読む〕で唱える方法もおこなわれている。そのようにして、白光真宏会は世界 193 ヵ国とその他の地域の平和を祈っている、という。他に、同会では「世界各国の平和の祈り」と「印（いん）」を組み合わせた実践行などもおこなっている。

また、白光真宏会に関連して、1988（昭和 63）年、米国に非営利法人ワールド・ピース・プレヤー・ソサエティ（WPPS: World Peace Prayer Society〔代表：西園寺昌美、理事長：西園寺裕夫〕）を設立。WPPS は、1990（平成 2）年、国連本部・総会議場で「ピースセレモニー〔ワールドピースプレヤーセレモニー（WPPC）、世界の国々の国旗を掲げながら、その国の平和を祈るセレモニー〕」を開催するなど、年々、その活動が評価されてきているようである。近年〔1997（平成 9）年以降〕では、「国際平和デー（9 月 21 日）」（於・国連本部）において、プログラムのフィナーレに国連加盟国の平和を祈る WPPC が恒例行事になっているという。現在〔2018 年 7 月現在〕、WPPC は、広島（8 月 6 日）・長崎（8 月 9 日）など、各地で行われている。

ちなみに、2008（平成 20）年、WPPS 会長・理事長〔西園寺夫妻〕は、インドの「哲学者　聖シュリー・ニャーネシュワラー世界平和賞」を受賞した。

そして、1999（平成 11）年には、五井平和財団内に「WPPS 日本オフィス」が開設。WPPS では、「世界人類が平和でありますように」“May Peace Prevail on Earth”という祈りのメッセージを世界各国の言葉で広める活動をおこない、ここ WPPS でも五井の「祈りによる世界平和運動」の理念が継承されている。そうして、上記の祈りの言葉を記した「ピースポール」〔「世界平和祈願柱」〕」は、すでに世界のほとんどすべての国に、20 万本以上、建てられている、という［http://wpps.jp/about/　2018 年 7 月 11 日最終閲覧、等、参照］。

なお、2019（平成 31 年）年（1 月）以降、「WPPS（ワールド・ピース・プレヤー・ソサエティ）」から「May Peace Prevail On Earth International」に団体名称が変更された。これによって、祈りの言葉そのものが団体名となった［『白光』2019 年 2 月 10 日号、31 頁、http://worldpeace-jp.org/　2019 年 6 月 3 日最終閲覧、参照］。

参考文献

（凡例）

（1）おおむね、日本語文献は著者・編者等の姓名から五十音順、英語文献はアルファベット〈ABC〉順、また刊行年（次）の古い（早いもの）順に並べた。

（2）なお、文中に記載した刊行年（月日）は、筆者が閲覧した書籍等の版（刷）である。

（3）以下の参考文献一覧では、おおむね、初版（第 1 刷）が発行された年も併記した。刊行年の後に何も記していない場合は、初版本ということである。

（4）以下の「参考文献／参照サイト」一覧では、新字あるいは旧字による表記の統一はおこなっていない。

・日本語文献

青木理（おさむ）『日本会議の正体』平凡社（平凡社新書）、2016 年 7 月 27 日（初版第 2 刷）（初版第 1 刷は 2016 年 7 月 8 日）。

浅野和三郎述『大本神諭略解』大日本修齋會、1919 年（5 版）（初版は 1918 年）。

浅野和三郎『大正維新の眞相』大日本修齋會、1920 年（5 版）（初版は 1919 年）。

淺野和三郎『心霊講座』嵩山房、1928 年。

浅野和三郎『国家の守護神』東京心霊科学協会、1934 年。

淺野和三郎『神靈主義――事實と理論』嵩山房、1934 年。

淺野和三郎『心靈讀本』心靈科學研究會出版部、1937 年。

浅野和三郎『心霊学より日本神道を観る』心霊科学研究会出版部、1938 年。

浅野和三郎『心霊研究とその帰趨』心霊科学研究会、1950 年。

浅野和三郎『心霊学より日本神道を観る』心霊科学研究会、1967 年（3 版）（初版は 1938 年）。

浅野和三郎『心霊講座　本文復刻版』潮文社、1999 年。（1929 年嵩山房が発行した増補版の復刻）

『朝日新聞』東京　夕刊、朝日新聞社、1980 年 8 月 19 日、9 頁。

アーサー・フィンドレイ（J. アーサー・フィンドレイ）『科學的實證的　靈魂不滅論』（高窪喜八郎・高窪靜江共譯）モナス、1935 年。

アーサー・フィンドレー『THE WAY OF LIFE・人間の生き方』（桑原啓善訳）生命の樹、1991 年。

アーサー・フインドレー『新時代と新信仰』（淺野和三郎譯）脇長生・佐々木静（心靈科學研究會出版部）、2014 年（再刊）（初版は 1937 年）。

アーネスト・トンプソン『近代スピリチュアリズム百年史――その歴史と思想のテキスト』（桑原啓善訳）でくのぼう出版、2011 年（原著は 1948−1950 年）。

飯坂良明・山岡喜久男・眞田芳憲・勝山恭男著、中央学術研究所編集責任『平和への課題と宗教者の役割』佼成出版社、2011 年。

飯田洋子『九条の会――新しいネットワークの形成と蘇生する社会運動』花伝社、2018 年。

池田昭編『大本史料集成　Ⅰ思想篇』三一書房、1982 年。

石井研士「となえ言葉」、井上順孝・孝本貢・対馬路人・中牧弘允・西山茂編『〔縮刷版〕新宗教事典　本文篇』弘文堂、1994 年、361-363 頁。

『一燈園日日行持集』一燈園出版部、発行年不明（発行年不詳）。

井上順孝・孝本貢・塩谷政憲・島薗進・対馬路人・西山茂・吉原和男・渡辺雅子共著『新宗教研究調査ハンドブック』雄山閣出版、1981 年。

井上順孝・孝本貢・対馬路人・中牧弘允・西山茂編『新宗教事典』弘文堂、1990 年。

井上順孝・梅津礼司「平和運動」、井上順孝・孝本貢・対馬路人・中牧弘允・西山茂編『新宗教事典』弘文堂、1990 年、583-584 頁。

井上順孝『新宗教の解読』筑摩書房、1992 年。

井上順孝・孝本貢・対馬路人・中牧弘允・西山茂編『〔縮刷版〕新宗教事典　本文篇』弘文堂、1994 年。

井上順孝「その他の社会活動　概説」、井上順孝・孝本貢・対馬路人・中牧弘允・西山茂編『〔縮刷版〕新宗教事典　本文篇』弘文堂、1994 年、583 頁。

井上順孝・孝本貢・対馬路人・中牧弘允・西山茂編『新宗教教団・人物事典』弘文堂、1996 年。

井上順孝編『世界の宗教 101 物語』新書館、2007 年。

井上順孝編『近代日本の宗教家 101』新書館、2007 年。

井上順孝『人はなぜ「新宗教」に魅かれるのか？』三笠書房、2009 年。

井上順孝編『現代日本の宗教社会学』世界思想社、2012 年（第 14 刷）（第 1 刷は 1994 年）。

井上順孝編『宗教社会学を学ぶ人のために』世界思想社、2016 年。

井上順孝編『リーディングス　戦後日本の思想水脈 6　社会の変容と宗教の諸相』岩波書店、2016 年 11 月。

（パンフレット）『祈りによる世界平和運動大行進』祈りによる世界平和運動大行進実行本部、1969 年。

（小冊子）『祈りによる世界平和運動ご参加のおすすめ』白光真宏会、1977 年。

イマヌエル・スエデンボルグ『天界と地獄』（柳瀬芳意訳）静思社、1984 年（第 12 刷）（初版は 1962 年）。

植芝盛平監修、植芝吉祥丸著『合気道』光和堂、1970 年（13 版）（初版は 1957 年 8 月 30 日）。

江口榛一『地の塩の箱』くろしお出版、1959 年。

江口榛一『地の塩の箱―ある幸福論―』新潮社、1974 年。

エマヌエル・スヴェーデンボルイ『天界と地獄』（スヴェーデンボルイ原典翻訳委員会訳）アルカナ出版、1985 年 12 月（第 2 刷）（初版第 1 刷は同 1985 年 5 月）（ラテン語原典の初版は 1758 年）。

遠藤潤「平田篤胤の他界論再考――『霊能真柱』を中心に――」『平田国学と近世社会』ぺりかん社、2008 年、20-45 頁。

大谷栄一「1950 年代の京都における宗教者平和運動の展開」『社会学部論集』第 54 号、佛教大学、2012 年 3 月 1 日、1-22 頁。

大本教学研鑽所編『大本のおしえ』天声社、1972 年（初版は 1967 年）。

大本祭教院編集『大本神諭』第 1 集、大本教典刊行会、1970 年（第 4 刷）（第 1 刷は 1968 年）。

大本祭教院編集『大本神諭』第 4 集、大本教典刊行会、1970 年。

大本祭教院編集『大本神諭』第 2 集、大本教典刊行会、1971 年（第 3 刷）（第 1 刷は 1969 年）。

大本祭教院編集『大本神諭』第 5 集、大本教典刊行会、1971 年。

大本祭教院編集『大本神諭』第 3 集、大本教典刊行会、1972 年（第 2 刷）（第 1 刷は 1969 年）。

大本七十年史編纂会編『大本七十年史　上巻』宗教法人大本、1964 年。

大本七十年史編纂会編『大本七十年史　下巻』宗教法人大本、1967 年。

大本本部教務局企画・編集『実践リーダー教本「初級編」』天声社、2004 年（初版第 2 刷）（初版第 1 刷は 2004 年とおもわれる）。

岡田光玉述、崇教真光編集『寸教「大いなるミチしるべ」』L・H 陽光出版、2001 年（10 版）（初版は 1990 年）。

岡田茂吉『明日の醫術』（第一編・第二編・第三編）志保澤武、1943 年（非売品）。

『岡田茂吉全集』著述篇　第二巻、『岡田茂吉全集』刊行委員会、1994 年。

岡本圭史「出来事を生み出す教団機関誌：一九七〇年代の白光真宏会の事例から」日本宗教学会編『宗教研究』第 84 巻第 4 輯、日本宗教学会、2011 年 3 月。

岡本圭史「信仰を支えるもの：白光真宏会における信者達の実践と語り」日本宗教学会編『宗教研究』第 86 巻第 1 輯、日本宗教学会、2012 年 6 月。

岡本天明『ひふみ新世紀』コスモ・テン、2002 年（2 刷）（初版は 2001 年）。

岡本天明『ひふみ神示』コスモビジョン、2009 年（第 7 刷）（初版は 2001 年）。

小田秀人『四次元の不思議』潮文社、1971 年（第 4 刷）（第 1 刷は 1971 年 2 月 15 日）。

小野泰博『谷口雅春とその時代』東京堂出版、1995 年 3 月 10 日。

オリバー・ロッヂ『死後乃生存』（高橋五郎譯）、玄黄社、1920（6 版）（初版は 1917 年）。

粕川章子『大霊媒ホーム』日本心霊科学協会出版部、1957 年。

上之郷利昭「新興教団に参入した広告界のプリンスの活躍　五井昌久　瀬木庸介」『歴史読本』増刊、新人物往来社、1988 年 11 月 5 日。

上之郷利昭『教祖誕生』新潮社、1987 年。

ガンディー『非暴力の精神と対話』（森本達雄訳）第三文明社（レグルス文庫）、2001 年。

ガンディー『獄中からの手紙』（森本達雄訳）岩波書店（岩波文庫）、2010 年。

甘露寺受長『天皇さま』日輪閣、1966 年。

木村晶子「アシジの聖フランシスコの「平和の祈り」の由来」『人間生活学研究』第 15 号、藤女子大学、2008 年 3 月、31-52 頁。

木村毅（き）『ドゥホボール教徒の話』講談社、1965 年。

『経典』立正佼成会、1994 年 1 月（改訂版初刷）（初版は 1938 年 4 月）。

窪田高明「『霊界物語』における台湾」『神田外語大学日本研究所紀要』第 7 巻、2015 年 6 月。

熊田一雄「宗教心理複合運動における医療化の問題――白光真宏会の場合――」『愛知学院大学文学部紀要』第 29 号、愛知学院大学、1999 年。

熊田一雄「白光真宏会とジェンダー――規範からの自由について――」愛知学院大学人間文化研究所編『人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要』第 15 号、愛知学院大学、2000 年 9 月。

隈元正樹『療術から宗教へ―世界救世教の教団組織論的研究―』ハーベスト社、2018 年。

倉田百三『赤い霊魂』岩波書店、1926 年。〔一部、頁削除のある本〕

訓覇信雄（くるべしんゆう）・藤井日達著、丸山照雄・浅野順一編集『現代人の宗教 4　絶対否定の精神』御茶の水書房、1986 年。

黒川柚月『［日月神示］夜明けの御用　岡本天明伝――初めて明かされる雛型神業の足跡！』ヒカルランド、2012 年。

黒羽文明「検証　異色集団を斬る③　宗教法人白光真宏会――祈りによる世界平和実現を希求する風変わりな教団」月刊『政界』政界出版社、1997 年 1 月。

五井昌久『神と人間――安心立命への道標』五井先生讃仰會、1953 年 5 月 20 日（初版本）（非賣品）。

五井昌久『天と地をつなぐ者』宗教法人五井先生讃仰会、1955 年 6 月 20 日（初版本）（非売品）。

五井昌久『聖書講義（第一巻）』白光真宏会出版局、1969 年。

五井昌久『聖書講義（第二巻）』白光真宏会出版局、1969 年。

五井昌久『愛・平和・祈り』白光真宏会出版局、1970 年（第 6 版）（初版は 1962 年）。

五井昌久『宗教と平和』白光真宏会出版局、1970 年（第 2 版）（初版は 1968 年）。

五井昌久『（小冊子）宗教界への提言』祈りによる世界平和運動 PR グループ、1960 年代末～ 1970 年代か。

五井昌久『生きている念仏』白光真宏会出版局、1971 年（4 版）（初版は 1968 年）。

五井昌久『聖書講義（第三巻）』白光真宏会出版局、1972 年。

五井昌久『詩集　いのり』白光真宏会出版局、1973 年（5 刷）（初版は 1962 年）。

五井昌久『平和を呼ぶ声』白光真宏会出版局、1975 年。

五井昌久『天と地をつなぐ者』白光真宏会出版局、1976 年（改版増補 7 刷）（改版増補本）（初版は 1955 年）。

五井昌久『神と人間――安心立命への道しるべ』白光真宏会出版局、1978 年（28 版〔改版〕）（改版本）（初版は 1953 年 5 月 20 日）。

五井昌久『宗教問答』白光真宏会出版局、1978 年（11 版）（初版は 1959 年）。

五井昌久『老子講義』白光真宏会出版局、1978 年（5 版）（初版は 1963 年）。

五井昌久『五井昌久全集　第 1 巻〈講演篇〉』白光真宏会出版局、1980 年。

五井昌久『五井昌久全集』（全 13 巻）、白光真宏会出版局、1980-1981 年。

五井昌久『世界人類が平和でありますように』白光真宏会出版局、1981 年 6 月 20 日（4 版）（初版は同 1981 年 5 月 10 日）。

五井昌久『日本の天命』白光真宏会出版局、1984 年。

五井昌久『素直な心　五井昌久講話集 2』白光真宏会出版局、1984 年（5 版）（初版は 1980 年）。

五井昌久『光明の生活者　五井昌久講話集 3』白光真宏会出版局、1985 年（3 版）（初版は 1981 年）。

五井昌久『質問ありませんか？』白光真宏会出版局、1988 年。

五井昌久『神は沈黙していない』白光真宏会出版局、1990 年（16 版）（初版は 1967 年）。

五井昌久『明るい心　五井昌久講話集 4』白光真宏会出版局、1991 年（8 版）（初版は 1981 年）。

五井昌久『生命光り輝け　五井昌久講話集 1』白光真宏会出版局、1992 年（9 版）（初版は 1980 年）。

五井昌久『不動の心　五井昌久講話集 5』白光真宏会出版局、1993 年（第 5 版）（初版は 1983 年）。

五井昌久『日本の心』白光真宏会出版局、1993 年（11 版）（初版は 1973 年）。

五井昌久『人類の未来』白光真宏会出版局、1993 年（第 12 版）（初版は 1974 年）。

五井昌久『非常識・常識・超常識』白光真宏会出版本部、1994 年（11 版）（初版は 1974 年）。

五井昌久『冬の海――五井昌久歌集』白光真宏会出版本部、1995 年（2 版）（初版は 1987 年）。

五井昌久『失望のない人生』白光真宏会出版本部、1996 年（9 版）（初版は 1977 年）。

五井昌久『続宗教問答』白光真宏会出版本部、1997 年（15 版）（初版は 1970 年）。

五井昌久『夜半（よわ）の祈り――五井昌久歌集』白光真宏会出版本部、2000 年。

五井昌久『質問ありませんか？　2（ツー）』白光真宏会出版本部、2002 年。

五井昌久『高級霊（ハイスピリツト）は上機嫌』白光真宏会出版本部、2004 年（10 版）（初版は 1987 年）。

五井昌久『聖ケ丘講話　天の心かく在り――日本の進むべき道』白光真宏会出版本部、2004 年。

五井昌久『文庫版　神と人間――安心立命への道しるべ』白光真宏会出版本部、2004 年（改訂 7 版〔改版〕）（改版文庫本）（初版は 1953 年 5 月 20 日）。

五井昌久『（小冊子）世界平和の祈りの運動精神』白光真宏会出版本部、2005 年（3 版）（新装初版は 1998 年）。

五井昌久『天と地をつなぐ者』白光真宏会出版本部、2008 年（改版 30 版）（改版本）（初版は 1955 年）。

五井昌久『（小冊子）世界平和の祈り　Q&A』白光真宏会出版本部、2010 年（9 版）（初版は 1997 年）。

五井昌久『講話集 1　神様にまかせきる』白光真宏会出版本部、2010 年（2 版）（初版は 2009 年）。

五井昌久『講話集 2　みんな救われている』白光真宏会出版本部、2010 年。

五井昌久『講話集 3　自分も光る 人類も光る』白光真宏会出版本部、2011 年。

五井昌久・西園寺昌美『世界のひな形――日本』白光真宏会出版本部、2011 年 10 月 20 日。

五井昌久『（小冊子）死んだらどうなる？　Q&A』白光真宏会出版本部、2013 年（12 版）（初版は 1996 年）。

五井昌久『講話集 4　想いが世界を創っている』白光真宏会出版本部、2014 年。

五井昌久『講話集 5　いい時に生まれた』白光真宏会出版本部、2015 年。

五井昌久『五井昌久詩集　純白』白光真宏会出版本部、2016 年（新装初版）（初版は 1977 年）。

（カセットテープ）『五井先生講演会集』（全 19 巻）。（カセットテープ）『五井先生ご法話』No. 1–No.　45（全 45 巻）。（カセットテープ）『五井先生聖ヶ丘講話』（全 13 巻）。（カセットテープ）『特選五井先生ご法話集』001–010（全 10 巻）。

（CD）『五井昌久講話集』（第 1 集～第 6 集）、白光真宏会。

（CD）『五井昌久先生による統一指導〈世界平和の祈り〉』白光真宏会。

古我きぬ「神の支配による平和（「主の祈り」と現代〈特集〉）『世紀』第 508 号、世紀編集室、1992 年 9 月、58-67 頁。

児玉克哉・佐藤安信・中西久枝『はじめて出会う平和学――未来はここからはじまる』有斐閣、2004 年。

西園寺昌美『天命に生きる』白光真宏会出版局、1982 年（3 版）（初版は 1981 年）。

西園寺昌美『明日はもっと素晴しい』白光真宏会出版局、1986 年（10 版）（初版は 1979 年）。

西園寺昌美『クリエイティング・ザ・フューチャー――未来創造』白光真宏会出版本部、2015

年。

斎藤秀雄『光のドーナツ　斎藤秀雄童話集』白光真宏会出版局、1988 年。

斎藤秀雄『霊験巡講記　改訂版』白光真宏会出版本部、2004 年（改訂初版）（初版は 1979 年）。

迫水久常（さこみずひさつね）『大日本帝国最後の四か月』オリエント書房、1973 年。

塩谷信男『宇宙無限力の活用』サンマーク出版（サンマーク文庫）、1998 年。

塩谷信男『地球の破滅を救う』東明社、2000 年（4 版）（初版は 1994 年）。

篠田康雄『緑陰隻語』熱田神宮宮庁、1985 年。

四戸潤弥「イスラームと祈り（特集 今 平和をうたう）」『礼拝と音楽』第 166 号、日本キリスト教団出版局、2015 年、22-26 頁。

島薗進「生長の家と心理療法的救いの思想――谷口雅春の思想形成過程をめぐって」桜井徳太郎編『日本宗教の正統と異端』弘文堂、1988 年、67-90 頁。

島薗進「宗教理解と客観性」宗教社会学研究会編『いま　宗教をどうとらえるか』海鳴社、1992 年、108-148 頁。

島薗進「神と仏を超えて――生長の家の救済思想の生成」今野達・佐竹昭広・上田閑照編集『岩波講座　日本文学と仏教　第 8 巻　仏と神』岩波書店、1994 年、257-284 頁。

島薗進『現代救済宗教論』青弓社、1995 年 8 月 30 日（第 1 版第 4 刷）（第 1 版第 1 刷は 1992 年 1 月 30 日）。

清水勇『ある日の五井先生』オンブック、2007 年（第 2 刷）（初版第 1 刷は 2006 年）。

ジャネット・オッペンハイム『英国心霊主義の抬頭』（和田芳久訳）工作舎、1992　年。〔原著は、Janet　Oppenheim, THE OTHER WORLD: Spiritualism and psychical research in England, 1850-1914, Cambridge University Press, 1985.〕

ジュアン・エルベル著、神社本庁編集『神道―日本の源泉―』神社本庁、1970 年（非売品）。

『週刊金曜日』成澤宗男編著『日本会議と神社本庁』金曜日、2017 年 2 月 13 日（第 7 刷）（初版は 2016 年 6 月 29 日）。

宗教社会学研究会編集委員会編集『（宗教社会学研究会論集Ⅱ）宗教の意味世界』雄山閣出版、1980 年。

宗教社会学研究会編集委員会編集『（宗教社会学研究会論集Ⅳ）教祖とその周辺』雄山閣出版、1987 年。

ジエラルテイン・カムミンス著、淺野和三郎譯並評釋『永遠の大道』心靈科學研究會出版部、1937 年。

ジェラルディン・カミンズ（G・カミンズ）『永遠の大道〔本文復刻版〕新装版』（浅野和三郎訳）潮文社、2005 年。

ジョージ・アダムスキ（G・アダムスキ）『空飛ぶ円盤同乗記　INSIDE THE SPACE SHIPS』（久保田八郎訳）高文社、1957 年。

神慈秀明会教学室編集室編集『聖教書』宗教法人神慈秀明会、1995 年（12 版）（初版は 1973 年）（非売品）。

（折本）『神想観の実修法』生長の家宇治別格本山修練道場。

『新約聖書　詩篇附　文語訳』日本聖書協会、2000 年。

（月刊）『心霊と人生』大正 15（1926）年 3 月号、心霊科学研究会、1926 年 3 月 1 日。

（月刊）『心霊と人生』昭和 3（1928）年 1 月号、心霊科学研究会、1927 年 12 月 25 日。

（月刊）『心靈研究』昭和 22（1947）年 2 月号、日本心靈科學協會、1947 年 2 月 15 日。

（月刊）『心霊研究』昭和 22（1947）年 3 月号、日本心霊科学協会、1947 年 3 月 15 日。

（月刊）『心霊研究』昭和 22（1947）年 4 月号、日本心霊科学協会、1947 年 4 月 15 日。

（月刊）『心霊研究』昭和 22（1947）年 6 月号、日本心霊科学協会、1947 年 6 月 15 日。

（月刊）『心霊研究』昭和 22（1947）年 7 月号、日本心霊科学協会、1947 年 7 月 15 日。

（月刊）『心霊研究』昭和 23（1948）年 1 月号、日本心霊科学協会、1948 年 1 月 15 日。

崇教真光編、救い主様伝記編纂委員会監修『大聖主　岡田光玉師』L・H 陽光出版、1983 年。

菅野（すがの） 完（たもつ）『日本会議の研究』扶桑社（扶桑社新書）、2016 年 5 月 20 日（第 3 刷）（初版第 1 刷は 2016 年 5 月 1 日）。

『聖書　新共同訳　旧約聖書続編つき』日本聖書協会、1987 年。

『聖書　新共同訳』日本聖書協会、1987、1988 年。

（ビデオ）『聖地　聖ヶ丘』山崎プロダクション制作、1967 年。

生長の家本部編『生長の家三十年史』日本教文社、1959 年。

生長の家本部編『聖光録（生長の家家族必携）』日本教文社、1968 年（改訂版 4 版）（初版は 1953 年）。

生長の家本部編『生長の家四十年史』日本教文社、1969 年。

生長の家本部編『生長の家五十年史』日本教文社、1980 年。

（冊子）『世界各国語による世界各国の平和の祈り　*PRAYER FOR THE PEACE OF EACH COUNTRY IN EACH NATIONAL LANGUAGE*』白光真宏会、1993 年 6 月。

（冊子 pdf）『世界各国語による世界各国の平和の祈り　Prayer for the Peace of Each Country in

Each National Language』白光真宏会、2015 年 6 月。
（冊子）『世界各国の平和の祈り』白光真宏会、1993 年 6 月。
世界救世教本部編『教修要綱』世界救世教出版部、1952 年。
世界救世教教学部編『世界救世教』熱海商事、1973 年。
世界救世教編『天国の礎』メシアニカ ゼネラル、1979 年（改訂新版第 6 刷）。
世界救世教編纂『東方の光　上巻（普及版）』世界救世教出版部、1994 年（改訂第 1 版）（第 1 版は 1983 年）。
世界救世教編纂『東方の光　下巻（普及版）』世界救世教出版部、1994 年（改訂第 1 版）（第 1 版は 1983 年）。
世界救世教教典編纂委員会編『天国の礎　宗教下』世界救世教出版部、1996 年（第 1 版第 3 刷）（第 1 版第 1 刷は 1993 年）。
（月刊紙）『世界平和の祈り』第 662 号～第 707 号、白光真宏会出版本部、2014 年 10 月～ 2018 年 7 月。
関口勝利『手かざしのすすめ――魂のルネッサンス　真光の大奇跡』陽光社、1999 年（第 4 版）（初版は 1998 年）。
瀬木庸介『宇宙から届いたマニュアル』白光真宏会出版本部、1997 年。
瀬木庸介『夜明けはもう間近い』河出書房新社、1999 年 11 月。
瀬木庸介『人が神に出会う時』河出書房新社、2000 年 3 月。
『戦後神道界の群像』編集委員会編集『神社新報創刊七十周年記念出版　戦後神道界の群像』神社新報社、2016 年 7 月。
高橋英雄編著『如是我聞』白光真宏会出版局、1983 年（17 版）（初版は 1966 年）。
高橋英雄編著『続々如是我聞』白光真宏会出版局、1984 年（4 版）（初版は 1980 年）。
高橋英雄『師に倣う』白光真宏会出版局、1987 年（3 版）（初版は 1986 年）。
高橋英雄『新・師に倣う』白光真宏会出版局、1988 年。
高橋英雄編著『続・如是我聞』白光真宏会出版本部、2000 年（15 版）（初版は 1974 年）。
高橋英雄『五井先生の辞書』白光真宏会出版本部、2004 年（3 版）（初版は 1996 年）。
高橋英雄『（個人誌）神人』第 31 号、高橋英雄、2006 年 3 月 1 日。
高橋英雄『（個人誌）神人』第 34 号、高橋英雄、2006 年 6 月 1 日。
高橋英雄『（個人誌）神人』第 38 号、高橋英雄、2006 年 10 月 1 日。
高橋英雄『（個人誌）五井先生研究』第 76 号、高橋英雄、2009 年 12 月 1 日。

高橋英雄『(個人誌) 五井先生研究』第 79 号、高橋英雄、2010 年 3 月 1 日。
高橋英雄『(個人誌) 五井先生研究』第 84 号、高橋英雄、2010 年 8 月 1 日。
高橋英雄『(個人誌) 五井先生研究』第 85 号、高橋英雄、2010 年 9 月 1 日。
高橋英雄『(個人誌) 五井先生研究』第 89 号、高橋英雄、2011 年 1 月 1 日。
高橋英雄『(個人誌) 五井先生研究』第 97 号、高橋英雄、2011 年 9 月 1 日。
高橋英雄『(個人誌) 五井先生研究』第 99 号、高橋英雄、2011 年 11 月 1 日。
高橋英雄『(個人誌) 五井先生研究』第 109 号、高橋英雄、2012 年 9 月 1 日。
高橋英雄『五井先生を語る (一)』高橋英雄、2012 年 11 月 (第 2 版)。
高橋英雄『(個人誌) 五井先生研究』第 114 号、高橋英雄、2013 年 2 月 1 日。
高橋英雄『(個人誌) 五井先生研究』第 122 号、高橋英雄、2013 年 10 月 1 日。
高橋英雄『(個人誌) 五井先生研究』第 127 号、高橋英雄、2014 年 3 月 1 日。
高橋英雄『(個人誌) 五井先生研究』第 128 号、高橋英雄、2014 年 4 月 1 日。
高橋英雄『(個人誌) 五井先生研究』第 129 号、高橋英雄、2014 年 5 月 1 日。
高橋英雄『白光使徒列伝 (一)』高橋英雄、2014 年 12 月。
高橋英雄『白光使徒列伝 (二)』高橋英雄、2015 年 2 月。
高橋英雄『(個人誌) 五井先生研究』第 139 号、高橋英雄、2015 年 2 月 1 日。
高橋英雄『(個人誌) 五井先生研究』第 140 号、高橋英雄、2015 年 3 月 1 日。
高橋英雄『白光使徒列伝 (三)』高橋英雄、2015 年 6 月。
高橋英雄『(個人誌) 五井先生研究』第 147 号、高橋英雄、2015 年 10 月 1 日。
高橋英雄『(個人誌) 五井先生研究』第 148 号、高橋英雄、2016 年 1 月 20 日。
高橋英雄『(個人誌) 五井先生研究』第 151 号、高橋英雄、2016 年 4 月 25 日。
高橋英雄『(個人誌) 五井先生研究』第 152 号、高橋英雄、2016 年 5 月 25 日。
高橋英雄『(個人誌) 五井先生研究』第 153 号、高橋英雄、2016 年 6 月 25 日。
高橋英雄『(個人誌) 五井先生研究』第 154 号、高橋英雄、2016 年 7 月 30 日。
高橋英雄『(個人誌) 五井先生研究』第 155 号、高橋英雄、2016 年 8 月 30 日。
高橋英雄『(個人誌) 五井先生研究』第 156 号、高橋英雄、2016 年 9 月 30 日。
高橋英雄『五井せんせい――わが師と歩み来たりし道』白光真宏会出版本部、2016 年 10 月 25 日。
高橋英雄『(個人誌) 五井先生研究』第 157 号、高橋英雄、2016 年 10 月 30 日。
高橋英雄『(個人誌) 五井先生研究』第 158 号、高橋英雄、2016 年 12 月 8 日。

高橋英雄『（個人誌）五井先生研究』第 159 号、高橋英雄、2016 年 12 月 20 日。

高橋英雄『（個人誌）五井先生研究』第 160 号、高橋英雄、2017 年 1 月 20 日。

高橋英雄『（個人誌）五井先生研究』第 161 号、高橋英雄、2017 年 3 月 3 日。

高橋英雄『（個人誌）五井先生研究』第 164 号、高橋英雄、2017 年 6 月 10 日。

高橋英雄『（個人誌）五井先生研究』第 165 号、高橋英雄、2017 年 7 月 7 日。

高橋英雄『（個人誌）五井先生研究』第 166 号、高橋英雄、2017 年 8 月 17 日。

高橋英雄『（個人誌）五井先生研究』第 167 号、高橋英雄、2017 年 10 月 10 日。

高橋英雄『（個人誌）五井先生研究』第 168 号、高橋英雄、2017 年 11 月 11 日。

高橋英雄『五井先生を語る（二）』高橋英雄、2017 年 2 月。

高橋英雄『神のみ実在する――五井先生かく説き給う』白光真宏会出版本部、2017 年 3 月 25 日。

高橋英雄『神の満ちる星の話――五井先生が語った地球と人類の未来図』白光真宏会出版本部、2017 年 9 月 20 日。

竹内てるよ『因縁霊の不思議』たま出版、1981 年（6 版）（初版は 1978 年）。

竹内てるよ『新装版　海のオルゴール―子にささげる愛と詩―』家の光協会、2002 年（新装版第 1 版）（第 1 版は 1977 年）。

竹内満朋『魂の幽霊界行脚―死後の世界の体験記―』霞ヶ関書房、1992 年（第 4 版）（初版は 1971 年）。

武祐一郎（たけゆういちろう）『絶対的平和主義とキリスト教　（武・〈福音と預言〉双書 No.4）』武福音社、2005 年。

田沢康三郎（やすさぶろう）・小谷秀二郎（ひでじろう）『幻想と平和』大和山出版社、1981 年。

田中健介「シリーズ「新宗教」の時代　〈第 14 回〉白光真宏会㊤」『週刊実話』日本ジャーナル出版、2005 年 4 月 21 日 a。

田中健介「シリーズ「新宗教」の時代　〈第 15 回〉白光真宏会㊥」『週刊実話』日本ジャーナル出版、2005 年 4 月 28 日 b。

田中健介「シリーズ「新宗教」の時代　〈第 16 回〉白光真宏会㊦」『週刊実話』日本ジャーナル出版、2005 年 5 月 5 日 c。

田中敞（たいら）『神さまといつも二人』白光真宏会出版本部、2007 年。

田中千代松『新霊交思想・心霊研究・超心理学の年表（日本心霊科学協会研究報告第一号）』日本心霊科学協会、1974 年。

田中千代松編『新・心霊科学事典―人類の本史のために―』潮文社、1984 年。

棚次正和『宗教の根源―祈りの人間論序説―』世界思想社、1998 年。

棚次正和『祈りの人間学 ―― いきいきと生きる』世界思想社、2009 年。

棚次正和「祈りと平和 Prayer and Peace」『Studia humana et naturalia』第 46 号、京都府立医科大学医学部医学科（教養教育）、2012 年 12 月、1-18 頁。

谷口雅春『百事如意』光明思想普及會、1936 年。

谷口雅春『新百事如意』光明思想普及會、1940 年（普及廉價版再發行）（初版は 1938 年）。〔原著はホームズ（ホルムス）の“Being and Becoming”〕

谷口雅春編著『精神分析の話』光明思想普及會、1941 年 11 月（2 版）（初版は同年 6 月）。

谷口雅春編著『人生は心で支配せよ―光明思想の哲學と神想觀の實修法―』光明思想普及會、1943 年（第 2 版）（初版は 1940 年）。〔F. L. ホルムス著、谷口雅春譯補『如何にせば運命を支配し得るか』の改訂新版〕

谷口雅春『限りなく日本を愛す』日本教文社、1953 年。

谷口雅春『甘露の法雨』日本教文社、1969 年（初版は 1949 年）。

谷口雅春『古事記と現代の預言』日本教文社、1969 年 3 月（6 版）（初版は 1968 年 5 月）。

谷口雅春『占領憲法下の日本』日本教文社、1969 年 8 月（9 版）（初版は同年 5 月）。

谷口雅春『続　占領憲法下の日本』日本教文社、1970 年。

谷口雅春『占領憲法下の政治批判』日本教文社、1971 年 2 月（4 版）（初版は同 1971 年 1 月）。

谷口雅春編著『人生を支配する先祖供養』日本教文社、1974 年 6 月（4 版）（初版は同 1974 年 4 月）。

谷口雅春『奇蹟を生ずる実相哲学〈生長の家入門講義　上〉』日本教文社、1981 年。

谷口雅春『増補新かな版　詳説　神想観』日本教文社、1981 年（54 版）（初版は 1970 年）。

谷口雅春『生命の實相　頭注版　第 10 巻（靈界篇 下）』日本教文社、1982 年（45 版）（初版は 1963 年）。

谷口雅春『生命の實相　頭注版　第 9 巻（靈界篇 上）』日本教文社、1983 年（53 版）（初版は 1963 年）。

谷口雅春『霊供養入門―運命は改善できる―』世界聖典普及協会、1983 年 9 月（2 版）（初版は同 1983 年 8 月）。

谷口雅春『聖経版　真理の吟唱』日本教文社、1984 年（37 版）（初版は 1972 年）。

谷口雅春『生命の實相　頭注版　第 1 巻（總説篇／實相篇 上）』日本教文社、1988 年（126 版）

（初版は 1962 年）。
谷口雅春『生命の實相　頭注版　第 4 巻（生命篇 下）』日本教文社、1988 年（75 版）（初版は 1962 年）。
谷口雅春『生命の實相　頭注版　第 19 巻（自傳篇 上）』日本教文社、1988 年（58 版）（初版は 1963 年）。
谷口雅春『生命の實相　頭注版　第 20 巻（自傳篇 下／聖詩篇）』日本教文社、1988 年（61 版）（初版は 1963 年）。
谷口雅春『生命の實相　頭注版　第 21 巻（經典篇）』日本教文社、1988 年（69 版）（初版は 1964 年）。
谷口雅春『類纂・生命の實相　人類無罪宣言』（楠本加美野編）日本教文社、1992 年（34 版）（初版は 1973 年）。
谷口雅春『大和の国　日本――占領下の啓示とその後の論策』日本教文社、1997 年（10 版）（初版は 1983 年）。
（CD）谷口雅春先生御指導『基本的神想観／如意宝珠観』世界聖典普及協会、2001 年。
谷口雅春『大型聖経版　続　真理の吟唱』日本教文社、2004 年。
（CD）谷口雅春講話『（講習会講話シリーズ）神想観についての講義と実修』世界聖典普及協会、2006 年。
谷口雅春『聖経　四部経』光明思想社、2012 年。
（月刊）『千鳥』1948 年 6 月号～ 9 月号、千鳥會、1948 年 6 月～ 9 月。
（月刊）『千鳥』1948 年 11 月号、千鳥會、1948 年 11 月。
（月刊）『千鳥』1949 年 6 月号～ 1950 年 1 月号、千鳥會、1949 年 6 月～ 1950 年 1 月。
中央学術研究所編著『宗教間の協調と葛藤』佼成出版社、1989 年。
長（ちょう）妙子、ほか『魂の平安と喜びを語る』白光真宏会出版局、1992 年。
塚田穂高「霊能の「指導者集中型」宗教運動の展開過程における発達課題―日本の新宗教・霊波之光の事例から―」『東京大学宗教学年報　ＸＸⅣ』東京大学宗教学研究室、2006 年。（抜刷）
塚田穂高「新宗教運動における指導者の後継者への継承過程―霊波之光の事例から―」『次世代人文社會研究』第 3 號、韓日次世代學術 FORUM、2007 年 3 月。（別刷）
塚田穂高『宗教と政治の転轍点――保守合同と政教一致の宗教社会学』花伝社、2015 年。
塚田穂高「「宗教の右傾化」はどこにあるのか――現代日本「宗教」の類型的把握から」『徹底

検証　日本の右傾化』筑摩書房（筑摩選書）、2017 年、361-382 頁。
対馬路人・西山茂・島薗進・白水寛子「新宗教における生命主義的救済観」『思想』第 665 号、1979 年 11 月、92-115 頁。
対馬路人「世界救世教の影響」、井上ほか編『新宗教事典』弘文堂、1990 年、85-88 頁。
対馬路人・津城寛文「大本の影響」、井上ほか編『新宗教事典』弘文堂、1990 年、74-80 頁。
対馬路人「宗教と科学のはざまで――現代日本の「心霊研究」運動」、宗教社会学の会編『神々宿りし都市（まち）』創元社、2000 年（第 1 版第 2 刷）（第 1 版第 1 刷は 1999 年）、225-253 頁。
津城寛文『鎮魂行法論――近代神道世界の霊魂論と身体論』春秋社、1990 年。
出口王仁三郎著、霊界物語編纂委員会編『霊界物語　第 17 巻（如意宝珠、辰の巻）』愛善世界社、1996 年。
出口王仁三郎著、霊界物語編纂委員会編『霊界物語　第 19 巻（如意宝珠、午の巻）』愛善世界社、1997 年。
出口王仁三郎著、霊界物語編纂委員会編『霊界物語　第 21 巻（如意宝珠、申の巻）』愛善世界社、1997 年。
出口王仁三郎『霊の礎』あいぜん出版、1997 年。
出口王仁三郎著、霊界物語編纂委員会編『霊界物語　第 47 巻（舎身活躍、戌の巻）』愛善世界社、2003 年。
出口王仁三郎『新装版　霊界物語　第 1 輯』八幡書店、2004 年（新装版初版）（愛蔵版初版は 1989 年）。
出口王仁三郎著、霊界物語編纂委員会編『霊界物語　第 56 巻（真善美愛、未の巻）』愛善世界社、2006 年。
出口三平・清水厳三郎「宗教のつなぎ方――大本の宗教提携と平和運動をめぐって――」（特集 日本宗教史像の再構築―トランスナショナルヒストリーを中心として―）『人文學報』第 108 号、京都大學人文科學研究所、2015 年 12 月、163-187 頁。
出口日出麿『信仰叢話』天声社、1978 年（増補改訂版第 3 刷）（初版は 1935 年）。
出口和明「浅野和三郎と皇道大本」浅野和三郎『大本霊験秘録』八幡書店、1991 年。
寺田喜朗「新宗教とエスノセントリズム―生長の家の日本中心主義の変遷をめぐって―」『東洋学研究』第 45 号、東洋大学東洋学研究所、2008 年、198-169 頁。
寺田喜朗『旧植民地における日系新宗教の受容―台湾生長の家のモノグラフ―』ハーベスト社、2009 年 2 月 16 日。

寺田喜朗「生長の家の災因論と救済論」日本宗教学会編『宗教研究』第 82 巻第 4 輯、日本宗教学会、2009 年 3 月 30 日、995-996 頁。

（ビデオ）『（映画）天と地をつなぐ者』1968 年。

冨田興次（こうじ）『ふく風たつ浪の音までも』白光真宏会出版本部、2008 年。

友清歡眞「神界の實相」『天行居パンフレツト叢書　第三輯　神仙の存在に就て』神道天行居、1941 年（4 版）（初版は 1938 年）。

友清歓真『霊界雑考（未定稿）』神道天行居、1957 年。

友清歓真『しきしま霊界訪問記』神道天行居、1994 年。

鳥海靖・三谷博・渡邉昭夫・野呂肖生『現代の日本史　改訂版』山川出版社、2012 年。

内藤篁鳳『（小冊子）おかげを受けたい人のために』真の道出版部、1970 年。

永岡崇「宗教文化は誰のものか :『大本七十年史』編纂事業をめぐって」『日本研究』第 47 号、国際日本文化研究センター、2013 年 3 月、127-169 頁。

永岡崇『新宗教と総力戦――教祖以後を生きる』名古屋大学出版会、2015 年。

中川崇風『（小冊子）　導きの栞　No. 3　真の道の祈り―祈ぎ言の解説―』真の道、1970 年。

中濃教篤（なかのきょうとく）・壬生照順（みぶしょうじゅん）『信仰者の抵抗――宗教平和運動の歴史』誠信書房、1959 年。

中野與之助述『三五（あなない）の教義　上巻・下巻』三五教国際総本部、1954 年（非売品）。

中野與之助『霊観した幽界』三五教国際総本部、1965 年 10 月 3 日（再版）（初版は、同 1965 年 9 月 23 日）。

中野與之助『霊界で観た宇宙 六之巻（六巻）　本命の宗教』三五教国際総本部、1966 年。

中野與之助『霊界で観た宇宙 七之巻（七巻）　霊・神・人』オイスカ・インターナショナル世界本部事務局、1966 年。

成田龍一『近現代日本史と歴史学――書き替えられてきた過去』中央公論新社（中公新書）、2012 年 12 月（4 版）（初版は 2012 年 2 月）。

成澤宗男（なるさわむねお）・山口二郎・想田和弘（そうだ）・熊野直樹・森達也・白井聡（さとし）・木村朗（あきら）・海渡雄一（かいど）・川内博史『「開戦前夜」のファシズムに抗して』かもがわ出版、2015 年。

西田天香著、村田正喜（まさき）編『「有（ゆう）」即（そく）「無（む）」―〔⌒＋光（おひかり）の合成字〕の世界（せかい）―　西田天香の世界5』一燈園生活研究所、2014 年。

日本宗教者平和協議会　橋本左内編『宗平協ブックレット 2　平和の祈りを行動の波へ　「宗教と平和」500 号記念座談会』本の泉社、2011 年 3 月。

日本宗教者平和協議会「入会のおさそい」パンフレット。

（財団法人）日本心霊科学協会『創立五十周年記念特集』日本心霊科学協会、2000 年。
日本心霊科学協会『（リーフレット）精神統一の手引き』日本心霊科学協会、2013 年。
日本を守る会編『昭和史の天皇・日本』日本を守る会、1975 年。
沼田健哉『宗教と科学のネオパラダイム―新新宗教を中心として―』創元社、1995 年。
野村純一・三浦佑之・宮田登・吉川祐子編『柳田國男事典』勉誠出版、1998 年。
萩原真明『まことの道を求めて　1　天命が見える』旺史社、1994 年。
萩原真明監修『真の道神示』真の道出版部、1995 年。
萩原真明監修『まことの道を求めて　2　梶さんの霊界通信』旺史社、1996 年。
萩原真明監修、山口萠晃編著『まことの道を求めて　3　人間の幸福』旺史社、1997 年。
萩原眞編著『死者よりの通信　靈界物語　地獄篇』千鳥會、1948 年。
萩原真『宗教と生活』真の道出版部、1962 年。
萩原真『生長の法則』真の道、1976 年。
幡鎌一弘編『語られた教祖――近世・近現代の信仰史――』法藏館、2012 年。
春川栖仙編『心霊研究辞典』東京堂出版、1990 年。
ヴィクトル・ユゴー『レ・ミゼラブル　（上・下）』（永山篤一訳）角川書店（角川文庫）、2012 年。
火野葦平『王者の座』彌生書房、1958 年。
（月刊）『白光』（1954 年 11 月号・創刊号～ 1985 年 12 月号）。
（月刊）『白光』2005 年 2 月号（通巻 604 号、法人設立 50 周年記念号）、白光真宏会、2005 年 2 月。
（月刊）『白光』2006 年 4 月号（通巻 618 号）、白光真宏会、2006 年 4 月。
（月刊）『白光』2011 年 5 月号（通巻 679 号）、白光真宏会、2011 年 5 月。
（月刊）『白光』（2013 年 4 月号～ 2019 年 7 月 10 日号）、白光真宏会。
（DVD）白光真宏会『五井先生の横顔』白光真宏会、1967 年（撮影）。
（DVD）白光真宏会『我即神也・人類即神也の印の組み方』白光真宏会。
（DVD）白光真宏会『呼吸法による人類即神也の印の組み方』白光真宏会。
（DVD）白光真宏会『（SOPP）2007　世界平和交響曲――宗教・宗派を超えて、共に世界の平和を祈る』白光真宏会。
（CD）白光真宏会『白光聖歌集』白光真宏会、2008 年 6 月（録音）。
（DVD）白光真宏会『2015 Symphony of Peace Prayers　世界平和交響曲』白光真宏会。

白光編集部編『輝ける死　安らかな瞬間』白光真宏会出版局、1992 年。

平田篤胤著、子安宣邦校注『霊の真柱』岩波書店（岩波文庫）、1998 年。

『廣島女學院報』第 164 号、2011 年 10 月 1 日。

フエンウイツク・ホームズ（F. L. ホルムス）著、谷口雅春譯補『如何にせば運命を支配し得るか』實業之日本社、1925 年。〔原著はフエンウイツク・ホームズ（ホルムス）の“The Law of Mind in Action”〕

藤井日達・森竜吉「非暴力の祈りと実践の八十七年――独自の平和運動に一生を捧げる老師の精神史」『中央公論』第 86 巻第 10 号、中央公論新社、1971 年 7 月、294-308 頁。

藤井日達『わが非暴力　藤井日達自伝』春秋社、1972 年。

藤井日達大聖人御法話集『天鼓（てんく）　要文集（非売品）』日本山妙法寺、1997 年。

藤村道生（みちお）『世界現代史 1　日本現代史』山川出版社、1983 年（1 版 3 刷）（初版 1 刷は 1981 年）。

フリードリヒ・ハイラー『（宗教学名著選　第 4 巻）祈り』（深澤英隆監修、丸山空大・宮嶋俊一訳）国書刊行会、2018 年。

文化庁編『宗教年鑑　平成 7 年版』ぎょうせい、1996 年 3 月 1 日。

文化庁編『宗教年鑑　平成 8 年版』ぎょうせい、1997 年 5 月 15 日。

文化庁編『宗教年鑑　平成 13 年版』ぎょうせい、2002 年 2 月 25 日。

文化庁編『宗教年鑑　平成 25 年版』ぎょうせい、2014 年 6 月 20 日。

文化庁編集『宗教年鑑　平成 28 年版』文化庁、2017 年 2 月 28 日。

法政大学大原社会問題研究所編著『日本労働年鑑　第 24 集　1952 年版』時事通信社、1951 年 10 月 30 日。（上記『日本労働年鑑』の内容は、下記サイトで確認した。http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/rn/24/rn1952-277.html　2018 年 3 月 14 日最終閲覧）

星川啓慈・山脇直司・山梨有希子・斎藤謙次・濱田陽・田丸徳善『現代世界と宗教の課題――宗教間対話と公共哲学』蒼天社出版、2005 年。

星川啓慈・石川明人『人はなぜ平和を祈りながら戦うのか？ ―私たちの戦争と宗教―』並木書房、2014 年。

堀江宗正編『宗教と社会の戦後史』東京大学出版会、2019 年。

本田親徳原著、鈴木重道編纂・校訂『本田親徳全集（全）』八幡書店、1994 年（新装版第 4 刷）（初版〔山雅房〕は 1976 年）。

『（機関紙）眞報』第 37 号、真の道出版部、1960 年 2 月 1 日。

真の道編集部『導きの栞　No. 2』真の道、1969 年。

真の道出版部『守護霊様と私　第二集』真の道本部、1982 年。

真の道出版部編『真を求めて　萩原真自伝』真の道、1991 年。

マーチン・ファン・クレフェルト『戦争文化論（上・下）』（石津朋之監訳）原書房、2010 年。

マックス・ヴェーバー『宗教社会学論選』（大塚久雄・生松敬三訳）みずず書房、1983 年（初版は 1972 年）。

マックス・ヴェーバー（M・ヴェーバー）『ヒンドゥー教と仏教　宗教社会学論集Ⅱ』（古在由重訳）　大月書店 、2010 年（初版は 2009 年）。

マックファーランド（H. N. マックファーランド）『神々のラッシュアワー――日本の新宗教運動』（内藤豊・杉本武之訳）社会思想社、1969 年。

松本健一『神の罠――浅野和三郎、近代知性の悲劇』新潮社、1989 年。

三浦清宏『近代スピリチュアリズムの歴史――心霊研究から超心理学へ』講談社、2008 年。

ミルチャ・エリアーデ『シャーマニズム――古代的エクスタシー技術』（堀一郎訳）冬樹社、1974 年。

村上重良『近代民衆宗教史の研究』法蔵館、1972 年（第 2 版第 2 刷）（第 2 版第 1 刷は 1963 年）。

村田正雄『私の霊界通信　第 1 巻　―島田ゆうさん編―』白光真宏会、1967 年。

村田正雄『私の霊界通信　第 4 巻　―西川定子さん編―』白光真宏会出版局、1973 年。

村田正雄『私の霊界通信　第 2 巻　―木口武之亮さん編―』白光真宏会出版局、1978 年（6 版）（初版は 1971 年）。

村田正雄『私の霊界通信　第 5 巻　―霊界の禅と各界探訪―』白光真宏会出版局、1984 年（6 版）（初版は 1975 年）。

村田正雄『心の旅路』村田正雄、1984 年 4 月 20 日（2 版）（初版は同 1984 年 1 月 20 日）（非売品）。

村田正雄『私の霊界通信　第 3 巻　―霊界のあり方と科学者―』白光真宏会出版本部、1995 年（10 版）（初版は 1972 年）。

村田正雄『空飛ぶ円盤と超科学』白光真宏会出版本部、2004 年（18 版）（初版は 1974 年）。

（映画）メル・ギブソン監督、アンドリュー・ガーフィールド主演『ハクソー・リッジ（原題：*Hacksaw Ridge*）』（字幕版）、キノフィルムズ（日本の配給）、2016 年製作（日本では、2017 年 6 月 24 日公開）。〔セブンスデー・アドベンチスト教会信徒のすがたが描かれた〕

明治神宮崇敬会編『明治の精神』明治神宮・明治神宮崇敬会、1969 年 11 月 3 日。

森下徹「戦後宗教者平和運動の出発」（特集 近代日本社会の軍事動員と抵抗）『立命館大学人文科学研究所紀要』第 82 号、立命館大学人文科学研究所、2003 年 12 月、135-162 頁。

モーリス・マーテルリンク『死後は如何』（栗原古城訳）玄黄社、1927 年（21 版）（初版は 1916 年）。

安岡正篤『日本の運命――日本を救ふ道』明徳出版社、1955 年。

安岡正篤講述、芳村玲好編『安岡正篤――人生は難題克服に味がある』三五館、2003 年。

柳田國男『柳田國男全集 13』筑摩書房（ちくま文庫）、2010 年（第 7 刷）（第 1 刷は 1990 年）。

山田克郎『王者の庭――合気道 植芝盛平伝』浪速書房、1959 年。

山本幸司『穢と大祓』平凡社、1993 年（初版第 2 刷）（初版第 1 刷は 1992 年）。

弓山達也『天啓のゆくえ――宗教が分派するとき』日本地域社会研究所、2005 年。

横田理博『ウェーバーの倫理思想――比較宗教社会学に込められた倫理観』未來社、2011 年。

吉田行典「特集　弟子が語る〈昭和の名僧〉名言集　藤井日達師」『大法輪』2013 年 10 月号、大法輪閣、2013 年 10 月 1 日、112-114 頁。

吉田尚文『五井昌久の信仰形成とその背景』（修士論文〈2014 年 12 月、國學院大學大学院に提出〉、未公刊）。

吉田尚文「五井昌久の思想形成にみられる他教団からの「影響」」『國學院大學大學院紀要 ―文学研究科 ―』第 47 輯、國學院大學大學院、2016 年 3 月 31 日、87-107 頁。

吉田尚文「白光真宏会・五井昌久の「神義論」―苦難の解釈をめぐって―」『宗教学論集』第 36 輯、駒沢宗教学研究会、2017 年 1 月 31 日、31-58 頁。

吉田尚文「五井昌久の「祈りによる世界平和運動」を支える背景思想について」『神道研究集録』第 31 輯、國學院大學大学院神道学・宗教学専攻学生会、2017 年 3 月 20 日、152-131 頁。

吉田尚文「五井昌久における霊界思想の形成」『國學院雑誌』第 119 巻第 1 号（通巻 1329 号）、國學院大學総合企画部広報課、2018 年 1 月 15 日、45-63 頁。

吉村正和『心霊の文化史――スピリチュアルな英国近代』河出書房新社、2010 年。

ヨハン・ガルトゥング『日本人のための平和論』（御立英史訳）、ダイヤモンド社、2017 年。

ランジャナ・ムコパディヤーヤ「藤井日達――「西天〈インド〉開教」の体験」小川原正道編『近代日本の仏教者――アジア体験と思想の変容』慶應義塾大学出版会、2010 年。

ランジャナ・ムコパディヤーヤ「藤井日達と日本山妙法寺の海外布教――「西天開教」から世界平和運動へ」西山茂編著『シリーズ日蓮　第 4 巻　近現代の法華運動と在家教団』春

秋社、2014 年。
「霊光写真」に添付の説明書、白光真宏会。
霊波之光編集『御聖跡』霊波之光出版局、1993 年。
霊波之光『誓訓』霊波之光第一出版局、2004 年。
霊波之光編『御書』霊波之光、2005 年（第 20 版）（初版は 1982 年）（非売品）。
ロバート・キサラ「新宗教の平和思想――一般信徒の意識と行動」（博士論文：東京大学）、1994 年。
ロバート・キサラ『宗教的平和思想の研究――日本新宗教の教えと実践』春秋社、1997 年。
ロバート・キサラ、講演「国民的使命としての世界平和建設」『金城学院大学キリスト教文化研究所紀要』第 5 号、金城学院大学、2001 年、19-33 頁。
ワアド『死後の世界』（淺野和三郎訳）嵩山房、1930 年（再版）（初版は 1925 年）。
ワアド『幽界行脚』（淺野和三郎・粕川章子訳）嵩山房、1931 年。
ワード（J・S・M・ワード）『死後の世界〔本文復刻版〕新装版』（浅野和三郎訳）、潮文社、2006 年。
若松英輔『内村鑑三――悲しみの使徒』岩波書店（岩波新書）2018 年。
脇長生・解説『（小冊子）座談会記録　霊魂の働きの正しい解明―心霊問題のかずかず―』心霊科学研究会、1967 年 10 月 30 日。
脇長生編著『精神統一入門』霊魂研究資料刊行会、1980 年（5 版）（初版は 1961 年）。
脇長生『人間とそのみなもと』霊魂研究資料刊行会、1981 年。
脇長生口述、桑原啓善筆録『霊魂の働きによる正しい健康・平和・繁栄への道〈日本神霊主義・聴聞録〉』日本スピリチュアリスト協会、1998 年（2 刷）（初版は 1970 年）。
脇長生著、春川栖仙監修『守護霊の研究』日本スピリチュアリスト協会、2004 年。
脇長生編著『霊魂研究講座』佐々木静、2014 年。
渡邊楳雄『現代日本の宗教』大東出版社、1950 年。
渡辺雅子『現代日本新宗教論――入信過程と自己形成の視点から』御茶の水書房、2007 年。

・英語文献

Fenwicke L. Holmes, *The Law of Mind in Action: Daily Lessons and Treatments in Mental and Spiritual Science*, New York: ROBERT M. McBRIDGE CO., 1919.
Fenwicke Lindsay Holmes, *Being and Becoming: A Book of Lessons in the Science of Mind Showing*

How to Find the Personal Spirit, New York: ROBERT M. McBRIDGE CO., 1920.

Geraldine Cummins, *THE ROAD TO IMMORTALITY*［Kindle 版］, U.K.: White Crow Books, 2012（1932）.

Jean Herbert, *SHINTO: The Fountainhead of Japan*, George Allen & Unwin Ltd., 1967.

J. S. M. Ward, *GONE WEST: Three Narratives of After-Death Experiences*, London: William Rider & Son, Limited, 1920.（J. S. M. Ward, *GONE WEST*［Kindle 版］, Rev. Steven Earl York, 2011.）

J. S. M. Ward, *A Subaltern in Spirit Lands: A Sequel to "Gone West"*［Kindle 版］, London: PSYCHIC BOOK CLUB LTD, 2013.

Michael Pye, "National and International Identity in a Japanese Religion," in Peter B. Clarke and Jeffrey Somers（eds.）, *Japanese New Religions in the West*, Folkestone, Kent: Japan Library, 1994, pp.78-88.〔初出は、Michael Pye, "National and International Identity in a Japanese Religion（Byakkoshinkokai）," in Hayes V.C., ed., *Identity Issues and World Religions: Selected Proceedings of the International Association for the History of Religions*, Netley, Australia, 1986, pp. 234-241.〕

Michael Pye, "Shinto, primal religion and international identity," *Marburg Journal of Religion,* Volume 1, No. 1, April 1996, pp.1-14.

Michael Pye, "Recent trends in the white light association(Byakkō Shinkōkai),"*Journal of the Irish Society for the Academic Study of Religion*, Volume 3, No. 1, 2016, pp.186-197.

Robert Kisala, *Prophets of Peace: Pacifism and Cultural Identity in Japan's New Religions,* Honolulu: University of Hawai'i Press, 1999.

参照サイト

（公益財団法人）合気会　http://www.aikikai.or.jp/aikido/about.html（2014 年 12 月 10 日最終閲覧）

三五教　https://www.ananaikyo.jp/（2018 年 4 月 18 日最終閲覧）

一燈園 http://www.ittoen.or.jp/（2017 年 12 月 7 日最終閲覧）

円応教　http://www.ennokyo.jp/（2018 年 5 月 11 日最終閲覧）

（公益財団法人）オイスカ　http://www.oisca.org/（2018 年 4 月 18 日最終閲覧）

大本　http://www.oomoto.or.jp/japanese/index-j.html （2017 年 12 月 11 日最終閲覧）

大山祇命神示教会　（大山ねずの命神示教会）　http://shinjikyoukai.jp/（2018 年 5 月 18 日最終

閲覧）
九条の会　http://www.9-jo.jp/（2018 年 9 月 18 日最終閲覧）
解脱会　https://www.gedatsukai.org/（2018 年 5 月 13 日最終閲覧）
（公益財団法人）五井平和財団　https://www.goipeace.or.jp/about/（2018 年 7 月 13 日最終閲覧）
（一般社団法人）五井昌久研究会　http://goisensei.com/（2017 年 8 月 27 日最終閲覧）
国立国会図書館サーチ　https://iss.ndl.go.jp/（2019 年 6 月 8 日最終閲覧）
（特定非営利活動法人）ジャパンハート　http://www.japanheart.org/（2018 年 5 月 14 日最終閲覧）
宗教者九条の和　http://www.shukyosha9jonowa.org/index.html（2018 年 8 月 31 日最終閲覧）
（公益財団法人国際宗教研究所）宗教情報リサーチセンター（RIRC）　http://www.rirc.or.jp/（2018 年 4 月 18 日最終閲覧）
修養団捧誠会　http://www.hoseikai.or.jp/（2018 年 4 月 20 日最終閲覧）
（学校法人 大和山学園）松風塾高等学校　http://www.shofujuku-hs.ed.jp/（2018 年 5 月 1 日最終閲覧）
松緑神道大和山　http://www.yamatoyama.jp/home.html（2018 年 4 月 18 日最終閲覧）
神慈秀明会　http://www.shumei.or.jp/（2018 年 8 月 10 日最終閲覧）
新宗連（新日本宗教団体連合会）　http://www.shinshuren.or.jp/index.php（2017 年 12 月 4 日最終閲覧）
真生会　http://shinseikai-world.or.jp/（2017 年 12 月 4 日最終閲覧）
神道天行居　http://tenkoukyo.jp/（2018 年 4 月 13 日最終閲覧）
崇教真光　http://www.sukyomahikari.or.jp/（2018 年 8 月 10 日最終閲覧）
生長の家　http://www.jp.seicho-no-ie.org/（2018 年 9 月 8 日最終閲覧）
生長の家青年会　http://seinenkai.jp.seicho-no-ie.org/（2014 年 10 月 26 日最終閲覧）
世界救世教いづのめ教団　http://www.izunome.jp/（2018 年 9 月 8 日最終閲覧）
（公益財団法人）世界宗教者平和会議日本委員会（WCRP　JAPAN）http://saas01.netcommons.net/wcrp/htdocs/（2018 年 5 月 16 日最終閲覧）
世界真光文明教団　http://www.mahikari.or.jp/（2018 年 8 月 10 日最終閲覧）
セブンスデー・アドベンチスト教会　http://adventist.jp/（2018 年 4 月 27 日最終閲覧）
善隣教　http://www.zenrinkyo.or.jp/（2018 年 8 月 10 日最終閲覧）
祖神道本部　http://sosindou.web.fc2.com/index.html（2018 年 8 月 24 日最終閲覧）

田辺市　http://www.city.tanabe.lg.jp/sports/morihei_UESHIBA.html（2014 年 12 月 10 日最終閲覧）
椿神社（伊豫豆比古命神社）　http://www.tubaki.or.jp/（2018 年 4 月 22 日最終閲覧）
（認定 NPO 法人）テラ・ルネッサンス　https://www.terra-r.jp/index.html（2018 年 4 月 30 日最終閲覧）
中山身語正宗　http://www.nakayamashingoshoshu.com/（2018 年 8 月 7 日最終閲覧）
（国際機関）日本アセアンセンター（東南アジア諸国連合貿易投資観光促進センター）https://aseanpedia.asean.or.jp/chronicle/（2018 年 6 月 23 日最終閲覧）
（公益社団法人）日本紅卍字会東京総院　http://www.jprss.org/（2018 年 9 月 6 日最終閲覧）
日本山妙法寺　http://www.nipponzanmyohoji.org/tenku.htm（2017 年 11 月 11 日最終閲覧）
日本宗教者平和協議会〔「宗平協」〕　http://n-syuhei.com/index.html（2018 年 9 月 18 日最終閲覧）
（公益財団法人）日本宗教連盟〔「日宗連」〕　http://jaoro.or.jp/（2018 年 8 月 28 日最終閲覧）
（公益財団法人）日本心霊科学協会　http://www.shinrei.or.jp/（2014 年 10 月 19 日最終閲覧）
日本スピリチュアリスト協会　http://www.j-spirit.jp/index.html（2018 年 9 月 5 日最終閲覧）
日本友和会　http://jfor.a.la9.jp/index.html（2018 年 4 月 28 日最終閲覧）
念法眞教　https://www.nenpoushinkyou.jp/index.html（2018 年 7 月 3 日最終閲覧）
バハイ共同体　https://www.bahaijp.org/（2018 年 4 月 19 日最終閲覧）
パーフェクト リバティー教団　http://www.perfect-liberty.or.jp/index.html（2018 年 8 月 10 日最終閲覧）
白光真宏会　http://byakko.or.jp/（2018 年 9 月 8 日最終閲覧）
広島翔洋高等学校　https://www.h-shoyo.ed.jp/（2019 年 7 月 14 日最終閲覧）……「学校概要」の「沿革」https://www.h-shoyo.ed.jp/overview/details.php#history（2019 年 7 月 14 日最終閲覧）
『廣島女學院報』　http://www.hju.ac.jp/~gakuhou/164/PDF/no164-p10.pdf（2015 年 1 月 17 日最終閲覧）
佛所護念会教団　https://www.bussho.or.jp/（2018 年 7 月 3 日最終閲覧）
真の道　http://www.makoto.or.jp/（2018 年 9 月 8 日最終閲覧）
妙智會教団　http://www.myochikai.jp/index.html（2017 年 12 月 5 日最終閲覧）
文部科学省、日本ユネスコ国内委員会、国際連合教育科学文化機関憲章（ユネスコ憲章）http://www.mext.go.jp/unesco/009/001.htm（2018 年 4 月 25 日最終閲覧）
山﨑龍明「2016 年日本宗教者平和会議　in　東京「宗教者の平和運動をめぐって　―課題と展

望（試論）―」最終回」『（機関紙）宗教と平和』2017 年 5 月号、日本宗教者平和協議会、http://n-syuhei.com/press/201705.html#201705-1（2017 年 8 月 29 日最終閲覧）
立正佼成会　http://www.kosei-kai.or.jp/（2018 年 5 月 3 日最終閲覧）
霊波之光　http://www.rhk.or.jp/index.html（2018 年 8 月 10 日最終閲覧）
ASEAN 関連（国際機関日本アセアンセンター）https://www.asean.or.jp/ja/wp-content/uploads/sites/2/2017/12/1_50-Years-of-ASEAN_ASEANMap20171205.pdf#search=%27asean+1977%27（2018 年 6 月 23 日最終閲覧）
May Peace Prevail On Earth International　http://worldpeace-jp.org/（2019 年 6 月 3 日最終閲覧）
WPPS（World Peace Prayer Society）　http://wpps.jp/about/（2018 年 7 月 13 日最終閲覧）

謝辞

本論文を執筆するにあたり、一般社団法人五井昌久研究会の役員および会員諸氏には資料閲覧・貸し出しなどで、非常に多くの便宜をはかってもらった。また、白光真宏会元副理事長で機関誌『白光』初代編集長の髙橋英雄氏からも面談や書簡等を通して、たいへん貴重な情報を提供していただいた。そして、心霊科学研究会関係の資料（写真）においては、龍稚（みづち）会代表・中野雅博氏、伊藤直廣氏、他から提供いただいた。写真など、多くの資料を提供していただいたが、本論文で使用しなかったものもある。それらの資料は、今後の機会に紹介したいとおもっている。ご協力くださった皆様に心から感謝を申し上げたい。